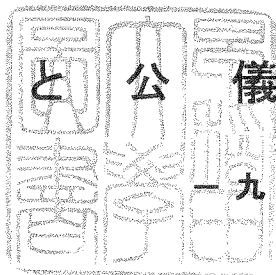


藩 世 界



—九州地方を中心に—

課題番号17320105

研究代表者 深谷 克己
(早稲田大学文学学術院教授)

目次

報告書の作成に当たって	研究代表者	深谷克己	1
研究組織・研究経費・研究発表			2
活動経過			6
研究成果			
「九州近世史」における藩世界と公儀		深谷克己	7
「太平記読み」の享受者たちー肥前蓮池藩鍋島直澄の場合ー		若尾政希	18
「御馳走役」にみる大名家の苦難ー安永3年を事例としてー		久保貴子	26
対馬藩田代領における「禁足」		斉藤悦正	34
海禁体制と参勤交代		泉 正人	42
《附録》九州諸藩参勤交代データベースについて	泉 正人・青木俊郎		52
〔後扉から〕			
朝鮮通信使の接待役と大名		紙屋敦之	(1)
近世琉球における「御家流」と「唐字」ー対外交流と書体・書風ー		深瀬公一郎	(13)
対馬藩田代領における宝暦期「宗意心得違」一件		大橋幸泰	(23)
対馬藩宗家記録のなかの忠臣蔵関係史料		堀 新	(61)
肥後人吉藩相良家の仮養子史料		大森映子	(71)
翻刻 佐賀藩「御裁許書拔」		島 善高	(81)
史料紹介 国文学研究資料館所蔵「至鎮様御代草案」			
	糟谷幸裕・久保健一郎・貫井裕恵・堀新・松澤徹・宮崎肇・山本隆太郎 編		(153)

報告書の作成に当たって

研究代表者 深谷克己

私たちは、1990年代の半ばから幾たびか文部省（文部科学省）科学研究費補助金を得て、藩政・藩制に関する共同研究を進めてきた。初めは、豊富な史料群である「池田家文庫藩政史料マイクロ版集成」（丸善）を中心素材とし、岡山藩の支配方法や社会構造をテーマとして研究した。しかし、マイクロ版には村方・町方史料が乏しく家臣家史料も手薄であったので実地調査にも取り組んだ。やがて比較の観点が必要であることに気づき、鳥取藩や萩藩、四国の諸藩など、他藩史料の調査・収集も活発に行ってきた。

また研究の視角についても、藩権力・藩領域内外の諸社会集団が形成する関係、それらの間の意識・認識の関係に関心が向かうようになった。そうして、藩権力と諸社会集団との間に形成される相互関係と両者の意識の形成を軸にして藩世界を動態的に追究し、それによって新しい藩社会像を構築することをめざすようになった。ことに藩世界の中に重層的に作動する「社会的権威」について、意識的に取りあげるようにしてきた。

私たちは、そうした活動の基盤の上に、2005年度から2007年度までの三年間、「藩世界と公儀—九州地方を中心に—」というテーマで文部科学省科学研究費補助金（基盤研究B）の交付を受け、共同研究活動を続けた。

研究フィールドを九州地方に設定したのは、近世の海禁体制が九州地方の政治・社会のあり方を大きく規定していることを想定し、そこから藩世界と幕藩制国家のあり方の特徴を考察するためである。また藩世界も全国的には多様であるが、九州は国持大名が各所に存在する地域であり、その角度から藩世界論を考察することができると考えられるからである。また九州の領主権力には、中世から近世への断絶と連続の長期的な経路を追えるものがいくつも見られ、社会的および政治的に公儀がどのように形成されてきたかを考察できると考えられたからである。

今次の研究活動は、深谷が代表者となり、紙屋敦之、大橋幸泰、大森映子、久保健一郎、島善高、堀新、若尾政希が研究分担者として参加、また泉正人、久保貴子、斎藤悦正、深瀬公一郎が研究協力者として共同研究に加わった。三年間、各地で史料を収集し、またフィールドワークを実施したが、そのうち史料調査に訪れた所蔵機関は、対馬歴史民俗資料館、大村市立史料館、島原市図書館松平文庫、本光寺、佐賀県立図書館、九大付属図書館記録資料館、長崎県立歴史文化博物館、平戸市立図書館、久留米市立図書館、柳川古文書館、臼杵市立図書館、鹿児島大学玉里文庫、宮崎県立図書館、高鍋町立図書館などである。また島善高分担研究者は、毎年佐賀市内で史料収集を続けた。

本報告集は、以上の活動の記録、研究成果のまとめである。今後も、今次共同研究を踏まえて、さらに方向性を明確にしつつ研究を進めるつもりである。

研究組織

研究代表者： 深谷 克己（早稲田大学文学学術院教授）
 研究分担者： 大橋 幸泰（早稲田大学教育・総合科学学術院准教授）
 研究分担者： 大森 映子（多摩大学経営情報学部教授）
 研究分担者： 紙屋 敦之（早稲田大学文学学術院教授）
 研究分担者： 島 善高（早稲田大学社会科学総合学術院教授）
 研究分担者： 堀 新（共立女子大学文芸学部准教授）
 研究分担者： 若尾 政希（一橋大学大学院社会学研究科教授）

研究協力者： 泉 正人（早稲田大学エクステンションセンター講師）
 研究協力者： 久保 貴子（昭和女子大学人間文化学部講師）
 研究協力者： 斎藤 悦正（共立女子大学文芸学部講師）
 研究協力者： 深瀬 公一郎（法政大学沖縄文化研究所国内研究員）

交付決定額(配分額)

(金額単位：千円)

	直接経費	間接経費	合計
平成17年度	4,800	0	4,800
平成18年度	3,900	0	3,900
平成19年度	1,800	540	2,340
総計	10,500	540	11,040

研究発表

ア. 学会誌等

- ・ 深谷克己「近世農書の米認識」『講座水稻文化研究Ⅲ』早稲田大学水稻文化研究所(2007)、12～23頁 査読無
- ・ 大橋幸泰「潜伏という宗教運動」『歴史評論』688号(2007)、51～63頁、査読無
- ・ 大橋幸泰「近世人の宗教世界」『歴史地理教育』716号(2007)、74～79頁、査読無
- ・ 大橋幸泰「史料紹介「宗門出入記録」」(深谷克己編『対馬調査報告集』早稲田大学文学部、2007)、25～34頁、査読無
- ・ 大橋幸泰「史料紹介：元禄十一年 宗門出入記録(下)」(キリシタン学研究会編『研究キリシタン学』10、2007)、査読無
- ・ 大森映子「近世中期における急養子相続」『湘南国際女子短期大学紀要』14号(2007)、93～110頁、査読無
- ・ 大森映子「対馬藩宗家の身替わり相続—天明5年の内分分家—」(深谷克己編『対馬調査報告集』早稲田大学文学部、2007)、45～55頁、査読無

- ・紙屋敦之「琉球の石高制と稲作」（海老澤衷編『講座水稻文化研究』Ⅲ、早稲田大学水稻文化研究所、2007）、24～32頁、査読無
- ・紙屋敦之「シャクシャインの戦いと対馬藩」（深谷克己編『対馬調査報告集』早稲田大学文学部、2007）、17～23頁、査読無
- ・島 善高「山岡鉄舟の書について」『書法漢学研究』1号（2007）、41～49頁、査読有
- ・島 善高「山岡鉄舟と禅について」照屋佳男先生古稀記念『比較文化の可能性』（成文堂、2007）、223～243頁、査読無
- ・島 善高「翻刻・江藤新平関係文書一書翰の部（10）一」『早稲田社会科学総合研究』第8巻第2号（2007）、23～40頁、査読無
- ・島 善高「近代日中関係史の曙－李鴻章と副島種臣－」『書法漢学研究』第2号（2008）、52～58頁、査読無
- ・堀 新「信長・秀吉の国家構想」（杉森哲也編『日本の近世』放送大学教育振興会、2007）、23～36頁、査読無
- ・堀 新「幕藩制国家の成立」（杉森哲也編『日本の近世』放送大学教育振興会、2007）、37～47頁、査読無
- ・堀 新「近世武家官位」（杉森哲也編『日本の近世』放送大学教育振興会、2007）、49～57頁、査読無
- ・堀 新「大名の改名とその史料－享保9～10年対馬藩主宗義誠の場合－」（深谷克己編『対馬調査報告集』早稲田大学文学部、2007）、35～44頁、査読無
- ・若尾政希「歴史と主体形成－書物・出版と近世日本の社会変容－」『書物・出版と社会変容』第2号（2007）、1～36頁、査読無
- ・若尾政希「特集史論 謎の書物『土芥寇讎記』－「大名評判記」とはなにものか－」『歴史読本』815号（2007）、66～81頁、査読無
- ・深谷克己「東アジア法文明と教諭支配－近世日本を中心に－」早稲田大学アジア地域文化エンハンシング研究センター編『アジア地域文化の発展－21世紀 COE プログラム研究集成－』（雄山閣、2006）、176～205頁、査読無
- ・大橋幸泰「〈史料紹介〉元禄十一年 宗門出入記録(上)」『研究 キリシタン学』9号（2006）1～128頁、査読無
- ・大橋幸泰「書評：神田千里著『島原の乱』」（歴史科学協議会編『歴史評論』678、2006年10月）、p.102～103、査読無
- ・大橋幸泰「近世日本潜伏キリシタンの信仰共同体と生活共同体」『地中海研究所紀要』4号（2006）、111～117頁、査読無
- ・大橋幸泰「正統・異端・切支丹－近世日本の秩序維持とキリシタン禁制－(上)(下)」『早稲田大学教育学部学術研究 地理学・歴史学・社会科学編』54・55、(2006) 75～90頁／(2007) 1～10頁、査読無
- ・大森映子「肥後人吉藩相良家における相続問題」『湘南国際女子短期大学紀要』13号（2006）、74～102頁、査読無
- ・紙屋敦之「琉球の中国への進貢と対日関係の隠蔽」（早稲田大学アジア地域文化エンハンシング研究センター編『アジア地域文化の発展－21世紀 COE プログ

- ラム研究集成一』雄山閣、2006)、154～175頁、査読無
- ・紙屋敦之「幕藩制国家と琉球国家」(宮地正人ほか編『新体系日本史1 国家史』山川出版社、2006)、376～393頁、査読無
 - ・紙屋敦之「琉球国家の成立」(宮地正人ほか編『新体系日本史1 国家史』山川出版社、2006)、266～279頁、査読無
 - ・島 善高「江藤新平関係文書一書翰の部(七)一」『早稲田社会科学総合研究』第6巻第3号(2006)、39～56頁、査読無
 - ・堀 新「織豊期王権論再論一公武結合王権論をめぐって一」(大津透編『史学会シンポジウム叢書 王権を考える一前近代日本の天皇と権力』山川出版社、2006)、193～209頁、査読無
 - ・堀 新「朝尾直弘氏の将軍権力論をめぐって」『日本史研究』526号(2006)、40～46頁、査読無
 - ・堀 新「正親町天皇の譲位に関する一史料」『日本歴史』693号(2006)、95～96頁、査読無
 - ・若尾政希「歴史と主体形成一書物・出版と近世日本の社会変容一」『歴史学研究』820(2006)、11～19頁、査読有
 - ・若尾政希「安藤昌益一その実像を掘り起こす一」『学際』18(2006)、66～71頁、査読無
 - ・深谷克己「近世国家における藩権力の位置」『九州史学』第141号(2005)、52～58頁、査読無
 - ・深谷克己「東アジアにおける近代移行期の君主・神観念一救済と平等への待望シンボルについて一」(『アジア歴史文化研究所シンポジウム報告集 近代移行期の東アジア一政治文化の変容と形成一』(2005)、1～15頁、査読無
 - ・大橋幸泰「書評：若尾政希著『安藤昌益からみえる日本近世』」(『民衆史研究』70、2005年11月、p.51～57)査読無
 - ・大橋幸泰「キリシタン禁制と異端的宗教活動」(『歴史学研究』807、2005年10月、p.76～85)査読無
 - ・大橋幸泰「民間信仰と「切支丹」の間一京坂切支丹一件に見る文政期民衆の信仰・信心」(『大塩研究』52、2005年3月、p.2～14)査読無
 - ・大森映子「江戸時代における仮養子手続き」『湘南国際女子短期大学紀要』12号(2005)、113～130頁、査読無
 - ・紙屋敦之「琉米修好条約の締結と首里王府一総理官・布政官を中心に一」(『アジア歴史文化研究所シンポジウム報告集 近代移行期の東アジア一政治文化の変容と形成一』早稲田大学アジア歴史文化研究所、2005)、31～48頁、査読無
 - ・紙屋敦之「唐船風説書の編綴について」(『江戸時代長崎来航中国船の情報分析』、2003・2004年度科学研究費補助金基盤研究(C)(2)研究成果報告書、2005)、5～19頁、査読無
 - ・島 善高「江藤新平関係文書一書翰の部(5)一」『早稲田社会科学総合研究』第5巻第3号(2005)、51～76頁、査読無

- ・堀 新「織田信長と絹衣相論－関連史料の整理と検討－」『共立女子大学文芸学部紀要』51集（2005）、49～74頁、査読無
- ・堀 新「史料・文献紹介 『信長公記』」『歴史と地理』587号（2005）、30～36頁、査読無
- ・堀 新「天下人と天皇－「公武結合王権」の検証－」（本郷和人編『歴史の争点・武士と天皇』新人物往来社、2005）、216～228頁、査読無
- ・若尾政希『一橋論叢』特集〈日本における書物・出版と社会変容〉、（2005）、251頁、査読無
- ・若尾政希「「書物の思想史」研究序説－近世－上層農民の思想形成と書物－」『一橋論叢』134-4（2005）、3～29頁、査読無
- ・若尾政希「近世における楠正成伝説」『国文学－解釈と鑑賞』70巻10号（2005）、190～194頁、査読無

イ. 口頭発表

- ・堀 新「岡山藩主の官位昇進運動－池田綱政・継政の場合－」、就実大学吉備文化研究所シンポジウム「藩政史研究の現状と課題」、2007年12月9日、就実大学

ウ. 出版物

- ・深谷克己『江戸時代の身分願望－身上りと上下無し－』（吉川弘文館、2006）、226頁
- ・紙屋敦之（研究代表）『江戸時代長崎来航中国船の情報分析』、2003・2004年度科学研究費補助金基盤研究（C）（2）研究成果報告書（2005）、1～216頁、査読無
- ・島 善高（科研費研究成果報告書）『江藤新平関係文書の総合調査』（早稲田大学社会科学総合学術院・島善高研究室、2007）、247頁、査読無
- ・若尾政希編『書物・出版と社会変容』第3号（2007）、205頁、査読無
- ・若尾政希編『書物・出版と社会変容』第2号（2007）、196頁、査読無
- ・若尾政希編 プロジェクト研究報告書Ⅱ『「大名評判記」の基礎的研究Ⅱ』（2007）、251頁、査読無
- ・若尾政希編『書物・出版と社会変容』第1号（2006）、228頁、査読無
- ・若尾政希編 プロジェクト研究報告書Ⅰ『「大名評判記」の基礎的研究』（2006）、251頁、査読無

活動経過

・史料調査

○2005年08月

対馬歴史民俗資料館／大村市立史料館

○2005年12月

対馬歴史民俗資料館

○2006年03月

島原市図書館松平文庫／本光寺

○2006年08月

佐賀県立図書館／九大付属図書館記録資料館／長崎県立歴史文化博物館／平戸市立図書館

○2007年02月

対馬歴史民俗博物館

○2007年03月

久留米市立図書館／柳川古文書館／臼杵市立図書館

○2007年08月

鹿児島大学玉里文庫／宮崎県立図書館／高鍋町立図書館

「九州近世史」における藩世界と公儀

深谷克己

はじめに

この度の科学研究助成費によるわれわれの共同研究は、「藩世界と公儀—九州地方を中心に—」というタイトルで進められ、年次計画に沿って幾度かの現地調査活動が実施された。調査によって多くの文献史料が収集され、遺跡遺物のフィールド巡見によって得られた知見も大きいものがあつた。われわれは藩政・藩史関係の史料をやみくもに収集するというのではなく、「藩世界と公儀」という共同研究タイトルに、今後の近世史研究の新しい切り口を探ろうという視角上の狙いをこめていた。この間、収集された諸史料は研究分担の広がりもあつて内容が多岐にわたり、それらから史料分析を通して説得力のある総合的な論点を導きだすためには、なおしばらくの時間が必要と思われる。

そこでこの小稿では、研究史が作り上げている九州認識や歴史教育での近世九州の位置づけ、それに調査活動での筆者の印象的経験的な九州イメージなどを自由に生かしつつ、共同研究の視角から近世の九州地方を俯瞰的に論じること、とりあえず成果報告としたい。強弁めくが、この次元で思考することも、九州近世の総合的把握、ひいては近世日本史の総合的理解を深める一つの議論の進め方であると考えたい。

1 「九州近世史」という地域圏認識

今次の共同研究のサブタイトルは、「九州地方を中心に」というものである。メインテーマである「藩世界と公儀」にはそれなりの論議の経過を経てきているが、「九州地方」という文言に内容のある意味づけを与えてきたとは言えない。調査活動上の便宜的な地域呼称として用いてきたというのが、率直な答えである。

そうではあるが、本州・四国と切り離された「九州地方」という一かたまりの陸地空間には、なんらか他と区別される地域的特徴が予想されていることもたしかであつて、サブタイトルには史料調査上の便宜性を超えた意味合いが想定されていたと言ってよい。その地域性の意味を深く突き詰めようとしていないのは率直に反省すべきであり、さまざまに近世九州地域論が試みられてしかるべきと思われる。この小稿では、この問いを突き詰めるところまではいかないが、「九州近世史」という枠組みで若干の論点・留意点を浮上させたい。

「九州近世史」という呼び方を使うのは、他所でも同じような広がり の地域認識が、近世史研究ではすでに用いられているからである。たとえば「関東近世史」という呼称は、学会名でもあり、専門研究誌もあつて、日本近世史の研究者であれば誰もがその活動の模様を知っている。また関東近世史という呼称が、たんに活動上の便宜からくるものではなく、近世日本の世界で、「関東」が意味のある歴史的地域圏を形成していたことが出発点になっていることも理解されている。ごく大まかに言えば、関東近世史は政治的には「御当地」（御府内）と「近国」（関八州）、経済的には江戸を中核として「関東地回り経済圏」

と呼ばれるような需給関係の成立している域圏である。

関東近世史に比較されるものとして、「畿内近世史」という呼び方をあげることもできる。この場合は、事柄によっては「摂河泉播」というように畿内をはみだす括りが有効な場合がある。しかしそれは、関東近世史が関八州だけでなく伊豆や甲州をふくめるほうが有効な場合があるのと同じである。畿内近世史は、古くから「先進地」とされ、近世史の通史認識に小農自立、商業的農業、手工業、市場流通などの諸点で、経済史的な先端性の証を提供してきている。

かならずしも共通の見方になっているとは言えないが、近世の奥羽（東北）地方が特別の性格を持つものとして意識されてきたのも否定できない。「奥羽（東北）近世史」という括りが有効なものと思われるのである。

同じ奥羽（東北）と言っても、南方の会津藩・白河藩・公儀代官所支配地圏と、それより北方ではそうとう異なる様相を呈しているが、そうした圏域内の相違はどこにでも見られるものである。今は使用が忌避されるようになったがかつて「僻地」「裏日本」というような呼称があり、学界には「先進」「後進」の区別論が溢れる時期があった。奥羽近世史では「僻地」論を強調する研究もあったが、九州近世史では「僻地」論は見られない。しかし、政権の所在地ではなく、政権をうかがう地域ではなく、「中央」の権力争奪の余波をこうむる「僻遠の地」の印象をあたえてきたことは否定できない。

ともあれ、これまで学問的に深く検討されてきた経緯はないが、あいまいにその存在を想定してきた、あるいは想定できる幾つかの地域圏のかたまりのようなものが近世には認められると言える。そうした地域圏として、九州近世史、畿内近世史、奥羽近世史のほか、東海近世史、山陽近世史、山陰近世史、四国近世史、信越近世史、さらに蝦夷近世史を加えれば、近世日本史では十ほどを、同じ次元での広域圏として取り出せるのではないだろうか。

「九州近世史」という括り方は、研究史からみても突飛とは言えない。「九州幕藩体制史」（杉本勲編『九州天領の研究』吉川弘文館、1976年）、という表現や、「九州文化の史的研究」「九州地方史」（藤野保編『佐賀藩の総合研究』吉川弘文館、1981年）などの言葉が、近世九州に関する共同研究においても使われている。そのことは、九州近世史という歴史的空間の実在性、あるいは設定の有効性を示唆している。

この小稿では、あえて九州近世史という枠組みを肯定する立場で論じてみよう。

2 通史記述の「九州近世史」

先にあげた地域圏のあれこれの事件や社会構造や流通関係が、執筆者の視角で任意に選ばれ、時系列あるいは問題群ごとに組み合わせられて、全体史としての日本近世史像を作り上げている。一つの地域圏だけで全国的な近世史を描くことはできない。近世の政治・政策を叙述する上では江戸城の動向を叙述することが重要だが、関東近世史だけで近世史を描くことはできない。

それでは現在の近世通史の構成・記述において、「九州近世史」はどのように登場しているのか。この小稿では高校生が教室で使う日本史教科書 B 版を取りあげてみよう。高校用日本史 B 版は、近現代史中心の高校教科書 A 版とも異なり、市販の各種通史ともち

がって、全時代を万遍なく詳細に叙述している。世間の人気は低い、数量からみても試験で理解が点検されるということでも、もっとも普及している日本通史であると言える。教科書の種類は多く、それぞれに特色はあるが、学習指導要領と大学受験に規定されて、記述される事項・人物に大差はない。その一様さが不人気の理由ともなっているのだが、九州近世史が記述される場面や事項・人物は、どれをとってもほぼ同じである。そこで、発行元を特定せずに、近世九州の書かれ方を追うことにしたい。

日本の近世史をいつからとするかは、かつて時代区分論が盛んであった時期には容易でない難問だったが、現今の教科書的通史では「近世」記述に入る共通の形ができています。

「新文明」との出会い、つまりヨーロッパ人の来航から近世史は始まる。まだ戦国争乱さなかの天文 12 年（1543）、九州種子島にポルトガル人が漂着して鉄砲がもたらされたと必ず記述される。さらに、領主種子島時堯の鉄砲の使用法・製造法導入の積極さ、国産鉄砲の広がりへの貢献が指摘される。近年の研究では、種子島だけに鉄砲伝来ルートを考えることに疑問が出されているが、通史が書きかえられるほどではない。

鉄砲とならんで、天文 18 年（1549）にスペイン人のイエズス会宣教師ザビエルが鹿児島に上陸してカトリックのキリスト教を伝えたことを記述するのも、例外なしの記述である。以降、宣教師の来日、活発な布教活動、教会建設、コレジオ・セミナリオ・病院の開設、活字印刷機を使った『伊曾保物語』『平家物語』などの出版（天草版）の出版、キリシタンの急増、貿易を志向するキリシタン大名、ヴァリニャーノの勸奨による天正遣欧使節などがそうとうに詳しく記述されることも、定番となっている。つまり、九州が「新文明」の吸入口の位置づけられることは古代史と変わらない。キリシタンもキリシタン大名も少年使節も、九州で現れ九州で増えたことが記述される。

「南蛮貿易」の記述を書き落とす通史はなく、ポルトガル船・スペイン船の相次ぐ来航の記述とあわせて、肥前平戸・長崎、豊後府内、薩摩坊津など、九州寄港地の地名が次々と挙げられる。貿易については、堺・京都・博多などの有力商人の取引と貿易港の発展にも記述が及ぶが、これは初期豪商が九州地域と不可分なものと位置づけられていることにはかならない。

豊臣政権期では、大陸制覇をめざした朝鮮侵略戦争の際の撤兵にともなって多数の朝鮮人被虜人が日本に連行され、彼らのなかの陶工が有田（伊万里）焼・薩摩焼・萩焼などの焼物の創業に貢献したことが、これまた例外なく記述されるが、その落着いた所は、九州の各地である。侵略戦争の後遺ではあるが、日本史の成長という見方からすれば、先端技術の導入、吸収の経路であり、それは九州近世の中に形作られる。なお朝鮮侵略では、九州の島津氏家臣梅北国兼らの反対一揆を記述するものもある。芸能のこととして、琉球の三線を改良した三味線が伴奏楽器になり、浄瑠璃が人形浄瑠璃へ発展したという記述も文化流入の一つである。

この時期の政治過程としては、豊臣秀吉の「惣無事令」に抵抗した九州の島津義久を、豊臣政権が天正 15 年（1587）軍事的に屈服させたことが記述される。また教科書によっては、薩摩島津氏領で実施された文禄 3 年（1594）太閤検地の「検地尺」の写真が示される。島津氏制圧と結びつけられるのが宣教師追放令で、大村純忠が長崎を教会領としてとて寄進していたことへの対応と書かれる。

徳川家康の対外政策は記述量の多い箇所だが、薩摩の島津氏に侵攻を許して琉球を支配

させるようにしたと、九州の外様大名が引き出される。

平戸などで唐人貿易が行われ、慶長 14 年（1609）オランダ商人が来日し、慶長 18 年に来日したイギリス商人に対しても平戸商館が許可され、貿易活動が開始されたことが記述される。

豊後に漂着したオランダ船リーフデ号の、イギリス人水先案内人ウィリアムス-アダムス、オランダ人航海士らを外交・貿易の顧問にして徳川家康が積極政策を進めたこと、そして、朱印船貿易を奨めたことが書かれるのも通例だが、この場合に朱印状を西国の諸大名、畿内・長崎・博多などの豪商らに与えて貿易をうながしたと、国際流通のうえでも九州の特段の位置が記述される。慶長 9 年（1604）の糸割符仲間結成についても、京都・堺とともに長崎商人が書かれ、近世を通じて長崎がことあるごとに引き出される。

秀忠政権期としては、西国支配の拠点として大坂を幕府直轄地にしたという記述には、九州が遠望されているわけであるし、将軍として西国大名に手伝普請を課して大坂城を再建したという記述にも、九州諸大名がふくまれる。元和 1 年（1622）に幕府が、長崎の宣教師・キリシタン 55 人を火あぶりなどの極刑に処した元和の大殉教では、処刑地についても長崎が記される。

参勤交代について、隔年参勤がふつうであるところ、対馬の宗氏が 3 年ごとの交代とされたという記述、鎖国により中国船の来航地が平戸・長崎に限定されたというのは九州関連の記述であり、名主は関東の呼称、西日本では庄屋、東北では肝煎と呼ばれたというのは九州をふくむ記述である。

家光政権期に、西国中心の凶作で寛永 18 年（1641）に飢饉（寛永の飢饉）になったことが記されるが、これの初期の時期に起こった大規模な一揆が九州の出来事である。寛永 14 年（1637）の、島原半島・天草地方で凶作・飢饉と領主松倉・寺沢氏の年貢・諸役取立に抗した大規模な一揆（島原天草一揆、島原の乱）については、そうとうに詳しい記述（農民・漁民・商工民 3 万人参加、シンボルの天草四郎時貞、九州諸大名の出兵 12 万余、老中松平定信の派遣とオランダ人の軍事的参加）がなされ、その後のオランダ人の平戸から長崎の人工島出島への移転、長崎奉行による監視体制が書かれる。

こうした出来事とともに、海外交易の様相が書かれる。ここでは近世初期の茶事など焼物需要が伸長するなかで、朝鮮人被虜人李参平が開いた肥前有田焼が盛んになったこと、やがて酒井田柿右衛門によって赤絵磁器が工夫されたことが記述される。また当時戦乱の中国製品に替わって海外に輸出されるようになり、その積出港が伊万里であったことも指摘される。

長崎口では出島、オランダ人、長崎奉行、長崎町、唐人屋敷など、対馬口では宗氏支配、釜山倭館での日朝貿易など、薩摩口では島津氏支配など、いわゆる四つの口についての記述は、当然だが圧倒的に九州関係が多くなる。日朝関係では、朝鮮通信使が対馬で国書をと리카わす形で再開したが、その後中断したことが書かれる。また、長崎貿易については、「正徳の治」として、金銀の国外流出を防ぐための海舶互市新例（長崎新例）によって輸出を制限したことが記述される。享保期のこととして、長崎に象 2 頭が中国船でもたらされたことも書かれるが、これは生徒の興味を引く話題を提供したのであろう。

経済・生活では、上方や西国では金でなく銀で決済されたという記述も見え、享保 17 年（1732）の飢饉が西日本を中心とするものであったことも記述されている。これらは西

国という範囲に、九州までをふくみこんだ記述である。

近世での技術面での達成あるいは水準上昇として、中国農書『農政全書』の影響を受けながら、日本の実情を反映させた、小農経営、商業的農業への方向性をもつ宮崎安貞『農業全書』が記述される。農業技術、小農経営の先端的展開は畿内近国とされているが、それを体系的な技術書としてまとめあげて板行の形で提供したのは、九州福岡藩領内の地を拠点に実験と調査旅行を重ねた浪人農学者であった。

『農業全書』成立が九州で可能であった条件としては、農学者本人の姿勢や貝原樂軒・益軒の努力はもちろんだが、長崎への同時代の中国漢籍の到来という、九州だけが保持していた国際的条件がある。また生産面では、九州は、瀬戸内・畿内・東海と並んで木綿の特産地が現れるが、そのことと特産物久留米緋、小倉緋が例示される。麻では薩摩上布、陶磁器では先にあげた有田（伊万里）焼などである。

文化の分野では、藩校として、九州で挙げられるのは、福岡藩の修猷館、中津藩の進修館、薩摩藩の造士館などである。蘭学や洋学の展開が記述され、オランダ通詞本木良永、志筑忠雄らの著述活動が書かれる。それらは全国性を持つ活動ではあるが、実際は九州での成果である。

近世中期の政治史としては、藩政改革に成果をあげた藩主として熊本藩主細川重豪があがるのみである。これは九州近世史だけのことでなく、通史での中期政治史は幕政改革を中心に書いていくので、九州の記述が他地域よりも少ないということではない。

幕末維新へかけての政治史・対外関係の記述では、九州あるいは九州関連は他地域を圧倒している。異国船（無二念）打払令へ転換する画期となった文化 5 年（1808）フェートン号事件が長崎港で起こってこととあわせて、当時、アジアでオランダ東インド会社のオランダ国旗が翻っていたのは、長崎の出島だけであったことも記述される。また幕末の外国船日本接近の事例としては、文政 7 年（1824）薩摩宝島にイギリス捕鯨船が上陸したことが挙げられる。

幕末の藩政改革としては、明治維新へ視線をおきながら、つまり雄藩化の前提として、薩摩藩が文政 10 年（1827）に調所広郷を中心に改革を実行し、約 500 万両の負債を 250 年賦返済の形で帳消しにし、砂糖専売や清国との密貿易を琉球で行って財政再建に成功したことが記述される。肥前（佐賀）藩については、藩主鍋島直正が財政改革を主導し、小作料を免除し、地主から小作地を取りあげ、本百姓を中心とするために均田制を実施したことが記述される。

幕末期、欧米列強の圧力を最も強く直接に受けたのが蝦夷地・琉球であった。これについては、フランス・イギリスから開国を要求された琉球王府が、そのつど薩摩藩に対して指示を仰いだとし、外国人の上陸や測量で島内が混乱したと記述する。また薩摩藩の藩政改革で、琉球特産の砂糖生産・販売が統制されたため飢える困窮農民が増えたことも書かれる。

蘭学については、オランダ商館のドイツ人医師シーボルトが開いた、長崎郊外の鳴滝塾が、そこから育った日本人学者高野長英らとあわせて記述される。なお『広益国産考』など、すぐれた農書を多数著した大蔵永常が、諸藩で殖産政策に協力したことが記述されるが、大蔵永常は、九州出身の農学者である。宮崎安貞もそうだが、なぜ特筆される農学者の二人が九州から生まれたのかは、現在の農業史でも説明できていない。

開国前夜の様相として、オランダ商館から「別段風説書」が提出されるようになったこと、オランダ国王が開国を勧告したことが書かれる。これは支配層の動きであるが、いずれも長崎のオランダ商館を通じてのことであったことは言うまでもない。

アヘン戦争後の危機意識とともに高まった大砲装備の声に、長崎町年寄高島秋帆がその重要性を説いたことが書かれる。肥前佐賀藩が秋帆の言説を受けとめて、嘉永3年(1850)に、翻訳書を頼りに鋼鉄を作る反射炉築造に着手したことが記され、大砲鑄造に成功したこと、薩摩藩については、大砲鑄造、洋式工場、日本初の鹿児島紡績工場、ガラス製造所などの工場群(集成館)をつくったことが記述される。

また、秋帆の弟子であった幕臣で伊豆菰山代官の江川太郎左衛門が菰山に反射炉を築いたこと、幕府が長崎にオランダの援助で洋式海軍育成のため海軍伝習所を開き、万延1年(1860)に長崎製鉄所を建設したことなども記述される。

全国政治が九州と関わる記述としては、老中阿部正弘が、外様大名である薩摩藩主島津斉彬・肥前藩主鍋島直正ら、雄藩の意見を重視して幕政を進めたことが記される。留学生として、薩摩藩の森有礼らのイギリス留学も記される。

天保期の藩政改革を経た薩摩・肥前藩などでは、下級武士らの藩政への発言が大きくなることなど、九州近世史の叙述量はますます増えてくる。公武合体運動が薩摩藩などの支持を受けてつづけられ、斉彬急死後藩政の実権を握った藩主父島津久光は文久2年(1862)、京都へ上り、朝廷を動かして幕政改革を要求、以後一連の「文久の改革」と呼ばれる人事・制度の変更を実施したことが記される。その帰途での、行列を横切ったイギリス人を殺傷した生麦事件が書かれる。この時期、九州近世史が日本近世政治全体を規定している様相である。

イギリスは生麦事件報復のために鹿児島に集中砲撃を行ったが(薩英戦争)、そのことで攘夷の困難さを知った薩摩藩は、イギリスに接近して、公武合体派の藩といっしょに、攘夷・天皇行幸勢力を追放するために、京都御所を包囲した八月一八日の政変が書かれる。ここでは、長州藩が御所付近で薩摩会津両藩兵と交戦し(禁門の変)、幕府が薩摩藩などを動員して長州征討(第一次)開始、と幕府側に立つ薩摩藩が記述され、イギリス公使パークスが薩摩藩へ急接近していったことが書かれる。

薩英戦争後の薩摩藩においては、下級武士の西郷隆盛、大久保利通らが藩政の実権を握るにいたったことが書かれ、イギリス人の支援で軍事力充実につとめたことが記述される。そして武力討伐の意思を固めていくが、薩長両藩の関係は改善されなかったこと、この状況のなかで坂本龍馬・中岡慎太郎の斡旋で薩摩藩の西郷・大久保、長州藩の桂小五郎との間に薩長同盟が結ばれ、幕府の長州征討に応じなかったのも幕府は行き詰まりを深めたこと、が順次記述されていく。最終的に、武力倒幕派として西郷や大久保が指導力を発揮して維新政権が樹立されたこと、新政府の主導勢力として九州を先頭にした西国の薩長土肥の人士が力をふるう維新過程が各所に記述されていく。

3 近世化と近代化における「九州近世史」

このように通史記述を通覧してみると、日本近世史における「九州近世史」の位置がある特徴を帯びていること、また B 版高校日本史では九州に関する記述量が全体のなかで

たいへん多いことが理解できる。九州地域は、近世通史の中では、この時代の入口、言い換えれば「近世化」、この時代の出口、言い換えれば「近代化」の両方で、先端性を示す特有の分野をもっている。九州地域は、古代以前の「小国」の時代から大陸の「先進文明」の受け入れ口であったが、それは、日本史の近世化の際にも、近代化の際にも、なお同じなのである。

近世化に際して到来した「新文明」は鉄砲とキリスト教であり、両方ともが九州で上陸したと記述され、近代化に際して到来した「新文明」も鉄砲・艦船の軍需品であり、宗教ではないが万国公法的世界観であった。通史では、種子島銃にしてもたんなる上陸地点、つまり素通りしていったという記述にはなっていない。

鉄砲は、ヨーロッパ人が航海先の世界を支配するために使おうとした道具であって、日本に売ったり広めようとした貿易品ではない。鉄砲の受容にあたっては、現地の領主種子島氏の能動的な姿勢があったことが記されており、このことは後期の高島秋帆の大砲の研究と幕府への献言についても同様に指摘されている。戦争用の武器ではあるが、ともあれ九州近世史の主体的水準の高さがあってこそ可能となった受容であり、それが日本では他地域に先駆けて九州での出来事だったということである。

キリスト教は、ヨーロッパでは宗教改革に対抗する反宗教改革運動が盛り上がる中で、イエズス会などの勢力が殉教覚悟で布教しようと世界に進出した点で、鉄砲とは普及の論理も筋道も異なるが、受容の地も以後の展開もふくめて、日本では九州の比重が大きかった。キリシタン大名も多く、遣欧使節のような大事業もあり、初期の受容層を土豪とみるにせよ一般百姓とみるにせよ、領民キリシタンが顕著に増加したのは九州であった。隠れキリシタンの崩れ事件は他地域にも起こったが、幕末最終段階に崩れ事件を経験したのも九州であった。要するに「近世化」の過程で、新しい海外文物の流入という点では、他の諸地域圏に比較して、九州近世史が格段の位置を占めているということである。

朱印船時代にも海禁時代にも、九州は、異国人居留地として最も大きな比重を占めてきた。今では四つの口という用語が市民権を得たと言ってよいほどに普及しているが、松前口と他の長崎口・対馬口・薩摩口の三口はたいへん異なっている。日本社会に変容の圧力をかけ続けた新文明は、つねに九州の三口からやってきた。それは海禁以前だけでなく、解禁以降も、管理貿易を通じて絶え間なく到来し続けた。

新しい海外文物の流入という時に留意すべきことがある。ふつうは「近世化」段階の新文明は、ヨーロッパ系のものが特記される。しかし、近世九州に流入して全社会化したものとして大陸系の伝統文明の比重の大きさをも見逃してはならない。近世文化の重要な要素が、それほど遠くない時代の大陸渡来文化の日本化されたそれであったことは、通史にも反映されている。戦後歴史学は、蘭学洋学系の新文明を強調してきたが、それは資本主義発達史を主軸にして近世史を再構成しているからである。現在、近世史研究が気付かなければならないのは、大陸系の文化流入であり、それが和風化されつつ、近世社会や近世支配にどういう大きさの規定性を与えたかである。

三味線芸能のことは通史にも表れ、琉球の三線を改良した三味線が伴奏楽器になり、浄瑠璃が人形浄瑠璃へ発展したという記述がある。この三味線を抜きにして、近世音曲の基調は語れない。通史には出てこないが、箏曲を取り出しても、同じアジア類型の楽器である。また通史に現れないが、算盤という計算器を取りあげると、これも戦国末期に中国か

ら伝来したとされているものである。算盤は幕藩財政から、商家・農家などすべての身分に用いられ、秤とともに近世的商業活動の推進に不可欠の道具であった。これも九州上陸を想定することがゆるされる。

また通史に見られるように、中国農書『農政全書』の影響を受けて宮崎安貞が『農業全書』を九州で完成させたが、『農政全書』は17世紀に書かれた官農書であり、古典ではない。同時代の中国文明である。そして『農業全書』の影響の大きさは、古島敏雄氏の農業史研究（『著作集』東大出版会）以来疑われていない。

ただし、通史における九州では、惣村や近世的村請村落の形成は書かれない。小農自立や商業的農業の展開の叙述は、畿内・東海近世史のイメージで書かれる。もっともこの点に関しては、全国政権の拠点である関東近世史も九州近世史と同じである。

ただし、九州農業が近世で持っていた技術の先端性は、他地域とくらべて特段とは言えないとしても、九州諸藩が取り組んだ殖産専売政策あるいは徳用作物奨励政策を概観することから理解することができる。稀な事例ではあるが、他地域から稲作における九州農業の先進技術を調査して学ぼうとした藩がある。北陸の大聖寺藩は、害虫駆除のために天保11年（1840）、領内農民を九州諸藩に派遣し、鯨油の注油法を中心に農法を調査させている（「九州表虫防方等聞合記」『日本農書全集』11）。

しかし、「近世化」に際しては、新文明の到来地であり、それ自体先端的文化への適応力を発揮してきたにもかかわらず、九州は政治的には、中央勢力が落ちのびてきたり中央権力に征服される所であった。豊臣政権の襲来はもとより、それ以降も、徳川氏の権力によって公儀領や譜代藩領を配置され、大坂を中継点とする公儀の西国支配体制の下に置かれてきた。もっともこの点では、公儀の拠点となった関東近世史も、古くから被征服地であり続け、近世には小藩、幕府代官・旗本支配の網の目のような支配の下に置かれ、村社会もまた複数領主・寺社の支配を受ける相給村落になった。これと比較すれば、九州は自力のある藩世界地域であったとも言える。

しかも、幕末維新时期もふくむ「近代化」の過程では、軍事技術を象徴のようにして、九州諸藩の藩政改革、中央政治をも左右させる政治過程の叙述が大きな比重を占めるかたちで現れた。叙述量の多さは、演じた役割の大きさの反映である。

天皇制国家という結果に対する評価はともかく、国家変革という眼前の課題に対し、最も先端的な姿勢と活動を示したのが九州近世史であった。山陽近世史・四国近世史もふくめれば総じて西国近世史であったといえることができる。その意味で、少なくとも政治集団世界としては、新文明の受容地であったといえることができる。このような意味で、九州近世史は、近世化と近代化の両端で新文明へ接近することの最も近距離にあった地域であった。

4 公儀と藩世界の「九州近世史」

上のような九州近世史は、藩世界と公儀という視角から見直した時、どのような特徴をもち、研究上の示唆を示しているだろうか。

九州近世史は、畿内近世史・関東近世史とは異なった位相を持つ近世社会として、豊富な研究史を持ち、今も研究対象としての盛んさをうしなっていない。見てきたように、通

史に反映している諸点が、研究者の現れ方、研究の成果にも反映しているのである。

新旧多くの研究者が登場し、多様な成果をあげてきたが、ここではその内容をいちいち詳述せず、現在活躍している研究者の数人をあげるだけの指摘にとどめれば、中野等は豊臣政権の朝鮮侵略の戦争史研究を深め（『秀吉の軍令と大陸侵攻』吉川弘文館）、福田千鶴は福岡藩を起点にして御家騒動を「学問」化させ（『幕藩制的秩序と御家騒動』校倉書房）、高野信治は九州諸藩の研究から近世国家・社会論にせまる論点を提示し（『藩国と藩輔の構図』名著出版）、宮崎克則は九州をフィールドにした民衆運動、走百姓の研究から近世の支配の論理、大中小百姓の経営を照射してきた（『大名権力と走り者の研究』校倉書房）。彼らが九州の大学で成長したのは、九州の藩政史料、領主関係史料が豊富であることにによる。

筆者がこの報告書のために参加してきた今次の共同研究メンバーにも分担研究者に薩琉関係・近世国際関係史の紙屋敦之、佐賀藩明治維新論の島善高、キリシタン民衆・島原天草一揆史の大橋幸泰、大名相統論の大森映子、研究協力者に薩琉関係史の深瀬公一郎などが参加している。いずれも九州との関係が深い研究である。

研究の盛り上がりは、研究の流れの変化とも連動している。対外関係史研究は第二次大戦前とは異なった課題意識で盛んになっているが、朱印船時代でも海禁時代でも出発・帰着の口をいくつも持つ九州は、ことさらに九州論を目指すのではなくても、おのずから九州近世史を検討し論及することになる。

九州は、鹿児島藩島津氏、佐賀藩鍋島氏、熊本藩細川氏、福岡藩黒田氏など国主あるいは国主級大名をいく人もかかえ、藩主家の中世以来の交代史を追跡できる大名家もものが多。つまり、全体として藩世界の比重の大きい地域である。この点では、小藩・相給村の錯綜する関東近世史とは対照的に異なる。そもそも大藩が存在することの前提の一つに、一国の知行高の判定が大きいということがある。例えば飛騨一国の石高は五万石に満たないし、伊賀一国の石高は10万石ほどである。九州に大藩が多いのは、一国の石高が大きく見積もられているということがある。

そして九州は、藩政史研究でも豊富な成果を持つ地域である。雄藩としての鹿児島藩・佐賀藩という古くからの研究関心、戦後歴史学の明治維新政治史、幕藩体制史の藩政・藩制史への研究関心から、多くの成果が蓄積されてきた。また藩関係の史料を全国的にみても最も豊富に有する地域であった。個人研究、共同研究ふくめて、藩の研究史は数多い。

この小稿は「九州近世史」という括りを意識しているが、研究史の九州諸藩は九州だけに視野を限って行われたわけではない。むしろ城下所在の地域を突き出る形で藩の再生産がありあえたことは、参勤交代の江戸藩邸や藩物産売捌きの大坂藩邸や儀礼の京都藩邸などを言うまでもなく、近世藩の特徴である。中期の九州諸藩も同じであり、後末期では雄藩的政治行為がそれをさらに強めた。また幕府や大坂市場や京都朝廷だけではなく、薩長同盟という文言に結果するような横列の特有の行動もある。さらにはオランダ、中国、朝鮮、琉球との異国との関係が、他地域にないものである。

近世史研究では、かなり長い間地域社会論が主導力を発揮している。ただ、地域社会論はそれだけでは自立できないテーマで、社会集団論とか中間層論とか東アジア論とか、大小のもう一つの視角や方法の用語と組み合わせられている。地域社会は歴史用語というより現代行政用語から出発していて、それ自体は無規定的な言葉だからである。

近年の近世史学界の地域社会論は領主権力への関心よりは地域中間層の自立性が発揮される地域での成果を競ってきた。つまり藩領域、藩権力などをむしろ避けてきている。しかし、地域社会論・藩社会（藩世界）論という立て方は当然ありえる考え方で、実際各地で進められている自治体史編纂、個人・共同研究では、藩社会・藩体制の史料調査や研究討議が途切れたことはない。学界的に藩研究が表面化するか伏流化するかのちがいはあっても、つねに藩研究は行われてきており、その場合、外様・譜代の広域の藩世界を構成している九州近世史では、藩の研究が他地域よりも熱心に継続されてきた。ただし、御家騒動論や大名相続論や民衆運動論が中心テーマにおかれ、かならずしも戦後歴史学の藩政・藩制研究になるとはかぎらないところが1980年以降の新しさと言えよう。

ところで公儀と藩世界という角度から九州近世史を考えようとすると、やはり総合研究型の藩政史研究を取りあげるべきであろう。この点でも九州には大きな成果が蓄積されている。いうまでもなく、その代表的な成果は、九州大学九州文化史研究施設の面々、つまり九州に研究拠点を置く研究者による佐賀藩の総合的研究である。これは1960年代から70年代の問題意識を共有しながら、共同研究として達成された成果である。刊行された形は、藤野保編『佐賀藩の総合研究—藩制の成立と構造—』（吉川弘文館、1981年）・藤野保編『続佐賀藩の総合研究—藩政改革と明治維新—』（吉川弘文館、1981年）である。

ところがこの共同研究グループは、じつは藩政史から出発していない。すべて同じメンバーではないが、藩政史研究の前に、幕領の研究をおこなっている。その成果は、杉本勲編『九州天領の研究』（吉川弘文館、1976年）にまとめられた。このグループの問題意識はどういうものだったのか。「序説」や「あとがき」によると、九州文化の史的研究を行うことはもちろんだが、それを九州地方史にとどめないで国際関係史、国家史の次元で九州文化を再構成することをこころざしたという。言いかえると、幕藩体制史研究の次元で九州天領をとらえ、幕藩体制史の一環として再構成したという。近世九州の研究には、同様に全国史への視線をもつものが多い。

九州は大藩がいくつもあり、藩世界がひしめきあうような世界を形成しているが、他方で公儀御料もまた、長崎だけでなく日田郡代支配所（明和4年以降代官から郡代へ）があり、その支配石高は多い時で16、17万石と、公儀領のまとまりとしては大きな領域であった。

九州の総合研究グループがなぜ藩領からでなく天領から研究を始めたかといえば、天領長崎、天領日田という、九州近世史における天領の比重の大きさを意識していたからであろう。そしてそれは全国に散在する公儀御料と同じではない。天領日田で言えば、それに似た公儀直轄領を探せば、いささか大げさになるが江戸、大坂ということになろう。「周辺外様大名の監察」（同前書）というのは江戸にはあてはまらないが、「政治上で九州の中心的存在」（同前）というのは、大まかにはみれば江戸（全日本・関東近世史）でも大坂（畿内近世史）でも同じである。

九州天領の場合、公儀の直接の政治支配力が強かったのではなく、大名貸し、藩の殖産専売、財政改革、藩政改革の「日田金」と言われる近世的商業・金融資本として諸藩経済を規定した。さらに広瀬淡窓、成章舎・咸宜園などの人・学舎の形で九州文化に求心力を与えた。こうした公儀領商人の金融力、町人主導の文化力は江戸や大坂に見られるものである。このことをここで言いたいのではなく、藩世界の集合体、全島が藩世界のような印

象を与える九州はじつは名実ともに大きな天領世界でもあるということである。

先記の総合研究グループは、公儀について、天領研究を先行させたことで、それを重視する視角を表明したが、もう一つは、豊臣政権、徳川政権という中央権力に、九州諸藩がその初発のところで左右されるほどに大きな影響を受けたことを強調する視角を示している。

しかし、九州近世史は、起点・初期には中央権力の力に左右されたが、やがて中期の藩政改革をつうじて、いわば藩の国家化が進むとみる視点になる。これには初発から国家性を見る立場も入れて、九州近世史研究の一つの特徴とみてよい（長野暹『幕藩制国家の領有性と領民』、高野信治『藩国と藩輔の構図』名著出版）。それは、明治維新政治過程における雄藩展望と結びついていることと関係すると思われる。藩に国家性を見るのは賛成できるが、近世国家の構成と推移をどのように説明して藩の国家性を組み込むかはかんたんな問題ではない。ともあれ、藩の国家的性格を見るかぎり、江戸にあるものとしての公儀は相対化されることになり、その分藩体制の内部にある公儀性を言わなければならない。この関係性を深めていくことが藩研究の一つの課題である。

岡山藩研究会が言う「藩世界論」の一つは、藩領と江戸（藩邸）、大坂（蔵屋敷）の三極構造で藩の成立、変化を見ようとするものである（泉正人）。それは現在の藩研究に明確な指針を出し、藩世界を全国的視野で拡張するうえで有効な提言であると思うが、九州近世史はこのことに関わることで、もう一つの大事な問題をつきつけている。薩摩藩は琉球と結びついており、対馬藩は朝鮮と結びついている。長崎警固番によって佐賀藩の性格も影響されている（近世の平均を超える軍事性）。つまり、国許・江戸・大坂に、もう一つ、直接の「異国」（市場、外交）を加えなければならないということである。このことが、他の地域と異なる程度に、九州諸藩の公儀観、自藩意識になんらかの性格を付与したと思われる。しかも、九州諸藩は天領の影響を他地域以上により直接的に金融の影響を受けつつである。

どの地域をとっても当てはまる幕藩（将軍—大名）関係が必然的に持つ主従制的身分制的上下関係を先ずは動かない函数としても、九州近世史という見方をしようとすると、明らかに他の諸地域とは性質の異なる変数的要素がある。それらをできるだけ正確に読み解いていくことが、新しい九州近世史研究の課題となろう。

「太平記読み」の享受者たち—肥前蓮池藩鍋島直澄の場合—

若尾 政希

はじめに

太平記読みという言葉からもわかるように、『太平記』は講釈により受容されてきたが、近世初期には、『太平記』の人物・事件等を論評・批判して政治と軍事の在り方を教える『太平記評判秘伝理尽鈔』の講釈が流行した（以下、『理尽鈔』の講釈及び講釈師を「太平記読み」と呼ぶ）。最初の「太平記読み」大運院陽翁^{だいいうんいんようおう}が、唐津藩主寺沢広高、金沢藩主前田利常に『理尽鈔』講釈を行ったことから明らかなように、「太平記読み」は元来、領主層を対象にしたものだった。その内容は、政治・軍事論を真面目に語ったものであり、特に政治論ではあるべき領主（明君）像や政治のあり方を鋭く提起していた。この『理尽鈔』のなかで、政治・軍事の教諭者として登場するのが、楠正成である。そこでは正成は、「諸人ノ貧苦ヲスクウ」仁政をいわば旗頭にしたきめ細かい農政を行う。仁政を標榜する正成の施策は、百姓に支持され大成功をおさめたという。『理尽鈔』の正成は、たんなる軍略家ではない。領民と家臣の信服を得て彼らを自由に使いこなす、卓越した政治能力をもつ理想的治者＝明君であった。正成は、『太平記』世界の知謀・忠義の武将から、『理尽鈔』世界の理想的指導者へと劇的にイメージチェンジを遂げた。まさしく武将から為政者への転換を余儀なくされた近世初頭の武士層にとって、「太平記読み」の教えは切実な生きたものだったといえる。『理尽鈔』講釈は、陽翁から利常や金沢藩家老の本多政重らに、陽翁の弟子横井養元から岡山藩主池田光政らにと、対面口誦による講釈により、受容の輪を確実に広げていった。こうして領主層が、『理尽鈔』が説く民を恵む政治＝仁政という政治理念を自らのものとするようになり、実際、一七世紀半ば、成立期の藩政において、仁政が高く掲げられたのである（その典型とされたのが、他ならぬ金沢藩・岡山藩であった）。

ところが、このような統治マニュアルとでもいうべき『理尽鈔』が、出版業者の手に渡り一七世紀半ばに出版されると、『理尽鈔』は「都鄙貴賤此の書を信じ、世こぞって好み用いる」（『重編応仁記』発題）と評されたように、広範な層の読者を獲得して大流行した。『理尽鈔』もの『太平記』ものの出版が相次ぎ、一七世紀末には、民衆を対象にした大道芸能者太平記読み^{たいへいいきよみ}まで登場し、さらに歌舞伎・浄瑠璃に影響を与え、『太平記』以外の軍書出版、軍書講釈の盛行をもたらした。山鹿素行・熊沢蕃山といった当代一流の思想家たちも、『理尽鈔』の影響を色濃くうけて思想形成を行っている。また河内国石川郡大ヶ塚^{かうちやかしょう}の富農・富商であった河内屋可正（本名壺井五兵衛）、川崎宿名主を勤めた田中休愚（丘隅^{にいだ}）、出羽国秋田郡二井田村の上層農出身で陸奥国三戸郡八戸町で町医を開業した安藤昌益のような、在町・在村の知識人・読書人にも、『理尽鈔』やその関連書を読んで、「太平記読み」の政治論の影響をうける人々が現れた。ここで問題となるのは、『理尽鈔』がなぜ地域・身分を越えてもてはやされたのか、政治・軍事論を要諦とする『理尽鈔』は、民衆にとってどんな意味があったのか、ということである。可正が書き残した『河内屋可正旧記』（「大ヶ塚来由記」）は、それを考える絶好の史料である。可正は『理尽鈔』等を

通して、明君＝正成像を受容していた。「我等ごときの庶人」と自称する可正にとって、「太平記読み」は何であったのかというと、可正はまず、それを修身・齊家の論に読みかえ、子孫への教訓を展開する。と同時に、可正は、郷村の民を治める指導者として強い自覚を持ち、受容した「明君」＝正成像を自らのものとして、あるべき村落指導者像と仕置のあり方を説く。「太平記読み」の政治論は領主層だけでなく村落指導者層にまで下降化し、その結果、武士層から民衆上層までに、共通の治者像指導者像が形成・定着したといえるのである。さらに可正は夜話の折に「軍書を引て和漢兩朝の名将勇士のはたらき」から仏法・神道・歌道その他まで「取集めて」講釈をしていた。民衆の間に、村の読書人を中心にして、その読み語りを聞く場が形成されており、出版メディアによる知は、そうした村に形成されたオーラルなメディアを介し、中下層農民へと流通していった可能性もある。こうして私は『理尽鈔』が領主層から民衆までに受容され、指導者像や政治のあり方に関する社会の共通認識・政治常識の形成に寄与したという仮説を、拙著『「太平記読み」の時代—近世政治思想史の構想—』（平凡社選書、一九九九）において提起したのである。

拙著を世に問うてから、私は、自身が出した仮説の是非を検証するために、日本各地に出掛け、旧大名家から民衆までが残した蔵書の調査を行ってきた。本科研費による調査では九州各地の大名家の旧蔵書の調査を行うことができ、多くの知見を加えることができた。小稿では、その成果の一端を紹介するものである。

1.『獻祖遺跡 有馬日記附』との出会い

2006年8月20日、佐賀県立図書館で鍋島文庫の貴重な史料を閲覧させていただいた。鍋島文庫所蔵史料の閲覧は、あらかじめ財団法人鍋島報効会に閲覧申請をし、保存状態がよく、またマイクロフィルムや紙焼きによる複製本のないものだけを書庫から出してもらい閲覧するというシステムをとっている。閲覧件数が限られていることもあり、閲覧が早く終わってしまった私は、隣の郷土資料室の棚に並べてある佐賀県史編纂資料のいくつかを手にとり、どんな史料が収載されているのだろうか、ぱらぱらとめくっていった。そんな私の目に「太平記ノ評判」の語がとびこんできた。一瞬、目の錯覚かと思った。「太平記読み」にかかわる史料が向こうから読んでくれとばかりに出てきてくれるなんて、そんなうまい話があるだろうかと思ったのである。そこでもういちどその史料を見てみると、他にもない「太平記読み」の享受についての新史料だったのである。

私が偶然手にしたのは、佐賀県史編纂史料425であり、「鍋島直澄 献祖遺跡 有馬日記附」の全文を「佐賀県史編纂原稿用紙」（20×10、200字詰め）に翻刻したものである。鍋島直澄（元和1(1615)～寛文9(1669)）は、佐賀藩初代藩主鍋島勝茂の五男で、佐賀藩支藩の蓮池藩の初代藩主である。「鍋島直澄 献祖遺跡」というタイトルから、鍋島直澄の著作かと思いがちであるが、献祖の献とは、直澄の諡である正献院殿に由来すると推定される。とすると「祖」は、蓮池藩の藩祖であり後世藩神として祀られた直澄を指す。よって、この書物は直澄の著作ではなく、藩祖直澄の「遺跡」、すなわち言行を綴った明君録ということになるだろう。であるならば、誰が、いつ、どういう意図で直澄の明君録を編纂したのか、を藩政史の展開に即して明らかにできれば、おもしろい研究ができるはずである（注1）。しかしながら、現在のところ、私は、この史料の原本がどこにあ

るのか、確認できておらず、また他の写本が存在しているかどうか調べられていない。
『献祖遺跡』の史料批判ができていない状況ではあるが、それを差し引いても興味深い内容を含む史料であり、『献祖遺跡』の「太平記ノ評判」にかかわる一節を紹介しておきたい。次はその全文である。

一、太平記ノ評判未ダ秘書ノ時写シ給フ。此比マテハ武城ノ御殿、小松中納言殿、酒井讃岐守殿、慈眼大師、寺沢兵庫頭此五部ノ外ニナシ。如此稀ナル書求メ玉ヒ御読書数篇ニ及ンデ、或時ノ玉ヒケルハ、此書ヲ法花法印諸部ヲ集メテ一部トシ、末世ノ武士ノ戒トセン志書ニ見ヘ侍ル。亦ハ日本無双ノ武将楠正成ノ智仁勇ノ三徳ヲ備ヘ子孫代々忠ヲ成セシ事ヲ顕ンカ為也。此書ヲ読セバ七書等ノ釈ヲ不聞トイフ共、其心ヲ得ン。然レトモ愚痴短才ノ族悪ク心得テ是ヲ読セバ悪ク侍ン事、無疑。其故ハ人ノ勇膽二相目利ノ事ヲ書ス。正成ハ大悟ノ賢将ニテ己レカ明鏡ニ写シテ目利ヲセラレタル故ニ、無相違。然ルヲ手前ノ鏡ニハ暗クシテ磨ク事モナク、人ノ善惡計リニ心ヲ付テ見バ、鳥カ鶺ノ真似ニテ水ニ溺ルニ事不可有疑モ、其上ヘ将ニ依テ目利ノ心得アシクシテ損多カラシ。亦當國ノ者ハ中下共ニ己カ身心ヲ少シモナク傍輩ノ非ヲ見ル、サケスミノ曲尺トナシ、妬ミ強クナリテ互ニ云諍ハン事疑ヒナシ。一部ノ内ニモ恩地ノ巻ハ就中、邪智短才ノ族ヲ見スル事ナカレ。予モ此後ハ披見スマシキゾ。然レトモ此書ヤカテ板木ニ起スベシ。是ヨリ捨タリ侍ンソ。惣シテ書ニハ文ノ飾ト練レタル将士ノ替リアリ。此評判ハ太平記ノ時代ヲ指シテ乱世ノ将士ヲ批判ス。夫ヲ静謐ノ世ノ人ト然カモ事ニ不逢ハ輩、其俣ニテ用ヒ侍ラバ、地ノ底ニ墮ツヘシ。其故ハ近代名将ト云ヒ伝ヘシ、甲州ノ信玄公ハ村上ノ義情ト九ヶ年戦ヒ、相州ノ北条氏康ハ上杉則政公ト十年戦ヒ、北越ノ謙信公ハ信玄又ハ能登越中衆ト十五年戦ヒ、尾州ノ信長公ハ美濃衆ト九年戦ヒ玉ヒテ良将ト云ハレ玉フ。是才智大ニシテ鍛鍊ヲシ玉フ故ナリ。然ルニ短才ノ輩古書ヲ見テ其ノコトク合戦スト思フハ、石ヲ懷キテ溺ニ入ルナルベシ。大ニ誤リト云ツヘシ。サレトモ古ヲ師トスルハ常ナリ。其上ニテ時ト國風ト人ノ輕重強弱トヲ分別シテ、治乱共ニ全キ事ヲ工夫スヘシ。如此ニ侍ラバ、亦重宝ノ書也。一篇ニ捨ツルモ用ルモ、共ニ非ナリ。遠慮工夫ヲ加ヘテ相応ノ二字ニ納メヨト仰ケルナリ

2.『献祖遺跡』にみえる直澄の『理尽鈔』評

ここから読み取れることを整理しておこう。

①「太平記ノ評判未ダ秘書ノ時写シ給フ」といい、鍋島直澄が、『理尽鈔』が「秘書」であったときに、書写して入手したという。「秘書」の時とは、「板木ニ起ス」前、すなわち出版される前ということになるのであろう。なお、出版された『理尽鈔』（以下、刊本と呼ぶ）には刊記がなく、何年に出版されたか、正確にはわからない。だが、いっしょに伝来することが多い『恩地左近太郎聞書』に正保2年（一六四五）の刊記があることから、同じ頃の刊行と推定されている。なお、松沢克行氏は、『時庸卿記』正保4年（1647）2月7日の条に、後光明天皇が「太平記評判」（『理尽鈔』）を禁裏文庫へ納めさせたという記事があることを紹介している（注2）。遅くともこの時までには、『理尽鈔』は出版されていたことがわかる。

②「此比マテハ武城ノ御殿、小松中納言殿、酒井讃岐守殿、慈眼大師、寺沢兵庫頭此五部ノ外ニナシ」と、「秘書」であったときに、『理尽鈔』を所蔵したのは、5名だけだったという。このうち、「小松中納言殿」は金沢藩藩主前田利常（文禄 2(1593)～万治1(1658)）である。利常は、最初の「太平記読み」である大運院陽翁（一説では、永禄 3(1560)～元和 8(1622)）を金沢の地に招聘した人物であり、前田家の蔵書を伝える前田育徳会尊経閣文庫には陽翁自筆と伝える『理尽鈔』写本が現存する等、金沢藩はいわば「太平記読み」のメッカの一つであった（拙著『「太平記読み」の時代』参照）。もう一人、「寺沢兵庫頭」は唐津藩藩主寺沢堅高（慶長14(1609)～正保 4(1647)）である。堅高の父、寺沢志摩守広高（永禄 6(1563)～寛永10(1633)）は、陽翁から3年かかって伝授を受け元和 8年（1622）に伝授証文を与えられ『理尽鈔』の書写を許された人物であり、広高没後、その領地とともに『理尽鈔』も堅高が引き継いだと推定される。しかし堅高は、島原の乱の責任を問われ天草島を没収され、正保 4年（1647）に跡目なく自死したため、唐津藩寺沢家は改易された。そのため、寺沢家の蔵書は現在に伝わらず、陽翁から書写を許された『理尽鈔』（寺沢広高本）の原本も、その現存を確認することができない。ちなみに、刊行された『理尽鈔』の末尾には、右の陽翁が広高に与えた伝授証文が付されており、その経緯は不詳であるが、寺沢本系の『理尽鈔』が本屋にわたり出版されたことがわかる。

さて、話を戻すと、5名のうち、前田利常と寺沢堅高は、以上のように他の史料から『理尽鈔』を所蔵していたことは確実であるが、他の3名については、これまで『理尽鈔』との関わりについて指摘されてこなかった。まず「武城ノ御殿」とは、将軍を指す。時期からいって徳川家光（慶長 9(1604)～慶安 4(1651)）であろうが、家光が『理尽鈔』を所蔵していたという話はこれまで聞いたことがない。

「酒井讃岐守殿」は、酒井讃岐守忠勝（天正15(1587)～寛文 2(1662)）であろう。寛永 11年（1634）より若狭国小浜藩藩主となり、老中・大老を歴任した幕閣の中心人物である。忠勝の『理尽鈔』享受について、これまで指摘されたことはなかったが、実は小浜藩酒井家の旧蔵書を伝える小浜市立図書館には、写本の『理尽鈔』（太平記秘伝理尽抄）が現存している。全30冊で、内訳は『理尽鈔』40巻29冊、付録として『太平記抜書』1巻1冊からなる。この『理尽鈔』の末尾に陽翁の寺沢広高宛ての伝授証文がある。しかも刊本にない「元和第八年曆仲夏上旬三冀」（元和元（1615）年5月3日）の年月日の記載があることから、これが寺沢広高伝授本そのものを書写したか、あるいはその系統の写本を書写したものであることがわかる（注3）。小浜市立図書館蔵の『理尽鈔』には、誰がいつ書写したのかという書写情報に関する記載はないが、酒井忠勝が求めて書写させた可能性は低くない。忠勝と『理尽鈔』との関わりについて、今後史料を渉猟し明らかにしていかなければならない。残る「慈眼大師」とは、家康から家光までの三代の将軍に仕えた天台宗僧侶南光坊天海（天文 5(1536)～寛永 20(1643)）の諡号である。天海が『理尽鈔』を所蔵し「太平記読み」の世界に通暁していたとしたら、非常におもしろいが、現在までのところ、その徴証となる史料は見つかっていない。なお、鍋島直澄がこの5人のうち誰の所蔵本を書写して入手したのかについて、『献祖遺跡』には、何の言及もない。

③「如此稀ナル書求メ玉ヒ御読書数篇ニ及ンデ」という記述から、直澄が「太平記読み」を講釈ではなく、「読書」により享受したことがわかる。拙著でも述べたように、『理尽鈔』の出版以前の「太平記読み」享受は、大運院陽翁やその弟子の横井養元（岡山藩）や

大橋全可（金沢藩）ら、『理尽鈔』の講釈師から直接講釈を受けるというやり方で行われた。『理尽鈔』の書写は、何度も講釈を受けた末に、師からその奥義を伝授された証によりやく認められる厳粛なものであった。ところが、『理尽鈔』の評価が高まってくると、それが「秘書」であるが故に、その中味を知りたいという欲求がより高まってきたのであろう。前述のように、岸和田藩岡部家、島原藩松平家、小浜藩酒井家等、大名たちは寺沢本を書写して蔵書としたのである。こうした連中の『理尽鈔』享受は、専任の講釈師が近くに存在しない以上、読書に依らざるを得ないと推定される。『猷祖遺跡』では、直澄が「如此稀ナル書求メ玉ヒ御読書数篇ニ及ンデ」と、繰り返し「読書」することにより、それを享受したことを述べており、この推定を裏付けるものといえよう。

④「此書ヲ法花法印諸部ヲ集メテ一部トシ」以下は、直澄の『理尽鈔』評である。まず、「法花法印諸部ヲ集メテ一部トシ」と、『理尽鈔』を法花法印、すなわち大運院陽翁が編集したものとみなす。その意図は、「末世ノ武士ノ戒トセン志書ニ見ヘ侍ル」と当代の武士の戒めとするためであり、「亦ハ日本無双ノ武将楠正成ノ智仁勇ノ三徳ヲ備ヘ子孫代々忠ヲ成セシ事ヲ顕ンカ為」である。「此書ヲ読セバ七書等ノ釈ヲ不聞トイフ共、其心ヲ得ン」、『理尽鈔』を読ませれば、中国の兵学書の基本である『七書』等を学ばなくても、その奥義を得ることができるという。

このように、その価値を認めながらも、「然レトモ愚痴短才ノ族悪ク心得テ是ヲ読セバ悪ク侍ン事、無疑」と、「愚痴短才」の者は『理尽鈔』を読んで悪しく心得るから、そのようなものには『理尽鈔』を読ませるべきではない。なぜなら「其故ハ人ノ勇臆ニ相目利ノ事ヲ書ス」と、『理尽鈔』には、人が勇者か臆病者かを見きわめる方法を載せている。

「正成ハ大悟ノ賢将ニテ己レカ明鏡ニ写シテ目利ヲセラレタル故ニ、無相違」、正成は大悟の賢将であるから人の目利きができるが、他の者には、それはとても困難である。「然ルヲ手前ノ鏡ニハ暗クシテ磨ク事モナク、人ノ善悪計リニ心ヲ付テ見バ、鳥カ鵜ノ真似ニテ水ニ溺ルニ事不可有疑モ、其上ヘ将ニ依テ目利ノ心得アシクシテ損多カラシ。亦當國ノ者ハ中下共ニ己カ身心ヲ少シモナク傍輩ノ非ヲ見ル、サケスミノ曲尺トナシ、妬ミ強クナリテ互ニ云諍ハン事疑ヒナシ」と。とりわけ、「一部ノ内ニモ恩地ノ巻ハ就中、邪智短才ノ族ヲ見スル事ナカレ。予モ此後ハ披見スマシキゾ」、すなわち『恩地左近太郎聞書』は、とりわけ「邪智短才」の者には見せてはいけない。私もこの後は見ないようにする、とまで述べたという。

ところが、このように当代の凡人には、誤読されやすく危ういからという理由で、その読書を禁じるが、「然レトモ此書ヤカテ板木ニ起スベシ」とその出版を予言し、「是ヨリ捨タリ侍ンソ」と、出版されることによって、『理尽鈔』がすたれると推測している。なぜなら、「此評判ハ太平記ノ時代ヲ指シテ乱世ノ将士ヲ批判ス。夫ヲ静謐ノ世ノ人ト然カモ事ニ不逢ハ輩、其促ニテ用ヒ侍ラバ、地ノ底ニ墮ツヘシ」と、乱世の『太平記』の時代と静謐の世である当代とは時代がことなる。『理尽鈔』の主張をそのままに用いても通用しない。

ただし、「サレトモ古ヲ師トスルハ常ナリ。其上ニテ時ト國風ト人ノ輕重強弱トヲ分別シテ、治乱共ニ全キ事ヲ工夫スヘシ。如此ニ侍ラバ、亦重宝ノ書也。一篇ニ捨ツルモ用ルモ、共ニ非ナリ。遠慮工夫ヲ加ヘテ相応ノ二字ニ納メヨト仰ケルナリ」と、『理尽鈔』の主張を鵜呑みにするのではなく、当代に「相応」に読みかえる工夫をすべきだという。こ

のような当代相応に読みかえることができれば、『理尽鈔』は「重宝ノ書」だという。実は、私の分析では、『理尽鈔』の学問論・政道論の眼目は、「相応の理」を読み取りそれを実践すること、「時に相応の治国」をすることであった（前掲拙著135頁）。『献祖遺跡』中の直澄の『理尽鈔』理解は、その眼目をしっかりおさえたものだと評価することができよう。

3. 直澄と「太平記読み」

以上、明君録『献祖遺跡』の叙述によれば、鍋島直澄は『理尽鈔』を入手し、それを読んで「太平記読み」の学問論・政治論の眼目を理解していたことになる。では、実際に鍋島直澄は『理尽鈔』を入手し、読んだのであろうか。

佐賀県立図書館に、鍋島本家の文庫とは別に、鍋島蓮池文庫がある（注4）。この蓮池文庫に『理尽鈔』やその関連書はあるのであろうか。2007年8月24日、私は佐賀県立図書館で調査をする機会を得た。その成果を報告しておきたい。

①鍋島蓮池文庫に『神道正授巻』（蓮352、4）1冊がある。内容は、「神道正授巻」の他に、「三教巻」、「具足飭之次第・具足飭之巻」、「九字大事」、「十字大事」からなる。このうち、「神道正授巻」は楠正成が正行に伝授したものと伝える書物で、その末尾に「堀江甚三郎重治」が「従五位藤原直澄公」、すなわち直澄に伝授したことを示す証文を付す。日付は「万治元戊戌天九月吉日」、万治元(1658)年9月吉日付けである。この証文の後に、さらに次の証文がある。全文を引用しておこう。

右神道正授者贈三位中将楠正成家伝之秘書并伝授之蘊奥也、為其妙包括事理而尽兼存治乱而説至哉奇哉呼々矣、于爰汝志于此深望于此高、故今許与焉向來練心熟習而到其妙、則於治天下国家正己治人之道、何有乎禪高須弥必莫怠云

従五位前甲斐守鍋嶋氏

寛文貳壬寅年 八月二日

藤原朝臣直澄 花押

従五位前摂津守鍋嶋氏

藤原朝臣直之 花押

直之とは、直澄の嫡子で、寛文5(1665)年に直澄に譲られて蓮池藩主となる人物である（生没年：寛永20(1643)～享保10(1725)）。右の証文によれば、寛文2(1662)年8月2日に、直澄・直之父子はこれを伝授されていることがわかる。

『神道正授巻』について、堀江甚三郎は、正成の手になるもので代々楠家に伝わったものが堀江家に受け継がれたものというが、その証拠はなく後世の偽書とすべきであろう。前田家の尊経閣文庫に写本があり、『理尽鈔』との関わりは推測されるが、その作成の過程については、よく分かっていない。また、この書物は、天和2(1682)年に出版された楠流兵学書『楠家伝七巻書』に収載され、よく知られるようになる（鍋島蓮池文庫にはこの刊本も所蔵されている）。

堀江甚三郎重治については、現時点ではまったく情報がない。少なくとも万治～寛文初年に直澄周辺にいたことは確かであるが、それ以上のことはまったくわからない。

なお、「神道正受巻」以外の部分には、それぞれの末尾に次の署名がみえる。

三教巻 堀江甚三郎署名（万治元戊戌天九月吉日）

具足飭之次第・具足飭之巻 直澄宛堀江甚三郎署名（万治元戊戌天九月吉日）

九字大事 直澄宛大阿闍梨法印権大僧都尊祐署名（慶安元戊子祀八月時正）

十字大事 直澄宛大阿闍梨法印権大僧都尊祐署名（慶安元戊子祀八月時正）

いずれも兵法書である。「三教巻」にだけ宛名がないが、他はすべて直澄宛である。兵法の秘伝を直澄が伝授されたのであろう。慶安 1(1648)年に伝授している尊祐という僧侶についてもまったく不明である。

②鍋島蓮池文庫に、『正成一巻書・雑書・正成恩地問答』（蓮 9 9 1. 2 6 1）1冊がある。「楠正成一巻之書」、「雑書」、「正成恩地問答」の三つの部分からなる。「楠正成一巻之書」は刊行もされた楠流の兵法書の一つである。「雑書」は、徳川家康の合戦や軍術談義、謙信や正成の兵法への言及等からなる書物で素姓は不明である。最後の「正成恩地問答」は、右に挙げた『恩地左近太郎聞書』とは別物で、一般に『軍用秘術聴書』の名で知られる楠流の兵法書である。実はこの「正成恩地問答」の末尾にも、「万治元戊戌天九月吉日」付けの直澄宛堀江甚三郎の署名があり、これも堀江甚三郎より伝授されたものだという（注5）。

③同文庫には、もう一冊、『楠家五精通鑑』（蓮 3 5 2. 3）も楠流の兵法書であるが、その末尾に、直澄宛堀江甚三郎の署名（万治元戊戌天九月吉日）がある。

④同文庫に、『神軍秘伝巻・楠判官無相軍瀧秘伝・集書秘伝・恩地正一聞書』（蓮 9 9 1. 2 8 3）一冊がある。「聖徳太子神軍秘伝巻」、「楠判官無相之軍瀧秘伝覚書」、「集書秘伝」、「恩地左近太郎正一聞書」の四部からなる。「聖徳太子神軍秘伝巻」の末尾に、「此一巻者 聖徳太子秘伝之妙典也。中昔明貫伝鬼一、鬼一伝源義経、近代甲斐源氏下山入道伝楠多門兵衛正成云々軍用之極意也。猥不可伝、可秘々々 望月新兵衛」とある。聖徳太子から鬼一に、鬼一から源義経に、義経から下山入道に、下山入道から楠正成に伝えられた軍用の極意であるという。望月新兵衛が師範であるが、望月がいつ誰に伝授したのか、についてはまったく記載がなく、未詳である。次の「楠判官無相之軍瀧秘伝覚書」は、正成の兵法であるが、その由来についての記載はない。「集書秘伝」は、「正成曰、武士タラン者ハ仏神ヲ奉・信事第一也」云々というような正成の言葉を集めたと称する秘伝書であるが、やはりその由来について何の説明もない。最後の「恩地左近太郎正一聞書」は、『恩地左近太郎聞書』と同一であるが、誰が書写したのか、未詳である。

⑤同文庫には、書写年代不明の『楠家十書』（蓮 9 9 1. 2 6 0）がある。四冊からなり、一冊目には「楠家十書 一」には、「神道正授」と太公望と武王の兵法問答等を収め、二冊目「楠家十書 二」には、「太平記法令之巻」（『理尽鈔』の楠正成の政治論を抜粋し敷衍したもので、刊本もある）、「三妙無尽法」「軍元立将之法」他の楠流兵書を収載する。「楠家十書 三」には、「正成恩地問答」（軍用秘術聴書）と「恩地之左近太郎聞書」を収め、最後の「楠家十書 四」には、「太平記理盡口傳巻第一上」「太平記理盡口傳巻第一下」「太平記図経口傳書 第三」が収載されている。「太平記理盡口傳」というタイトルは、現存する写本で伝わる『理尽鈔』の内題にみることができるのものである。しかし、その目録をみると、

目録

- 一江州唐崎浜合戦之事
- 一人数多少見様之事
- 一野寄山寄六軍法之事
- 一名和長俊楠正成軍物語之事 付作物図二
- (以下 略)

とあり、これは『太平記理尽図経』という書物と一致しており、これが『太平記理尽図経』を書写したものであることがわかる。『太平記理尽図経』とは、大運院陽翁の弟子で『理尽鈔』の伝授を受けた大橋全可貞清（金沢藩家老本多家家臣）の手になるもので、『理尽鈔』の合戦場面を図示し正成の兵法の奥義を説き、明暦 2(1656)年に出版されている（5巻、書肆は中野是誰）。「楠家十書 四」所収のものを、刊本の『太平記理尽図経』とくらべると、「内題」だけでなく巻の区切りも文章にも異同がある。よって刊本ではなく、写本（誰が所蔵していたものかは未詳であるが）を写したものと推定することができる。

むすぶにかえて

以上見てきたように、鍋島蓮池文庫には、『理尽鈔』は現存しないが、『理尽鈔』関連書、楠流の兵法書等がいくつも伝わっていることがわかる。上の①②③の書物から、少なくとも万治元(1658)年から寛文 2(1662)年まで、直澄が楠正成の兵法を伝える堀江甚三郎なる人物を側におき、その兵法を学んでいたことがわかる。このような直澄の正成への傾倒ぶりから推測するに、④⑤の書物も——直澄の代に蔵書に加えられたことを示す証拠は（現在までのところ）ないが——直澄の集書である可能性が高いと言えよう。とすれば、明君録『猷祖遺跡』が言うところの、鍋島直澄は『理尽鈔』を入手し論評したという叙述は、何らかの事実にもとづいていることになる。今後、『猷祖遺跡』の史料批判を行って、蓮池藩鍋島直澄の「太平記読み」享受の実態に迫ることを約して、小稿を閉じたい。

注

- (1) 「明君録」については、深谷克己「明君録一期待される君主像」『歴史をよむ』東京大学出版会、2004、小関悠一郎「近世中期における「明君録」形成過程一荏戸善政著『翹楚篇』の事例一」『一橋論叢』134-4、2005、若尾政希「享保～天明期の社会と文化」『日本の時代史16 享保改革と社会変容』吉川弘文館、2003、他参照。
- (2) 松沢克行「後光明天皇期における禁裏文庫」、田島公編『禁裏・宮家・公家文庫収蔵古典籍のデジタル化による目録学的研究』、2006。
- (3) 寺沢本の写本には他に、大阪府立中之島図書館蔵本<岸和田藩藩主岡部家旧蔵書>・島原市立図書館松平文庫蔵本<島原藩藩主松平忠房旧蔵書>等がある。
- (4) 本来であれば、この文庫が、いかに形成されたのか、近現代をどのように乗り切り、現在、佐賀県立図書館にあるのか、といった蓮池鍋島文庫史を押さえておかねばならないが、現時点ではその用意がない。別稿を期したいと思う。
- (5) 『理尽鈔』と楠流兵書との関わりについては、今井正之助『太平記評判書及び関連兵書の生成に関する基礎的研究』科学研究費研究成果報告書、課題番号07610429、1998、他参照。

「御馳走役」にみる大名家の苦難

—安永3年を事例として—

久保 貴子

はじめに

江戸時代、朝廷は、ほぼ毎年、幕府からの年頭の御使に対して、答礼の勅使を江戸に派遣した。ただし、江戸への年頭勅使派遣は、幕府の年頭使開始より遅く、元和7年(1621)が最初である。年頭勅使は、その後、恒例行事化していき、寛永12年(1635)11月には、勅使専用の宿所も設けられた。これが伝奏屋敷となる。なお、伝奏屋敷に宿泊するのは、勅使(2名)・院使など朝廷からの使者一行で、同行する公家衆などの宿所は寺院などがあてられた。これら勅使一行が江戸滞在中、その接待の一切を担う役が「御馳走役」で、石高数万石の大名が「御馳走人」に任命されるようになる。

その御馳走人の悲劇として有名なのが、元禄14年(1701)御馳走役を命じられた赤穂藩主浅野内匠頭長矩である。その後も、安永3年(1774)には、小城藩主鍋島直愈が差控となり、同藩江戸家老が切腹するという事態が生じている。本稿では、御馳走人の任命状況などを述べた上で、この一件を紹介してみたい。

I 御馳走人の任命

まずは、徳川家治が10代将軍となった翌宝暦11年(1761)から安永8年(1779)までの御馳走人の任命を、『徳川実紀』から抽出すると下記のようなになる。

任命日	参向公卿	御馳走人
宝暦11.2.6	勅使	加藤佐渡守明熙(水口藩、2.5万石)
	三条前右大臣実頭	佐竹壱岐守義道(久保田新田藩、2万石)
12.2.4	勅使	池田内匠頭政香(岡山新田藩、2.5万石)
13.2.3	勅使	田村下総守村隆(一関藩、3万石)
	知恩院門跡尊峯	亀井能登守矩貞(津和野藩、4万石)
明和元.3.13	勅使	伊達伊豆守村賢(吉田藩、3万石)
	女院使	木下肥後守利忠(足守藩、2.5万石)
	准后使	織田山城守信旧(柏原藩、2万石)
2.2.4	勅使	(細川若狭守利寛 熊本新田藩、3.5万石)
		(分部隼人正光庸 大溝藩、2万石)
3.3.6	勅使	有馬遠江守允純(丸岡藩、5万石)
	女院使	久留島信濃守通祐(森藩、1.25万石)
	准后使	上杉駿河守勝承(米沢新田藩、1万石)
4.2.2	花山院前右大臣常雅	松平飛騨守澄延(鳥取新田藩、2.5万石)
	勅使	細川若狭守利寛(熊本新田藩、3.5万石)
4.2.2	円満院門跡祐常	岩城左京亮隆恭(亀田藩、2万石)
	勅使	伊達和泉守村賢(吉田藩、3万石)
5.3.4	東宮使	森和泉守忠洪(赤穂藩、2万石)
	勅使	木下左衛門佐俊胤(日出藩、2.5万石)
6.1.13	勅使	

7.1.13	勅使	松平修理亮延俊（鳥取新田藩、2.5万石）
8.7.18	勅使	黒田甲斐守長恵（秋月藩、5万石）
	院使	細川若狭守利致（熊本新田藩、3.5万石）
	女院使	伊達和泉守村賢（吉田藩、3万石）
	新女院使	松平近江守長員（広島新田藩、3万石）
安永元.2.2	勅使	秋田信濃守倩季（三春藩、5万石）
	仙洞使	島津淡路守久柄（佐土原藩、2.7万石）
2.8.7	勅使	伊東大和守祐福（飢肥藩、5.1万石）
	仙洞使	毛利大和守就馴（徳山藩、3万石）
	女院使	津軽越中守信寧（弘前藩、4.6万石）
3.2.2	勅使	藤堂左京亮高朶（久居藩、5.3万石）
	院使	池田信濃守政直（岡山新田藩、2.5万石）
	有栖川宮織仁親王	鍋島加賀守直愈（小城藩、7.32万石）
4.2.4	（勅使）	細川若狭守利致（熊本新田藩、3.5万石）
	（院使）	大村信濃守純鎮（大村藩、2.79万石）
5.8.4	勅使	稲葉能登守弘通（臼杵藩、5万石）
	院使	毛利和泉守高標（佐伯藩、2万石）
6.2.3	（勅使）	毛利甲斐守匡豊（府中藩、4.7万石）
	（院使）	毛利和泉守高標（佐伯藩、2万石）
7.2.3	（勅使）	津軽越中守信寧（弘前藩、4.6万石）
	（院使）	島津但馬守久柄（佐土原藩、2.7万石）
	二条大納言治孝	脇坂淡路守安親（竜野藩、5.1万石）
8.2.13	勅使	相馬因幡守恕胤（中村藩、6万石）
	院使	秋月山城守種茂（高鍋藩、2.7万石）
7.6	勅使	加藤遠江守泰候（大洲藩、6万石）
	院使	池田信濃守政直（岡山新田藩、2.5万石）

上記では、明和2年（1765）の勅使御馳走人を（ ）を付けて2大名としたが、これは、『徳川実紀』同年2月4日条の「日光山の御法会に参向する公卿。江戸に來りし時の館伴は細川若狭守利寛。日光山よりふたたび江戸にかへりし時の館伴は分部隼人正光庸に命ぜらる」との記載からの推測である。年頭勅使は、3月25日江戸に到着し、同月28日登城、29日に江戸城で饗応が行われた。この年4月、日光東照宮で徳川家康の150年忌法会が行われ、多くの公卿が参向するが、勅使は4月3日頃、江戸を發って日光に向かっている。『徳川実紀』では年頭勅使らを「公卿」と表記する場合もあるので、先の『徳川実紀』の「公卿」は、この勅使のことと理解した。これが正しいとすれば、この年は、勅使の滞在日数が長くなるため、勅使御馳走役を熊本新田藩主細川利寛と大溝藩主分部光庸で分担したことになる。

4月25日、日光山に参向していた鷹司右大臣輔平が江戸に到着し、同月27日には、青蓮院門跡尊真法親王、梶井門跡常仁法親王が、その翌日には勅使ほかの公卿らも到着した。同日、將軍家治は、日光山から帰府した高家以下に謁するが、このなかに「公卿館伴秋月山城守種茂。六郷兵庫頭政経。松平兵部少輔長喬」がおり、日光での御馳走人が3人

だったこともわかる。ただし、馳走の対象は勅使、鷹司輔平、青蓮院門跡、梶井門跡となるはずで、その担当までは不明である。

また、安永8年には2月と7月の2度、御馳走人が任命されているが、これは、任命後の2月24日、將軍世子の家基が急死し、勅使下向が延期されたためらしく、7月に任命し直され、人も替わった。年頭勅使の関東下向は3月頃が多いが、このように事情で遅延する場合もあった。安永2年の遅延も、將軍の娘万寿姫が2月20日に病死したためらしい。万寿姫は2月初めには「御不予」で、同月、御馳走人の任命もされていない。ちなみに、同年8月の任命では、津軽信寧が女院使の御馳走人となっているが、9月に勅使・院使とともに下向してきたのは女院使ではなく、女御入内の勅使と女御使であった。安永5年の遅延は、將軍の日光社参が行われたためである。

明和8年の遅延は朝廷側の事情による。前年11月、後桜町天皇が譲位（後桃園天皇受禪）し、即位日程が明和8年4月28日に決まると、年頭勅使が即位慶賀の勅使も兼ねることになったようである。新女院使は、天皇生母富子が皇太后になったことによるものであった（富子は立后後に院号宣下をうけ新女院と称された）。ただし、同年8月20日、將軍御台所の伏見宮顕子が没したことにより、勅使一行の下向はさらに延期され、江戸到着は10月13日であった。

次に、御馳走人に任命される大名をみてみよう。「柳営秘鑑」（国立公文書館蔵）によれば、御馳走人任命の規定は、勅使の御馳走人が4、5万石の大名、法皇使の御馳走人が2、3万石の大名となっており、五摂家・親王方参向の際の御馳走人は5万石位とある。これを上記に照らしてみると、勅使の御馳走人の方が院使・女院使の御馳走人より石高の多い大名が任命されているという点では守られているとも言えるが、勅使の御馳走人が3万石前後の大名であるケースも多く、なかなか規定通りにはいかなかったようである。

また、抽出した19年間に、3度任命された大名家が3家（岡山新田藩・吉田藩・熊本新田藩）、2度任命された大名家も3家（鳥取新田藩・佐土原藩・弘前藩）あり、1万石から5万石位の大名家は、10年前後に1度は巡ってくるものと覚悟しておく必要があったことを窺わせる。一方で、明和年間に3度勤めた吉田藩伊達家の例があるように、諸事情で任命のサイクルにはばらつきもあった。なお、佐伯藩毛利家は、安永6年、同7年と続けて任命されているが、安永6年の年頭勅使は院使を兼帯したため、毛利高標は任命されたものの、この年は勤めなかったとみられ、翌年再び任命されたものと考えられる。

さて、今回取り上げる小城藩鍋島家は、佐賀藩鍋島家の分家（支藩）だが、7万石を超える大名で、御馳走人任命対象の大名家のなかでは大藩と言える。しかし、任命された安永3年当時、藩主はまだ若く（数え年19歳）、財政は逼迫しており、この任命が本藩をも巻き込む大事となった。

II 入用費拝借願提出の背景

小城藩主鍋島直愈は、明和元年（1764）、父直員の致仕にともない、9歳で襲封し、同7年には、後桜町天皇の譲位にともなう院御所造営のための人夫差出を命じられて、これを勤めた。安永元年（1772）4月、襲封後初めて帰国の暇を得、次の江戸参府は翌年12月である。小城藩の財政難は前々からで、「鍋島加賀守殿御馳走御役付而之一通留書」（鍋島家文書、鍋159-5、佐賀県立図書館蔵、以後、基本的にはこの史料を使用する）に、江

戸参府の数ヶ月の遅れは「勝手向致而被差支」ため、「先年京都御手伝」を勤めたことで、参府を3ヶ月「御用捨」してもらい、さらに藩主の「御不快」で12月になったと記されている。

御馳走役任命の情報は、藩主の参府前に小城藩に届き、小城藩は本藩の佐賀藩に、幕府老中に御役を除いてもらえるよう働きかけてほしいと頼んだ。このため、佐賀藩の国元は江戸藩邸に連絡しているが、当時、やはり支藩の鹿島藩にも「御手伝」の情報があり、その免除の働きかけを依頼されていた江戸藩邸は難色を示している。安永3年1月20日、小城藩江戸家老野口文次郎は、佐賀藩江戸屋敷頭人の嬉野外記を訪ねて、再度頼んだ。同じく留守居の空閑惣右衛門・志波喜左衛門も小城藩聞番富岡惣八から同様の頼みを受けた。外記らは難色を示しながらも、若年寄水野出羽守忠友に事情を話し、老中松平右近将監武元らに口利きをしてもらえないかと考え、同月22日、喜左衛門が水野家家老土方縫殿助に接触する。しかし、その後、縫殿助から何の連絡もないまま2月を迎え、ついに2月2日、鍋島直愈は呼び出しをうけて登城、有栖川宮織仁親王の御馳走人を命じられてしまう。翌日、直愈は、外記ら3人を召し呼び（都合により参上したのは惣右衛門）、本藩の助力を依頼した。翌4日に参上した外記にも同様の依頼をしている。

当時、佐賀藩も財政難にあえいでいた。佐賀藩主の鍋島治茂は、明和7年に没した兄重茂の跡をうけて、26歳で襲封したが、安永元年2月末の江戸大火で類焼した江戸藩邸の「御屋形向」の普請が、2年後の安永3年にはいつてようやく目途が立つという状態だったのである。家臣への役米支給もできなくなっていた。ただ、本藩の助力が必要なこともわかっていたので、まずはどれほどの費用がかかるのかを把握しようとする。小城藩は、先代直員が当主であった寛延元年（1748）に、大乘院門跡隆遍の御馳走人を勤めた経験があったが、当時の留書は安永元年の大火で焼失したのか詳細が知れなかった。この時点で得ていた情報は、吉田藩伊達家が、「先年」「勅使御馳走」を勤めた際、5000両余りの入用のうち1000両程が幕府からの下行だったということであった。先にも記したように、伊達家は明和元年と同5年に勅使の御馳走人、同8年に女院使の御馳走人を勤めている。このうちのどの時期のものかは不明だが、史料中に「勅使御馳走」とあるので、明和元年か5年、おそらく明和5年の例ではないかと思われる。外記は、2月4日、町飛脚を使って国元に仕送りを願い、大坂には急ぎ1000両程の仕送りを申し入れた。

有栖川宮の京都出立が2月18日との知らせを受けた小城藩は、藩主以下、このままでは幕府にお断りを申し上げるしかないと思い詰め、これを聞いた佐賀藩江戸留守居らは、そのような届けを出されては、本藩である佐賀藩にも難儀が及ぶとしてとどめている。そして金主を呼んで「調儀」を依頼するが、借金が滞っていたため断られ、11日、国元と大坂に一刻も早い仕送りを願った。このころ、飢肥藩伊東家が伏見宮御馳走のおり、総入費6400両余りのうち、幕府から2000両余りと米40石の補助を受けていたことを知る。ただ、小城藩は、飢肥藩の先代藩主伊東祐隆が御馳走人を勤めたのは宝暦6年（1756）のことで、当時とは諸色値段も異なり、今回はその金額では収まらないと考えて、総入費を9000両余りと見積もった。

2月12日、文次郎が、銀方役の相原文左衛門、鹿島藩家老久布白政太郎、蓮池藩家来中沢太左衛門を同道して外記を訪れ、金策が立たないことからやはり幕府に届け出るしかないと話した。外記はそれを押しとどめ、諸道具を質に入れてでも金策すべきと説得する。

13日には、一族の旗本鍋島帶刀直益も心配して外記を呼び、話し合った。18日、国元からの指示はまだだったが、外記は1000両を小城藩に助力することに決し、手覚書を作成した。一方で、金策ができなかった場合の幕府への届け出は本藩である佐賀藩から行ってほしいという小城藩の意向に対しては、佐賀藩主が在国中であることや、御役を命じられた小城藩から届け出るのが道理であるとしてこれを拒み、かつ、そのような届けをすれば、どのような咎をうけるかわからず、是非にも勤めるよう繰り返した。

2月19日、直愈は再び外記ら3人を召し呼び（参上したのは惣右衛門）、本藩からの援助が1000両以上望めない上は、幕府に拝借を願い出るより仕方ないと伝えた。そして、その願いを本藩から行ってもらえるのか、もし無理ならば小城藩から願い出るほかないと述べた。直愈も、そのような願いを出せば、咎を覚悟しなくてはならないとわかっていたが、大切な御役をうけて勤められないのにそのままにしておくことは、「上を軽」じることと考えた。ただ、いきなり「不軽願書」を差し出しては余りに粗忽なので、佐賀藩から親しい老中へ内々に伝えてもらってから差し出したいと依頼したのである。しかし、外記は、翌20日、文次郎を呼んでこれを拒み、なんとしても勤めるよう述べ、かつ、「御一類」にも相談のうえ取り計らいを決すると伝え、21日、国元にもこれを知らせた。そして24日、先に約束した1000両のうち、ようやく工面した500両を小城藩銀方役に渡す。

2月25日、小城藩は「御一類」の勝山藩主三浦志摩守矩次と旗本鍋島帶刀直益を招いて評議（外記は体調不良で欠席）し、拝借願いを提出することに決定、これを同日夜外記に伝えた。ここに至って、外記も仕方なく承知し、翌26日、喜左衛門が老中松平武元の用人佐々木丑蔵に面談し、事情を打ち明けて拝借願書提出を説明した。丑蔵からは武元への取次を断られたが、喜左衛門は、つづいて老中松平右京大夫輝高・田沼主殿頭意次郎にも出向き、用人に説明をしている。また惣右衛門は、若年寄水野忠友の家老土方と面談した。同日、直愈は取次役の御先手組長谷川太郎兵衛を同道して、当番老中板倉佐渡守勝清に拝借願書（見積額9250両程のうち拝借高7000両）を提出したが、板倉はこれを差し返した。そして、同日昼、直愈に対し、長谷川を通じて厳しく注意（威しに近かった）し、御役を引き受けるようにと申し渡した。

窮地に陥った小城藩は、家老野口文次郎が外記を訪ねて、明朝までに2400両程が調達できなければ再願もやむなしと泣きつき、蓮池・鹿島両藩にも金策を求めた。水野忠友も心配して佐賀藩に様子を尋ねてきている。また、この一件が無事に済むよう、同日から5日間、護摩堂での祈祷も行われることになった。翌27日朝、金子調達を依頼していた金主の糸屋金右衛門・松屋十兵衛の働きにより、大坂からの仕送り金1500両がようやく調い、うち1000両を今日中に納め、500両を明日納めるとの報告をうけた外記は、文次郎を呼び寄せた。文次郎は鹿島藩家老久布白政太郎を同道し、小城藩で200両、鹿島藩で500両調達したことを伝えた。これにより先の500両をあわせると、27日段階で2200両が工面できた。文次郎は、さらに晦日までに1000両、節句前に2000両が必要で、佐賀藩にその調達を願った。その上で直愈は、28日、長谷川を通じて当番老中板倉に御役引き受けを申し入れた。また、このとき差控伺書の提出について内慮を伺い、提出するようにとの指図をうけて、同日提出している。これに対し、板倉は御役前なのでその儀には及ばないが、御用が済んだ上で申し聞かすと達した。一方、佐賀藩主ら

の差控伺いの提出については、松平武元らに内慮を伺った上で、29日、在国中の佐賀藩主鍋島治茂（30歳）と先々代藩主宗教（57歳）の差控伺書を、鍋島直益の名で提出している。

こうして、小城藩は今後の金策の目途が立たない（佐賀藩に全面的に依存した）まま御馳走人を引き受け、処分は御役終了後となったのである。

Ⅲ 金策の状況と御用後の処分

小城藩は、2月晦日までに必要であった1000両はなんとか工面したようだが、次の2000両の目途は立てられなかった。有栖川宮が江戸（宿所は青松寺）に到着した3月4日、文次郎は入用金を日割りにした書付を外記に手渡している。これによれば、4日700両・外に500両自分入方、5日300両・外に200両自分入方、8日800両・外に200両自分入方、10日700両・外に600両自分入方となっている。

4日、外記は700両のうち用意のできた300両を昼に小城藩に渡し、残り400両は再び糸屋・松屋に無理を言って調達させた。有栖川宮が登城して、将軍との対顔を無事すませた5日、外記は300両の工面のため、奥向きの御手許金拝借を願い出、「御前様」から50両、多根姫様から50両、元柳・元達から100両を得、さらに志波喜左衛門・佐々木十郎兵衛が100両、元々方が100両工面して、夜半過ぎにようやく400両を集めた。蓮池藩も50両を用立て、この日はとりあえず、佐賀藩から100両、蓮池藩から50両が小城藩に渡された。

6日暮れ、文次郎らが外記を訪れ、小城藩では、御膳所請負方に渡すべき金子（4日の分500両・5日の分200両）が滞っており、明日中に1000両渡さなければならぬと訴えた。外記はこれより以前の3日頃から、縁戚大名の宇和島藩主伊達村侯（佐賀藩主鍋島治茂の姉婿）に一時的な借用（取替金）の相談をはじめており、8日に1000両を借りることができ、即日小城藩に渡した。また、仙台藩にも借用話を進めていたが、10日に、小城藩邸で600両、同藩国元から350両が届いたことなどで、仙台藩からの借用は行わずに済んでいる。

しかし、有栖川宮の江戸出立を翌日に控えた12日夕方、御膳所請負に渡す金子がないとの文次郎からの手紙をうけた外記はとりあえず100両を渡している。佐賀藩の金策はまだ続いたのである。その夜には、麻布御蔵の道具を質入れするなどして200両工面し、小城藩銀方役高木兵蔵に、井上三太夫から渡している。その後、今度は鹿島藩家老久布白政太郎がやってきて、「御膳方も渡方府仕候得者、今晚御夜食も難差上由申聞、其外人足方・荷包方騒立、何分手ニ及不申由」を述べたため、外記らは相談の上、さらに200両を渡し、なんとか凌ぐよう伝えた。夜明けに政太郎から留守居兩人に届いた手紙によると、小城藩国元からも銀10貫目が届き、これと合わせて支払いが済んだとのことであった。こうして翌日、小城藩は有栖川宮出立を無事見送り、御役を果たしたのであった。

このように、小城藩の御馳走役は、本藩佐賀藩の多大の援助（4100両）でなんとか勤めたが、御用後に待っていたのは幕府からの処分である。3月14日、佐賀藩は老中松平武元に差控伺書提出に関して4点の内慮を伺った。まず、小城藩主鍋島直愈の差控伺は、今14日に長谷川太郎兵衛を通じて当番老中に提出するが、佐賀藩主鍋島治茂と隠居の宗教の差控伺は今日・明日のどちらがよいか、また板倉勝清に提出するべきかで、武元の返

答は、今日板倉に差し出して指図次第、当番老中に差し出すようにであった。次は、蓮池藩主鍋島直温（常丸、12歳）・鹿島藩主鍋島直宜（守三郎、13歳）・小城藩隠居鍋島直員（49歳）の差控伺いについてで、武元は3人は一紙にまとめて佐賀藩より伺うのがよいとしている。3点目は、円諦院（先代藩主重茂の後室、田安宗武の娘淑姫）のことで、治茂が差控になった際、大奥に届けるはずだが、表向き御届はどうすべきかを尋ね、武元は、表向きへは差控の達しがあつてから届けるようにとした。4点目は、治茂・宗教の差控伺書を鍋島直益から差し出しても問題ないかというもので、返事は問題ないであった。

この内慮にしたがい、差控伺書を提出した。同月16日、直愈のもとに老中連名の剪紙が届き、当番老中松平輝高邸に呼び出されたが、直愈は病気だったため名代が出席し、老中・大目付・目付出席のもと、拝借金を願ったことの対して「都而御用被 仰付候儀者、不依何事平常覚悟可有之儀不束成事ニ思召候」として差控を命じられた。一方、同日夕方に治茂宛に示された書付には「肥前守本家之儀ニ候得者、右躰之儀無之様心附家来江も可申付置儀不行届事候、併在邑之儀候得者、留守家来共取計方未熟成事候、此段可申聞旨御沙汰候」とあり、藩主らへの処分は明確でなかった。このため、内々に問い合わせ、17日、再度5人の差控伺書を差し出した（差出名はこのときも鍋島直益）。その結果、在府中であった鹿島藩主鍋島直宜については、付札で差し控えには及ばず、御目見遠慮の格を申し渡されたが、治茂ら在国の4人については、正式な申し渡しがなかった。

差控伺書提出から佐賀藩らは「御慎」の状態を続けていたが、4月11日、江戸藩邸に国元から、治茂名での差控伺書を提出すること、幕府からの書付に家来未熟の件が記されているため、別途承知の届書を用意すること、また、これにより江戸詰の家来を差し替えざるを得ず、屋敷頭人嬉野外記、留守居空閑惣右衛門・志波喜左衛門を除き、江副九大夫と多々良奎之允を留守居とすることなどの指示が届いた。これをうけて、江戸藩邸では直益らに相談の上、伺書と届書を作成（4月1日付）して、当番老中松平武元に提出した。

14日、武元から呼び出しがあり、治茂の名代として鍋島直益が武元邸に出向き、そこで、治茂以下への御目見遠慮の格を申し渡された。直愈への差控の処分なども含めて、これらが見免されるのは5月17日である。

幕府の処分はこういう形で終了するが、佐賀藩による佐賀・小城両藩の家臣の処分は、その後行われた。すなわち、佐賀藩の嬉野外記が牢人、空閑惣右衛門・志波喜左衛門が隠居牢人を命じられ、小城藩江戸家老の野口文次郎が切腹（10月27日、佐賀で執行）、富岡惣八と相原文左衛門が牢人にされたのである。

おわりに

御馳走入の入用費の莫大さをみれば、安永3年のような悲劇は、藩財政の厳しい大名家ならば、いつ、どの家でも起こりうる危険を内包していた。先の御馳走入の顔ぶれを見ると支藩も多く、おそらくは小城藩同様、本藩らの援助をうけて公役を勤めていたのであろうことは、容易に想像される。ただ、今回の場合は、本藩の佐賀藩もまた財政難で、藩主が在国中でもあり、十分な援助を約束できなかったことが、小城藩を追いつめたと考えられる。

一方、儀式典礼が重視されるようになるにつれて、御馳走入の気遣いは過剰にならざるを得ず、その接待費も嵩んでいくという悪循環に、当時は陥っていたのではなかろうか。

山谷海河の銘物厚味、朝夕の御饗応、公家衆の御膳下ると否、御馳走人の御大名方御自身膳具を御改被成、禁好物を尋求探り、伺書記させ給ひ、城主の御身にて、公家方小禄の青侍共に、御言葉迄譲り給ひ、昼夜の機嫌、起居の様体、飲食沐浴等の節程等心を尽して御饗応有御事共、実に天下の余光也 (『光台一覽』)

平井誠二氏の研究によれば、勅使1人の随員が60～80名程ということなので、親王家の随員も同程度か、それより若干少ないとしてもやはり大人数である。これら一行の滞府中の一切を担うのは容易なことではなかった。幕府にもそうした諸大名の悲鳴が届いたのか、こののち安永9年8月、御馳走役の経費節減を命じた。

公卿参向の館伴奉りし輩。近頃虚費多きに苦しむよし聞ゆれば。今より後。館伴の家人等下が下まで。ただ無礼のふるまひせざるやうよくつつしみ。妨る事なからんには。もはら省略して虚費あるべからず。されば公卿の滞府の間は。勘定方の吏をして監視せしむべければ。館伴の家人等。旅館を看守するものにはかりて。よく事を弁ずべし。此事かねて京にも聞えをくべしとなり。 (『徳川実紀』)

さらに、寛政3年(1791)1月、御馳走御賄向仕法の改正を行った。これにより、御馳走人の職務は、担当する勅使らの登城外出時の警護、殿中での掛け引き、御三家や上使等との応対となり、賄向きは代官が行い、雑掌用人などの応対は勘定方が引き受けることに変更される。

参考文献

- 平井誠二「江戸時代における年頭勅使の関東下向」(『大倉山論集』23輯、1988年)
佐賀県立図書館『佐賀県近世史料 第1編第6巻 泰國院様御年譜地取Ⅱ』(1998年)

対馬藩田代領における「禁足」

齋藤 悦正

はじめに

本稿は、対馬藩の飛地である肥前国田代領の支配において、刑罰的な処置として行われていた「禁足」の事例を取り上げ、「禁足」のもつ意味を考えるものである。

一 田代領について

対馬藩^{たじろ}田代領は、肥前国に所在した対馬藩の領地で、肥前国^{きい}基肄郡全域と養父郡^{やぶ}東半分の約 13400 石余の地を指す。慶長 4 年（1599）から対馬島主宗氏の飛地となり、明治維新まで支配が続いた。その間慶長 10 年（1605）には、養父郡に 2800 石余が加増され、正徳元年（1711）には園部村も領地となった。対馬藩は、このうち^{きい}基肄^{やぶ}養父の中核的場所である^{たじろ}田代に代官所を置いて、対馬から代官を派遣し支配を行わせた。なお、田代代官所の管轄範囲は、文化 14 年（1817）に肥前国松浦郡浜崎地方と筑前国怡土郡内の 15800 石余の地も加わった。

二 田代領の禁足

田代領における対馬藩の支配は、前述のように田代代官所が行っていた。田代領の領内支配の状況や領民の実情については、『日記抜書』⁽¹⁾、『佐藤恒右衛門毎日記』⁽²⁾、『続佐藤恒右衛門毎日記』⁽³⁾などが刊行されており、それらの史料からも領内の動きについてみることができる。

『日記抜書』は、対馬藩の代官所毎日記から抜粋・編纂されたもので、欠年があるが延宝 4 年（1676）から寛政 3 年（1791）までの 110 余年間に及ぶ田代代官所の記録である⁽⁴⁾。また『佐藤恒右衛門毎日記』は、幕末期の田代代官所で副代官を務めた佐藤恒右衛門の記録である。恒右衛門は、馬廻 70 石で、嘉永 7 年（1854）に対馬本藩から田代代官所表役として派遣され、着任以来毎日記を記録したという⁽⁵⁾。領内の事件や犯罪、争論などについてはこれらの記録から窺うことができるが、それらの中で注目したいのは、田代領で行われていた処罰のあり方である。『佐賀県史』では、代官所管内の刑罰について言及しており、死罪から流罪、科代夫や永代奴などの処罰や、庄屋などの役儀取り上げなどを事例を列挙しながら紹介している⁽⁶⁾。主にこれらの事例は重度の犯罪に属するものが紹介されているが、代官所の対処には、これよりも軽度なものでより広汎にみられた「禁足」という対処が多く認められる。

以下では、この「禁足」に注目し、案件の内容や処罰・処置の方法などを史料のなかから抽出し、検討を加えてみたい。「禁足」は事例としても多く、さまざまな案件に関わってみられるため、この内実を明らかにすることは、領内支配の事情や領民の実態を考える上で有効と考えられる。ひいては対馬藩の法制や支配の実態を明らかにすることにもなる。今回は、これらを検討していく上での基礎作業として「禁足」の事例を集積し、そのなかから性格分析を行うことにする。

三 「禁足」事例の検討

後半に掲げた表は、田代領内の「禁足」の事例を抽出したものである。『日記抜書』（表では「A-頁数」で表記）と『佐藤恒右衛門毎日記』（「B-頁数」で表記）を典拠とし、その経緯や内容を簡単にまとめたものである。以下では、各事例のなかからみられる「禁足」の諸側面についてみていくことにする。

①「禁足」の目的と期間

まず、「禁足」の目的はどのようなことなのであろうか。また「禁足」の間はどのようにしていることが求められたのか。史料上明確な記述は稀少であるが、「依之禁足申付候条、相慎可罷在候」（A-3）とあることで、「慎」むべき期間という認識があったようである。しかし、「養父郡大庄屋新右衛門、園部村庄屋仁左衛門、高田村庄屋佐吉、右は頃来遂再問候品ニ付、申出候筋不届千万之至りニ候、依之差控申付候、急度相慎在候」（A-240）とあったり、田代領で発生した信仰をめぐる事件、新後生一件に関して「昌元寺已下十九ヶ寺、担家之内宗旨心得違之者有之不行届ニ付、差控申付」（B-152）とあるように、謹慎の意味をもつ処置としては「差控」も存在していた。したがって、「禁足」のみが謹慎の意味をもつ処分ではないことになる。「禁足」は「差控」と峻別された別個の対処である。

No.42 の事例のように、「此申渡（筆者注：禁足を差し免す旨の申し渡し）、禁足之日数五日過相達候様、両郡出役門司金十郎へ可申遣旨、手代中え相渡」とあり、「禁足」日数が5日となるように期間を確保した上で対処している例もある（B-146）。後にみるように、取調べのための当座の「禁足」については、期間が定まったものとはならないであろうが、一定の期間を見計らった上で「禁足」が解除されている点からは、「禁足」期間自体が処罰的意味を有していたと考えることができる。また、No.2 のように、「禁足」が命じられて、さらに嚴重な申し渡しがあるべき所を、「用捨をもって沙汰に及ばず」とされている事例もみられる。「禁足」は次にもみられるように、それ自体で懲戒的な意義を持っていた。

②処罰としての「禁足」

「禁足」に処罰の意味があったことを示しているのが、No.5,13,22,23,41,47,53,62,75,76,88,90,91,95,106 などの諸事例である。それぞれは、罪状とともに「禁足」を命じる旨が記されていることから、処罰としての「禁足」といえるものである。

例えば No.5 からは、手錠などの刑とならんで「禁足」が処罰の一つとして位置付けられていることが示されている。

③当座の処置としての禁足

代官所では、当人が何らかの罪を犯した際に、取調べを行うにあたって「禁足」を命じている場合もみられる。No.4 や 21 No.30 などにみられる事例で、「先禁足申付置」などと記されている、いわば当座の処置として登場する例である。No.30 ～ 39 は、新後生の一件に関するものであるが、吟味や裁許までの間の対処として「禁足」を命じている。つまり、「禁足」は最終的な裁許や処罰までの間の過渡的な処置（期間）として位置づけられるのである。したがって、この意味での「禁足」は正式な処罰の申し渡しをもって終了することとなる。このようなあり方は、No.12,14,15,18,20,24 ～ 29 など事例は多く、「禁足」の後これを差し免す代わりとして、札の辻での晒し刑や科代夫、過料銭、役儀の取り上げなどの各処罰が言い渡されている。

④当人家族の「禁足」

家内の者が、当人と共に取調べを受ける間の処置や罰として「禁足」が登場する。

No.11 は、流罪となった者が元村に滞在したことで当人が入牢となり、家内の者も「禁足」を命じられたというものである。No.6 は、祭礼時に親が酔狂の上、喧嘩を仕掛けて自身が死亡したという事件に関して息子に「禁足」が命じられた例である。No.7 も同様の事件で、喧嘩にかかわったもう一方の当事者が入牢となり、その家内の者も「禁足」となっている。この事例では、「格別之宥恕」によって双方の家内の「禁足」が赦されている。そのような処置なしには「禁足」がその後も継続していたということであろうか。これらの事例は、当人と同様に家族の者に対しても処罰が及ぶ、連座としての意味をもつ「禁足」といえよう。

⑤火事による「禁足」

火災を起こした場合の火元人の「禁足」事例も散見される。火元人が役人の取調べを受け、火災発生が付け火でなく過失であることがわかると、「禁足」を命じられている。

「禁足」期間は事例により区々である。No.74 は 5 日間、No.56 は 8 日、No.69 は 10 日程度である。中でも No.54 では、7 日間を「禁足」の必要期間として明示しており興味深い。これらの日数の長短は、火災の規模に起因する可能性が高い。No.107 は、7 軒を類焼する火災であり、比較的規模の大きな火事であった。この事例では、「禁足」の始期が明確でないものの、火災直後から起算すると 10 日に及ぶ期間あったこととなる。これらから考えると、7 日程度を基準として、火災の程度にあわせて期間が設定されているようであるが、火災発生日から数えて 5 日から 10 日程度の期間が通例のようである。また、これらの期間を経て、「禁足」が赦される場合には、「叱り」を受けて「禁足」が解かれる例が多い。No.83 は自宅のみの焼失の場合で「禁足」のみで用捨となっているようであり、史料上ではそれ以上の記述がないが、No.84 では「禁足」後「叱り」を伴って免じられている。No.74 も 5 日間の「禁足」後「叱り」の上で赦されており、No.104,105 では 8 日間の「禁足」の上で「叱り」があつて赦されている。No.72 の記述では、「尤喜介義、火を誤候付、禁足被仰付度旨申出候付、先例之通被心得候様ニと相達」(B-313)とあり、火災時に過失によって火元となった本人の「禁足」は「先例」として実施されていることもうかがえる。

これらの事例は、火元人が、菩提寺をはじめとする村・地域の寺院に入寺し、謹慎することで領主法にもとづく刑罰を代替するものとして扱われる事例と似た意味を持っていたようである⁽⁷⁾。田代領では、管見の限り火事入寺の事例をみることはできないが、火元人の入寺に相当すると考えられる火元人「禁足」が通例の方法として採用されていたようである。

おわりに

以上、田代領の「禁足」に注目してその扱われ方についてみてきたが、処罰の申し渡しまでの当座の処置、火事の際の火元人の処置、当人家族の縁座など、いくつかの性格をもった処置であることが判明した。また、「禁足」の期間も意識されており、「禁足」のもつ時間の経過やそのあり方自体にも刑罰としての要素があつたようである。

今回の事例は、多く幕末期に集中しており、これらの諸性格の歴史的な推移などについては不明とせざるを得ない。当地域における「禁足」の位置や支配のあり方を考えていく

には、さらにこれ以外の事例を広く集めていくことが必要である。冒頭で掲げた諸課題を含め、今後の課題としたい。

注)

- (1) 鳥栖市誌資料編第一集、1969 年。
- (2) 鳥栖市誌資料編第五集、2003 年。
- (3) 鳥栖市誌資料編第六集、2005 年。
- (4) 『日記抜書』解題。
- (5) 『佐藤恒右衛門毎日記』解題、長忠生氏執筆。
- (6) 『佐賀県史』中巻、1968 年。
- (7) 拙稿「近世新田村における村落寺院」（早稲田大学史学会『史観』141、1999 年）、佐藤孝之『駆込寺と村社会』（吉川弘文館、2006 年）など。

対馬藩田代領の「禁足」事例

No.	年	西暦	月	日	記 事	史料ページ
1	明和6年	1769	9	27	酒井西村庄屋弥三兵衛・酒井東村庄屋四郎兵衛、勤め方不直の聞こえあり、禁足を申しつけ、大庄屋に内々で尋ねたところ、両村散史給不足米があったとして、弥三兵衛を牛原村へ・四郎兵衛を柚比村へそれぞれ流罪とする。	A- 189
2	明和6年	1769	9	27	下郷大庄屋治兵衛、酒井両村について庄屋・頭百姓と断じ、去辰年の不足米について不埒の筋あり、庄屋・頭百姓に禁足を申しつける。嚴重の申しつけあるべき所、用捨をもって沙汰に及ばず。	A- 190
3	安永8年	1779	6	26	下郷大庄屋治兵衛、養父郡余分の石高を賣立てしたことについて、不埒の至りとして、禁足を申しつけるので、慎んでいること。	A- 209
4	安永9年	1780	8	3	河内村介右衛門、同村権四郎、同村徳平、貝方儀平次、河内村の見方山添川原山草山の所を焼いたことが穿鑿により判明し、まず禁足を申し付け置く。	A- 209
5	安永9年	1780	12	9	田代町四郎右衛門・幸蔵・甚蔵、手錠申付、同村重左衛門、幸右衛門、源作禁足。瓜生野町善右衛門、縄下。同喜平次手錠、嘉平次禁足。宿村文五郎、禁足。今町徳平、手錠。團部上村三介、禁足。合人白坂町亦太郎、21日親源左衛門が酔狂により、治三次・武介と争論となり、打擲にあい、その傷で死亡した件について、源左衛門の不埒により喧嘩が発生したとして、22日に家内の亦太郎に禁足が命じられた。23日に格別の宥恕で禁足を差し免じた。	A- 209
6	天明4年	1784	11	23	治三次・武介は入牢を命じられ、家内の者は禁足を申しつけられたが、格別の宥恕で家内の者の禁足は差し免じた。	A- 242
7	天明4年	1784	11	23	幾右衛門倅太助、太平次、自宅で源左衛門と治三次らの喧嘩がおこったため、同様とされたが、宥恕にて禁足を差し免じた。	A- 242
8	天明4年	1784	11	23	同町組頭吉兵衛、幾右衛門宅で源左衛門と同様、格別の宥恕で禁足差し免ず。かわりに科代夫10人を命ず。	A- 242
9	天明4年	1784	11	23	幾右衛門、自宅で喧嘩となり、同様とされたが、宥恕にて禁足を差し免じ、科代夫とし15人を命ず。	A- 242
10	天明4年	1784	11	23	幾右衛門、自宅で喧嘩となり、同様とされたが、宥恕にて禁足を差し免じ、科代夫とし15人を命ず。	A- 242
11	天明5年	1785	1	晦	重田村久内不行跡により、宝暦13年捕らえられ、安永6年に御慈悲により帰郷し、重田村(?)に流罪とされた。しかし元村に立ち戻り、数日滞在した廉で去秋入牢となる。家内の者は禁足を命じられたが、今回当	A- 249
12	天明7年	1787	11	5	田代町忠兵衛、女房が太七と密通につき、太七を小刀で刺し、女房も小刀で刺す。近所の者が押し留め、忠兵衛が白状したので、禁足を命じた。太七は後日死亡。取調べの上、妻敵に相違ないので構い無しとすべきだが、女房の密通を許して安閑としてそのまま放置したことは、男子の氣象を失い途方もない次第であり、私に人命を害したこと重々不届きであるので、衆人見懲らしとして三か年切奴に処す。	A- 274
13	天明8年	1788	5	27	油ノ日雇賃銀、御法にもかかわらず、主人主人で法に背き不埒の段につき、油屋中一統閉店を申し付け、油ノ共は、申し合わせに内意し徒党を企て、御法を破った廉により、禁足を命じる。	A- 280
14	寛政3年	1791	2	1	鬪鶏流行を禁じていたところ、瓜生野町甚右衛門、長吉、大鶏を飼っていることが発覚、去月27日禁足を命じ、本日甚右衛門に科銀2貫文、長吉に1貫文を命ず。	A- 313
15	寛政3年	1791	7	4	宮浦東村宇右衛門、他領よりの往還荷物押取の証文を取り、銀米を借入れについて不届きにつき、禁足を命じたが、宥恕をもって禁足差し免じ、科銀4貫文を命ず。以来同様の聞こえあれば曲事とする。	A- 333
16	嘉永7年	1854	6	18	町役4人、配膳方4人、去る16日に禁足を命じたところ、この日書付にて叱り禁足を差し免す。	B- 30
17	嘉永7年	1854	6	20	夜安楽寺村辰右衛門居宅出火、焼失。辰右衛門は明日21日禁足を申付ける。	B- 31
18	嘉永7年	1854	7	12	瓜生野町六十人格橋本惣左衛門、頃日下駄を付け不礼につき、禁足申付けたところ、町役格を取り上げ、禁足を差し免す。	B- 44
19	嘉永7年	1854	7	12	上町佐平の女房、両役に不礼あり、佐平の平素の示し方の故につき禁足を命じるが、別条なく差し免す。女房は30日外出を差し留める。	B- 44
20	嘉永7年	1854	7	12	瓜生野町恒八、捨て子したことが発覚し、不埒者につき、札の辻で2日晒しを命じ禁足を差し免す。	B- 44

21	嘉永7年	1854	閏7	2	神辺村庄屋清九郎勤め向き不埒の筋につき、まず禁足を命じる(御用の割石取り遣い一件につき)。庄屋は萱方村庄屋田中惣左衛門に兼ね	B- 51
22	嘉永7年	1854	閏7	2	神辺村国泰寺組頭岡本六平次、同組合九平以下12人の者、不埒筋につき、禁足を命じる。	B- 51
23	嘉永7年	1854	10	6	長野村組頭孫左衛門、不心得あるにより、禁足を命じる。	B- 87
24	嘉永7年	1854	10	12	長野村庄屋梁井富次郎、同村伊兵衛野積みの稲紛失一件について、村方入り組み庄屋の身分取締方大様等閑につき禁足を命じたところ、叱りの上禁足を差し免す。	B- 91
25	嘉永7年	1854	10	12	長野村組頭伊平、作り田の稲紛失のところ、倅儀左衛門が村方と話し、証拠もなく占いにより居村の勘兵衛を盗人に差しあて、村を混乱させた。このことを大様等閑に過ごし不埒であるとし、禁足を命じたところ、この日組頭を取り上げ、禁足を差し免す。	B- 91
26	嘉永7年	1854	10	12	同村儀左衛門、墨色占等で居村勘兵衛を稲紛失の盗人として、勘兵衛から稲を受取り、その上村中寄合の時食用として米1俵を我が儘に取り、さらにこの一件について伝右衛門と惣左衛門を無体打撃したこと、不埒につき、禁足を命じたところ、この日米を勘兵衛に返却することと、科代3貫文を命じたことにより禁足を差し免す。	B- 91
27	嘉永7年	1854	10	12	同村組頭孫左衛門、儀左衛門と同様勘兵衛を稲紛失の盗人とし、諸雑用として染藍2俵、粃190斤を同人から受取り、その上村方立ち退きを言い渡したところ、組頭として不埒につき、禁足を命じたところ、組頭を取り上げ、科銭2貫文を命じたことにより禁足を差し免す。	B- 91
28	嘉永7年	1854	10	12	長野村勘兵衛、稲紛失につき察当を受けるが、平素の人柄宜しからず、不束の申し分もあり禁足を命じたところ、叱りの上禁足を差し免す。	B- 91
29	嘉永7年	1854	10	12	長野村勘兵衛弟惣左衛門、兄が察当を受けたところ、兼ねて差し留めていた法華宗信仰の法によって祈禱を行い、占いを頼み、村方を混雑させた事不埒として禁足を命じたところ、科銭1貫500文を命じ、禁足	B- 91
30	嘉永7年	1854	10	21	城戸村六十人格酒井忠兵衛、宗旨の心得違いの者との噂により、吟味の所相違なく、まず禁足を命じる。ただし、六十人格取り上げの伺いも出役からあるも、拷問することもなく、格については追って裁許するとして、先ず禁足だけを命じる。	B- 96
31	嘉永7年	1854	10	25	河内村庄屋村山郡吉、家内宗旨心得違いにより、まず禁足を命じる。	B- 99
32	嘉永7年	1854	10	26	御門番卯八・直右衛門・小人新平・使番定雇陣五郎、法義一件につき聞き込みのすじあり、禁足を命じる。	B- 99
33	嘉永7年	1854	10	27	曾根崎村庄屋平八、家内宗旨心得違いにより、まず禁足を命じる。	B- 100
34	嘉永7年	1854	10	28	今泉村医師英伯、宗旨心得違いにより、まず禁足を命じる。	B- 100
35	嘉永7年	1854	10	28	瓜生野村役格要七・吉竹与六、家内宗旨心得違いにより、まず禁足を命じる。	B- 100
36	嘉永7年	1854	10	29	田代町役格平田喜七、家内宗旨心得違いにより、まず禁足を命じる。	B- 100
37	嘉永7年	1854	11	8	今町乙名古村権左衛門・瓜生野町役格吉竹宇七、家内宗旨心得違いにより、禁足を命じる。	B- 103
38	嘉永7年	1854	11	10	園部上村常行寺、坊守宗旨心得違いのにより、先ず禁足を命ずる。	B- 104
39	嘉永7年	1854	12	19	宮浦西村茂八を打ち殺した長野村のうち久保田19人のうち、13人は出牢の上、先ず禁足を命じる。	B- 122
40	嘉永7年	1854	12	28	小倉村武八、自宅出火、類焼なし、自火に相違なし。禁足を命じる。	B- 126
41	安政2年	1855	3	16	松浦郡大村組大庄屋五反田村庄屋兼常吉藤右衛門、村方不取締につき、禁足を命じる。	B- 146
42	安政2年	1855	3	16	常吉藤右衛門、大庄屋五反田村庄屋共差し除、禁足差し免す。この申渡しは、禁足の日数が5日過ぎて達するよう、両郡出役門司金十郎へ申し遣わすよう、手代中に達す。	B- 146
43	安政2年	1855	3	25	河内村庄屋村山郡吉・曾根崎村庄屋森平八両人母宗旨心得違い、兼々家内示し方大様につき庄屋役差し除き、禁足を差し免す。	B- 152
44	安政2年	1855	3	25	小人新平、親新左衛門宗旨心得違い、家内示し方大様につき、小人勤め差し除き、禁足差し免す。	B- 152
45	安政2年	1855	3	25	田代町三代町役格苗字御免平田喜七・庄屋席古村権左衛門・木山口三代庄屋格苗字御免天本久吉・瓜生野町一生町役格用七・与七・吉竹宇七、家内の者宗旨心得違い、家内示し方大様につき、いずれも礼席を取り上げ、禁足を差し免す。	B- 152

46	安政2年	1855	4	1	真木村八坂甚兵衛、頃日旅女給仕に雇い入れ、居宅改築普請向き身分不相応に暮らしているとのことにより、禁足を命じたが、用捨し、目付を差し除き、科銭200貫文を命じ禁足を差し免す。	B- 155
47	安政2年	1855	4	15	怡土郡・松浦郡で我が儘に預かり札の取引をした者21人に禁足を命じ	B- 161
48	安政2年	1855	5	1	原村五右衛門女房・久介女房、いずれも髪さしに紛らわしい品を用い、不心得につき禁足を命じる。4日禁足差し免し、叱りを申し付ける。	B- 172
49	安政2年	1855	5	1	曾根崎村組頭忠右衛門・原村同喜右衛門・飯田村同甚右衛門・忠右衛門、組子示し方不屈きにつき、禁足を命じる。4日禁足差し免し、叱りを申し付ける。	B- 172
50	安政2年	1855	5	1	原村庄屋古賀善兵衛・飯田村々古賀忠四郎・曾根崎村仮庄屋森民作、勤め向き不行き届きにつき、禁足を命じる。4日禁足差し免し、叱りを申し付ける。	B- 172
51	安政2年	1855	5	3	瓜生野町伊平、不埒の筋あり、禁足を命じる。	B- 173
52	安政2年	1855	6	2	流罪となった真木村茂八を打擲し死亡させた19人の者のうち、5人に入牢を命じ、12人の者に頭立ちでない事を理由に出牢させ、禁足を命じた。先に禁足差し免し、農業以外は慎むように命じだが、格別の宥免により、手錠の上七日押し込めとし、慎みを差し免す。	B- 187
53	安政2年	1855	7	2	奈良田村平市、出奔した弥右衛門夫妻を数日の間留め置き、その筋に申し出なかったこと不心得につき、禁足を命じる。	B- 197
54	安政2年	1855	7	10	浜崎村盲人梅之都、去る朔日夜火を誤って付けた為、禁足を命ず。禁足差し免す旨を来たる16日の書で達し、禁足は7日目で差し免す旨庄屋に明示させるよう手代に伝える。	B- 200
55	安政2年	1855	7	10	奈良田村平市、禁足を差し免す。	B- 201
56	安政2年	1855	8	29	怡土郡鹿家村嘉平、去る22日夜火を出し、居宅焼失。庄屋が穿鑿し、禁足を命じる。	B- 219
57	安政2年	1855	9	3	宿村の者が山御法に背き、見かしめの者を打擲したため、吟味の上頭取3人を入牢とし、その外22人に禁足を命じた旨を手代中から報告を	B- 221
58	安政2年	1855	9	5	園部上村与市、山方御法に背いたため禁足を命じる。	B- 223
59	安政2年	1855	9	6	宿村の者、見かしめの者を打擲した事件について、頭取3人を年限奴とし、2人を出牢の上札の辻で2日晒し、30日科代夫を命じる。7人に禁足を命じていたが、用捨し札の辻で2日晒しの上、30日科代夫を命	B- 225
60	安政2年	1855	9	6	同じ件で庄屋永瀬此右衛門、村方示し不行き届きにつき、禁足を命じられたが、これ以上沙汰に及ばず、禁足を差し免す。	B- 225
61	安政2年	1855	9	11	園部上村木挽吉兵衛、去る5日禁足を命じられていたが、根切りの杉8本取り上げ、秋光川渡し場で1日晒し、30日の科代夫を命ず。	B- 229
62	安政2年	1855	9	16	浜崎村社人隈本伊勢、領法にさむき、御料の者へ養子を出したことに	B- 231
63	安政2年	1855	9	24	について、不埒につき、禁足を命じたい意向を奥役へ伺いを立てる。	B- 236
64	安政2年	1855	10	6	浜崎村社人隈本伊勢、禁足を命じたところ、知らせを得る。18日に命じた旨。	B- 242
65	安政2年	1855	10	20	浜崎村庄屋翁介・砂子村庄屋甚吉・使番下横目勇八郎・弥太郎、勤め方大様につき禁足を命じる。叱りとした上で禁足を差し免す。	B- 253
66	安政2年	1855	11	17	浜崎村社人隈本伊勢、禁足を命じたところ、日田表で内済が整い、等閑の心得一通り叱りを申し付ける。	B- 263
67	安政2年	1855	12	1	下町森八・兵蔵・喜三右衛門、不埒の筋ありとして禁足を命じる。	B- 269
68	安政2年	1855	12	1	下町森八・兵蔵・喜三右衛門、禁足を差し免し、科銭2貫文を命じる。	B- 299
69	安政3年	1856	1	19	鳥栖村藤右衛門弟末吉、不埒の義あるにつき禁足を命じる。	B- 304
70	安政3年	1856	2	8	藤木村清七、27日居宅から火を誤って出したため、禁足を命じたところ、用捨し禁足を差し免す。	B- 305
71	安政3年	1856	2	8	鳥栖村弥市、雇われ先を出奔し、召し捕らえられ帰郷を命じられ、着後禁足を命じたところ、外に悪事もないので用捨し、禁足を差し免す。	B- 306
72	安政3年	1856	3	20	松屋巨市、田代町丈助より不正の蠟の餅買い入れ、不埒につき禁足を命じていたが、用捨し過料3貫文を命じ、禁足を差し免す。	B- 313
73	安政3年	1856	4	6	藤木西村喜介、独身にて極貧民で養い用灰小屋へ住居のところ、今暁出火し焼失。火は喜介の不注意であるため、禁足を命じたい旨申し出	B- 313
	安政3年	1856	4	6	田代町荒木十兵衛、不正の証文にて米借用し不埒につき、禁足を命じていたが、返弁方内済により、重き沙汰に及ばず、以後心得るよう命じて禁足差し免す。	

74	安政3年	1856	4	10	藤木西村喜助、火を誤って出し、去6日禁足を命じていたところ、叱りとして禁足を差し免す。	B- 315
75	安政3年	1856	4	20	瓜生野町妙善寺誓鑑、拝領婢示し方不行き届きにつき、禁足を命じ	B- 320
76	安政3年	1856	4	20	今泉村庄屋仮役松隈泰八郎、勤め向き不行き届きにつき禁足を命じ	B- 320
77	安政3年	1856	4	20	同村嘉八組頭、組子示し方不行き届きにつき、禁足を命じる。	B- 320
78	安政3年	1856	4	21	河内村村山郡吉、不心得につき禁足を命じる。	B- 20
79	安政3年	1856	4	26	今泉村庄屋松隈泰八郎、禁足を差し免す。	B- 324
80	安政3年	1856	4	26	同村嘉八組頭、禁足を差し免す。	B- 324
81	安政3年	1856	4	26	瓜生野町妙善寺誓鑑、禁足を差し免す。	B- 324
82	安政3年	1856	4	28	河内村村山郡吉、禁足を差し免す。	B- 325
83	安政3年	1856	5	8	真木村新右衛門、火を誤って出した廉で、禁足を命じたが、用捨し禁足を差し免す。	B- 330
84	安政3年	1856	6	5	團部上村小松孫七、火を誤って出した廉で、禁足を命じたが、一通り叱りの上で禁足を差し免す。	B- 336
85	安政3年	1856	6	11	蔵上村庄屋磯野百助、同村百姓七人の者の田の養いに石灰を用い、達しの旨に背いて、庄屋としての示し方大様につき禁足を命じる。	B- 337
86	安政3年	1856	6	17	蔵上村庄屋磯野百助、禁足を差し免す。	B- 339
87	安政3年	1856	7	10	瓜生野町橋本来助倅卯助・木山口善次郎、不埒の筋につき禁足を命じ	B- 350
88	安政3年	1856	7	19	田代町伊平・李兵衛、無切手にて旅行したため、禁足を命じる。	B- 354
89	安政3年	1856	7	20	田代町伊平・李兵衛、三か年の間他領徘徊を差留める旨裁許がでる。	B- 354
90	安政3年	1856	7	25	藤木東村の者6人、瓜生野町7人の者行き倒れの者を勝手に取り片付け不心得につき、禁足を命じる。	B- 357
91	安政3年	1856	7	25	藤木東村庄屋堀田彦次郎、平素村方の示し不行き届きにつき、禁足を命じる。	B- 357
92	安政3年	1856	7	27	田代町伊平・李兵衛、三か年の間他領徘徊を差留め、禁足を差し免	B- 357
93	安政3年	1856	7	29	藤木東村の者6人、瓜生野町7人の者、禁足を差し免す。	B- 357
94	安政3年	1856	7	29	藤木東村庄屋堀田彦次郎、叱り筋を言い聞かせ、禁足を差し免す。	B- 357
95	安政3年	1856	8	2	木山口茂作倅重吉、盗品を取り扱った廉で禁足を命じる。	B- 361
96	安政3年	1856	8	8	姫方村次左衛門、不心得につき、禁足を命じる。	B- 363
97	安政3年	1856	8	17	姫方村次左衛門、村方庄屋の申し付けも等閑にし、上納物遅れ、村方貧民差引について私欲ありとして、禁足を命じたところ、用捨し組頭を取り上げて、禁足を差し免す。	B- 366
98	安政3年	1856	9	5	宮浦東町茂作倅重吉、盗品取り扱いにつき、禁足を命じられる。盗品と知らず扱ったとして用捨し、木山口胴柱に1日晒しを命じる。	B- 373
99	安政3年	1856	12	25	清窪村庄屋鳥巢梁助、聞き込みにより禁足を命じる。	B- 390
100	安政4年	1857	4	12	姫方村次左衛門、不埒につき禁足を命じる。	B- 399
101	安政4年	1857	4	23	使い番幸助、親卯八が叱りのなか、出奔し不埒につき、禁足を命じるが、一通り叱りをし、禁足を差し免す。	B- 403
102	安政4年	1857	5	3	御門番仙蔵、不心得につき、まず禁足を命じる。	B- 405
103	安政4年	1857	5	10	姫方村次左衛門、科料10貫文を命じ、禁足を差し免す。	B- 408
104	安政4年	1857	閏5	20	19日夜前姫方村助右衛門灰小屋から出火、早速取り消す。20日に禁足を命じる。	B- 417
105	安政4年	1857	閏5	27	姫方村助右衛門、叱りを申し付け、禁足を差し免す。	B- 421
106	安政4年	1857	9	2	瓜生野村直七、旅人を雇い入れたこと不埒として禁足を命じる。	B- 424
107	安政4年	1857	10	25	長野村永右衛門、去る14日居宅より出火、隣家七軒類焼、禁足を命じたところ、宥免し、禁足を差し免す。	B- 439

※『日記抜書』（鳥栖市誌資料編第一集）、『佐藤恒右衛門毎日記』（鳥栖市誌資料編第五集）より作成。

※史料ページ欄は、Aは『日記抜書』、Bは『佐藤恒右衛門毎日記』と典拠を示す。

海禁体制と参勤交代

泉 正人

はじめに

周知のように、参勤交代は寛永12年（1635）6月の武家諸法度で制度化された。この時、制度化されたのは「夏四月」に江戸に在府する大名が交代することであった。この時の対象は、いわゆる外様大名であり、譜代大名を含めた全大名の参勤交代の編成は、同19年のことであった。ここに、2年を一サイクルとする、江戸奉公の体制が出来上がったのである。

江戸時代初期、日朝関係の不安定さや、海禁体制が構築されてくる中で、九州諸大名の参勤交代は変則的になっていく。寛永17年（1640）に前年の渡航禁止令に反して来航したポルトガル船乗組員を幕府が処刑したのを機に、同19年から福岡・佐賀両藩が、長崎警備を交代で行うようになり、このため両藩の参勤交代の期日が11月参府、翌年2月暇となったのが、その代表的な例である。そして、海外への窓口として長崎が位置づけられると、長崎を核として防衛体制が九州諸藩を中心に作られていく。そのため、福岡藩・佐賀藩・熊本藩・対馬藩・平戸藩・小倉藩・鹿児島藩等々の諸藩は長崎に聞役を置き、長崎奉行との連携体制を作っていた（1）。正保4年（1647）にポルトガル船が来航した時のように、緊張感の高まりによっては藩兵が長崎に派遣されたのである。そのような臨時出兵の際には、参勤交代も変則的になっていったのである。

そのような変則的な参勤交代のあり様は、個別藩あるいは福岡藩・佐賀藩といった連携する二藩の問題として指摘されることが多い（2）。長崎の防衛体制が九州全域の大名を組み込んでのものである以上、参勤交代の変則化の問題も、九州全域を枠組みとして考えていく必要がある。

本稿では文化5年（1808）のフェートン号事件を素材に、同事件が参勤交代に及ぼした影響を、九州全域を視野に入れて検証し、参勤交代編成の意味について考察するものである。なお、考察に際しては、「九州諸藩参勤交代データベース」（3）を活用した。

海禁体制の構築と九州諸大名の参勤交代編成

九州の大名は、いわゆる外様大名が多い。九州に譜代大名が封じられるのは、寛永9年（1632）の肥後熊本の加藤忠広の改易にともない同地に転封した細川忠利のあとの豊前小倉に小笠原忠真が入るなど、豊前から豊後にかけての諸地域が最初で、これにより江戸幕府の権力が九州に及んだ証とされている。その後、同14－15年の島原・天草一揆を機に、西九州に譜代大名が配置されている（4）。そのような変化はあるものの、九州の大名は近世を通じて大体三十数家であった。

寛永12年の参勤交代の制度化は、それ以前の参勤交代のあり方を引きずり、東と西の大名にグルーピングされて参勤交代が行われた（5）。しかし、豊後府内藩（日根野氏－大給松平氏）と同国臼杵藩（稲葉氏）は、豊後国内の譜代大名が二家であることから「御在所交替」、すなわち、どちらかが在国する形で、交代で参勤することとなった（6）。

対馬藩宗氏は、寛永期に2年一サイクルの参勤交代が制度化される以前、慶長10年（1605）に徳川家康から3年に一勤することが命じられていた（7）。当時の参勤交代は、

まだ2年一サイクルではなく、1年一サイクルの傾向が強い時期であったから、かなり特別な措置であった。この命は、「両国之通交を掌、本国之為藩屏」(8)という理由で、朝鮮との関係が不安定な状況を反映しての措置であった。その後、2年一サイクルが特に命じられることはなかったが、「柳川一件」以降、すなわち寛永12年以降実態的には2年一サイクルの参勤交代が行われていった(9)。それは、直接的には対馬藩宗家の事情によるものであったが、海禁体制の構築と朝鮮との関係の安定化が背景にあったと思われる。

福岡藩と佐賀藩は寛永19年から交代で長崎警備を家役として果たすようになっており、藩兵を長崎に常駐させた。最初、寛永17年に福岡藩が命じられ、その後同19年に佐賀藩に交代が命じられたのである(10)。しかし、長崎警備の役負担を負ったものの、両藩の参勤交代に変化はなかった。正保4年(1647)のポルトガル船来航事件を機に長崎警備が強化され、それに伴い幕府は両藩の在府期間を短縮するとともに、5月に来航するオランダ船が帰帆する九月まで藩主は国許に在ることとした。江戸在府期間の短縮は、江戸での奉公を長崎で果たすという論理であったと考えられる。この結果、江戸在府は11月から翌年2月までの三ヶ月余、在国は一年半余ということになったのである。

福江藩五島盛利・大村藩大村純信は、寛永18年2月8日に、福岡藩黒田忠之とともに「ことし参勤すべしといへども。阿媽港船通商禁ぜられしにより。すべて異国船着湊の折から。猶在封し心用ゆべきむね」を奉書にて命じられている(11)。これによって、両藩は11月参勤、2月暇となった。ただし、この二藩は交代して参勤したと言われるが(12)、何時からそのようになったかは不明である。

平戸藩の参勤交代の時期は、文化5年(1808)の「武鑑」(13)では、4月の参勤・暇となっている。しかし、「九州諸藩参勤交代データベース」の平戸藩の参勤交代表(表1)によれば、寛永12年(1635)から正徳(1711～16)の頃までは大体3月の参勤・暇であるが、享保4年(1719)3月の暇に際して藩主松浦篤信に「長崎のこと命ぜられ。さきざき阿蘭人帰帆のち参勤せし例もあれば。今より後は。かの帰帆をまち府に出べし。また唐船たゞよひいたらん時は。いよいよ心入て沙汰すべき旨」(14)が命じられてから、11月参勤・2月暇へと変わっている。正徳期に西日本の沿岸警備強化の一環として平戸藩に「加番所」設置(15)が命じられたのとの関係があると思われる。

唐津藩は、文化5年の「武鑑」(16)では、6月の参勤・2月の暇となっている。表2は「九州諸藩参勤交代データベース」から唐津藩のデータをまとめたものである。寛永12年から正徳期までは、大体10・11月の参府・暇であったようである。これが、享保5年の暇の際に藩主土井土井利実「唐津の所領にいたらば。長崎にも赴き。監視して。さるべき事は奉行とはかりあふべし」(17)と命じられてから、2月暇となっている。参府は、おそらくは文化5年の「武鑑」に記されているように6月となったと思われる。

同じように島原藩についてみると、文化5年の「武鑑」では6月の参勤・暇である。表3はデータ量の不足から、全体的な傾向を指摘することはできない。しかし、18世紀前期から2月暇となっている。参府時期については不詳である。島原藩は唐津藩と交代して参府したというから(18)、参府時期は唐津藩と同じ6月とも考えられるし、このような参勤になったのも唐津藩と同じく享保初期と推測される。

このように、享保初期から平戸藩・唐津藩・島原藩の参勤交代の時期が変則化しているが、これらは正徳期の沿岸警備強化令と関係があると思われる。

以上のように、九州諸藩の参勤交代編成は、17世紀中期・18世紀前期に長崎警備の強化に伴って変則化していったのである。このような体制が18世紀末以降の対外的緊張感の高まりの中で、どのように変化するのか、あるいはしなかったのか、文化5年のフェートン号事件という具体的な事件を通してみていくことにする。

フェートン号事件

文化5年(1808)8月、フェートン号事件が起こった。イギリス軍艦フェートン号が長崎港に侵入し、出島のオランダ商館のオランダ人を拘束した事件である。このイギリスとオランダとの抗争は、ヨーロッパにおいてフランスのナポレオンがヨーロッパ全土を席卷せんとした戦争の余波ではあった。すなわち、1810年にオランダはナポレオンによりフランスに併合された。この機にイギリスは、海外のオランダ植民地を奪取していったのである。

フェートン号が長崎港に侵入できたのは、オランダの国旗を掲げてオランダ船に偽装していたからである。外海から長崎港に入るには、港外に浮かぶ幾つもの小島の間を縫うようにしなければならず、その小島の要所要所には、警備の番所が設けられていた。そこをオランダの国旗を掲げて通過したのである。偶然も重なった。この年、春に来航するオランダ船が7月になってもまだ来ておらず、この年は欠航と判断され、見張船も撤収するなど、警備の福岡・佐賀両藩の警備の人数も減らされていたのである(19)。

8月15日、海上に帆影を発見し、通例に従いオランダ商館2名・長崎奉行所の検使らが小船で船に出向いていったところ、武装したイギリス兵のために商館員が捕らわれてしまった。検使は戻って長崎奉行に報告した。長崎奉行松平康英は、同年5月の幕府老中からの指示に従い穏便に事を収めることとし、オランダ人の人質の返還を求めることにした。そして、もし返還せずに帰帆しようとした場合、船を攻撃して打ち壊すことにし、福岡・佐賀両藩に出動を命じ、あわせて大村藩にも藩兵の急派を命じた。15日の夜、フェートン号は短艇三艘を下ろして長崎港内に侵入し、一時上陸した。このため、出島のオランダ商館長や館員らは奉行所に避難した。翌16日、フェートン号はオランダ人商館員1人を解放し、薪水・食料を要求した。要求を拒否した場合、港内の船舶を焼き払うと恫喝した。長崎に駐留する当番の佐賀藩兵が少なかったため、商館長の意見を入れ、奉行はフェートン号に薪水・食料を渡した。17日になって、フェートン号は残る1人の商館員を解放し、午刻に出帆した。夕刻になった大村藩兵が長崎に到着したが、すでにフェートン号は退去した後であった。その夜、長崎奉行松平康英は責任をとって切腹した。当番の佐賀藩では、関係者を蟄居・切腹・家禄没収に処した。藩主鍋島齊直は、11月に幕府から100日間の逼塞が命じられた。

このような事態へ対応していくため、幕府は新規に台場を構築していった。すなわち、従来の7台場に加え、翌年までに4ヶ所に「新台場」を構築し、さらに文化7年にかけて10ヶ所の「増台場」を構築した。配備する砲も増強し、計134門を常備することになった。これらの増強に伴い、福岡・佐賀両藩には新たな負担が義務づけられることになったのである。

フェートン号事件と参勤交代の編成

フェートン号事件が九州諸大名の参勤交代にどのような影響を与えたのか否かをみるため、「九州諸藩参勤交代データベース」を元に、「柳営日次記」(20)の記述を加えて作成したのが表4である。「九州諸藩参勤交代データベース」は「徳川実紀」「続徳川実紀」を中心的な基礎データとして作成したもので、長い期間の動向を見るには大過ないが、参勤交代する全大名の名が記されているわけでないので、短期的な動向を見るにはデータの補充が必要となる。その補充データとして「柳営日次記」を用いた。「柳営日次記」は「徳川実紀」の史料として用いられた系統のもので、これには参勤交代する個々の大名の名が記されている。ただし、文化期(1804～1818)は、6年6月および8年から数年分を欠いている。したがって、データは文化5年から7年の3ヶ年分である。参考として文化5年の「武鑑」(21)の記述を載せた。

年により記事がない大名がいるが、それは家督相続や隠居などに関連して参勤交代が行われなかったためと考えられる。豊前小倉藩小笠原貞温は西丸若年寄という幕府役職を勤めていたため参勤交代はしなかった。対馬藩宗義功の参勤の記述がない理由ははっきりとしないが、朝鮮通信使来日交渉との関係と思われる。

さて、「武鑑」の記述を基準に、実際の参勤が違いを見せるのは、福岡藩・秋月藩・平戸藩・島原藩・熊本藩・鹿児島藩である。

福岡藩主黒田長順は、この間参勤していない。幼少のため江戸にいたためである。そのため長崎警備は、福岡藩支藩の秋月藩主黒田長舒が長順に代わって勤めていた。ところが、文化4年に秋月に帰った長舒が、翌年2月に死去してしまった。4月に長韶が家督を継ぎ、28日に老中牧野忠精から「長順の願の如く長崎番の名代を命し」(22)られ、急遽江戸から国許の秋月に下りっている。長韶は福岡に赴き、次いで長崎を見廻っている。

その秋月藩黒田長韶は、参府年の文化6年に江戸に参勤していない。これはフェートン号事件の影響である。フェートン号事件のため、11月に佐賀藩主鍋島齐直は100日の逼塞を命じられた。逼塞は翌年2月21日に許されたが(23)、この時佐賀藩は長崎警備の当番にあたっており、そのため幕府から福岡藩の江戸留守居に「松平肥前守(鍋島齐直…引用者註。以下同じ)逼塞せしめられたる故に、長崎の当番を備前守(黒田長順)に命せらる。非番の掌る处は、肥前守たるへし故に、黒田甲斐守(長韶)今までの如く在邑し代りて務むへし」と命じられた(24)。つまり、長韶は佐賀藩の代わりに長崎警備を命じられたのである。この時、長韶は参府のため江戸に向かっていたが、周防国呼坂宿(山口県周南市)から国許に引き返すことになった。そして、文化6年は国許にあり、参府は同7年となったのである。

平戸藩については、上述したように18世紀前期から11月参勤・2月暇となっており、もともと「武鑑」の記述が実態と違っているのである。同じように、島原藩も「武鑑」の記述が実態からずれているのである。

熊本藩については、4月に参府するところ、文化6年には7月の参府となっている。その理由は不詳である。前年8月のフェートン号事件との関連も否定できない。翌7年に記述がないのは、その年の11月に藩主齐兹が隠居することと関連していよう。

鹿児島藩は、文化5年に約半年遅れの参勤となっている。その理由はつまびらかでない。時期的にいつてフェートン号事件との関連も考えることができるし、この時の参勤御礼を煩いのために名代で済ましているので健康上の理由とも考えられる。同6・7年に参勤交

代の記述がないが、この理由も不詳である。やはり、健康上の理由であろうか。

以上のように、フェートン号事件に関連して参勤交代が変則化したことが明確に分かるのは秋月藩のみである。福岡藩も本来的には変則化したと考えられるが、藩主が幼少との理由で参勤を行っていないため、変則化は認められない。処罰を受けた佐賀藩には、参勤交代の時期の変化は見受けられない。理由が不詳のためフェートン号事件とのかかわりは明確ではないが、熊本藩・鹿児島藩も可能性がある。

しかしながら、九州全体でみた場合、フェートン号事件によって参勤交代が大きく変則化することはなかったと言ってよい。長崎に聞役を置き、長崎奉行を中心とする異国船対応体制に組み込まれているとも言える諸藩についても、大きな変化は認められない。また、長崎警備の役を命じられている佐賀藩・大村藩・唐津藩・平戸藩・島原藩・福江藩についても、変化は見受けられない。これらのことから、フェートン号事件は、事件の衝撃度の割には、大がかりな異国船警備体制が敷かれなかったと言うことができよう。対応は長崎港そのものに限定されており、そこに当時の幕府の対外的な危機意識が現れている。

おわりに

フェートン号事件への対応は、長崎港における警備強化しかみられなかった。参勤交代の改編を含む、構造的な対応をみることはなかった。それをどのように考えていったらよいだろうか。フェートン号事件後に強化された警備体制が、文化末年に破綻する事実注目し、若干の私見を述べておわりに代えたい。

フェートン号事件後、強化された警備体制は文化11・12年(1814・15)には事件以前の規模に戻った(25)。警備体制の強化は、福岡・佐賀両藩の隔年交代の当番・非番体制では対応できず、「長崎警備は毎年警備同様の体制」になったため、それらの財政負担に藩財政が耐えられなくなったためという(26)。

長崎警備は、江戸での奉公を長崎で果たすものであった。そのため、在府期間の短縮という措置が講じられていたのである。長崎警備の質的強化は、一方的な負担の増大となり、江戸の奉公とのバランスを失することになった。財政的な負担の観点からも警備強化体制の継続は困難になったが、主従関係の論理の上からも妥当性を欠くことになっていき、強化警備体制の破綻になっていったと考えられる。

そのような意味で、18世紀末から高まる外圧への対応は、参勤交代制度の改編を迫る性格を有していたと言える。寛永期に制度化された参勤交代は、17世紀における主従関係を維持するためのシステムとして構築されたものであり、18世紀末からの外圧の高まりという新たな事態には対応しきれないものであったのである。しかし、フェートン号事件において、幕府は従来の参勤交代の枠の中で対応した。参勤交代の制度的な改編は認識されていなかった。文政8年(1825)の異国船打払令は、諸大名の国許での奉公(異国船打払)を増大させるものであり、江戸での奉公とのバランスを大きく損なうきっかけとなったのである。以後、参勤交代の改編は認識されていくが、現実の政治の中で実現されるのは文久2年(1862)を待たねばならなかったのである。

註

- (1) 山本博文『長崎聞役日記』(筑摩書房、1999年)、13ページ。

- (2) 藤野保編『佐賀藩の総合研究』本編第三章「幕藩関係」(吉川弘文館、1981年)が代表的な例である。
- (3) 泉正人・青木俊郎「九州諸藩参勤交代データベース」(本報告書附録)。
- (4) 藤野保『幕政と藩政』(吉川弘文館、1979年)、47～48ページ。
- (5) 藤野保編『佐賀藩の総合研究』(吉川弘文館、1981年)、963～964ページ。
- (6) 「府内藩」(『藩史大事典』第7巻九州編〈雄山閣出版、1988年〉)。
- (7) 泉正人「対馬藩の参勤交代について」(深谷克己編『対馬調査報告集』〈2007年〉)
- (8) 対馬歴史民俗資料館蔵宗家文庫史料「御参勤三ヶ年ニ一度且御国家御永保野御願就右御国体向御内実申上候次第記」(寛政8年～10年)。
- (9) 註(7)論文。
- (10) 註(5)、977～978ページ。
- (11) 『徳川実紀』第三篇、217ページ。
- (12) 松平太郎『校訂江戸時代制度の研究』(柏書房、1971年)
- (13) 『文化武鑑』3 (柏書房、1982年)。
- (14) 『徳川実紀』第八篇、147ページ。
- (15) 藤野保編『続 佐賀藩の総合研究』(吉川弘文館、1987年)、506ページ。
- (16) 註(13)。
- (17) 『徳川実紀』第八篇、185ページ。
- (18) 註(12)。
- (19) フェートン号事件については、註(15) 507～513ページ、梶原良則「寛政～文化期の長崎警備とフェートン号事件」(『福岡大学人文論叢』第37巻第1号、2005年)、梶嶋政司「フェートン号事件と長崎警備」(『九州文化史研究所紀要』第50号、2007年)を参照した。
- (20) 雄松堂マイクロフィルム『柳営日次記』。
- (21) 註(13)。
- (22) 『新訂黒田家譜』第5巻(文献出版、1982年)、376ページ。
- (23) 同前、388ページ。
- (24) 同前、388～389ページ。
- (25) 註(15) 512ページおよび註(19) 梶原論文。註(15) 512ページでは、この事実からフェートン号同事件の衝撃や長崎警備の重視は一過性のものであるとしている。
- (26) 註(19) 梶原論文。

表1 平戸藩の参勤交代時期

和暦	年	西暦	月	日	人名	内容	詳細	備考	大名	正統	巻	頁
慶長	17	1612	8	23	松浦隆信	駿府に参謁	駿府に参謁	綴子五巻献上。 江戸城修築終了後、駿府に参謁。大御所より天主教堂を命じられる。	平戸	正	1	597
慶長	19	1614	6	18	松浦隆信	駿府に参謁	駿府に参謁		平戸	正	1	667
元和	1	1615	5	11	松浦隆信	参着	参着	伏見・二條両城にのぼり拝謁。	平戸	正	2	41
元和	1	1615	7	—	松浦隆信	眼を給わり帰国	眼を給わり帰国		平戸	正	2	67
寛永	14	1637	11	14	松浦隆信	眼を給う	眼を給う	所領で機に應じ殿に沙汰するよう命じられる。	平戸	正	3	76
明暦	2	1656	3	11	松浦隆信	参勤	参勤	参勤の拝謁。	平戸	正	4	173
万治	3	1660	11	28	松浦隆信	就封の暇	就封の暇		平戸	正	4	370
寛文	8	1668	3	15	松浦隆信	在封	在封	高力隆長の島原城在番につき、参着で命じられる。	平戸	正	5	8
寛文	8	1668	3	15	松浦隆信	参勤	参勤		平戸	正	5	10
天和	2	1682	3	1	松浦隆信	参勤	参勤		平戸	正	5	438
元禄	12	1699	3	28	松浦棟	就封の暇	就封の暇		平戸	正	6	361
元禄	14	1701	5	1	松浦棟	参勤	参勤		平戸	正	6	439
元禄	16	1703	10	1	松浦棟	参府の許し	参府の許し	父・鎮信入道大病のため。	平戸	正	6	517
宝永	1	1704	5	28	松浦棟	就封の暇	就封の暇	初めての暇。	平戸	正	6	540
正徳	3	1713	3	1	松浦篤信	就封の暇	就封の暇	初めての暇。	平戸	正	7	302
正徳	4	1714	5	7	松浦篤信	参勤	参勤		平戸	正	7	376
享保	4	1719	3	1	松浦篤信	長崎のことを命じられる	長崎のことを命じられる	過去には阿蘭人が帰帆後参府した例もあるので、今後は帰帆を待って出府するように、また、唐船が漂流していたときはますます入念に沙汰するよう、戸田忠真のもとに伝えられる。	平戸	正	8	147
享保	7	1722	11	15	松浦篤信	参勤	参勤		平戸	正	8	288
享保	14	1729	2	28	松浦誠信	就封の暇	就封の暇	初めての暇。	平戸	正	8	494
宝暦	4	1754	11	1	松浦誠信	参勤	参勤		平戸	正	9	627
宝暦	6	1756	閏11	1	松浦誠信	参勤	参勤		平戸	正	9	673
宝暦	11	1761	2	15	松浦誠信	就封の暇	就封の暇	初めての暇。長崎のことを命じられる。	平戸	正	10	37
明和	1	1764	12	1	松浦誠信	参勤	参勤		平戸	正	10	170
寛政	4	1792	11	10	松浦清	参府期変更	参府期変更	これまではオランダ船の帰帆が過ぎた後出府していたが、今後は蘭人が帰国したならば参府するよう命じられる。よって来四月出府するよう命じられ、異船漂流への備えをしつかりするよう命じられる。	平戸	続	1	199
文化	7	1810	12	15	松浦照	参勤	参勤		平戸	続	1	661
文化	12	1815	11	15	松浦照	参勤	参勤		平戸	続	1	760
弘化	4	1847	2	28	松浦曜	就封の暇	就封の暇	崎港のことを命じられる。	平戸	続	2	580
安政	4	1857	6	6	松浦曜	長崎警衛諸大名の参勤時期変更。	長崎警衛諸大名の参勤時期変更。	これまではオランダ船の帰帆を具届けてから参勤していたが、今後は外国の軍艦が停泊していない限り、オランダ商船の出帆に拘わらず11月中に参府するよう命じられる。	平戸	続	3	378
文久	2	1862	閏8	22	松浦詮	諸大名参勤割合	諸大名参勤割合	来亥年参中在府。	平戸	続	4	373

表2 唐津藩の参勤交代時期

和暦	年	西暦	月	日	人名	内容	詳細	備考	大名	正統	巻	頁
慶長	14	1609	3	4	寺沢広高	駿城にて参勤後参上	九国より参勤の者が集まり、遠来参勤が行われる。		唐津	正	1	481
慶長	15	1610	閏2	8	寺沢広高	名古屋へ参参	名古屋城新築が高きのため、人数に家臣をそえ出し、名古屋に仮舎を設けて参参。		唐津	正	1	510
慶長	17	1612	6	19	寺沢広高	江戸に参参	織子五巻献上。		唐津	正	1	588
慶長	19	1614	2	8	寺沢広高	駿府に参参	江戸城修築のため。		唐津	正	1	651
慶長	19	1614	3	一	寺沢広高	駿府から江戸へ赴く			唐津	正	1	657
慶長	19	1614	10	5	寺沢広高	江戸城を辞し帰国			唐津	正	1	688
慶長	19	1614	10	9	寺沢広高	江戸から参参	遠やかに唐津へ参参、長崎代官と計りハテレンらを追放することなどを命じられる。		唐津	正	1	690
元和	1	1615	5	13	寺沢広高	参参	参参して両城にのぼり、遠国のため戦乱に連れ、遺憾であるときこえあぐる。		唐津	正	2	41
元和	2	1616	12	8	寺沢広高	参勤拜謁			唐津	正	2	113
元和	6	1620	12	22	寺沢広高	参勤			唐津	正	2	202
寛永	9	1632	10	8	寺沢広高	滞府許可	台徳院殿小様の忌まで滞府を願ひ、許可される。		唐津	正	2	568
寛永	14	1637	11	14	寺沢広高	暇を給う	所領で櫓にのぼり沙汰するよう命じられる。		唐津	正	3	76
慶安	2	1649	8	2	大久保忠職	参勤拜謁			唐津	正	3	611
万治	3	1660	11	28	大久保忠職	参勤			唐津	正	4	370
寛文	1	1661	10	1	大久保忠職	就封延期	今年が就封の年に当たると滞府を命じられる。		唐津	正	4	400
正徳	4	1714	3	1	土井利実	就封の暇	初めの暇。		唐津	正	7	370
享保	5	1720	2	28	土井利実	就封の暇	唐津の所領に到着したならば長崎にも赴き監視し、必要ときは参行と相談するよう命じられる。		唐津	正	8	185
安永	4	1775	11	15	水野忠鼎	就封の暇。	初めの暇。長崎の港鎮護のことを怠らないよう命じられる。		唐津	正	10	480
享和	2	1802	2	28	水野忠鼎	就封の暇	長崎港の事を命じられる。		唐津	統	1	478
文化	1	1804	2	28	水野忠鼎	就封の暇	長崎港の事を命じられる。		唐津	統	1	530
文化	5	1808	2	28	水野忠光	就封の暇	長崎港の事を命じられる。		唐津	統	1	598
文化	7	1810	2	28	水野忠光	就封の暇	長崎港の事を命じられる。		唐津	統	1	647
文化	9	1812	8	15	水野忠邦	就封の暇	家継ぎを嗣して馬一匹・綿・黄金献上、就封の暇を下され、崎港のことを命じられる。水野の家人水野平馬・中村源太左衛門拜崎港のことを命じられる。		唐津	統	1	692
文化	11	1814	2	28	水野忠光	就封の暇	崎港のことを命じられる。		唐津	統	1	724
文政	3	1820	2	15	小笠原長昌	就封の暇	崎港のことを命じられる。		唐津	統	2	36
文政	5	1822	2	15	小笠原長昌	就封の暇	崎港のことを命じられる。		唐津	統	2	71
天保	1	1830	2	15	小笠原長森	就封の暇	長崎港警備のことを命じられる。		唐津	統	2	224
安政	1	1854	2	28	小笠原長国	御暇	長崎のことを命じられる。		唐津	統	3	144
安政	4	1857	6	6	小笠原長国	長崎警備諸大名の参勤時期変更。	松平と小笠原は一ヶ年交替相手代なので、参勤時期のことは特に伝えない。		唐津	統	3	378
文久	2	1862	閏8	22	小笠原長国	諸大名参勤割合	来亥年秋中在府。		唐津	統	4	373

表3 島原藩の参勤交代時期

和暦	年	西暦	月	日	人名	内容	詳細	備考	大名	正統	巻	頁
寛永	14	1637	11	9	松倉重次	所領へ戻るよう命じられる。	島原の乱のため。松倉の手に余るようであれば鍋島勝茂・寺沢堅高の手の者が加勢するよう命じられる。一揆発生時、松倉父子は在府。		島原	正	3	72
寛永	15	1638	1	5	松倉重次	島原城へ向かう。	父子共。		島原	正	3	83
正保	2	1645	2	6	高力忠房	就封の暇を賜う。	朝会後、井伊直孝らとともに召されて密話数刻に及ぶ。		島原	正	3	383
元禄	4	1691	閏8	15	松平忠房	参勤			島原	正	6	117
元文	1	1736	3	28	松平忠房	就封の暇	初めての暇。		島原	正	8	718
元文	4	1739	2	28	松平忠房	就封の暇	初めての暇。		島原	正	8	820
宝暦	5	1755	2	15	戸田忠寛	就封の暇	初めての暇。		島原	正	9	635
天明	5	1785	2	15	松平忠恕	就封の暇			島原	正	10	768
天明	7	1787	2	15	松平忠恕	就封の暇			島原	統	1	21
寛政	3	1791	2	15	松平忠恕	暇を賜り、長崎警衛を命じられる。			島原	統	1	146
文化	6	1809	2	28	松平忠馮	就封の暇	崎港のことを命じられる。		島原	統	1	622
文化	8	1811	2	28	松平忠馮	就封の暇	崎港のことを命じられる。		島原	統	1	665
文化	12	1815	2	19	松平忠馮	就封の暇	長崎のことを命じられる。		島原	統	1	745
文化	14	1817	2	28	松平忠馮	就封の暇	崎港のことを命じられる。		島原	統	1	785
文政	2	1819	4	28	松平忠侯	就封の暇	崎港のことを命じられる。		島原	統	2	21
天保	2	1831	2	15	松平忠侯	就封の暇	崎港のことを命じられる。		島原	統	2	242
安政	4	1857	2	28	松平忠精	暇を給う。	善物を下され、長崎のことを命じられる。		島原	統	3	341
安政	4	1857	6	6	松平忠精	長崎警衛諸大名の参勤時期変更。	松平と小笠原は一ヶ年交替相手で、参勤時期のことは特に伝えない。		島原	統	3	378
文久	1	1861	2	15	松平忠愛	就封の暇	善物五を下され、長崎のこと命じられる。		島原	統	4	20
文久	2	1862	閏8	22	松平忠愛	諸大名参勤割合	来々子年冬中在府。		島原	統	4	375
文久	2	1862	12	28	松平忠和	就封の暇	初めての暇。善物五献上。長崎のことを命じられる。		島原	統	4	491

表4 九州諸大名の参勤交代(文化5~7年(1808~10))

藩名	大名	文化5年(辰)	文化6年(巳)	文化7年(午)	文化5年「武鑑」記述	備考
筑前福岡	松平(黒田)官兵衛	—	—	—	参子12月/暇丑2月	文化5年9月備前守、斉清と改める
筑前秋月	黒田甲斐守	初暇*4/28★	—	参*12/15	参子4月/暇丑4月	文化5年4月長韶家督相統
筑後久留米	有馬中務太輔	—	暇*4/15	参*4/15	参子4月/暇丑4月	
筑後柳川	立花左近将監	暇*4/18	参*4/15	暇*4/19	参丑4月/暇子4月	
肥前佐賀	松平(鍋島)肥前守	暇*2/15(1)	参*11/15	暇*2/28(1)	参丑11月/暇子2月	
肥前小城	鍋島捨若	—	—	—	参丑4月/暇子4月	文化元年4月直堯家督相統
肥前蓮池	鍋島甲斐守	参*4/18	暇*5/15	参*4/15	参子4月/暇丑4月	
肥前鹿島	鍋島丹波守	—	—	初暇*4/19	参子4月/暇丑4月	享和元年4月直彝家督相統
肥前唐津	水野和泉守	暇*2/28(1)	参*5/27	暇*2/28(1)	参丑6月/暇子2月	
肥前平戸	松浦肥前守	参*4/15	暇*2/28	参*12/15	参子4月/暇丑4月	
肥前平戸新田	松浦織部正	暇*4/18	参*4/15▲	—	参丑4月/暇子4月	
肥前大村	大村上総介	参*12/朔	暇*2/28	参*12/朔	参子11月/暇丑2月	
肥前島原	松平主殿頭	参*閏6/15	暇*2/28(1)	参*7/朔	参子6月/暇丑6月	
肥前福江	五島弾正少弼	暇*2/28	—	初暇*2/28	参丑11月/暇子2月	文化6年5月盛運死去、同年7月盛繁家督相統
対馬府中	宗 对馬守	—	—	—	参3年1度11月/暇丑2月	
肥後熊本	細川越中守	暇*4/18	参*7/9	—	参丑4月/暇子4月	文化7年11月斉茲隠居
肥後宇土	細川和泉守	暇*4/18	参*5/27	暇*4/19	参丑4月/暇子4月	
肥後人吉	相良志摩守	参*4/15	暇*4/18	参*4/15	参子4月/暇丑4月	
豊前小倉	小笠原大膳大夫	—	—	—	参丑7月/暇子6月	文化元年7月忠固家督相統
豊前小倉新田	小笠原近江守	—	—	—	—	西丸若年寄
豊前中津	奥平大膳大夫	参*7/18	暇*7/9	参*7/朔	参子7月/暇丑6月	
豊後杵築	松平備中守	参*6/11	—	参*6/18	参子6月/暇丑6月	
豊後日出	木下主計頭	—	—	—	参丑4月/暇子4月	文化7年3月俊戀隠居、俊良家督相統
豊後府内	松平左衛門尉	—	—	—	参丑6月/暇子6月	文化4年10月近訓家督相統
豊後森	久留島伊予守	暇*4/18	参*4/15	暇*4/19	参丑4月/暇子4月	
豊後臼杵	稲葉伊予守	参*4/15	暇*4/18	参*4/19▲	参子4月/暇丑4月	
豊後佐伯	毛利美濃守	参*4/27▲	—	—	参子4月/暇丑4月	
豊後岡	中川修理大夫	暇*4/18	参*4/15	暇*4/19	参丑4月/暇子4月	
日向延岡	内藤龜之進	—	—	—	参子6月/暇丑6月	文化3年12月正順家督相統
日向高鍋	秋月佐渡守	—	初暇*4/18	参*4/19	参子4月/暇丑4月	文化5年2月種任家督相統
日向佐土原	島津淡路守	暇*4/18	参*5/11	暇*4/19	参丑4月/暇子4月	
日向秋肥	伊東鶴三郎	初暇*4/18	参*7/9	暇*4/19	参丑4月/暇子4月	
薩摩鹿兒島	松平(島津)薩摩守	参*10/15▲	—	—	参子3月/暇丑3月	

▲…「煩につき使者」。(1)…「長崎表之義被 仰出之」。(2)…「当年長崎当番所引続念入可相勤旨」
 ★…「続徳川実紀」1巻602頁より。文化5年「武鑑」…「文化武鑑」3(柏書房、1982年)より。
 「武鑑」記述欄「参」…参府、「子」…子寅辰午申戌年、「丑」…丑卯巳未酉亥年

《附録》九州諸藩参勤交代データベースについて

泉 正人・青木俊郎

「九州諸藩参勤交代データベース」は、九州諸藩の参勤交代の時期を、江戸での参府御礼、暇御礼を中心に、その年月日についてデータを集積したものである。

周知のごとく、参勤交代は寛永12年（1635）6月の武家諸法度で参勤時期が「夏四月」と定められ、在府する大名の定期的な交替が実現した。この時は、いわゆる外様大名を対象とするものであったが、譜代大名を含め全大名を包摂する制度になったのは同19年のことであった。基本的には2年サイクルで、在府と在国を繰り返すこととなったが、九州や北方の藩では、海禁体制との関連で、そのサイクルが異なるものもあった。また、関東内の大名のうち、江戸城中の殿席が雁間・菊間の大名は半年ずつの在府・在国であった。このほか、参勤交代をしない定府大名もあり、幕府役職に就いている大名も参勤交代を行わなかった。

参勤交代の時期はほぼ固定化し、武鑑などにも大名情報の一つとして記された。例えば、須原屋板の文化5年（1808）「武鑑」では、岡山藩の松平（池田）上総介齐政につき「参府 子寅辰午申戌 四月」「御暇 丑卯巳未酉亥 四月」と記している（1）。

参勤交代の時期については、個別藩についてどのように参勤を行っていたのかを検証することが多く、特に参勤交代の形成過程への関心から、江戸時代前期を扱うものが多い（2）。個別藩の参勤だけでなく、種々の理由から近隣の大名が交代して参勤する場合もみられることも指摘されている。加賀金沢藩と越前福井藩、筑前福岡藩と肥前佐賀藩、肥前唐津藩と同国島原藩、和泉岸和田藩と摂津尼崎藩、石見浜田藩と同国津和野藩、山城淀藩と近江膳所藩、三河吉田藩と同国刈屋藩、遠江掛川藩と同国浜松藩、伊勢桑名藩と同国長島藩、摂津高槻藩と丹波亀山藩、豊後府内藩と同国臼杵藩、肥前大村藩と同国福江藩がそれである（3）。

このように、個別藩、あるいは交代して参勤する二藩については研究の蓄積はあるものの、参勤交代が一定の地域の中でどのように行われていたのかを検討することはなかった。寛永12年（1635）時には、それまでの形を踏襲して東国大名と西国大名というグルーピングによる参勤交代であったが、19世紀には原形を残しつつもかなり変容している。それがどのような理由によるものかの検討はなされていない。また、19世紀に入ると、北と南で外圧が非常に高まり、幕府は軍事的な警備体制の強化を図るが、それらが、東北や九州といった一定の地域について、従来の参勤交代の組み替えをもたらすのかどうかについても十分な検討が見られない。

そこで、これらの課題に迫るため、まず九州地方の諸大名の参勤交代についてデータベースを構築することに努めた。江戸での参府御礼、暇御礼を中心に、その年月日をデータ化することとし、江戸幕府が開かれた慶長8年（1603）から、幕府文久改革により実質的に参勤交代が終わる文久3年（1863）までの期間を対象とした。約260年の長期にわたって、九州地方の全大名の参府・暇の年月日を詳細に集積することは困難である。そこで、基礎データとして「徳川実紀」「続徳川実記」の記述を用いることにした。「徳川実記」は、明暦3年（1657）の大火以前については二次史料によって編纂されてい

ること、「続徳川実紀」の「温恭院殿御実紀」以降がそれまでの体裁ではなくいわゆる史料集的な編集になっていることなど、記述の「均質」性については留意すべき点がある。しかし、「温恭院殿御実紀」以降については稿本として出来上がっているものなので、長期にわたるデータとして用いるには大過ないと考えられる。

データベースは編年とし、項目は和暦年、西暦年、月日、人名、内容（参勤・暇などの内容）、詳細（詳しい内容について）、備考とし、「徳川実紀」「続徳川実紀」からの出典を「正統」「巻」「頁」で表した。

データ件数は703件である。約260年間の九州全ての大名の参勤交代データとしては少なく、1年平均2.7件である。「徳川実紀」の参勤交代に関する記述は、例えば明和元年（1764）4月18日条に「○十八日尾張中納言宗睦卿参観の拝謁あり。また松平陸奥守重村等をはじめ襲封廿九人」（4）とあるように、参勤交代する全ての大名名を記している訳ではない。このため、データ数がさほど多くない結果となったのである。年平均2.7件であるが、時期により記述件数の偏りがある。慶長19年（1614）の23件、元和元年（1615）の20件、および寛永14年（1637）の21件、翌15年の15件が特に多い。慶長19年・元和元年は大坂の陣、寛永14・15年は天草・島原一揆に関連しており、参勤交代が軍事指揮権の発動と深く関係していることが読みとれる。それは、参勤交代は本来的に奉公であり、軍役動員の一環として行われていたからである。参勤交代が時々の軍役動員の影響を受けていた以上、個別藩の参勤交代のありかただけでなく、地域的な参勤編成とも関係していると考えられる。特に九州は、長崎警備をはじめとする異国船警衛の公儀役が賦課されており、参勤交代の編成を九州規模で検討する必要がある。

かかる問題意識よりデータベースの構築に努めたが、上述の課題に迫る上では、不十分さをまぬがれないと言える。しかし、詳細な参勤交代データベースの構築に向けて、第一歩を踏み出したと考えている。今後、このデータを基礎に、更にデータを補充して、実態をより豊に描き出せるようにしていきたい。

なお、データベースの入力作業は、青木俊郎が担当した。

註

- (1) 『文化武鑑3』（柏書房、1982年）。
- (2) 右山幸介「細川氏の参勤、就封の期日について」（『熊本史学』59号、1983年）、藤野保編『佐賀藩の総合研究』本編第三章「幕藩関係」（吉川弘文館、1981年）、荒野泰典「大君外交体制の確立」（『講座日本近世史』2〈有斐閣、1981年〉）、のち同『近世日本と東アジア』（東京大学出版会、1988年）に収録。208～9ページ）など。
- (3) 松平太郎『校訂 江戸時代制度の研究』（柏書房、1971年）、325ページ。
- (4) 『徳川実紀』第十巻、151ページ。

朝鮮通信使の接待役と大名

紙屋敦之

はじめに

江戸時代、朝鮮使節が一二回来日した。そのうち慶長一二（一六〇七）、元和三（一六一七）、寛永元（一六二四）年の三回は回答兼刷還使と称し、寛永一三年の四回目以降通信使と称した。回答とは日本からの国書に対する回答、刷還とは豊臣秀吉の朝鮮侵略のとき日本に拉致された被虜人を朝鮮に連れ戻る、との意である。幕府は、対馬藩の御家騒動・柳川一件を裁定した寛永一二年に日朝通交体制を改め、朝鮮側に通信使の派遣を要請した。通信とは信を通わす意である。

対馬に到着した朝鮮通信使は、玄海灘を越え、瀬戸内海を航行して大坂に到着した。それより淀川を遡って京都に、さらに中山道・美濃路・東海道を辿って江戸に至った。幕府は道中宿泊・昼休の接待役および乗馬役を大名に課し、使節の送迎に当たらせた。

朝鮮通信使の接待に当たっては、朝鮮人御用掛をはじめ接待役・乗馬役などさまざまな役に大名が総動員されている⁽¹⁾。

接待役に関する研究は多い⁽²⁾が、接待役を務めた大名を俯瞰的に考察した研究は、管見の限りではない。そこで本稿は、朝鮮通信使の接待役を務めた大名のデータを整理し、その動員の実態について検討する。

一 接待役大名の一覧

朝鮮通信使の接待役を務めた大名は、『通航一覧』に寛永一三（一六三六）、明暦元（一六五五）、天和二（一六八二）、正徳元（一七一七）、享保四（一七一九）、寛延元（一七四八）、明

和元（一七六四）年の七回分の記録が載っている⁽³⁾。

接待役には、費用をすべてを大名自身が負担する「自分馳走」と、幕府の賄代官の下で接待役を務める「御馳走人」の二種類があった。御馳走人に関する記載は、「寛永十三年、朝鮮の信使対馬を出船して、江戸まで海陸御馳走の次第」⁽⁴⁾によると、左記のとおりである。

一大津、星休、
守山へ五里二町、

菅沼織部正

小野宗左衛門

菅沼織部正は御馳走人、小野宗左衛門は幕府の賄代官である。菅沼織部正は、『徳川実紀』⁽⁵⁾によると菅沼定芳で、『日本史総覧IV 近世一』の「各藩変遷表」⁽⁶⁾によると知行地は丹波・亀山藩である。小野宗左衛門は大津代官である。

表1「朝鮮通信使接待役大名」（後掲）は、対馬―江戸間で自分馳走・御馳走人を務めた大名を整理したものである。朝鮮通信使は寛永一三、同二〇、明暦元年の三回、江戸からさらに日光に赴いているが、この分に関しては割愛した。

二 接待役の固定化

表1「朝鮮通信使接待役大名」を用いて、休泊場所で接待役を務めた大名の知行地¹藩に注目すると、左記の二つの形態が読み取れる。

1 府中―兵庫は、接待役が特定の藩に固定されている（輦に例外がある）。

2 大坂―江戸は、①接待役が特定の藩に固定されている所と、

②そのつど接待役が任命される所がある。

特定の藩とは、大名は転封して入れ替わっても、その藩に接待

役がついている藩のことである。2の②「そのつど接待役が任命される所」を除いて、接待役は特定の藩に固定化されていたといえる。

次に、その成立過程をみてみよう。寛永一三年の接待役は、四月初めころより沙汰があり、西国中国の諸大名に奉書が出された。左記は、岡山藩主池田光政に充てた老中奉書である(7)。

一筆令啓候、当年八月從朝鮮国信使来朝候、就夫於領内万馳走之義、可為如去未歳候、来朝之人数書立、今日宗対馬守先達而可差越候、膳部之献立別紙に記之遣之候、自然彼船遭風波之難相定泊之外、何れ之地江令着岸候共、其所之船出之、綱錠(碇)水薪等無滞に、前廉可申付候、恐々謹言、

四月十六日

酒井讃岐守

忠勝

土井大炊頭

利勝

松平新太郎殿

幕府は、①岡山領内における「万馳走」は去る「未歳」のごとく行くこと、②通信使の「人数書立」は宗対馬守(義成)より知らせる、③膳部の献立は別紙に記して遣わす、④通信使の船が風波の難に遭い、指定された停泊地以外に着岸したときは、その所の船を出し、「綱錠水薪等」を滞りなく支給すること、などを指示した。「未歳」は、豊臣秀吉の朝鮮侵略後日朝国交が回復した慶長一二年である。

寛永一三年の接待役に関しては、もう一つ史料(「紀年録」)がある(8)。

今度朝鮮人往還、自大坂至江戸路次経営人被定之、拾万石以上者自力経営之、但及二箇所者、昼一箇所者公儀雑掌也、然尾張亞相、二箇所共自分経営也、公儀雑掌所者、其近辺代官等沙汰之、

ここには、①大坂―江戸間の休泊場所に「経営人」を定める、②そのうち一〇万石以上の大名は「自力経営」とするが、接待が二カ所に及ぶ場合、昼休の一カ所は幕府の雑掌とする。ただし、尾張大納言(徳川義直)派二カ所(名古屋・鳴海)とも「自分経営」とする、③幕府が雑掌する所はその近辺の幕領の代官が沙汰する、という方針が述べられている。「自分経営」は自分馳走である。雑掌は雑餉で、人をもてなすための酒や食物のこと。それは幕府が負担する。

以上から、①大坂―江戸間は幕府が「経営人」すなわち接待役の大名を定め、一〇万石以上は「自力経営」(自分馳走)、それ未満は幕府の賄代官の下で大名が接待する(御馳走人)、②大坂以西は大名が自力で接待する(自分馳走)、③大坂以东は幕府、以西は大名が受け持つ、と分担されていたことが読み取れる。

寛永一三年以前はどうだったか。前掲老中奉書が先例としてあげる慶長一二年は、『当代記』によると、次のような形で朝鮮使節の接待が行われた(9)。

1 従高麗無事扱の使随分の人來の由、対州より在其告の間、路次中泊々屋形を作り、可有馳走と也、

2 駿河普請衆中、浜松掛川吉田岡崎衆、高麗為馳走本国江被返、

3 泊々事、守山、佐和山、大垣、清洲、岡崎、浜松、掛川、

藤枝、清見寺、三島、小田原、藤沢、神奈川、何も路次中、宿朝夕の餉、御分領代官衆行之、鞍置馬百四五拾、小荷駄馬式百疋余、人足三百人計也、鞍馬は路次中城々より出、并所々船橋以下馳走也、

第一は、朝鮮使節が道中宿泊する地に屋形(かりの宿所)を造つて接待した。

第二は、駿河普請衆および浜松・掛川・吉田・岡崎衆を朝鮮使節接待のため本国に

帰国させた。駿府普請は、大御所徳川家康の居城駿府城の修築工事である。これに動員された普請衆は、池田輝政(播磨・姫路藩)・池田長吉(因幡・鳥取藩)・加藤嘉明(伊予・松山藩)・松平忠利(三河・深溝藩)・分部光信(伊勢・上野藩)・古田重治(伊勢・松坂藩)・有馬豊氏(丹波・福知山藩)・毛利高政(豊後・佐伯藩)の八人(10)である。また浜松・掛川・吉田・岡崎衆は松平忠頼(遠江・浜松藩)、松平定勝(遠江・掛川藩)、松平家清(三河・吉田藩)、本多康重(三河・岡崎藩)の四人である。

第三は、守山―神奈川間の宿での朝夕の餉(食物)は幕領の代官が賄った。慶長一二年に來日した朝鮮使節の副使慶暹が著した『海槎録』(11)によると、府中(対馬・厳原)―牛窓間は宗、松浦、黒田、毛利、福島、池田の各大名、室津―淀間は豊臣秀頼(代官が接待)、京都・瀬田は京都所司代板倉勝重、が接待に当たっている。大坂の陣以前、摂津・河内・和泉三力国は豊臣秀頼が支配していた。こうした背景があつて、幕府は守山―神奈川間を受け持ったのである。

次の元和三年の朝鮮使節は八月二六日伏見城において徳川秀

忠に国書を奉呈し、九月一〇日京都を發つて帰国の途についた。したがって、江戸には赴いていない。

寛永元年の朝鮮使節は江戸に赴き、一二月一九日江戸城において徳川家光に国書を奉呈した。幕府は菅沼定芳(近江・膳所藩)に大津で接待させ、堀親良(下野・真岡藩)・溝口善勝(越後・沢海藩)に三島、松下重綱(下野・烏山藩)・竹中重信(寄合)に小田原、水谷勝隆(常陸・下館藩)・花房幸次(寄合、伊勢国代官)に藤沢、佐久間勝之(信濃・飯山藩佐久間安政弟)・新庄直好(常陸・麻生藩)に神奈川で接待させた(12)。

このように、朝鮮通信使の接待は慶長一二年を原形として寛永一三年に成立したといえる。

三 接待役賦課の原則

接待役の賦課には何か原則があるのか。正徳元年の朝鮮通信使に関する左記の記録を見てみよう(13)。

廉按、按するに、この書桂川元廉の著なり、旧例信使経過処、国主城主并為御馳走

人、一十萬石以下厨饌給費出自内帑、代官分領其事、州牧則遣使館待、不関経費等事、一十萬石以上一切儲待皆自弁、官不給費、故無代官、

割注にいう桂川元廉は、『国書総目録』(14)によると、正徳二年の自序を持つ『踐好録』という正徳度朝鮮通信使に関する記録を著している。「この書」とは『踐好録』のことであろう。桂川元廉は、朝鮮通信使が通過する所の国主・城主・御馳走人で、一〇萬石未満の大名は食料を幕府の蔵から支給し、賄代官をつけて大名に接待させる、一〇萬石以上は一切を大名が自弁する、と接待方法について述べる。接待役を務める大名を国主・城主・御

馳走人に区分していることが注目される。

幕府は、元和元年の大坂夏の陣後「武家諸法度」(15)を制定し、第一三条に「国主可撰政務之器用事」と、政務に長けた大名を国主を選ぶ方針を述べた。つまり、幕府は国主を幕藩体制をとるに担う担い手として期待していたのである。次に、寛永一二年の「武家諸法度」(16)では、大名を「国主・城主・一万石以上」の三つに分けている。国主は、古代律令制国家の国郡制に由来する「国」を一カ国以上領地として与えられた国持大名のことである。城主は城持ちの大名である。

寛永一三年に來日した朝鮮通信使の記録『丙子日本日記』(17)は、

浜松 遠江州所属 関白藏入地 城主高力忠房
掛川 遠江州所属 関白藏入地 城主松平忠重
藤枝 駿河州所属 関白藏入地 城主水野忠善

と、城主である大名の知行地を関白すなわち將軍の藏入地と記述している。

寛永二〇年に來日した朝鮮通信使の記録『癸未東槎日記』(18)は、

西海道の九州は道が甚だ遠く、南蛮・琉球など諸国の船が多く集まる地である。

これらの諸州は、時に盜賊の虞がある所なので、北路沿海の安芸・備後・備前・播磨などの諸州は関白の親戚になる人で、信頼され親しい人を送って太守として、凡ての憂患を防ぐようにしている。

と、將軍の親戚で信頼できる親しい人を配置して太守(国主)と

し、すべての憂患を防ぐようにしていると述べる。安芸の国主は広島藩・浅野光晟(母は徳川家康の息女)、備後は福山藩・水野勝俊(徳川秀忠に仕える)、備前は岡山藩・池田光政(妻は徳川秀忠の娘千姫の娘勝子)、播磨は姫路藩・松平忠明(母は徳川家康の息女亀姫)である(19)。

外国(朝鮮)は、日本を將軍が国主とともに統治する国家であると捉えていたと考えられる。

表2「国主・城主・御馳走人と接待場所」(後掲)は、表1の大名がいつの年度、どこで接待役を務めているか国ごとに整理したものである。表2の太枠部分が、朝鮮通信使が通過した道筋の国である。

表2の藩・大名欄の国主、城主は、享保四年の記録に従った(20)。それによると、国主は対馬主・福岡主・長門周防主・広島主・備前主、城主は平戸・福山・姫路・尼崎・淀・彦根・大垣・岡崎・吉田・浜松・掛川・田中・小田原の各城主である。したがって、このほかが御馳走人ということになる。

表2より、接待役は朝鮮通信使が通過する道筋の国を単位に賦課されたという原則が読み取れないか。そのように考える理由の第一は、国主(対馬、筑前、長門・周防、安芸、備前)が接待役を務めていることである。このには尾張殿(尾張)を含めて考えてよいだろう。

第二は、道筋の城主および当該国に所在する藩が接待役を務めていることである。たとえば、枚方・大津は丹波・摂津、守山・八幡・彦根は近江・伊勢、今須・大垣・墨俣は美濃、岡崎・赤坂・吉田・新居は三河、浜松・見附・掛川・金谷は遠江、の諸藩が担

当している。藤枝・箱根・小田原は特定の藩（城主）が接待している。

この原則が該当しないのが、駿府・江尻・吉原の駿河・三島の伊豆・大磯・藤沢・の相模、神奈川・品川・江戸の武蔵で、そのつど御馳走人が任命される。そうした御馳走人の特徴として、①国主の一族、②元国主の一族が務めていることがあげられる。前者は筑前の秋月・東蓮寺藩（福岡藩黒田氏）、肥前の小城・蓮池藩（佐賀藩鍋島氏）、肥後の宇土・新田藩（熊本藩細川氏）、長門の府中藩・周防の長府藩（萩藩毛利氏）、阿波の新田藩（徳島藩蜂須賀氏）、後者は伊予の吉田藩（宇和島藩伊達氏）、筑後の三池藩（柳川藩立花氏）、がそうである。

この国を単位とする原則は、人馬の挑発にも見られる。天和二年、幕府は人馬役について次のように命じた（21）。

覚

山城・大和・和泉・河内・摂津・近江・丹波・播磨・美濃・三河・遠江・駿河・伊豆・相模・武蔵
右国中知行有之面々、当秋朝鮮人来朝之節、又帰国之節も人馬出候様に、其場所之御代官所より可相触候間、其趣無滞可被出候、以上、

戊六月朔日

幕府は播磨・丹波・摂津・河内・和泉・大和・山城・近江・美濃・三河・遠江・駿河・伊豆・相模・武蔵一五カ国に知行を持つ領主に、往復とも人馬を命じている。この一五カ国は、朝鮮通信使の通過する道筋（丹波は違う）に当たり、幕府がその接待を受け持つ地域と重なっている。

幕府は、享保四年に人馬を町人の「請負通し人馬」とし、その賃銀を上記一五カ国から高割で賦課した（22）。

覚

山城・大和・和泉・河内・摂津・近江・丹波・播磨・美濃・三河・遠江・駿河・伊豆・相模・武蔵
右之国々知行所有之面々、当秋朝鮮人来朝、并帰国之時も人馬出候儀、御代官より可相触候間、無滞可差出候旨相触候得とも、請負通し人馬に相極、右賃銀高割に而取立候筈に候間、追而御代官より触可有之候、以上、

六月

享保六年三月の書付（23）によると、「去々亥年、朝鮮人道中往来人馬賃銀、五畿内近江丹波播磨美濃三河遠江駿河伊豆相模武蔵御料私領共に、国役懸り出候に付」と、国役金として賦課したのである。

おわりに

本稿は、江戸時代、朝鮮通信使の接待役を務めた大名のデータを寛永一三（一六三六）、明暦元（一六五五）、天和二（一六八二）、正徳元（一七一）、享保四（一七一九）、寛延元（一七四八）、明和元（一七六四）年の七回分について整理した。

その結果、①大坂以西は大名（国主）、以東は幕府が接待を受け持つという地域分担が見えてきた。②接待役は特定の藩（国主・城主）に固定されている。駿河以東では、田中・小田原両城主以外はのつど御馳走人が任命される。③接待役の大名（藩）は国を単位に動員された。という原則が見えてくる。

朝鮮通信使の接待役に関する研究は、幕藩制国家の国内編成の

原理を解く手掛りの一つになりうると考える。しかしそのためには、大名が務めたすべての役について検討することが不可欠である。これは今後の課題である。さらに賄代官を務めた幕府の代官の分析も残っている。代官の支配地はどこかを含めて、賄代官の研究は今後の課題である。

注

(1) 山上至人「延享度朝鮮通信使来聘における大名動員」(鈴木・玉井建也編『近世日本における外国使節と社会変容②—延享度「信使記録」を読む—』紙屋敦之研究室、二〇〇七年)。同論文は、1「幕府朝鮮人御用掛」、2「御馳走役大名」、3「鞍置馬役」「鞍皆具役」(淀—新居)(舞坂—江戸)(江戸)の往復路、4「免除された大名」の一覧表を掲載する。

(2) 朝鮮通信使の全体的な研究として、三宅英利『近世日朝関係史の研究』(文献出版、一九八六年)、李元植『朝鮮通信使の研究』(思文閣出版、一九九七年)、仲尾宏『朝鮮通信使と徳川幕府』(明石書店、一九九七年)がある。また朝鮮通信使の接待役に関する優れた研究として、池内敏「朝鮮通信使の接待」(岡山県史編纂委員会編『岡山県史』第六卷近世1、岡山県、一九八四年)・同「近世中期の朝鮮通信使」(『地域史研究』第二一卷第一号、一九九一年)がある。

(3) 寛永度『通航一覧』第二卷、九八—一〇二頁、明暦度同書一〇四—一〇五頁、天和度同書一一二—一一九頁、正徳度同書一二六—一三〇頁、享保度同書二二五—二二七頁、寛延度

同書二八二—二九三頁、明和度同書二九六—三〇〇頁。

『徳川実記』(吉川弘文館、一九七六年)の該当箇所は、注(3)の順に、第三篇四一頁、第四篇一四六頁、第五篇四四二頁、第七篇一五三頁、第八篇一四六頁、第九篇四二三頁、第一〇篇七六頁。

(4) 注(3)参照。

(5) 注(3)の『徳川実記』第三篇四一頁。

(6) 『日本史総覧』IV近世一(新人物往来社、一九八三年)。

(7) 『通航一覧』第一卷(鳳文書館、一九九一年複製)四四七頁。

(8) 『通航一覧』第二卷、一〇二頁。「寛文十三年」とあるのは寛永の誤り。

(9) 国書刊行会編『史籍雑纂』第二(続群書類従完成会、一九七四年)一〇〇、一〇三頁。慶長一二年二月二〇日条、同年四月五日条、同年閏四月六日条。

(10) 『徳川実紀』第一篇、四二四頁、慶長一二年一月二五日条。

(11) 若松実訳『海槎録』江戸時代第一次朝鮮通信使の記録』日朝協会愛知県連合会、一九八五年。

(12) 『徳川実紀』第二篇、三三一頁。

(13) 『通航一覧』第二、一六九頁。

(14) 『国書総目録』第五卷(岩波書店、一九七六年)一九一頁。

(15) 「御当家令条」三号(石井良助編『近世法制史料集』2、創文社、一九八一年)。

(16) 「御当家令条」五号。

(17) 若松実訳『丙子日本日記 江戸時代第四次(寛永一三)朝鮮通信使の記録』(日朝協会愛知県連合会、一九八八年)五三、五四頁。

(18) 若松実訳『癸未東槎日記 江戸時代第五次(寛永二〇)朝鮮通信使の記録』(日朝協会愛知県連合会、一九八八年)四九頁。

(19) 『徳川実紀』第一卷二七〇頁、第五卷四七、三四二頁、第六卷四四頁。

(20) 注(3)の享保度『通航一覽』第二卷、二二五～二二七頁参照。

(21) 『通航一覽』第一、四五九頁。

(22) 『通航一覽』第一、四九四頁。

(23) 『通航一覽』第三、三八五頁。

表1 朝鮮通信使接待役大名

	寛永13年	明暦1年	天和2年	正徳1年	享保4年	寛延1年	明和1年
対馬・府中	宗義成(対馬対馬藩)	宗義成(対馬対馬藩)	宗義倫(対馬対馬藩)	宗義方(対馬対馬藩)	宗義誠(対馬対馬藩)	宗義如(対馬対馬藩)	宗義暢(対馬対馬藩)
杵岐・勝本	松浦隆信(肥前平戸藩)	松浦隆信(肥前平戸藩)	松浦誠信(肥前平戸藩)	松浦棟(肥前平戸藩)	松浦誠信(肥前平戸藩)	松浦誠信(肥前平戸藩)	松浦誠信(肥前平戸藩)
筑前・壺島	黒田光之(筑前福岡藩)	黒田光之(筑前福岡藩)	黒田忠之(筑前福岡藩)	黒田綱政(筑前福岡藩)	黒田宣政(筑前福岡藩)	黒田継高(筑前福岡藩)	黒田継高(筑前福岡藩)
豊前・小倉					小笠原忠雄(豊前小倉藩)		
長門・赤間関	毛利秀就(長門萩藩)	毛利綱広(長門萩藩)	毛利吉就(長門萩藩)	毛利吉元(長門萩藩)	毛利吉元(長門萩藩)	毛利宗広(長門萩藩)	毛利重就(長門萩藩)
周防・上関	毛利秀就(長門萩藩)	毛利綱広(長門萩藩)	毛利吉就(長門萩藩)	毛利吉元(長門萩藩)	毛利吉元(長門萩藩)	毛利宗広(長門萩藩)	毛利重就(長門萩藩)
安芸・蒲刈	浅野光豊(安芸広島藩)	浅野光豊(安芸広島藩)	浅野綱慶(安芸広島藩)	浅野吉長(安芸広島藩)	浅野吉長(安芸広島藩)	浅野吉長(安芸広島藩)	浅野宗恒(安芸広島藩)
備後・鞆	水野勝重(備後福山藩)	水野勝貞(備後福山藩)	水野勝隆(備後福山藩)	阿部正邦(備後福山藩)	阿部正福(備後福山藩)	伊達村侯(伊予吉田藩)	中川久貞(豊後岡藩)
備前・牛窓	池田光政(備前岡山藩)	池田光政(備前岡山藩)	池田綱政(備前岡山藩)	池田綱政(備前岡山藩)	池田綱政(備前岡山藩)	宮村孫左衛門・岡田庄太夫	堀雙十太夫・川崎平右衛門
播磨・室津	本多政朝(播磨姫路藩)	榊原忠次(播磨姫路藩)	本多忠国(播磨姫路藩)	榊原政邦(播磨姫路藩)	榊原政邦(播磨姫路藩)	池田綱政(備前岡山藩)	酒井忠恭(播磨姫路藩)
播磨・明石		松平(彦井)忠国(播磨明石藩)			松平(彦井)忠常(播磨明石藩)		
摂津・兵庫	青山幸成(摂津尼崎藩)	青山幸利(摂津尼崎藩)	青山幸利(摂津尼崎藩)	松平(彦井)忠常(摂津尼崎藩)	松平(彦井)忠常(摂津尼崎藩)	松平(彦井)忠常(摂津尼崎藩)	松平(彦井)忠名(摂津尼崎藩)
摂津・大坂	村上孫左衛門・小川藤左衛門	松村吉右衛門・小川又左衛門	岡部行隆(泉岸和田藩)	室七郎左衛門・前島小左衛門	石原清左衛門・森川又左衛門	幸田善大夫・藤井九左衛門	風祭甚三郎・竹垣正蔵
河内・枚方	久良正俊・曾我古祐	松平(形原)廣信(丹波篠山藩)	末好勘兵衛・小堀仁右衛門	岡部長泰(和泉岸和田藩)	岡部長泰(和泉岸和田藩)	奥谷半四郎・萩原藤四郎	内藤十右衛門・飯塚伊兵衛
	豊島十左衛門・末吉孫左衛門	豊島十左衛門・中村幸右衛門・鈴木三貞	松平(彦井)忠昭(丹波亀山藩)	細田伊左衛門・近山清左衛門	榎井孫兵衛・石原新十郎	永井直期(摂津高槻藩)	松平(形原)信孝(丹波亀山藩)
山城・淀	彦坂平九郎・平野藤左衛門	九鬼隆季(丹波綾部藩)	服部六右衛門・角倉与市	青山忠重(丹波亀山藩)	萬年長十郎	渡辺民部	
	永井尚政(山城淀藩)	豊島十左衛門・角倉与市	石川義孝(山城淀藩)	松平(戸田)光重(山城淀藩)	角倉与市	稲葉正益(山城淀藩)	稲葉正益(山城淀藩)
山城・京都	岡部宣勝(摂津高槻藩)	本多俊次(近江膳所藩)	市岡理右衛門・藤林藤兵衛	本多康慶(近江膳所藩)	平岡四郎左衛門・久下作左衛門	小堀十左衛門・角倉与市	本多康恒(近江膳所藩)
	藤林市兵衛・木村宗右衛門	多羅尾久右衛門・小野長左衛門	多羅尾四郎右衛門・小野長右衛門	多羅尾四郎右衛門・小野長右衛門	本多康慶(近江膳所藩)	柳沢徳清(大和郡山藩)	小堀数馬・角倉与市
近江・大津	菅沼定芳(丹波亀山藩)	谷衛政(丹波山家藩)	九鬼隆律(摂津三田藩)	辻弥五左衛門・古川武兵衛	坂井弥五左衛門・内山七兵衛	小堀十左衛門・角倉与市	青山忠高(丹波篠山藩)
	小野宗左衛門	九鬼隆昌(摂津三田藩)	谷衛広(丹波山家藩)	谷照憲(丹波山家藩)	谷衛衛(丹波山家藩)	石原清左衛門	石原清左衛門
近江・守山	石川忠総(近江膳所藩)	石川憲之(伊勢亀山藩)	板倉重常(伊勢亀山藩)	松平(大船)乗邑(伊勢亀山藩)	板倉重治(伊勢亀山藩)	石川總慶(伊勢亀山藩)	石川總慶(伊勢亀山藩)
	観音寺	観音寺	観音寺	石原清左衛門・万年七郎左衛門	多羅尾四郎右衛門・久下藤十郎	瀧川小左衛門・多羅尾四郎左衛門	多羅尾四郎右衛門・志村新左衛門
近江・八幡	市橋長政(近江仁正寺藩)	山口重恒(近江水口近所)	山口重定(常陸牛久藩)	市橋信直(近江仁正寺藩)	加藤嘉矩(近江水口藩)	加藤明照(近江水口藩)	斎藤新八郎
	小堀政一(近江小室藩)	小堀正之(近江小室藩)	小堀正恒(近江小室藩)	竹内喜左衛門・角倉与市	遠山半四郎	小野左大夫	
近江・彦根	井伊直孝(近江彦根藩)	井伊直孝(近江彦根藩)	井伊直該(近江彦根藩)	井伊直該(近江彦根藩)	井伊直惟(近江彦根藩)	井伊直定(近江彦根藩)	井伊直幸(近江彦根藩)
	井伊直孝(近江彦根藩)	井伊直孝(近江彦根藩)	井伊直該(近江彦根藩)	井伊直該(近江彦根藩)	井伊直惟(近江彦根藩)	井伊直定(近江彦根藩)	井伊直幸(近江彦根藩)
美濃・今須	井伊直孝(近江彦根藩)	井伊直孝(近江彦根藩)	井伊直該(近江彦根藩)	井伊直該(近江彦根藩)	井伊直惟(近江彦根藩)	井伊直定(近江彦根藩)	井伊直幸(近江彦根藩)
	岡田将監・道藤宇兵衛	岡田将監	杉田九郎兵衛・石原清左衛門	辻六郎左衛門	井伊直惟(近江彦根藩)	青木次郎九郎	千種平右衛門
美濃・大垣	戸田氏徳(美濃大垣藩)	戸田氏信(美濃大垣藩)	戸田氏西(美濃大垣藩)	戸田氏定(美濃大垣藩)	戸田氏定(美濃大垣藩)	戸田氏英(美濃大垣藩)	戸田氏英(美濃大垣藩)
美濃・墨俣	大久忠職(美濃加納藩)	松平(戸田)光重(美濃加納藩)	松平(戸田)光重(美濃加納藩)	松平(戸田)光重(美濃加納藩)	戸田氏定(美濃大垣藩)	戸田氏英(美濃大垣藩)	戸田氏英(美濃大垣藩)
	岡田将監	岡田将監	杉田九郎兵衛・石原清左衛門	杉田九郎兵衛・石原清左衛門	戸田氏定(美濃大垣藩)	戸田氏英(美濃大垣藩)	戸田氏英(美濃大垣藩)

[illegible]

相模・大磯	浅野長直(常陸空閑藩) 遠藤慶利(美濃八幡藩) 坪井治左衛門	黒田之勝(筑前東蓮寺藩) 坪井治右衛門	松平(徳井)康官(石見浜田藩) 坪井治右衛門	松平(徳前)直常(播磨明石藩) 諸星内蔵助	鳥居忠勝(下野壬生藩) 遠藤七左衛門	松平(徳前)直純(播磨明石藩) 堀江清次郎(荒四郎?)	脇坂安親(播磨赤野藩) 渡辺半十郎
相模・藤沢	仙石政俊(信濃上田藩) 小出吉親(丹波龍崎藩) 成瀬五左衛門	大村純長(肥前大村藩) 松平(能見)英親(豊後杵築藩) 成瀬五左衛門	伊達宗純(伊予吉田藩) 土岐綱殷(出羽上山藩) 成瀬五左衛門	稲葉恒道(豊後臼杵藩) 下島甚右衛門・飯島八郎右衛門 崎須賀隆長(阿波新田藩) 伊奈半左衛門	堀直為(豊後村松藩) 小宮山長右衛門・柘植兵太夫	細川利寛(肥後新田藩) 柴村藤右衛門・木村豊八	稲葉泰通(豊後臼杵藩) 岩松徳右衛門・泉本藤左衛門
相模・戸塚							
相模・川崎							
武蔵・神奈川	加藤明利(陸奥二本松藩) 松下長綱(陸奥三善藩) 伊奈兵衛	小出吉英(但馬出石藩) 細川行孝(肥後宇土藩) 伊奈半左衛門	伊東祐実(日向飫肥藩) 植村家貞(大和高取藩) 伊奈半十郎		黒田長貞(筑前秋月藩) 伊奈半左衛門	溝口直温(豊後新発田藩) 伊奈半左衛門	溝口直養(豊後新発田藩) 伊奈半左衛門
武蔵・品川	總田長政(大和成重藩) 相馬義胤(陸奥中村藩) 守屋左太夫	松平(深溝)忠房(丹波福知山藩) 溝口宣直(豊後新発田藩) 伊奈半左衛門	松平(能見)英親(豊後杵築藩) 大村純長(肥前大村藩) 伊奈半十郎	加藤泰恒(伊予大洲藩) 伊奈半左衛門	松平豊前守(武蔵内3) 伊奈半左衛門	京極高矩(讃岐丸亀藩) 伊奈半左衛門	伊東祐福(日向飫肥藩) 伊奈半左衛門
武蔵・江戸	安藤重長(上野高崎藩) 脇坂安元(信濃飯田藩)	岡部宣勝(和泉岸和田藩) 加藤泰興(伊予大洲藩)	小笠原長勝(豊前中津藩) 内藤頼長(陸奥磐城平藩)	酒井忠直(若狭小浜藩) 眞田幸道(信濃松代藩)		戸沢正隆(出羽新庄藩) 伊東祐隆(日向飫肥藩)	加藤泰武(伊予大洲藩) 毛利匡清(長門所中藩)

出典:寛永13年「寛永十三年、朝鮮の信使対馬を出船して、江戸まで海陸御馳走の次第」

明暦1年『今度朝鮮人来朝之時、海陸御馳走所、帰国同前、朝鮮人来朝に付、対馬より日光迄の馳走人』

天和2年「天和二年朝鮮人来聘付、所々御馳走被仰付之」

正徳1年「正徳元年朝鮮人来聘帰国之前、海陸所々御馳走人」

享保4年「享保四年二月朝鮮人来御用被仰付之/当秋朝鮮人来朝に付、海陸道防所々御馳走人被仰付候御衆中」

寛延1年「道中の事、来朝帰国ともに休泊、同所御馳走人/寛延元年朝鮮人道中休泊/寛延元年朝鮮人道中泊休御馳走固御前方」

明和1年「旅中御馳走人/宝暦十三年朝鮮人御馳走固場所付」

以上、『通航一覽』、注(3)参照。

表2 国主・城主・御馳走人と接待場所

国	藩・大名	寛永13年	明暦1年	天和2年	正徳1年	享保4年	寛延1年	明和1年
日向	飢肥・伊東			神奈川			江戸	品川
豊後	臼杵・稲葉 杵築・松平 岡・中川		藤沢 三島	品川	戸塚			藤沢 鞆
豊前	小倉・小笠原 中津・小笠原			江戸		小倉		
肥後	宇土・細川 新田・細川 人吉・相良		神奈川 三島				藤沢	
筑後	三池・立花					駿府		
対馬	対馬主	府中本	府中本	府中本	府中本	府中本	府中本	府中本
肥前	平戸城主 小城・鍋島 蓮池・鍋島 大村・大村 島原・松倉	勝本 吉原	勝本 藤沢	勝本 品川	勝本 江尻	勝本	勝本 江尻	勝本 江尻
筑前	福岡主 秋月・黒田 東蓮寺・黒田	藍島	藍島 吉原 大磯	藍島	藍島	藍島 神奈川	藍島	藍島
長門	長門・周防守 府中・毛利	赤間関	赤間関	赤間関	赤間関	赤間関	赤間関	赤間関 江戸
周防	長門・周防守 長府・毛利	上関	上関	上関	上関	上関	上関 吉原	上関
安芸	広島主	蒲刈	蒲刈	蒲刈	蒲刈	蒲刈	蒲刈	蒲刈
備後	福山城主	鞆	鞆	鞆	鞆	鞆		
備前	備前主	牛窓	牛窓	牛窓	牛窓	牛窓	牛窓	牛窓
石見	浜田・松平			大磯				
美作	勝山・三浦							見附
備中	足守・木下 松山・水谷			三島 江尻				
伊予	大洲・加藤 吉田・伊達 今治・松平		江戸	藤沢	品川		三島 鞆	江戸
讃岐	丸亀・京極					吉原 江尻	品川	吉原
阿波	新田・蜂須賀				川崎			
但馬	出石・小出		神奈川	江尻				
丹後	田辺・牧野				吉原			
若狭	小浜・酒井				江戸			
丹波	綾部・九鬼 福知山・松平 亀山・菅沼 亀山・松平 亀山・松平 亀山・青山 山家・谷 篠山・青山 篠山・松平 蘭部・小出	大津 藤沢	枚方 品川 大津 大坂	吉原 枚方 大津		枚方 大津 枚方 大津		枚方 大津
播磨	姫路城主 明石・松平 赤穂・浅野 竜野・京極 竜野・脇坂	室津	室津 石 江尻	室津 三島	室津 大磯 三島	室津 石	室津 大磯	室津 三島 大磯
摂津	尼崎城主 三田・九鬼 高槻・岡部	兵庫 京都	兵庫 大津	兵庫 大津	兵庫	兵庫	兵庫	兵庫

	高槻・永井					枚方	
和泉	岸和田城主		江戸	大坂	大坂	大坂	大坂
大和	戒重・織田品川 高取・植村 郡山・柳沢			神奈川			
山城	淀城主	枚方・淀	淀	淀	淀	淀	淀
伊勢	龜山・石川 龜山・板倉 龜山・松平		守山	守山	守山	守山	守山
志摩	鳥羽・板垣						赤坂
近江	膳所・石川 膳所・本多 仁正寺・市橋 水口・山口 水口・加藤 小室・小堀 彦根城主	守山 八幡 八幡 彦根・今須	守山 京都 八幡 彦根・今須	京都 京都 八幡 彦根・今須	京都 京都 八幡 彦根・今須	彦根・今須	京都 八幡 彦根・今須
美濃	大垣城主 岩村・松平 八幡・遠藤 加納・大久保 加納	大垣 大磯 大磯	大垣 大垣 墨俣	大垣 大垣 墨俣	大垣 大垣 墨俣	大垣 大垣 八幡	大垣
尾張	尾張殿 尾張殿	名古屋・鳴海	名古屋・鳴海	名古屋・鳴海	名古屋・鳴海	名古屋・鳴海	名古屋・鳴海
三河	岡崎城主 吉田城主 刈谷・三浦 中島・板倉 田原・三宅 西尾・土井 菅母・内藤	岡崎・赤坂 吉田 新居	岡崎 赤坂・吉田 新居	岡崎 赤坂・吉田 新居	岡崎 赤坂・吉田 新居	岡崎 吉田・新居 赤坂	岡崎 吉田・新居 駿府
遠江	浜松城主 掛川城主 横須賀・井上 横須賀・本多 横須賀・西尾	浜松 掛川・金谷 見附	浜松 掛川・金谷 見附	浜松 掛川・金谷 見附	浜松・見附 掛川・金谷	浜松・見附 掛川・金谷	浜松 掛川・金谷
駿河	田中城主	藤枝	藤枝	藤枝	藤枝	藤枝	藤枝
相模	小田原城主	箱根・小田原	箱根・小田原	箱根・小田原	箱根・小田原	箱根・小田原	箱根・小田原
武蔵	武蔵内松平					品川	
常陸	笠間・浅野 牛久・山口	大磯		八幡			
上野	高崎・安藤	江戸					
下野	壬生・鳥居					大磯	
越前	丸岡・有馬					三島	
越後	新発田・溝口 村松・堀	三島	品川			藤沢	神奈川 神奈川
信濃	上田・仙石 飯田・脇坂 松代・真田	藤沢 江戸			江戸		
出羽	上山・土岐 新庄・戸沢	三島 吉原	江尻	藤沢		江戸	
陸奥	二本松・加藤 三春・松下 中村・相馬 磐城平・内藤	神奈川 神奈川 品川		江戸			

近世琉球における「御家流」と「唐字」

― 対外交流と書体・書風 ―

深瀬公一郎

はじめに

九州は近世日本の周縁地域に位置し、いわゆる「四つ口」のうち「対馬口」・「長崎口」・「薩摩口」の三つが存在していることから、対外交流と関係が深い地域である。そのため九州諸藩は、様々な形で対外交流のと関わりが強かった。対馬藩は、釜山に設置された倭館を拠点に外交・貿易・海外情報収集など日朝関係の実務を担っており、また佐賀藩や福岡藩は長崎の警備を担当していた。薩摩藩は、琉球を支配下に置くことで「異国」を包摂した藩世界を形成していた。

二〇〇五年度から参加した史料調査では、九州諸藩の対外交流に関する史料、特に異文化コミュニケーションのあり方に関する史料について調査をおこなった。対馬藩関係の史料調査では、書契の作成に関わった以酊庵や真文方に関する史料を調査したが、以酊庵僧が書契の文言だけでなく文字の書体や正字・俗字まで添削していた事実は大変興味深いものであった⁽¹⁾。東アジアでは外交文書に漢字が使用される場合が多いが、漢字には書体によって正字・俗字

など複数の字体が存在する。外交文書では、文言だけでなく文字の書体も看過できない重要な構成要素であったことを示唆している。そこで本論では、対外交流と文字のあり方、特に書風・書体について検討していく。今回は事例として、薩摩藩の支配下にあった琉球士族の書風・書体について分析していきたい。

近世期の琉球からは優れた書家が輩出されるが、彼等はすべて琉球士族である。そのため琉球士族の書風・書体については、主に書道史の立場から研究がすすめられてきた⁽²⁾。しかし、書風・書体は、芸術における憧れや流行だけで広まったわけではない。「御家流」が近世武家社会の公文書の書体となることで急速に普及したことからもわかるように、様々な社会的背景に起因して文字の書風・書体は拡大していくのである。そこで本論では、琉球士族がどのような社会的背景のもとで文字の書風・書体を習得していたのか、特に対外交流との関連から検討していきたい。

第一章 琉球士族への「御家流」の浸透

(一) 書札礼の伝播と琉球士族による習得

近世琉球において王府の公文書の書体は、幕府や薩摩藩と同じく「御家流」であった⁽³⁾。「御家流」がいつごろから琉球に伝わったかは不明であるが、書体・書風と密接に関係する書札礼と共に薩摩から琉球へ伝わったと推測される。

そこでまず琉球への書札礼の伝播からみていきたい。

琉球への書札礼の伝播の時期についても詳細は不明である。『球陽』によれば、一六三四年、金武王子朝貞が上国した際に、伊勢貞昌の薦めにより、随員の一人であった津波古親雲上元重が「翰書」の法を学び、琉球に伝えたところである⁽⁴⁾。同時期に日本宛の琉球国王書の表記が「中山王」から「琉球国王」へ変更となっており⁽⁵⁾、津波古親雲上が「翰書」の法を学んでいたのはこのことと関係すると思われる。

津波古親雲上の他にも多くの琉球士族が薩摩で書札礼を学んでいる。ではなぜ薩摩から書札礼を学ぶ必要があったのだろうか。一七一三年、琉球王府は屋良親雲上宣易に対し、薩摩で島津久洪から学んだ書札礼を、器量の人を見合わせて深秘残らず伝授するように次のように命じている⁽⁶⁾。

其方事先年於大和北谷王子朝愛名代被申付嶋津圖書殿久洪書禮方相傳御用相立神妙之至候御當國之儀御國許（江）之御禮儀旁書通以萬端御通達仕事候得者書禮方相傳到往往茂御用向無滯相調候儀其方之面目就中國用之儀候条其器量之人見合深秘不殘可被致傳授候以上

已

三月二十六日

浦添親方

伊舎堂親方

屋良親雲上

田嶋親方
豊見城王子

王府は薩摩で習得した書札礼の必要性について、琉球（御當國）は薩摩藩（御國許）への「禮儀」は書通をもつておこなうことから必要としている。琉球侵略以来、琉球王府は薩摩藩に対して従属関係を強いられることになった。琉球国王・島津氏間の書状だけでなく、王府役人・薩摩藩士間の書状、そして琉球王府・薩摩藩間の文書にも、この従属関係が反映されることになる。書状や文書によって上下関係の確認がおこなわれるためには、双方が共通の書札礼に熟達しておく必要性があった。そのため王府は上位者である薩摩藩の書札礼を習得せざるを得なかったのである。

書札礼の必要性は、薩摩藩との関係ばかりでなく王府内でも必要とされていた。次の史料は、鹿児島城下での書札礼の師匠を依頼する文案である。琉球士族が書札礼を習得しなければならぬ理由として次のように述べられている⁽⁷⁾。

琉球之儀御当地へ之御用筋を始國中政道向彼是ニ付而之文段専和文章を用申事二而、琉球奉公人皆稽古不仕候者「而力」不叶芸術、殊更私ニハ筆者役相勤候筋之者故、

取分其嗜無之候而ハ奉公方差支申候、

琉球では「和文章」すなわち日本式文書が、薩摩藩の御用筋だけでなく、「国中政道向」すなわち王府の行政においても用いられており、そのため「奉公人」である琉球士族は習得しなければならぬと述べている。ここでは、琉球王府の行政文書として日本式文書が使用されていたこと、王府の行政官僚として書札礼は琉球士族に必須の専門知識であつたことに注目したい。

王府で日本式文書が本格的に使用されるようになったのはいつごろであろうか。古琉球から継起的に作成されていた辞令書の場合、羽地仕置を機に「近世辞令書」の形式に変化した⁽⁸⁾。辞令書の書体が「御家流」となるのも「近世辞令書」からである。羽地仕置とは、一六六六年に摂政へ就任した羽地朝秀によっておこなわれた改革の総称で、古琉球から近世琉球への転換期と評価されている。十七世紀中頃、島津氏の琉球侵入や明清交替などにより、琉球を取り囲む国際情勢や社会状況は大きく変容したことから、王府は実情に即した社会体制と王府組織の再編が必要とされていた。王府の組織改革の一つが、「廻文」など文書行政の拡充である。羽地は改革に際して薩摩藩の諸制度を参考にしており、「廻文」などの文書行政も薩摩藩の影響があつたとされる⁽⁹⁾。羽地仕置によって王府の文書行政が整備され

るなかで、日本の書札礼も王府の公文書に取り入れられたと考えられる。

近世期の日本では文字社会が拡大し、將軍から大名家臣団まで統一的な文書行政が拡大していく。王府が薩摩藩に倣い文書行政を整備したことによって、幕府の文書行政は琉球王府をも包摂することになり、幕府からの命令は文書によって琉球まで徹底されることになったのである⁽¹⁰⁾。

一方で王府の文書行政の整備により、官僚組織を支える琉球士族は、文書行政に精通しなければならなかった。文書行政の専門的知識を習得する必要性から、琉球士族は積極的に書札礼を学ぶことになったのである。

(二) 琉球士族による「御家流」の習得

さて、王府に近世日本の文書行政が拡大したことは、同時に琉球士族の書体にも大きな影響を与えることになる。書状や文書の表記の書き分けには「くずし」などの書体も重要な意味が含まれていたからである⁽¹¹⁾。そのため、文書形式だけでなく「御家流」の書体も琉球士族は習得しなければならなかった。

琉球士族が「御家流」を学ぶ際に使用した手本が、琉球大学附属図書館の宮良殿内文庫に収められている。宮良家は八重山の頭職を代々勤めており、同文庫には『大橋庭訓往来』や『大橋長右衛門殿御手跡』がある。大橋流は、幕

府の右筆を勤めた大橋重保・重政を開祖とする書流で、曾我流・伝内流とともに幕府の公用書体に大きな影響を与えたとされる⁽¹²⁾。「御家流」の書体は、首里・那覇・泊・久米村の士族だけでなく、八重山など地方役人までひろく普及していたのである。

さて、王府による文書行政の拡充は、能書に対する琉球士族の意識にも影響を与えた。この点について次の史料から考えてみたい⁽¹³⁾。

口上覚

島袋筑登之親雲上

右者多年御右筆役相勤御用向茂能取覚相弁、就中薩陽御右筆頭衆より能筆之誉有之候段承及誠ニ役務之詮相立頂上之事候処、家内統方及窮迫依願此節米御蔵大屋子江転役被仰付置候、然処御右筆役之儀江府薩州江之御書翰向被授置、書札文筆等上達無之候得者御外聞ニ掛不輕職務之事候処、彼是稽古方ニ付而者物入茂有之候故、頃年世上之面之手迫ニ相成候所先以御扶持を蒙家中取統度与之心入ニ而、書役等之嗜薄体ニ成来候処、右様之振合ニ而者終ニ御書翰向之取計可致人体差支候様ニも可罷成哉、左候へハ嗜之しらへを以相勤候役職致上達候方者其御見合を以被召仕候ハ、おのつから御奉公人之励相成夫々之嗜方致出精往々御用向之弁達も猶宜罷成筈候條条、御

賢慮之上島袋事他国江御応答之一芸抽相嗜国土之誉相成候次第、格別之御取分を以何卒御蔵役掛而今程御右筆勤通被仰付被下度奉存候、此旨可然様御取成可被下儀奉頼候、以上

島袋筑登之親雲上は、多年に渡って右筆を勤め、薩摩藩の右筆衆からも「能筆之誉」と評されていた。史料では、まず右筆は江戸・薩摩への書翰を担当し、書札文筆が上達しなければ外聞にも関わる軽からざる職務であると述べ、その職務の重要性を強調している。そして島袋筑登之親雲上が「他国江御応答之一芸」と右筆としての専門的技術が優れていることを根拠に、右筆勤を願っている。琉球国外との文書は国家の体面にも関わる問題であり、また書札礼の不備は相手国との関係に影響を与えかねない。そのため能書であり書札礼に精通することは官僚としての専門技術として重要であった。一方で能書・書札礼という専門知識と技術は、琉球士族にとって「出世」の手段となっていたのである。

薩摩藩の琉球支配という外的要因によって琉球にもたらされた「御家流」の書体は、王府の官僚制度の整備と文書行政の拡大によって官僚としての専門技術となり、琉球士族は積極的に習得するようになったのである。

第二章 対外使節の派遣と琉球士族の「書」

(一) 对中国外交と琉球士族の「書」

さて、前章では、琉球士族が習得していた書体について、日本、特に薩摩藩との関係から「御家流」の浸透をみてきた。本章では、中国との関係から琉球士族の書体への影響を考察していきたい。

右筆が薩摩藩や江戸の幕府など対日本関係の書翰を作成する役職であるのに対し、对中国関係の文書を作成したのが漢字右筆である。漢字右筆もまた、右筆と同じく对中国関係の文書を扱う専門知識と技術を必要とされた。そのことは次の案文にも表されている⁽¹⁴⁾。

文組主取漢字右筆主取向後年季代被仰付度旨惣役長史より申出趣有之候付、何様可被仰付哉吟味を以可申上旨被仰付私共申談候者、文組主取之儀漢文組立方并文之類作為之惣師匠請込相勤申事ニ而別而肝要成職務候得ハ、常々工夫鍛錬を尽し能々其嗜無之候而不叶儀候故跡々々定役被仰付置御事候処、右申出通年季代相成候ハ、夫長役職輕目之方相成、おのつから文才之輩出来少可相成儀案中御座候、尤平日之御用ハ御旧案等見合随分相調管候得共、自然例之事共致出来候節ハ甚御用支可相成段ハ勿論、依体ハ御難題ニも成立可申哉与存申候、将又漢字御右筆主取之儀唐向之御書翰書認、就中表奏之儀者被備

皇覽至而為重立御書翰候処、認方又ハ御仕出様等一々法式之通相調不申不叶儀候処、是又不斷代合之向相成候ハ、夫々之本式取調候様不罷成、別而差支候儀も可致出来事ニ而、兩役共御当地中ニ而之御用向与ハ訳も相替申候間、当分之通定役被仰付候方可然哉与申談候、此段申上候、以上

内容は、文組主取・漢字右筆主取の兩役を年季代ではなく定役とすることを願ひ出たものである。ここでは、その主張の根拠に注目したい。史料では、まず漢字右筆の職務内容を、对中国関係の文書、特に清朝皇帝が閲読する表奏文の作成・清書をおこなう重要な職務としている。そしてその作成には清朝の法式に則さねばならないとし、文組主取とともに「御当地中ニ而之御用向与ハ訳も相替申候」とその特殊性と専門的技術の必要性を強調している。清朝の公文書に則した法式や書体は、对中国関係を取り扱う久米村士族にとって官僚としての専門技術だった。そして、この専門技術を根拠に定役を願ひ出ていることから、やはり「出世」につながるものとして積極的に習得されていたのである。

一方、琉球士族が文化として中国の「書」に接していたことも忘れてはならない。例えば、久米村出身の程順則は、福州で儒学者陳元輔に学び、陳元輔・顔心卿・柳公権の書

を学んだとされる⁽¹⁵⁾。また同じく久米村出身の能書家の鄭嘉訓は、宋代の米芾や清代の董其昌の書を好み学んだと言われている⁽¹⁶⁾。また首里士族の我謝盛保は官生として中国に渡り、趙子昂、文徵明の帖学を学んだといわれる⁽¹⁷⁾。渡唐使節の一員として渡唐する機会のあった琉球士族は、中国で直に「書」を学ぶ機会を得ることができたのである。

冊封使との交流も、琉球士族が中国の書体・書風を学ぶ際に大きな影響を与えた⁽¹⁸⁾。冊封使の使節団には書画に優れた使節員が含まれていた。例えば、一七五六年に来琉した冊封使節団には、書家として名高い王文治が加わっている。また冊封使の評価貿易によつて、文徵明や董其昌などの法帖が琉球にもたらされている。

琉球士族は、直接に中国の「書」を学ぶ機会があり、また一流の書家と直接に交流することもあった。このような中国との関わりから、琉球士族の中からは程順則や鄭嘉訓など「御家流」を基調としながらも中国の書風の影響を強く受けた能書家を輩出したのである。

(二) 琉球使節の「書」の交流

外交使節による「書」の交流は、琉球の渡唐使節や冊封使だけではない。琉球から江戸に派遣される慶賀使・謝恩使でも盛んに「書」の交流がおこなわれており、琉球使節の往来した沿道には扁額や「書」が残されている。

では、このような琉球使節の「書」の交流は琉球士族の書体・書風にどのような影響を与えたのだろうか。一八四二年、徳川家慶將軍就任の慶賀使に楽師として参加した久米村士族・牧志里之子親雲上は、次のような褒章を王府から受けた⁽¹⁹⁾。

其方事、去年樂師ニ而上國於江戸寔嶋手跡詩文等之御用則々相弁且江戸往來自作之詩從少將様御用ニ付八拾首程書認差上、且芝御屋敷江御呼之時唐音ニ而書物讀方被仰付且於御前唐音ニ而誦詩等被仰付候處無支相弁、且他國御太名衆并脇方より里茂手跡詩文等之所望も多々相弁候段、賛議官糸洲親雲上申出趣有之、兼而嗜宜格別成御用相弁殊勝之至候、依褒美狀如件

道光廿三年癸卯十一月廿九日

牧志里之子親雲上

三司官

右の褒章によれば、牧志里之子親雲上は、詩作、「唐音」での書物読方・誦詩、そして他国大名や脇方への手跡詩文の求めに応じたことが評価されている。このように外交使節員にとって、文化交流は重要な職務だった。外交使節員にとって文化交流の「場」は国家の面目をかけて教養を試される場であり、能書であることは、国家を代表する外交

使節員にとって必要な専門技術でもあった。そのため、王府では慶賀使・謝恩使の派遣前に、使節員に対して「書」の訓練を命じていた。例えば、徳川家慶將軍就任の慶賀使の楽童子・真壁は「字師」をつけられ昼夜稽古に励んだ⁽²⁰⁾。外交使節員にとって能書が専門技術として意識されていたことは次の史料からもわかる⁽²¹⁾。

小波藏親雲上当間親雲上其外久米村学生中江可被相達
覚

今度於国元ニ唐学方役々々嘉味田親雲上詩作懇望有之、
旧作即興唐滞在中之作爲等書出候処、御家老中御見届相
成、造士館教授役々江吟味被仰付候処、至而讃嘆有之、
古今名高キ程順則之作爲ニも劣間敷旨被申出依之江戸江
被差登 太守様被 御覽筈候、誠□琉球国之御名揚ニ相
成候間、此御方江も可申上趣旨爲被仰渡由、在番親方よ
り申越有之、殊勝之至、摂政三司官御大慶被思召候、然
者久米村之儀三十六姓之後裔今以儒学専被相授置候付、
聊油断ハ無之筈候得共、右嘉味田親雲上滞在中致試作、
御国中ハ勿論江戸表迄名高相聞得候付而ハ、此以後猶又
久米村人之作為御用も被仰付候間、一涯其心懸可有之候、
然迪詩文章を専稽古仕候様ニ与之儀ニ而ハ無之、平常經
書を本業にして其外百家之書翰致博覧、往々作為向之御
用も無支一統相弁候様ニ与之御趣意候、就中小波藏当間

事ハ議衛正樂師ニ而□□□江戸江も被差登筈候得者詩文
手跡取分出精可有之□、右両役者於和朝ニも儒者之事相
心得、諸国大儒之面々々も作為之交通段々可有之候條、
其場少も無支様精々練熟可有之候、跡々江戸立之筋ハ博
学能書之面々罷登琉国之譽を取候方も有之候処、右両人
夫長無之候得者唐榮之人才衰微之筋相聞得久米村之恥辱
者不及申、畢竟御名折ニ相成事候条、此旨深ク汲受夜白
致出精候様ニ与之仰ニ候事

月日

史料前半では、嘉味田親雲上が詩作について薩摩で高く
評価されたことが述べられているが、ここでは史料後半に
注目したい。小波藏親雲上・当間親雲上が琉球使節（江戸
立）の使節員として詩文手跡を差支えなくおこなったこと
を取り上げ、「江戸立之筋ハ博学能書之面々罷登琉国之譽を
取候方も有之候」として琉球使節の使節員として能書・博
学の重要性を述べている。そして能書・博学が久米村の名
譽に関わるものとして認識されている。

このように外交使節団の文化交流から、能書が欠かせな
い教養であり専門的技術となつていき、久米村のアイデン
ティティともなつていたのである。

さて、琉球の「書」は、日本の人々に熱狂的に受け入れ
られた。鹿児島城下の聖堂には、琉球国王の扁額が掲揚さ

れていた⁽²²⁾。また島津氏の別邸である仙巖園喜鶴邸の扁額は、能書家であった伊江按司（向世俊）によって揮毫された⁽²³⁾。

では日本^{ヤマト}の人々は琉球の「書」をどのように認識していたのだろうか。ここで留意しておきたいのは、程順則や鄭嘉訓など久米村出身の能書家で中国の書風・書体を学んで者でも、「御家流」が基調となつている点である。彼らは能書家である前に王府官僚であり、国内の行政文書作成の実用書体として「御家流」を習得し、その上で中国の書体・書風を習得しているのである。すなわち、日本^{ヤマト}の人々が琉球士族に求めたものは、中国の書体・書風ではなく、「御家流」など日本^{ヤマト}とは異なる書風だったのである。近世後期に日本で興隆した「唐様」の書体は、和様以外の多様な書体であり、漢詩・漢文などを揮毫する際に用いられる書体であった。人々は「唐様」に対して、学問の威光、官学としての儒学、漢詩文の教養、文人墨客への志向、文墨趣味へのイメージを投影していた⁽²⁴⁾。日本^{ヤマト}の人々にとって琉球の「書」もまた「唐様」の書のひとつであったのかもしれない。

このような日本^{ヤマト}の人々の心性が琉球の「書」をもとめ、これに対応して琉球では「書」が外交使節員としての専門技術となつたのである。

おわりに

近世における琉球士族の書風・書体の特徴と、その背景をまとめておきたい。

琉球士族の書風・書体には、琉球王府の対外交流が大きく影響していた。一六〇九年の琉球侵略により、琉球は幕府および薩摩藩の支配を受けることになる。幕府・薩摩藩と琉球王府との書状には上下関係が示されることになり、使用する文言や様式にも注意する必要が生じた。そのため、琉球王府では薩摩より書札礼を習得することになる。

近世日本では、文字社会が拡大し、將軍から大名家臣団まで文書行政が拡大した。琉球王府は近世日本の強い規定性の下に置かれ、キリシタン禁令など幕府からの指示は琉球王府まで徹底されることになる。そのため琉球でも近世日本と共通する文書様式が用いられるが、このとき書札礼と共に近世日本の公用書の書体である「御家流」が琉球にも普及することになった。

琉球王府は、島津氏侵略と明清交替という新しい国際状況に対応するため、王府組織の改編がおこなわれ、薩摩藩を参考にした改革がおこなわれた。そのなかで文書行政が拡充すると、琉球士族は、琉球王府を支える官僚としての側面から、文書に対する専門知識が必須とされた。そのため、琉球士族は「御家流」の書体を身につけることになった。

前近代の東アジアにおける外交慣例、すなわち使節員による文化交流も、琉球士族の書体・書風に大きな影響を与えた。琉球士族は、渡唐使節として中国で直接に「書」を学ぶ機会を得ていた。また琉球に渡海する冊封使を通じて優れた「書」に触れる機会もあった。琉球士族のなかには「御家流」を基調としながら中国の書風の影響を強く受ける能書家が現われることになる。

外交使節団に「書」の交流は、日本でもおこなわれた。

特に慶賀使・謝恩使が江戸に上るときには、將軍から諸大名・協方まで使節員の「書」が披露された。使節員が能書であることは、外交使節員としての専門技能とされ、久米村ではその訓練が奨励されていた。「書」は、行政官僚の技術としてばかりでなく、外交使節員の技術としても積極的

に琉球士族に習得されていたのである。

(1) 『以酹庵応対控』(対馬歴史民俗資料館所蔵、朝鮮方関係 頭役・加役 B1)

(2) 琉球書道史の概要については、屋部憲次郎「沖縄の書」(沖縄美術全集刊行委員会編『沖縄美術全集 第四巻』(沖縄タイムス社、一九八九年))を参照。同書には琉球の書家の作品と解説も収められている。書家の個別経歴については、池宮正治『近世沖縄の肖像 上・下』(ひるぎ社、一九八二年)を参照。

(3) 前掲屋部論考

(4) 球陽研究会編『球陽 附卷』(角川書店、一九七四年) 五八九頁

(5) 紙屋敦之『幕藩制国家の琉球支配』(校倉書房 一九九〇年) 第二部第三章「琉球国司考」

(6) 「麻姓家譜」(『那覇市史 資料編 第1巻7編 家譜資料 首里系』(那覇市企画部市史編集室編、一九八二年)) 六一六頁

(7) 「万書付集」(『那覇市史 資料編 第1巻11編 琉球資料(下)』(那覇市企画部市史編集室編、一九九一年)) 七六四頁

(8) 高良倉吉『琉球王国の構造』(吉川弘文館、一九八七年) 八六頁

(9) 梅木哲人「沖縄農村の成立」(『新琉球史 上』琉球新報社、一九八九年)、同「評定所の機構と評定所文書」(『琉球王国評定所文書 四』浦添市教育委員会、一九九〇年)。琉球王府の公文書には中国元号が用いられるなど、完全に日本式になったわけではない。

(10) 薩摩藩と琉球王府間の文書は、薩摩藩家老―鹿児島琉球館(開役・在番親方)―撰政・三司官の経路で伝達された。

(11) 小宮木代良『江戸幕府の日記と儀礼史料』(吉川弘文館、二〇〇六年) 二七四頁

- (12) 小松茂美「幕府の公用書体」・「御家流の分流」(『日本書流全史』、一九七〇年)
- (13) 『那覇市史 資料編 第1巻11編 琉球資料(下)』四三八頁
- (14) 『那覇市史 資料編 第1巻11編 琉球資料(下)』二〇三頁
- (15) 屋部前掲論考
- (16) 沖縄美術全集刊行委員会編『沖縄美術全集 第四巻』(沖縄タイムス社、一九八九年)二五二頁
- (17) 右同 二五八頁
- (18) 冊封使の「書」の交流については、真栄平房昭「琉球王国に伝来した中国絵画」(『沖縄文化』第四十巻二号、二〇〇六年)を参照した。
- (19) 「魏姓家譜」(『那覇市史 資料編 第1巻8編 家譜資料 久米系』(那覇市企画部市史編集室編、一九八二年)四五頁
- (20) 「孫姓家譜」(『那覇市史 資料編 第1巻8編 家譜資料 久米系』)四五六頁
- (21) 『那覇市史 資料編 第1巻11編 琉球資料(下)』
- (22) 『球陽 附巻』六〇七頁
- (23) 『那覇市史 資料編 第1巻7編 家譜資料 首里系』三四〇頁
- (24) 青山由紀子「江戸時代における「御家流」と「唐様」―

「書体」というメディアの情報伝達」(『表現文化研究』第1巻2号 二〇〇一年)

対馬藩田代領における宝暦期「宗意心得違」一件

大橋 幸泰

はじめに

現在の佐賀県基山町・鳥栖市周辺は近世期、対馬藩の飛び地であった。対馬藩田代領である。この地域では、浄土真宗の「了簡違」とされる、いわゆる隠し念仏の信仰が浸透していたことが知られている。近世期において元禄・宝暦・幕末の三度、その「正邪」が問題となり、宝暦期・幕末期では処罰者も出した（基本的な事実関係については、長忠生『内信心念仏考——佐賀県きやぶ地域における秘事法門』海鳥社、一九九九年、が詳しい）。小稿は、その内の宝暦期における事件の史料の中で発端の段階のものを翻刻し、注目される点をいくつかあげて、近世宗教史の全体像を再構成するための前提作業とする。

一 元禄期における正應寺法

最初に問題になった元禄期における事件については、拙稿「異端的宗教活動と近世秩序——元禄期肥前国きやぶ地方における正應寺法一件を事例に」（高埜利彦・井上智勝編『シリーズ近世の宗教と社会2 宗教と近世国家』吉川弘文館、二〇〇八年予定）で分析した。宝暦期一件の前提として、そこでの結論を以下に提示する。

一連の最初の事件である元禄期のそれは、正應寺法と呼ばれる信仰活動が問題とされた。正應寺法とは基肄郡園部村正應寺地区を起点に広まったとされるもので、正應寺という寺院によって広まったものではない。過去に正應寺という名前の寺院が存在していた可能性はあるが、当該期にはすでに存在しておら

ず、名前の由来を詳細に知ることはできない。

正應寺法は結局、長崎奉行によつて、「邪」ではないが、「正」とも断言されず、「真宗之了簡違」とされた上で、これによる処罰は行われなかった。こうした結論が得られるまでに、田代領村役人・天草幕府代官・対馬藩田代領代官・対馬藩国許重臣・対馬藩江戸留守居役・長崎奉行らが吟味に関係したが、注目されるのは、正應寺法のような「正邪」の判断が困難な異端的宗教活動への対応は、それぞれのレベルで何に軸足を置いているかが異なっていたことである。すなわち、村役人は村社会の秩序を維持できるかどうか、藩役人は個別の責任が問われるかどうか、長崎奉行（幕府）は「切支丹」かどうか、というのが最大の関心事であった。

長崎奉行が「切支丹」かどうかを念頭に進めた吟味の姿勢は、キリシタン禁制の厳格さを如実に反映しているが、そのことが藩役人レベルでの「正邪」の判断を回避させ、いっそう在地支配における異端的宗教活動への警戒強化を促すことになっていく。つまり、在地支配レベルにおける異端的宗教活動の「正邪」の判断回避と、それへの警戒強化は表裏の関係にあり、このことの積み重ねが「切支丹」イメージの貧困化を生みだし、「切支丹」と異端的宗教活動との混同を促す原因となった。

なお、元禄期の一件についての史料「宗門出入記録」全五冊（長崎県立対馬歴史民俗資料館蔵宗家文庫）は筆者の校訂で、「元禄十一年 宗門出入記録」（上）（下）と題して『研究キリシタン学』九・一〇号（二〇〇六・〇七年）に全文翻刻している。

二 宝暦期における「宗意心得違」

正應寺法は、その後も途絶えることなく、宝暦期の事件につながっていったものと思われる。以下に翻刻する史料は、元禄期の正應寺法一件の史料と同じく長崎県立対馬歴史民俗資料館

藏宗家文庫の、「田代宗旨一件記録」と表題のある宝暦期の記録三冊の内の最初の一冊で、その発端が記されている宝暦八年（一七五八）から十年までの記録である。その表紙には「一番」と記され、その後の、同十一年から十二年、同十二年から明和二年（一七六五）までの記録が、それぞれ「二番」「三番」である。その「二番」「三番」の表題は「一番」の「田代宗旨一件記録」とは異なり、「田代御内用書物」となっている。『宗家文庫資料目録』では「一番」の「田代宗旨一件記録」は「記録類I」中の「田代関係」の「E 寺社・キリシタン」に分類されているが、「二番」「三番」の「田代御内用書物」は「記録類I」中の「田代関係」ではあるが「I 書状控」に分類されており、一見ただけではこの三冊が一連の記録であることがわかりにくくなっている。しかし、表題が異なっているにもかかわらず、「一番」「二番」「三番」の表記や内容から、この三冊が宝暦期における一連の宗旨一件の史料であることは明らかである。元禄期の「宗門出入記録」と同じように、対馬藩の田代領代官・国許重臣・長崎開役・江戸留守居役それぞれの書状などが綴じられており、かなり詳細にこの一件をめぐる動向をたどることができる。

「二番」「三番」についての分析は今後順次に進めていくことにして、ここでは「一番」に記されている宝暦期における事件の発端で注目される点を以下に指摘する。なお、ここに引用する史料は、すべてこの「一番」からのものである。

（1）「穩便」に処理という方針

第一に、対馬藩の基本的な方針はできるだけ「穩便」に処理するということであつた。

この問題が対馬藩国許へ最初に伝えられた、宝暦八年八月十四日付の田代領代官小川又三郎・小田儀左衛門の書状には、元禄期に吟味を受けた者の「其末葉有之、其者共々段々教を受候与相聞江候得者、右法儀者以前之正應寺法ニ而可有御座哉与推

察仕候」とあつて、今回問題とされた法儀は正應寺法の流れをくむものとされている。それは「内仏ニ向助ケ給江く／＼与觀念仕候」とあるように、「内仏」に向かつて「助け給え、助け給え」と我を忘れて叫ぶので「助ケ給之法」と申し慣わされているという。詳細は不明であるものの、「別而相替候儀者無御座」と特別に奇妙なところは無いという者もいて判断が難しいという。しかし、その「宗意之覚悟如何敷候」なので、田代領代官の判断で、ともかく領内真宗寺院の光徳寺・西法寺に命じて、その宗意を改める誓旨血判を両寺まで提出させた。その上で、この後の処理をどうするか相談するため、田代領代官は対馬藩国許重臣まで知らせてきたのである。

これに対して、国許重臣は九月二十六日付の返書で、まずは「表向 隱 便ニ取鎮め、少も騒立不申、随分無事なる」仕方にて、この「宗意心得違」の者たちを「安堵致させ」た上、「内々ニハ少も油断手拔無之様心掛」けて、「異仏を致信仰候哉否之所」を全力で探索するよう田代領代官に命じている。その前提には、宗門改は厳格に実施されていなければならないという認識があつた。疑わしいかどうかはまだわからないうちに被疑者を逮捕して僉議してしまふと、「隣国之響キ」として「邪宗門も発り候ほと二有之」ということになっては「甚如何敷事」となる。これにより「御近領之風説」で露頭に及べば、対馬藩の「御手後レ」のように聞こえが悪く、重大な問題となってしまうことを国許重臣は心配した。慎重にかつ穩便にやらなければならぬ。そこで、「下賤愚癡之上了簡違にて、不謂法儀ニ傾キ候」とのことと、このたびは「此節ハ令宥免」、これ以後は「急度相改、是迄誤入候段を証文ニ認、血判仕候様」に申し付け、「若及異儀候とも、随分穩当ニ申論シ、証文致させ差帰候様」に取り計らうのがよいとする。できるだけ内々に処理したいというのが、国許重臣の意向であつた。

(2)「邪宗」広がりの懸念

第二に注目されるのは、右のように国許重臣の基本姿勢は「穏便」に処理する方針であり田代領代官も同意したのであるが、このまま何もせずに終わらせては、さらに「邪宗」が広がる和田代領代官が見ていたことである。

田代領代官は、八月十四日付の第一報で、近隣の評判を気にして、まずは「穏ニ取行置」くことが必要であるとする一方で、この「宗意心得違」を止めさせるためには「頭人」はもとより元禄期に長崎へ吟味に呼ばれた子孫まで「不殘死刑被仰付、法儀一味之者多キ村々ニ而、獄門ニ掛置候様」仰せつけるのがよいとする厳格な対応を提案している。そうすれば、「其余類之者」はたちまち「本宗ニ傾」き、「疑敷法味」は止むとの見通しを述べる。しかしながら、「死罪之儀者至而重キ事」なので直ちにこれを実行できないが、願わくば外聞に関わらず今回は拷問を仰せつけてほしいと、田代領代官は最初の段階から国許重臣へ要望していた。

国許重臣の指示はとにかく内々に「穏便」に処理せよとのことで、探索の結果、対馬藩がもつとも恐れていた長崎での評判もたいしたことなかったことから、実際に「穏便」に処理する方向で進められていったが、現場を預かる田代領代官は、なおもう一步踏み出した処置にこだわった。十二月十二日付で国許重臣に宛てた田代領代官小川又三郎・小田儀左衛門の書状では、せめて「勸込候頭人并元禄年長崎表江被差送候子孫之者共」を対馬藩国許に召し呼び藩が直接吟味してほしいと提案している。このまま何もせず放つて置けば、「已来之害甚敷可相成哉」というのである。正月十七日付の国許重臣宛の書状でも、田代領代官小川又三郎・小田儀左衛門は、「是迄之形ニ而被召置候ハ、押出諸人江勸込候儀ハ必定」であり、今まで「一味外」だった者も「正宗与違、異様之筋ともを見聞」すれば、彼らは「下賤之者」であるので、それを「邪宗与申儀ニ少も心付不申、

正意与相心得」て、勸めに任せてみな「一味与相成」り、近年の内にたいそう広がって「何程之害を生」じることになるかもしれないので、「何レ是迄之通ニ穏ニ被召置候而ハ、相済申間敷」と、重ねて懸念を表明している。国許重臣は、「今程犯人共一鉢相鎮居」るのであるから、今のところは「只今之通いたし……御裁許之儀いつれとも相極不申越」とするばかりであった。

現場から離れている国許重臣と、現場責任者である田代領代官との温度差が明瞭であるが、国許重臣もこのままでよいと考えていたわけではもちろんない。それは、宗門改を徹底する手段として、絵踏みの可能性を探っていたからである。それは次の点に関わる。

(3)他からの評判

そこで、第三に注目されるのが、隣国・他領の評判、とりわけ長崎奉行がこの件をどのように受け止めているか、対馬藩が相当気にかけていたということである。

田代領代官による八月十四日付の第一報でも、田代領代官や手代役が対馬藩国許へこの一件の「伺之為罷越」すなどと領中に取り沙汰されては、「不穩他領之聞江茂夥敷相成候儀者、必定」であるとする。したがって、田代領代官としては、むしろ積極的に吟味を進め、「長崎江御訴被仰上候方、御為宜可有御座候哉」として、長崎奉行へ訴え出た方がよいのではないかという。しかし一方で、それを実行すれば、かなりの出費となる上、「公辺之聞江」は「如何可有御座哉」とあるように、幕府がどのように反応するかわからないのとまどいが表明されている。田代領代官は本音では拷問を含めた「手荒」な吟味をするべきだという立場であったが、このたび判明した四十七人の他、「風説ニ者千人程」も「一味」がおり、吟味を強行して「多人数さたち候而者甚如何敷」ことになるので、どうしたら

よいのか国許の判断を仰ぎたいというのであった。

国許では、直ちに長崎へ使者安重利兵衛を送ることを決め、長崎聞役平田類右衛門とともに長崎市中の評判、他藩の動向、長崎奉行の周辺を探らせることにした。安重は九月二十六日に国許を出発し、十月十二日に長崎に到着している。国許重臣は安重を長崎に送り出すに当たって、田代領の「宗門之儀二付、疑敷者在与之風聞、長崎江相聞へ居候様子二候哉」について、平田とともに内々に調査するよう申し含めている。その際、元禄期のときと同じように「不事立様ニ」取り計らうことはできないかどうか、極内密に長崎奉行所の役人衆の意向を探り出すことも命じている。対馬藩では国許・田代領ともに宗門改の際の絵踏みは実施していなかったが、内々で処理する場合の手段の一つとして、踏絵を長崎奉行所から借り出すことができるかどうかも安重に探らせようとしていた。

しかし、踏絵を借り出すことは容易ではなかった。十月二十七日付で国許重臣に宛てた平田類右衛門・安重利兵衛の書状によれば、平田・安重が関係者に問い合わせたところ、絵踏みを実施している久留米・平戸・大村・五嶋の諸藩では、長崎奉行所から踏絵を借り出す際には「御借請之節御使者を以御借請被成、返上之節茂其通之事」というように、それが嚴重に管理されており、「絵板之儀者重キ事故、新ニ御借請之儀容易ニ相成申間敷」とのことであった。その上、宗門改は春に実施する慣例であつて、長崎でも正月から順次行われるので、時節の違う今、「新ニ年内々御借請之儀如何之」と怪しまれるかもしれないという。さらに、今の長崎奉行の「御勤被成方」は、「事之重キ儀」について「素怪儀たり共、御内々ニ而一言之御相答無御座、書付を以申上候を、直ニ江戸表江被差送」とのことなので、「内意承合等之儀、無益之筋」であるという。したがつて、長崎奉行には内意であつても伺わない方が賢明であるというのである。元禄期の一件では長崎奉行自身が絵踏みをやらせ

て「邪宗」でない確認をとり、一件落着とした。長崎奉行に悟られずに踏絵を借り出して内々に処理しようというのは、そもそも無理なことであつた。

長崎ではたいして評判になつていないこと、長崎奉行が察知してないことなどを確認した安重利兵衛は、国許重臣の指示により田代へ行つて現地代官である小川又三郎・小田儀左衛門と今後の対応について協議することになつていたが、この安重の田代行きをめぐる動向からも長崎奉行の対応を気にかける対馬藩の姿を窺うことができる。

彼らの書状のやりとりでは、当初、対馬藩国許から役人が長崎を経て田代へ来るだけで何かと噂になり、「宗意心得違」の者たちが騒ぎ出すかもしれないので、慎重にした方がよいのではないかとの声もあつた。しかし、十月二十九日付で平田類右衛門に宛てた小川・小田の、平田（十月二十六日付書状）に対する返答には、「利兵衛被罷越候ハ、一通り者如何哉与評判をも可仕候得共、騒立候程ニハ有之間敷哉与存候」とあつて、安重が田代に来れば何か評判は立つだろうが、彼らが騒ぎ立つほどのことはないだろうとの見通しが表示されている。

しかし、平田・安重は十月二十七日付で国許重臣に宛てた書状の中で、ちょうどこのとき長崎奉行坪内駿河守が交代のため、長崎に向かつている最中であると指摘し、ことにその道中、田代に止宿する予定であるようなので「只今之内田代江（安重が）罷越候儀ハ、旁以宜ケル間敷様ニ被存候」として、このタイミングで安重が田代に行くことに反対した。安重の田代行きによつてどんな評判が立つかもわからず、万一「下々之難説杯御家人衆聞及之程難計、如何哉」（十一月十日付国許重臣宛、平田・安重書状）と懸念されるからである。結局、坪内と入れ替わりで江戸に向かう長崎奉行正木志摩守が長崎を出発し、その荷物などで道中が混み合うのをやり過して、それから安重が田代に向かうのがよいと判断された。それで、安重が長崎を出発し

たのが十一月二十一日、田代に到着したのが二十五日であった。田代では特に変わった様子もなかったもので、安重は帰国することになり、翌宝暦九年二月二十日国許に帰着した。いずれにしても、長崎奉行の意向に相当な注意を払っていたことは間違いない、それは対馬藩の手抜きとされては藩にとって一大事となるからであった。

(4) 他領を巻き込む可能性

第四に、このような「宗意心得違」が支配領域を越えて他領にも存在していることは、元禄期の一件の際にも明らかにされていたが、宝暦期のこの一件を受けて、再び他領を巻き込む可能性が生まれたことである。

長崎開役平田類右衛門は、国許重臣からの指示を受けて、近年福岡藩領でも噂になったとし、同藩の長崎開役吉田太郎右衛門に面談して、その事情を聞き出そうとした。十月二十七日付で国許重臣に宛てた、平田・安重の書状にはそのときの様子を次のように伝えている。平田の問い合わせに対して吉田が言うには、「四五ヶ年以前之事与覚候、領内江法儀違之者有之段申出候者御座候二付、段々次第を吟味仕候得ハ、左様之法儀違之筋二而無之、只一通覚違仕候段、明白ニ相分候二付、無何事相済候」であったという。つまり、吟味の結果、「法儀違之筋」ではなく、「只一通覚違」であったと判断され、「御内々之御取捌を以、事相済申」したという。

久留米藩領でも同じようなことがあったので、平田は同藩の長崎開役宮川五郎左衛門にも面談して、その事情を聞いている。十月十日付国許重臣宛の平田・安重の書状には、「領内二而茂右躰之取沙汰毎度仕候得共、遂吟味候得者、皆共存違」と判明したとの宮川の返答が記されている。久留米藩でも内々で「其促ニ而相済申」したということである。

いずれにしても、元禄期のように長崎奉行の差配を受けるこ

となく、内々で処理したことが明かされており、「正邪」の判断を避けてうやむやに処理されたという印象である。だからこそ、対馬藩が突出して吟味を進め、厳格な判断を下すことになれば、他領を巻き込む大騒動になることは必至であることが自覚された。藩の基本方針が「穩便」に処理する方向で、慎重に対処せざるをえなかったのは、自藩のみならず他藩にも配慮しなければならなかったという事情もあつたからである。

(5) 宗門改による異端的宗教活動の規制

第五に、以上のような事情から、この「宗意心得違」を規制するためには、結局「切支丹」を取り締まる宗門改に頼らざるを得ず、「切支丹」の取り締まり強化という手段によって異端的宗教活動への規制強化がはかられていったことである。

田代領代官からの第一報に対する国許重臣の返書には、宗門改は格別重い「天下之御制法」であり、大名が参勤交代で江戸から国許へ帰るときには、「御老中様も分而御直達有之候程」のことだとある。宗門改が「天下之御制法」であるとの文言は、それ以後もしばしば散見され、この問題を考える際に常に念頭に置かれていたことがわかる。

その上で、同じ田代領代官からの第一報に対する返書において、国許重臣は田代領代官に対して、「邪法ニ傾候者共、家内之様子身持業作動止ニ至迄気を付、少シにても氣掛之事有之候ハ、各々早速申出」るよう、領内の村役人・町役人に厳重に申し付けることを命じている。宗門改は、本来「切支丹」を検索するために制度化された、キリシタン禁制を徹底するための手段であつたが、今回問題とされた「宗意心得違」の「正邪」を判断することが困難である上、内々で処理しようとするれば、「切支丹」を検索する目的でなくても、この現行の制度に頼らざるを得なかった。

田代領代官は「穩便」に処理して終わりにするのではだめだ

という認識を早くから示していたが、宝暦九年五月九日付で国許重臣に宛てた書状の中で、来年正月の宗門改のときに、「定式之宗門改相済候」あとに「右犯人有之於村々ニ、一々呼出し、改めて代官の目の前で誓旨血判させれば、「例年宗旨改之様ニ相聞目立不申、隣單之響茂薄」いのではないか、との新たな提案を行っている。そして、同じ書状の中で、同時に「在町之役人其外出家中江も稠敷申付」けることも必要な処置として提案し、特に、檀那寺僧侶に対して「専宗旨之邪正証拠之事ニ候故、以来随分心を用、若疑敷筋見聞仕候ハ、早々可申出」と命じることを重視している。この提案は国許重臣の了解するところとなり、実際、宗門改の際の再度の誓旨血判は翌宝暦十年正月に実施され、「在町之役人其外出家中」への申し渡しも順次行われたことが、宝暦十年二月十六日付の国許重臣宛、田代領代官小川又三郎・小田儀左衛門書状に見える。

結局のところ、十二月十二日付国許重臣宛の小川・小田書状に、「犯人共身持業作等相替儀無之哉」に専ら気をつけ、宗門改について「此節ハ定而例年ハ尚又各心を附、嚴重被取行たる」とあるように、宗門改を徹底するより他に、「宗意心得違」を規制する手段はなかった。しかし、「一味之者」の中には檀那寺が真宗でなく他宗の者もあり、「毎歳宗旨改之節者、牛王血判を茂仕儀ニ候故、分ケ而血判申付候与而、本宗ニ可傾儀者難測」という。田代領代官は、宗門改がこの問題を解決するのに有効な方法でないことに気づいていたのである。

おわりに

最後に、異端的宗教活動への規制が強まっていくことの意味について展望を述べて、小稿の締め括りとする。これに関して、宝暦期の「宗意心得違」の発端をめぐる動向で特に目を引くのは、真宗の神祇不拝が問題にされているという事実である。

田代領代官は国許重臣への第一報の中で、この法儀を行っていない者に対して、「抜ケ参仕候者江者、伊勢参詣二者不及候間、御堂江参詣仕得与申、所之氏神江社参無用、当寺江参本尊を拜」むように勧めるとか「門戸ニ札守押之候二者及不申」などと「かたましく教」をなす僧侶もいるらしい、との風説があると伝えている。この場合、伊勢神宮への抜け参りは肯定的に扱われており、地元の氏神に参詣することともにこれを無用とする僧侶がいることに田代領代官は不審の目を向けている。

また、同じ書状の中で田代領代官は、「宗意心得違」の疑いのない者であっても「覚悟違」の者があり、「仏前ニ向、称名者不申、助ケ給江与申候而致合掌」したり、「門戸ニ札守杯張候事茂不致、神社江参詣之儀相拒」む者は「異様」であると指摘している。真宗が神祇不拝を原則とする教義を持つことはよく知られていることであるが、地域の秩序が平穩に保たれているとき、このことは特に問題にはされない。しかし、宝暦期の一件でこれが問題とされたのは、「宗意心得違」をめぐる問題が起こつて地域の秩序が動揺してくると、秩序を維持しようとする側にとって、神祇不拝のような突出する個性が、秩序を脅かそうとする異端として認識され、疎ましくなってきたということを意味するのではないか。

史料的な制約もあって、ここではこれ以上議論を展開できないが、この事例は、「切支丹」との混同の進行とともに異端的宗教活動への規制が強まっていくことがどんな意味を持っているのかを探る手がかりになりそうである。今後、この一件の関連史料を丹念に検討する中で考えていきたい。

【史料翻刻】

宝曆八寅年 辰二至

一番

田代宗旨 件記録

三冊之内

九月十四日

九月十四日

〃田代御領中上郷城戸村・宮浦西村・園部上村・同下村・小倉、五ヶ村之者之内四拾七人、宗旨疑敷次第有之二付、田代役^〆八月十四日之書状を以申来、右書状為宰領走番稻右衛門差越し、今日夜二入令着、御郡支配用番八左衛門宅へ、右書状稻右衛門持参差出ス、
〃田代役^〆之書状返答とも二、九月廿六日之所へ記し有之候故、爰二略、

九月十五日

一田代役小川又三郎・小田儀左衛門^〆夜前到来之書状、今朝御屋敷へ八左衛門持参、則平磨・典膳・左膳、右之書状披見有之、尤將監披見有之候様申候得とも、先ッ御前江被差上候得、御下ヶ被成候上、得と披見可致旨被申聞候付、直二御前へ差上ヶ入御覽也、

九月十六日

〃昨日入御覽置候田代来状御下ヶ被成、以御用人被仰出候ハ、此節田代宗旨一件之儀、大切成事と被思召上候間、□ニ付田代役江差図方之儀、一覽衆議いたし、其趣又々申上候様ニと被仰出、
〃田代役^〆之来状御下ヶ被成、將監御勘定所へ相詰罷居候付、御佑筆寺崎庄左衛門を以、右被仰出之御旨申遣、尤右来状披見有之候様ニ申遣候処、罷帰得と披見可致との返答有之、

〃右田代宗旨一件、引切承り候様、案書役橋邊豊右衛門、御佑筆寺崎庄左衛門へ直ニ申達ス、
〃昨日將監被罷帰候、田代来状今日將監不参ニ付、御屋敷へ被差出也、

同十八日

〃田代一件御差図方、為御用談今日退出後、平磨宅江八左衛門罷越申談候上、御差図方條々相認也、
〃昨日相認候田代御差図方之ヶ條書、且將監^〆右同断ニ付、差図方大意存寄、書付を以被申聞候付、右兩通詰間ニおゐて一統申談、衆儀之上、此節ハ先隱^〆便成方可然様奉存候、乍去平磨・八左衛門存寄書も出来居候故、奉入御覽候旨申上、兩通とも二今日御用人を以御前へ差上、

田代宗旨一件ニ付、平田將監被差出候存知寄書、

此一件ニ付、一通り大綱計書載仕候、御用ひ一助ニハ相成間敷候へ共、差掛候義ニ付、口上御評議計ニ而ハ、又前後も可致と存候付、左書載、

田代書面遂披見候処、事之次第も違候義と相見へ、田代役之面々所置難致可有之段、其筈之儀ニ候、夫ニ付宗旨御改之儀ハ、天下之御作法も重キ事ニ候へハ、いつれ之御私領ニ而も被入御念候段相知候事ニ而、御大名様方御暇之節、御老中御直達之被仰渡有之程之儀ニ候へハ、御国^〆之儀ハ朝鮮御役も被成御座候故、尚又右宗旨等之儀ハ、微細ニ御制禁之筋相立居候筈と、公義は勿論隣国其聞へ面り之儀与、然者御城下離レ、他領之間夕之御領地ニ仕候而も、御自国^〆之御下知、尚又嚴重ニ在之筈之儀ニ候処、此節之様子を以相考候而は、未押出し候義とハ不相聞、若御内々之御取計ニ而、相济候品も可有之様ニ相見候、左候へハ、其上もなき義ニ候へハ、御国統之場所、殊其類多有之と相見へ候へハ、万一類族近御領^〆相頭候響ニ^〆、此方様重而御節之御取計御内々共相聞

以上

田代者宗旨之儀ニ付及御案内、右御差図方之義ニ付、平磨、八左衛門仕立候書付、

一 法儀を致信仰候者、帳面前四拾七人相見へ、其内男子廿六人、女子廿一人と相見へ申候、何れ此者共御吟味可被仰付候儀と奉存候、左候時、男子之分計も廿六人ニ而候へハ、入牢ハ相成間敷と存候付、人々江法儀を相勸候者四人と、元禄年御僉議之者之子孫と有之分三人、此内喜平太と申者ハ、相勸候四人之内ニ入居候付、以上六人ニ而御座候、此者共を入牢被仰付、残廿人之男子を郷藏之丈夫成ニ入、番人申付、女子之分式拾一人をも其通ニ被成、如何可有御座候哉之事、

一 右四拾七人被召捕候ハ、早速其跡家別闕所被仰付、相替りたる諸道具、又は異仏書物類ニ而も無之候哉、得と御吟味被仰付度義と奉存候事、

一 此一件ハ 公義江相拘り、重キ御事ニ御座候間、一通り御僉議之上、疑敷筋も相聞候ハ、御僉議として、大目付被差越候様ニも可被成、将又事之品ニ依候而ハ、各中被差越候様ニも可被仰付程之儀ニ奉存候得共、左候而ハ御領中騒立、隣国之聞へも邪法之者ニ而も候哉と、大イニ可相響候哉、依之先模様御見合可被成候哉之事、

一 右男子之分、式拾六人を一々口問被仰付、通り申口を御聞被成、其節之申分ニ依拷問被仰付、敵敷御尋問可被成候哉之事、

一 右之通御僉議被仰付候ハ、御当地御目付御徒目付、并下目付等相附可被差越候哉、

一 右之通四拾七人之者共、被召捕候ニ至り候而ハ、田代中間走番ニ小人相添、尤村方之者も相加り、番仕候様可被仰付候へ共、其分ニ而は不足不丈夫ニも可有御座哉、左候ハ、組之者四五人相添可被差越候哉之事、

一 右口問又は拷問等を以御僉議之上、弥少ニ而も本宗之主意ニ違候

候而ハ、甚如何敷所相見候、依之ハ御手後被成ル御取計ニ御座候ハ、御首尾之処御大切之儀ニ御座候と被存候、乍去此節最初敵重御取計被成候処も、状面一通ニ而ハ決定之程難申、然とも当然之御手当早々有之度候、書面ニ穩便ニ相濟候所も心付候と相見へ、又多人數之儀ニ付、隣国其品露顯之所も可有之哉と相見へ候、是は此方ハ其模様難被測品ニ相見へ候、此所ハ第一田代役人之了簡所置之場に御座候、御時躰ニ付而ハ、不輕御物入ニ至り候とも、夫ニは貪着仕間敷次第ニ御座候間、前條之重キ所を深く令了簡、御取計之要に相成候道筋を、早々申越候様御差図被成茂存候、田代御役人ニも如何所置仕候哉、宗旨之次第ニ依、刑罰之所迄状面ニ相見へ候、是は左様ニ可相成哉、宗旨御糺明之上及御案内、公義之御下知ニ依而御取計之義哉と被存候御座候、田代帳面右之通有之候は、如何相心得候哉、難見通候、

一 長崎江為御使、大小姓一人可被差越哉、

是ハ随分早々出船被仰付、田代表之趣平田類右衛門江申達、彼方風説之模様、長崎江も露顯いたし候哉承合、勿論於爰元申合候次第、得と類右衛門と遂熟談、又は右類之儀以前隣国ニも有之、其御領主御取計方等隱密ニ承合、早々御国へ申越し、勿論類右衛門ニも御奉行御役人功者之人江、深く親ミ被取計方等極ク内々承合、爰元へも早々申越、品ニ依田代役人中心得ニ相成候筋ハ、尚又彼方直内通仕候様被仰付候方、如何可有御座候哉、右御使之儀、公儀私之所も相心得候人被召仕度候、

一 田代来状写、品々江戸表大炊方へ被差越、是又大炊心付聞合之道も可有之、品ニ依大炊田代江申越候筋も可有之事、

右之通先御手配被成、如何可有御座候哉、被取行方之筋道数々可有之様ニ相見へ候得とも、最初ケ様と事を決し候義は、来状面一通りニ而ハ難被取計義と存候、勿論田代へも返答状一通りニ而ハ、御役人之取計方難決所も可有之候故、是又相当之人被召仕様筋を替、御仕ヒ被成様も可有之候へ共、是は被差急候而ハ目立候処有之、時変も難計、少し御見合之上之義哉と存候、

所有之と相聞へ候ハ、先規も表役^ハ長崎江罷越、御奉行所へ御内意相伺候と相見へ候付、模様次第二其通可取計旨、御差図可被成候哉之事、

一 通り御僉儀之上、邪法と申程ニも相聞へ候ハ、入牢之者ハ不及申、蔵入之者迄も繩を掛ケ、郷藏ニハ四方へ竹やらいを構、番人をも相増候様ニ取計候へと、御差図可被成候哉之事、

一 儀左衛門長崎江罷越、御奉行所へ御内意相伺候ニ至り候ハ、早飛脚を以江戸表古川大炊方へ、田代役^ハ申越候様可被仰付候哉之事、

一 万一御案内ニ及候ニ相成候時、元禄年ニは御在府と相見へ、此節ハ御在国之儀ニ御座候間、江戸表へ早々飛船被差立、田代来状之写しを差越、ケ様之次第二候間、田代役^ハ長崎御奉行所へ御内意相伺候段、申越候ハ、元禄年之先規相考、御用番様并切支丹御改之御役人様へ御案内申上候様、前廉御差図被仰越度奉存候、長崎御奉行^ハ

公義江及御案内候^ハ前程ニ、御案内被仰上可然義ニ奉存候事、

一 隣国他領^ハ万一間合御見廻之御使等、田代へ来候節ハ、此度田代役^ハ申越候了簡之通、相答置候様可被仰付置候哉之事、

一 最初手代役迄、内々申出候光徳寺住持へ、右之風説誰人^ハ承り候哉と相尋、何某^ハ承り候と申出候時、其咄伝候末々を段々ニ相尋見候様ニ、御差図可被成哉之事、

〃 昨日差上置候田代一件御差図方之書付、御下ケ被成被仰出候ハ、右差図方之書付両通共被遊御覽、いづれも其筋之義と被思召上候、尚々先当分穩当ニ取計候方可然様被思召上候間、各中談將監存寄書之大意を以、先ッ穩便之取計ニ差図申越可然被思召候間、其趣を以草案相認入御覽候様、勿論御前御思召之御方も被成御座候間、一兩日内又々右之次第二付、被仰出候品も可有之との御事、御用人を以被仰出、

〃 右之通被仰出候付、申談候上今日退出後平磨於宅ニ、將監存寄書

之大意を以、田代長崎且江戸表古川大炊方へ之御差図方之草案相認、

九月廿一日

〃 昨日平磨宅ニ而相認候田代其外之差図方之草案、御屋敷へ持出於詰問一覽評議之上、

御前江差上候筈ニ候処、右一件ニ付御思召之御旨、左之通御書面を以被仰出候付、右相調候草案不差上也、

一 疑敷法儀取行候次第ハ、いつ方何某^ハ承候哉与、真宗光徳寺・西法寺江相尋候ハ、委細可申出候間、其先キ々之者共迄相尋、証跡を取り置度事、

一 統領向之者相知候ハ、其者共を召寄口問いたし、申分ニ応し入牢、亦ハ慥成預ケニいたし可置事、

一 統領向之者申出候邪法を行候者共ハ、一村宛段々ニ召寄、統領申分を申聞セ、此節可及糺明候得共、下賤之者共了簡違ニ而、不謂法儀取行候迄与相聞へ候間、令有免候、自今以後邪法を不行、是迄之業作誤入候与之、証文血判仕候へと申付、若及異儀候とも、随分穩当ニ申論し、証文為仕候段專要ニ候間、其旨相心得、身分無別条ト人々安心候様ニ申聞セ可差歸事、

一 邪法ニ傾候者共、家内之様子身持業作動止ニ至迄、無油断心を用氣を付、少しも氣掛り之事有之候ハ、早速代官方へ訴出候様ニ、郷々村々在町中共ニ、嚴重ニ申渡置、夜中ハ忍ヒ^クに役人差廻、非常を制可申事、

一 宗旨改之義ハ嚴重成法令有之候所、いか様之訳ニ而、是迄不相顯事ニ候哉、其掛之面々委細可遂吟味事、右之趣、一刻茂早々田代役方へ申遣、差図之通り取計候、以後之時艱無遲滯承届度候事、

一 邪宗門ハ天下之大禁ニ候ハ、犯人共義ハ召捕へ、公裁を相待候段当然ニ候所、田代状面之通ニ而ハ、年数多人数居住候様ニ相聞

へ、殊元禄年中邪宗之者露顯之節、公裁之趣田代役申越候品も有之、畢竟其所其時之取計イ方ニ而、科之輕重地方之聞へも差別有之筈ニ候間、内々之手配手宛等ハ大事ニ心得、無抜目僉議を極置、表向ニハ下賤之者とも一時之了簡違ニ而、不審キ身持いたし候所より、種々風説いたし候へ共、糺明之上前非を改候故、其向ニ差置候与申程ニ、随分大様ニ取はやし、自然ト他之聞へも何事なふ相済たる趣ニ謀イ候一筋ト、今度之犯人共ニ安心為致、徒党之志し起ざる様ニいたし置候一筋与之兩段肝要敷と存候、併公辺之聞江他方之響も不測事ニ候故、統領向之者ハ早々召捕置、其余類ハ非常之變をなさざる手宛さへいたし置候へハ、何時ニ而も此方之申分油断不致、段々犯人遂吟味候、証跡相立候間、得与諸方聞合セ候上、臨機応変之取計、幾重ニ茂可有之候事、

一 長崎表へ差越候者、田代江令到着候ハ、爰元差図之趣、委細ニ田代役江相咄、尚又時艸承合、時宜ニ応し申談候上、長崎表へ相越用向相済候ハ、田代江滞留いたし、長崎ニ而之聞合、并田代當時之勢等具ニ爰元江申越候様ニ、左候ハ、時艸ニより最前囚置候統領向之者共、拷問或ハ犯人不残召捕候首尾ニ至り候事も可有之哉ニ候間、何レ帰国ハ皆中差図を相待候様ニ申付度候事、

一 万一人共不殘召捕候節之仕形ハ、惣而宗旨改方之義ハ法令有之、毎歳仕来之通りニいたし候得共、漸々緩ニ相成候与相聞候故、今度家別於目前遂吟味候間、一家内之父兄計罷出、代官所ニ而証文血判いたし可差出旨、一村切りニ相触、仮令少人数ニ而茂、一村ニ限り段々召寄、無誤者ハ証文取之差歸し、犯人者ハ直ニ繩下ニ為致、相応之所江可差置候、犯人父兄を事に手早く召捕候へハ、其家内之老少男女召捕候ニハ、頭立候者無之所可容易候、此時諸方へ手配手宛肝要ニ候事、

一 生を好ミ死を惡ミ候ハ普通之理ニ候所、邪宗門之者ハ死ニ至り候而茂、宗旨をおちざる風儀之由ニ而、若茂落子候へハ転ヒ与名付而、公儀ニ而御構無之事之様ニ聞伝居候、皆中ニハ如何承伝居候哉、不慥聞伝ニ候へ共、申達候事、

一 邪宗之者風儀者前条之通ニ聞伝居候所、今度光徳寺・西法寺之兩僧、誤証文血判迄致させ候由、余り怪相聞訝敷候ハ、右兩僧申出候通り実事ニ候へハ、誠ニ下賤之者とも不了簡ニ而邪法を行候へ共、正道を以教悟し候故、前段を改候与申ものニ而、珍重成事ニ而、強而心遣ニ及ざる事ニ候、亦一筋ニハ領中邪法を行候風説有之、可及露顯時艸ニ而、右兩僧義邪法中間ニ而、災難難免存候故、奸計ニ而右之通いたし候哉、此兩難計、皆中ニハ如何存候哉、何レニいたし候而茂、初ケ条ニ令書載候通り、兩僧へ一刻も早々相尋、実否承度義ニ候事、

以上、

九月廿一日

九月廿二日

〃 昨日以御書付被仰出候品ニ付、左之通り相認、御用人を以指上候処、又々被仰出候ハ、何れ茂衆議之上申上候筋御聞届被遊、其筋可在之候間、利兵衛差越方之儀等も申上候通、取計イ候様ニ与被仰出ル、

御請

〃 田代宗旨一件ニ付、昨日以御書付被仰出候趣、逐一奉拝見、乍恐御尤之御儀奉存候、右之御旨を以、追々差図可仕候、就夫我々共評議仕候ハ、安重利兵衛儀、田代通被差越候一段者、先船路長崎江被差越、於彼地彼是承合、若ハ御内々ニ而絵踏被仰付、相済候手筋共ハ無之事ニ御座候哉、其外諸事得与承合候上、田代江罷越、田代役へ申談させ候筋ハ如何可有御座候哉、左候ハ、於田代統領分之者、御吟味之所ハ、利兵衛田代江罷出候上取計せ、如何可有御座候哉、ケ様被仰付候得ハ、少々手延成様ニも相聞候得共、此仕形丈夫ニ相見候付、此段申上候、以上、

九月廿二日

〃昨日被仰出候品二付、又々存寄相伺候筋も有之申談、且田代其外へ御差図方書狀認直し候御用二付、今日退出後、平磨宅江八左衛門罷越御用談致ス、

安重利兵衛

右急御用二付、長崎へ被差越候間、早々手前相仕廻候様ニ可被申渡旨、与頭中へ書付を以申渡、

〃田代御差図方之儀、昨日退出後、平磨宅江八左衛門罷越、昨日被仰出之趣を以、尚又申談候上相伺候草案等相認させ、今日於詰間一覽申談入披見候處、右二付而評儀之次第も有之候付、又々今日退出後、平磨宅ニ而被仰出之御旨御差図方之書狀草案被追加也、

九月廿三日

〃昨日相調候田代御差図方草案、平磨持出、於詰間申談、草案入披見候處、詰合中別而存寄無之旨被申聞、尤今日將監儀不参二付、右之草案大浦九郎左衛門へ相渡、將監方へ遣之相談ニ及也、

〃長崎江之御使安重利兵衛儀、今日招呼、於詰間平磨・八左衛門御用向之義、委細申含也、

安重利兵衛江申含候大意、

一御領中宗門之儀二付、疑敷者在之与之風聞、長崎江相聞へ居候様子二候哉、内々承合候様、平田類右衛門可申談事、

一宗旨之儀二付、訝敷筋等在之候節、其御領主御取計方等、極密々承合、早々御国江申越、尤田代役心得にも可相成筋を、類右衛門方致内通候様可申談事、

一御国・田代共ニ、絵踏与申事ハ不被取行、寺証文与誓旨血判而已にて、御改被成来候處、此節之次第二付、此前ハ絵踏被仰付、御内々ニ而相濟候被成方ハ在之間敷候哉、左候ハ、右之絵内々ニ而借調候筋も可在之哉、其所も可申談候事、

一元禄十年之ごとく、御奉行所江御内伺等在之候節ニ至り候時、

不事立様ニ御取計被成方ハ無之候哉、いづれ類右衛門御役人衆へ深く取入、親ミ之上を以、至極内密ニ承合、役人衆了簡を聞候様、類右衛門能々可及相談事、

一宗旨紛敷者有之候節、御白分ニ而御吟味被仰付候上、別条無之ニ相極り候節、其次第及御届相濟候事ニ候哉、又は御自分ニ而一通り御尋被成、実否不相極候而も、何れ御案内被仰上、長崎御奉行之御差図を以

公義之御僉議ニ相成候事ニ候哉、得と承合可申事、

一何分御内々にてハ不相濟、御奉行所江御内伺無之候而、不叶次第ニ至り候ハ、其様子早々田代江罷越、田代役江遂熟談、御国江茂可申越事、

一只今之内者、随分御内密ニ被成候而も、他領之風説事立、他之筋を以公義江相聞へ候様在之候而ハ、御国之御案内御手拔ケニ相成、至而大切成ル事ニ候間、其所を能々相究、下々之風説ともニ、随分聞合候様可致事、

一右之外、委細口上ニ而申含候次第、得与被體認宜可申談事、

以上、

〃右申含之書付、杉原半切ニ認、名前等も不相記、奉書包覺書と認、利兵衛上船之節、平磨相渡、

九月廿四日

〃昨日為披見將監方へ遣候草案、存寄無之能相聞候との返答申来候付、平磨御屋敷之物書御用人遣度、九左衛門を以入御覽候處、何も此通ニ而宜く被思召上候、其内利兵衛へ申含候次第之内、一ケ条相増可然旨被仰出、其趣九左衛門ニ申聞候付、則一ケ条之案書仕、同人を以入御覽候處、此通可然旨、同人を以被仰出候、依之段々清書出来候様申渡、豊左衛門へ相渡ス、

但、利兵衛申含候次第、ケ條書之義、昨日之所へ記し有之候故、爰ニ略ス、

九月廿五日

江戶長崎田代へ之書狀清書出来候由にて、御書私方へ平磨方へ為押印為持来ル、

九月廿六日

安重利兵衛義、今日乗船申渡候付、於詰問面謁、猶又御用向之儀申合候上、田代長崎江之書狀并切手等相渡ス、
安重利兵衛御用筋二付、伺書一通差出候付、各中申談候上、以付紙相答候、紙面御用人遣度、九左衛門を以入 御覽候処、一ヶ条御注文有之候付、相改相渡ス、

利兵衛伺書二付紙返答写、

利兵衛差出し候書付、左記、
九月廿六日

覚

一 御奉行御役人衆へ、平田類右衛門内意被承合候節、田代御案内御帳面之大意を以、聞合可被申候哉、申達様之趣、御差図被仰付可被下候御事、

附紙

田代案内状之大意を請候と申二而も在之間敷候、右之次第を相含居候而、よそがけ可承合事二候、

一 右之趣内々聞合候而も、御役人衆之難及所意折渡二被申聞候ハ、御内々御耳添被下候様相頼可申候哉、其節二至り候得ハ、御内々ながら表立候付、御伺可申上儀奉存候へ共、内意申分ニ、不差支趣念頃二被申聞候ハ、御用筋差掛たる御事二付、前後不相成様、類右衛門可申談候哉、御差図被仰付可被下候御事、

附紙

其節之模様も可在之、極而ケ様ニトハ難申渡候、其所ハ類右衛門申談、時躰二随ひ可被取計候、

一 隣国御留守居之内へ、前々右躰之相渡等御座候御方も御座候ハ、其節之次第承合可申候、左無之候而も、時躰承合候儀も可在御座候処、此節之次第御隠便之御事二付、申様之趣御差図被仰付可被下候御事、

附紙

是又押出し、此度領分ニケ様之者在之候て、可申様も無之、よそがけ候而承合様も可在之事二候、類右衛門可被申談候、
一 御家代手寄之筋も有之候ハ、聞合させ候儀者、類右衛門申談可申付候事、

附紙

御屋代之人柄ニ手依り可申事二候、類右衛門可被申談候、
一元禄十一年園部村、

公料之節、折渡御領分之者如何被仰付候哉、御書付被仰付可被下御事、

附紙

其節ハ五人之者共、於御奉行所絵踏被仰付、追々二口間被仰付候上、無別条帰村被仰付候、

一 疑敷法義被行候者、人数万右之次第相知レ候趣、且何年以來之事二候哉、右之者共如何仕置候哉之趣、被相尋候節ハ、返答如何可申達候哉之御事、

附紙

此ヶ条ハ、御領分ニ右類者有之段打出候節之事二候、ケ様之尋ニ不及様ニ申談可被承合候、委細申合之書付之通、可被御體認候、
一 右之折渡二付、彼地ニ而聞合御案内申上候趣、江戸表江ハ申上二及申間敷哉之御事、

附紙

事之次第緩急ニも依り可申事二候、押極之差図ハいたしかたく候、
右之趣奉伺之候、已上、

九月廿五日

九月廿六日

〃田代役之書狀、奥書返答共、左記、

寅九月十四日夜相達、

一筆啓上仕候、爰許之儀、專大國通行之場所与申、長崎表手近二御座候故、宗旨之邪正茂甚無心元奉存、御領中之寺庵江兼々心を用候様、去年已来尚又申渡置候、然処先月中頃、真宗之光徳寺儀、手代役中方江罷出、御領中江疑敷法儀を取行候者有之由、粗承届候段申出、我々方江手代役〆右之趣申聞候付、案外之儀二存候得共、此儀表立吟味者先如何敷候条、右僧心を用、内々致吟味見候様申渡、可然旨申達、則手代役〆僧方江、其旨相達得其意、蔵上村之同宗西法寺兩僧申談、内々吟味仕候処、何れ之法与申儀者不相分候得共、内仏二向助ケ給江〳〵与觀念仕候付、助ケ給之法与申習シ候、右之法儀二付、別而相替候儀者無御座候与申出候茂有之、亦者内仏二而、右之觀念を仕候内、与風光明を拝シ候事茂有之、感氣を催候杯、老兩人茂申出候、右法儀相願候付、於爰許内々吟味仕候処、元禄十一戊寅年園部村 公料之節、正應寺法与申疑敷法儀取行候段相聞、天草御代官所江園部村庄屋〆遂案内、其節爰許城戸村百姓之内二茂五人、右法儀取行候段相聞、役中吟味有之候得共、別而相替候儀茂不申出、然共園部村〆天草江案内有之たる事候故、若者長崎表〆被召呼候折渡二可相成哉与、右五人入牢被申付置、其上二而長崎御奉行所江、為御内意加嶋権八罷越、其後右五人長崎江被送遣、袖岡正左衛門相附罷越候段、一通り日帳二相見江、委細者其節之記録有之段書載有之候故、記録之儀随分吟味仕候得共、如何成行候哉相見江不申、日帳而已二而者折渡彼是相知不申候、古老之者共其節之咄聞伝居候而申聞候者、右折渡相起り候節、園部村庄江者有徳成者多、其者共右法儀を取行候付、天草日田御代官所江夥敷物人仕取入候故、御吟味輕相濟、無別異被差返、此方城戸村五人之者茂同様二而帰村仕、其促二而無別条在村被仰付候付、其末葉有之、其者共〆段々教を受候与相聞江候得者、右法儀者以前之止應寺法二而可有御座哉与推察仕候、当節

ハ右之吟味差詰候上、御案内可申上哉共奉存候得共、左候而者、隣且江はつと相聞、内々二而難相濟訳二相成、長崎江被差送候様二共御座候而者、多人數之事与相聞、雜用之御物入不輕、成たけ内々之取行二而相濟候様二与奉存、表立不申様兩僧江吟味申渡、内々吟味仕候処、右之教を受居候者、先四十七人申出候、尤風説二者千人程茂所々二可有之由二候得共、左程迄者有御座間敷候、然共四十七人外二茂余慶有之様相聞江、兎角十四五ヶ年以来段々広り候与相聞候故、右法儀取行候者共、多人數さたち候而者甚如何敷、吟味者は迄二而相濟候与申二仕成、安堵仕候為与申、第一者隣日江茂為差事二而茂無之趣二申触シ候端与存、法儀相替候事共不相聞候、乍去宗意之覺悟如何敷候条、以来相改候証拠血判仕候様二与兩僧江申合、則牛王二血判為仕候者、別紙書付差上候通二御座候、此者共者慥二法儀を相学候事相願候、右法儀之風説を承候処、法儀を勸候節者、深山亦者塚之内杯江夜陰二罷越、助ケ給〳〵と精力之続候迄者為唱、氣絶を茂仕候程二相成候時、夜具等をかぶせむし候而、人心地茂無之様二仕成候上、光明を見せ、或者弥陀来光之鉢杯拝せ、又者鏡を見せ候得者、死候者茂鏡二願候様二茂術仕候杯与茂申シ、右鉢之儀見聞仕候者者一心二傾キ、無余念尊申候由二而、様々風説有之、何れ二茂疑敷法儀与相聞江申候、委細之虚実者、兎角拷問之上二而無之候而者、何分白状仕間敷与相聞江申候、

(頭書)承届候、奥書及返答候、

一 右法儀之次第者、甚大切之御事奉存候付、書面を以申上候而已二而者、前後貫不申、素御差図筋茂御直二承知仕候儀、当然奉存候故、儀左衛門罷越申上候歟、又者手代役之内差越委細申上、御裁許之奉得御差図候答之儀二候処、此一件粗隣且江茂相知居候杯与申候風説茂有之候得者、儀左衛門儀者勿論、手代役差渡候而茂、当節者右一件事不相濟、伺之為罷越候与、御領中広り取沙汰仕、不穩他領之聞江茂夥敷相成候儀者、必定与奉存候付、左様二茂難仕、不得已愚意之趣左二書載仕、奉伺之候、

一法儀を勸込候頭人共、多者死捨之者を申出候、其内存生之者別紙之名前ニ御座候、此者共儀者入牢申付、其跡家内を吟味仕候ハ、風説之通若者勸之鏡、又者念シ仏等茂可有之候哉、万一右鉢之品茂有之候ハ、何卒以来之為取上申付度候、尤別紙之通り、勸之頭人茂申出候事故、入牢申付置、御伺可申上事奉存候得共、右申上候通、隣且江大イニ響候所、先穩ニ取行置候、勿論右之者共重而拷問被仰付、吟味仕候ハ、法儀之奥意、其外法儀を受候者迄茂、段々申出候事茂可有御座候、仮令拷問仕候連茂、怪キ次第有鉢白状可仕哉、其程茂難相測、其上弥屹度御糺明被仰付候ニ相成候ハ、訳茂違候御吟味筋ニ候故、我々共計ニ而茂難相濟、何れ其御地、吟味之役人御手当被成、不被差越候而者相濟間敷御事哉与奉存候、右旁ニ付而者、隣国江茂別而事夥敷相聞、彼是如何敷儀ニ奉存候、右申上候とて、最早勸込候長本人、并以前長崎表江被差送候子孫之者共大概相知、勿論右法儀之極意之所者相知不申候得共、兎角疑敷筋之様ニ相見江候故、右頭人者素元禄年、長崎江被差越候子孫之者迄、不殘死刑被仰付、法儀一味之者多キ村々ニ而、獄門ニ掛置候様被仰付候ハ、其余類之者者忽本宗ニ傾、疑敷法味者相止可申哉ニ奉存候、然共死罪之儀者、至而重キ事ニ御座候得者、当節内々之吟味一通りを以、法儀邪正之実否不紛明候を、其俣ニ而被所死刑候与申候而者、荒々敷相聞江候間、願者外聞ニ御拘不被成、当節者拷問を茂被仰付度奉存候、乍然元禄年長崎迄茂被差越候得共、無別条相濟候訳茂、彼者共聞伝可罷在事故、右之意味を含居、何分敷敷拷問ニ掛り候而茂、有鉢之筋申出間敷哉、其程難計、万一奥意之次第を白状不仕候時、法儀別而相替候儀茂無之与而、是迄之通被召置候ハ、頭人共渡リニ竿を得候与同然、弥法儀手広ク勸込候儀者、必定ニ而御座候、扱又拷問之上深意等申出、弥邪法ニ相極候ハ、死刑ニ茂可被仰付候得とも、法術之儀有之俣ニ決而不申出、風説之通余類等数百人之名を、引出候様ニ共相成候而者、申分ニ其面ニ悉ク及吟味候首尾ニ茂成行中間敷候哉、左様共ニ至候而者、甚大造ニ有之、是迄之少人

数たに、隣且江説茂有之杯申模様ニ相聞江候得者、隣国江聞事夥敷相成、是亦大切之御事奉存候、尤頭人共糺明被仰付、相替候事茂不申出候時者、国弘ニ茂可被仰付候哉、此儀者訳茂違候筋ニ候得者、一通り之科を以国弘ニ被仰付候者与、同然二者被仰付間敷御事ニ而、隣且之聞江至如何敷儀哉与奉存候、勿論右之法儀何分疑敷筋ニ相聞候付而、兩僧を以内々吟味之節、疑敷法儀与相聞候間、以来之為誤証文相認、牛王ニ血判仕候様申掛、則誤入候与申、血判を茂仕居候故、仮令怪キ筋白状不仕候共詰候所、右之趣意を以死刑ニ被行候様無之候而者、一味之者戒メニ相成間敷様奉存候得共、右申上候通、万一糺明之上深意を不申出、何程精密ニ詮議仕候而茂、邪正差別茂一圓不相分候物ニ極、偏ニ疑敷法儀取行候与申而已を以、死刑之儀者手荒ニ奉存候得者、何れ愚豫之我々難及科等奉存候間、何分御高論之上否御差図奉待候御事、

一押出拷問を以、急度吟味を詰候様被仰付候、御賢慮ニ御極被成候ハ、爰許ニ而者拷問等稀ニ有之、一鉢拷問筋中間已下不功ニ有之差支申候、尤頭人共万ニ一死刑ニ茂被仰付候期ニ究り候ハ、尚又之儀ニ候間、御吟味之上随分功者成中間啗人、其御地、早々被差越被下度奉存候、弥被差越候ニ至候ハ、爰許江御用与申候而者如何敷候条、長崎表御用ニ付、田代通被差越候趣ニ被仰付、被差越度奉存候事、

一真宗寺僧之内ニ茂、右鉢之法儀を行候者茂可有之哉ニ相聞候、疑敷僧御吟味被仰付候而者、響如何敷、勿論其俣ニ可被差置様茂無之御事候間、不審成僧外之科ニ申直シ、其身者素妻子共迄不殘追放被仰付、如何可有御座候哉、素隣国筋ニ茂前以当節之様成法儀相顯、寺僧者俗ニ仕立名茂俗名を為唱、外之科ニ申直シ、御仕置被仰付候事茂有之由ニ御座候、如何可被仰付候哉、尤御吟味之筋者響如何敷被思召上、疑敷僧共追払ニ被仰付候、御賢慮ニ被成御座候ハ、右僧共儀我々ニ御任せ取行候様可被仰付候哉、亦者右体之僧追而申上御差図之上、取行ニ可被仰付候哉、何れ御差図奉待候御事、

一 法儀を受居候者共、不殘宗旨替被仰付度奉存候、夫二付寺僧之内、右法儀者行不申候得共、村之者江教候二譬者拔ケ參仕候者江者、伊勢參詣二者不及候間、御堂江參詣仕得与申、所之氏神江社參無用、当寺江參本尊を拜ミ候様、又者門戸二札守押之候二者及不申坏与、かたましく教を成シ候僧茂有之様、粗風説仕候、右之通かたましく教を致候儀不審敷、素右之法儀二無之候迎茂、其村二右躰之心得二堅り候而者、甚如何敷、此儀者日長二尋問仕候ハ、相知可申条、虚実之儀者追而委細可申上候事、

一元禄年右一件之節、隣且御聞合之御使者等有之たる由二候、此節者未内々之儀二而候得者、其儀者有御座間敷哉二奉存候得共、隣国寺通行之所柄二候故、大イニ可申触者二茂無之事二而、聞合之筋有之間敷共、難申上候、万一其折渡茂候ハ、宗意之覚悟違之筋有之様、粗相聞吟味仕候處、疑敷筋茂無御座候得共、其証拠無之候而者後々如何敷、牛干を以血判申付相堅メ申候、別而相替候儀者無御座候、然共此旨委細国許江茂注進申越置候与、一通り返答仕、扱又万一死刑被行候時、其筋聞合茂有之候ハ、及吟味候處、法儀疑敷筋者無之候得共、少々宗意覚悟違之事茂有之、第一者領中之法令を相背候科を以、死刑二行候、勿論宗意之覚悟違之儀被相尋候ハ、其儀二候、於宗旨疑敷筋者無之候得共、覚悟違与申者仏前二向、称名者不申、助ケ給江与申候而致合掌、又者門戸二札守扱張候事茂不致、神社江參詣之儀相拒ミ、一筋二担寺江參候事而已、第一二傾世上通例二替、下賤之者異様二相聞江候、此處覚悟違二候、依之以来之儀、右躰無之様、血判を以急度相制候段、相答候而茂可相濟哉与奉存候、乍然押出シ御吟味被仰付候上、長崎江御訴被仰上候方、御為宜可有御座候哉、何れ難計奉存候得共、差当愚慮仕候處、第一者御物入不輕、其上公辺之聞江右躰之儀、是迄其向相濟居候段、如何可有御座哉、愚意之我々共難及了簡次第奉存候得共、先愚意之趣奉申上候、何分御高論之上、何れ之道宜様早々御差図被為仰付越可被下候、尤此外奉伺候品茂、数多可有御座哉二奉存候得共、愚意之我々難行届御座候、勿論此

度之一件訳茂違候事故、逐一御伺可申上候得共、品二延々二相成候而者、隣且之聞江、手延二相成候筋とも可相成哉二奉存候間、差掛取行不申候而、難叶儀者時宜ニ応取計候様、被仰付被下度奉存候、右御返書之儀、今度差渡候飛脚之者江、御渡被仰付、船中差急帰郷仕候様、御手筋を以被仰渡被下度奉存候、右旁御伺為可申上、如斯御座候、恐惶謹言、

無番付

八月十四日

小田儀左衛門

小川又三郎

儀 平磨 様

嶋雄八左衛門様

田代役へ奥書返答之案

八月十四日之書状、其元走り番稲右衛門持越、去ル十四日之夜相違候、先以不慮之一儀相起り、笑止成ル御事共二候、宗旨御改之儀ハ、天下之御制法二而各別重ク、御大名様方御暇之節ハ、御老中様分而御直達有之候程之儀と申、御国之儀者、別而朝鮮御役茂被成御座候得ハ、猶以平日可被入御念段ハ、

公義ハ勿論隣国ニ至而も、常ニ其通り之底意可有之事二候故、別而嚴重ニ御取計可被成御事候、然共決定疑敷宗旨と申二而も無キ之内、押出し被及御僉議候時は、各ニ茂被心付候通、隣国之響キはや、邪宗門も発り候ほと二有之候而ハ、甚如何敷事二候、然共御近領之風説二而事故露顯、御手後レ成御取計之様二相聞候而ハ、御首尾之程至而大切成御事二候、仮令如何程之御物入御費ニ相成候共、事之品違候得ハ、其所ニ御食着可被成様も無之事二候ヘ共、最初ハ嚴重ニハ難被取計所も有之候ヘハ、猶又御取計之要ニも可相成筋之儀者、追々早々可被申越候、就夫右四十七人之内、人々へ相勧め候者四人、元禄年城戸村五人之子孫之者三人、其内喜平太と申者ハ相勧め候付、人数之内ニ入居候故、以上六人と相見、此者共を頭人と見当、亦吟味之上統領分之者を極メ可申事候、

左候得者、御吟味有之段、其者共令承知候ハ、如何成異心を生じ、右六人之内万一出奔等可致も難計、其余類之者迄騒立候様ニ相成候而者如何敷、大切成ル事ニ候間、先当節ハ表向（つゞ）隠（ひそ）便ニ取鎮め、少も騒立不申、随分無事なる様ニ而、安堵致させ置、内々ニハ少も油断手拔無之様心掛、尚又弥異仏を致信仰候哉否之所を、尽心力探り見可被申候、其上ニ而追々時様被申越候ハ、段々御差図之次第も可有之候、

一 右御僉議筋之儀ニ付、隣国之聞へを御厭不被成、拷問を以厳敷御僉議被成候一段、并押詰御裁許刑戮筋之儀をも被申越候、外之科人等と筋違、被処刑罰候首尾ニ至候而者、御自分之御取計ニ而相濟候事ニ而無之、拷問等之儀も、容易ニ被仰付候筋ニ而ハ無之候間、右之所了筋違無之様ニ、能々可被致體認候、先右之御沙汰ニハ不被及事ニ候、

一 隣国他領江相聞居候模様ニ被申越候、如何程ニ響キ居候哉、各申談隠密ニ聞出し候様ニ可被致候、

一 就右長崎江万一一風説共ハ無之候哉、彼地ニ響キ候而は、御奉行御在勤之場所ニ候得者、別而大切成事ニ候間、右模様聞合、將其元ハ之来状面を以、平田類右衛門江申談、右様之事起り候節、取計方之次第等、御奉行方役人衆之内心易人江、内々承合候仕形も可有之儀ニ付、此節安重利兵衛儀、右御用被仰付、長崎へ急々ニ被差越、彼地聞合等之模様ニ依り、其元へ罷越、各申談に、爰元之御差図までは、其御地へ令逗留候様申渡候、勿論外御用ニ而、長崎江被召仕候向ニ而、罷越候様申含差越候心得之為、類右衛門江之書状写差越之候、

一 右一件如斯致往復候内、其元時体何程ニ成行候哉、万一急々ニ令増長、江戸表ニ而不被及御案内候而、不叶次第ニ可相成も難測候、若左様之時様ニ相成候ハ、御国并江戸表古川大炊方江、早飛脚を以可被申越候、従是も其元ハ来状之写差越、一通り申越置候、一右ニ付、隣国他領ハ万一間合御見廻之御使等、其元江来候節ハ、各ハ被申越候趣ニ可被相答候、

一 最初手代役迄、申出候真宗光徳寺儀、何方何某ハ承候哉と相尋、何かしハ承候と申出候時、其者を相尋、段々末を追候而、被穿鑿候ハ、風説之因而起ル所可相知事ニ候、尚又西法寺へも此節相尋可被申候、且右寺僧ハ誤証文血判迄致させ候段、余り容易キ様ニ相聞候ハ、右之兩僧万一邪法之仲間ニ而、此節御領中専ら風説有之候故、可及露顯時様と心得、左候へハ災難不免レと存、奸策を以申出候にては無之候哉、其所も深く探り見可被申候、

一 統領向之者を被召捕候得ハ、何時も被仰分相立、慥成事ニ候故、其通可被仰付候へ共、左候而ハ其余類騒立可申哉之所難測、他所之響如何ニ付、先此節ハ穩便ニ被取計置度候間、長崎聞合等有之候内、少し見合可被申候、乍去其元模様御領中之風聞共ハ、他領之響も重くれ候と相見候ハ、先頭人ハ尖ニ召捕置、余類騒立不申様、取鎮方随分被致勘弁置、弥被召捕候首尾ニ至候ハ、其者共を召寄口問之上、申分ニ応し入牢申付候か、又は慥成ル預ケニ可被申付置候、尤是とて差掛り難差置首尾ニ至り候節之事ニ候、左も無之差当り騒立可申とも不相見候ハ、利兵衛其元へ罷越候迄ハ、見合置候様ニ可被致候、

一 右統領分之者を召捕候ニ至候ハ、一味之者共を一村切ニ、段々ニ召出し、統領申分を申聞セ、此節急度可被及御糺明候へ共、下賤愚癡之上了筋違にて、不謂法儀ニ傾キ候と相聞候故、此節ハ令有免候、自今以後急度相改、是迄誤入候段を証文ニ認、血判仕候様ニ申付、若及異儀候とも、随分穩当ニ申論シ、証文致させ差歸候様可被取計候、此段は各心得之ため、兼而申越置候、

一 邪法ニ傾候者共、家内之様子身持業作動止ニ至迄氣を付、少シにても氣掛之事有之候ハ、各々早速申出候へと、内密ニ鄉村役人共兩町役共へ、嚴重ニ申付置、夜中も忍々ニ役人立廻り、非常を制候様可被申付置候、

一 宗旨改之儀者、嚴重成ル御法令有之候処、いか様之訳ニ而是迄不相顯事ニ候哉、其掛之面々委細可被遂吟味候、

一 被申聞候趣ニ而者、多人數ニも可及模様相聞候、万一大勢ニ及候

時、畢竟其所其時之取計方ニ而、科之輕重他方之聞へも差別可有之事ニて、勿論内々手配り手当等大事ニ心得、無拔目僉議を極置、表向ニハ下賤之者共、一時之不了簡ニ而訝敷身持いたし候と相聞候へ共、糺明之上前非を改候故差免候と申程ニ、大様ニ取はやし、自然と他之聞へも無何事相済たる趣ニ計ひ候一筋と、今度之犯人共ニ為致安心、徒党之者共不起様ニ致し置候との兩段肝要成ル事ニ候間、各深く被思慮機変ニ応し、取計方可被人念候、

一今度之一件、我々中連名ニ可被申越事ニ候處、平磨・八左衛門兩名にて被差越候へ共、事之品違候段返答之儀、以連名申達候、

今度法儀一味之者覚、
宮浦西村

年四十一

吉左衛門

同廿九

女房

同六十四吉左衛門親

長右衛門

同六十

女房

同三十一

忠兵衛

同廿五

女房

同六十一

母

同五十五

利右衛門

同三十七

女房

同廿九

文右衛門

同廿二

女房

年十六

とよ

同四十四利右衛門親

甚平

同五十六

七右衛門

同四十四

女房

同五十七

善五郎

同五十四

女房

同四十一

源助

同四十

女房

同六十

喜平治

同三十六

惣右衛門

同三十一 善次
同廿九 女房
同四十六 母
同三十五 道仙
同三十一 女房
同五十五 久七
同四十六 女房
同廿九久七 与兵衛
同四十八 新藏
同三十八 太平治
同五十七 源右衛門
同四十二 女房

同廿七 孫平
同四十九 母
小倉村
年三十三 千右衛門
同六十三 母
同三十三 助左衛門
同廿五 傳右衛門女房
同五十八 同人母
同五十七 平右衛門
城戸村
同六十二 利兵衛
同三十八 喜平太

同四十
助左衛門

同五十四
甚五郎後家

園部上村

同廿九
道沢

同下村

同三十九孫四郎娘
はる

人数四拾七人
右之者共、兩僧牛王血判為仕候、

覚

宮浦村

長右衛門

同

道仙

同

利右衛門

城戸村

喜平太

右者訴人江勸候者、如斯、

覚
甚兵衛玄孫

城戸村

喜平太

助左衛門三男

同

利兵衛

同人四男

小倉村

平右衛門

右者元禄十一年宗旨出入之節、長崎江被差越候者之子孫之内、当節
法儀取行居候者、如斯、

覚

宮浦村

源四郎

同

幸左衛門

同

市左衛門

同

茂平

同

善作

同

惣市

同

惣七

城戸村

藤市

同

源左衛門

同

甚兵衛

園部村

久平

同

新助

右者、諸人江勸候者と相聞江候得共、死捨り之者、如斯、右之通御座候、以上、

「一」

一筆申達候、田代役小川又三郎・小田儀左衛門方、八月十四日之書狀、去ル十四日之夜相達候処、御領分之者宗旨之義二付、疑敷次第有之段申出候者有之、就右風説彼是帳末写候通中来候付、返答之趣是亦状末之通令差図候、就夫元禄十一年右類之義有之、其節於田代段々御吟味有之候上、田代佐役賀嶋権八、其地へ罷越御奉行所江御内伺仕候上、其者共長崎江召連候様与之御事二而、田代頭役袖岡正左衛門御領分之者五人召連越、於御奉行所御口問有之、段々御吟味之上押詰、無別条婦村被仰付候、右之次第も有之、此節万々一他領

公義江相聞候上、此方様之御案内無之候而ハ、至而大切成御事二候間、公辺向之所専ら被入御念御事候、依之今度就右御用安重利兵衛、其御地江被差越、御用向委細申含候次第ハ、帳末二写差越候間、被得其意利兵衛申談、御奉行所役人衆江取入方之儀、随分心を被用相親候上、至極内密を以被承合、且又其御地江右之風説相聞居

候哉、又左茂無之候哉、若相聞へ居候時、何程二相響候哉、得と被承合、事之次第二依、御国ハ勿論田代役江も可被申越候、尤利兵衛儀此儀二而、被差越候様相聞候而は、如何敷候付、於其元ハ看品方御用と成共相唱候様可被致候、委細利兵衛申含候付、不能詳、尚追々可申通候、恐々謹言、

九月廿六日

平田類右衛門殿

連名

〃田代来状奥書返答共二帳末二可記事、

〃安重利兵衛江申含候次第可記事、

一筆申達候、安重利兵衛儀、就御用其御地へ被差越候間、宿等被申渡逗留中御宛行之義、例之通可被相渡候、為心得御宛行写帳末差越之候、委細以別紙連名申越候、

一武田銀藏儀小瘡相煩、依願為湯治長崎筋へ三ヶ月之御暇被下、則利兵衛乗り船二便船罷越候、定月二至候ハ、帰国可被申渡候、右之段為可申達、如此候、恐々謹言、

九月廿六日

平田類右衛門殿

八左衛門

〃帳末被宛行、

〃切手式通

九月廿七日

〃今後調御用二付、阿比留傳右衛門大坂迄被差越、昨日上船二付、右便江戸表へも三番之仕出有之、右御用古川大炊方へ、以連名被申越候書狀、左記、

一筆令啓上候、今度田代役小川又三郎・小田儀左衛門方、八月十四日之書狀、去十四日之夜相達候処、上郷之者宗旨之義二付、

疑敷次第有之与之儀、真宗光徳寺住持手代役迄申出、右二付段々風説等承候次第、其外彼是帳末写之通申米候、宗旨御改之儀は、各別重キ御制法ニ而、御暇之節御老中様御直達之趣も有之候へハ、少ニ而も宗意之覚悟違候段相聞候而ハ、急度御糺明不被成候而難叶義は勿論、御領分之儀大國之間御座候上ハ、風説等他領江洩聞へ可申、殊ニは長崎御奉行所も程近ク候得者、別而急速ニ不被遂御吟味候而難成事ニ付、衆議之上、

御聞ニ相達、則帳末奥書之通、御差図申越候、尚又追々御差図之次第可有之候、就夫元禄十一戊寅年園部村公領之節、彼村之者御領分城戸村之者、正應寺法と申紛敷法を学候段相願、段々及御吟味候上、追々

公義江御案内有之、押詰無別条相濟候段、田代其節到来之記録有之候、其御地ニも極而差越可有之と存、尤案書役中も有之様ニ相覚候と申聞候、此度之儀御案内之御沙汰ニ可及哉之程ハ、未相知候得共、彼地事躰ニ依、田代役其御地江申越、不及御案内候而、不叶次第ニ可相成も難計、若左様相成り候時、此元之御差図被相待候而ハ、手後レニ可相成哉、依之い、また不致規定候得共、末々此段申越候間、万一田代役及御案内候程之儀申越候ハ、時躰を以年番能御案内被申上候様ニとの御事候間、右之首尾ニ不至以前、記録を以先規等被考合、尚又其筋之御役人様方、御手数模様等密々被承合置候筋も可有之哉、又者右躰之御届被仰上たる御方様も在之候ハ、内々得と問合置候様、御留守居中へ被申渡候仕形も可有之、何篇兼而相心掛被置度存候、

一 右二付、長崎之儀ハ、御奉行御在勤之場所柄ニ候間、はつと風説等有之候而ハ、大切之御事ニ付、右承合、且又在役平田類右衛門申談、右躰之儀も有之節、御内々ニ而御取鎮被成候仕形共ハ有之間敷哉、若又及御案内候ニ相成候時、手数等類右衛門御奉行方御役人衆へ極々内密ニ承合、申込等之儀相談之ため、安重利兵衛急々長崎江被差越、尤外御用ニ而被召仕候向ニ申成シ罷越、於長崎之模様ニ依、類右衛門方田代役御内通いたし候様申含差越候、

此段も為御心得申越候、右之段為可申述、如此御座候、恐惶謹言、

九月廿六日

連名

古川大炊殿

田代之来状返答共ニ、江戸表へ相記差越候へ共、此所ニ不相記也、

十一月廿九日

田代・長崎左之通来状令到着候付、一統披見之上、御用人中を以御前江差上、御覽相濟候上、則頭書之通、十二月十四日返答申遣ス、

一筆啓上仕候、法義一件、以頭書御請申上候通、於爰許者事相濟たる様ニ響居候処、其御地市中ニ而事夥敷申触候様ニ相聞江、其御地之風説爰許ニ而甚敷有之候、其御地江者、爰許罷越居候者茂数多有之、素其御地之人、爰元江心安申通候者茂多相聞江候故、右躰之者中越ニ而茂有之候哉、既安重利兵衛儀、右宗旨之御用ニ付、長崎表江被差越、彼地爰許江参候筈与申儀、右之御状不相達前ニ、当町ニ而茂敏致沙汰候与相聞江申候、尤爰元ニ而者、随分穩便ニ仕候而茂、右之通利兵衛儀迄申越、はや相知候様御座候而者、何たる風説を茂可申越段難測、風説募犯人共之聞、何程ニ可有之候哉与、其所如何敷奉存候、勿論爰許先達而差上候書状等、佑筆ニ茂為相認不申、内密ニ仕事ニ候処、右之通ニ御座候而者、千万気毒奉存候、此段為可申上、如斯御座候、恐惶謹言、

(頭書) 承届、於爰元右一件之儀、随分令隱密、不相洩様取計候得共、下々之風儀左様ニ有之、気毒成事候、勿論今程ハ於御国も差たる風説も無之与相聞へ候、

無番付

十月廿三日

小田儀左衛門

平田將監様

俵 平磨様

嶋雄八左衛門様

小野典膳様

樋口左膳様

右書狀頭書を以、及返答之候、

十二月十四日

連名

十二月十四日再報相濟、

十一月廿九日

八月十四日之書狀、其元走番稻右衛門指越、去ル十四日夜相達候、先以不慮之一儀相起、笑止成御事共二候、宗旨御改之儀者、

天下之御制法二而、各別重ク御大名様方御暇之節者、御老中様分而御直達有之候程之儀と申、御国之儀者別而朝鮮御役も被成御座候得者、尚以平日可被入御念段者、

公義者勿論隣国ニ至而茂、常ニ其通之底意可有之事ニ候故、別而嚴重ニ御取計可被成御事候、然者決定疑敷宗旨与申二而茂無之内押出シ、被及御僉議候時者、各ニ茂被心付候通、隣国之響はや邪宗門茂發候程ニ有之候而者、甚如何敷事ニ候、然共御近領之風説ニ而事致露顯、御手後レ成御取計之様ニ相聞江候而者、御首尾之程至而大切成御事候、仮令如何程之御物入御費ニ相成候共、事之品違候得者、其所ニ御食着可被成様茂無之事ニ候得共、最初之嚴重ニ者難被取計所茂有之候得者、尚又御取計之要ニ茂可相成筋之儀者、追々早々可被申越候、夫ニ付右四拾七人之内、人々江相勸候者四人、元禄年城戸村五人子孫之者三人、其内喜平太と申者者、相勸候人数之内ニ入居候故、以上六人与相見江、此者共を頭人与見、尚又吟味之上統領分之者を極メ可中事ニ候、左候得者御吟味有之段、其者共令承知候ハ、如何成異心を生シ、右六人之内万一出奔等可致茂難計、其余類之者迄騒立候様相成候而者、如何敷大切成事候間、先当分者表向（表向）隱便ニ取鎮、少茂騒立不申、随分無事成艱ニ安堵致させ置、内

々ニ者少シ茂油断手拔無之様心掛、尚又弥異仏を致信仰候哉否之所を、尽心力探見可被申候、其上ニ而追々時艱被申越候ハ、段々御差図之次第茂可有之候、

（頭書）御紙上之趣承知仕、御取計之要ニ茂可相成筋之儀者、追々申上候様与之御事、奉畏候、先達而申上候通、右一件者訳茂違候事故、光徳寺・西法寺被申含、内密之吟味ニ而、両僧一通行口問いたし、犯人共申分之趣ニ而者、実否難相究事ニ御座候得共、最前内々吟味差詰候様仕候而者、其節之勢段々事広ク可成行様子ニ相聞江、我々愚慮仕候茂、左様御座候而者、御領中之取沙汰不一形、万一多人数騒立候様ニ共有之候而者、尚又隣国之響如何敷奉存候付、第一者犯人共騒立不申取鎮之ため、且者隣且江茂為差事ニ而茂無之様ニ申触レ候端シと存、我々申談候上、計策を以先書ニ申上候て、誤証文ニ血判等仕せ、表向者事相済たる趣ニ先取計置候、其後漸々模様相考見候処、一味之者共右之通血判をも仕候付、弥無何事相済候与存候哉、其已来皆共安堵仕居候と相聞江、先ッ者穩ニ御座候、勿論先達而委細申上候通之風説等、一ト先ッ専ニ有之候得共、近頃ニ至候而者、右艱之取沙汰茂相止居申候、素最前ニ者隣单江茂、右之説有之たると粗相聞江候得共、今程爰元ニ而其沙汰相止居候故、夫ニ応シ隣国之聞茂、事相済たる趣ニ響居と相聞江候、扱又異仏を信仰仕候哉、心力を尽探見候様与之御事、奉承知候、内々随分心遣者仕候得共、深意事と申、殊押出シ吟味難成儀ニ御座候故、実否之程相知可申哉、千万無寛束、於此儀者内々之探ニ而相知可申筋与者不奉存候、相変候儀茂御座候ハ、早々可申上候、

一右御僉議筋之儀ニ付、隣国之聞を御厭イ不被成、拷問を以嚴敷御僉議被成候一段、并押詰御裁許刑戮筋之儀をも被申越候、外之科人等と筋違、被処刑罰候首尾ニ至候而者、御身分之御取計ニ而相済候事ニ而無之、拷問等之儀茂、容易ニ被仰付候筋ニ而者無之候間、右之所了簡違無之様、能々可被致體認候、先右之御沙汰ニ者

不被及事二候、

(頭書)奉畏候、

一隣国他領江相聞江居候模様ニ被申越候、如何程ニ響居候哉、各申談隠密ニ聞出シ候様可被致候、

(頭書)承知仕候、最前二者如何程ニ響申たるニ而可有御座候哉、難計候得共、近頃二者他之聞江、左迄之儀ニ而茂無之、最早事相済たる様ニ響キ居候与相聞江申候、

一右ニ付、長崎江万一風説共者無之候哉、彼地ニ響キ候而者、御奉行御在勤之場ニ候得者、別而大切成事候間、右模様聞合、将又其元^ハ之来状面を以、平田類右衛門江申談、右躰之事起り候節、取計方之次第等御奉行方役人衆之内、心易人江内々承合候仕形茂可有之儀ニ付、此節安重利兵衛儀、右御用被仰付、長崎江急々ニ被差越、彼地聞合等之模様ニ依、其元江罷越各申談、爰許^ハ之御差図迄者、其御地江令逗留候様ニ申渡候、勿論外御用ニ而、長崎江被召仕候向ニ而罷越候様申合、差越候心得之為、類右衛門江之書状写差越之候、

(頭書)承知仕候、長崎表平田類右衛門方江被仰越候御旨ニ付、類右衛門^ハ当月十六日之飛札、去ル十九日相達候処、安重利兵衛儀無異儀、去ル十二日長崎江到着仕候段申越、尤右之一事未御奉行所江者、少シ茂相知申たる模様ニ而茂無之、素市中ニ而茂少シ之取沙汰茂承不申候、若右之筋脇方^ハ御奉行所江被及御聞、御尋之儀有之候而茂、其節者少シ茂上之御手拔ニ不相成様ニ、御尋之機変ニ応シ、幾偏茂御答申上様者可有之候故、其所者余り御氣遣ニ被思召間敷段、類右衛門方^ハ申越、先ッ者安心仕候、夫ニ付只今爰元之模様如何候哉、承度之由申越候付、今程之時躰委細返書ニ申遣候、何卒於彼表聞合之筋、得与相知候得かしと奉存候、利兵衛儀茂御用相済次第、此表江可罷越候故、兎角申談候様ニ可仕候、尚又追々可申上候、

一右一件如斯往復いたし候内、其元時躰何程ニ成行候哉、万一急々ニ令増長、江戸表ニ而不被及御案内候而、不叶次第ニ可相成茂難

測候、若左様之時躰ニ相成候ハ、御国并江戸表古川大炊方江、早飛脚を以可被申越候、從是茂其元^ハ来状之写差越、一通り申越置候、

(頭書)奉畏候、

一右ニ付、隣国他領^ハ万一間合御見廻之御使等、其元江来候節者、各^ハ被申越候趣ニ可被相答候、

(頭書)奉畏候、

一最初手代役迄申出候真宗光徳寺儀、何方何某^ハ承候哉と相尋、何某^ハ承候と申出候時、其者を相尋、段々末を追候而致穿鑿候ハ、風説之因而起る所可相知事ニ候、尚又西法寺江茂、此筋相尋可被申候、且右両僧^ハ誤証文血判迄致させ候段、余り容易キ様ニ相聞江候者、右之兩僧万一邪法之仲間ニ而、此節御領中専風説有之候故、可及露頭時躰と心得、左候得者災難不免れと存、奸策を以申出候ニ而者無之候哉、其所茂深ク探り見可被申候、

(頭書)承知仕御尤奉存候、光徳寺儀、右之一事何方^ハ承候哉と、最初手代役を以、密々相尋させ候処、小倉村百姓助左衛門と申者、西法寺江相咄候付、光徳寺者西法寺^ハ承之候と相聞江、其旨手代中江申出候故、夫^ハ段々筋道を尋吟味仕候而、先達而申上候四拾七人を相知申候、尤助左衛門儀、一ト先ッ勸ニ依而法義を請可申与致一味、勸之者同道ニ而深山江參候処、助ケ給^ハと相唱候様申聞、精力之続候迄者相唱候得共、元氣甚乏ク相成候付、重而罷越習を請可申と申達罷歸、其後再不罷越不同意ニ存候処^ハ、西法寺江咄シ候事と相聞江申候、扱又誤り証文血判等之儀者、兩僧了簡ニ而為仕たるニ而者無御座候、前條ニ茂申上候通、其節之勢事夥數可相成模様ニ有之、夫ニ随ひ御領中之取沙汰広ク御座候而者、其趣はや隣單江相聞江候儀者、面ク之事ニ御座候故、旁を厭イ我々計策を以血判之儀、兩僧江下知仕候、尤最前内々吟味之節、犯人共申候者、宗意覚悟違を仕候段申聞候付、何篇誤入候筋と相聞候故、誤証文ニ血判為仕置、此分ニ而事相済候形子ニ仕候ハ、穩成様ニも相心得、其上一

味之人数等大概申出候様ニ茂可有之哉と存、彼是を以右之通取計候得者、其手管ニ乗シ相願候者茂有之、四十七人之面々先相知申候、依之表向者相濟候赴ニ仕成シ置候訳を以、誤証文血判之節者、手代役緒方亦右衛門差出シ、見届させ置申候、右之次第二御座候間、是迄之様子ニ而者、両僧儀先ツ邪法之仲間与者相聞江不申候、

一統領向之者を被召捕候得者、何時茂被仰分相立、慥成事ニ候故、其通可被仰付候得共、左候而者其類騒立可申哉之所難計、他領之響キ如何ニ付、先此節者、隠^{カクレ}便^ヒニ被取計置度候間、長崎間合等有之候内、少シ見合可被申候、乍去其元模様弥御領中之風聞長シ、他領之響キ茂重くれ候と相見江候ハ、先頭人者尖ニ召捕置、余類騒立不申候様、取鎮メ方随分被致勘弁置、弥被召捕候首尾ニ至り候ハ、其者共を召寄、口問之上申分ニ応シ、入牢申付候歟、又者慥成預ケニ可被申付置候、尤是とて差掛難差置首尾ニ至り候節之事ニ候、左茂無之差当騒立可申共不相見候ハ、利兵衛其許江罷越候迄者、見合置候様可被致候、

(頭書)奉承知候、

一統領分之者を召捕候ニ至候ハ、一味之者共を一村切ニ段々ニ召出し、統領申分を申聞せ、此節急度可被及御糺明候得共、下賤愚癡之上了簡達ニ而、不謂法義ニ傾候と相聞江候故、此節者令有免候、自今以後急度相改、是迄誤入候段を証文ニ認、血判仕候様ニ申付、若及異儀候とも、随分穩当ニ申論シ証文致させ、差帰候様可被取計候、此段者各心得之為、兼而申越置候、

(頭書)奉畏候、

一邪法ニ傾キ候者共、家内之様子身持業作動止ニ至迄氣を付、少シニ而茂氣掛之事有之候ハ、各江早速申出候得と、内密ニ鄉村役人共両町役共江、嚴重ニ申付置、夜中茂忍々ニ役人立廻り、非常を制シ候様可被申付置候、

(頭書)承知仕候、何程精密ニ役人共江申付候而茂、其趣相洩間敷ものニ而茂無之、犯人共承之候而者、万一異心を生シ可申茂難

測、素在方役人共一味与者不相分候得共、兄弟又者親類縁類之内、一味之者有之間敷共難極、其内若仲間之者茂候而者、還而害をなし如何敷意味茂可有御座候哉、尤右之非常を制候儀、御扶持人江申渡立廻り候様仕候而者、必定疑心之端と相成、其儀茂難成、兎角其村之役人江申付、内密ニ心掛立廻り不申候而者、何篇難相制事ニ御座候得共、右申上候意味茂有之候故、御差図之御旨ながら、其通ニ茂手賦難仕、先時鉢見合罷在候、我々共ニ茂右之所を甚大切千万、誠ニ安心不仕次第奉存、長崎^{カキ}委細之模様申来候ハ、相堅メ様々手段茂可有御座哉と一向相待罷在候、然其内々承合相考候処、先ツ穩ニ有之騒立候様子与者不相聞、責而之儀与奉存候、

一宗旨改之儀者、嚴重成御法令有之候処、如何様之訳ニ而是迄不相顯事ニ候哉、其掛之面々委細可被遂吟味候、

(頭書)承知仕、御尤奉存候、併其掛之役人只今吟味仕候而者、此節又候段々御吟味被仰付候御事歟と、皆共可奉存哉ニ候故、左様候而者、又々何角取沙汰再発可仕儀者、必然之事ニ而、隣單江茂はや相聞江、素り前條之頭書ニ申上候通、在方役人之内、若一味之者可有之段茂不分明候故、先ツ只今之内者吟味等之機シ、少茂不相見候様、隠^{カクレ}便^ヒニ仕居、何れ利兵衛此元江罷越、長崎之模様相知候迄者、内々なからも右之一事ニ抱候様ニ者難仕哉ニ奉存候間、兎角長崎之様子相知次第、追而委細御伺可申上候、

一被申聞候趣ニ而者、多人数ニ茂可及模様ニ相聞江候、万一人勢ニ及候時、畢竟其所其時之取計方ニ而、科之輕重、他方之聞江茂差別可有之事ニ候、勿論内々手配手当等大事ニ心得、無抜目僉議を極置、表向ニ者下賤之者共、一時之不了簡ニ而、訝敷身持いたし候と相聞江候得共、糺明之上前非を改候故、差免候と申程ニ大様ニ取はやし、自然と他之聞江茂無何事相濟たる趣ニ計ひ候筋と、今度之犯人共ニ為致安心、徒党之者共不起様ニいたし置候与之兩段、肝要成事候間、各深ク被尽思慮機変ニ応シ、取計方可被入念

候、

(頭書)奉承知候、御差図被仰下候兩段之次第、前條頭書を以申上候通二而、穩二相聞候得共、我々内存曾而油断不仕心遣仕罷在候、

一今度之一件、我々中連名二可被申越事二候処、平磨・八左衛門兩名二而被差越候得共、事之品違候故、返答之儀連名を以申達候、(頭書)奉承知候、

右九月廿六日之御返書、去ル十六日相達、以頭書御請申上候、以上、

無番付

十月廿三日

小田儀左衛門④

小川又三郎④

平田將監様

俵 平磨様

嶋雄八左衛門様

小野典膳様

樋口左膳様

一平田類右衛門方江、被差越候御状之写、

一安重利兵衛江、被仰含之御書付写、

右者省略仕候、

十一月廿九日

以別紙申達候、元禄十一年其御領城戸村之者、正應寺法を行候節之記録、其元江無之旨被申越、左候而者此節見合等二差支可在之、殊已来共兎角無之候而不叶事候間、爰許江有之候を心得二茂可相成戦と、急二写シ出来、本書左之通其許江差越候、此段為可申達、如是候、恐々謹言、

(頭書)承知仕候、則御帳末之通相達申候、

九月廿六日

嶋雄八左衛門
俵 平磨

小川又三郎殿

小田儀左衛門殿

一宗門出入記録五冊、

一別帳老冊、

以上、

右之御状、以頭書御請申上候、以上、

十月廿三日

小田儀左衛門④

小川又三郎④

俵 平磨様

嶋雄八左衛門様

一筆啓上仕候、今般田代一事之儀二付、御差図之旨奉畏候、右二付各様△田代江之御返書、并一事徒党之者名前、其外田代△御案内之帳面、且利兵衛御渡被成候御書付之写共二、奉承知候、猶又利兵衛申談、御鎮メ方二茂相成候筋有之候ハ、田代御役人中為心得申遣候様可仕候、利兵衛儀參着間茂無御座、其上市茂違候儀故打出シ、急速難承合、御内々二而御取鎮方、御下知之端二茂相成候儀承立候ハ、追々可申上候、

一御奉行所其外市中取沙汰之儀、是迄少之風聞仕候段、承届不申候、依之利兵衛參着之次第、且当所取沙汰無之趣、田代江申遣候、勿論御領中取鎮居候与ハ相聞ヘ候得共、御差図之旨御座候二付、猶又為承合セ差越候田代江之状案奉入御覽候、当所之儀者、仮令御奉行所△万一右之次第御尋之筋御座候共、余り御手拔二相成候様二仕間敷、其節之機変応シ、幾偏二茂御答申上様者可御座与奉存候故、乍此上田代之方御取捌方長引不申候而、相鎮候様二御座候得かし与奉存候、右之段為可申上、如斯御座候、恐惶謹言、(頭書)兩条之趣、承届候、

十月十七日

平田類右衛門④

平田將監様
俵 平磨様

嶋雄八左衛門様

小野典膳様

樋口左膳様

猶以申上候、右一事二付候而者、利兵衛連名を以可申上候間、左様二被思召上置可被下候、此段申上候、以上、

(頭書)承届候、

長崎役 田代江遣候書状写、

一筆致啓上候、其表此度之一事二付、御国御年寄中 別紙人御覽候通、御差図被仰越、素り右二付、安重利兵衛当所江被差越、去ル十二日参着有之候故、利兵衛申談、専ら内々を以承合居候得共、事茂違候儀故、差当り是を是と申候而、御取鎮メ方御取捌方二相成り候筋承り出シかたく御座候、尤御奉行所江、右之筋ハ未少茂相知申たる模様ニ而も無御座、素り市中ニ而も少之取沙汰も承り不申候、若右之筋脇方 御奉行所江御聞被及、私迄御尋有之候而も、其節ハ少茂

上之御手拔ニ相成り候様ニハ相成り申間敷、御答之申上様者、其節之御尋之機変ニ応シ、幾偏も御手拔ニ不ル相成様ニ、御答申上様ハ可有之と奉存候故、其処ハ余り御氣遣ニ被思召間敷候、只今其御地之模様ハ如何御座候哉、早々承り度利兵衛申談、時艸御間合申遣候、御国 茂其御元江御差図之趣、成たけ無事相 候様ニ思召候、御状面見請候得ハ、乍憚御油断ハ有之間敷候得共、成たけ騒立不申候様ニ奉存候、右申進候通り、其御地之模様次第ニ、爰元ニ而茂尚又申談之筋も可有御座候間、委細被仰知候様ニ可被成候、

一 去々年当所ニ而取沙汰仕候ハ、右牀之筋筑前ヘ有之候様ニ、専ら取沙汰仕候故、筑前御屋敷三右衛門方江御間合、内々手寄を以御取 方之筋共ハ相知申間敷候哉、素り右之筋耽与いたし候筋を承候而、申遣候ニ而ハ無之候得共、去年当所ニ而、右之旨風聞仕候筋故、若三右衛門方江被仰越候而、御取 之御手寄共ハ

相成り申間敷候哉与心付候故、此段も申遣候、先早々為御間合、如此御座候、恐惶謹言、

十月十六日

平田類右衛門

小川又三郎様

小田儀左衛門様

十一月廿九日

一筆啓上仕候、今般御用筋之儀、先達而茂申上候通、事之次第違密々之聞合事ニ御座候得者、色々と手筋を以承合居候処、近年筑前領江法儀違之者、人数有之候段取沙汰仕、実否者如何ニ而御座候哉、其砌一通之風聞承及候段承立候ニ付、彼方様御屋鋪江心安出入之者江、猶又委ク聞伝居候事茂可有之と存、手寄を以聞合候処、其時分脇沙汰承及候、其後承候得者、御内々ニ而事相済たる由ニ御座候段聞合候ニ付、此上聞役江面談仕承合度、無左候而ハ事不委、乍然右一事之儀容易難問合、彼方之請方ニ、却而如何敷次第ニ付、其所色々申談シ見候而茂、外ニ仕方茂無御座候ニ付、類右衛門儀聞役吉田太郎右衛門江致面談、咄之趣ニ而承見候処、事茂違候故、太郎右衛門一通之相答仕候付、類右衛門申入候者、一向宗之者者間々法儀違候者有之と相聞ヘ申候、畢竟下賤之者共一時之了簡違、不審キ身持仕候事与被存候、就夫実否如何之御事ニ候哉、近頃難申入事候得共、其御領江右体之御折渡有之たる風聞、前以粗承及候趣、弁作を以段々咄合候処、太郎右衛門被申聞候者、成程被仰聞候得者、四五ヶ年以前之事与覚候、領内江法儀違之者有之段申出候者御座候ニ付、段々次第を吟味仕候得ハ、左様之法儀違之筋ニ而無之、只一通覚違仕候段、明白ニ相分候ニ付、無何事相済候由被申聞候得共、当地ニ而其節承候処者、殊外ばつと取沙汰仕たる由ニ御座候、右之次第御座候得共、御内々之御取捌を以、事相済申候、右之外肥後久留米領杯江も前以右体之儀、取沙汰有之たる由申候得共、兩所之儀者委ク未承知不仕候、田代御下知之筋等御延引ニ相成候様ニ、可被思召上程茂難計奉存

候付、右聞合之趣御案内申上候、此外御用筋之御端ニ茂相成儀承立候ハ、追々可申上候、

(頭書)条々紙面之趣、承届候、先以不時之間合事ニも、別而被致心遣候、田代之方其後穩ニ有之、隣国并御領中之風説も相鎮り居候と相聞、珍重ニ存候、

一 絵板御借請之筋、内々ニ而相成儀共候ハ、次第二御踏セ被成、御取鎮方茂可有御座候間、聞合セ候様ニ与之御事ニ付、御借請方内々当所古キ町役之人江承合候処、絵板之儀者重キ事故、新ニ御借請之儀容易ニ相成申間敷由申聞候、尤御奉行所江類右衛門罷出、内々ニ而一通承候儀も、不差支様ニ承様者可有御座候得共、右ニ申上候通何レ折渡事、六ヶ敷可有御座由承申候、尤於当地御奉行所絵板御借請被成候而、為御踏被成候、御方々聞合見候処、久留米・平戸・大村・五嶋、此御四ヶ所ニ而御座候内、久留米之儀絵板御借請被成候儀、余り遠キ事ニ而茂無御座由承候得共、如何成訳ニ而只今絵板御借請御踏セ被成候与申次第之儀ハ、委ク承出シ不申候、素り絵板御借請被成候御面々ハ、御借請之節御使者を以御借請被成、返上之節茂其通之事之由ニ御座候、其上宗門改之儀、何方共ニ春之内ニ而、当地抔茂正月段々絵踏被仰付候処、時節茂違、此節新ニ午内々御借請之儀如何之御事ニ而、殊ニ御奉行御交代之時分ニ御座候得者、旁以折渡抔六ヶ敷可有御座哉、何レ絵板御借請等之儀、御奉行所之方不聞合セ方可宜ケル与申談、差扣申候、

一 田代一事之儀、次第二御奉行所之方、御手拔無御座様ニ取計方之儀、機変ニ応シ御答等申上様可有御座段申上置候、就夫ニ只今之御奉行之御勤被成方ハ、当所町役人共取沙汰之趣、且見請候所茂事之重キ儀者、素怪儀たり共、御内々ニ而一言之御相答無御座、書付を以申上候を、直ニ江戸表江被差送事与承申候、右之御取捌故、御役人抔者猶以掛合不申候故、内意承合等之儀、無益之筋与存候、素此節之儀者、事茂違候儀故、成たけ御御奉行方ニ者何篇共ニ不承合方、時体宜ク奉存候、

一 田代聞合之返答申来候ニ付、返書之写奉入御覽候、右状面之趣ニ而ハ、取鎮居候与相聞申候、其上当所聞合之次第、右ニ茂申上候通りニ付、利兵衛田代江罷越候儀、見合出仕候様ニ可仕之処、今度奉入御覽候返書端書之趣ニ而ハ、利兵衛彼方江罷越、若犯人共疑心を記シ、騒立候様ニ共有之間敷不被存候、其上御奉行坪内駿河守様御旅中、今程ハ御船中ニも御掛可被成日積ニ而、殊ニ御道中田代御止宿之積ニ御座候間、只今之内田代江罷越候儀ハ、旁以宜ケル間敷様ニ被存候付、此節奉入御覽候状面を以、又々聞合返答之趣ニ、何レ共申談候様ニ可仕候間、左様ニ御聞通被成可被下候、右之趣御案内為可申上、如斯御座候、恐惶謹言、

十月廿七日

安重利兵衛
平田類右衛門

平田將監様

依 平磨様

嶋雄八左衛門様

小野典膳様

樋口左膳様

田代役長崎役へ返書写し、

去ル十六日之御飛札致拜見候、此度爰許之一件ニ付、八月十四日之以書状、御国表江申上候ニ付、其次第貴様方江委細被仰越、素り右御用被仰合、安重利兵衛其御地江被差越、去ル十二日到着之由致承知候、右之一事御奉行所江未少茂相知申たる模様ニ而茂無之、市中ニ而も少之取沙汰茂御聞不被成之由被仰越、先ツハ致安心候、此元時体之儀、先達而御国江申上候通之風説等、最前ニハ專有之候得共、近頃ニ至而ハ、右躰之沙汰も相止ミ居申候、尤先頃内々致吟味候上、誤証文ニ血判等仕セ置、其後段々模様相考見候処、犯人共一通り之儀与相心得候趣ニ而、誤誓旨血判も申付候付、是迄ニ而無事相済候与存候哉、其以後安堵仕居候与相聞へ、先ツハ穩ニ有之候、勿論内々致吟味候節茂、一通り申分之赴而已

二而ハ詛茂違候儀故、実否相究事ニ御座候得共、其節之勢段々事
広ク可成行様子ニ相聞ヘ、甚如何敷候ニ付、第一犯人共騒立不申、
取鎮之ため我々申談之上、姦計を以押付血判等仕セ、事相済たる
赴ニ先取計置候、最前ハ隣單江も右之説有之たると粗相聞ヘ候得
共、今程爰元ニ而其取沙汰相止ミ候故、右ニ応シ隣單之聞ヘも事
相済たる趣ニ響居候与相聞ヘ候、兎角其御地ニ而御内密を以、御
間合之筋相済候上、利兵衛此表江可被罷越候間、其赴ニ^ハ時宜ニ
応シ取計様茂可有之与存候、尤先達而御年寄中江申上候御返答之
御状、并貴様方江御差図之御状写等、去ル十六日相達、御差図之
赴茂有之候得共、其御地之模様不相知、内密ニ而も当節又候及吟
味候与、若洩聞候ハ、騒立候筋共可相成意味も有之候故、利兵
衛爰元江被罷越候迄ハ、何レ之筋ニも見合可申与存罷在候、

一筑前ニ而、右之一件筋有之たる風説、去年其御元ニ而御聞被成候
由ニ付、博多役神吉三右衛門方江、内々問合セ聞敷哉之由、御心
付之段被仰知致承知候得与致了簡、三右衛門方江問合候様ニ茂可
仕候、

一右之一事内密之儀ニ付、先達而御年寄中江差上候書状等、佑筆中
江茂相認サセ不申候故、其御元ニ而も御油断ハ有御座間敷候得共、
洩聞ヘ不申候様ニ御取計御尤存候、

一御年寄中御状写等被差越致落手、爰元江留置申候、右御報旁為可
申置、如此御座候、恐惶謹言、

十月廿日

小田儀左衛門

小川又三郎

平田類右衛門様

尚以本書ニ申進候通、右一件之沙汰、近頃ニハ爰許ニ而相止居申候、
然処此度利兵衛其御地ヘ被差越、此表江も被參候答申儀を、はや当
町江も相聞ヘ、不審ニ存候与之致沙汰候段承之候、於御国ニ右之一
事、何角与夥敷様ニ沙汰有之与相聞ヘ候故、其趣共心安方より当所
之者方江、申越たる事共ニ而ハ無之候哉与被察候、就夫二右之沙汰、
又々広申触シ候様ニハ有之間敷候哉、左様共候而ハ、甚如何敷氣毒

千万心遣ニ存事ニ御座候、以上、

寅十二月三日達、

一筆啓上仕候、田代御領中一事之儀、先達而御案内申上候通之儀
ニ御座候得共、其後共ニ猶又承合見候処、於爰許ニ何レ取沙汰不
仕候、素り当所御奉行駿河守様、此節ハ田代御止宿ニ相成候付、
御領中之儀御役人中、猶以油断可有之様茂無御座候得共、万々一
下々之難説杯御家人衆聞及之程難計、如何哉与心遣ニ奉存候処、
当地御着被成候以後、先唯今迄何之次第茂無御座候ニ付、旁以御
安心可被思召上候、然者御用筋之御端ニ茂相成候次第可在御座哉
与、其以來猶又随分密々ニ聞合候得共、別而差立申上候趣等無御
座候、就夫肥後久留米領之儀、前以右様成法儀違之者有之、其沙
汰承候趣一通り申上置候付、右両所承合方申談居候処、近頃肥後
關役宮川五郎左衛門江、類右衛門儀面談一通咄之様ニ承合候処、
存之外請方宜五郎左衛門被申聞候者、領内ニ而茂右様之取沙汰毎
度仕候得共、遂吟味候得者、皆共存違ニ而事相分レ候付、其俣ニ
而相済申候、其外少々宛之儀者、我々ニハ不存事も多ク有之、其
後粗承候段被申聞候、脇沙汰之通ニ而、時々左様之次第有之与相
聞ヘ申候、久留米之儀者、未委敷儀承不申候、承出候ハ、追々
可申上候、

一先達而申上候田代問合之儀、再必類右衛門^ハ申越候返書到来仕候
ニ付、奉入御覽候、書面之趣ニ而者、事一鉢相鎮居候与相聞ヘ申
候、然処利兵衛儀、田代江罷越候共、於当所ニ聞合之趣、是与申
候程之御捌方ニ相成候筋茂無御座、段々御案内申上候次第之儀ニ
御座候得共、田代状面之趣も御座候上、罷越候共騒立候程之儀も
有之間敷段、申来候ニ付、利兵衛儀如田代罷越、御差図可奉待段
申談候、利兵衛罷越候上、歸国仕候ハ、御領中鎮方之程間等委
敷御聞通被遊、猶又御安心可被遊奉存候ニ付、弥其通り申談罷在
候、素り御奉行志摩守様近々御発馬被成、前後御跡荷等ニ至り、
過分之御荷物ニ付、道中込合可申与存候間、田代御通り被成候以

後、出足仕候様ニ申談候、此段為可申上、如斯御座候、恐惶謹言、
(頭書) 条々紙面之趣、承届候、田代之方時艱穩ニ相聞、珍重之事
候、就夫利兵衛儀、田代へ罷越候而も差而騒立可申勢と不相聞
候付見合、田代へ可罷越之段被申聞、是又承届候、今程田代へ
可被相越と存候、依之帰国之儀ハ、田代へ中越候、

十一月十日

安重利兵衛 ㊦

平田類右衛門 ㊦

平田將監様

俵 平磨様

嶋雄八左衛門様

小野典膳様

樋口左膳様

長崎役江田代へ返答写、

一筆致啓上候、其表一事之儀ニ付、先達而得御意候通り、安重利兵
衛被差越、於当所ニ如何程ニ取沙汰等可有之哉、勿論右様之筋御取
鎮被成方之一道ニも相成候筋、可有之哉与被仰合之御旨を以、随分
利兵衛申談手寄を以不事立様内密ニ承居候得共、事も違候義故、只
今迄是与申候而、御取鎮方ニ相成り候筋、承出シ不申候、先達而得
御意置候、筑前領へ前以取沙汰有之候趣、彼方聞役方へ罷出承合候
儀、御国へ御案内申上候趣、其外愚意之旨等申上候ニ付、若ハ御止
入之端ニも相成り可申哉与、別紙致書載差越申候、先以一事穩ニ有
之、乍憚御下知故与御同前ニ珍重奉存候、利兵衛儀其表江被罷越候
上、爰元聞合候趣ニより、御取計方も可有御座由被仰下候得共、右
ニ申進通之事ニ御座候、御返書御端書之趣ニ而ハ、利兵衛当地へ被
差越候儀、敏其表へ相知、皆々不審ニ存候故、沙汰いたし候段被仰
越候得ハ、其程如何哉与存候、只今ニ而ハ安心仕相鎮居候處、利兵
衛与風其表へ罷越候時、再起之程時休難計御座候、其上先達而申越
候通り、当所御奉行駿河守様、追付其元御通路被成、殊ニ今度ハ御
領分へ御止宿有之候得ハ、其内利兵衛其表へ被罷越候儀ハ被見合

度存事ニ御座候、尤犯人共騒立候程之儀ハ有御座間敷候へ共、是迄
取鎮居候を、利兵衛罷越候付、御領中ニ而兎哉角与密々ニ申様之儀
とも、万々一御家中人忤承り咄合、其段御奉行之御耳ニ入候様ニ有
之間敷ものニ而も無御座候、何レ御端書之趣を以相察見候へハ、右
之趣於爰元時休難計奉存候ニ付、早々此段得御意候、委細御報相待
罷在候、恐惶謹言、

(頭書) 御紙面之趣、致承知候、於其御地ニ御問合被成候得共、別
而相替儀無之趣ニ相聞へ、先ツハ致安心候、然ハ御国御年寄中
へ被差越候御状之写被遣之相達、被入御念御事奉存候、就夫ニ
安重利兵衛儀、其御地へ爰元へ被罷越候与之儀、風説之趣申進
候付、被仰下候次第御尤ニ奉存候、別而相替候儀無之、今以穩
ニ有之候、素リ利兵衛被罷越候ハ、一通り者如何哉与評判を
も可仕候得共、騒立候程ニハ有之間敷哉与存候、尤利兵衛被越
候而、万一騒候而茂其御地ハ聞合之趣ニより候而ハ、何分不被
罷越候而難相濟事ニ候得ハ、右ニ相抱り申義ハ有御座間敷哉与
被存候、於御国利兵衛爰元へも被參候様ニ被仰合も有之たる趣
ニ候處、若我々江被仰合之次第被申達候筋ともハ無御座候哉、
左様之義も候ハ、承度、勿論此方へも利兵衛帰国便ニ書状ニ而
申上、難貫意味も有之候ハ、申合候勝手ニも宜ク御座候間、
何レニも右之程合被遂御相談可被下候、爰元時休之儀ハ、右ニ
付騒立候筋ハ有御座間敷存候、

十月廿六日

平田類右衛門

小川又三郎様

小田儀左衛門様

右之御状相達、以頭書及御返答候、以上、

十月廿九日

小田儀左衛門

小川又三郎

平田類右衛門様

写済、

十一月廿九日

一筆啓上仕候、私儀御国出張仕候已後、所々滞船仕、昨十二日長崎江着船仕候、然者被仰付候御用筋、御書付之御旨被為仰合候次第等、平田類右衛門江委細申置候、右御用筋之儀被聞合候上、爰元之時体追而御案内可申上候、就夫御領中風説等之儀相尋候処、不承及由、素り爰元之儀、不埒忒儀二而も、何角取沙汰承候処、御領中右体之次第、隣国之聞へ茂無之与相聞へ申候、詰合之役人其外御屋敷御出入之者至り、是迄何之噂茂不申聞段被申聞候、左様可被為思召上候、此段為可申上、捧愚札候、恐惶謹言、

(頭書)紙面之通、承届候、

十月十三日

安重利兵衛④

平磨様

八左衛門様

尚以申上候、今般被仰付置候御用一事之儀者、類右衛門連名を以御案内可申上候、左様御聞通被遊置可被下候、以上、

(頭書)承届候、

十一月廿九日

一筆啓上仕候、御用筋聞合方御隠密之儀二付、平田類右衛門儀不一方心遣被仕、右聞合之次第以別紙御案内申上候、然者御当地之時体先達而申上候通、他聞之取沙汰無御座上、御奉行方之儀茂、別而御心遣被為遊候儀無御座御事与奉存候、就夫私儀爰元聞合之次第、模様二依り田代江罷越、御役人中江申談御差凶奉待候様可仕候処、別紙申上候趣二而、差掛り申談候儀無御座奉存候付、先罷越候茂差扣御差図可奉待段、類右衛門へ申談候、其上類右衛門方へ御領中問合之返答申来候趣二而者、私儀爰元へ被差越候次第、於御領中不審取沙汰仕候与相聞江申候付、不凶罷越、若一味之者共異心起申聞敷共難申上、左様共有之候而者、却而人切奉存候、殊二御奉行駿河守様、間近二御旅中之御事二被成御座候得者、彼是爰元へ差扣候方可然由、類右衛門も被申聞候、何分御指図被為仰付可被下候、其内万々一茂田代江罷越、御役人中へ不申談候而、不相成次第出来仕候ハ、急

速罷越申談候様可仕候、此段御窺為可申上、捧愚札候、恐惶謹言、

(頭書)承届候、

十月廿七日

安重利兵衛④

平磨様

八左衛門様

寅十二月三日達、

一筆啓上仕候、爰元御用筋之儀尚又申談、成たけ内密二聞合候得共、差立たる次第無御座候、素り事茂違候上、密々承合方類右衛門別而心を尽被申候、委細別紙を以御案内申上候、将又私儀田代罷越方之儀、先達而申上候通二付、見合罷有候、然処類右衛門方へ御領中之時体再応聞合被申越候処、返書申来候趣茂御座上、罷越候共騒立候程之儀者、有之間敷段申来候付、爰元聞合之御用筋大抵相除、此上聞合方差而相替次第茂有之間敷段、類右衛門被申聞候付、田代之ことく罷越御差図を可奉待段申談候、素り御奉行志摩守様間近二御発駕被成候付、御立跡見合出足仕可然段被申聞候付、其通可仕与奉存候、先達而御伺申上越候趣茂御座候付、右旁為可申上、捧愚札候、恐惶謹言、

(頭書)紙面之通逐一承届候、長崎表聞合之儀、為差次第も無之、

田代へ被罷越候而も、差而可及騒立勢とも不相聞候付、田代へ可被罷越之段、承届候、今程田代へ可被罷在と存候、先ハ右一件穩二相聞候付、帰国之儀者以別紙申達候、

十一月十日

安重利兵衛④

平磨様

八左衛門様

右三通——書狀、以上、

十二月十四日

連名

一田代宗旨一件二付、江戸表古川大炊并田代役、安重利兵衛方へ、

左之通之書狀追々差越ス、

一筆申達候、其元宗旨一件二付、去ル九月廿六日之以書狀、逐一令差図候処、十月廿三日頭書之返答、先月廿九日相達候、先以彼者共其後無何事鎮り居、他領并御領中之風説も今程ハ穩ニ相成り、於長崎も何之取沙汰等無之と相聞、珍重ニ存候、只今之勢にては、安重利兵衛儀、其元へ罷越候而も、差而騷立之端と可相成模様とも不聞由二而、弥罷越候筈之由申来候故、今程ハ其元可罷在与存候、只今之通、皆共誤証文血判ニ而事済たると存、令安堵居候事と相聞候付、於其元利兵衛被申談、相替儀も無之候ハ、利兵衛儀者帰国可被申渡候、尤以来共ニ被心掛、少も相替たる事有之候ハ、早速可被申越候、右之段為可申達、如此、恐々謹言、

十二月十四日

連名

小川又三郎殿

小田儀左衛門殿

一筆申達候、長崎表問合之趣、平田類右衛門以連名被申聞、承届候、出代之模様貴殿被罷越候而も、差而騷立之端と可相成とも不相聞候付、如田代可被罷越之趣被申聞候故、今程田代へ可被罷越と存候、田代役申来候趣にては、隣国并御領中之風説も今程ハ穩ニ有之、彼者共も誤証文血判等ニ而事済たると存、令安堵居候と相聞候付、此上被申談筋も無之候ハ、田代役申談可被致帰国候、右之段為可申達、如此候、恐々謹言、

十二月十四日

連名

安重利兵衛殿

以別紙令啓上候、田代宗旨一件之儀に、爰元令差図候書狀之返答来候処、先達而廣徳寺・西法寺を以誤証文血判致させ候故、事相済候と心得、彼者共令安堵居、少し之騷立も無之と相聞、尤長崎役平田類右衛門并安重利兵衛申来候も、長崎ニ而何之取沙汰風説等も無之と相聞、且又肥後・筑前辺ニも近年宗意心得違之者有之たるとの

風説、類右衛門承候付、右間役へ内々を以承合見候処、何れも事立たる事ニ而無之候由ニ而相済候与之趣ニ候、於長崎利兵衛段々承合候へ共、差而御心得ニ可罷成程之儀も無之候付、田代之如く可罷越旨申来候、依之別紙写之通田代役へ申越候、先者無事故相鎮り居、他領之聞へも左程之事共不相聞一段之儀ニ候、此段為御心得、如此御座候、恐惶謹言、

十二月十四日

連名

古川大炊殿

写済、

卯正月十六日達、

一筆啓上仕候、先達而申上候趣ニ付、私儀長崎相仕廻、去廿一日彼地出足仕、昨廿五日田代江參着仕候、御領中之儀御役人中江承合候処、其以来是迄相替儀無之段被申聞候、尤長崎御用筋問合之趣等、尚又申入候、何れ御役人中存寄等と承候上、御伺申上候儀御座候ハ、申談、追而可申上候、右參着之御案内為可申上、捧愚札候、恐惶謹言、

(頭書)承届候、

十一月廿六日

安重利兵衛

平磨様

八左衛門様

一筆啓上仕候、私儀御領中江罷越候以来、犯人共疑心差発相遣筋等無之候哉、其掛り之者へ内々見聞仕出候様被申付置候由ニ御座候得共、別而相替儀無之趣ニ相聞へ申候、

(頭書)承届候、

一今般犯人共、御取鎮之御裁許御差図被為仰付御事、奉待罷有候、然処於爰元之時体、彼是を以小川又三郎・小田儀左衛門存寄申談見候処、犯人共之内頭人者御国之ことく被召捕、其余之者者表立新ニ被仰渡之御旨を以、血判等被仰付、此節御内々御取鎮被遊候儀、如何可有御座哉之所、愚意申談候付、不顧憚此段申上度、又

三郎・儀左衛門^ハ委細被申上候、尤私儀連名ニ可申上儀奉存候得共、御領中之儀者追々御案内被申上置候次第を以、此節茂別而存寄之趣等被申上事ニ相聞へ候付、犯人共御片付方申談候趣、以別紙一通り乍憚申上候、

(頭書)書面之趣見届候、犯人共御取鎮御裁許之儀、田代役存寄伺越候付、貴殿^ハも委曲被申越候趣、承届候、今程犯人共一鉢相鎮居候と相聞へ候付、先只今之通いたし被置候様、田代役へ委細及差図、此節御裁許之儀、いつれとも相極不申越候、貴殿儀無間も帰国可被致候故、其元時鉢等委く申承候上、追而及差図候品も可有之候、

一私儀御領中江罷越候而、見聞仕候処、右申上候通、穩ニ相聞へ申候間、別而御用筋茂不被遊御座御事共御座候ハ、帰国之儀乍憚御差図被仰付被下候様奉願候、此段為可申上、捧愚札候、恐惶謹言、

(頭書)承届候、貴殿帰国之儀者、先達令差図候、其元時鉢不相替申談儀も無之候ハ、早々帰国可被致候、

十二月九日

安重利兵衛^④

平磨様

八左衛門様

写濟、

正月十二日達、

一筆啓上仕候、安重利兵衛儀長崎表御用相濟、去月廿五日爰許江罷越、彼地之模様其外隣国筋御取行方之聞合等、委細演説仕承届之、先以彼地之様子穩ニ相聞江、先者御安心之御事奉存候、右之次第者於長崎表、類右衛門・利兵衛連名之書状を以、追々御案内申上候段申聞候付、利兵衛申聞候趣者、分ク而不申上候、爰許時鉢之儀先達而申上候通ニ而、其已来共ニ騒立候儀茂無之、随分静謐ニ有之、夫ニ応隣單之取沙汰茂相止候与相聞江候、就夫利兵衛長崎ニ而聞合之趣を以者、別而相替候儀茂無御座、何方共ニ御内々之御取計ニ而相濟候与相聞江、素り於爰許茂承合候処、利兵衛

申聞候通と同様之儀ニ而、何れ表立候筋二者御取計不被成御事与相聞江候、然者長崎表^ハ委細御案内申上候趣茂御座候付、御決定之上落着筋之御差図可被仰付越御事与、一向奉待罷在候、

一我々共、利兵衛差寄申談見候処、右之法儀取行候者共、是迄之形チニ而被召置候ハ、當時者風説等茂有御座間敷候得共、法儀取行候者共者御構無之筋与相心得、弥押出多人數勸込候様ニ茂可相成哉、既ニ去頃之風説を承候処、右之宗儀ニ付元禄年長崎江茂被差送、御吟味被仰付候得共申開、無別条帰村被仰付候訳ニ候故、今度御吟味ニ掛候而茂同様之儀ニ而、別而驚候筋ニ茂無之与、一味之者共申聞候由、下賤之者ニ候得者、大切之筋与申所ニ心付無之、素身分科ニ相究候訳之事共相心得不申能キ事ニいたし、段々勸込無間茂大イニ申触、何程之害を生可申段茂難計、然者与而御糺明被仰付候様ニ相成候而者、世上之風説再起仕隣單江響、其上甚御手入与罷成、何れ御吟味筋者難被仰付時鉢与奉存候、乍去責而頭人成共御片付不被成候而者、已来之戒ニ決而不相成候得共、邪正不分明候を曲而刑罰二者、容易ニ御裁許難被仰付御事哉ニ奉存候、然共御内々之御取計ニ相成候ものニ仕候時者、宗旨之邪正科之輕重御糺不被成、其向ニ押而御片付被成候筋ニ無御座候而者、相濟間敷御事哉与奉存候、何れ只今之通無事ニ被召置候ハ、已来之害甚敷可相成哉与、大切奉存候間、当夏以別紙御案内申上候人数之内、勸込候頭人并元禄年長崎表江被差送候子孫之者共ニ、其御地江被召呼置、其上ニ而時宜ニ応、御賢慮次第被仰付度御事哉ニ奉存候、勿論元禄年長崎江被差送候子孫之内ニ而、城戸村喜平太与申者者、唯壹人を勸込候与相見江候得共、先頭人之内ニ差加江置候、城戸村利兵衛・小倉村平右衛門、此兩人者誰ニ茂勸込不申与相聞江候、此者共儀者如何可被仰付候哉、其外一味之者共者自今已後、右之筋急度可相改与之趣を以、当節新夕ニ血判被仰付、尤犯人共檀寺之僧江茂右之次第申渡、向後担方之内宗意之了簡達等之者無之様随分心を用、本宗之儀嚴密ニ教訓仕候得与屹度被仰付、当節御濟被遊、如何可有御座候哉と奉存候、拟又一味之

者共新タニ血判仕候与而、已来是迄之法儀相止候与申儀者、難測奉存候、一味之者之内ニ茂真宗ニ無之、他宗之者茂有之、其上每歳宗旨改之節者、牛王血判を茂仕儀ニ候故、分ケ而血判申付候与而、本宗ニ可傾儀者難測奉存候、右之筋者兎角嚴重之御取行方ニ而、懣怖仕候程ニ有之候ハ、以来之為可宜哉ニ奉存候得共、其筋いかふ難被仰付御事哉与、乍恐奉存候、右躰愚意之了簡申上候段、甚恐多奉存候得共、事荒ラニ有之候儀なからも、時躰を以何れ不申上候而者、御評議之御端ニ茂不相成儀哉与奉存、不顧恐申上候、何れ之道ニ茂御取詰之御差図被為仰付越可被下候、此段為可申上、如斯御座候、恐惶謹言、

(頭書)書面之趣逐一承届候、各存寄之趣其筋可有之事ニ候得共、今程一躰相鎮居候与相聞候得ハ、頭人分之者御国へ被召呼候様有之候而ハ、又々御吟味有之事と相心得、一味之者共ニ騒立可申哉、左候ヘハ、隣旦之響キも夫々応シ、彼是と取沙汰可令再起も難計、勿論頭人共御国へ被召呼候時、無御吟味ニハ御片付被成候筋も難被取計事ニ候、将又御吟味有之ものニいたし候而ハ、甚取沙汰大に可相聞と被存候、先達兩僧立会遂吟味、以来可相改との血判為致、其分ニ而相鎮居候事故、先只今之分ニいたし置、追付安重利兵衛儀も可令帰国候間、尚又其元時躰等委細承届候上、追而令差図候品も可有之候、依之此節ハ御裁許之趣ハ不申越候、夫ニ付先達而も申越候通、毎年宗旨改之儀、奥役表役共ニ村々江罷越、一々血判見届被改事と相聞候得とも、是迄右躰之者不相知候ハ、血判而已ニ而ハ得心不致事と相聞候、然ハ外ニ格別手筋を替へ被取行方も可有之哉、尤絵板等御借請御用ひ被成候筋も可有之候得共、是迄不有来儀新タニ御借受ケ被成候儀、先ツハ不容易事と相聞候、且亦今度各被申越候通、犯人共義表立新タニ血判被仰付、此節之次第御済被成候筋も可有之候ヘ共、右ニ申入候通、血判而已ニ而ハ、已来全ク可相止事とも不相聞候得ハ、兎角平日各無由断心掛、犯人共身持業作等相替儀無之哉之所、専ら心を附、村々へも不絶役人等差廻し、

見聞為致候様被取計候ハ、自然と御示シ方ニも可相成哉と存候、扱又例年宗旨改之儀も、最早正月中ニハ可被相済と存候、此節ハ定而例年ハ尚又各心を附、嚴重被取行たるニ而可有之与察存候、此上各存寄之品も候ハ、追々可被申越候、

十二月十二日

小田儀左衛門 ㊦
小川又三郎 ㊦

平出将監様

俵 平磨様

嶋雄八左衛門様

小野典膳様

樋口左膳様

右之書状相達、頭書を以及返答候、以上、

二月十一日

連名

兩人

二月廿日

〃安重利兵衛之義、田代〆今夕令着、田代役〆之書状ヲ八左衛門宅へ持参差出候付、八左衛門面謁、彼地模様等一通り致尋問、委細ハ明日於御屋鋪承届可申旨相達し罷帰候、来状并頭書返答之趣共ニ左二記、

二月廿日達、

一筆申達候、其許宗旨一件ニ付、去ル九月廿六日之以書状、逐一令差図候処、十月廿三日頭書之返答先月廿九日相達候、先以彼者共其後無何事鎮居、他領并御領中之風説茂今程者穩ニ相成、於長崎茂何之取沙汰等無之与相聞江、珍重存候、只今之勢ニ而者、安重利兵衛儀其許江罷越候而茂、差而騒立之端と可相成模様とも不相聞由ニ而、弥罷越候筈之由申来候故、今程者其元江可罷在与存候、只今之通皆共誤証文血判ニ而、事済たると存、令安堵居候事与相聞候付、於其許利兵衛被申談、相変儀茂無之候ハ、利兵衛儀者帰国可被申渡候、尤以来共ニ被心掛、少茂相変たる事有之候ハ、早速可被申越候、

右之段為可申達、如斯候、恐々謹言、

(頭書)御紙上之趣承知仕候、爰許時艱愚意之次第等、去十二月十二日之以書狀申上置候、其後共ニ相變候儀茂無之、先ッ者穩ニ御座候、先書委曲申上、猶又利兵衛江茂申合候間、御聞可被遊と奉存候、御賢慮之上何れ之道ニ茂、御差図被仰付越被下度御事奉存候、

十二月十四日

樋口左膳

小野典膳

嶋雄八左衛門

俵 平磨

平田將監

小川又三郎殿

小田儀左衛門殿

右之御狀以頭書御請申上候、以上、

正月十五日

小田儀左衛門 ㊦

小川又三郎 ㊦

平田將監様

俵 平磨様

嶋雄八左衛門様

小野典膳様

樋口左膳様

写済、

二月廿日達、

一筆啓上仕候、安重利兵衛儀長崎表御用相濟、爰許江罷越居候、然
處爰許相替儀無之候ハ、申談帰国申渡候様御差図被仰越、素り利
兵衛も御差図之次第申聞候、差当御用無之候付、帰国申渡、今日
爰許出足如博多罷越候、尤右御差図之尊書、旧臘押詰相達、其上利
兵衛儀痛所有之、旧臘之出足難相成、年明早速船便之儀、神吉三右
衛門方江承合候處、幸便無之段申來、彼是を以出足延引仕候、此段
為可申上、如此御座候、恐惶謹言、

(頭書)書面之趣承届、利兵衛去ル廿日無事に令帰着候、
無番付

正月十七日

小田儀左衛門 ㊦

小川又三郎 ㊦

平田將監様

俵 平磨様

嶋雄八左衛門様

小野典膳様

樋口左膳様

右之書狀以頭書及返答候、已上、

二月晦日

嶋雄八左衛門

一筆啓上仕候、安重利兵衛儀長崎聞合之儀、別而相替候筋も無御座、
折節帰国之儀御差図被仰付越候付、申談今十七日爰元出足如博多罷
越候、然者右一件已來相替儀も御座候ハ、早々御案内申上候様ニ
との御事奉畏候、右ニ付先達愚意之趣申上候通、今程風説ハ絶而相
止居候与相聞候得共、是迄之形ニ而被召置候ハ、押出諸人江勸込
候儀ハ必定ニ而、素り一味外之者も正宗与違、異様之筋ともを見聞
仕、下賤之者ニ候得ハ、邪宗与申儀ニ少も心付不申、正意与相心得、
任勸ニ数百人之一味与相成、近年之内又々大イニ申触、何程之害を
生し可申段も難計、大切千万之御事ニ奉存候、尤隣单右牀之筋、御
内々之御取計与申ハ、其分ニ而ハ不被召置、御内々ニ而御片付為有
之趣ニ相聞候、然共此儀ハ取沙汰之儀ニ候故、慥ニハ難申上候、何
レ是迄之通ニ穩ニ被召置候而ハ、相濟申間敷次第与忝奉存候、委
細之儀ハ先達申上、猶又利兵衛江茂申合、勿論利兵衛承合候次第共、
逐一可申上候条、何レ之道ニも早々御差図被為仰付越被下度御事ニ
奉存候、此段為可申上、如此御座候、恐惶謹言、

正月十七日

小田儀左衛門

小川又三郎

平田將監様

俵 平磨様

嶋雄八左衛門様

小野典膳様

樋口左膳様

二月廿一日

「安重利兵衛之義病氣二付、今日出勤いたし候躰無之候付、御用向等追而快氣之上、承届候積也、

卯四月十三日田代中間六兵衛へ、相渡差越候書状之案、

一筆申達候、宗意心得違之者共、御裁許筋之儀二付、先般各存寄之趣縷々被申越候付、二月十一日頭書以書状一通及返答置候、其後安重利兵衛令帰着、猶亦其許時体等承届候、就夫最前返答二申遣候通、犯人共江先般光徳寺・西法寺へ遂吟味、誤証文二血判為致、事濟一体相^慎居候を、此節頭人分之者御国江被召呼候上者、如何体之罪科二茂可被行哉与相心得、騷立候儀も可在之哉、左候而ハ隣且之聞へ、旁思召之御旨も有之候付、御国へ不召呼候、然レとも是迄之通、被召置候而ハ、此度之一件御国江不相知分二相成居候処、如何敷候故、頭人分之者一度二兩三人ツ、御屋鋪江呼寄、各々致出席、手代役を以可被申付候ハ、其方共儀宗意心得違之儀二付、先般光徳寺・西法寺へ内々二而吟味之節、心得違之儀誤入候、以来急度可相改旨証文二致血判、兩僧江相渡候上者、真実二誤入候儀与相聞候、宗門之儀者

公義之御掟在之、於御国も重く被遂御吟味候御事故、此節之儀嚴重二御糺明在之、御詮議相詰り候上者、重く御叱被成候義、当然之御道理二候得共、末々之者重キ御法式を不奉存、一旦之不了簡二而右之通心得違仕たると相聞候付、此度者以御有怨御糺明二不被及候、以来又候右体之不了簡を起候者於在之者、其節者急度厳科二可被処候、右之通被加御憐愍を候御事故、向後ハ堅く心底を相改、異宗之勅を決而相用申間敷与之趣、各目前二而新タ二証文相認させ、血判

仕候を見届被差返、其外一味之者共も兩三人ツ、呼寄セ、右之通可被申付候、山越之事故委敷差図難成、大意を一通申遣候、此紙面二而大概其許時体相叶候様被存候ハ、猶亦致斟酌、宜様可被取計候、扱亦犯人共先達而光徳寺・西法寺江宛、証文二血判仕候ハ内々之取計故、此度者各日前二而、右之通被申付候様令差図候、併紙面之通被取行候てハ、当節以来共二差支之筋等可在之与被存候ハ、其訳委細早々可被申越候、尤此書面右一件落着迄ハ、手代役佑筆たりとも他見無用可被致候、此儀二付各存寄を被申聞候ハ、其節ハ各内執筆二而可被申越候、此段為可申達、如此候、恐々謹言、

四月十三日

連名

小川又三郎殿

小田儀左衛門殿

△

卯六月十四日達、

一筆申達候、宗意心得違之者共、御裁許筋之儀二付、先般各存寄之趣縷々被申越候付、二月十一日頭書以書状一通り及返答置候、其後安重利兵衛令帰着、猶又其元時体等承届候、就夫最前返答二申遣候通、犯人共江先般光徳寺・西法寺へ遂吟味、誤証文二為致血判、事濟一躰相鎮居候を、此節頭人分之者御国江被召呼候上者、如何体之罪科二茂可被行哉与相心得、騷立候儀も可有之候哉、左候而者隣單之聞旁思召之御旨茂有之候付、御国江不召呼候、然共是迄之通被召置候而者、此度之一件御国江不相知分二相成居候処、如何敷候故、頭人分之者一度二兩三人ツ、御屋鋪江呼寄、各々致出席手代役を以可被申付候ハ、其方共儀宗意心得違之儀二付、先般光徳寺・西法寺へ内々二而吟味之節、心得違之儀誤入候、以来急度可相改旨証文二致血判、兩僧江相渡候上者、真実二誤入候儀与相聞候、宗門之儀者公義之御掟有之、於御国茂重ク被遂御吟味候御事故、此節之儀嚴重二御糺明有之、御詮議相詰り候上者、重ク御叱被成候義、当然之御道理候得共、末々之者重キ御法式を不奉存、一旦之不了簡二而、右之通心得違仕たると相聞候付、此度者御有怨を以御糺明二不被及

候、已来又候右体之不了簡を起候者於有之者、其節者急度厳科二可被処候、右之通被加御憐愍を候御事故、向後者堅ク心底を相改、異宗之勸を決而相用申間敷与之趣、各目前ニ而新タニ証文相認させ、血判仕候を見届被差返、其外一味之者共も両三人ツ、呼寄、右之通可被申付候、山越之事故委敷差図難成、大意を一通り申遣候、此紙面ニ而大概其元時躰ニ相叶候様被存候ハ、尚又致斟酌宜様ニ可被取計候、扱又犯人共先達而光徳寺・西法寺江宛、証文ニ血判仕候ハ、内々之取計故、此度者各目前ニ而右之通被申付候様令差図候、併紙面之通被取行候而ハ、当節以来共ニ指支之筋等可有之与被存候ハ、其訳委細早々可被申越候、尤此書面右一件落着迄者、手代役佑筆たり共他見無用可被致候、此儀ニ付各存寄を被申聞候ハ、其節者各内執筆ニ而可被申越候、此段為可申達、如是二候、恐々謹言、

(頭書) 御紙上之趣拝見仕、委細別紙を以申上候、

四月十三日

樋口左膳

小野典膳

嶋雄八左衛門

俵 平磨

平田将監

小川又三郎殿

小田儀左衛門殿

右之御状以頭書御請申上候、以上、

五月九日

小田儀左衛門

小川又三郎

平田将監様

俵 平磨様

嶋雄八左衛門様

小野典膳様

樋口左膳様

○ 写済、

卯六月十四日達、

一筆啓上仕候、法儀一件之儀ニ付、以尊書御差図之趣奉拝見候、右一件相勸候頭人其外元禄年子孫之者、其御地江被召呼候義ハ、思召之御旨被成御座、其通ニ難被仰付、依之当節誓旨血判申付、其上申渡之次第等委細御差図之御紙上逐一奉畏候、就夫爰許時躰を以評儀仕見候処、此節誓旨之義随分隠密ニ、両三人ツ、も召呼取計候様ニ可仕候得共、爰許之義候故隣単江流布仕、又候事夥敷申触候様可有御座候哉、此一件ニ不限一躰御領中之儀、他領之人江怪事たり共猥他言不仕様、兼々厳重申付置候得共、隣単通用筋与申市立候所柄ニ候故、近辺之旅人入込多く、少ニ而茂相替たる義ちと承、不慥義ハ実否為聞合、密々ニ何与なく罷越承合候与相聞、下賤之者ニ候得ハ、咄ニ落申義茂可有御座候哉、其流布仕り様之義、右一件下賤之者故心得違を仕居、先立誤入候段血判仕、一通り之義ニ而事相濟候へ共、猶又以来之義嚴敷相示し有之与申説ニ候ハ、差支有御座間敷候得共、一ト先ツ誤血判仕候処、上ハ成之義ニ而致再起候与相見、此節ハ役人中出席ニ而厳敷申認有之候得共、已来右之一事可相止哉難計、隣単ニ至り候而も油断難成杯与申説茂可有御座、或ハ法儀一件説有之候ハ、去夏之義ニ而訳茂違、重キ筋ニ候を是迄延々ニ仕置、此節右之取計ハ如何之事ニ候哉与申説も可有之候哉、兎角様々曲説を申触、何レ隣単之批判再起可仕義与奉存候、勿論当節之御差図者、先達誓旨之義我々見届不申内々之儀ニ候故、此節ハ我々共罷出、急度相改候証拠を見分仕、猶又御法式之定而重キ筋を納得為仕、已来得違無之、厳重相守候様申渡候御意味与奉存候得共、今程隣単取沙汰絶而無之与相聞候処、此節誓旨之訳ニ付、又々何角与風説ニ至り候段茂気毒成義ニ奉存候、依之申談候愚意之趣申上候、此度御差図之次第ニ付、今程之時躰を以相考見候得者、一向来正月宗旨改之節、私共村々江罷越候事故、定式之宗門改相濟候跡ニ而、右犯人有之於村々ニ、一々呼出此度御差図之通取行候ハ、例年宗旨改之様ニ相聞目立不申、隣単之響茂薄ク可有御座哉与奉存候、尤右法儀一味之義下賤之者ニ候条、御法式之重ク大切成義与申所ニ心付無之、勸ニ一通ニ相心得同意之者も可有之敷ニ候故、一刻茂早々御差図

之趣を以取計候様仕度奉存候へ共、右申上候通再起之風説二掛り、若ハ已来之指支共可相成哉、当節御差図之通急ニ取行候時、只今之形チニ而御座候間、延々ニハ相聞候得共、願クハ来正月宗旨改之節、右之者共御差図之通取行、厳密ニ申付、血判為仕候方可然哉与奉存候付、又々愚意之趣御伺申上候、然共当節ハ隣單之曲説ニ御拘り不被遊、急ニ取行候方宜ク被思召上候ハ、其通申渡候様可仕候、今一応何レ共御差図被為仰付越可被下候、

(頭書)書面之趣逐一承届候、宗旨一件押詰取計方之儀、去ル四月十三日之書狀を以申越候処、右ニ付其元時体を以評議被致、各存寄之趣委曲被申越、令承達候、爰許^ル差図之品只今取計被申候而者、隣旦之響曲説も可有之旨被申越候、他領統之所柄ニ候得ハ、其筋も可有之儀ニ候間、各存寄之通来正月宗旨改之節、右犯人とも有之於村々ニ、先達差図申越候通、夫々嚴重可被取計候、

一頭人分之者爰許江被召置候而ハ、以来御領中之害甚敷、然共於爰許御片付之筋ハ、難被仰付御事哉与奉存候付、不得心、其御地へ被招呼如何可有御座哉之旨、愚意之次第御伺申上候処、其御地江被招呼候義、思召之御旨被成御座、其通難被仰付との御事、御尤千万奉存上、何レ御差支多御片付難被遊次第与奉恐察候、先達申上候通法儀勸入候ハ、於遠所專取行、平日之取行も随分内密ニ仕、其上法義ハ真実ニ傾居、仮令一命を投テ候而も、一味之者ハ不動固メ之様、先達粗風説為有之義ニ候故、稠敷吟味申渡候与而、見懲仕候程ニ無之候而ハ、已来心底を改、正意ニ傾可申段ハ難測、再起之程千万無心元奉存候、然共当節ハ何レ共御片付難被遊御主意、乍恐御当然之御事奉存候へ者、此上ハ在町之役人其外出家中江、以来之義心之及稠敷可申渡置^ル外無御座、当役之我々共誠ニ旦夕安心不仕次第奉存候、

一是迄ハ御裁許筋何レ共不被為仰付越候付、在町之役人江内々ニ而も申付置候義ハ、先達申上候通差支之意味有之、先差扣罷在候得共、何レ犯人落着之筋相極候上ニ而ハ、兎角在町之役人其外出家

中江も稠敷申付置候様不仕候而ハ、不相叶次第与奉存候付、右申渡之趣大意左ニ書載仕、御伺申上置候、

一先達而宗旨心得違之者有之段相聞、内々遂吟味候処、皆共心得違を仕居誤入候段、血判を以申出、下賤之者偏了簡違与相聞候付、先不及御糺明候、然共末々之義ニ候故、いまた不落着ニ而、公儀御制法之重ク対州^ルも嚴重ニ御吟味被仰付候筋之事与申、主意を納得不仕覺悟違之者茂可有之哉難計候、然者皆中ハ役人之事ニ候故、兼々無油断心掛不申候而不叶事ニ候条、向後身持行作少ニ而も疑敷筋見聞仕候ハ、実否ニ不相拘急速ニ申出候得、万一隱置脇^ル相頭候ハ、其所之役人偏油断越度ニ候間、嚴科可申付候与申渡、出家中江ハ右之意味書載仕候上、専宗旨之邪正証拠之事ニ候故、以来随分心を用、若疑敷筋見聞仕候ハ、早々可申出候、万一脇^ル相頭候ハ、嚴科可被行段も是又申渡、勿論法義一味之者担寺之僧へハ主意違之筋申論も無之、寺証文之主意忘却仕、剩其筋内々案内茂不申出、重々不届ニ候得共、一味之者共血判を以誤入候段申出候間、先不及御沙汰候、以来担方中へ本宗之義稠敷教訓可仕候、万一重而疑敷筋も候ハ、急度申出候様分ケ而申渡、扱又一味之者有之候村々之庄屋義ハ、役義も違甚不念之次第ニ候故、屹度御何ニ而も被仰付候程ニ無御座候而ハ、ベリニ相成申間敷哉ニ奉存候得とも、左候而ハ隣單之響事重ク可相聞哉ニ御座候故、以御宥恕不念之段一通りを申渡、勿論犯人共担寺之僧義ハ、是迄大様之心得不埒ニ相聞候付、是又屹度御何可被仰付御事ニ奉存候得共、左様御届候而ハ右庄屋同然之次第ニ而、隣單之響キ如何敷候故、先一通りニ被仰付、以来之義稠敷申付、何レ筋々ニ応シ嚴重申付候様被仰付度御事奉存候、右書載仕候ハ、大意而已ニ而一通ニ申上候、何レ御賢慮之御差図被仰付置被下度奉存候、其節ニ至り御伺申上候而ハ、延々ニ相成候付、兼而此段も御伺申上置候、右旁為可申上、如斯御座候、恐惶謹言、

(頭書)三ヶ條書面承届候、犯人共落着之筋被取計候上ニ而、在町之役人其外出家中へも、厳敷不申渡候而者不叶次第ニ付、右申

渡之趣大意書載被相伺、遂披見候、別而右之外申渡候筋も無之候旨、来正月宗旨改之節、犯人共落着筋夫々被取計候上、被申越候趣、在町役人出家中江も嚴重可被申渡候、

五月九日

小田儀左衛門[㊦]

小川又三郎[㊦]

平田將監様

俵 平磨様

嶋雄八左衛門様

小野典膳様

樋口左膳様

猶以申上候、先達二月十一日之以御頭書被仰下候趣、奉承知候得共、安重利兵衛帰着之上、尚又御差図可被仰付与之御事ニ御座候故、御請之義差扣罷在候、已上、

(頭書)承届候、先達委曲令差図候付、不能詳候、

七月五日

連名

又三郎殿

義左衛門殿

辰四月十四日達、

一筆啓上仕候、於爰許宗意心得違之者共儀、兼而御差図被為仰越候御主意を以、先月下旬在町宗旨改之節、右一味之者共罷有候於村々別而召出、去ル四月十三日之尊書を以、御裁許筋御差図被仰下候趣嚴重申付、其上我々共目前ニ而新夕二牛王紙ニ誓旨血判申付、猶又已来之儀稠敷申渡候、其外在町之役人并出家中江申渡等之儀も、去ル五月九日之書狀を以、奉伺置候通之次第、其筋々ニ応、是又嚴密ニ申渡、右一件夫々相済申候、此段為可申上、如斯御座候、恐惶謹言、

(頭書)紙面之通承届候、

辰二月十六日

小田儀左衛門

小川又三郎

平田將監様

俵 平磨様

嶋雄八左衛門様

小野典膳様

猶以申上候、右犯人共其外在町役人出家中江申渡之趣、可奉入御披見儀ニも奉存候得共、右申上候通御差図之通ニ御座候故、差扣申候、以上、

(頭書)承届候、

対馬藩宗家記録のなかの忠臣蔵関係史料

堀 新

はじめに―対馬藩宗家記録について―

忠臣蔵は「芝居の独参湯」と呼ばれ、日本人の最も好きな演目とされる。しかし、一昔前まではこれを取り上げるのは小説家や歴史愛好家であって、本格的な忠臣蔵研究が行われるようになったのは、ようやく近年になってからである。史料制約もあって、基本的な事柄でありながら不明な点も多く、それがまた多くの人を惹き付けるとも言えよう。本科研調査において、たまたま対馬藩宗家記録のなかに関連史料を見出したので、ここに報告したい。

まず最初に、対馬藩宗家記録の所在について記しておく。田代和生氏の研究^②を参考に整理すると、

- ① 対馬歴史民俗資料館^③（総点数不明、冊子のみで約三万六〇〇〇点）
- ② 韓国文教部国史編纂委員会（約二万八〇〇〇点）
- ③ 国立国会図書館（約一六〇〇点）
- ④ 東京大学史料編纂所^④（約三〇〇〇点）
- ⑤ 慶応義塾大学図書館^⑤（約一〇〇〇点）
- ⑥ 文化庁（約一万三〇〇〇点）
- ⑦ 東京国立博物館（約一六〇点）

の七ヶ所に分かれて伝来している。①～⑦のうち、②・③・⑤・

⑦は日朝外交関係史料が中心である。それぞれの伝来経緯や内容の詳細については、田代氏論考をご参照頂くこととし、小稿では省略したい。また、各所蔵機関では「宗家文書」「宗家史料」など様々な名称で呼んでいるが、小稿では便宜的に「対馬藩宗家記録」と総称しておく。

一 忠臣蔵関係史料の発見―「諸覚書」について―

以上の大まかな説明でもわかるように、対馬藩宗家記録は質量ともに近世史研究の宝庫と言える史料群であろう。対馬という特性上、従来は日朝関係史研究の素材としての利用が大半であったが、本科研グループでは藩政史研究の素材としても対馬藩宗家記録に注目し、筆者は①対馬歴史民俗資料館・④東京大学史料編纂所を、それぞれ数度にわたって調査に出かけ、史料閲覧・撮影（複写）をおこなった。

最初に忠臣蔵関係史料を見出したのが①対馬歴史民俗資料館での調査であり、それは「高力左近太夫様御改易二付田代御人数被遣候一件、柳川一件、島原一件、織田・前田之一件、潜商拔書移館之一件 罰責之部ニも有之、大浦権太夫一件、宗出雲・細川大膳一件、竹島一件、川論一件、蝦夷松前之一件、吉良・浅野之一件、水野・毛利之一件」^⑥である。この史料名は、原本表紙の文字をそのまま転用したもので、原状では表紙の上にさら

に、白紙に「Ⅲ 諸覚書 44―(74)」と黒マジックで記されたものが綴じられている。以下、本史料を便宜的に「諸覚書」と呼んでおく。

後掲の「諸覚書内容構成一覧」をご覧頂きたい。「諸覚書」は寛永十一年（一六三四）―寛延四年（一七五一）の様々な内容を含み、時期的・内容的な偏りは、特に認められない。誰がどのような意図でもって「諸覚書」を編纂したのかは不明である。しかし、そこに記された内容については、「江戸日帳」「江戸書状控」等の注記からもわかるように、藩庁史料からの引用であるから、信頼できると考えられる。

忠臣蔵関係史料に即して、それを検証しよう。後掲の史料翻刻にあるように、史料は四つに大別される。すなわち、

- (A) 元禄一四年（一七〇一）三月一四日付、松の廊下刃傷事件当日の記録
- (B) 同翌日付の記録
- (C) 元禄一六年二月一三日付、赤穂浪士討ち入りに関する記録
- (D) 同年三月六日付、幕府裁許に関する記録

である。このうち(A)・(B)が「江戸日帳」からの引用、(C)・(D)が「江戸書状控」からの引用である。

では「江戸日帳」とは何であろうか。単純に考えれば江戸藩邸日記であろう。そこで①対馬歴史民俗資料館・④東京大学史料編纂所それぞれが所蔵する江戸藩邸日記³を見ると、「諸覚書」の内容にほぼ一致する。①は国許に伝来した史料群、④は

もともと江戸藩邸にあった史料群と考えられ、両者の江戸藩邸日記は「二」や「候」等の些細な表記の違いはあるが、基本的に同文である。④の江戸藩邸日記の表紙に「江戸控」とあり、書体からみてもある程度後に清書したもののようにも思われるから、両者の関係は、④が①の写本と考えてよからう。

そして①・④の江戸藩邸日記と「諸覚書」との関係であるが、単純な記載違いとするには躊躇するような微妙な異同がある。全般的に、①・④の江戸藩邸日記の方が若干人名に詳しい。その点からすると、あるいは①・④の江戸藩邸日記の前段階の「江戸藩邸日記草稿本」のようなものがあつて、「諸覚書」はそれを筆写したと考えることも可能である。しかし、小稿ではこの点について断定することは避け、後考をまつこととしたい。小稿の問題関心からすれば、「諸覚書」の内容が藩庁史料からの筆写であると確認できればそれで良い。そこで末尾の翻刻は、「諸覚書」の記載を基本とし、①対馬歴史民俗資料館所蔵・江戸藩邸日記との異同を注記することとしたい。

次に「江戸書状控」であるが、①対馬歴史民俗資料館の「御在国中江戸御状控 二番 元禄十五年十月末（十六年）三月」⁴がこれに該当すると思われる。ところが、同史料は原本の損傷が著しいため、現在は「不出」（閲覧停止）となっており、残念ながら「諸覚書」との校合はできなかった。そのため、末尾の史料翻刻には「諸覚書」の記載のみを掲げている。しかし、(A)・(B)のあり方からして(C)・(D)の成立もほぼ同様と考えられ、その内容に対する信頼性を大きく減退させる必要はないと考える。

二 忠臣蔵関係史料の内容

では、(A)から順に史料の内容をみてみよう(文末の翻刻を参照)。(A)は元禄一四年(一七〇二)三月一四日、松の廊下刃傷事件当日の対馬藩の動向を記したものである。浅野長矩と吉良

義央よしひさの「喧嘩」を知った対馬藩は、將軍綱吉への「伺御機嫌」

が必要であるかどうか、鈴木浅右衛門(江戸留守居役カ)を津藩留守居役と同道させて、老中・阿部正武に尋ねた。阿部の回答は「御用番へ伺え」というものだだったので、その足で御用番老中・土屋政直へ伺った。土屋の回答は「この件は先刻より質問を受けているが、藩主自らの登城も使者勤めも不要である」というものであった。そのため鈴木はそのまま帰った、というものである。

この部分では、事件を知った対馬藩がまず將軍綱吉への「伺御機嫌」の必要性を思い浮かべたこと、阿部が「御用頼」の老中であるらしいこと、阿部は自ら判断できず、御用番へ問い合わせるよう指示したこと、等が興味深い。事件の直後、諸藩がどのような対応をとったかは意外とわかっておらず、そういう意味でも貴重な記録であろう。

次に(B)であるが、これは(A)の翌日の記録である。対馬藩主・

宗義方よしみちは辰刻頃に月次の登城をし、諸大名が勢揃いしたところに大目付衆が現れ、溝口宣就が老中からの指示に従って、昨日の刃傷事件について、次のように説明した。浅野の行動は「不

届」であると將軍綱吉は思し召しになり、浅野は昨夜切腹、吉良は疵の治療を仰せ付けられた、という。文末の翻刻では省略したが、この後、例月の御礼は滞りなく済んでいる。

この部分は、これまでも知られている事柄ではあるが、老中ではなく大目付が諸大名に説明したことが興味深い。

続いて(C)であるが、これは元禄一六年二月一三日付の「江戸書状控」からの写である。前年一二月一四日の赤穂浪士の討ち入りの「始終之様子」についての情報が、江戸から国許へ知らされ、それを藩主の「御披見」に入れた、というものである。

「江戸書状」とは国許から江戸への書状であることがわかるが、赤穂浪士の討ち入り情報が江戸から国許へ伝えられたのは、一月半ばから後半であろう。

この部分では、対馬藩主・藩士が赤穂浪士の討ち入りに関心を持つていることに注目したい。赤穂浪士の討ち入り当時はさして関心を持たれていなかったとか、彼らを義士とまではやすのは寛延元年(一七四八)の『仮名手本忠臣蔵』上演以降である、といった記述を目にすることがある。これは、赤穂浪士の行動を「義士」として賞賛するばかりでは、彼らの虚像ばかりが増殖して実像を見失ってしまうという問題意識にもとづく警告ではあろう。しかし、大和国添上郡の無足人(津藩郷士の呼称)である山本平左衛門は、その日記の元禄一六年一月一二日条に赤穂浪士の討ち入りの記事を記し、「揚一天名誉之事、諸人感涙を催す也、彼義士之大將大石内蔵助也、各四十七人共智仁勇之三徳令兼備云々」と記していることが報告されている。この事実からもわかるように、討ち入りから一ヶ月も経たない

うちに、江戸以外の土地でも注目を集めており、赤穂浪士は切腹前には「義士」として賞賛されていたのである。「諸覚書」(C)の内容も、この文脈で理解されるべきものであろう。

最後に(D)であるが、元禄一六年三月六日付の「江戸書状控」からの写である。同年二月一〇日付で江戸から国許へ赤穂浪士の裁許について報告があり、その内容を承知した、というものである。従って、その内容の大半は三月六日付で国許から江戸への書状ではなく、二月一〇日付で江戸から国許への書状のものである。

その内容は、赤穂浪士に関する幕府の詮議が済み、二月四日に浪士が残らず切腹したが、それは浪士が徒党を結び、道具を持参して吉良を討ち取ったことが「公儀を不恐候段不届」とみなされたことによる。また吉良義周も、同日評定所へ呼び出され、「今度之仕形不届」を理由に領地没収、信濃国高島藩・諏訪忠虎に御預となった。さらには、吉良義央の従兄弟(正しくは叔父、末尾の系図参照)である荒川定昭と「御用頼」(米沢藩のカ)猪子一興を上杉綱憲の許へ派遣したが、その詳細は不明である。以上の幕府裁決を、「御双方相討ニ罷成、上杉様御存念茂有之間敷事ニ而、御尤成御仕置」と評判になっている。そして忠臣蔵の一件について、「善悪ともに曾而沙汰不仕候様ニ」江戸市中へ触れ出したこと、「堺町・木挽町之者共へも狂言之趣向新敷儀不仕候様ニ」と仰せ渡した。これらのことを、国許は了解した、というものである。

この部分では、幕府が上杉の許へ荒川・猪子を遣わして何事か仰せ含めていること、今回の裁許によって「御双方相討ニ罷

成」り「御尤成御仕置」と賞賛していること、上杉側も文句ないと思なされていたこと、しかしながら江戸市中でこの噂話が善悪ともに禁じられたこと、が興味深い。

赤穂浪士の行動の評価については、事件直後から様々に論じられ、「義士論争」は今でも続いていると言って良い。そのなかで、松の廊下刃傷事件の裁定における「片落ち」を、吉良邸討ち入りの裁定において一挙に解消し、喧嘩両成敗を達成したというのが代表的な見解であろう。この見解は、いわば現在から見た評価であるが、「諸覚書」(D)の記述によって、当時の人々もそう認識していたことが初めて裏づけられたのである。そして「双方相討」＝喧嘩両成敗であれば、浅野・吉良だけでなく、上杉側にも「御存念茂有之間敷」とされていたのである。喧嘩両成敗の規定性は、これほどに強いものであったのである。

なお「狂言之趣向新敷儀」など、忠臣蔵の上演が禁じられたことは、『御触書寛保集成』にも法令^三が収録されている(文末を参照)。浪士切腹から一二日後の二月一六日から江戸中村座で「曙曾我夜討」が上演されたが、三日で差し止められたと言われるが、事実かどうかは確認できない。

むすびにかえて

小稿は、対馬藩宗家記録のなかから忠臣蔵関係の記述を紹介し、これによって初めて知り得た事実などを紹介した。それは改めて繰り返さないが、最後に、対馬藩の幕府に対する認識の一端を考察したい。

元禄一四年(一七〇一)三月一四日の、松の廊下刃傷事件に

さいして、対馬藩は浅野家や吉良家に対する同情等の感慨を記すこともなく、また幕府裁決に対しても同様である。筆者はかつて、加賀藩の記録中に国持大名層の吉良義央に対する反感を検出したが、対馬藩宗家記録からその点は窺えなかった。あったとは言えないが、さりとてなかったとも言えない。

ところで、松の廊下刃傷事件の時点においては、將軍綱吉に対して「伺御機嫌」をするかどうか、対馬藩の最大の関心事だったようである。その内実は与いうと、御用番から「それは不要」と言われればそのまま帰ってきていることから、將軍綱吉の心身を心配したうえでのものではないことは明かである。

これに対して、赤穂浪士切腹という第二の幕府裁決については、「御尤成御仕置」と賞賛している。これに偽りはないと思うが、これを裏返せば、最初の幕府裁決に対して「片落ち」という意識があったはずである。しかし、それは史料上に、直接的な表現では見あたらないのである。幕政に対する批判的な意見は、江戸藩邸日記や江戸・国許往復書簡においても、記すことは憚れるものだったのだろうか。

筆者はかつて、近世中期以降の幕府と藩の関係を「護送船団方式」になぞらえたことがある¹⁾。その認識は基本的に変わっていないが、藩側史料から幕府や高家に対する藩側の複雑な意識を掘り取る難しさとして、自戒を込めて今後とも留意していきたい。

「例えば宮沢誠一『赤穂浪士―紡ぎ出される「忠臣蔵」―』(三省堂、一九九九年)、谷口眞子『赤穂浪士の実像』(吉川弘文館、二〇〇六年)、『歴史評論』六一七号特集「赤穂事件・忠臣蔵から時代を読む」(校倉書房、二〇〇一年)など。また研究者が一般向けにわかりやすく書き下ろしたものでは、山本博文『忠臣蔵のことが面白いほどわかる本』(中経出版、二〇〇三年)がある。

田代和生『近世日朝通交貿易史の研究』(創文社、一九八一年)一六〇二四頁、同『対馬宗家文書』について、『マイクロフィルム版対馬宗家文書』第Ⅰ期・朝鮮通信使記録別冊上、ゆまに書房、一九九八年)

総点数は二〇万を超えるといわれる。宗家文庫調査委員会編『宗家文庫史料目録』日記類(厳原町教育委員会、一九七八年)、宗家文庫調査委員会編『宗家文庫史料目録』記録類Ⅰ(Ⅳ(厳原町教育委員会、一九八二・一九八五・一九八九・一九九〇年)を参照。

約三〇〇〇点の史料の全容は、東京大学史料編纂所編『東京大学史料編纂所蔵 宗家史料目録』(東京大学史料編纂所、一九九四年)を参照。

その一部がマイクロフィルム版となっている。田代和生監修『マイクロフィルム版対馬宗家文書』第Ⅰ期・朝鮮通信使記録別冊上・中、ゆまに書房、一九九八・一九九九年)

整理番号「44諸覚書―74」(宗家文庫調査委員会編『宗家文庫史料目録』記録類Ⅲ、厳原町教育委員会、一九八九年)

『江戸毎日記 元禄十四年正月元日〜三月晦日』(対馬歴史民俗資料館所蔵、史料番号は日記類・江戸(B)・一表書札・57)、『江戸藩邸毎日記 元禄14年1月1日〜元禄14年3月30日』(東京大学史料編纂所所蔵、史料番号・宗家1―99)。なお史料名の表記は、各目録に従った。

『御在国中江戸御状控 二番 元禄十五年十月〜末(十六年)三月』(対馬歴史民俗資料館所蔵、史料番号は記録類I・江戸(B)・一表書札・57)。

なお④東京大学史料編纂所にも「御状控」「書状控」という表題の一連の史料群があるが、残念ながら元禄一六年ものは残存していない。

將軍・幕府と大名の間を取り持つ幕閣は「取次」と言われ、大名側から見れば「御用頼」、幕府側から見れば「指南」(役)と言える。山本博文『幕藩制の成立と近世の国制』(校倉書房、一九九〇年)を参照。

深谷克己『近世人の研究』(名著出版、二〇〇三年)一九七頁

例えば、赤穂市史総務部市史編纂室編『忠臣蔵』第一卷(兵庫県赤穂市、一九八九年)三〇〇頁など。

『御触書寛保集成』二六六八号

吉田豊・佐藤孔亮『古文書で読み解く忠臣蔵』(柏書房、二〇〇一年)二九三頁

拙稿「高家筆頭吉良義央は羨望と嫉妬の的だった」(『AERA Mook 元禄時代がわかる。』(朝日新聞社、一九九八年))

堀新・鈴木由子・山尾弘「近世大名の離縁―岡山藩池田家と仙台藩伊達家の場合―」(『共立女子大学文芸学部紀要』四六、二〇〇〇年)

【補註】

脱稿後、小石たづ子氏・佐藤絃氏の御教示により、「岡本元朝日記」元禄一四年三月二五日条(秋田県公文書館所蔵)の内容を知った。秋田藩家老である岡本は、江戸詰大番頭の渋江十兵衛からの情報として、松の廊下刃傷事件について記している。臨場感あふれる刃傷の様子、吉良が「かくれなきおうへい人」という当時の評判など、大変興味深い内容である。

小稿との関連では、浅野長矩が当日中に切腹となった幕府裁決を「殿中所がら二候故、被 仰付可有此事ニ存候」と肯定的に評価していることが注目される。

しかし、浅野が斬りかかった際、「上野介殿刀ニ手ヲかけ、何をするやと取て返給」とあるから、これは喧嘩と判断されて喧嘩両成敗となってもおかしくない。また浅野は「意趣ニ不被知、言葉も不懸被成候ハ、内匠殿乱心ニ候」と記しており、乱心であれば御家断絶という処分は重すぎるであろう(ただし、浅野が乱心を否定したことや、御家断絶処分は記されていないから、岡本はそれを知らなかった可能性もある)。

このように、松の廊下刃傷事件の幕府裁決に対して、岡本や渋江には疑問が生じていたはずだが、それが全く記されていないのである。本文末尾に記した難しさを、改めて感じる。

「諸覚書」内容構成一覧

No.	内容	年代	丁	備考
1	柳川一件	寛永11年(1634)～ 寛文6年(1666)、 延宝5年(1677)～ 貞享2年(1685)	2～15、 30～33	国書偽造、寛永12年 柳川調興南部配流、 貞享2年調興死去
2	蝦夷松前兵乱之事	寛文8年(1668)～ 寛文9年(1669)	16～19	寛文9年シャクシャイ ン蜂起
3	高力左近太夫様御改易 二付、田代江人数被遣 候一件	寛文8年(1668)	20～29	寛文8年島原藩主高 力隆長改易
4	島原一件	寛永14年(1637)～ 寛永15年(1638)	34～41	島原の乱(島原・天 草一揆)
5	潜商抜書倭館所替	慶安3年(1650)～ 享保19年(1734)、 寛保元年(1741)～ 寛延4年(1751)	42～148、 229～232	密貿易摘発
6	大浦権太夫一件	寛文3年(1633)～ 寛文11年(1671)	150～165	
7	宗出雲・細川大膳一件	寛文7年(1667)～ 寛文10年(1670)	166～183	京都の寺院をめぐる 屋敷公事
8	竹島一件	元禄6年(1693)～ 元禄12年(1699)	184～212	
9	川論	元禄8年(1695)～ 正徳5年(1715)	213～222	
10	(吉良・浅野之一件)	元禄14年(1701)～ 元禄16年(1703)	223～226	忠臣蔵
11	(水野・毛利之一件)	享保10年(1725)	227	殿中刃傷
12	(織田・前田之一件)	宝永6年(1709)	228	寛永寺刃傷

【史料翻刻】

凡例

- 一、翻刻にあたっては、闕字・平出を残した。また、適宜読点・並列点を補った。
- 一、漢字はすべて常用漢字に改めた。
- 一、「かな」はすべて現行の字体に改めた。ただし、次のものは残した。
 - 江（え）、而（て）、茂（も）、与（と）
- 一、原本の摩滅・虫損などによって文字が判読しにくい場合には、字数を推定して□□で示し、字数を推定できない場合には「」で示した。
- 一、原本に塗抹のある場合には、〃〃をその文字の左傍に付し、抹消した文字が不明のときは、その字数を推定して、■ ■ をもって示した。
- 一、校訂註は、（ ）で括って記した。
- 一、本文との関係上、便宜的に(A)(B)などの記号を付した。
- 一、(A)(B)については、「江戸毎日記 元禄十四年正月元日〜三月晦日」(本文註(7)参照)との異同を□で記した。傍注(ナシ)は、「諸覚書」には記載があつて「江戸毎日記」には記載がないことを表す。

(表紙)

・高力左近太夫様御改易二付、田代御人数被遣候一件	・高力左近太夫様御改易二付、田代御人数被遣候一件
・柳川一件	・柳川一件
・島原一件	・島原一件
・織田・前田之一件	・織田・前田之一件
・潜商拔書移館之一件	・潜商拔書移館之一件
・大浦権太夫一件	・大浦権太夫一件
・宗出雲・細川大膳一件	・宗出雲・細川大膳一件
・竹島一件	・竹島一件
・蝦夷松前之一件	・蝦夷松前之一件
・吉良・浅野之一件	・吉良・浅野之一件
・水野・毛利之一件	・水野・毛利之一件
・川論一件	・川論一件

(49丁オ)

(A) 元禄十四辛巳

三月十四日

江戸日帳

公家衆今日御登城、勅答少已前二、高家吉良上野介様・

勅使御馳走人浅野内匠頭様と喧嘩有之由二付、若伺御機嫌等

も可有之哉と鈴木浅右衛門〔俄藤堂和泉守様御留守居同道二而、

阿部〕豊後守様へ罷出、以御取次相伺申候处、御用番へ〔罷

出〕相伺候様〔二〕との御事二付、直二御用番〔土屋〕相模守

様へ罷出、御取次迄右之趣申達候处、此儀者先刻より段々御伺

之方有之候へ共、御登城、尤御使者勤二も及不申由〔御指図〕

被申達候間、最早被相伺候二及申間敷哉と被申聞候付、左様

候ハ、被仰上二及不申候由、申達罷帰ル、

(B) 三月十五日 江戸日帳

殿様辰之刻〔三寸二〕、例月之為御礼御登城被遊、何茂御揃

被成候而、御礼已前二大御目付衆御出、〔溝口摂津守様〕御大

名様方江被仰渡候者、昨日浅野内匠儀、吉良上野介へ理不尽
二被切掛候、於殿中聊爾仕候段不届〔二〕被思召候、依之

内匠儀夜前切腹被仰付候、上野介義者切疵療治被仰付候、

此段各へ申渡候様〔二与〕、御老中被仰候与之御事被仰渡〔ル〕、

(C) 元禄十六癸未

二月十三日 江戸書状控

浅野内匠頭様御家来中吉良上野介様を打留之始終之様子、被承
合候趣書付被差越、入御披見候、已上、

(D) 三月六日 はる

二月十日之御状令拝見候、浅野内匠守様御家来出入之儀御僉議

相済、二月四日為上使仙石伯耆守様・長田喜左衛門様御預り

御四人之御宅へ御越、御預之所々二において不殘切腹被仰付、右

被仰渡候趣意、右之者共徒党を結び、道具を持参、上野介討候
始末、公儀不恐候段不届候、切腹被仰付候与之御事之由、右

之段、今度被差越候廻状之通相違無之由、令承知候、

一同日吉良左兵衛様御評定所へ被為呼、今度之仕形不届二付、

領地被召上、諫方安芸守様へ御預被成之旨被仰渡、同日上

野介様之御従弟荒川(一、定昭)丹後守様并御用御頼猪子佐太夫様、右御

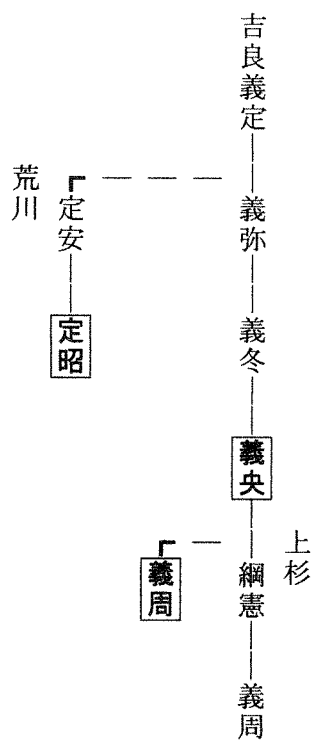
両所ヲ上杉(綱憲)彈正様へ被遣候品者、相知不申候由、

一 右之通被仰付候故、只今ニ而者御双方相討ニ罷成、上杉様御
 存念茂有之間敷事ニ而、御尤成御仕置之由沙汰有之旨、此度
 之儀ニ付、善惡ともに曾而沙汰不仕候様ニ江戸中へ御触、堺
 町・木挽町之者共へも狂言之趣向新敷儀不仕候様ニ被 仰渡
 候由、承届候、

一 堺町・木挽町見物所にても、当座之替たる事其品にな(一、綱憲)そらへ、
 仕形な(二、等)とに仕間敷事、

二 月
(元禄十六年)

【関連系図】



【御触書寛保集成二六六八】

一 前々も相触候通、世上当座之替たる事を謡・小哥につくり、
 又は致板行売候義、弥以令停止事、

肥後人吉藩相良家の仮養子史料

大森 映子

はじめに

本稿は、大名家に残された「仮養子」関係史料の紹介を通して、江戸時代における仮養子制度の実情について検討を試みるものである。仮養子とは、まだ実子がいらない大名や旗本が、江戸を離れるに際して万一の場合に備え、予め「仮」の後継者を指名しておく制度のことである。

仮養子の指名は、通例大名本人の自筆の願書をもってなされる。具体的には、後継とすべき男子がいらないことを前提に、①「仮」の養子とすべき人物を明記し、②万一の場合には仮養子への家督継承を願うものであり、江戸出立に先だって幕府の月番老中に預託された。仮養子の有効期間は一応江戸不在中に限定され、再び出府すると直ちに出願者の手許に返却されて失効した。その意味では、仮養子願書は期限付きながら、不測の事態が発生した場合には、家の断絶を回避しうる安全装置として機能する重要な願書であった。

ただし仮養子に付託された後継資格は、正式の養子とは異なり暫定的なものであった。たとえ長年にわたって仮養子に指名されたとしても、実子が誕生すれば仮養子関係は解消され、「仮」の指名のみで終わることも少なくなかった。のみならず

江戸不在中に願者の身に万一の事態が発生し、仮養子願書が効力を発揮することになっても、事前の指名だけでは不十分であった。その場合には、あらためて仮養子を正式の養子として願い出る必要があり、相応の後継手続きをとらなければならなかった。このような仮養子のあり方からすると、たしかに仮養子には正式の後継候補が現れるまでの一時的な「繋ぎ」としてのイメージがつきまとい、これまで仮養子問題があまり注目されてこなかったのは、右のような不確実性に起因するものと推測される。

しかし、仮養子が最終的な相続に絡むか否かはあくまでも結果である。仮養子願書が有効に機能する間に相続問題が起れば、もはや恣意的な変更は認められず、仮養子をもって相続を願うより他はなかった。その点では、仮養子の指名は大名家の相続の根幹にかかわる問題であって、当事者である大名は勿論、出願を受理する幕府にとっても慎重な対応が求められるものであったと言えよう。その意味では改めて武家社会における仮養子のあり方を確認しておくことは、大名相続を考える上で見過ごせないところであろう。

筆者はこれまで、大名家の仮養子問題について何度か言及してきたが、本稿では肥後人吉藩相良家の仮養子事例を取り上げる。吉藩相良家は、中世以来の家系を誇る名門であるが、相良家の資料中には数点の仮養子関係史料を確認することができ、その中に「仮御養子一卷」と題する編纂史料があり、十八世紀後半の相良長寛と、十九世紀前半の相良頼之の仮養子に関する史料がまとめられている。両者の仮養子指名は、いずれ

も実子誕生までの時的な仮養子指名であり、結局相続問題に結びつくことはなかった。しかし当該史料は、通例の仮養子指名の手続きを示すものとして考えることができよう。

史料中に収録されている長寛・頼之の仮養子事例のうち、前者についてはすでに別稿で紹介したところであるので、ここでは後者、すなわち文政期における相良頼之の仮養子出願をめぐる史料を紹介していきたい。

一 相良頼之の初帰国と仮養子願書

相良頼之は、寛政元年（一七九八）頼徳の男子として誕生した。襲封は文政元年（一八一八）十月のことであり、父頼徳の隠居を請けてことであつた。初帰国は翌文政二年、頼之二十一歳の時である。相良頼之は帰国に先立ち、老中土井利厚に留守居役を派遣し、仮養子に関する内意を打診した。

一 土井大炊頭様御勝手江御使者御留守居相勤、御家督後初而例之通御暇被仰出候得者、無程御当地被成御出立候、然処御男子無御座候二付、当分御在所二被成御座候御弟謙次郎様、当卯御十四歳被為成候間、御仮養子被成度御願書御用番様江御暇被 仰出候翌日、御登 城前御逢仰込、御暇之御礼被仰上候節被差出度御含二御座候、思召茂被為在間鋪哉、御内意御伺被成度旨申述之、御願書も入御内見候事

右にある通り、仮養子の候補は頼之の弟謙次郎であつた。当時謙次郎は国許に在住していたが、当主の弟という立場からすればもつとも妥当な選択である。しかし妥当な人選であつても、幕府への出願にあたつては、事前に老中への内意確認が不可欠であつた。もつとも老中への内談は、仮養子問題に限ったことではなく、むしろ幕藩間の交渉事においては日常的になされているが、本件の場合も、懇意の老中である土井利厚に事前の相談を持ち込み、仮養子願書案を持参し、出願の時期や手順を含めて確認を求めたのである。

これに先立ち、相良家では親類筋の岡山藩池田家に対しても、「右御仮養子之儀御相談為御知旁御使者、三月十五日より追々被差出之」とあるように、了承を求めていた。ただし親類筋への相談は池田家のみであつたらしい。

一 外様御並問合候処、御親類様方緒相談茂無之二付、此節より止方二相成、尤備前二者前以御使者被遣相済居候二付、如此御使者御留守居相勤、左之書面持参

近江守様御家督後初而当四月御在所江之御暇被仰出候得者、無程御当地御発足被成候、然処御実子無御座候付、当分御在所被成御座候御弟謙次郎様、当卯御十四歳被為成候間、御仮養子御願書追而御差出被成度御含二御座候、思召も被為在間敷哉、御相談為御知旁使者被遣候

三月

つまり、当時は仮養子出願に対して、敢えて親類筋の合意を求めなくなっていた模様である。これより以前、明和・安永年間における仮養子出願の段階では、一応親類筋への事前通告が確認されることからすれば、敢えて親類筋への合意を求めなくなつたのは、この頃からの慣例であろうか。もともと岡山藩池田家は、頼之の祖父長寛の実家であり、相良頼之と池田家の当主斉政とは再従兄弟にあたる。その意味では、池田家の存在は他の親戚筋とは特別の関係とみてよいであろう。

さて、相良頼之が江戸城に召し出されて、正式に帰国許可を指示されたのは、四月十八日のことであつた。

(史料)

江戸発足は二十四日に確定し、

二十四日の江戸出立を控え、頼之が月番老中水野出羽守に仮養子願書を提出したのは、二十一日のことであつた。

一、太守公今朝正六時之御供揃ニ而御用番

水野出羽守様江御対客被遊、御勤御家督

後初而御在所江之御暇被

仰出之、被蒙 上意如御先例従

両御丸御拝領物被成候御礼被

仰上候候て、然而御仮養子之御願書被差出

左之通

御願書御案文

今度私儀初而在所江之御暇

被下置発足仕候、然処実子無御座

候間、若在所罷在候内不慮之儀茂

御座候者、当分在所罷在候弟

謙次郎儀当卯十四歳罷成候、此者

養子被

仰付私跡式被下置候様奉願候、已上

文政二己卯

四月廿一日

御名 御印 御判

土井大炊頭殿

青山下野守殿

阿部備中守殿

水野出羽守殿

大久保加賀守殿

願書は無事受理され、事前に内見を願った土井老中には願書提出の報告を兼ねて、内見の「御礼御使者」を送り、帰国に備えたのである。

肥後人吉に帰国した頼之が再び出府したのは、翌年の四月十二日のことであり、「為御参勤被遊 御着府候事」とある。仮養子願書が返却されるのは翌十三日のことであり、願書を預かっていた水野老中より左の添書とともに戻された。

一、水野出羽守様☆御使者を以如左

去年御暇之節被差出候当分

養子願書・別紙令返却候、以上

四月十三日 水野出羽守

相良近江守様

願書返却に対する頼之の請書は次の通りである。

御切紙面拝見仕候、去年御暇被下置候節

差上置候私当分養子願書別紙以御使者

御返却被下奉請取、辱仕合奉存候、為

御請捧使札候、恐惶謹言

御名

四月十三日 御実名 御判

水野出羽守様

参人々御中

右の手続きをへて、文政二年付の仮養子願書は失効した。

二 駿河在番に伴う仮養子願書

相良頼之が二度目の仮養子指名をすることになるのは、翌文政三年九月のことであつた。これは駿河在番を命じられたことに対するものであつた。

九月朔日

一、近江守頼之公、今日被為

召御登被成 城候处、駿府江之御暇

被 仰出候、御家格之通御時服十、白銀

百枚御配慮之

西丸江茂御出仕御礼被謁之、御退出より御礼

御廻勤迄万端御先例之通首尾好被為相濟候、

仍而御伺相濟候得者、御定日之通来ル十九日

御当地被遊御発足御積候事

今回も前年同様、弟謙次郎を仮養子に指名することになるが、頼之は再び土井大炊頭に事前に指示を仰いでいる。

九月四日

一、土井大炊頭様御勝手江御使者御留守居添役

宮原宇右衛門相勤、今度駿府表江之御暇被

仰出、無程御当地被成御出立候、然処御男子

無御座候二付御弟謙次郎様当辰十五歳

被為成、昨年初而御在所江御暇之節茂

御仮養子御願被成候間、此節茂右謙次郎様

御事御仮養子被成度御願書、明朝御用番様江

駿府江之御暇被

仰出候御礼、御相番御両輩様御一同御対客御勤

之節御居残二而被差出度御含二御座候、思召茂

被為在間鋪哉、御内意御伺被成度旨御口上

取繕ひ申述之、御願書茂入御内見候处、何之

思召茂無之、御勝手次第被差出候様二と御挨拶

有之候事

右の通り、土井老中の内意を確認した上で、同日中に月番老中青山下野守の下にも明五日に仮養子願書を提出する旨を事前に通告した。

九月五日当日の模様は、次ぎの通りであるが、史料中に「御相番」とあるのは、同時に駿河在番の任務を命じられた寄合旗本の渡辺采女(隆)・戸田十三郎(氏有)の両名である。

九月五日

一、太守公、今暁七時之御供揃ニ而御用番青山

下野守様御対客江御出、御相番御三輩様御

一同被成御通、駿府表江之御暇被

仰出被蒙

上意、御拝領物被成候御札被仰述之、御先格

之通御三名之御伺書式通与御一名之御伺書

尅通、上包御取被成、御一所ニ被成御進達、御復座

之節、渡辺采女様御両名之御伺書被成、御進達

御復座節下野守様御会釈有之、御一同御平伏

御両輩様ニハ御退座、

殿様御居残り御仮養子御願書被遊御進達

相済御退座被成候

右にある通り、「拝領物御札」の儀式が終了して同役の両名が退出した後、一人残された頼之は仮養子願書を提出した。内容は、前回とほぼ同文である。

御願書御案文

今度私儀駿府江之御暇被下置発足

仕候、然処実子無御座候間、若彼表罷在候内

不慮之儀茂御座候者、当分在所罷在候弟

謙次郎儀、当辰十五歳罷成候、此者

養子被

仰付、私跡式被下置候様奉願候、以上

文政三庚辰

御印

九月五日

御名御判

土井大炊頭殿

青山下野守殿

阿部備中守殿

水野出羽守殿

大久保加賀守殿

右御自筆ニ而奉書横折、片面ニ御認、上包

美濃紙本封、尤封字如斯

上書

仮養子願書

御名

右之一通候、西丸江御勤向無之

この時点より、相良謙次郎は再び頼之の仮養子として位置づけられ、万一の場合は後継資格をもつ立場に置かれることとなったのである。

一年間の駿河在番の任務を終えた頼之は、翌年の九月二十九日、「駿府御交代相済、今日被遊御帰府候事」とあるように江

戸に戻った。出立前に仮養子願書を預託した青山下野守から願書が返却されてきたのは、翌晦日のことである。

青山下野守様

参人々御中

右御留守居以御使者被差出之

去年駿府加番御暇之節被差出候
当分養子願書令返進之候、以上

九月晦日
青山下野守
相良近江守様

願書返進に対する請書は、次ぎの通りである。

去年駿府御加番御暇之節差上
申候当分養子願書別紙被成御返
落手仕候、以上

九月晦日
御名
青山下野守様

ただしこの時、当主頼之は直接青山老中の使者とは対面しなかった。そのため、改めて留守居役を使者にたて、請書を送ることになる。

一、直答無之候ニ付御請書左之通

御切紙拝見仕候、去年駿府御加番
御暇之節差上置候私当分養子
願書、別紙以御使者御返被下、奉請取
辱仕合奉存候、為御請捧使札候、恐惶謹言

九月晦日
御名
御名乗 御判

なお、この時「御直答有之候得者、御請御使者御留守居口上勤二候」とあり、口上によることが慣例となっていた模様である。いずれにせよ、この願書返却をもって、再び仮養子としての謙次郎の立場は解消されることになった。

三 三度目の仮養子

謙次郎が三度仮養子に指名されたのは、文政六年（一八二三）の帰国時であった。この時も従前の仮養子願書と特に変わるところはなかった。ただしこれまで二度にわたって事前に内談を求めていた老中土井利厚は前年の七月に死去していた。かわって相良家が内談を申し入れたのは水野忠成であるが、ことさら目新しい問題はなく、従前通り謙次郎を仮養子に立てる旨を窺い、願書の内見を願ったものである。願書案文も、まったくほとんど同文である。

御願書御案文

今度私儀在所江之御暇被下置
発足仕候、然処実子無御座候間、若
在所罷在候内不慮之儀茂御座候者
弟謙次郎儀当未拾八歳罷成候、
此者養子被

仰付私跡式被下置候様奉願候、以上

文政六癸未

御印

四月日

御名 御判

青山下野守殿

阿部備中守殿

水野出羽守殿

大久保加賀守殿

松平和泉守殿

右御自筆二而奉書横折、片面二御認

上包美濃紙本封、尤封ノ字如此

上書

仮養子願書

御名

江戸発足は、四月二十一日に設定され、頼之は国許へ戻った。
頼之の出府は、一年後の四月八日である。

今回もまた出府の翌日、すなわち文政七年四月九日に水野出羽守より返却されている。この時の老中添状の文言も何ら変わるところはなかった。

一、水野出羽守様☆御使者を以如左

去年御暇之節被差出候当分

養子願書別紙令返却候、以上

四月九日

水野出羽守

相良近江守様

「仮御養子一卷」に収録された仮養子願書関係の史料は、この文政七年の願書返却をもって終わっている。これは文政七年閏八月、頼之の長男長福が誕生したことによるものである。以後、長福は後継候補の第一に据えられ、頼之は帰国の都度、仮養子を指名する必要がなくなったのである。つまり頼之による仮養子願書は、文政二年、同三年、同六年の三回であり、謙次郎は仮養子としての役目を終えたのである。

むすびにかえて

以上、相良頼之の仮養子史料について紹介と検討を試みた。この事例は、弟を仮養子にするという点では、典型的な仮養子事例である。しかも実子誕生までの間、まさしく「仮」の役目を果たしたのである。しかし注目すべきは、たとえ一時的な仮養子であっても、幕府老中への内談を前提としている点である。それも一度ならず前回同様の指名であっても、老中との間で事前の確認を取りつつ、願書提出に至っていることは見過ごせないところである。

もちろんこのような手続きは、仮養子に限ったことではなく、諸々の出願においても同様であろう。しかし一見、形骸化とも見える手続きであるが、この作業を通じて後継候補者の再確認がなされていたことの意味は大きいであろう。

今回の事例では三度とも同一人物の指名を繰り返しているが、「仮」とはいっても、別人に変更する場合にはその理由を明らかにすることが求められている。一例を挙げれば、弘化*年、相良長福は仮養子を次弟の満次郎からその下の弟元三郎

に変更しているが、その場合には「*****」という別紙を添付することになる。また「仮御養子一卷」中の相良長寛の場合も、別稿で明らかにした通り血縁者に適格者がおらず、ほとんど無縁同前の人物を仮養子としていたが、幕府老中からは近親者に妥当な適格者の有無について念押しをされている¹⁰。また、他家の事例では、内見の段階で老中より疑義が出され、変更を求められている場合も確認できる¹¹。このような状況から明かなように、たとえ仮養子ではあっても、相続原則を逸脱した指名が許されないことは明白であろう。その意味でも事前の内見は不可欠であり、弟という順当な仮養子指名であっても老中側への確認が不可欠であったことを読み取れるのである。

なお、相良家による仮養子指名については、すでに確認できた部分については稿末の一覧表に載せたが、まだ未確認の部分があることをお断りしておきたい。

1 中田論文

2

3 相良文書

4 拙稿「近世中期における仮養子制度」(『湘南国際女子短期大学紀要』一五号 二〇〇八年)

5 同史料中、相良長寛の仮養子出願に際しては、一応縁戚筋十名に対して、事前に申し入れを行っていることが確認できる(註2 参照)。

6 相良文書中には、水野老中の添状が残されている(八四〇)。

7 長福が正式に嫡子とされるのは、天保三年のことであるが、実子誕生により、仮養子申請は不要となっている。

8

9 書付では理由を明記していないが、これは満次郎が急養子として備中鴨方の池田家を相続したことによるものである。

10

11 肥前柳川藩立花**は、実弟がいたにもかかわらず一族の男子を仮養子に立てようとしたことを咎められ、弟に変更している事例が確認できる。

肥後人吉藩・相良家の仮養子一覧 (元文3年～弘化4年)

当主名	襲封年*	帰国年*	仮養子	関 係	備 考
頼峯	元文 3 (6)	宝暦 3 (21) 宝暦 5 (23) 宝暦 7 (25)	相良頼母 相良頼母 相良頼母	甥(実は弟)	宝暦 8 年頼峯死去により、急養子として頼母(頼峯)襲封
頼央	宝暦 8 (24)	宝暦 9 (25)	秋月民部	従弟違	宝暦 9 年頼央死去により、急養子として民部(晃長)襲封
晃長	宝暦 9 (11)	[帰国なし]	—		宝暦 11 年死去、公辺内分にて頼完襲封
頼完	宝暦 12 (13)	[帰国なし]	—		明和 4 年死去、急養子として遠山福将襲封
福将	明和 4 (18)	[帰国なし]	—		明和 6 年死去、急養子として池田長寛襲封
長寛	明和 6 (19)	明和 6 (19) 明和 8 (21) 安永 2 (23)	板倉集次郎 板倉集次郎 板倉集次郎	四従弟違の子	安永 3 年頼徳誕生、以後仮養子なし
頼徳	享和 2 (29)	享和 2 (29)	—		寛政 10 年頼之誕生、仮養子指名なし
頼之	文政 2 (22)	文政 2 (22) 文政 3 (23) 文政 6 (26)	相良謙次郎 相良謙次郎 相良謙次郎	弟	文政 7 年長福誕生、以後仮養子なし
長福	天保 10 (16)	天保 12 (18) 天保 14 (20) 弘化 2 (22) 弘化 4 (24)	相良満次郎 相良満次郎 相良満次郎 相良元三郎	弟	弘化 4 年満次郎(政詮)、備中鴨方池田家を相続

註* 括弧内の年齢は実年齢ではなく、幕府への届出年齢とした。
「探源記続編」「相良文書」「寛政重修諸家譜」より作成。

(史料翻刻)

佐賀藩「御裁許書目抜」

島 善高

解題

かつて筆者は、佐賀藩の「律例」(財団法人鍋島報効会所蔵、佐賀県立図書館架蔵、鍋329・4・133)を翻刻紹介したことがある(研究代表、深谷克己『藩世界の意識と権威―西日本地域の場合―』二〇〇四年五月、科学研究費補助金、研究成果報告書、課題番号13410103)。この「律例」は、天保八(一八三七)年頃に書かれたもので、当時の佐賀藩の「徒罪」制度の実態を覗うことの出来る、貴重な史料である。

今回ここに紹介する「御裁許書拔」(財団法人鍋島報効会所蔵、佐賀県立図書館架蔵、鍋585・2・170)は、右の「律例」よりも少し前、恐らく天保六年か七年頃に成ったもので、単に「徒罪」のみならず、当時の佐賀藩の刑罰を網羅的に記したもので、左のとおり上中の三巻、全五十一項目から成っている。

(上巻)

- 1、刃傷殺害等いたし候者御手當之事
- 2、附火いたし候者同断之事
- 3、不義密通いたし者同断之事
- 4、賈金銀并贗藥種取扱候者同断之事
- 5、盗人同断之事

(中巻)

- 6、不孝之者御手當之事
- 7、捨子いたし候者同断之事
- 8、出奔いたし候者同断之事
- 9、喧嘩口論并打擲狼藉等相働候者同断之事
- 10、無切手二而旅出并所々狼藉居候者同断之事
- 11、盗人宿、偕又盗物勘通取扱候もの同断之事
- 12、切手往来質入并不実之切手等申上候もの同断之事

- 13、謀書謀判いたし候者同断之事

- 14、盗其外之難題申懸候者同断之事

- 15、揺謀横取等いたし候者同断之事

- 16、不正品取扱、又者無札二而諸商賣或高價之賣方仕候類之者同断之事

- 17、忍取并押取いたし候者同断之事

- 18、私欲奸謀手繰手廻等いたし候もの同断之事

- 19、御領内之者、他邦江賣渡、又者他領之ものを人質等二請取候者同断之事

- 20、行倒者之衣類剥取、偕又落物等有之候を不訴出類之者同断之事

- 21、米筭其外贗相拵候者同断之事

- 22、博奕并賭之勝負相催候者同断之事

(下巻)

- 23、御立山其外二而竹木等盗伐いたし候者御手當之事

- 24、武器を他領江賣渡候者同断之事

- 25、無滞在之旅人留置候者同断之事

- 26、御法度場二而鉄炮獵いたし候者同断之事

- 27、上納滞并村方備米等取散、藏究不行届者同断之事

- 28、公金等借請令不埒、又者取引筋二付他領之馬を致押取扱候者同断之事

- 29、御用船乗与、舸子其外不宜儀等取計候類之者同断之事

- 30、御用銀御用状等紛失為致候者同断之事

- 31、村方賈物出入并庄屋其外不直之取計等仕候者同断之事

- 32、公事訴訟并我意を申募候者同断之事

- 33、変死之者を病死之形二取計、又者人之惡事を可差困いたし候者同断之事

- 34、養子縁与等二付不筋取計いたし候者同断之事

- 35、御拂場入込并御預者他参内通等いたし候類同断之事

- 36、千人講等隠興行いたし候者同断之事

37、商賣筋或借銀米等致不埒候者同断之事
 38、旅人を御城内江連參候者同断之事
 39、乱心醉狂者同断之事
 40、女遊いたし候者同断之事
 41、踊狂言其外遊興相催候者同断之事
 42、奉公人逃去其外不埒相働候者同断之事
 43、新規之神事佛事并奇恠之儀等申扱候者同断之事
 44、出火同断之事
 45、御法度之衣類致着用候者同断之事
 46、宗門人改之節出奔者を有人二相加候者同断之事
 47、闕所之未相預置候品物潜賣拂候者同断之事
 48、女犯肉食其外僧道を取失候者同断之事
 49、寺社御寄附之品并境内竹木等賣拂候類同断之事
 50、寺社継自等之儀二付不宜致取計候者同断之事
 51、旅人御領内入込、盜其外不届有之候者同断之事
 この「御裁許書拔」に収録されている事例は、延享四（一七四七）年から天保六（一八三五）年までのものであるが、その中には、

磔、獄門、生害、焼金、片鬘刺、敲、徒罪、所拂（郡拂、居郷拂、居村拂、居町拂、御城下一里四方拂与拂）、逼塞、蟄居、隠居、出寺、旅出留、過料、御呵、申聞、脱衣、役儀取上

等々の刑罰が記録されている。おそらく当時の佐賀藩の基本的な刑罰を網羅的に記したものであつて、まさに佐賀藩刑法典と称しても過言ではなからう。本史料の詳細な分析、そして幕府刑法や他藩刑法との比較検討は別稿に譲ることとして、ここでは取りあえず、史料翻刻のみを掲げておく。

なお、本史料の翻刻に当たつては、可能な限り原本の体裁を残したが、翻刻の都合上、体裁を改めた箇所もある。また適宜、句読点を施し、判読不能の箇所は、□で示した。

（史料）
御裁許書拔 上

- 一 刃傷殺害等いたし候者御手當之事
- 一 附火いたし候者同断之事
- 一 不義密通いたし者同断之事
- 一 贖金銀并贖藥種取扱候者同断之事
- 一 盗人同断之事

刃傷殺害等いたし候者御手當之事

主殺

文化九年

- 一 奉公中致盜候付、主人より穿鑿二逢候處、却而相憤殺害いたし、或他之下女と密通又者捕方之者江手疵を負セ候者

市中引渡
磔

安永四年

- 一 主人同様之者を切害せしめ候末、右切害二逢候者之子より被打捨候者

塩害
獄門

親殺

安永四年

- 一 母を及切害、其身も相果候者

死骸市中引渡
磔

同八年

一 母を及刃傷候もの

市中引渡 磔

寛政四年

一 乱心ニ而親 扱又祖母を殺害いたし候末、揚屋ニ而致病死候者

死骸市中引渡 磔

文政八年

一 他江養子ニ参居 家業方大形有之、一類より異見ニ逢候儀 祖母 其外之者共、何角申扱候故と意趣ニ含、右祖母を致殺害、伯母女 房をも及刃傷候者

居村市中引渡 磔

文政十二年

一 養父を殺害せしめ候儀 乱心故と相見候付、究中止相成候内、於 揚屋縊死いたし候者

市中居村引渡 死骸 磔

師匠江疵付

寛政五年

一 酒給酔、師匠其外を打擲疵付候僧

脱衣、三郡追放

姑伯父殺

安永八年

一 夫死後、姑より隙差出様之相 (判據不能) □ 踏付候故、惡心差發、殺い たり候女

市中引渡 磔

文政四年

一 同居いたし居候伯父、衣類持出候を見及、拳を以打付、取戻候処、

彼者相憤、土足ニ而踏付候儀を意恨ニ存、及切害候朝

獄門

子殺

寛政十年

一 密通之末夫婦相成、又者人之娘を養取、鳥目令受用、養育方不相 叶由ニ而、右娘を為致溺死候者

市中引渡 磔

文政八年

一 女房人と令不義候末、身を投相果候処、其前邊出生之子有之、彼 もの密懷ニ而相設候儀と、後々疑念を起し、爰限相惡ミ、右子を 炭俵ニ入、堀中江沈メ為致溺死候者

女房 獄門

獄門

安永三年

一 酒給酔、不差立儀ニ而養娘を令切害候者

御事二付一命 被相助 七郡松 生害

文政八年

一 夫極難者ニ而出生之子、養育相叶間敷と堀ニ沈メ為致溺死、夫江 者里乳ニ遣候形ニ申偽候女

生害

附り、為致溺死候義、遠方罷越不相心得候得共、留守中當介等不 束ニいたし置、且兼而之 (判據不能) □ 方不行届ニ付、右夫

所拂

文政十年

一 幼少之養娘、於脇方鹿相之義いたし候連、宿元連帰、拳ニ而致打

擲候処より、後々相果候通成行候付、右母

一 命被補助
五郡拂

安永七年

一 貧苦迫り両親を可育ため、子を殺候者

五郡拂

夫江疵付

文化九年

一 夫江過當之儀を申候處より、踏付二逢、苦ミ之餘り可起立いたし候砌、相携居候庖丁二而不斗、夫足江相當疵付候末、右手疵ハ癒方半、食物ニ當り相果候付、右女房

一 命被補助
七郡拂

兄弟扱又女房其外切害疵付

安永四年

一 酒給酔、兄を突殺候もの

獄門

寛政四年

一 及難儀、弟方江打懸参居候處、右弟より盜之不審相懸候を意趣ニ含、家居其外可致横領と相工ミ、令切害候もの

獄門

一 不行跡之弟、法外相働候付、及切害、病死之形ニ取計候者

式郡拂

寛政十一年

一 口論之末、脇より相宥候者を却而可指殺と宿元立出候付、兄差留候處、世具等打碎、法外相働候故、兄より刃傷ニ逢候者

佐嘉郡拂

同五年

一 不行跡之弟、毎度加異見候而も不相用、母親を可令打擲いたし候付擲殺、病死之形ニ取計候兄

文化八年

一 女房無理ニ離縁いたし度申聞候儀、密夫等有之候故と推察之儘、無牀ニ令切害候者

所拂

萬部御奉行二付一 於生座
命被補助 五郡拂 生害

附 離縁之儀、夫承知不仕内、押而諸道具等持歸候處より、妹切害ニ逢、又者右を残念ニ相心得、不実之被訴訟候兄

居村拂

文政五年

一 酒給酔、不差立儀ニ而女房を致刃傷候末、御手當を恐、他方居付候了簡ニ而逃去、後々立戻候者

三郡拂 旅出留

同三年

一 女房之母親と及爭論候末離縁いたし、後々呼取度申談候得共不行届ニ付、右女房打果、自身ニも可相果と無牀ニ刃傷せしめ候もの

佐嘉郡拂

寛政三年

一 女房江不義之不審申懸、無牀ニ及刃傷候者

居郷拂

文化八年

一 女房離縁いたし候儀を残念ニ相心得居候半、外ニ密夫有之趣承り、実事と存、相手之男を打擲、女房を令刃傷候者

居郡拂

附 前条不義之儀、尋ニ逢候處、酒給酔居、前後無勘弁、実事之趣相答候者

居村拂

同十三年

一 病中女房江申付候義を不相用ニ付、立腹之餘り打擲可仕致候處、鉾を以手向候故、奪取及切害、又者兼而之密夫有之由、不差押義

申出候夫

逼塞

寛政八年

一 從弟致醉狂、親を可突殺由申聞候付、及問合候処、様々法外申募、打懸候故、難遁及殺害候者

御祝二付被附
助、五郡拂

生害

他人を切害疵付

安永四年

一 口論之末、人を令切害候者

生害

同四年

一 酒給酔、意趣も無之者を殺害および候僧

生害

安永四年

一 口論之末人を打擲殺、頓死之形二而葬與候通、一類共江申談候もの

生害

天明五年

一 酒給合候末、不差立儀二而口論二および、刃傷いたし、手疵之末相手相果候付

於生屋

生害

安永七年

一 法頭江相納候官金取遣、手當二逢候末、仲間へ意趣を令、及殺害候虚無僧

生害

天明八年

一 住持留守之寺院江押而致止宿、所之者共より盜之不審を受、打擲

逢候儀を相憤、相手二而無之者を兩人刃傷、壹人ハ手疵之末相果候付

生害

寛政二年

一 口論之末打擲二逢、相手を殺害、出奔せしめ、後々立戻候者

於生屋

生害

同六年

一 旅人酔狂二而様々致悪口候故、難閑、及刃傷候末相手相果候付

生害

同九年

一 博奕出入之末口論打擲二逢、衣類等被剥取候を意趣二存、相手を及殺害候者

於生屋

生害

同十年

一 口論之末相手仕懸參候付、可指止いたし候処、母親を打擲せしめ候付突殺候者

御祝二付被附
助、五郡拂

生害

寛政十二年

一 酒給酔、及口論、相手二而無之者突殺候もの

生害

文化六年

一 長崎御番所詰内、潜二立出酒食等いたし候付、同輩之者相呵候処、給酔居、及口論、打擲二逢候儀を相憤、令刃傷、右手疵之末相手相果候付

於生屋

生害

同三年

一 他人江賣渡置候請畔境之義二付、口論之末、相手手過之及取計候由二而令切害候者

御事二付一命於生屋
被相助 五郡拂

生害

同五年

一家内病人有之、他より障礙を受候儀と存込、其者を無牀二及切害候者

文化十三年

一道二迷、通り懸り之娘江道筋相尋候処、答も不仕笑候付、狐狸之類、為相迷候儀と存込、及殺害候者

於生屋

生害

文政四年

一女房致不義候付、隙差出、一類江引渡候處、数日親里不差返、留置候を相憤、右二類之もの夫婦を令刃傷、一人ハ手疵之末相果、或御手當を恐、一往出奔後々立戻候者

思召三而一命被
相助、九郡拂

生害

同五年

一人之借銀取引筋二相携、及口論、互二掴合候末、相手割木を携仕懸參、防道無之、致切害、後々令出奔候者

生害

文政八年

一借銀致不埒候付催促二逢、家財をも可持帰いたし候儀を相憤、及打擲候處、相手杭木相携仕懸參候を奪取、打殺、死牀海江捨置、溺死之形二取計候者

生害

同八年

一博奕出入之末、相手より様々不法申懸、杭木を以可及打擲いたし候付、右杭木もぎ取、相手を擲殺候者

生害

寛政十年

一家内病人有之候儀、近邊之女房障礙と存込、意趣を含、右女房其外疵付候通、無牀二致打擲候者

一命被相助 七ヶ年徒罪

文化五年

一商賣方二而相手衣法申募候付、相宥候而も不相用、只様法外相働候付、致打擲等、右手疵之末相果候得共、元來相手無法相働難通、右之至義および候付、

一命被相助 七郡拂

安永三年

一相手理不尽之致方二而不得止事、及切害候もの

一命被相助 五郡拂

寛政元年

一出家醉狂者より不法之打擲二逢、立腹之餘り打擲いたし返候処相果候、尤發端相手不法相働候末二付

一命被相助 五郡拂

明和八年

一商賣方二付口論之末、相手を及打擲候處、相果候、尤兼而病身者二而、手疵之末相果て候共不相決二付

五郡拂

文化九年

一他領之者より盜致手引候段、難題被申懸候付、及口論投付候處、相手相果候を、死牀潜に埋置候もの

五郡拂、旅出留

同十一年

一兄喧嘩いたし候場江參、相手を相宥候處不承之、法外之致返答候付、打擲致合候末、彼者果候、尤右手疵之末二而無之、病死之趣与合其外より申達候付

五郡拂

明和八年

一博奕之末口論および、相手を及刃傷候もの

天明七年

三郡拂

一 屋鋪境之儀ニ付、伯父江法外相働候末、右子共及雜言候を相憤、手疵を負セ候者

寛政元年

三郡拂

一 親致喧嘩、相手より被組敷、差急之場参懸、相手を擲殺候者

寛政十年

三郡拂

一 博奕之末及口論、打擲致合候末、相手意趣を合、脇差を帶、尋歩行候趣承りおよび、鉄炮二而矢疵を為負候もの

三郡拂

附、博奕取引錢可受取と脇差相帶、威を懸、荒打二才足いたし候処より、矢疵を負候もの

文政四年

貳郡拂

一 於他領、不差立儀を及口論、無躰被組伏、難堪處より火箸を以疵付候末、相手相果、又者数ヶ年潜二他方立越居候もの

三郡拂、旅出留

文化四年

一 難儀ニ迫り甥江合力申懸候末、不差立儀ニ致立腹、無躰二令刃傷、又者拔躬を持敷居、其外切害乱妨いたし候もの

三郡拂

文政三年

一 借銀筋才足二逢、相手を無躰二疵付、又者向方仕懸参、脇差等奪取、様々狼藉相働候もの

三郡拂

安永四年

一 於他領、御領内之者被打殺候趣承り、其場駈付候処、兄手疵を受

居候付、相手を擲殺候弟

貳郡拂

寛政元年

一 数年宿元立出、當介等も不仕處より、女房致密通候通成行、又者右密夫を及刃傷候者

貳郡拂、旅出留

寛政二年

一 他領之者と銀米取引之儀ニ付及口論候末、数人相機関仕懸参、相手江疵付候者

貳郡拂

享和二年

一 盜之不審申懸、差詰二逢候儀を意趣二合、無躰二相手を及刃傷候者

貳郡拂

文化五年

一 御大仕飼之節、間伏相立居候処、鉄炮早落いたし、人江矢疵を為負候者

貳郡拂

思召三而

佐嘉郡拂

寛政九年

一 江戸詰中、於途中他方之者江行當候末、何角中論、相手帶刀二手を懸候付、難關切付、又者通懸之者を人達二而無躰二令刃傷候者、居郡并御城下一里四方拂、旅出留

寛政九年

一 為商賣、潜二他領立越、及口論、無躰之取計二逢、難遁■(木へんに男二而致打擲候処、相手相果候付

居郡并御城下一里四方拂旅出留

明和九年

一 講食取引之末、相手より脇差可相預旨、過言申懸候付、及刃傷候者

佐嘉郡拂

安永六年

一 拔躬を持、所々あばれ候末、人を刃傷二および候者

佐嘉郡拂

文化三年

一 御供立之内二而江戸罷登候旅中、潜二遊所為見物立寄行、通懸之者より刃傷二逢候者

居郡拂 旅出留

附り、供々罷越候もの

居郷拂

文政十三年

一 所持之鋏盗二逢、遂穿鑿候處、穢多盗取居、鳥目差出、内済可仕申聞候を相憤、右鋏二而穢多を突候處、相果候付

居郡拂

安永二年

一 人を致異見候處、却而立腹申募候付、不得止事、相手を及刃傷候者

居郷拂

寛政三年

一 女房親里引取候末、他江致再縁候儀を不承知二存、再縁取扱候者を無牀二及刃傷候もの

居郷拂

寛政十一年

一 一類之者より講錢取立之儀被相頼、相手方參、無牀之取合等いたし、刃傷二逢候者

居郷拂

附り、理不尽之才足二逢、難閑及刃傷候者

文化十三年

一 女遊之末、右女濕病相起候を養生致具候處、醫師江葉代不埒致のミならず、却而無法之及取合候付、右醫師之兄より刃傷二逢候者

居郷拂

安永四年

一 他之借銀請人二相立居、借主返済不致二付、銀主より衣類被剥取候を相憤、令刃傷候者

居村拂

文政九年

一 妹密通之末、相手之男供々逃去候を追懸、召捕候處、右男より刃傷二逢候得共、妹御手當之程致勘弁、内分二而可相済いたし候者

逼塞

附り、本分二付、内済仕相談、其儘罷上候所役

御町逼塞

与合 逼塞

文政三年

一 下駄を人より被踏違候付、尋合候處、却而相手法外申募、右下駄を以母子共散々打擲二逢候得共、其場相宥候者有之、宿元引取候處、又々仕懸參、手荒取計をも可致風情二付、難閑及刃傷候末、相手相果候二付而

呵

安永七年

一 英彦山參詣之途中、同行之内、於他領法外之取計二逢候付、其訳問合候處、相手数人理不尽二取懸候付、不得止事、刃傷および候者

申聞

附、於他邦、法外之取計二逢候處、同行之内より其訳相手江問合候付、其者江打懸置、其場被通候者

佐賀郡拂

前條相手方江可問合いたし候処、可召捕旨申聞候由ニ而相怖、其場拔通候もの

居郷拂

同行之内、相後レ居、前条之趣承およびながら其場相通罷在候もの

閉戸

附火いたし候者御手當之事

安永六年

一 意趣を含、人之家江差火仕候者

惣奉行二付一金銀
相助、九郡拂

市中引渡 磔

天明六年

一 意趣を含、数人令切害所業可差隠ため、さし火仕候者

市中引渡 磔

寛政元年

一 旅盗人相機関、所々江差火いたし、盗出奔せしめ候者

市中引渡 磔

同六年

一 再犯盗人、徒罪方逃去、盗之ため致差火候者

市中引渡 磔

同六年

一 学問僧、於他方、人之女房と令不義、又者旅僧を打殺金子盗取、或差火いたし候もの

市中引渡 磔

同年

一 寺内江致差火、衣類盗取候僧

市中引渡 磔

文政四年

一 盗手太可仕課相工、数ヶ所差火いたし候もの

市中引渡 磔

天保三年

一 為盗御建寺江差火候再犯盗人

高懸惣奉行二付一金銀
金銀相助、九郡拂

市中引渡 磔

享和二年

一 再々犯盗人、為盗毎々致指火候者

惣奉行二付一金銀
相助、九郡拂

市中引渡 磔

不義密通いたし候者御手當之事

明和八年

一 人之女房令不義候末、密夫と申談、実之夫を殺いたし、縊死之形取計候者

市中引渡 男女共 磔

天明八年

一 人之下女江不義申懸、承引不仕二付、家内忍入、右女、扱又家主起合候を令切害、又ハ盗をもいたし候者

獄門

寛政三年

一 人之女房と密通いたし候末、意趣を含、右女房并実之夫を令切害候者

獄門

安永七年

一 主人之下女江不義申懸、承引不仕二付、及切害候もの

生害

天明七年

一 人之女房と不義いたし候末、相對死可致申合、右女を及切害、其場逃去、狼狽居候者

生害

同八年

一 人之女房密通いたし、又者密夫連立、潜他領、立越候者

附、他邦立越候儀、其儘罷有、又ハ密通致候儀無氣付夫
思召三而一命被 相助、九郡拂 生害

居村拂

天明八年

一 人之女房或娘と不義いたし、又者謀をもいたし候虚無僧

生害

寛政三年

一 人之女房と令不義、亦者酒給酔、右女扱又親共を致打擲候者

生害

同二年

一 人之女房出家と致不義、夫より見咎二逢候末、家内立出、方々狼
狽居候者

生害

附、島目等差出、内洛致候一類

居郷拂

寛政三年

一 夫数年恒元立出、當介も不仕、難儀之半、見継等いたし呉候者よ
り不義被申懸、致納得候女房

生害

同六年

一 姉之夫と致不義候末、姉より刃傷二逢候者

生害

同十一年

一 出家と不義いたし候女房

生害

享和元年

一 人之娘と密通之末、供々致縊死候處、女二者相果、自身者絶命不
仕、他方立越居候もの

生害

享和二年

一 後家と密通せしめ、方々相忍罷在、又者他邦江も立越候者

御祝二付一命被相助 男八八郡拂 女者七郡拂 旅出留 男女共 生害

文化元年

一 夫相果候後、人と密通いたし候末、又々二宿之旅人と致密懷候を
密夫相憤、旅人を刃傷および、其身も致縊死候付、右後家

生害

同二年

一 人之女房と致密通、右女を可連出といたし候處、夫其外追懸来候
を令刃傷候者

生害

同二年

一 不義いたし候末、相手より何方江も可立出申聞候を相断候處、脇
差抜放相威候ゆへ、無據同意いたし、向々二付副参候女

生害

文政元年

一 人之女房と密通せしめ候末、取沙汰二逢候儀を意趣二含、相手数
人を刃傷、其内切害をもいたし候者

生害

同三年

一 人之女房と密通せしめ候末、実夫相憤、右女房を刃傷候通成行候
付、密夫

生害

文政三年

一 人之娘と致密通候末、右母親相氣付、出入等差留候を相憤、密婦
を切害せしめ、母親をも刃傷および候者

生害

同四年

一 他領之女と致密通候末、御國者之形二申偽、数ヶ月宿元留置、亦

者親旅人之儀相氣付、生國差返候様申聞候二付、供々可相果と右女を令切害、其場逃去候者

文政四年

生害

一 人之女房致不義候付、離縁三逢候末、密夫と夫婦相成、其後前夫江出賣、悪口いたし候処より刃傷二逢候もの

男共
一命被相助
七郡拂

文政七年

一 人之娘と致密通候末、女房嫉妬差發候付、宿許引取候様申聞置候処、右女房致自殺候付

男共
一命被相助
七郡拂

同八年

一 伯父之女房と致不義、又者不差立儀互二申争候末、拳を以右女打殺、頓死之形二取計候もの

生害

文政八年

一 人之娘と密通いたし候末、右娘脇方致縁付候義を相憤、途中二而散々打擲いたし候処、相果候付、顕然之程相怖、水道江相沈メ、溺死之形二取計置候者

生害

文化九年

一 人之妹と令密通候末、供々逃去候処、右女之兄追懸来、召捕候を及刃傷、又ハ出奔、他邦居付候了簡二而所々狼狽、盜をもいたし候もの

男共
一命被相助
七郡拂

文政九年

一 人之女房と令強淫、亦者一件可申掠と、右夫江前邊、米貸渡置候取引二事奇、数人仕懸參、争論之末、及刃傷候者

男共
一命被相助
七郡拂

文政十二年

一 人之女房密通之末、密夫より意趣を含、夫婦共刃傷二逢、右手疵二而実夫相果候付、女房

男共
一命被相助
七郡拂

文政十三年

一 人之娘と密通之末、夫婦可相成契約いたし居候処、後々面會不致二付、外二密夫可有之と相憤、右娘を殺害せしめ候もの

生害

同年

一 密通之末相手之女を切害、供々可相果、咽江突立候処、未練之心差發、出奔可致心底二而其場逃去候者

生害

文化八年

一 他領之女と令密通、所々連歩行、又者右女之妹を御領内連来、遊女奉公為致、身代銀令受用候者

男共
一命被相助
七ヶ年徒罪、旅出留

天明七年

一 密通之末、密夫他より致縁与候を何敷相妨、八木等受用、又者人より被謀、他領江遊女奉公いたし候女

男共
一命被相助
九郡拂

附り、密通いたし候男

九郡拂

文化元年

一 無宿者と密通いたし、供々他方立出候末、右無宿者人と口論之末、切害二逢候付、後々他領より引渡相成候女

男共
一命被相助
七郡拂

文政五年

一 旅女と密通いたし候末、他領立越、一往夫婦相成、又者酒給酔、幼少之娘を致強姦候もの

七郡拂

天明五年

一 江戸詰中、他方之女と密通、夫婦可相成申談、令出奔、右女生国参居、後々立戻候者

五郡拂、旅出留

同六年

一 密通可致所存二而忍人候処、盜之不審を以指押二逢候を残念存、密通いたし居候段、不実申出候者

五郡拂

文化十三年

一 足輕長崎御番所詰中、他方之女と致密通候末、致妊娠候趣二而宿元参来候を、潜二留置、又者右女親里江連越、自身も致滞留居候もの

五郡拂

文政十年

一 他領之者と致密通、相手任申勸、潜二他方立越罷在候女

一命被補助

五郡拂

同十一年

一 密通之末、夫婦二可相成致契約置候処、其儀不行届二付、一命可相果と互二申合、咽江疵付候者

男女共一命被補助

五郡拂

天保五年

一 商賣方二付、潜二他邦立越候末、人之娘と令密通、右女勘當二逢候付、女房二致呉度相談候を受合、又者不正品取扱、或ハ謀をもいたし候者

五郡拂、旅出留

明和八年

一 密通之末、心底を改、密懷申断候処、密夫より刃傷二逢候女

三郡拂

寛政二年

一 女房致不義候を見及、其儘罷在、却而一類共より鳥目ゆすり取、

又者右女房離縁いたし候後、親里江密夫忍参候を承り、打果候了簡二而人違二令刃傷候者

三郡拂

寛政九年

一 旅女と申儀不相心得、令密通、又者致盜候もの

一命被補助

三郡拂

享和三年

一 人之娘と密通之末、女房二乞請候処、住居所無之、脇方奉公為致、亦者自身親分二相成、他人江致縁付候通取計候者

一命被補助

三郡拂

附り、女右同断

文政四年

一 他領之者と密通せしめ、其後脇方縁付いたし居候処、於途中右密夫江出會、無理二引留二逢候半、身寄之者共駈付、彼者を及打擲候処より、長崎御奉行所江及出訴、御姦敷相成候付、右女

式郡拂

寛政十一年

一 人之娘を女房二乞請候得共、不差遣二付、致密通、押而可呼取相工ミ、於途中出會、無躰二脇方連参相預置、又ハ中手を入候者江無躰二手疵を負セ候者

壹ケ年半徒罪

天明七年

一 娘致密通候儀承なから、一通異見を加候迄二而指置、又ハ潜二他邦立越候を其儘罷在候母親

佐嘉郡拂

文化三年

一 人より不義被申懸、相断候得共、不承立、無躰之取計二逢、其場請合、後々被相謀、他方江遊女二被賣渡候女

居郡拂

天明

一 女房致不義候を指押、及切害候末、密夫之行衛見失候もの

御呵

一 女房致不義候を及切害、筋々不申達候もの

申聞

贖金銀并贖案種取扱候者御手當之事

文政十三年

一 式朱銀贖相拵、遣方せしめ、又ハ他領立越、其所々ニおゐて銀札

等贖相拵、身易可相暮と出奔せしめ候末、
(罰鍰不忠) □ 不相叶立戻候者

生害

文政元年

一 於所々盜博奕せしめ、又ハ潜ニ他領立越、贖銀買取致遣方、或ハ自身ニも一往贖相拵候得共、不遣課者、

一命被補助 七郡拂

同八年

一 旅人を潜ニ毎度留置、彼者拵立候贖銀貰請、遣方せしめ、又者贖銀拵方をも習受候得共、不似寄ニ付鑄潰候者

一命被補助 七郡拂

天保五年

一 贖銀遣方可仕存立、右拵立候元盜人を御払場内相住居候通取計、過分之贖金遣方せしめ、又ハ同類之内致出奔候を其儘罷在、或商賣筋ニ付、謀書をもいたし候者

一命被補助 七郡払、旅出留

文政十二年

一 他方之者より任相勘、百化相成、又ハ彼者贖銀拵立候場罷在、右を貰請、令遣方、或博奕をもいたし候者

一命被補助 五郡払

天保五年

一 他領之者相機関、贖銀買取、令遣方、又者潜ニ旅出いたし候者

五郡払

文政十四年

一 潜ニ他領立越、朝鮮人參贖買入、賣方いたし候者

三ヶ年徒罪、旅出留

附り、贖と申儀無氣付買取、致賣方候者

御呵

安永七年

一 他邦之者拵立候贖銀、質入いたし、又ハ日料賃等ニ受取、或博奕宿屋致候者

三郡払、旅出留

天明七年

一 潜ニ他領立越博奕せしめ、負方指迫り、鉛ニ而封銀を相拵候者

三郡払

文政元年

一 銀地金贖相拵、賣払代錢致分取候者

貳ヶ年徒罪

天保三年

一 商賣筋ニ付、他邦之者より燒壹朱金を地金ニシテ受取、右ニ色付、於他領遣方せしめ、捕ニ逢候者

貳ヶ年徒罪

天保三年

一 真鍮煙管江銀鉛焼付いたし、打形等相付、銀煙管古手之形ニ取成、質入せしめ候者

御城下払

盜人御手當之事

初度

文政二年

一 難儀二迫、金盜候女

問之目数
呵逼塞

同八年

一 為盜忍入、見咎二逢、不仕課者

居村拂

同二年

一 衣類可盜取いたし、不仕課者

三十敲

天保四年

一 盜人任相機関、土居二小積有之候段、盜致候者

三十敲之上、御城下一里四方拂

文政三年

一 盜いたし候女

所拂之上、御城下一里四方拂

寛政三年

一 女房を下女奉公為致、主人之衣類盜取らせ候者

百五十日徒罪

文政元年

一 致盜候もの

五十敲之上、御城下一里四方拂

同年

一 致盜、又者奉公中初忍取候者

五十敲之上、御城下一里四方拂

同年

一 旅盜人相機関、令盜、又者盜取候馬為賣拂、他方牽行候者

五十敲之上、御城下一里四方拂、旅出留

天保五年

一 盜、又者賭之勝負いたし候者

五十敲之上、御城下一里四方拂

天明六年

一 盜いたし候儀顯然、折檻二逢候處、無面目存シ、自殺いたし懸候者

貳百五十日徒罪

文化十二年

一 奉公中、主人田坪二有之候稻盜取、又者忍取をもいたし候者

貳百五十日徒罪

文政元年

一 盜いたし、又者賭之勝負いたし候幼年者

居郷并御城下一里四方拂

同十二年

一 盜いたし候老年者

居郷并御城下一里四方拂

同十三年

一 盜謀いたし候幼年者

居郷并御城下一里四方拂

天保四年

一 人を相機関、令盜、又者意趣を含、盜之難題申懸候盲人

居郷并御城下一里四方拂

附、任相機関、令盜、又ハ盜品申明二逢、質入相整、謝礼致受用候盲人

居郷并御城下一里四方拂

文化二年

一 癩病相煩居、令盜候もの

居郷并御城下一里四方拂

同六年

一 盜いたし、又者機多より衣類謀取候女

居郷并御城下一里四方拂

同十四年

一 盜いたし候末、不審被相懸、相手を無鉢二令打擲候者

八十敲之上、御城下一里四方拂

文政元年

一 盜横取いたし、顯然之程相恐、暫他方指出罷在候者

八十敵之上、御城下一里四方拂

文政二年

一 奉公中難儀二迫、主人之米管其外盜取候女

居郡并御城下一里四方拂

同三年

一 奉公中主人之品物盜取候者

八十敵之上、御城下一里四方拂

同三年

一 令盜、又者意趣を含、盜之難題申懸候者

八十敵之上、御城下一里四方拂

同四年

一 師匠所持之品盜取、他領立越罷在候僧

八十敵之上、御城下一里四方拂

文政四年

一 盜博奕いたし候者

八十敵之上、御城下一里四方拂

文政四年

一 伯父店方之鳥目、自分用取遣、引合不相叶、潜二江戸立越候末、

御屋敷内にて令盜候もの

八十敵之上、御城下一里四方拂 旅出留

文政五年

一 荒使子奉公中、主人之稻令盜候者

八十敵之上、御城下一里四方拂

文政元年

一 盜博奕いたし候者

八十敵之上、御城下一里四方拂

同年

一 盜謀、横取いたし候者

天保三年

一 御城内にて致盜候者

八十敵之上、御城下一里四方拂

安永四年

一 御奉行船乗組之舸子、同輩所持之品盜取、途中より出奔、立戻候もの

八十敵之上、御城下一里四方拂

もの

寛政五年

一 商賣にて潜二他方立越候末、損失相立候由にて、他領之者供々盜可致申談候者

居郡并御城下一里四方拂 旅出留

可致申談候者

文政十三年

一 致盜候末、責を遁候ため合盜いたし候段、不実申出、或居籠所逃去候幼年者

壹ケ年徒罪、旅出留

去候幼年者

文政元年

一 京都詰中、主人相果候付、旅人相機関、大小其外盜取候者

居郡并御城下一里四方拂

壹ケ年徒罪、旅出留

文政三年

一 通懸之者所持之米管を可謀取いたし候處、不仕課二付、無牀二突倒シ盜取、令出奔、後々立戻、所々相忍び罷在候者

壹ケ年徒罪、旅出留

文政八年

一 奉公中致盜、又者横取謀をも致シ候者

壹ケ年徒罪

文政三年

一 令盜候末、他方居付候心底にて、揚屋を破逃去、又者為盜居村狼

狼罷在候僧

百敵之上、御城下一里四方拂

享和二年

一 田坪二有之候稻盜取候もの

百敵之上、御城下一里四方拂

文化十四年

一 脇差を以土藏を破、令盜候者

百敵之上、御城下一里四方拂

文政三年

一 從者奉公いたし、江戸罷越、令女遊、負方二迫り、主人之衣類等盜取候者

百敵之上、御城下一里四方拂

文政四年

一 於役内、人之切米筥盜取候者

百敵之上、御城下一里四方拂

文政五年

一 奉公中致盜謀候者

百敵之上、御城下一里四方拂

文政六年

一 盜博奕致女遊、又者顕然之程相恐、盜之儀他人所業之形ニ評定所駈込申達候もの

百敵之上、御城下一里四方拂

文政八年

一 盜いたし、盜品他領持越致質入、又者博奕或難題をも申懸候者

百敵之上、御城下一里四方拂

同十一年

一 盜博奕横取いたし候者

百敵之上、御城下一里四方拂

文政十年

一 致博奕候付、一類江相預置候處、潜ニ立出令盜、又者御用船雇舸子之内相加、下関罷越、女遊いたし候末逃帰、或於所々謀をも致候もの

文政十三年

一 米藏役所忍入、御切米筥令盜候者

壹ケ年半徒罪、旅出留

天保四年

一 博奕相催候末、負方二迫、土藏を破、令盜候もの

壹ケ年半徒罪

文政十年

一 毎度潜ニ長崎立越、致女遊、右負方二迫り、於所々令盜、御奉行所より蒙御手當候足輕

式郡追放、旅出留

天保三年

一 奉公中、主人之品物令盜、又者質物置あけ、或意趣を含、人江博奕之難題申懸候者

百敵之上、御城下一里四方拂

天保四年

一 戸を焼破令盜、又者他領にても盜いたし候者

百敵之上、御城下一里四方拂、旅出留

享和二年

一 女遊之末、負方二迫、役所忍入令盜候末、宿許立出相忍居候者

壹ケ年半徒罪

文政五年

一 奉公中、主人之土藏江忍入、鉄炮其外令盜、他領立越居候者

壹ケ年半徒罪、旅出留

文政十年

一 致博奕候付、一類江相預置候處、潜ニ立出令盜、又者御用船雇舸子之内相加、下関罷越、女遊いたし候末逃帰、或於所々謀をも致候もの

壹ケ年半徒罪、旅出留

文政十一年

一 郷藏番いたし居、右藏之米を令盜候もの

貳郡拂

天明六年

一 長崎仕送之御用銀盜取、顯然之程相恐れ、潜ニ差出置候者

貳ヶ年徒罪

同八年

一 御能舞臺樂屋忍入、火鉢等毎度令盜候者

貳ヶ年徒罪

享和元年

一 舸子いたし、長崎御番船乗組罷在候内、公料之者申談、賣船江為盜忍入候得共、不仕課もの

貳ヶ年半徒罪、旅出留

文化三年

一 致盜、又者役之者形ニ取成、毎度鳥目ゆすり取、或潜ニ他方立越、女遊をもいたし候もの

貳ヶ年半徒罪、旅出留

文化四年

一 盜人相機関、於所々作馬盜取、他領江賣拂、又者他領立越、数ヶ月行衛不相知、出奔手数ニ相成候者

貳ヶ年半徒罪、旅出留

同五年

一 深掘詰中大村参、致女遊、負方ニ迫令、盜候者

貳ヶ年半徒罪、旅出留

文化七年

一 於所々致盜、又者土藏を破、莫太之品物盜取候者

貳ヶ年徒罪

同九年

一 長崎御屋敷詰中令女遊、又者主人より相渡候品物忍取、或盜謀いたし候末、逃歸候者

貳ヶ年半徒罪、旅出留

文化十三年

一 盜人相機関、主人之藏を破、鎧其外盜取他方江令質入、又者右盜之儀他人江難題申懸候者

貳ヶ年徒罪

文化十年

一 過分之金銀盜取、又者博奕致女遊候末、令出奔候心底にて他方立越罷在候者

貳ヶ年徒罪、旅出留

文政二年

一 盜致出奔、又者旅盜人を御領内引入、或謀をもいたし候者

貳ヶ年半徒罪、旅出留

天明六年

一 難儀ニ迫、百姓江作方致加勢、預助力、又者桶盜取候足輕

三郡追放

文政五年

一 旅人留置令博奕、又者彼者より負錢ニ差當、贓反物差遣候を受取致質入、或盜人致宿令合盜、殊ニ盜品之内他領持越質入候者

貳ヶ年徒罪

文政九年

一 致出家居候内、令盜、又者偽を以他之僧着いたし居候衣類剥取候処、無間も被取戻候儀を致立腹、右僧を立木ニ縊付令打擲、又者押借博奕をもいたし候者

貳ヶ年徒罪

文政九年

一 御番所御繫船乗組、舸子難儀ニ迫、御臺場其外ニおゐて令盜、右品賣払とて他領立越罷在候者

貳ヶ年徒罪、旅出留

文政十三年

一 諸役所忍入、過分之帳面令盜候者

貳ヶ年徒罪

天保六年

一 他方を懸令盜、又者御領内之女を相謀、他領江遊女二賣払候者

三ヶ年徒罪

天保五年

一 盜一篇二而日を可送了簡相極逃去、於所々令盜、又者為盜他領立越居候者

三ヶ年半徒罪、旅出留

寛政五年

一 江戸詰中令女遊、負方迫り、主人之金子盜取、出奔立戻候者

三ヶ年徒罪、旅出留

寛政五年

一 飛脚之者名前にて御用物受取、令盜、右飛脚所業之形二難題申懸候者

三ヶ年徒罪

享和二年

一 女遊之末、負方二迫り盜令出奔、後々立戻候者

三ヶ年徒罪、旅出留

享和三年

一 御番所詰中令盜女遊、又者御手當を相怖、他方立出、後々罷帰候者

三ヶ年徒罪、旅出留

文化八年

一 致盜、盜品他領持越、質入、又者贖米筈買取、令遣方候者

三ヶ年徒罪、旅出留

文化十一年

一 藏を破り莫太之品物盜取、他方江致質入候者

三ヶ年徒罪、旅出留

文化十四年

一 長崎御番所詰中、主人之衣類致横取、又者居籠所逃去出奔、盜女遊いたし候者

一 命被補助 三ヶ年徒罪、旅出留

文政元年

一 江戸詰中、令女遊、負方二迫り、主人之金銀盜取、致出奔、後々立戻候者

三ヶ年徒罪、旅出留

文政十一年

一 御城内於其外令盜候末、致出奔候心底にて揚屋逃去り、又者納銀とふ可盜取与會所床之下江数日相忍居、或謀をもいたし候者

三ヶ年徒罪

天保五年

一 致盜、或他領之者を無牀之及打擲、衣類奪取、又者賭之勝負をもいたし候者

三ヶ年徒罪

天明八年

一 江戸詰中、主人之衣類致質入いたし、又者盜女遊出奔せしめ、後々立戻候もの

五郡拂、旅出留

文化十二年

一 元盜人私領方引渡相成筈之處、手強責二も達候儀を致勘弁、令出奔候もの

一 命被補助 五郡拂、旅出留

文政二年

一 御寄附之品其外忍出、令質入、又者盜をもいたし候僧

五郡追放

文政十一年

一 博奕之末、負方二迫り、他領立越致盜、又者御手當を勘弁出奔せしめ、数ヶ年他邦居付罷在、後々立戻候もの

五郡拂、旅出留

文化十一年

一 藏を破莫太之品物令盜、他邦江致質入、又者ゆすり謀を致候者

文化元年

四ヶ年徒罪、旅出留

一 江戸詰中、女遊之末、負方ニ迫り、主人之衣類致盗取、致出奔候心底にて御屋敷立出候処、捕二逢、御手當を恐、自殺可仕いたし候者

五ヶ年徒罪、旅出留

文化十四年

一 盗いたし盗品他領持越、賣拂候末、所業顯然之程相怖、致出奔候者

一 命被補助 五ヶ年徒罪

文政元年

一 役所忍入、貸案叩放シ、銀米筥等盗取候手男

五ヶ年徒罪

寛政十年

一 盗令出奔立戻候処、捕二も相成候風聞承付、評定所駈込候者

一 命被補助 五ヶ年徒罪

文政五年

一 途中二而女ニ出會、所持之品可奪取、山中江連行手段之為、不義申懸候末令強姦、又者擲殺候而も可奪取と令打擲、所持之品等奪取候者

一 命被補助 五ヶ年徒罪

天保五年

一 奉公中逃去候末、令出奔、後々御領内入込、致盗候者

一 命被補助 五ヶ年徒罪、旅出留

天保四年

一 江戸詰中、女遊之末負方ニ迫り、脇々より大小借受、質入せしめ、又者所業可及顯然成立候付、主人所持之金銀盗取、令出奔候もの

一 命被補助 六ヶ年徒罪、旅出留

天保四年

一 江戸詰中、女遊之末負方ニ迫り、主人所持之金銀衣類相盗取、他

方居付候心底にて令出奔、又者於其向々博奕相催候末、及難儀、為盗所々狼狽居、京都御役所より御捕二逢候もの

一 命被補助 六ヶ年徒罪

天保五年

一 江戸詰中、女遊之末負方ニ迫、主人之衣類盗取令出奔、又者主人名前之御門断、謀書謀判いたし候もの

六ヶ年徒罪、旅出留

一 博奕女遊等いたし候末、負方ニ迫り、諸役所忍入、金銀等又盗候手男

六ヶ年徒罪

文政九年

一 日料稼之ため、潜二深掘立越候末、難儀ニ迫り、御藏之鉄手子致盗、長崎其外江賣込候者

七ヶ年徒罪、向後深掘表不罷越様

文化十一年

一 深掘御藏を破、過分之船玉盗取、又者横取をもいたし候もの

一 命被補助 七ヶ年徒罪

文化五年

一 御藏之玉藥調子之節、船玉等忍取、令女遊負方ニ迫り、又者御藏を破、船玉其外盗取候もの

一 命被補助 九郡松

享和三年

一 盗其外不屈有之、牢舎被仰付置候處、牢屋を破、他方逃去候もの

三王殿王 打迫牢舎

明和七年

一 御船藏江度々忍入、大分之御船道具令盗、他方江賣拂候もの

生害

安永七年

一 盗二入、手向候者致切害、仕果候心底之者

御免三而一命被相助 九郡追放

天明七年

一 道連之者を擲殺、懷中之米筥等奪取候もの

御免三而一命被相助 七年徒罪

生害

天明七年

一 盗出奔いたし候末、不屈有之、公儀より御手當二逢候付、牢舎被仰付置候処、牢屋を焼破り逃去候僧

生害

寛政五年

一 手男江戸詰中、令女遊負方二迫り、麻布御蔵御秘事之道具等盗取、他より盗人入込候形二相工置候もの

生害

寛政六年

一 人と致密通候儀顯然、親より勘當二逢候末、密夫と夫婦二相成、又者奉公内致盗、主人之倅所業之形二取成、於究場様々不實申出候女

御免三而一命被相助 七郡追放

生害

寛政六年

一 盗之ため殺人申談、寺院江忍入候得共、不仕課二付、住持他行之砌、於途中打果、可盗取と脇差を帯シ仕懸参、又者押入刃傷をもいたし候もの

生害

寛政九年

一 長崎御番所詰中、致女遊負方二迫り、主人之大小衣類等、大分之品物盗取候もの

生害

寛政十一年

一 江戸詰中、女遊之末負方式迫り、主人之衣類其外莫太盗取、令出奔候者

生害

同年

一 通懸之者荷物令強盗、衣類をも可剥取いたし、或時宜三應シ、相威候ため脇差相帯居候もの

生害

享和元年

一 江戸詰中、負方二迫り、盗令出奔、他之屋敷江仲間奉公等いたし候もの

御免三而一命被相助 九郡追放

生害

享和元年

一 強盗之申談者不仕候得共、乍氣付同様罷出、盗品令分取候者

生害

文化七年

一 使番相勸居、役内之御用金銀、過分盗取もの
思召三而一命被相助 九郡追放

生害

文化十一年

一 御能方御道具并御飭付之御鉄炮盗取、又者女遊をもいたし候
(坊カ)

生害

文政三年

一 為盗寺院江忍入候処、寺番之僧見咎候を突殺候者

生害

文政五年

一 奉公中、毎度横取等いたし候付、居籠置候処、逃去令出奔候末、盗場所無之由にて、潜二御領内入込、存分盗課可立去と、居所申偽致奉公、盗又者女遊をもいたし候者

思召三而一命被相助 五ヶ年徒罪 逃出留

生害

文政五年

一 数人相機関、他領之寺院江致押入、過分之金銀盗取、又者其場下人を相威候ため、脇差拔放、手回等いたし候ハ、打捨候心底にて

罷仕候者

文政十三年

一 盜致出奔、又者為盜忍入、其場見咎候ものを擲殺し、令強盜候者

生害

明和九年

一 博奕負方二迫り、同船之者を為致溺死、令盜候者

生害

寛政六年

一 盜致博奕候末、盗人申談、他之住持を打果、所持品可盜取と仕懸参、又者寺内江強盜共引入、師匠をも可致殺害存立候僧

獄門

寛政八年

一 旅盗人とも相機關、於所々強盜令出奔、或於他領合籠之者を致締殺候者

獄門

文化三年

一 江戸詰中、女遊之末、莫太之御用金盜取、令出奔候者

獄門

文化三年

一 御城内忍入令盜、又者強盜をもいたし候もの

獄門

御殿三番(命) 御殿三番(命) 御殿三番(命)

文政四年

一 役内銀令手繰、償方不相叶、會所銀藏を破、過分之金銀盜取、又者女遊をもいたし候足輕

獄門

再犯

獄門

文政元年

一 御拂場入込令盜候もの

元御筆下松之上 八拾敲

天保四年

一 御拂場入込令盜、又者盜品他領持越、質入いたし候もの

元御筆下松之上

八拾敲、旅出留

文化三年

一 御城内於其外令盜、又ハ居籠中逃出候もの

元御筆下松之上 百敲

文政五年

一 盜博奕いたし候もの

元御筆下松之上 百敲

同九年

一 御拂場入込令盜博奕、又者盜品他領持越候もの

元御筆下松之上 百敲

天保五年

一 於他邦令盜、捕二逢、長崎御奉行所より蒙御手當候もの

元御筆下松之上

百敲、旅出留

文化元年

一 奉公中数人相機關、主人之初令盜候者

壹ケ年半徒罪

附、同様奉公致居、任相機關盜取もの

八拾敲之上、御城下拂

同九年

一 盜致博奕、御手當之儀を勘弁いたし、一往逃去候もの

壹ケ年半徒罪

文政七年

一 於所々令盜、殊盜品為質入御拂場入込、亦ハ謀をもいたし候もの

壹ケ年半徒罪

天保五年

一 御城内入込令盜、又者他領立越、女遊いたし候もの

〔御筆〕松王

壹ケ年半徒罪、旅出留

天保六年

一 御拂場入込、土蔵を破り、令盜候もの

壹ケ年半徒罪

文化九年

一 致盜、又者所業柄差隠、御払場入込、人之女房二相成候女

〔御筆〕松王

貳郡拂

文政三年

一 御拂場入込令盜、又ハ博奕宿屋いたし、或意趣を合、人江盜其外之難題申懸候者

〔御筆〕松王

貳ケ年徒罪

同四年

一 為奉公数年御払場入込、帳内相加居候末、又者令盜候者

貳ケ年徒罪

同六年

一 揚屋を破、逃去候付、其御手當破、仰付候処、又々致盜候もの

貳ケ年徒罪

一 致出奔候心底ニ而私領方溜を破り、逃出候末、御払場入込令盜候もの

貳ケ年徒罪

文政十一年

一 盜博奕いたし候付、其御手當破、仰付候処、法頭江相歟、打迫山伏ニ而罷在、後々他之坊跡致相驗候末、難儀迫、令盜候山伏

貳ケ年徒罪

同十二年

一 盜人相機関、於所々令盜、又者盜品差返致内済、或博奕謀をもいたし候もの

貳ケ年半徒罪

天保五年

一 致盜、又ハ旅盜人を御領内引入、盜場所致手引、或為商賣、潜二

他邦立越候もの

〔御筆〕松王

貳ケ年半徒罪

天保六年

一 他邦を懸、於數ヶ所令盜候もの

貳ケ年徒罪、旅出留

寛政七年

一 令盜、捕二逢候を意趣三合、難題申懸候者

三ケ年徒罪

文化十一年

一 差太之金銀盜取候末、他領立越、女遊をもいたし候者

三ケ年徒罪、旅出留

文政元年

一 於所々差太之品物盜取、又ハ御拂場入込、或女遊をもいたし候者

三ケ年徒罪

同三年

一 御拂場相忍居、毎度致盜博奕候者

三ケ年徒罪

同十一年

一 元盜人之儀差隠、江戸罷越、手男相勸、又者女遊之末負方ニ迫り、盜セしめ候者

三ケ年徒罪、旅出留

寛政七年

一 徒罪方逃去候者共を數日為相忍、又ハ盜をもいたし候者

五郡拂

同二年

一 他方立出候心底ニ而逃出、又者致可差留候者を及切害候者

五ケ年徒罪

同六年

一 徒罪方逃出、其後立戻候処、合徒罪候者より任申勸、他方居付候

心底二而、又々逃去候もの

一命被補助

五ヶ年徒罪

同九年

一 他方居付候心底二而盜致、出奔候者

一命被補助

五ヶ年徒罪

享和二年

一 郷藏を破、米盜取候者

一命被補助

五ヶ年徒罪

文化七年

一 令盜、御手當之程勘弁、遠國居付候心底二て宿元立出、於御國他方を懸、差太之品物盜取、又者博奕女遊をもいたし候者

一命被補助

元旅出留王

五ヶ年徒罪

同十二年

一 潜二致舐子、長崎罷越、女遊之末負方式迫り、旅盜人相機関、御囲之稻 (刑罰不能) 令盜、他領居付候心底二而出奔、所々狼狽罷在候處、御奉行所より御手當を請候者

一命被補助

六ヶ年徒罪、旅出留

寛政九年

一 於公料致盜候末、御奉行所より肥前一國被相拂候もの

永牢舎

寛政二年

一 令盜捕二逢候末、透を見合、役之者大小盜取、致出奔、又者毎度揚屋等を逃去、盜一篇二而罷在候者

生害

同五年

一 徒罪方逃出し、盜致出奔、又ハ長崎之者より被相雇、抜荷相被候故、御奉行所より蒙御手當候者

生害

同年

一 盜博奕せしめ、顯然之程相怖、致出奔候者

生害

同七年

一 揚屋逃出、令出奔候末、御領内入込、數ヶ所二而過分之品物盜取候者

生害

寛政九年

一 盜いたし候末、他領居付候心底二而出奔せしめ候もの

生害

同十一年

一 御手當差付御拂場入込、差太之品物盜取、他領持越致質入、又者女遊、横取、或人江合盜之難題申懸候者

生害

同年

一 徒罪方逃去、致盜、他方居付候心底二而、方々狼狽罷在候者

生害頭相渡

生害

文化三年

一 令盜、捕二逢候處、於途中逃去、數年他領立越、末以ハ居付候心底二罷在候者

御二付一命被補助
七ヶ年徒罪、旅出留

生害

文政五年

一 盜令出奔、又者御領内他方を懸、於所々土藏を破、差太之品物致盜、或ハ他領之女と致密通、右女を連參為盜、御領内相忍罷在候者

一命被補助 男
二而、五ヶ年徒罪

生害

附 旅女を女房之形二而連來候處、旅人と申儀無氣付、借屋江召置候者

御呵

天明八年

一 徒罪方逃出、御國他方二而致強盜候者

獄門

寛政九年

一 徒罪方逃去令強盜、又者押二逢候節、脇差を抜手迎いたし候者

獄門

文政五年

一 他領立越、盗人共相機関、寺院江押入、住持を致切害、過分之金銀盗取、又者役筋連出候途中逃去、他領狼狽罷在候者

獄門

再々犯

文政十一年

一 御拂場入込令盜候者

貳ケ年徒罪

同八年

一 令盜、或女遊をもいたし候者

貳ケ年徒罪

文政五年

一 御拂場内入込、数ヶ月日料稼いたし、又者令盜候者

元御場下拂之上

貳ケ年半徒罪

寛政五年

一 徒罪中病氣二付、宿許差返置候処、徒役致難渋、快氣不致由申偽、令盜候者

元安永年鑑第五
卷ケ年被相増

三ケ年徒罪

天保五年

一 於他領令盜、又者博奕いたし候者

三ケ年徒罪

文政七年

一 御領内入込令盜、又者毎度横取をもいたし候者

三ケ年徒罪

同二年

一 旅盗人共相機関、差太之品物盗取、又ハ博奕及再々犯、或女遊をもいたし候者

元御場下拂之上

四ケ年徒罪、旅出留

文化元年

一 御拂場入込盜博奕いたし候者

五ケ年徒罪

同二年

一 盗人留置、鳥目致受用、又者他方立越、存分可致盗と、女房召連立越、令盜候者

附 夫任申勸、同意いたし、他方立越、手段を以夫江盗為致候女房

元御場下
旅出留之上 五ケ年徒罪

文政十二年

一 他方居付候心底二而逃去、於其向々盗女遊いたし候者

一命被相助 五ケ年徒罪

文政七年

一 盗致出奔候末、御領内入込、毎度盗可仕いたし候付、其時々召捕候処、他領之者之形二不実申徹、其蒙御手當、後々為盜御領内入込罷在候者

一命被相助 五ケ年徒罪

同元年

一 御領内於他方、過分之品物令盜、又ハ旅盗人をも相機関罷在、或他方居付候心底二而令出奔候者

元御場下拂
之上、一命被相助

五ケ年徒罪

寛政九年

一 盗出奔いたし候者

一命被相助

五ケ年徒罪、旅出留

同元年

一 徒罪方逃出、於所々令盜、又者揚屋を破、可逃出といいたし候者

一命被相助

五ケ年徒罪

文化元年

一 徒罪中博奕相催候付、居籠置候處、御手當之程相怖、他方居付候心底二而揚屋焼破逃出、御領内相忍、後々立戻候者

一命被相助

七ヶ年徒罪

天保五年

一 徒罪方逃去り令出奔、御領内他方を懸、土蔵を破、盜致候者

生守頭相渡

生害

文政三年

一 徒役令難渋、致出奔候心底二而合徒罪之もの衣類等盜取、逃去候末、於所々盗いたし候者

御番二付一命被相助 七ヶ年徒罪

生守頭相渡

生害

寛政十一年

一 蔵を破、差太之品物令盜候者

生害

同九年

一 毎度徒罪方逃出、盜致出奔候者

生害

寛政元年

一 徒罪方逃出令出奔、御国他方を懸、盗いたし、又者揚屋可逃出と相工候者

生害

天明七年

一 徒罪方逃去、御拂場内相忍致盜、又者合徒罪之者江逃去候通申勸候者

思召二而一命被相助 七ヶ年徒罪

生害

天明五年

一 揚屋焼破り、逃去候末、於所々令盜、殊二見咎候節ハ切捨候心底二而、脇差相帯居、又ハ差火をも可仕相工ミ候者

獄門

同年

一 毎度徒罪方逃去候末、旅盜人相機関、旅人江手疵を為負、令強盜候者

享和元年

一 寺院江押入、住僧を令切害、又者揚屋を破逃去、他方罷越居候者

獄門

文政三年

一 徒罪方逃出、百間御蔵忍入、猩々緋盜取、他領持越賣拂、又者女遊をもいたし候者

獄門

天保四年

一 為盜致差火候付、磔被相懸害之處、萬部被對御執行、一命被相助九郡拂之蒙御手當、差付出奔、令盜候者

獄門

四度

文化十年

一 深掘詰舐子之内、致面替罷越、又者於所々盜謀をもいたし候者

天保二年

一 御拂場入込令盜候者

元旅出留主

五ヶ年徒罪

寛政元年

一 徒罪方逃去致盜、相忍居候者

一命被相助

五ヶ年徒罪

文政元年

一 旅盜人相機関、御拂場入込令盜、又ハ盜品他領江賣拂、或脇方紛失金自身盜取候段、一往不実申出、又者意趣を含、右金弟江相預置候形二難題申懸候者

同十一年

一 盜致謀、又者御拂場入込、相住居罷仕候者

一 命被補助 五ヶ年徒罪

同十二年

一 盜品為賣払、他領立越、又者人より大小賣方被相頼、代金之内取遣候者

一 命被補助 五ヶ年徒罪

天保五年

一 御拂場内入込令盜候者

一 命被補助 五ヶ年徒罪、旅出留

寛政五年

一 徒罪中潜二酒相給、顯然之程相怖、他方立越候心底二而逃去、令盜候者

一 命被補助 五ヶ年徒罪

同七年

一 徒役致難渋、他方立出、盜をも可致と令出奔、後々立戻候者

一 命被補助 七ヶ年徒罪

文化元年

一 徒罪中令博奕、見咎二逢、御手當を相怖、他方居付候心底二而合徒罪之者衣類盜取逃去、後々立戻候者

一 命被補助 七ヶ年徒罪

同三年

一 致盜、捕二逢候處、御手當を致勘弁、出奔可仕存、於途中逃去候者

一 命被補助 七ヶ年徒罪

文政五年

一 合徒罪之者任合機関、徒罪方逃去令出奔、又者於他領致盜、後々立戻候者

一 命被補助 七ヶ年徒罪

文政十三年

一 盜致出奔候付、其御手當を蒙候處、又々他領立越致盜、或御拂場入込、令博奕候者

一 命被補助 七ヶ年徒罪

寛政元年

一 徒罪方逃出、令出奔候末、他方立越候得共、逃課相叶間敷存付、立戻候者

一 命被補助 七ヶ年徒罪

同三年

一 合徒罪之者申合、他方江も立出候心底二而逃去、所々狼狽令盜候者

一 命被補助 七ヶ年徒罪

同四年

一 徒罪中忍出令盜、又者酒食整入、或致出奔候心底二而逃去候者

生害

同

一 徒罪方逃去、令盜候末、他方立越、狼狽居候もの

一 命被補助 七ヶ年徒罪

寛政元年

一 徒罪方逃去致出奔、旅盜人相機関、令盜候もの

一 命被補助 七ヶ年徒罪

同十一年

一 土藏を破、於所々致盜、品物他方持越候者

生害

同

文政三年

一 徒罪方逃去令出奔、旅盜人相機関、於所々土藏を破、差太之品物盜取、又ハ捕等相成候節ハ切害をもいたし候心底二而、平日脇差

生害

相帯居候者

文政五年

一 牢舎中、穢多盗人相機関、他領立越、合盗可致申談、火道具等忍入させ、牢屋を焼破候付、召捕揚屋入置候処、致出奔候心底二而又々逃出、相忍罷在候者

一命被相助
御免二付米害
生害

明和八年

一 揚屋を焼破り逃去、其後又々牢屋を破り懸、相果て候者

於竊難
生害

寛政九年

一 徒罪方逃去令盗、又者為盗忍入候節、捕二逢候、参懸二付、脇差拔放、手向いたし候者

導音
獄門

五度

寛政七年

一 御拂場入込令盗候者

一命被相助
五ヶ年徒罪

文政八年

一 盗不仕課もの

天明六年

一 徒罪中令博奕、又者逃出致盗、後々立戻候者

一命被相助
七郡拂

享和二年

一 盗人相機関、令盗候者

一命被相助
七ヶ年徒罪

文政十年

一 毎度不屈有之、其御手當被仰付候処、又々構不所存、盗可仕いたし候者

一命被相助
七ヶ年徒罪

明和八年

一 御拂場入込令盗候もの

同

一 令盗、又者牢屋を破り、可逃出と仕候者

生害

寛政三年

一 徒罪方逃出令出奔、旅盗人相機関、盗いたし候者

生害

同四年

一 毎度徒罪方逃去、旅盗人相機関、盗いたし候者

生害

文化二年

一 御拂場其外二面令盗、捕二逢候処、御手當を相怖、透を見合逃去、他方居付候心底二て出奔、盗女遊等いたし候者

生害

同九年

一 於所々令盗、又者小刀を以土藏を破、差太之品物致盗候者

一命被相助
御免二付
七ヶ年徒罪
生害

文政五年

一 御拂場内江日料二相部、又者令盗、捕二逢、役筋連出候、途中透を見合、一往逃去候者

生害

同九年

一 御払場入込令盗候者

一命被相助
最台二而
七ヶ年徒罪
生害

天保三年

生害

一 徒罪方逃去、盜令出奔候者

一 命被相助 御事二付
七ヶ年徒罪 牢守頭相渡 生害

六度

寛政七年

一 盜六度、博奕四度および候者

一 命被相助 御事二付
七ヶ年徒罪 生害

文政十年

一 御拂場内、於所々令盜博奕、又ハゆすりをもちたし候者

一 命被相助 御事二付
七ヶ年徒罪 生害

文政九年

一 毎度不屈有之、其御手當被仰付候処、又々構不所存、衣類可盜いたし不仕課者

一 命被相助 御事二付
七ヶ年徒罪 生害

天保五年

一 徒罪方逃去令出奔、又者於他領致盜、御奉行所より御手當を請候者

牢守頭相渡 生害

明和八年

一 旅盜人相機関、於所々令盜、又者牢屋を破可逃出いたし候者

獄門

天明六年

一 徒罪方逃去、旅盜人相機関、令強盜候もの

獄門

同

一 旅人を相欺、御領内連来、令強盜候者

獄門

七度

寛政八年

一 徒罪中病氣二付、宿許差返置候處、令博奕負方二迫り、致盜候者

生害

御裁許書拔 中

一 不孝之者御手當之事

一 捨子いたし候者同断之事

一 出奔いたし候者同断之事

一 喧嘩口論并打擲狼藉等相働候者同断之事

一 無切手二而旅出并所々狼藉居候者同断之事

一 盜人宿、偕又盜物勘通取扱候もの同断之事

一 切手往来質入并不実之切手等申乞候もの同断之事

一 謀書謀判いたし候者同断之事

一 盜其外之難題申懸候者同断之事

一 揺謀横取等いたし候者同断之事

一 不正品取扱、又者無札二而諸商賣或高價之賣方仕候類之者同断之事

一 忍取并押取いたし候者同断之事

一 私欲奸謀手繰手廻等いたし候もの同断之事

一 御領内之者、他邦江賣渡、又者他領之ものを人質等二請取候者同断之事

一 行倒者之衣類剥取、偕又落物等有之候を不訴出類之者同断之事

一 米筥其外贋相拵候者同断之事

一 博奕并賭之勝負相催候者同断之事

不孝者御手等之事

安永四年

一 母并妹を毎度令打擲、一家之住居も不相叶通取計候者

獄門

文政十三年

- 一 母江平日食用等不足ニ相与、時として者不相与義も有之、其外兼々不孝相働候処より、母致自殺候を病死之形ニ取計候者

獄門

- 一 酒給酔、親ニ對し不差立儀を申争候末、酈懸り、法外相働候者

女房 生害

三郡拂

天保四年

- 一 酒給酔、世具類打碎候付、親共取支候処、却而鑿ニ而可突懸いたし候もの

所拂

寛政十年

- 一 銀米押而可致借用と、兄扱又叔父を無躰ニ令打擲候もの

一命被補助

七ヶ年徒罪

- 一 兄之衣類等致押取候ニ付、右兄より打擲に逢候を相憤、下駄を以疵付、又者姉をも致打擲、或揚屋を破逃去候もの

五ヶ年徒罪

捨子いたし候者御手當之事

文政五年

- 一 每度旅船江遊山之相手ニ参り候末、懷胎相成候ニ付、里乳飯米等受用、右を以流産可致と他領之者子を里乳致約束連帰候途中、親共より憤ニ逢候義を致勘弁、右子を往還筋江捨置候女

五郡拂

出奔致候者御手當之事

明和八年

- 一 江戸詰中、女遊之末令出奔、諸家屋敷江致奉公居候者

獄門

明和九年

- 一 他領江数年居付、妻子を持、又者御捕者を逃去候通取計候もの

獄門

明和九年

- 一 久留米領若津参、女遊之末、数年同所江居附、右女を女房にいたし居候もの

獄門

- 一 遍参僧於他邦潜ニ致還俗、居付候心底ニ而醫師之弟子ニ相成、又者右醫之娘と密通をも致候者

於右嫁

獄門

文化七年

- 一 徒罪方逃去、所々狼狽居候内、人之娘と致不義、又者右娘を謀、

他領江遊女ニ賣拂、或捕ニ逢候處、逃去、又々他領立越居□□

(刑罰不懲)

罷在候元盗人

互隠條付ニ付、永年番

獄門

寛政四年

- 一 盗人共相困置、盜器買入代錢致分取、顯然之程相恐、他方居付候心底にて致出奔候元盗人

御覧付、七ヶ年徒罪

生害

文化七年

- 一 旅人より被相雇、潜ニ他方立越候末、借銀出来及難儀、御領内之女を賺出シ遊女奉公為致、又者顯然之程相恐、右女を女房にいたし、遠国居付候心底にて令出奔候者

思召三而七ヶ年徒罪

生害

- 一 於他領遊女之末馴合、夫婦相成、右女生国立越居付、又者長崎月行司手先相成、不正品取扱候者を探り、或手段を以諸人落度掎、

金銀可揺取いたし候もの

文化八年

一 贋米等令遣方、顕然之程相恐、出奔いたし、他方狼狽居候者

万願御立付、本生害 生害

文化十三年

一 潜二他領立越、御停止之陶器致細工候末出奔、居付候了簡相極罷在候者

万願御立付、五ヶ年徒罪、旅出留 生害

文政五年

一 無札二而陶器細工いたし居候末令出奔、右細工方二而他領居付、又者其向二而密通をもいたし候者

御立付、五ヶ年徒罪、旅出留 生害

天明八年

一 人より銀子横取致女遊候末、他領居付候心底二而令出奔、後々立戻候途中二而被召捕候もの

思召三而本生害 生害

寛政八年

一 遍参僧切手満年二付、罷下候途中致女遊、路用遣込令出奔、又者御屋敷立戻、病氣二而相滞候形、不実申達候者

一命被補助 七郡拂

安永八年

一 京都詰中、女遊之末負方二迫、自殺いたし候形二致書置、金銀横取出奔、後々立戻候者

六郡追放

天明五年

一 商賣方二付、数十ヶ年他方居付罷在候すへ、立戻候者

五郡拂、旅出留

天明六年

一 潜二伊勢参宮いたし候末、数十ヶ年日料等二而他邦相忍居、後々立戻候者

五郡拂

天明八年

一 江戸詰中、女遊之末負方二迫、令出奔、数年方々狼狽居、後々立戻候もの

五郡拂、旅出留

寛政十一年

一 旅人江遊山之相手二相成候末、夫婦二相成候契約いたし、他邦居付候心底二而令出奔、後々立戻候女

五郡拂

文政九年

一 兼而悪業相働候付、御捕二逢候趣承付令出奔、又者貯無之、遠国立去候儀不叶二付、手段を構、一類共より鳥目可貪取いたし候もの

一命被補助 五ヶ年徒罪、旅出留

文政十一年

一 江戸詰中令女遊、又者御国可罷下と切手等申受候末、又々致女遊、相手之女申合出奔せしめ、後々探促等無之ため、相果候旨手段之手紙相認、御屋敷内投込置、或者謀をも可仕いたし候者

一命被補助 五ヶ年徒罪、旅出留

天保二年

一 家業相怠り、親より折檻二逢候儀を相厭致出奔、大坂表二おゐて公役人を似、旅宿江賃錢不相拂、又者毎々芝居をも令見物候處より、同所御奉行所より蒙御手當候者

一命被補助 五郡拂、旅出留

天保二年

一 江戸詰中、主人之金子横取、令女遊、御門限相迎候付、御手當之程を相怖出奔、後々立戻候者

四郡拂、旅出留

安永三年

一 江戸詰中、女遊之末、同輩之脇差横取いたし出奔、立戻候もの

三郡拂

寛政五年

一 江戸詰中、女遊之末負方二迫、令出奔、立戻候者

三郡拂、旅出留

同七年

一 江戸詰中、毎度女遊之末、主人之質物借副、又者謀をもいたし令出奔、直ニ御国許立戻候者

三郡拂、旅出留

文化五年

一 江戸詰中、乱心いたし出奔、所々狼狽居候内、正氣付立戻候者

三郡拂、旅出留

文政三年

一 醫道稽古として潜ニ他方立出候末、令女遊、又者居付候了簡ニ而所々被相雇候者

三郡拂、旅出留

文政十一年

一 米蔵管謀取致質入、起方不取叶、御手當を相恐、他方可居付心底にて令出奔、後々立戻候もの

三郡拂、旅出留

天明八年

一 女遊之末、相手女、生国罷帰度任申聞連出、狼狽罷在候者

三ヶ年徒罪

寛政元年

一 博奕及再犯、御手當之程を相恐、宿元立出、致出奔候心底ニ而虚無僧ニ相成、面躰を隠シ、所々狼狽罷在候者

一命被補助 三ヶ年徒罪

寛政七年

一 江戸詰中、女遊之末、相手之女申談令出奔、又者衣類謀取、後々立戻候者

安永三年

三ヶ年徒罪、旅出留

一 潜ニ他領立越、賈米筭買取令遣方、顯然之程相恐出奔、後々立戻候もの

三ヶ年徒罪、旅出留

安永三年

一 江戸詰中、町家ニおゐて酒給酔、御門限相廻、一往出奔、立戻候もの

貳郡拂

文化七年

一 江戸詰中、致女遊負方二迫り、御国元逃帰り候處より出奔、御届相成候もの

貳郡拂、旅出留

文化十一年

一 潜ニ他領立越、致女遊候末夫婦ニ相成、数十ヶ年付飯いたし、一類其外江者商賣方ニ而相滞候形ニ申偽置、後々立戻候もの

貳郡拂、旅出留

文政十三年

一 手代奉公いたし、利潤之目論見引請銀之内、自分ニ致貸方、引合不相叶、空ニ帳面付込、遣出候形ニ執成、又者御手當之程致勘弁令出奔、後々立戻候者

貳郡拂之上、旅出留

寛政五年

一 陶器細工いたし、賃錢過分ニ可令受用と、一往出奔可致と仕候もの

貳ヶ年徒罪、旅出留

同十年

一 江戸詰中女遊いたし、主人之品を質入、或令謀候末、出奔可致と仕候者

貳ヶ年徒罪、旅出留

同十年

一 博奕勝銭二相手之衣類其外無鉢二押取、又者御手當を相怖出奔せしめ、立戻候もの

式ケ年徒罪

享和二年

一 盗品勘通質入いたし候末、御手當之程相恐令出奔、後々立戻候者

式ケ年半徒罪、旅出留

文政九年

一 江戸詰中令女遊、右負方二迫り、致横取候末出奔、後々立戻候途中、公儀より御捕二相成候者

式ケ年徒罪

文政十一年

一 江戸詰中毎度令女遊、又者盗品勘通取遣、或人より任相機関、令出奔、後々立戻候もの

二ケ年徒罪、旅出留

天保四年

一 悪業之聞有之、捕二相成候趣承付令出奔、他領ニおゐて女遊、又者色々仕懸を以博奕相催、過分之金銀勝取、或博奕望性用不正品受取賣払、後々御領内相忍罷在候もの

式ケ年徒罪

文化九年

一 手男江戸詰中負方二迫り、外使之形ニ申偽、御屋鋪立出候末、御国元逃帰候處より、出奔御届相成候者

佐嘉郡拂、旅出留

文政三年

一 江戸詰中、画道稽古之末、借銀出来、催促ニ逢、使向より潜ニ立去、御国罷帰、出奔手数二相成候者

佐嘉郡拂、旅出留

寛政十一年

一 鳥目負方二迫り令出奔、久留米領罷越居、追々立戻候もの

居郡并御城下一里四方拂、旅出留

文政二年

一 江戸詰中、親大病差出候趣承り、使向より立去、宿元罷帰、出奔手数二相成候者

居郡拂、旅出留

文政三年

一 他邦神社参詣として潜ニ御国立出、出奔手数二相成候者

居郡拂、旅出留

天保四年

一 人より大小賣捌被相頼、代銀及不埒候付、役筋居籠置候處、忍出候末、夜明忍入不相叶、御手當を致勘弁令出奔、後々立戻候者

文化七年

一 於庄屋勤中、引負米出来、償方不相叶、宿元立出、所々狼狽罷在候處より、欠落手数相成候者

居郷拂

天保六年

一 奉公中身代銀令不埒、又者主人江無釣合、潜に立出、数十日不罷帰処より、出奔手数二相成候もの

居郷払

安永二年

一 遍参僧切手年限相満、罷帰候途中相煩、数年他方相滞候者

塾居

文化十一年

一 遍参僧他邦罷越居候末、行衛不相知ニ付、出奔手数二相成、尤其御逆^(御逆)□強乱心いたし、前後不相覚由ニ付

逼塞

喧嘩口論并打擲狼藉等相働候者手當之事

寛政七年

- 一 長崎御番所詰内忍出、令女遊、又者酒給酔、他領之者と及口論
鬪合、刀をも被奪取候足輕

附 致荷擔 無法二相手を致打擲候者

壹ケ年半徒罪

寛政八年

- 一 潜二他領江立越候末、連之者酒給酔、及口論候處、相手拔躬を持
切付候を見懸、其場を逃候もの

八拾敲

附 供々忍出、酒食せしめ、殊同座之者致女遊候儀、其儘罷在、或及口論
刀をも被奪取候節、取支不行届足輕

生害

七郡追放

寛政元年

- 一 旅人と口論之末、夜中棒其外相携、仕懸参り、法外を相働候者

三郡払

附り、途中より供々相付参候者

式郡払

文政五年

- 一 穢多と及口論、不法之取計二逢候を相憤、後々為打返仕懸参り候

處、相手之穢多不罷在、遺恨不相晴由二而家居一□打崩、家財

(横カ)

等焼捶、然処より穢多共家居或致焼失候付

三郡拂

附 致荷擔 供々仕懸参候女房并甥

御呵逼塞

享和元年

- 一 借銀筋二付、及口論、打擲二逢候儀を意趣二含、兄其外数人相機

関、仕懸参、相手を無躰二令打擲、又者調子之節不実申候者

式郡払

附 致荷擔 向方仕懸参、無躰令打擲候もの共

居郡并御城下払

享和三年

- 一 鳥目致横取候末、取詰二逢候儀を憤、相手倍又差留候者を無躰致
打擲候者

附 致荷擔 無法二相手を致打擲候者

寛政八年

- 一 潜二他領江立越候末、連之者酒給酔、及口論候處、相手拔躬を持
切付候を見懸、其場を逃候もの

居郡并御城下払之上旅出留

享和三年

- 一 役筋之手締を不相守、役之者より取調子候處、却而申匄候付、打
擲二逢候儀を残念二存、役宅江仕懸参、無法之及取合、又者御手
當を勘弁いたし、形能書付相認、筋々申達候者

附 致荷擔 供々役宅江仕懸参候者

居郡并御城下払

文化三年

御停止之狂言相催、役之者より差押二逢、幕其外取揚候を意趣二
相合、役之者大小等奪取相働候もの

寛政五年

博奕及再々犯、又者不差立儀二而口論之末、相有候者法外之及取
合候者

居郡拂

寛政五年

博奕及再々犯、又者不差立儀二而口論之末、相有候者法外之及取
合候者

寛政二年

潜二他領立越、薪山買取、致代方候處、向方之者より無謂打擲二
逢候末、為打返仕懸参、不法相働候者

壹ケ年半徒罪

安永四年

銀米取引之末及口論、数人申合、相手を無躰二及打擲候もの

居郡拂、旅出留

寛政二年

銀米取引之末及口論、数人申合、相手を無躰二及打擲候もの

居郷払

(113)

一下人之口論ニ致荷擔、棒爲口相携、帶刀をもいたし仕懸參、相手
二而も無之者を無牀ニ令打擲候もの

居郷払

享和元年

一 不差立儀ニ而及口論、相手を致打擲候故、打返ニ逢候を意恨ニ存、
仕懸參候処より手疵を受候者

居郷拂

文化三年

一 給人江家居賣渡候末、代銀不相渡ニ付、右家居無牀ニ可解取いた
し候もの

居郷拂

文化六年

一 他人口論之場參懸致荷擔、無牀ニ相手を令打擲、又者爲斷、酒爲
相整可申と、法外之取計をもいたし候もの

居郷払

享和元年

一 下女不差立誤を稱敷相呵、女房二者打擲をもいたし候処より、右
下女致溺死候通行候哉も不分明ニ付、

夫与役引取

女房 居村拂

文化五年

一 他領江之居爲見物立越、向方之者と口論之末、打擲ニ逢、其後爲
打返仕懸參、可及刃傷いたし候処より差押ニ逢候もの

居町拂 旅出留

無切手ニ而旅出并所々狼狽居候者御手當之事

天明八年

一 難儀迫り、潜ニ他領立越焼物致細工候者

三郡拂 旅出留

寛政元年

一 他領立越、陶器細工いたし居候者

二ヶ年徒罪

寛政八年

一 商賣として数十ヶ月他方立出居処より、欠落之手数ニ相成候者
居郡并御城下払

文化十四年

一 数年潜ニ他領參、日料稼いたし候者

居郡拂 旅出留

寛政元年

一 商賣方ニ付、多年他方勝ニ罷在候者

壹ヶ年徒罪、旅出留

同九年

一 爲袖乞、潜ニ他方立出候末、同行之者致病死、死牀引渡相成候節、
名許申偽罷在之僞

居郷拂 旅出留

文化十三年

一 陶器細工之ため、潜ニ他領立越候得共、致事無之、直ニ罷歸候者
百五十日徒罪、旅出留

文政五年

一 旅人より任申聞、他方立越、陶器致細工、又者究之節致出奔候ニ而、
一往不実申出候者

百五十日徒罪、旅出留

文化九年

一 石工爲細工、潜ニ他領立越、又者女遊をもいたし候もの

閉戸

同十年

一 商賣方ニ付潜ニ他方立越、又ハ一件人より穿鑿ニ逢、爲手入米筈
差遣候者

逼塞

同五年

一 為商賣、潜二他領立越候者

一 御用ニ付他方罷越候節、切手請取候儀失念いたし候者

呵 呵

盜人宿借又盜物勘通取扱候二而御手當之事

寛政九年

一 強盜共自宅其外江相囲置、盜品致分取候もの

生害

文政元年

一 盜人留置、盜品質入代錢貪取候元再犯盜人

四ヶ年徒罪

文化九年

一 旅盜人共数日留置、盜品可致分取と相工ミ、又者任相頼、盜道具拵立遣、盜品之内受用罷在ニ元盜人

三ヶ年徒罪

文政三年

一 盜博奕宿屋いたし候付、蒙其御手當候處、又者盜品と申儀乍承、賣捌代錢分取、或博奕再犯ニおよひ候もの

三ヶ年徒罪

文政元年

一 元盜人御拂場内江数年相住居、又ハ盜人留置、盜品分取、博奕宿屋をもいたし候もの

貳ヶ年半徒罪

文政二年

一 旅盜人任相談、盜人宿いたし、又者旅盜品令分取候もの

貳ヶ年徒罪

同七年

一 他領之者を役之者共江御領内之者形ニ申欺、数ヶ月相雇置、又者旅盜人をも留置、盜人致宿、盜品質入令受用候者

貳ヶ年徒罪

文政十二年

一 旅盜人留置、相雇置候女と為致遊山、又者盜人宿いたし、盜品取扱代錢令分取、或盜場所手引いたし候もの

貳ヶ年徒罪

天明五年

一 不行跡之者と乍存、任相歎^通偏參之身分ニ而背法式、或潜ニ為致剃髮、又ハ盜人留置、盜品致分取僧

壹ヶ年半徒罪

寛政六年

一 旅盜人とも潜ニ留置、盜品分取、又ハ博奕致宿屋候者

壹ヶ年半徒罪

文政二年

一 旅盜人共留置、遊山為致、酒食代ニ盜品之儀致勘通、令受用候之者

壹ヶ年徒罪

文化九年

一 盜いたし候者手男之形ニ取成、一宿任相談請合、又ハ彼之者主人を殺候風聞承候後、參候而も不達出、其儘罷在在候もの

佐嘉郡松

文化十四年

一 盜品之儀勘通致質入、代錢之内受用罷在候僧

佐嘉郡松

文政元年

一 盜品と申儀乍氣付、鐐口買取候職人

佐嘉郡松

天保五年

- 一 潜二公料立越令博奕、又ハ盗人宿屋いたし、盗品分取、或博奕一座之者、捕二逢候付、逃去候通取計候もの
百敲之上、過料、旅出留
享和元年
一 盗品と申儀勘通、毎度過分之品物質入、鳥目受用いたし候者
百敲
寛政十一年
一 博奕勝負之末、盗品と申儀乍致勘通、勝銭之代ニ受取候者
八十敲之上、過料
文政六年
一 博奕宿屋いたし、又者盗品勘通質入、鳥目令受用候もの
八十敲之上、過料
文政三年
一 盗人宿いたし、又者盗品質入、代銭令受用候もの
八十敲
天保六年
一 旅盗人留置、盗品令受用候者
八十敲
寛政八年
一 盗人と乍氣付、任相頼奉公致口入、請人ニ相立、鳥目令受用候者
居郷并御城下一里四方拂
文政三年
一 盗人留置、盗米等之内受用、又者娘を遊山之相手ニ差出候女
御城下一里四方拂
同
一 盗人と申儀乍氣付、数日留置、娘を遊山之相手ニ差出、謝礼令受用候女
御城下一里四方拂
文政八年
一 盗品と申儀致勘通買取、又者博奕宿屋をもいたし候者
五郡拂、旅出留
- 天保三年
一 盗人より任相機関、可致分取と、盗品宿許持運候者
居郷拂
同五年
一 盗人数日留置、盗金銀と申儀致勘通、貪取候者
五十敲
同二年
一 旅人より盗品之儀申明、渡候衣類其外致受用候女
五十敲
同五年
一 盗品と申儀申明、質入任相頼取扱、又ハ代金之内引留取遣候女
所拂
同五年
一 盗品と申儀申明、質入任相頼取扱、又ハ代金之内引留取遣候女
居町拂
- 切手往来質入并不実之切手等申迄候者御手當之事
天明五年
一 往来札を他邦江毎度致質入、又者ゆすりをも仕候もの
七郡拂
同年
一 主人乞込之往来札、同輩江相渡候末、他邦江致質入候段、申明二逢、様々不埒之取計仕、主人江難題相懸候もの
六郡拂
安永三年
一 旅人江返済銀償方不相叶、切手を他領江質入いたし候もの
五郡拂
寛政元年
一 往来札為質入、潜二他邦立越候末、令遊山、右負方ニ迫り、右往来札引當ニ相渡、請方不相叶、他方相忍罷在候者
五郡拂、旅出留

同九年

一 贖往来札を他領江質入いたし、又ハ国手形差出候もの

四郡拂

天明五年

一 兄より任申聞、謀害謀判を以、往来札を受候弟

三郡拂

寛政元年

一 往来札質入被相頼、潜ニ他領立越候末、致女遊、負方出来、右往來札を引當差出候もの

三郡拂、旅出留

同年

一 往来札精直シ被相頼、其内消方墨薄有之候を致細工、贖相掖、質入可致と相工候もの

三郡拂

同九年

一 人より被相頼、贖往来札を毎度潜ニ他領持越致質入、又ハ謀害謀判之別手形相整、向方相渡候者

三郡拂、旅出留

天明七年

一 往来札他領江質入之取次いたし候もの

貳郡拂

文化元年

一 贖往来札を他方江質入被相頼請合、右銀子之内借受候者

貳郡拂、旅出留

同十二年

一 他方ニおめて令女遊候末、女房ニいたし、不実切手申請、数年他方江致付飯、後々右女離縁、罷帰候もの

貳郡拂、旅出留

寛政七年

一 江戸詰中、毎々致女遊候付、暇を得、罷下候途中、切手盗ニ逢候

者

天明五年

一 主人任申付、往来札を他領江質入ニ持参候もの

佐嘉郡払
居郡拂

文化十一年

一 不実之切手申乞、潜ニ陶器為商賣、他邦立越候もの

居郷払
旅出留

天明五年

一 筋違往来札乞受候末、他人江相預置候処より、質入いたし候通成行候者

所拂

謀害謀判いたし候もの御手當之事

安永八年

一 村方筈入米、自分用取遣、筈主より之請取、謀害謀判いたし候もの

五郡拂

天明七年

一 似請取ニ而他之飯米筈請取、又者賣渡手形謀判いたし候者

三郡払

寛政元年

一 潜ニ他領立越致手代奉公、謀判を以銀子借請、返済不相叶、所持之糶切符引當差出候もの

三郡払

同四年

一 仲ヶ間と切米之内、謀害謀判を以證文相掖、数年借銀引當差出、返済不不埒いたし候者

同十年

一 借銀口入候末、令借副、又者證文致謀書 返済不埒候もの

三郡払

三郡拂
附り、任申談同意いたし、謀書相認、又ハ他之名前ニ印形突整、
右金子之内借請候もの

享和二年

一 謀書謀判之手形相拵、銀子借受令分取、又ハ女遊横取をもいたし
候もの

貳郡拂

寛政三年

一 米筭拝借願請候末、引替所之儀、他之名前謀書謀判いたし候もの

三郡拂

享和二年

一 謀書謀判之手形相拵、銀子謀取候者

二郡払

文政十年

一 潜ニ他領立越、鳥目借請、居村庄屋奥印とふ謀書謀判之證文を以、
持懸之田地引當差出候末、返済及不埒候処より、相手被 公訴、
御姦數相成候もの

二郡拂

安永五年

一 一類御拂者居付手形、謀書謀判を以、役筋差出候もの

二郡拂

天明六年

一 銀子取引筋二付、相調候半、内済願書謀書謀判を以筋々差出候一
類

佐嘉郡払

居郡払
附り、願書相認呉、又ハ謀判と申儀乍氣付、主人江者程能申偽、取次差出

候もの

寛政五年

一 問屋を内分ニ而讓請候末、又々一類江可相讓と、謀書謀判之書付、
差出候もの

貳郡拂

明和八年

一 宗門人改之節、出入手形謀書謀判いたし候もの

居郡并御城下一里四方拂

享和三年

一 懸り内之者、陶器釜焼相願呉候様申聞候末、自余釜焼共江も不調
合支無之趣不実之願書相認、願主之名前謀書謀判いたし、書付差
出候庄屋

居郷拂

寛政六年

一 上納相滞、役筋より鎌留申付置候処、謀書謀判を以、自分取納相
願候僧

居郷拂

安永四年

一 庄屋人物見立願、謀書謀判いたし候者

居郷拂

享和三年

一 盗人より任相談、謀書謀判之請状を彼者奉公向持参、又ハ一類之
形申偽、受人相立候者

所拂

文化六年

一 米買取代銀償方不相叶、一類持来之田地を謀書謀判を以引當、差
出候もの

居村拂

天保四年

所拂

一 一類之者致出奔候末、隣国探促受合、雜用金受取、切手等申請、自身二而ハ不罷越、向々より之手印謀書いたし、役筋相納候もの

居町拂

天保五年

一 米賣渡一札二、他人之名前謀害謀判いたし、又ハ銀為請取、潜二他領罷越候もの

所拂

安永四年

一 法兄於他邦致病死候付、切手持下候節、引導手形等、謀書謀判を以役筋相納候僧

御建寺住職不仕様 蟄居之上、旅出留

盜其外之難題申懸候者御手當之事

天保六年

一 一類之者於途中切害二逢、相子不相知候處、格相柄之者江右切害之不実相懸、荒打之儀申逢候者

三郡拂

附り、本文二付、一類之者ともより様々任申聞、不見留義を推量之儘、荒打二申違候者

居郷払

安永四年

一 他人紛失之品、探促方被相頼、心當有之趣取成、鳥目謀取、又ハ数人盜之難題申懸候もの

二郡拂

文化十年

一 格相柄之者江廣空之難題申掛候者

居郷并御城下一里四方拂

寛政五年

一 人江無形差火之難題申懸、究之節も不実可申徹いたし候者

文政十二年

居郷払

一 盜之不審を受候處、盜いたし且盜金親江相預置候二旨不實申出候處より、親二も相札候通成行候者

居郷拂

文化十二年

一 酒給酔、人江不義之不審申懸、差詰二逢候を遺恨二存、相手を盜人之形二不實申達候もの

百敲

寛政七年

一 所持之大小盜二逢、其場参合之者江不審相懸、不慥儀申扱候者

閉戸

天明六年

一 差火之不審を請、稠敷拷問二逢、一應不実申出候もの

呵逼塞

揺謨横取等いたし候者御手當之事

享和七年

一 遍参僧於他方、寺内之什物等謀取、令質入、法罰二逢候を意趣に含、法類之者行状不宜趣、御奉行所江不實之儀訴出候末、蒙御手當候僧

永牢舎

寛政元年

一 博奕取引之筋相携、目明共穿鑿いたし候候形二申懸、鳥目ゆすり取、又ハ御用懸之節、面替いたし、究筋相済候もの

三ヶ年徒罪

天明八年

一 謀いたし蒙御手當候處、又ハ商賣方合携、旅人之反物謀取之僧脱衣、三郡追放

寛政元年

一 御領内之者、於他領遊山いたし候を差押、役之者名目を借り、揺いたし、又ハ自身も致遊山候者

三郡拂 旅出留

享和元年

一 手代致奉公、脇々より取立候銀子横取令女遊、又ハ右横取錢償方不相叶、強盜ニ逢候形ニ相偽候者

貳ケ年半徒罪

寛政九年

一 揺之為他領罷越候末、相手より打擲ニ逢候儀を意趣ニ存、為打返通数人相機関、仕懸參候処、相手不罷在ニ付、人違ニ打擲いたし候もの

二ケ年徒罪、旅出留

寛政八年

一 借銀引當差出置候田地を、空ニ可取戻相工ミ、相手之旧惡申立、数人相機関、ゆすりいたし候者

二郡拂

享和三年

一 商賣方ニ付、他領之者より米筭請取、賈相交居候由、事姦數申募、相手を無法ニ令打擲、過分之鳥目ゆすり取候もの

貳ケ年徒罪

文化七年

一 御領内之者、他領ニ而被擲殺候末、病死之形ニ而送來候趣承付、右を取柄ニ数人相機関、彼地立越、鳥目ゆすり取候者

貳ケ年徒罪、旅出留

文化八年

一 毎々致揺、顕然之程相恐、他方居付候心底にて、御領内所々狼狽罷在候者

貳ケ年徒罪

文政十三年

一 手段を以勸化講致付方、銀子揺取、又者糺明之節不実申出、或博奕打をも相催候もの

貳ケ年徒罪

寛政四年

一 御拂者相機関、致謀候僧

貳郡拂

寛政八年

一 給庄屋田居付之砌、謀を以貸付米申請取懸、又ハ百姓より相納候米代銀令横取候者

壹ケ年半徒罪

文化元年

一 無札ニ而商売いたし候者を見咎、役人之形ニ取成、大小等相帯、鳥目ゆすり取候もの

壹ケ年半徒罪

享和二年

一 庄屋相勤、他借を以蔵究相済候末、百姓中より未進米取立、自分用取遣、又者空米致賣方、代錢謀取候もの

居郡払

文政四年

一 警固之形取成、人江無形儀申懸、令酒食、又者手入之鳥目差出候通、手段を講候もの

佐嘉郡払

天明八年

一 一人より衣類受取、質入いたし候社人

佐嘉郡払

文政三年

一 令博奕候末、一類被相預置候内、横取いたし候もの
百敵之上、御城下一里四方拂

寛政九年

一 御拂者、村方狂言相催候儀承付、役之者より聞合候形ニ取成、鳥

目揺取候もの

元所払之上、八十敵

同十一年

一 於所々令揺、又者潜二他方立越候者

百敵、旅出留

同十二年

一 於途中旅人江出會、鳥目ゆすり可取相工ミ、盗人之由申掛、無躰
二 打擲せしめ候者

百敵

天保六年

一 人より賈銀致遣方候儀申明二逢候末、金子ゆすり取、又者毎々博
奕座親をもいたし候もの

百敵之上、過料

寛政十一年

一 旅人と博奕令勝負候末、鳥目ゆすり取ルべく相工、及口論候處、
打擲二逢候儀を相憤、切害をもいたし候心底二而脇差相帶仕懸參、
及乱妨候者

八十敵之上、過料

文政七年

一 居簞置候者を申劬、人より鳥目ゆすり為取、右之内可貪取いたし
候警固

居郷井御城下一里四方拂

享和貳年

一 致下作居候田地を、自身田地之形ニ申偽、賣渡候者

居郷払

文化三年

一 作馬謀取、又者他領より馬買入代銀致不埒候もの

居郷払

文政三年

一 盗伐いたし候を取柄ニ鳥目ゆすり取、又者顯然之程相怖、纔之木

枝伐り取候不実申達候山留

足輕者 組拂

寛政八年

一 歌かるた取扱候を見及、右を取柄ニ鳥目ゆすり可取目論見、役之
者之形ニ取成、事姦敷申募候もの

居町払

天保三年

一 人江賈文相頼、衣類謀取候女

所払

寛政九年

一 所持之米筭致紛失候由にて、一座之者江無形儀を申懸、鳥目ゆす
り可取いたし候もの

五十敵

文化三年

一 元盗人悪業相働、一類共より依頼、揚屋入置候内、盗人共申談、
鳥目ゆすり取候者

五十敵之上、打追揚屋

文政七年

一 博奕相催候を役人之形ニ取成差咎、落置候錢其外貪取、又ハ博奕
をもいたし候もの

五十敵之上、過料

文政三年

一 主人入用之形ニ取成、米筭謀取、又者脇差忍出候もの

五十敵

文政二年

一 鳥目ゆすり取候もの

五十敵

文政元年

一 謀取令質入、尤穿鑿二逢、二元品差返候もの

五十敵

同年

一 横取又者謀をもいたし候者

文政三年

一 横取いたし、他方立越候もの

享和三年

一 人より鳥目受取、令横取候者

文化三年

一 評定所居籠置候者より任相頼、致揺候儀を乍氣付、手紙持届謝礼令受用候もの

文化九年

一 博奕宿屋いたし候義承付、右を取柄二鳥目ゆすり取候もの

不正品取扱、又者無札二而諸商賣或高價之賣方仕候類之者御手當之事

天明六年

一 不正品取扱、長崎御奉行所より御国御構之豪御手當候もの

寛政元年

一 他人江問屋職指免候を相謀、自身令横領、又者願主より致出訴候節、役々江賄賂を以取入候もの

享和三年

一 商賣品代二、他領之者より廣東人參請取取扱、長崎御奉行所役之者より取調子達候末、彼者共手向二相成、拔荷類差押候ため潜二

五十敲

五十敲

三十敲

三十敲

三十敲

他方立出候もの

文化三年

一 長崎御奉行所役下之者手先二相成、拔荷其外穿鑿之筋相携、潜二他領立越、聞合等いたし、鳥目等いたし鳥目令受用候者

寛政四年

一 御拂者、人より任相頼、徳用を目論見、廣東人參手違取扱候者

享和二年

一 給人之屋鋪内相住居、無札にて饅飩觸賣いたし、又者酒取寄置、出入之者其外江酒食差出、謝礼令受用候者

寛政四年

一 他領之者拔荷積廻候節、任相頼、賃錢を目論見、舸子二被相雇候もの

享和三年

一 他領之者より潜二繪葉買取、代銀令不埒、又者一類繪葉座之者名前謀書謀判いたし候もの

文化五年

一 無調法有之、問屋株取揚達候處、打追相勤居候形二取成、旅人を潜二留置、令商賣候者

天保六年

一 潜二他領立越、無手数之鯨令商賣、下見之者より被差押、見遁具候様手入之金子差遣、又者右下見より其筋達出候を相憤、後々事姦敷申立、無鉢二打擲せしめ候もの

式郡松

式郡拂 旅出留

元御城下一里四方拂之上 居郡拂

佐嘉郡拂

居郷拂

居郷拂 旅出留

居郷拂

居郷松

一 問屋相果候を筋々不申達、其者之名前にて数年商賣為致候所役

所拂

文化七年

一 不正之藥種賣買いたし、蒙御手當候処、又々令賣買、公儀より蒙御手當、御姦敷相成候者

居町払

文政十年

一 大坂上米と申儀乍氣付、利潤を目論見、毎度買取、又者右米旅舩江潜二賣拂候もの

所拂

忍取并押取いたし候者御手當之事

文化七年

一 御拂者と申儀差隠、従者奉公いたし、他方立越女遊、横取せしめ候末、主人より相渡置候脇差忍取、御国許逃帰候者

四ヶ年徒罪、旅出留

文政五年

一 大坂上米船心遣として致上乘、船中飯米其外用御米忍取、令手繰候者

三郡拂、旅出留

文化五年

一 人より任申談令同意、御藏之鉛玉等忍取、賣拂代錢令私欲候手男

貳郡拂

文化六年

一 米藏菅郷替被相頼、自分用賣拂、右償方不相叶、手繰のため反米筈忍取候手男

佐嘉郡拂

同七年

一 酒給合候末、代錢手支、通懸之者を無牀二致打擲、衣類剥取、質

入代錢分取せしめ候もの

百敲之上、居村拂

文政十二年

一 師匠之金子忍取、又ハ賭之致勝負、或右忍取候儀、他人之所業之形二不実申出候僧

居郷拂

寛政九年

一 江戸詰中遊所參、負方二迫り、主人之道真忍出、致質入候もの

八十敲之上、旅出留

同十一年

一 下人江致差圖、荒籠石忍取らせ候者

居村拂

附り、任差圖忍取候者

逼塞

文化十年

一 役内置物之器物忍取、又者外之品をも可忍取と、同郡之者申談候処、彼者より差留候二付、存留候手男

御城一里四方拂

同十二年

一 伯父所持之米忍取、他領持越賣拂、又者意趣を食、難題申懸候者

五十敲、旅出留

同十一年

一 奉公中衣類忍取、又者横取質入せしめ候者

五十敲

一 輕品忍取、又者無形難題申懸候者

五十敲

文化七年

一 主人より相渡置候大小、忍取候もの

所拂

同九年

一 衣類忍取、其場差押逢、不仕課もの

三拾敵

同八年

一 輕品忍取候者

三拾敵

文化五年

一 一類之者所持之衣類忍取、尤追々差返候心底罷在候もの

閉戸

同九年

一 主人より兼而相渡置候脇差忍取、尤不宜儀存留、後々差返候者

閉戸

同年

一 手代奉公中、盜人より任申勸、店方之反物忍取候もの

御呵逼塞之上、向後御城下筋奉公不仕様

文化六年

一 一人之家二而聊之品忍取候者

呵、逼塞

同八年

一 奉公中聊之品忍取、又者取調子二逢候節、他人所業之形不實申懸

候下女

呵、逼塞

同十三年

一 奉公中衣類等忍取候末、内済せしめ候もの

呵、逼塞

私欲奸謀手繰手摺等いたし候者御手當之事

明和八年

一 御祝付而盲人共江被下候銀子之内令私欲、又者指出人数をも相増
掠 御上候座本

御祝三付七郡拂 生害

明和八年

一 御用物、手段を以斤目重ク相成シ、駄賃私欲可仕と相工候者

御祝三付七郡拂 生害

天明六年

一 私領庄屋奸曲之筋有之、百姓中より訴出候處、賄賂を以役々江取入、却而不実之罪二落入候通取計候者

一 命被補助

八郡追放

同年

一 役内銀可令私欲と任申談同意、謀書謀判いたし、手段を以毎度私欲せしめ候もの

八郡拂

明和九年

一 村々より指出候夫丸、賃銀二而受合、様々手摺を以、過分之鳥目私欲せしめ候者

七郡追放

安永二年

一 検見之節、人之田坪と畝替いたし、間米私欲せしめ、又者貫物自分取遣候者

五郡払

附り、同意いたし候村役共

五郡払

安永六年

一 一人より被相勸、御藏米取出、令手繰候手男

五郡拂

天明八年

一 別當町内之地料銀、手繰せしめ候別當

三郡拂

寛政五年

一 博奕負方二迫り、手摺を以、俵錢私欲せしめ候俵役

三郡払

寛政十年

一 □□^{ヤツレ} 拝借米筭納方被相頼候を手繰せしめ、不足之儘封包いたし、皆納之姿ニ而役筋相納候者

式ヶ年徒罪

寛政元年

一 御蔵新建受合、所徳を目論見積り、前之工手間を減シ、又者受負為致、手拔之取計仕候義も不相心得者

式郡拂

同十年

一 御用銀才領いたし、路用手支手繰せしめ、又ハ女遊いたし候者

式郡拂

附り、合才領之者、本条之次第不相心得二付

御呵逼塞之上、向後飛脚才領とふ不仕様

寛政十年

一 手代致奉公、自在在付用ニ、過分之鳥目手繰せしめ候者

八郡拂

享和二年

一 人より役筋江之納銀受取、米筭石数文字書古シテ、其外手繰を以毎度令私欲候者

式郡払

文政元年

一 拝借之米筭納方之節、不足之儘封包相拵、手繰を以納方相整、又者他方ニ而女遊をもいたし候もの

式郡拂

文政元年

一 廻子賃金渡方之内、自分用取遣候小頭

式郡拂

天保五年

一 深堀廻米積方請合、手繰を以、下直之餅米差交、濱出シいたし、間銀私欲可仕いたし候もの

寛政九年

式郡拂

一 旅人脇道抜通り候を指押、品物取揚賣拂私欲せしめ、又者顯然之程相恐、右品買戻、員数を細メ役筋申達候儀役

居郡并御城下払

天明六年

一 検見之節、他之名を借、致段替、落米貪とり候者

居郡拂

御領内之者を他邦江賣渡、又者他領之者を人質等ニ受取候もの
御手當之事

安永四年

一 娘を他領江賣渡候者

思召三而七郡拂 生害

文政三年

一 人之娘を相欺、他領江遊女ニ賣拂、又者連參候途中、相威候ため脇差抜はなし、或打擲をもいたし候元盗人

三ヶ年徒罪

附り、致同意、供々連越、賣拂候迄ニ而、代銀之受用不仕者

式ヶ年半徒罪

被相謀他領江遊女奉公いたし候者

御叱之上、旅出留

文化十四年

一 他方之者江錢貸渡、引當として娘を受取置、役之者より取調子候節、御領内之者之形ニ申偽、数ヶ年下女ニ召使候者

居郡拂

天保四年

一 人江金子借渡置候末、旅女連參、右返済筋差當引渡候處、何方江奉公いたさせ、身代銀可請取相目論見、自宅連帰、相忍せ候者

御城下拂

行倒者之衣類剥取、偕又落者等有之候を不訴出類之もの御手當之事

明和七年

一 兄行倒相果居候を衣類剥取候もの

寛政五年

一 参懸之者急病ニ而相果候處、迷惑可相成、途中荷遣、行倒之形ニ取計、或博奕宿屋いたし候者

同六年

一 通然り之病人を他村境江連越、捨置候もの

享和三年

一 三徳買取候處、米蔵筈證文有之候を、潜ニ銀調引當ニ可差出仕候者

文化七年

一 通懸之者落置候品を自分用ニ可仕と差隠置、毎々相尋候而も不実申偽候者

米筈其外贋相拵候者御手當之事

文化十一年

一 前方贋米筈澆立候ニ付、其御手當被 付候處、又々他領立越、贋米筈紙澆立、又者出奔をもいたし候者

御懸形セキ
生害

寛政二年

一 脱衣追放之僧、銀調達之筋ニ携、御建寺之御佛供米借請候末、空ニ石数を太メ致賣方、代銀令分取候者

附り、任相欺、御佛供米賣渡之手形ニ致印形、又者空ニ石数相太メ候を、其俵いたし置、賣拂代錢之内取替罷在候僧

五郡追放、脱衣、旅
出陣之上四郡被相増

寛政元年

一 贋米筈相拵候ニ付蒙御手當候處、又者贋米筈相拵、又ハ脇差を帶、醫師山伏之形ニ而所々狼狽罷在候僧

附り、申談ニ逢、贋米筈致遣方候僧

脱衣、七郡拵

天明八年

一 潜ニ他邦立越、判形等相頼、贋米筈拵立遣方せしめ、又者横取をもいたし候もの

三郡拵

寛政七年

一 毎度贋米筈相拵令遣方、又者博奕再犯ニおよび、或意趣を合、給人江博奕難題申懸候もの

七郡拵、旅出留

天明五年

一 他領之者江板行彫立相頼、贋米筈拵立、又者横取をも致候者

四ヶ年徒罪

文化十一年

一 板木等彫立、潜ニ大村領持越、彼地之者へ紙澆立させ、贋米筈相拵致遣方候者

四ヶ年徒罪、旅出留

文化十二年

一 他方之者拵立候贋米筈買取り令遣方、又者押取謀をも致し、或潜

二他方立越、相忍罷在候者

三ヶ年半徒罪

寛政九年

一 潜二他領立越、銀調達申談候末、向方之者より任申勸、他領之者相機関、贋米筥相拵遣方せしめ候者

六郡拂、旅出留

寛政元年

一 数人申談、板木其外相拵、贋米筥造立、遣方せしめ候者

五郡拂

附り、贋米筥と申儀乍氣付、請取遣方仕候者

式郡払

寛政四年

一 贋米筥相拵、遣方せしめ候者

五郡払

同五年

一 潜二他領立越紙買入、贋米筥相拵遣方せしめ候者

五郡払

同六年

一 贋米筥相拵遣方せしめ、又ハ博奕をもいたし候者

五郡払

同十年

一 商賣方ニ付無形義を申扱、鳥目謀取、又者米筥贋相拵候者

五郡払

天明五年

一 贋米筥相拵、遣方せしめ候者

三ヶ年徒罪

享和元年

一 他領之者江相頼、過分之贋米筥相拵、遣方いたし候者

三ヶ年徒罪

文化四年

一 所持之馬札他領江致質入候末、贋米筥買取、受方用相渡候者

三ヶ年徒罪

文化九年

一 他領立越、米筥贋紙漉立候末、捕二逢、領境より追放相成候者

三ヶ年徒罪、旅出留

文化七年

一 役々之判形等他領之者江相頼、米藏筥贋相拵、質入せしめ候者

四郡拂

文化九年

一 御藏部手男、他江渡方相成候御米、自分用ニ取遣、右為塞方、御印藏判突、致横取、又者贋筥をも相拵候者

四郡拂

文化十二年

一 商賣方ニ付潜二他領立越、致女遊候末、難義に迫り御印藏判突、贋相拵質入せしめ、又者謀書謀判をもいたし候者

四郡拂、旅出留

享和二年

一 每度潜二他領立越、贋米筥買取り遣方いたし候者

式ヶ年半徒罪、旅出留

享和元年

一 他領江参、太分之贋米筥買取、令遣方候もの

式ヶ年徒罪、旅出留

享和元年

一 商賣方ニ而旅人より受取候米筥、贋と申儀乍氣付、博奕負方之筋差遣候者

式ヶ年徒罪

寛政七年

一 調達勤口入借副いたし、又者起方不相叶、代官筥贋相拵、質入せしめ、或博奕宿屋をもいたし候者

三郡拂

寛政八年

一 他方之者拵立候贋米筥、下直ニ買取、遣方せしめ候者

三郡拂

老ケ年徒罪

文政二年

一 潜ニ他領立越贋米筥買取、遣方せしめ候者

三郡払、旅出留

一ケ年徒罪

一 贋米筥相拵、遣方せしめ候者

三郡払

佐嘉郡払

寛政四年

一 夫拵立候贋米筥令遣方候女房

式郡拂

寛政九年

一 一人より被相頼、贋筥と申儀乍相心得、引當ニ差出銀子借受、過分之口錢受用せしめ候者

佐嘉郡払

天明八年

一 他方之者拵立候贋米筥、徳用を目論見、遣方いたし候者

式郡拂、旅出留

文化元年

一 贋米藏筥引當ニシテ銀調被相頼受合致、部入借受候鳥目之内、令受用候者

居郡拂

享和二年

一 米藏筥贋相拵、質入代銀致分取候者

二郡拂

文政十一年

一 不実之願書拵出、米筥引受、裏名印を贋遣方せしめ候者

居郡払

文政十年

一 米筥を式枚ニへき、表二者裏を、贋裏二者表を、贋遣方せしめ候者

式郡拂

享和二年

一 為商賣潜ニ他領立越、向方之者より代物ニ米筥相渡候処、贋と申儀乍氣付請取、遣方せしめ候もの

老ケ年半徒罪、旅出留

文政四年

一 贋米筥可相拵と地紙漉立、不仕課候者

老ケ年徒罪

文政五年

一 博奕負方ニ迫り、米筥石目書太メ、遣方せしめ候者

博奕并賭之勝負相催候者御手當之事

寛政五年

文政七年

一 米藏筥贋入被相頼、贋筥之儀致勘通取扱、所々質入せしめ候もの

居郷并御城下払、御城下一里四方拂

一 博奕相催、役之者より異見二逢候を意趣に含、折々難題申懸候者

居郡并御城下一里四方拂

同七年

一 博奕いたし、又者通懸之者相手及口論候末、相有候者を無鉢二及打擲候者

佐嘉郡松

寛政十一年

一 博奕相催候末、勝銭及才足二候處、猶豫之儀申断候得共不承立事、姦敷及取入候處より、相手致縊死候通成行候二付

佐嘉郡拂

文化五年

一 長崎御番所詰中、致博奕候足輕

佐嘉郡拂

文政七年

一 博奕致宿屋候付相糺、一類江相預置候處、致他參令博奕候者

百敵之上、過料

寛政四年

一 村方之者任申聞、俗家相住居、又者博奕致宿屋候僧

居郷并

御城下一里四方拂

享和元年

一 博奕又者ゆすりをもいたし候者

八十敵之上、過料

文政八年

一 博奕相催候場参り懸、勝負二も相加候心底にて見物せしめ、又者居籠中忍出候者

居町松之上、逼塞、過料

文化十四年

一 博奕宿屋いたし候者

五十敵之上、過料

文政十三年

一 博奕致座親、照銭貪取、勝負をもいたし候もの

五十敵之上、過料

天保三年

一 旅人其外相集、博奕宿屋いたし、又者居籠内令内通候者

五十敵之上、逼塞、過料

文化十年

一 博奕令宿屋、又者旅女潜二留置、為致遊山候僧

追院之上、御城下不参様

文化五年

一 博奕いたし候者

三十敵之上、過料

天保二年

一 博奕いたし、又者立會究之節、評定所罷出候刻限令延引候者

三十敵之上、過料

享和二年

一 寺内二而賭之的為相催、又者留主中にて不相心得形二不実申達候僧

僧

御阿隠居

文化七年

一 博奕令宿屋候寺番

蟄居之上、向後一寺之住職不仕様

寛政十一年

一 博奕致宿屋候住持

御城下御構、追等

一 博奕宿屋いたし候女

閉戸之上、過料

文政八年

一 博奕見物いたし候者

逼塞之上、過料

文政十三年
一 賭之勝負いたし候者

逼塞之上、過料

文化七年
一 博奕いたし候僧

向後一寺之住職不仕様

享和二年

一 賭之的相催候者

逼塞

一 同断令見物候もの

過料

天保三年

一 存之屋敷懸之内ニ而博奕仕候付而

呵捨

文政十二年

一 博奕及再犯、又者致出奔候心底ニ而居籠所逃去、後々立戻候者

八十敲之上、過料、旅出留

文政十二年

一 博奕宿屋及再犯候もの

八十敲之上、過料

文化九年

一 博奕及再犯候もの

五十敲之上、過料

寛政九年

一 元再犯盗人、及博奕再々犯候処、致改名、前名差隠、初度之形ニ

二申出、又者盗品勘通令質入候者

三ヶ年徒罪

文政元年

一 博奕再々犯ニおよひ候者

百敲之上、過料

文政元年
一 博奕宿屋及再々犯候者

百敲之上、過料

文政十二年
一 博奕再々犯ニおよひ候者

八十敲之上、過料

同七年

一 博奕致宿屋、且博奕及四度、又者為商賣潜ニ他領立越、旅女連婦、

数日為致逗留候者

二ヶ年半徒罪

寛政十一年

一 博奕宿屋及四度候者

二ヶ年徒罪

文化十四年

一 博奕及四度候者

二ヶ年徒罪

文化九年

一 博奕及六度候者

三ヶ年徒罪

天明七年

一 御拂場入込、博奕及七度候者

三ヶ年徒罪

御裁許書拔 下

一 御立山其外ニ而竹木等盜伐いたし候者御手當之事

一 武具を他領江賣渡候者同断之事

一 無滞在之旅人留置候者同断之事

一 御法度場ニ而鉄炮獵いたし候者同断之事

一 上納滞并村方備米等取散、藏究不行届者同断之事

— 公金等借請令不埒、又者取引筋二付他領之馬を致押取候者同断之事

— 御用船乗与、舸子其外不宜儀等取計候類之者同断之事

— 御用銀御用状等紛失為致候者同断之事

— 村方賣物出入并庄屋其外不直之取計等仕候者同断之事

— 公事訴訟并我意を申募候者同断之事

— 変死之者を病死之形二取計、又者人之惡事を可差困いたし候者同断之事

— 養子縁与等二付不筋取計いたし候者同断之事

— 御拂場入込并御預者他參内通等いたし候類同断之事

— 千人講等隠興行いたし候者同断之事

— 商賣筋或借銀米等致不埒候者同断之事

— 旅人を御城内江連參候者同断之事

— 乱心醉狂者同断之事

— 女遊いたし候者同断之事

— 踊狂言其外遊興相催候者同断之事

— 奉公人逃去其外不埒相働候者同断之事

— 新規之神事佛事并奇恠之儀等申扱候者同断之事

— 出火同断之事

— 御法度之衣類致着用候者同断之事

— 宗門人改之節出奔者を有人二相加候者同断之事

— 關所之未相預置候品物潜賣拂候者同断之事

— 女犯肉食其外僧道を取失候者同断之事

— 寺社御寄附之品并境内竹木等賣拂候類同断之事

— 寺社継自等之儀二付不宜致取計候者同断之事

— 旅人御領内入込、盜其外不届有之候者同断之事

御立山其外二而竹木等盜伐採いたし候者御手當之事

— 大山留太掾之木數盜伐せしめ他領賣払、又者調子之節他人之所業二取成、不實を以一往調子相濟候もの

附、致同意盜伐せしめ候もの

四郡払

寛政八年

居郡并御城下払

— 大山留御成目銀自分用取遣、又者盜伐いたし候者

三郡払

付、盜伐之儀、乍相心得、賃錢を目論見、伐方いたし候もの

居郡払

寛政十年

— 大山留致盜伐、或仕払代銀令私欲候者

三郡払

文化十二年

— 仕払木伐取候節、右二相紛シ盜伐せしめ候もの

二郡払

文政五年

— 御城内御土居二而枯木有之候を御用之趣申欺、令盜伐候もの

二郡払

享和三年

— 山留相勤、人を勸盜伐為致、分取せしめ候もの

居郡并御城下一里四方拂

文化五年

— 御立山より毎度致盜伐、分取せしめ候山留

居郡并御城下一里四方払

附、枝鉋之儀任申談致同意、分取せしめ候山留

居郡払

文化十二年

— 役筋より仕払之形二取成、太掾之木數盜伐せしめ候もの

居郡并御城下一里四方払

文政四年

一 御立山木之内過分致盜伐、賣払代銀令受用、又者村方より伐取願差出候を自分二伐方為致候山留

居郡并御城下松

文政三年

一 御立山より過分之杉木等致盜伐候足輕

居郷松

同

一 御立山之杉其外過分二令盜伐、又ハ右一件大山留よりゆすり二逢鳥目差出候もの

居郷松

文政四年

一 盜伐いたし候者を差押候末、任相歎、事柄致内済、木代銀之内令受用候小頭

居郷松

寛政十二年

一 御立山より致盜伐、又者無願畠地二家居相立、何れも子所業之由、申偽候故、彼者蒙御手當候通成行候もの

居村拂

天保四年

一 御立山之松木、悪木之形ニシテ伐取願指出候通、大山留江賄賂を以取入候者

所拂

附り、金子令受用、悪木之形ニシテ伐取願差出候大山留

居郷松

武具を他領江賣渡候者御手當之事

享和元年

一 鉄炮為質入潜二他領持越、又者右鉄炮にて放出いたし、見咎二逢

逃帰候者

居郡并御城下一里四方拂 旅出留
附り、被相雇鉄炮持越、又者放出仕候を不差留もの

居村拂 旅出留

天明六年

一 潜二他領立越、武具を致質入、利潤を貪候僧

佐嘉郡拂 旅出留

文政五年

一 鉄炮等持来相求呉候様任申聞、盜品と申儀致勸通買取、他方持越賣拂候もの

八拾敲之上、旅出留

寛政十一年

一 武具を可賣拂と潜二他領立越候者

所拂之上、旅出留

文化十一年

一 武具を他領江賣渡候者

居町拂

天明六年

一 潜二他領立越、武具を質入いたし候者

閉戸、旅出留

無滞在之旅人留置候もの御手當之事

享和二年

一 他領參致女遊候末、相手之女宿許連帰、数年相囲、又者博奕令宿屋候者

七ヶ年徒罪、旅出留

安永三年

一 兄旅女を連来、御国者之由申聞任せ、女房二いたし、又者右女宿許立出行衛不相知由二面為探促、潜二他邦立越候者

天保三年

三郡拂 旅出留

一 旅女と心易相成候末、所々連參、遊山之相手ニ差出、謝礼令受用、又者潜ニ女房ニいたし、或右女知音之旅女をも留置、遊山為致、鳥目令受用候者

安永二年

式郡払

一 数年旅人を家内呼入置候末、娘と為致嫁娘候母親

附 母任申聞嫁娘仕候娘

佐嘉郡拂

寛政十一年

所拂

一 旅人と乍相心得、数ヶ年下人ニ召抱置候者

佐嘉郡拂

文化九年

一 旅女と乍氣付、潜ニ致女房候者

居郡拂

文政三年

一 母親病氣ニ付、為藥取、毎度潜他方立越、又者為看病旅女を数年留置候もの

居郡拂

享和二年

一 家内病人有之、旅醫を数ヶ年留置候者

居郷払

文化五年

一 作馬相煩候付、馬醫相雇候末、旅人と乍氣付、数ヶ年付飯為致置候者

居郷拂

同九年

一 旅女と申儀乍氣付、田方為稼、毎年数十日充、潜ニ相雇候者

同拾年

居郷拂

一 廻国之僧を村方存之庵室江留置候ニ付、役之者より追立候處、又々数百日為相住候もの

天保二年

居郷拂

一 他邦之者数月潜ニ留置、塗師細工いたさせ候者

寛政元年

居郷拂

一 旅人と申儀乍相心得、数ヶ月潜ニ作方相雇置候もの

寛政三年

所拂

一 村中存之観音堂ニ旅僧を潜ニ数ヶ月為相住居置、又者致病死候處、筋々不申達葬送いたし候もの

同十二年

居村拂

一 他領漁師とも相雇、御領海引入為致漁候もの

文化十年

所拂

一 家内病人有之、為療治旅醫を数十日留置候ニ付、立去候通役筋より致手當候而も不相用者

天保二年

所拂

一 旅盗人と申儀無氣付、潜ニ数月相雇候者

居村拂

享和元年

一 旅人より任相歟、存之庵室江潜ニ滞留為致候末、後々彼之者数人之旅人引入候義、不相心得候僧

出寺

文化六年

一 田方為稼、旅人相雇置候處、組合より追立候様申聞候而も不相用、
数ヶ月留置候者

呵、閉戸

同年

一 旅人を数ヶ月相雇置候者

閉戸

文政三年

一 任相頼、旅人之子を為致剃髮、数年潜二寺中召置候僧

逼塞

文化五年

一 旅人を数十日相雇置候者

逼塞

同年

一 旅人を日数十日餘相雇置候者

呵

御法度場二而鉄炮獵いたし候者御手當之事

享和三年

一 御鹿倉山ニおゐて猪可打取存、鉄炮仕懸置候處、御山廻いたし候者、手疵を請候末相果候得共、右疵は平癒、餘症二而相果候付

五郡拂

天明六年

一 佐嘉郡拂之者御拂場入込、毎度潜二鉄炮獵仕候者

式ヶ年徒罪

寛政七年

一 御法度場二而潜二鉄炮獵いたし、又者御用懸相成候處、他人相雇差出候もの

式ヶ年半徒罪

天明五年

一 御境川筋二而潜二鉄炮獵いたし、押二逢候末、鳥目差出候者

佐嘉郡拂

寛政七年

一 御境川筋二而毎度鉄炮獵、又者兄惣受之締場を潜二内受二差出、鳥目可令受用いたし候者

佐嘉郡拂

文政十三年

一 長崎御番所詰中、足輕鳥可打取いたし候半、公料之者漁船より通懸候付、筒先相逢迎、火蓋可相塞いたし候處、火移右通船之者江當り、御姦敷相成候もの

居郡拂

文化六年

一 無札二而湯獵いたし、蒙御手當候末、又々潜二鉄炮獵いたし候もの

居郷拂

上納藩井村方備米等取散、藏究不行届者御手當之事

明和九年

一 庄屋自身之引負且百姓未進米有之、藏究拂方不相叶、謀書謀判を以受取相拵候者

三郡拂

付、致同意候村役横目

式郡払

天明六年

一 庄屋百姓より米借入、償方不相叶、受込之筈質入いたし候末、藏究不相叶者

式郡払

寛政六年

一 藏究之節、筈拂不行届、筈主より之受取、謀書謀判いたし候者

文化三年

一大分之御藏米相預居、自身用取遣候もの

居郡払

寛政二年

一 藏究之節、庄屋より筭払被相頼候末、向方不相渡、又者筭主之受取、謀書謀判いたし候もの

居郡払

文化三年

一 御藏納米相預居、自分用二取遣候者

居郷払

享和三年

一 給地百姓作方不相叶、田方脇筋引渡候節、受取居候田居付米令不埒候者

居郷拂

文化四年

一 御切米筭請込、右米取立、自分用取遣、藏究不相叶、作立筭借受居候形二役筋申達、筭耳書相消、引合相整候庄屋

居郷拂

文化四年

一 未進米取立相滞、藏究不相叶由二而謀書謀判之受取手形相拵、引合相済候村役

居郷拂

居村拂

公金等借請令不埒、又者取引筋二付他領之馬を致押取候者御手當之事

文政元年

一 私領方入用之形二取成、役々名前奥印證文或空成田坪相拵、謀書謀判之引當を以公金引受、御姦敷相成候者

寛政三年

一 船商賣いたし、於他方 公金等借請不埒せしめ、御姦敷相成候もの

御役二付間
九郡追放
生害

文政五年

一 公料之者江田地引當二差出、銀米借受、年賦拂之致申談候末、不埒二および、御姦敷相成候者

三郡拂

附、田地引當差出候節、請人二相立具候様任相談、事柄受合罷在候者

式郡拂

天保六年

一 他領之者より馬代金預、手形受取候末、手段を以同領之馬押取いたし、又者右馬相預置候形二不実之被訴訟候者

居村拂

享和元年

一 他領之者江馬賣渡候末、代銀不相拂由にて、同領之者馬を無牀二引留候もの

佐嘉郡拂

同二年

一 家居を潜二他領之者江賣渡候者

居郷拂

寛政二年

一 商賣方取引之末二付、他領より差出し候品物、無牀二押被取候者

居村拂

御用松業組、廻子其外不宜儀等取計候類之者御手當之事

寛政八年

一 大坂上米積請、自分用賣拂、又者飯料とふに取遣候者

付、乗組之舸子

五郡拂 旅出留

享和三年

三郡拂

一 御奉行船乗組之舸子、於他方女遊之末、相手之女任申聞、密二御船乗組御領内連参、所々江相囲、又者御手當を致勵弁逃去、後々立戻候もの

三郡拂

文政元年

一 長崎御番所半買船、船頭為銀調、潜二宿元罷帰、船之儀者旅舸子とも江相頼置、又者御船道具を他領江質入致女遊候者

三郡拂 旅出留

享和三年

一 御用船乗組、舸子謝礼を目論見、無切手二而他領立越居候者を潜二御船乗込連帰候者

式郡拂

附、不氣付罷在候二付

御船頭引取 逼塞

役者引取 御呵

舸子 御呵捨

御用銀御用状等紛失為致候者御手當之事

天明六年

一 御用銀才領いたし、自身二て別所江宿いたし、銀者別當江預置、被盜取候足輕

与役引取

附 御用銀相預居 被盜取候別當

所拂

寛政元年

一 宿継夫丸、数通之御用状紛失致させ候もの

居郷拂

同三年

一 他邦役人より差送候書状等、等閑いたし、紛失仕らせ候もの

所拂

村方買物出入并庄屋其外不直之取計等仕候者御手當之事

天明八年

一 懸町内江之拝借米筈其外毎々令手繰、或謀書謀判いたし候別當

一 金被補助

九郡拂

同七年

一 大庄屋内證差文、百姓中江之拝借銀受込、願済未相成趣申偽、自分取懸候者

一 金被補助

七郡拂

同八年

一 庄屋百姓中江之拝借銀、纔致配當、其余手繰せしめ、受取帳面謀書謀判仕、又者御定外買物いたし候者

七郡拂

同七年

一 大山留難儀迫候由二而百姓中江之拝借銀自分用取遣、又者百姓とも請取帳謀書謀判いたし、或自分二買物相遣候者

五郡拂

天明七年

一 山留上納取立之内、自分用取遣、又者大山留様々不直之筋有之候を其儘罷在候者

三郡拂

寛政二年

一 検見之節合上り等不相成様、例初之内取隠候者

三郡拂

文政十一年

一 御困糶摺例之節、別米を忍入、過上米可令受用と致手摺候村役散使

三郡拂

明和九年

一 大庄や、村々江不実之儀申立、雜用銀貫立、鳥目令受用候者

式郡拂

天明八年

一 庄や手繰其外不屈有之、百姓中より訴出候節、自身二も御定外給米受用いたし居候付、顯然之程相恐、右給米之廉相除候通取計候大庄屋

式郡拂

付、庄や致手繰候儀乍相心得、其儘罷在候者

所拂

天明八年

一 明田有之形二取成、拝借米受用可仕相工候者

庄屋并役之者 式郡拂

百姓 佐嘉郡拂

文化十一年

一 津内地料米其外致私欲候末、他方立越狼狽罷在、後々立戻候別當

式郡払、旅出留

同元年

一 給庄屋取立之米賣拂、自分用取遣、百姓中江者主用之形二相偽、不実之賣渡手形等相拵候者

式郡払

附、庄や年貢米を自分用二取遣候儀乍為、賣拂之手形二致印形候者

居郡拂

寛政四年

一 庄や相勤、地米過上有之候を筋々不申達、一存二而貫物帳二差引勘定相立候足輕

安永七年

一 庄屋村役貫物等懸越いたし、非分之取計仕候旨、不実之儀を強而申立候者

居郡并御城下一里四方拂

寛政五年

一 博奕相催候者を差押候末、酒為相整給合、又者縣内江横死之者有之候を病死之形二取計候處、其儘罷在候庄屋村役

居郡并御城下一里四方拂

享和二年

一 給庄や相勤、田方水下相成、苗相損候付、植付之儀地頭より及手當候處、我儘之儀申募、田地差荒候者

居郡拂

文化元年

一 給庄屋相勤、百姓より之納米自分用取遣、主人筋江者百姓共納不足之趣二申偽り、令不埒候者

居郡拂

同二年

一 村方より取立候銀米、自分用取遣、又者管主江内拂申談、全六分之請取書を取、藏究相済候庄屋

居郡拂

天保三年

一 田方検見地調子之節、跡立再見相成間敷場所、手輕縣方相整候様相歎、役々江金子等差遣、餘計之落米受用せしめ候者

庄屋、村役、咄 居郡拂

文政四年

一 村方江之出切拝借米、自分用取遣、百姓江之配當令遅滞、又者右請取連判帳二自分之指判相整、役筋差出候庄や

居村拂

組被相拂

公事訴訟并我意を申募候者御手當之事

享和三年

一 庄屋勤方不意趣、惣百姓中之名目にて荒打之儀申達候末、於私領方手當を請候処、私領役人偏頗之取計いたし候も筋々出訴をかつき候者

居郡并御城下拂

安永二年

一 一類上納筋難渋ニおよひ候處、居村庄やとも御救米其外順路之配當不仕、田畠等をも無躰ニ取揚候段、無形儀を申訴候通取計候者
付り、一類任申聞、不実之被訴訟候者

居郡拂

安永九年

一 法兄より出寺之手當ニ逢候を不承知ニ相心得、俗縁之者申談、不実之被訴訟候僧

居村拂

寛政七年

一 庄屋共奸曲之筋有之趣、村方之者とも相機関、訴訟を被候僧

居郡拂

居郷并御城下拂

同年

一 庄や共御救米其外取計不意趣申立、徒黨等數数人所々相集、不易儀を筋々訴出候者

居郷并御城下拂

安永三年

一 作懸田地、地元悪敷、過分之成落等無之而考作方難仕由、我意を申募候者

居郷拂

同七年

一 居村庄之居興行被差免札なしにて見物可致申談候処、受元共納得

不仕ニ付、右興行之儀、於村方故障有之趣、不実之被訴訟ニ付

庄や 居郷拂

付、令同意候百姓

寛政四年

一 庄屋取計不意趣申立、米差出候通、事姦敷及問合、又者見込通不受合由ニ而隠田其外悪事をもいたし候趣、荒打之被訴訟候者

居村拂

安永九年

一 長崎勤之御船頭、内渡方ニ而ハ引払不申旨、我意を申募候者

居郷拂

明和九年

一 弓術 御上覧之節、手明鑓之矢、持連候儀不相叶段、我意を申募候御步行

御船頭引取

呵

變死之者を病死之形ニ取計、又者人之悪事を可差困いたし候もの御手當之事

天明六年

一 人を切害、又者致差火候を穩便可差困いたし候足輕

佐嘉郡拂

同六年

一 兄奸曲之筋有之候を、無調法不相成様賄賂を以可繕いたし候弟

居郡拂

文政四年

一 子伯父を殺候処、御手當を致勵弁、自身所業之形、一往不実申達候親

居郡拂

天明八年

一 檀家之者致横死候を病死之形ニ而致取置候處、引導手数不相整、後々横死之儀承候而も其儘罷在候僧持

出寺

寛政十年

一 弟令出奔候末立戻候處、筋々不申達、密ニ囲置候兄

御城下一里四方拂

安永三年

一 一類之者致横死候を、頓死之形ニ可取計いたし候者

所拂

文化五年

一 切害之場ニ参合居、任相談一往差隠、後々申達候者

閉戸

明和

一 変死之者を病死之形ニ而取置等仕候一類

逼塞

養子縁組等ニ付不筋取計致候者御手當之事

一 足輕致病死候處、其一類より任申聞、鳥目差出、近縁之形不実之願を以、右跡式致相續候もの

佐嘉郡拂

附り、取調子不行届ニ付

組代 逼塞

天保五年

一 不届有之、主人筋より組拂之手當ニ逢候足輕、不実之願を以御直足輕之跡式致相續候もの

三郡拂

附り、取調子不行届ニ付

組代 逼塞

御拂場入込并御頭者他参内通等いたし候類御手當之事

安永二年

一 追放者御拂場内奉公せしめ、又者御城内江も入込候者

式郡拂

文政十三年

一 御拂場博奕及再犯候末相糺、一類相預置候處、御拂場元宿許江數日滞留、又者他人之名前ニ而芝居元方いたし候もの

元御掟、博取置候上

式郡払

文化十三年

一 御拂場入込博奕致宿屋、又者相調候内、用事有之候由ニ而評定所門番相頼、於同所女房江致面談候者

元御掟、拂之上

式郡払

附り、任相頼、女房江為致面談候者

逼塞之上、過料

享和二年

一 一類御拂者居付向不相極、帳内相加置候處、數年日延願等も不致打追差置候末、博奕等仕候通成行候付而

佐嘉郡拂

組入役之者

御呵逼塞

明和七年

一 御拂場入込、村方貫物等取立候者

居郡払

附り、庄や村役

閉戸

同年

一 御拂者一類江合力申乞候得共、不相与ニ付、評定所驅込、直訴せしめ候者

元御掟、払之上

居郡拂

天保三年

一 夫悪行之聞ニ而揚屋入置候處、面談のため潜ニ揚屋脇忍入、又者同揚屋之者任申聞、勸化講投入帳其外忍入、或内通之書状致取次、謝礼金令受用候女

居郡松

天明八年

一 役之者盗人捕来候途中相休、大小其外被盜取候者

追放

寛政七年

一 不屈有之 御城下拂被 仰付置候處、御拂場入込候もの

元御筆松王

居郷松

文政元年

一 御拂者と申儀乍相心得致養子、数年御拂場呼取置候もの

居郷松

同十三年

一 囚人より宿元差返呉度任相歟、謝礼を目論見、潜ニ居籠所差出候警固

居郷拂

天明六年

一 究筋を問題ニ合申出候通、内通いたし候もの

居村拂

文化十三年

一 揚屋入置候處、同揚屋之者より任相談、究筋申出振相合候者

五日手鎖

千人講等隠興行いたし候もの御手當之事

文政三年

一 万人講店方相部居、乙札讀上候節、水手段を以火取扱、當銀可貪取いたし候者

佐嘉郡拂

天保二年

一 富方相部居、手段を以當銀可貪取と、式段錐を拵立不仕課者

佐嘉郡拂

享和二年

一 千人講隠興行いたし候者

居郡拂

同三年

一 潜ニ他領立越、千人講之板木其外借受、隠興行いたし候もの

居郡拂、旅出留

天保五年

一 勸化講店相部、手段を以乙當銀掠取候もの

御城下松

文化七年

一 他領之千人講、毎度捻致勝負候者

居郷松

文政四年

一 他領之者、御領内勸化講捻相企候節、任相談店方當り番板行毎度差遣、謝礼金受用候もの

居郷松

文化七年

一 潜ニ他領立越、毎度千人講取次いたし、又者御領内ニ而捻興行之取次をもいたし候者

居村拂、旅出留

同十四年

一 勸化講店方相部、當り番ニ潜ニ付銀書入、手拶を以當銀貪取候者

八拾日牢舎之上、過料

天保四年

一 為商賣潜ニ長崎立越候末、彼地之者より任相機関、勸化講致捻、同所御奉行所より蒙御手當候もの

五十日牢舎之上過料、旅出留

文政三年

一 勸化講手段を以付方相整、當銀貪取候もの

三十敲

商賣筋或借銀米等致不埒候者御手當之事

天明六年

一 庄屋より筭引當にて銀調相頼候を、口入借副いたし候もの

佐嘉郡拂

寛政九年

一 銀調達致口入、借主より致内拂候を自分用取遣、又者全分拂方いたし候節、右銀子為致紛失候者

御城下一里四方拂

文化十三年

一 他方御用屋渡り之金子、両替被相頼、利潤を目論見脇方貸附、又者自分用取遣令不埒候者

御城下一里四方拂

寛政三年

一 役筋江拝借銀引當として差出置候家居を、又々他江借銀引當ニ差出候者

所拂

文化元年

一 役筋仕法銀借受候節、家屋敷引當として差出置き候末、又々右を外筋江二重ニ差出候者

居町払

旅人を 御城内江連参候者御手當之事

天保六年

一 旅人を相雇 御城内江夫丸ニ差出、自身出夫之形ニ取計、又者田方

稼として潜ニ毎度相雇置候もの

居郡拂

附り、無氣付連越罷在候庄屋

所拂

被相雇 夫丸ニ罷在候旅人

御領境より追放

安永七年

一 於途中旅人江出會、彼者より道筋相尋候付、差扣居候ハ、其筋可連越申聞、自分は用事有之 御城内参候處、右旅人も跡より追々罷越候付

呵

宝曆十二年

一 御城内江旅人召連罷通候者

居郡拂 御城下不参様

旅人 御領境より追放

延享四年

一 他領之者と連立参候途中、無何心 御城令同道候もの

居郷拂

乱心酒狂者御手當之事

安永三年

一 御拂者大酒いたし、評定所門内打臥、高聲をも仕候者

三郡拂

文政三年

一 酒給酔、於途中給人江衝懸、悪口等申懸、帶刀之躬を拔取逃去、様々法外相働候處より、右給人より刃傷ニ逢候者

三郡拂

附 致荷擔 供々法外相働候者

佐嘉郡拂

安永四年

一 酒給酔、於他領於僥忽之儀申懸、及口論候者

式郡拂

寛政五年

一 酒給酔、不差立儀二而伯父を令刃傷候者

式郡拂

同八年

一 酒給酔、近邊之寺江打臥居候付、右寺參居候旅僧相起候を憤、手疵を負セ候者

居郡并御城下一里四方拂

享和元年

一 酒給酔居、給人江馬引懸、法外申募、逢刃傷候者

居郡并御城下一里四方拂

文化十四年

一 酒給酔、無躰之儀を申懸、又者相宥候者江手疵を為負候者

居郡并御城下一里四方拂

文政元年

一 酒給酔、相手江無躰之儀申懸、事姦敷及取合候付、役之者參相宥候をも不承立、却而手疵を為負、又者相手より打擲二逢、相凌候節、不計疵付候形二不実申達候者

居郡并御城下一里四方拂

文政七年

一 酒給酔、様々致惡口候付、相手之女房差留候を、きせるにて突付及口論候末、打擲二逢、後々鳥目受用致内濟候者

居郡并御城下一里四方拂

明和九年

一 口論二および、相手を可及刃傷仕候處、酒給酔、人違二手疵を為負候者

佐嘉郡拂

安永五年

一 酒給合、相手寐入候を相起候逆、氣分取失候通、手荒之及取計候

僧

佐嘉郡拂

文化八年

一 村方二而浮立興行いたし候付、役之者より相制を酒給酔居、令打擲候者

居郡拂

享和元年

一 酒給酔居、嫁入之途中ニおゐて様々不法相働、又者仕懸參及乱妨候者

八拾畝之上、居町松

明和七年

一 酒給酔、途中相臥居候處、通懸り相起候者を令刃傷候者

御城下一里四方拂

寛政十年

一 酒給酔、人之女房江不義申懸、承引不仕由二而及打擲候者

居郷拂

天保二年

一 酒給酔、途中脇差拔放、相手江疵付、又者通懸之者を及刃傷候者

居郷拂

寛政十年

一 江戸詰中致外出、酒給酔候由二而御門限を逃、翌日罷帰候者

居村拂

享和元年

一 酒給酔、重職通行之節致不礼、殊二供廻江何敷雜言申候者

居村拂

文化元年

一 酒給酔、人之通路を妨、又者刃傷をもいたし、殊二相手過言申懸候形二不実申達候者

居村拂

同年

一 酒給酔、一座之者江様々令雜言、器物とふ投懸、法外相働候者

居村拂

文政元年

一 病身相成候儀、人より呪詛二逢候故と存込、取昇セ、其者宅仕懸参、様々法外を働、相支候者江刃物二而致手向、又者正氣付前断及乱妨候節、打擲等二逢候儀を申立、事姦敷及取合日候者

居村拂

寛政五年

一 於途中給人江行逢、作馬を引懸候付差咎候處、却而過言申募候者

所拂

文政四年

一 酒給酔、不法相働打擲二逢候處、相手無牀之取計二およひ候形二主人筋江不実申達候者

呵、閉戸

女遊いたし候者御手當之事

寛政三年

一 御番所詰内、無札二而毎々立出、女遊せしめ候もの

三郡拂

附、密二差通、又者致酒食候番人

組拂

文政十年

一 長崎御番所詰中、女遊之末罷帰候面皮無之趣二而、御国許逃帰候者

三郡拂

寛政三年

一 商賣二付他方罷越候末、致女遊、又者右女懷胎相成候由二而宿許連来候者

寛政二年

一 商賣方之形二申偽、往来札申受、他方神社参詣いたし候末、令女遊候者

式郡拂

寛政三年

一 遊山之相手相成、又者懷胎二およひ候由二而、相手之者ともより鳥目令受用候女

居郡払

附、相手之女より養生銀差出候通申懸候處、致遊山候儀無之旨申紛候者

居郡拂

享和三年

一 商賣方として潜二他方立越候末、旅女を連帰留置、致遊山候者

同断

居郷拂、旅出留

天保二年

一 長崎御番所御繫船乗組舸子、於他領毎度令出遊候者

居郷拂、旅出留

文化五年

一 深掘詰中大村参、致女遊候者

居郷拂

同九年

一 従者奉公二而深掘罷越候末、他領二おひて致女遊候者

居郷払

文政七年

一 一人之娘を招呼、遊山之相手二差出候者

御城下一里四方拂

文化四年

一 他人抱置候旅女招呼、遊山為仕候者

閉戸之上、過料

同年

一 抱置候旅女脇方差出、遊山為仕、謝礼令受用候者

附、組合御呵役之者共

閉戸之上、過料

天保六年

一 謝礼を目論見、人之娘を遊山之相手差出候もの

附り、致遊山候者

閉戸之上、過料

遊山之相手二相成候女

呵之上、御城下筋不相住居様

組合

呵

所役

呵捨

天保六年

一 御城下外二而旅人江遊山之相手取成候女

但、為致遊山、謝礼を貪候宿主其外者御手當前同断

呵

踊狂言其外遊真等相催候者御手當之事

一 於村中狂言相催候者

閉戸之上、狂言道具取揚、過料

付り、頭取いたし候者

閉戸之上、過料

地方いたし候者

閉戸之上、過料

指南いたし候者

閉戸之上、過料

持懸之畔差出候者

閉戸之上、過料

主と成申談候者

呵之上、過料

不相心得役之者并組合

過料

主と成申談候者之組合

御構なし

文化十三年

一 村方存之於社地、子供江踊いたさせ候親とも

閉戸之上、過料

附り、庄屋村役致他出、不相心得者

呵

無氣付罷在候組合

過料

天保六年

一 旅藝者数日留置、為致狂言候宿屋

呵逼塞之上、過料

附、致同意候者

逼塞之上、過料

組合別當 申聞、過料

一 於畠地、狂言相催候者

閉戸之上、過料

不心得皇主

不心得庄屋村役

不心得組合

狂言他方之者

呵托

過料

過料

過料

文化十二年

一 田方虫入、為轉除無願浮立興行いたし候庄や村役

呵之上、村中江過料

同年

一 右同、百万篇いたし候庄や村役

呵之上、村中江過料

天保二年

一 角力相催、鳥目令受用候者

逼塞之上、過料

同四年

一 相撲相催候もの

逼塞之上、過料

文政八年

一 操相催候者

呵之上、過料

不相心得庄や、咄 申聞

村中江 過料

一 通懸之旅藝者二而、於菴地輕業相催候者

呵之上、過料

天保四年

一 持懸之於田地、角力相催候者

呵之上、過料

文政十二年

一 見セ物いたし候者とも

呵之上、品物取揚

文化九年

一 於寺院、浄瑠璃相催候者

呵

附、院代他出跡心遣之者

逼塞

奉公人逃去、其外不埒相働候者御手當之事

文化元年

一 奉公中毎度虚病を構、宿元引取、作方指明候もの

沓ヶ年半徒罪

同九年

一 奉公中勤方指明、行衛不相知処より、出奔手数相成候もの

沓ヶ年半徒罪

天保六年

一 長崎御屋敷詰中、勤方不耳、主人より教諭を加候而も不相用、逃

帰候処より令出奔手数相成候もの

御城下并居郡拂

文政十二年

一 手代奉公中、脇々より取立候米、自分用取遣、償方不相叶、脇差

を以、肩其外疵付、強盜二逢候形、手段を構候もの

居郡拂

享和二年

一 職方稽古として他邦罷越候末、手代奉公いたし、又者店方之反物

質入せしめ、公訴二逢候者

御城下一里四方拂、旅出留

文政六年

一 奉公人より任相頼、一類形二而請人二相立候もの

居村拂

文化七年

一 荒使子奉公中、田方之致事、難決せしめ、一往脇方江二重二見賣

いたし候もの

閉戸

新規之神事佛事并奇恠之儀等申扱候者御手當之事

寛政八年

- 一 手段を以怪敷祈禱いたし、鳥目謀取、又者盜博奕、或他領之寺院往來を贖、毎々他邦立出候僧

貳ヶ年徒罪

文政二年

- 一 旅人を潜ニ留置、占稽古いたし、無形家相を考、謝禮を貪、或手段を以祈禱いたし候節、備置候小玉銀を石ニ包替、又者潜旅出をもいたし候者

五拾敲之上、旅出留

文政四年

- 一 修法を以致風奇踊、狂言之致身振候を狐狂言と相唱、所々ニ而興行、施物分取、又者女遊をもいたし候もの

三拾敲

附り、任相機関 修法いたし、又者女遊せしめ候山伏

五拾敲

寛政三年

- 一 旅人より任申勸、佛飯講と唱、寄合打入、錢等相集候処より、邪宗門之趣相聞候通成行候もの

居郷拂

天保六年

- 一 屋敷内江稻荷社相飾、諸人參諸任相頼、鬪占等いたし、謝礼令受用候もの

居郷拂

出火御手當之事

- 一 出火類焼有之候得共、火元之者

呵

附り、類焼無之候節者

呵捨

文政七年

- 一 御建寺院出火 御位牌其外為致焼失候二付

住持 逼塞

役僧 御呵

天保六年

- 一 御建寺院出火二付而

住持 御呵

御法度之衣類致着用候もの御手當之事

- 一 御法度之衣類致着用候もの

呵之上、過料

- 一 妻娘同断之節、其親夫

呵之上、過料

宗門人改之節、出奔者を有人ニ相加候もの御手當之事

天明七年

- 一 一類元盗人逃去候処、筋々不達出 宗門人改之節、空引合相濟又者後々右盗人立戻候而も不申達二付

一類 逼塞

所役、与合 人改 逼塞

天明八年

- 一 子数年宿元立出不罷帰候処、宗門人改之節、空引合相整候二付

母親 御呵

所役、与合 人改 御呵

寛政八年

- 一 一類之女出奔いたし候処、筋々不申達、宗門人改之節同断二付

一類 逼塞

附り

寛政八年

一 一類再犯盗人逃去候処、不達出、宗門人改之節同断二付

人改 所役 閉戸
与合 御呵

文化七年

一 帳迦盗人を無氣付致養子、娘と為致嫁媾候末、彼者共宿元立出、行衛不相知処、筋々不申達、宗門人改之節同断二付

一類 御呵
帳主 逼塞
与合 御呵
人改 所役 閉戸

文化九年

一 子奉公中打擲二逢候儀承り、不容易被訴訟、又者彼者行衛不相知候処、宗門人改之節同断二付

親 居郷拂
人改 閉戸
所役 逼塞

文政十一年

一 帳内盗人致出奔候処、同断二付

親 閉戸
所役 御呵 逼塞
人改 御呵
一類 与合 逼塞

天保三年

一 一類盗人数年行衛不相知候処、同断二付

一類 逼塞

天保六年

一 帳内盗人行衛相知候処、同断二付而

人
人改 呵 逼塞
所役 逼塞

文政四年

一 親盗之不審有之、家内封之上、家財等一類与合江相預置候処、右品之内忍出賣拂質入等いたし、又者品物取調之節、別品引替差出候もの

式郡拂

附、本文忍出候品、任相頼致質入、右代錢之内より自身致取替筋二差引令受用、又者品物取調之節、別品引替差出候一類

佐嘉郡拂

女犯肉食其外僧道を取失候もの御手當之事

寛政元年

一 遍参僧、於他方銀調之筋相携、又者酒給醉密懷、或切手質入可仕いたし候者

脱衣、五郡追放

寛政八年

一 学問僧、於他方寺番仕居候内、芝居見物其外遊興二耽り、右負方二迫り、本尊其外令沽却候者

五郡追放

天明六年

一 師匠病氣二付、肉食相勸候僧

附り、弟子任申勸、致肉食候住持

脱衣追放

享和二年

一 酒食之末、女遊いたし候僧

脱衣追放

脱衣追放

寛政八年

一 他方住職之僧、銀調達之筋二付、銀主共を茶屋或夢居等ニ致招請、自身も遊興之筋耽り、及大借銀、御姦敷相成候僧

永蟄居

寺社御寄附之品并境内竹木等賣拂候者御手當之事

天明五年

一 社人内證差支、御寄附之品其外、質入とふいたし候者

五郡拂

文化十四年

一 御寄附之金物其外忍出、致質入候末、御手當を相怖、方々狼狽罷在、又者還俗之躰相成、肉食等いたし候僧

式ヶ年徒罪

天明六年

一 社内之立木伐取、又者神具等致質入候社人

式郡拂

享和元年

一 病氣ニ而茶代手支、預之拂具等忍出、質入可仕いたし候僧

蟄居

寺社繼目等之儀ニ付不宜致取計候もの御手當之事

寛政六年

一 後住法脈之儀ニ付、意趣を含、御位牌忍取、御堀江相流、住持無調法相成候通相工ミ候僧

獄門

文化五年

一 御陣貝吹山伏、及老衰候処、隠居繼目之手数不相整、潜ニ子江相譲り、調之節も願相済居候段申 (罰不能) □、掠、御上を候山伏

三郡拂、思召ニ而四郡追放

享和元年

一 脱衣追放之僧、為学問他方立越、其後別寺ニ住職いたし候者

元脱衣追放之上 式郡追放

同三年

一 法系違之後住見立願差出候末、法脈之内より見立願替候様申達候をも不相用、最前存念之通可願取と、不承知之末寺江も押而同意之印形為致候僧

隠居

文化十二年

一 宗祖遠忌ニ付、官職納金内 (罰不能) □ニ而免許相成候段、本山より申

来候処、一派中江差懸触出シ、役懸之者計先ニ上京、官階相進候僧

役寺 隠居 向後法席不相列様

納所役僧 永蟄居 向後法席不相列様

法頭 御呵

文政二年

一 觸内之山伏、致盜襲御手當候処、彼者任相歎、帳出入不相整、打追山伏いたしをき、後々末坊之相續申付候法頭

隠居

旅人御領内入込、盜其外不屈有之候者御手當之事

差火

寛政十一年

一 御領内入込盜せしめ、数ヶ所江指火いたし候者

市中引渡 磔

盗人

文化十二年

一 田方稼として御領内入込候末、米其外忍取候女

追放

寛政九年

一 御領内之者之形ニ申偽、方々狼狽候末致盜、又煮令密通候女

三拾敲、追放

天保六年

一 御領内入込、令盜候女

三拾敲、追放

文政五年

一 兼而旅盜人致宿屋、御領内より盜取来候品、分取せしめ候者

八十敲、追放

文政十一年

一 御領内入込、盜不仕課候者

片鬢刺、^(二)追放

天保六年

一 御領内入込、輕品令盜候もの

片鬢刺、追放

寛政二年

一 無滞在ニ而所々江細工方相當候末、御領内之者之養子ニ相成、又者盜をもいたし候者

燒金當、追放

文政十二年

一 御領内入込、於所々土藏を破令盜候者

燒金當、追放

天保五年

一 御領内入込、盜せしめ候者

燒金當、追放

天明八年

一 於御領内強盜可申合、尤其節ハ不罷越候得共、後々入込、旅艀之品物盜取候者

生寺頭相渡、生害

寛政元年

一 数人相機関、御領内入込、所々ニ而大分之品物令盜候者

生寺頭相渡、生害

寛政三年

一 生国而手當を受、盜一篇ニ而罷在候末、御領内入込、於所々令盜候者

生寺頭相渡、生害

同年

一 御領内入込強盜せしめ、又者起合候者を相威候ため、脇差抜放候者

生寺頭相渡、生害

同九年

一 諸国盜人共留置、盜人宿いたし候末、御領内入込令盜候者

生寺頭相渡、生害

同年

一 御領内入込、於所々致盜、又者盜ニ入候節、脇差相帶。聲を立候者を致切害候心底ニ而令強盜候者

生寺頭相渡、生害

文政三年

一 御領内入込盜、捕ニ逢候ハ、切害をもいたし候心底ニ而脇差相帶

罷在候者

同年

一 御領内入込盜候処顯然、其場追懸候ものを及殺害候心底二而脇差抜放、手向せしめ候盜人

生害

天明八年

一 御領内入込強盜せしめ候者

生害

寛政三年

一 御領内入込、於数ヶ所大分之品物令盜候者

生害

文化七年

一 数人相機関、御領内入込盜候処、追懸二逢、逃延不相叶節者切害をもいたし候心底二而脇差抜放候者

生害

天保五年

一 御領内入込盜、又者為盜忍入候節、自然捕二逢、難通場二而者切害をもいたし仕課候心底二而脇差研立、相帯罷在候もの

生害

天明八年

一 御領内入込、所々おゐて刃物相携、押入強盜いたし候もの

獄門

盜再犯

文政二年

一 御領内入込、盜及再犯

生害

文政元年

一 御領内入込、盜再犯および候者

生害

人殺并疵付

寛政元年

一 御領内入込、途中出會之者江島目貫懸候処、不相与付、無跡之及取計疵付候者

生害

享和元年

一 御領内入込、人之女房と致密通、連出逃去候途中、捕方之者を突殺、又者右女房をも令切害候もの

片鬚刺、追放

贖銀

文政十二年

一 他方二而贖銀買取、御領内入込遣方せしめ候もの

獄門

天保五年 贖銀買取、御領内入込遣方せしめ候もの

八拾敲之上、追放

文政七年

一 贖銀相拵、御領内おゐて旅人所持罷在候米筥と引替候迄二而、遣方不仕者

八十敲、追放

天保五年

一 贖銀買取、御領内入込遣方せしめ候者

百敲之上、追放

文政十三年

一 御領内入込、式朱銀贖相拵候者

生害

天保五年

一 数人相機関、御領内入込贖銀拵立、遣出候者

贖案種

生害

享和元年

一 潜二御領内逗留、不正之膏藥賣歩行候者

三ヶ年籠舎之上、百敵

寛政十二年

一 毎度御領内入込、贋廣東人參賣方いたし候者

三十敵、追放

籠舎

文政元年

一 幼少之子供江手段を以瀉藥を飲セ、通懸之躰ニ取成、留藥相与、謝礼可貪取いたし候僧

五拾敵

永牢舎

贋米筥

寛政十二年

一 贋米筥と申儀乍相心得、金銀ニ可引替仕候者

八拾敵

永牢舎

享和二年

一 旅人贋米筥拵立令遣方、又者御領内之者江相渡、謝礼令受用候もの

五十敵、追放

永牢舎

寛政五年

一 贋米筥相拵、所々おゐて遣方せしめ候もの

百敵、追放

永牢舎

附、被相頼、御領内入込遣方せしめ候者

五十日籠舎、追放

三十敵、追放

文化四年

一 贋米筥買取、令遣方候者

三十日籠舎、追放

三十敵、追放

天保二年

一 米筥贋相拵、御領内入込遣方せしめ候者

百日籠舎之上、五十敵

天保六年

一 御領内入込、施物を目論見祈禱いたし、又者病人有之候を、脇より致呪詛候旨、無形儀申咄候者

五十敵、追放

文化八年

一 贋米筥遣方三度ニおよび候者

貳百日牢舎之上、百敵、追放

寛政元年

女遊

一 御領内ニ而女遊之末、右女懷胎ニ相成趣ニ而、所々江相開置候者

揺

追放

天保四年

一 御領内之者相機関、無躰之義申懸、鳥目可揺取と相手を打擲いたし候もの

五十敲、追放

史料紹介

国文学研究資料館所蔵「至鎮様御代草案」

糟谷幸裕

久保健一郎

貫井裕恵

堀新

松澤徹

宮崎肇

山本隆太郎

編

はじめに

国文学研究資料館所蔵「蜂須賀家文書」の中には「草案」と呼ばれる史料群がある。その史料性格・成立等については、三宅正浩氏の詳細な検討・紹介があり（「蜂須賀家文書「草案」の構成と伝来」、『アーカイブズ学研究』三、二〇〇五年）、そちらを参照していただきたいが、徳島藩主蜂須賀氏歴代の書状である。ここでは、そのうち初代藩主である至鎮の書状案がまとめられた「至鎮様御代草案」から、慶長年間の分について翻刻した。九州大名と「公儀」の検討を課題とする研究において、四国大名の史料を、また岡山藩研究会の分科会が、何故扱ったのか、不思議に思われる向きもあるであろうから、その点についてははじめに触れておきたい。

本研究では、九州に存在した大名家関係の史料から、「公儀」に関して多角的な追究が試みられたわけである。あらためていうまでもないことであるが、九州大名のなかで大きな比重を占めるのは、島津・細川・黒田・鍋島をはじめとする外様大名であった。そこで、他地域の外様大名における、ある程度まとまった史料群を翻刻し、おおよけにすることは、比較検討の点からいって、本研究にとっても大きな意義を有することになると考えられるのである。

岡山藩研究会移行期分科会では、宇喜多直家・秀家に関する史料、ついで池田輝政に関する史料の収集・講読を進めていたが、それが一区切りついた時点で、やはり比較検討の点から、「至鎮様御代草案」の講読を開始した。「岡山藩研究会」ではあるが、他大名の史料を読み始めたのである（池田と蜂須賀が縁戚関係にあったことも多少考慮はされた）。会の記録が残されていないので、正確なところは不明だが、一九九〇年代後半から二〇〇〇年代前半にかけて足かけ七、八年は続き、元和二年の途中まで読み進められた。

このたび、本研究にあたって、前述のような理由で「至鎮様御代草案」の翻刻・紹介が意義を有するとの点が、会として合意に達し、事務局の了解も得たため、あらためて第一冊から読み直しを行った。ただし、翻刻の範囲は政治的問題等に豊富な論点を提供しうると考えられる慶長年間に限ることとした。元和年間分は、大坂の陣が終わった後のものであり、当面の政治的・軍事的緊張が解除されたためか、内容が日常的な挨拶・話題でほとんど占められていくのである。もちろん、これはこれで大名の生活史等として検討の価値はあるだろうが、「公儀」に結びつく政治的問題を重視すれば、ここでは慶長年間をひとまとまりとした方がよいとの判断に至ったものである。

慶長年間分は包袋によれば全八冊で、慶長十四年から十九年に至るはずなのであるが、残念ながら八冊目は失われており、現存は慶長十八年に至る七冊である。まず、法量を示す。各冊子を国文学研究資料館の目録番号順に、かりに第一冊、第二冊……として、縦×横、単位センチメートルで示した。括弧内の収録文書発給年月日の上限と下限は各冊子の表紙の記載に拠ったが、その年代に従うと第五冊と第六冊は順序が逆になる。

第一冊（慶長十四年六月二十五日～九月二十日）

二七・四×二〇・九

第二冊（慶長十四年九月二十四日～十月二十三日）

二七・四×二一・〇

第三冊（慶長十五年八月二日～十月十七日）

二七・五×二一・一

第四冊（慶長十五年十月十五日～慶長十六年二月九日）

二七・五×二一・一

第五冊（慶長十七年十二月二十五日～慶長十八年二月一日）

二七・四×二一・〇

第六冊（慶長十七年三月五日〜六月九日）

二七・四×二一・〇

第七冊（慶長十八年十月八日〜十二月九日）

二七・五×二一・一

書状数は全四六通に及ぶ。ただし、独立の書状とは見せない筆写に際しての補記に類するものがいくつか混入しており、これらには文書番号を割り振っていない。充所はほとんどが武家であり、徳川方に属する大名や家康・秀忠の側近のみならず、豊臣方も少なからず見受けられる。

細かな点で目についたところを列記しておく、九七号文書等には「御使」として、使者名が記されている。明らかに覚え書きとして案文に補記されたものであるが、記されているものとそうでないものとは、どのような相違があるかは不明である。また、一〇六号文書等には「御自筆」の誤写と推定される文言があり（この点後述）、この推定に誤りがなければ当該書状の原本が至鎮の自筆であったことを案文に補記したものといえるが、では「御自筆」とないものはすべて右筆の筆になるかという点、これもまた不明といわざるをえない。したがって、至鎮がどのような場合に自ら筆を執ったのかも明らかにしえない。これらの覚え書きについては、情報として興味はあるけれども、当面はケース・バイ・ケースであったと考えておいた方がよいかもしれない。なお、三八号文書等には付箋が付されており、書状の内容が簡潔に記されているが、三宅前掲論文によれば、これらの付箋が立てられている文書は、「蜂須賀家文書」中に存在する「御代々御書御草案書抜」という史料に、文字通り「草案」から書き抜かれたものと一致するという。つまり、これらの付箋は「御代々御書御草案書抜」作成に当たって選ばれた文書に付された目印ということになる。整理・筆写のあり方に移る。これも「草案」全体については、三宅前掲論文の詳細な検討に譲り、「至鎮様御代草案」に限定した一、二の点について言及するに留める。

「草案」はもちろん書状を集成しているわけであるから、各文書のほとんどに年付はない。「草案」に作成の過程で年代比定がされて整理され、各冊子の表紙にはその年代が記載されたのであるが、「至鎮様御代草案」各冊子の表紙にある年代記載については、三宅前掲論文が、疑問の余地を指摘しながらも、「現存する至鎮「草案」が謄写された天保期の整理事業が、かなりの精度で厳密に行われたことを考え合わせると、現段階では特に内容に矛盾が生じない限

り、表紙の年代記載をそのまま採用してもよいであろう」としている。たしかに、翻刻に当たっては、内容に関連する簡単な討論を併せて行っていたが、ほとんど年代比定について矛盾は指摘されなかった。この点、三宅前掲論文を裏づける結果となっているといつてよい。なお、第三冊末尾の文書が十月十七日付で、第四冊はじめは十月十五日付であるから二日の前後があるが、整理に当たったケアレスマスとみて大過ないであろう。

「草案」の筆写に当たった人物についても、三宅前掲論文が考証を行い、文政七年（一八二四）以降蜂須賀家の奥小姓を勤めた青山徳定なる人物に比定している。膨大な「草案」を筆写し、年代比定・整理を行っているのだから、かなりすぐれた人物であったことは間違いないであろうが、「至鎮様御代草案」に限っていえば、すでに二百年以上を経過し、使用されている文言等にも大きな変化を生じていたと予想され、誤写と思われるもの、また解説できなかったためだけの臨書をはかったのかと思われるものが散見された。

たとえば、前述の一〇六号文書等に見られる文言であるが、字は「御内拝候」と読めるのだが、それでは意味がしっくりせず「御自筆」を誤写したのではないかと案が出されたわけである。活字からはとても「御自筆」を「御内拝候」と見誤ることは想像できないであろうが、全体のくずし方からの判断である。もちろん、この例にしても、前述のように「御自筆」とことさらに一〇六号文書等だけに補記された理由が判然としないのであって問題は残るが、一つの案として参考にされたい。同様に、他の不審な字句についても誤写等の疑問があるものは、考えられるかぎり他の可能性がある読みを、傍注として付した。もともと、「草案」は影写でないわけだから、変ないい方だが、堂々と間違われてしまっていると、明らかに文脈上おかしいと思ってもいかなる字句を誤写したのか推定し難くなっている。そもそも、文脈上不審を感じなければ読み過ぎている場合も多々あるであろう。こうした限界は自認するところである。なお、やや印象的な表現になつてしまいが、青山が解説できなかった、あるいは読みに自信がない部分は前後と比較して不自然に大きな字体になり、ある意味当然だが、われわれとしても解説し難いところが多くなっている。

内容については一部前述したが、特に政治的に重要であると考えられ、多くの論点を提供しうるといえる。いうまでもなく「至鎮様御代草案」の発給時期である慶長十年代後半は、徳川・豊臣の対立の最終局面であり、また家康・秀忠の二頭政治の最中でもある。至鎮は家康・秀忠のルートのみならず、豊臣のルートからも、人脈を活用してできる限り情報を収集しようとしており、政

治的緊張下にあつて、まさに情報こそが生き残りの鍵を握っていることが示されているといえる。徳川方に細心の心遣いをしてるのは当然といえようが、豊臣方に対してもけつして疎略なあつかいをしておらず、豊臣方の情報も至鎮にとつてさうとう有用であつたと考えられる点なども注意しておいてよいと思われる。これは、逆にいえば、徳川にすれば、豊臣が十分脅威となりうることを示していると考えられるからである。もちろん、より人的關係に即した追究も可能であり、三宅氏も『至鎮様御代草案』を活用して「近世前期蜂須賀家と親類大名井伊直孝」(『彦根城博物館研究紀要』一七号、二〇〇六年)を著し、大名同士の關係の検討から幕藩關係の問題に迫っている。

本研究の課題に即して、「公儀」について若干言及しておく。そもそも、「至鎮様御代草案」においては、「公儀」文言の使用例はたいへん少ない。三二号文書の「公儀御普請」、三八号文書の「公儀御用」、七〇号文書の「公儀御普請」、七四号文書の「公儀より大舟御改」、九九号・一〇〇号文書の「公儀御普請」、一三八号文書の「公儀之材木」、四二二号・四二三号文書の「公儀御普請」等であるが、内容的にはほとんどが役に関わるものである。この点、当該期の「公儀」を詳細に分析した藤井讓治氏が、「大名の幕府公儀・幕府公儀の世界への帰属意識は、実質的には幕府から課される普請役などの「公役」を、「天下人」からのものとしてではなく、自らも構成員である公儀のための役として、いかえれば領主の共同利害達成のための役として果たさせることになった」(「公儀」国家の形成、藤井『幕藩領主の権力構造』、岩波書店、二〇〇二年、所収)と述べているところが想起されて興味深いといえよう。ただ、使用例の少なさ自体も注意しておくべきであつて、当該期の政治状況との関わりで深く追求されなければならないであろう。

なお、「公儀」と密接に関わる点もある。「公方」になると、使用例はさらに少なく、四三七号文書に「公方様無御存知儀」と見える程度である。この点も藤井氏が「慶長十年から慶長十八年はじめまで「公方様」と呼ばれる人物は存在せず」(「近世「公方」論」、藤井前掲書、所収)と述べているところとほぼ符合するであろう。

以上、翻刻に関わっていくつか述べてきたが、最後に翻刻に当たったメンバーの氏名を挙げておく。読み直しの際参加・解読した者は、編者として冒頭に挙がっている糟谷・久保・貫井・堀・松澤・宮崎・山本(五十音順)であるが、この他に翻刻に協力したメンバーは次の通りである。

荒垣恒明・泉正人・遠藤ゆり子・菊池浩幸・黒田基樹・長谷川裕子・松本和也
(五十音順)

なお、最終的校訂には久保健一郎・宮崎肇・山本隆太郎の三名が当たった。また、人名索引作成には山本隆太郎が当たった。前述のように、会の記録が残されていないので、氏名の記載漏れもあるかも知れないが、ご海容いただきたい。
(文責 久保健一郎)

【凡例】

- 一、翻刻にあたっては、国文学研究資料館所蔵の原本を用いた。
- 一、原文には適宜読点「、」と並列点「・」を加えた。
- 一、表記は原則として常用漢字を用いた。但し、原文に使用されている異体字・俗字を適宜用いている。変体仮名は、現行の平仮名によつて表記した。
- 一、表紙・付箋・押紙の部分は「」をもつて囲み、その旨を注記した。
- 一、虫損などの欠失は、概ねその字数を計り、□または■で示した。墨抹は■、見せ消ちは抹消された文字の左傍に××をもつて示した。また、判読不能の文字については、そのかたちを原体のまま掲げた。
- 一、校訂者が加えた案文には、○を冠して本文と区別し、各文書の末尾に標示した。
- 一、人名等は、原則として、各文書の初出の箇所に傍注を付した。

〔包袋〕
〔貼紙〕
至鎮様御代

目六外

慶長十四年酉年より同十九年寅年已上
一草案
八冊

〔貼紙〕
此一袋之品、写ニ候ゆへ、江戸へ可差置処、少々存寄
有之、先当年限聞帳写之箱へ入置、右目錄ニも記置候
事、

天保八酉五月廿日

〔表紙〕
慶十四

案紙

六月廿五日

九月廿日

一 内藤忠清・石川重次宛書状（一一一）

態令啓達候、随而是式候へとも、大豆拾石致進入候、誠書中之驗迄候、何様与
風為御見舞可罷越候条、期面上候、相替儀共候ハ、可被仰聞候、恐惶、

六月廿五日

〔通書〕
内藤金左様

〔通書〕
石川八左様

二 春清他宛書状（一一二）

態以飛札申候、益田大膳相煩、為養生罷越候、於其元天葉衆之御葉被下度由
望之間、御引合候て、諸事御肝煎頼入候、拙子事、丹波之御普請自身參儀無用
之由、任御触在国仕へく候、何様ふと罷登、御葉給度念願候、返々大膳儀頼申
候、恐々謹言、

六月廿五日

春清老

道越老

道与老

〔マシ〕
宗味

又作

三 祝丹波他宛書状（一一三）

態令啓候、先書ニ得御意候、益田大膳儀於其元別而御肝煎之由、近頃忝候、早々
御礼可申達候处、何かと延引申候、委曲長右衛門可申達候、恐惶、

六月廿五日

祝丹波様

〔小作家考〕
小民部様

森長門老

渡権兵様

青山助左様

四 松平重勝・内藤忠清宛書狀（一一四）

態以使者御見舞申候、其元御繩張此頃相極申候哉、御普請之御様子具被仰聞候者可忝候、何様与風御普請場見舞可申候条、其節期面上候、随而是式輕微之至候へとも、御帷子十之内単物三令進入候、委曲此者可得御意候、恐惶、

六月廿九日

松平大隅様
（重勝）

内藤金左様
（忠清） 鷹之霍桶一進入申候、御實既可為本望候、

五 玉虫繁茂宛書狀（一一五）

雖未得御意候、企使札候、為御普請御奉行其地へ御越之由、御苦勞存候、早々可申達候処延引、失本意存候、從城 泉 殿も別而得御意候様ニと蒙仰候、向後者深重可申承と致満足候、次雖乏少之至候、御帷子拾之内単物三令進覽候、何様期後面候、恐惶、

六月廿九日

玉虫對馬守様
（繁茂）

六 藤堂高虎宛書狀（一一六）

尚々鷹之霍桶一・鮎之鮎桶二送申候、誠御志畏存候、先可申と御普請ニ付遲候、私者共ニ御懇意之由、別而忝存候、猶奉頼候、早々以使者可得御意候処、彼是致遠慮非本意存候、漸此頃御繩張相極申候哉、御普請之様子具被仰聞候者可忝存候、何様御普請場見舞可申間、其節期面談候、久々不申承御床敷さハ相積申候、就中是式見苦候へとも茶弁当一荷令進獻候、御小屋場之御用と存計候、委此者口上ニ申含候、恐惶、

廿九日

藤堂高虎
藤泉州様

七 石川重次宛書狀（一一七）

猶々私者ニ別而御心付之由申越候、不始于今忝存候、遲候へとも以使者得御意候、其辺御城所御繩張此頃相極可申と存事候、御普請之様子委可被仰聞候、拙子手前石場愚由申越、無心元存候、諸事御指南奉頼候、いづれもふと御普請所見舞可申候間、其節期面談候、次是式ニ候へ共、御帷子拾之内単物三并夏切之壺一・鷹之霍桶一・鮎鮎桶一令進入候、御志之驗計候、猶重而可申承候、恐惶、

廿九日

石川八左様
（重次）

八 片桐且元宛書狀（一一八）

態以飛札申入候、随而益田大膳義此中被成御肝煎、被添 御詞候付而、驢庵・盛法印御菓被下候得共、定典菓衆不得驗相果申候、此間御肝煎共忝存候、為御礼如此候、恐惶、

七月四日

片桐且元
片市様

九 小林家孝他宛書狀（一一九）

態企飛札申候、益田大膳義此中御肝煎共畏存候、以御取持典菓衆御菓被下候得とも、不得驗相果申候、此間別而御肝煎共之由忝候、為御礼令啓候、恐惶、

七月四日

小林家孝
小民部様
祝丹州様
森長門老
真藏人様
青助左様

一〇 春清他宛書狀（一一一〇）

猶以一昨日朔日之御狀令下着拝見申候、返々大膳御肝煎共候つる、忝候、
此中者大膳煩付而、種々御馳走共之由畏存候、御肝煎故大医衆被加御療治候へ
とも、時刻到来ニ付而相果候由、不及是非候、此間之為御札如此候、恐惶、

七月四日

春清老

道越

宗味

又作

道味

一一 松大炊宛書狀（一一一一）

態以飛札得御意候、此頃御煩氣之由、遲承無沙汰仕候、温天之時分、近頃無御
心元存候、為御見舞、如此御座候、恐惶、

七月十一日

松大炊様

一二 片桐且元宛書狀（一一一二）

態致啓達候、隨而私領分之舟問之儀、去年より申付候、此中少々出入御坐候様、
承及候間、無心元存、長右衛門召寄、相尋申候、無調法之儀申付候哉と令迷惑
候、右之様子者、拙子手前三不相限、余なミも御坐候様ニ、連々承候付而、如
此候つる、とかく御指南所仰候、委曲長右衛門口上ニ可得御意候、

七月十八日

片桐且元
片市正様

一三 中井正清宛書狀（一一一三）

態令啓候、仍御親父御死去之由、御力落令察候、遲承致延引候、為香典銀子十
枚進入候、委曲長右衛門口上ニ申含候、恐惶、

七月十八日

中井大和様

一四 道与宛書狀（一一一四）

其已後者不申承御床敷候、隨而和州御親父死去之由、無御心元候、遲承延引心
外候、よき様ニ被相心得可給候、次先度拙子領分大坂問之儀ニ付而、貴老別而御
肝煎之由、満足不過之候、和州へもよく候、委曲長右衛門可申候、自然
四国辺用之儀、可被申越候、恐惶、

七月十八日

道与老

一五 本河弥光德宛書狀（一一一五）

良久以手札も不申承候、無沙汰所存之外候、去春罷登刻者、節々得御意本望至
極不淺候、其已後丹州御普請彼是手前取紛、不申通候、失本意存候、其元珍布
儀無御坐候哉、何様頓而可罷登之間、相積儀可申承候、依而是式笑敷存候へと
も、塩百俵令進入候、自然四国辺御用之儀候者、可承仰候、猶期後面之時候条、
申残候、恐々、

七月廿一日

本阿光德老

人々御中

一六 德泰宛書狀（一一一六）

其已後者不申通御床布候、去春罷登刻ハ節々御尋畏存候、其節御茶不給、于今
御殘多存候、何角罷登候者、相積儀可申承候、又是式候へとも、塩五十俵進候、
国物之志迄候、猶期後音候、恐々、

七廿一日

德泰老

一七 春清宛書狀（一一一七）

（本阿弥光徳）
光・徳・徳泰へ余無音之間、以使札申入候条満足候、其元珍珍布事候ハす候

哉、毎々御数寄迄と令察候、次ニ是式候へとも、爰元之物ニ候条、塩五十俵送
申候、御志之驗迄候、自然四国辺御用之儀可承候、恐々、

七月廿一日

春清老

一八 山内康豊宛書狀（一一一八）

去十八日之御狀到来、令拝見候、随而三左衛門殿普請場被成御見舞儀、如蒙仰
（池田輝政）
十八日ニ篠山へ御見舞之由、申越候、私儀御国之衆今一兩人も御越候者、可忝
と存候、扱者貴さまなとも、被成御越候哉、私者緩々と存、罷在事候、此辺御
渡海之刻、一人被下候者、御供可申候、猶自是可得御意候、恐惶、

七月廿一日

（山内康豊）
山對州様

一九 滝川雄利宛書狀（一一一九）

貴札令拝見候、然者泉殿参候間、于今不相濟之候由、無御心元存候、就其（鶴兵衛）鶴兵
殿・小兵部殿へ、以書狀得御意候、鶴兵へハ委從貴様被成御物語由、申入候
（小笠原秀忠）
間、可被遂御談合候、貴様御心遣令察候、様子承度存一人添進之候、御報ニ委
可被仰聞候、奉待候、恐惶、

七月廿四日

（羽形部様）
羽形部様

二〇 鶴殿氏長宛書狀（一一二〇）

御狀忝令拝見候、随而方々御仕合共にて御下着候由、尤目出度候、於伏見者為
（川口宗信）
何御馳走も不申候、御殘多存候、次川口久助殿子息之儀、被仰聞候、此春も直

ニ如得御意候、私所被立退候仕合、帰参可被申候様子にて無御坐候、其段者、
重而可申承候、貴様再還被仰儀、難致違背候へとも、右之仕合候之間、被分思
召可被下、（孫須賀宗茂）蓬庵も達而被申候へとも、右之様子候故、不及是非候、恐惶、

七廿四日

（鶴殿氏長）
鶴兵庫様

二一 井伊直勝宛書狀（一一二一）

雖未得御意候致啓上候、尤遂祇候、御祝詞可申達儀本意御座候へとも、在限之
御事候条、無其義略義之至存候、為御祝儀御太刀一飾・御馬代銀子廿枚並帷子
十之内單物三致進入候、是式表御祝斗候、委曲使者口上ニ申含候、恐惶、

七月晦日

（直勝）
井伊右近大夫様

二二 小笠原秀政宛書狀（一一二二）

雖遅々候以使者得御意候、先以去春者豊前へ之御祝儀、尤目出度奉存候、其刻
伏見へ罷登、（主井利徳）大炊殿・兵庫殿などへハ得御意候つる、併為何御馳走も不仕非本
意存候、爰元豊州へ之通路、其上程近儀ニ御坐候間、諸事御用等可被仰下候、
豊前へも其通被仰遣、其辺御同前ニ不被置御心、御用蒙仰様ニ候ハ、可忝候、
随而御祝詞迄ニ御太刀・馬代・御帷子十之内單物三致進覽候、委儀此者口上ニ可
得御意候、恐惶、

七月晦日

（小笠原秀政）
小兵部太輔様

二三 鳥居忠政宛書狀（一一二三）

態得御意候、随而今度佐保山へ御祝言、千秋万歳目出度存候、程近義ニ御坐
候者、致祇候可申承義本意御坐候得共、遠路之御事候条、無其儀候、為御祝詞
態迄ニ御太刀・馬代・御帷子十之内單物三令進入候、猶期後音之時候、恐惶、

七月晦日

(鳥居志忠)
鳥左京様 まいる

二四 大野治長宛書状 (一一二四)

雖無指儀候致啓達候、去頃者為 御目見、駿府へ御下向之由遅承、以使者も不得御意、失本意存候、先以御仕合共にて御下着之由、珍重此事候、於駿府珍敷御沙汰も無御坐候哉、承度候、御所様近々御上洛之様ニ風説御座候、様子委

(開也)
被仰付 候者可忝候、返々無残所御仕合にて御上之由、大慶不可過之候、恐惶、

八月十六日

(大野治長)
大修理様

二五 村越直吉他宛書状 (一一二五)

去四日之御状、從板倉伊賀守殿宛被下、昨日至在所參着拝見仕候、仍公家衆猪熊依不形儀就被致懸落、私領分堅相改可申由、畏奉存候、則穿鑿仕候、伊賀守殿よりも委被仰聞候、尤不存由断候、恐々謹言、

八月十六日

(直吉)
村越茂助殿

(正盛)
成瀬隼人殿

(直次)
安藤帶刀殿

(長安)
大久保石見守殿

(正盛)
本多上野介殿

二六 板倉勝重宛書状 (一一二六)

去十一日之貴札・駿府從御年寄衆御状両通、昨日參着致拝見候、随而今度公家衆依御穿鑿、猪熊被致懸落、堅就御改、私領内尋可申候由、畏得其意存候、則相尋候由候、若此辺ニ被罷在候者、重而可得御意候、聊由断不仕候、恐惶謹言、

八月十六日

(板倉勝重)
板伊賀守様

二七 生駒長兵宛書状 (一一二七)

態令啓候、去月始頃候哉、自 常眞様被成御書候、則貴報可申上候処、其已

後丹波之御普請場へ罷越延引、致迷惑候、鵜之儀被仰下候、先度蓬庵ニ被

仰付刻、随分相尋被申候つる、曾而此辺にもよき鵜無御坐由申候、但私無案内御坐候条、以連々相尋、勝申たる鳥御坐候者、何時も可致進上候、可然様可預御取成候、恐々謹言、

八月十七日

生駒長兵さままいる

二八 渡辺勝宛書状 (一一二八)

此中者度々御状忝候、如仰自丹州者罷登、御茶をも被下度候つれとも、用所共御坐候而致帰国候、手前御普請も大方致出来候、可御心安候、

(長安)
一、淡州御国替之由、未承候キ、

一、公家衆御穿鑿末事相済候由、近頃不慮なる事候、

(織田勝重)
一、津田左門殿御仕合承、驚存候、有楽へ以使者可得御意候と存候処、はや

(後説也)
駿府へ御下之由間、無其儀候、御上之刻可被仰聞候、扱々にかくしき

仕合、有楽御心中奉察笑止ニ存候、

(清南)
一、桑山又四郎殿御身上同前之由、彼是驚存候、

(徳川家康)

一、大御所様ふと可有御上洛様ニ被仰聞候段、未得其意候、弥必定之左右候者、可被仰聞候、

一、彼茶入之義、礫失念仕候キ、私義者中々不存寄候、

一、爰元者去十日ニ大雨大風、近年竟不申候洪水にて御座候つる、其元如何、無御心元候、猶々珍布御沙汰候者承度候、恐惶、

八月十七日

(渡辺勝)
渡筑州様

二九 脇坂安治宛書状(一一二九)

態以使者得御意候、随而貴様城易之由承及候、必定ニ御坐候哉、御太儀存候、為御見舞如此候、遅承令延引候、委此者口上ニ可得御意候、恐惶、

八月十八日

(脇坂安治)
脇中務

三〇 脇坂安元宛書状(一一三〇)

態令啓候、随而貴様御知行替之由承及候、事実候哉、御太儀存候、為御見舞如此候、自然御用等御坐候者、可被仰聞候、遅承令延引候、猶此者口上ニ可得御意候、恐惶、

八月十八日

(脇坂安元)
脇淡路守様

三一 織田長益宛書状(一一三一)

(織田長益)
態以飛札得御意候、随而今度左門殿御仕合、無御心元様ニ承候、其節早々可申上候処、はや駿府被成御下向たる由ニ候間、無其儀、失本意奉存候、駿府・江戸御仕合にて、頓而可為御上洛候条、其節可得貴意候、雖無指儀御坐候、被成御下之刻、無奉行候間、如此御座候、恐惶、

八月廿五日

(織田長益)
有楽様

三二 西尾利氏宛書状(一一三二)

(坂井成政)
返々、坂井久三郎殿・同半左衛門殿へ御言伝申度候、

先日重陽之御報、持せ進候つる、下着仕候哉、時儀可然様奉頼候、先書ニも如得御意、年内ニ

(徳川家康)
大御所様被成御上洛様ニ、此辺ニハ申成候、様子承度存候、

(藤原實成)
一、蓬庵も久布不致 御目見候之条、冬始時分罷下、江戸へも可致祇候之

由、内存御坐候、可然と思召候者、御報早々奉待候事、

一、来年 公儀御普請可有御座候哉、相定儀候ハ、可被仰聞候、猶重而可得御意候、恐惶謹言、

又申候、此辺へ去ル十日十五日両度、大水大風にて御坐候、其元無心元存候、

八月廿五日

(西尾利氏)
西藤兵様まいる

三三 平小兵他宛書状(一一三三)

其已後へ終以書札も不申承、無音心外存候、其元珍敷御沙汰も無御坐候哉、

(徳川家康)
大御所様年内ニ可被成御上洛様ニ、申成候、承度存候、自然四国辺御用之事候者、可承仰候、随而道服ニ令進入候、書中之驗迄候、恐惶、

八月廿五日

平小兵様

受聞老

三四 松平重勝他宛書状(一一三四)

猶以、先日已来以書札も不得御意、無音之至候、

為重陽之御祝儀、御小袖一重、致進入候、御祝詞計候、随而御普請如何程致出

来候哉、私手前いかゝ、無心元存候、万端奉頼計候、其辺御滞留中、相応之御用等、被仰聞候者、可忝候、恐惶謹言、

九月朔日

松平大隅様 (重勝)
内金左様 (内藤忠博)

玉対馬様 (宝由繁茂)

三五 石川重次宛書状 (一一三五)

猶以、はや夜寒ニ御坐候間、夜物一令進入候已上、
為重陽之御祝義、御奉行衆へ以使者申入候之間、可然様ニ御指南奉頼候、貴様へも御小袖一重、令進入候、誠幾久と存計候、御普請何程致出来候哉、手前いかゝ、無心元候、万端奉頼候、去夏以来、以書状も不申入、所存之外候、何時分、御隙明申候はん哉、返々先日者種々申承、致満足候、不始于今御懇志、難申尽候、恐惶、

九月一日

石川重次 (石川重次)
石八左様

三六 都築為政宛書状 (一一三六)

御状忝拝見申候、誠久々不申承、朝夕御床敷存事候、其元御普請之由、嘸々御苦勞と令察候、珍布義候ハ、承度候、然者、佐飛州より石鉢就御所望、舟之義、蒙仰候、安御事候、即申入候、飛州次第二廻可進候、御数寄出申候由、珍重候、何にても御用之義、被仰聞候者、可為本望候、猶重而可申承候、恐惶、

九月一日

都弥左様 (都築為政)

三七 佐飛州宛書状 (一一三七)

杳々不申通、御床敷候、未大仏辺ニ御入候由候間、大坂へ以書状も不申候、拙子式も丹波之御普請ニ取紛申候、可有御推量候、何様頼而、可罷登候条、相積儀可申承候、然者、都弥左より石鉢之義申来候、被遣候者、長右衛門かた迄、

可有御渡候、拙子舟にて江戸へ遣可申候、返々其已来者、御遠々敷候、其元珍布義候者、承度候、恐惶、

八月晦日

佐飛州様まいる

三八 中井正清宛書状 (一一三八)

(付渡)
「大仏木之事」

又々、材木見及申付而、延引申候、
態以飛脚得御意候、駿府御下向之由、其節不存無沙汰仕候、随而、四国辺者、去月十日・十六日両度、大風洪水にて御坐候、就其、川筋大仏衆中之材木、流出申鉢ニ候、拙子手前ニ切置候木も、過半海端へ出申候、定自衆中注進可被申候、最前より如申候、大なる木者、悉杉にて御坐候、拙子木之内ニも、杉にては大なる木、十・廿相見申候、自然杉にても、公儀御用にも御坐候者、進上仕度候、被仰上、可然儀ニ候者、可被達 上聞候、御時儀可然様、奉頼存候、桧ニハ、大仏之たるきなど、少々見申候迄ニ候、猶期後音候、恐惶、

九月一日

中井正清 (中井正清)
中大和様

三九 道与宛書状案 (一一三九)

猶以、大仏之柱、桧ニ一本出申候へとも、中途にておれ申候、流木見及申付而、延引申候、此辺者、近年之風雨にて御坐候つる、其元如何、無御心元存候、

態申入候、爰元者、去月大風大水にて候つる、其元無御心元候、就其大仏之材木 **木**も数多流出申候、拙子木も、過半海はたへ出申候、雖然、桧壹本も

無之、いつれも杉にて候、和州はや駿府へ御下向候哉、承度候、さ候者、貴老御隙にて候はん間、ふと御下待申候、拙子妹の道具も少詔申度候、材木之儀、彼是談合申度事ニ候、未和州それに御入候者、以書状申候間、可然様ニ頼入候、杉は過半出申候、桧もちいさき丸木、大仏のたるきの様なる物、相見申候、返々、ふと御下、待申候、恐惶、

九月一日

道与老

四〇 池田輝政宛書狀（一一四〇）

為重陽之御祝儀、以使者得其意候、隨而、御小袖一重、致進上候、何様期後音之時、可奉得其意候、恐惶、

九月五日

（池田輝政）
三左様

四一 池田由之宛書狀（一一四一）

為重陽之御慶、御小袖一重令進入候、誠幾久可申承驗迄候、隨而其元相替御沙汰無御坐候哉、承度存候、何様期後音之時候条、不能細候、恐惶、

九月三日

（池田由之）
池羽州様

四二 道弥等宛書狀案（一一四二）

其已後者久敷不申承候、其元相替儀無之候哉、御床敷迄候、築申付候間、塩鮎一桶送申候、御志迄候、恐々、

九月十日

道弥 道也
宗味

又作 道味
三四郎

（ハナ）
宇庵

四三 植原八藏等宛書狀（一一四三）

其已後者久敷不申承候、無沙汰心外候、隨而津田左門殿御身上、今程御出仕も無之、無御心元様承候条、以使者御見舞申候、此者不案内御坐候間、御指南頼申候、何かと仕延引致迷惑候、其段可預御心得候、猶追々可申承候、恐惶、

九月十日

植原八藏さま

（彌五）
津川左近様

稲田半助様

四四 織田長頼宛書狀（一一四四）

態以使者得御意候、然ハ今程御父子御中違之由、如何無御心元仕合候、尤參可致御見舞儀候へとも、遠限之御事候条、先如此御坐候、猶追而可得御意候、相応之御用等、被仰付候者可忝候、委八藏殿迄申入候、恐惶、

九月十日

（織田長頼）
津左門様

四五 小笠原秀政宛書狀（一一四五）

去廿八日貴報昨夕到在所參着致拝見候、去月江戸へ被成御坐、此頃御帰城之由、御太儀奉存候、

（龜居忠政）

一、鳥左京殿女中就御不參、最前大半左殿迄書狀申入候キ、則被得御意候所、使口上ニ具被仰下趣、一々致承知候、不及是非仕合共ニ御坐候、右之様子努々

不存、鵜殿兵庫殿へも申入、只今行当致迷惑候、兵庫殿へも右様子得御意候間、

乍恐可然様被仰遣可被下候、言語道断之儀共更々不存、鵜兵へも得御意候段、失面目存候、如御存知、尾州ニ兄弟共御坐候間、先それ迄罷登候様にと、柘

（正時）
植平左衛門かた迄申遣候、返々不相届仕合存知候者、得御意候かと可思召所、

御心底別而迷惑仕候、猶兵庫殿へ呉々可然様ニ被仰遣可被下候、

一、私妹縁辺之儀、御在増之通使口上ニ申聞候、別而忝存候、何様ニも御指南次第と存候、殊以一段可然様子ニ御座候間、弥兵庫殿被成御相談、被仰結可被下候、偏奉頼候事、

一、駿府・江戸御無事之由、大慶奉存候事、

一、使者ニ被仰聞御心付具申聞候、深心之御懇情、余身忝候、私父に子十方も無御座、万端疎略迄御坐候、

随分油断存間敷候、猶以被思召寄所、毎々被加御詞可被下候、(繪巻真景)蓬庵も御奇特之御心付忝由候、猶追々可得御意候、恐惶、

猶以江戸御座敷致出来珍重存候、猶自是可申上候、

九月十日

(小笠原秀政)
小兵部様

四六 鵜殿氏長宛書状 (一一四六)

態以飛札得御意候、先度鳥居左京殿女中之儀ニ付而、被添御詞をも被下候様ニと

申達候キ、其節小笠原兵部殿(秀政)も同前ニ得御意候つる、内儀連々不相届、今度

岩城立退候仕合、委自兵部殿被仰聞承候、最前右之様子努々不存、得御意候段、

御心底何とも致迷惑候、言語道断之仕合不及是非存候、一言之御肝煎も御無用御坐候、返々不相届、拙子存知得御意候かと可思召所、御恥布存候、委曲柘植

(正時)
平左門可得御意候、恐惶、

九月十日

(鵜殿氏忠)
鵜兵庫様

四七 鵜殿氏長宛書状 (一一四七)

追而申入候、私妹縁辺之儀、自小兵部殿有増被仰聞候、御肝煎之段、天山泰

存候、何様とも、偏奉頼計候、弥兵部殿被成御相談、被仰結可被下候、恐惶、

十日

(鵜殿氏忠)
鵜兵庫殿

四八 滝川雄利宛書状 (一一四八)

態以飛札得御意候、然者左京殿女中今度岩城を被立退候仕合、漸頃承届候、

主連々不被相届、猶以此度様子言語道断無是非仕合、被添御詞をも被下候へと

得御意候、鵜兵殿(鵜殿氏忠)などへも御恥敷儀共候、私努々右之様子不承候付而、兵庫

殿などへも申入行当申候、さ様ニ不相届候者、何とて貴老なども被成御許容候哉、早々尾州迄先被罷登様ニ被成可被下候、頓而自是以使者可得御意候、恐惶、

九月十日

(羽形)
羽形部様

四九 都築為政・藤水■宛書状 (一一四九)

態以飛札得御意候、終不申入候間、思召寄間布候、鳥井左京殿女中之儀付而、

御肝煎も被成被下候へと、小兵部殿・鵜兵殿(小笠原秀政)迄先度得御意候、就其主連々

不相届、殊以今度岩城を立退候様子、漸此程承届候、沙汰限不及是非仕合御坐候、其様子少も不存、御詞をも被添候へと申入候而、兵部殿・兵庫殿御心底迄

迷惑候、更々不存申入候由兵庫殿へ能々被仰入可被下候、右之成行之上へ、可相澄様子ニ而無之候、早々此方へ呼越可申候、尾州ニ兄弟御座候条、先以尾州迄

罷越候様ニ仕度候、万事委平左衛門可得御意候、恐惶、

十日

(都築為政)
都弥左様

藤水七様

五〇 片桐且元宛書状 (一一五〇)

初鷹袍今致到来候間、二居進上仕候、可然様ニ御披露奉仰候、貴様へも令進入度候へと、未致出来候条、頓而跡より可進候、恐惶、

九月十五日

(片桐且元)
片市正様

五一 太内玄蕃宛書狀（一一五一）

態以使者御見舞申候、随而今度不慮之仕合にて、大坂御立退候由、千万無御心元儀共候、拙子儀御親父豊州別而得御懇情候つる、何にても相当之用等被仰聞候ハ、可為本望候、早々可申達を御在所不存延引、失本意存候、恐惶、

九月十五日

太内玄蕃様参

五二 松井康重宛書狀（一一五二）

猶以四国辺相応御用被仰付候者可忝候、其已後絶不得御意、非本意存候、先度者始而申承候处、別而御懇情共忝存候、御普請漸致出来候哉、私手前いかゞ無御心元存候、猶追々可得御意候条致省略候、恐惶、

九月十五

（松井康重）
松平周防守様

五三 滝川忠征宛書狀（一一五三）

猶以来年御普請之御沙汰候ハ、可被仰聞候、三書罷登候間令啓候、其已後者以書札も不申承無音之至存候、随而駿府就御住处、其元御引越之由御太儀共候、自然御用等可承仰候、疎意存間布候、猶期面上候、恐惶、

九月十六日

（滝川忠征）
滝豊前様

五四 荒尾隆重宛書狀（一一五四）

其已後者絶不申承、無沙汰心外存候、随而鶴致出来候条、一居令進入候、御慰ニ御覧候者、可為本望候、返々久々無音非本意存候、猶期後音候、恐惶、

九廿日

（荒尾隆重）
荒志摩様

五五 池田利隆宛書狀（一一五五）

良久不得御意御床敷奉存候、随而鶴二居進献仕候、勝不申候へとも初鷹ニ而御坐候、猶重而可得御意候、恐惶、

九月廿日

（池田利隆）
松武藏守様

五六 荒尾成房宛書狀（一一五六）

鶴致出来候条、二居令進入候、則以書狀得御意候条、可然様奉頼候、貴様へも一居進覧候、其已後久々不得面談御床敷存候、猶使口上ニ申合候、恐惶、

九廿日

（荒尾成房）
荒遠江守様

五七 池田由之宛書狀（一一五七）

武藏守殿へ鶴進上申候ニ付而、以使者得御意候、荒遠州へ申達候、貴殿岡山ニ御坐候ハ、被仰談可預御披露候、随而貴殿へも二居進入候、猶重而可申達候、恐惶、

九廿日

（池田由之）
池羽州様

五八 日置忠俊宛書狀（一一五八）

御普請漸相調申候由承候、はや御帰城候哉、先度ハ早々申承、于今御残多存候、併久々ニ而懸御目満足不過之候、随而時分候間、鶴一居令進入候、御慰ニ御覧候者可忝候、猶期後日候、恐惶、

九廿日

（日置忠俊）
日置豊前様

(表紙)
「慶拾四」

御書之蹟書

九月廿四日

十月廿三日」

五九 藤堂高虎宛書狀(二一一)

其地再往御見舞之由、御苦勞共候、先度者種々御懇意過分至極存候、隨而

(藤堂實家宛)

蓬庵へ御心付候通具申聞候、被寄思召奇特之御懇情、別而忝由被申候、内々

罷下致 御目見度内存御坐候、去春已來者、眼病散々之躰候つる、頃者すきと

よく御坐候間、頓而可罷下由被申候、

(徳川家康)

大御所様年内ニも御上洛之様ニ、去頃

下々申成候キ、必定被聞召届候者、御報ニ可示被下候、猶追而可得御意候、恐惶、

九月廿四日

(藤堂高虎)
藤泉様

追而得御意候、其元御普請、近々致首尾候哉、私手前いかゝ無御心元存候、何角御指南奉頼計候、将又來年之御普請之御沙汰など御坐候ハ、承度存候、恐惶、

九月廿四日

藤泉様

六〇 石川重次宛書狀(二一二)

(藤堂高虎)

藤泉州御越之由承候条申入候、御参会之節可預御心得候、隨而御普請近々致首

尾様ニ承候、私手前いかゝ無御心元存計候、万端被加御心可被下候、然ハ先度

(藤堂實家宛)

蓬庵 駿府へ罷下 御目見仕可然候之由、和泉殿御心付ニ御坐候つる、其由

則申聞候、頓而罷下由被申候、年内ニも 大御所様御上洛之様ニ下々申付而聞合

被申候、慥成様子被聞召候者、御報ニ可蒙仰候、此由泉州へも可然様ニ頼存候、

返々御普請之様子承度候、恐惶、

九廿四日

(石川重次)
石八左様

六一 淺紀伊守宛書狀(二一三)

態致啓上候、先度於丹波者、節々得御意過当至極存候、隨而

[当力]

島 国にて出来

仕候鵜二居勝不申候得共、初鷹にて御坐候条、先令進覽候、猶後日之時存候、

恐惶、

九月廿四日

(淺野幸長)
淺紀伊守様

六二 溝口因幡守宛書狀(二一四)

猶々材木慥可有御落手候、

鵜出来候間、紀伊守殿へ令進覽候、可然様ニ頼存候、貴殿へも二居進之候、隨而いつそや蒙仰候、自彈正殿御所望之杉丸太、其節則申付随分急申候へとも、山出難所ニ付而致延引候、式百本申付候へとも、先度之大水にて悉流出、端々失申、只今百五十本進之候、貴殿より之御心付迄ニ候間、彈正殿へハ不得御意候、可然様ニ奉頼候、三間之丸太ハ大切付而、木いつれも悪布御坐候、紀伊守殿へハ右之通得御意候、恐惶、

九廿五日

溝口因幡守様

追而得御意候、彈正殿御所望之由にて、杉丸太之儀自溝口方去夏候哉被申越候、山出難所ニ付而延引迷惑仕候、此地ニも三間木ハ大切御坐候故、木悪布御坐候、委曲溝因迄申達候、恐惶、

廿五日

(淺野幸長)
淺紀伊守様

六三 上宗老宛書狀(二一五)

其已後者、終不申承御床布存候、当国にて致出来候鵜紀伊守殿へ令進入候、可然様ニ奉頼候、貴老も一居進申候、御慰ニ可有御覽候、隨而彈正殿より御所望

之由にて、杉丸太之儀、去夏候哉自溝因幡殿承候故、其節則申付候へとも、山出難所ニ付而致延引候、式百本之通申付候へとも、今度之大水にて流散申候、百五十本只今因幡方迄進之候、三間木ハ此地ニも大切ニ御坐候付而木も悪候、不念候様ニ可思召と迷惑存候、よき様ニ紀伊守殿へ可預御心得候、恐惶、

九廿五日

上宗十老

六四 中井正清宛書状(二一六)

態致啓達之候、去春古田織部殿迄、被仰下杉丸太之儀、其節手前ニ無御坐、申付ニ付而、只今迄延引仕候、漸致出来候間、廻進入仕候、木数申付候得とも、今度之大水ニ流散、端々失申付而、百五十本進候、三間木此地ニ大切御坐候故、木も悪御坐候、寸尺間丈注文進入候、山出殊之外難所付而遅参、御用ニ立間敷と令迷惑候、恐惶、

九月晦日

(中井正清)
大和州様

六五 鵜殿氏長宛書状(二一七)

態令啓候、自然御作事可立御用かと存、大桁百丁・中桁百丁・のね板三十間送進之候、四国辺ニ御用之儀、可被仰越候、恐惶、

九月晦日

(鵜殿氏長)
鵜殿氏様

六六 石川重次宛書状(二一八)

態令啓候、舟便宜御坐候条、大直桁百丁・中直桁百丁廻進候、御作事立御用者、可為本望候、恐惶、

九晦日

(石川重次)
石八左様

六七 都筑為政宛書状(二一九)

猶々来春之御普請之儀、承度候、態令啓候、御作事御用にも御坐候はん哉と存、任船便大直桁百丁・中桁百丁廻進候、随而先度蒙仰候佐飛州より之石、只今進之候、いづれも可有御請取候、御数寄出申候哉、何にても御用之儀可蒙仰候、恐惶、

九月晦日

(都筑為政)
都弥左様

六八 永井直勝宛書状(二二〇)

其已後良久不得御意無音、失本意存候、其辺御前向珍敷御沙汰も無御坐候哉、上方無事ニ御座候、自然四国辺御用之儀被仰聞候者、可為本望候、節々以書状も可申承候处、何かと罷過所存之外ニ候、随而大直桁百丁・中桁百丁・のね板三十間致進覽之候、期後音時候、恐惶、

九月晦日

(直勝)
永井右近様

六九 松平正綱宛書状(二二一)

態令啓候、随而此辺之材木にて御坐候条、大桁百丁・中桁百丁・のね板三十間致進入候、自然御作事之御用ニも候はんかと御志計候、四国辺御用之儀被仰聞候者可忝候、恐惶、

九月晦日

(松平正綱)
松右衛門様

七〇 土井利勝宛書状(二二二)

態得御意候、良久無音仕非本意存候、其元御前向珍布御沙汰無御坐候哉、来年公儀御普請相定様子御坐候者、承度存候、上方無事御坐候、四国辺者去八月中旬大風洪水ニ而御坐候つる、其地無御心元存候、随而自然御作事御用ニも御坐候はんかと存、大直桁式百丁・杉桁板五十枚・のね板五十間致進上候、乏少之至、不苦候ハ、可預御披露候、次貴様へも、大桁百丁・中桁百丁令進入候、上方御用之義被仰聞候者可為本望候、恐惶、

九晦日

(土井利勝)
土大炊様

七一 西尾利氏宛書状 (二一一三)

態令申候、随而杉柁板百枚・大直桁式百丁致進上之候、少分之至不苦候ハ、

上野殿へ申入候間、被成御相談披露所仰候、上野殿へも野根板五十間・大

桁百丁進之候、被成御渡可被下候、次松平右衛門殿・永井右近殿へも少材木進

之候、如此注文御届頼申候、貴様へも大桁百丁・中桁百丁・のね板十間・杉丸
太三十本進之候、猶以時儀可然様奉頼候、恐惶、

九晦日

(西尾利氏)
西藤兵様

七二 本多正純宛書状 (二一一四)

態致啓上候、随而杉柁板百枚・大直桁式百丁

(徳川家康)
大御所様へ進上仕度候、輕微之至不苦候者、御披露奉仰候、恐惶、

九月晦日

(正徳)
本多上野様

追而貴様へ大桁百丁・野根板五十間致進入候、委曲西尾藤兵衛殿迄申達候、
恐惶、

本多上野様参

七三 西尾利氏宛書状 (二一一五)

猶々白炭を進度候へとも、当国ニ無御坐候条、不及是非候、

去十九日之御状今日廿九日到来拜見申候、其元相替儀無御坐候由珍重存候、随

(益須賀家改)
而蓬庵儀御心付之通具申聞候、忝由被申候、頓而可罷下由候、次貴様御数

寄出申候由近頃目出度候、就其炭之儀蒙仰候、則十荷進之候、何と申候ても、
一くらの様ニハ無御坐候、何にても御用事可被仰聞候、恐惶、

九晦日

(西尾利氏)
西藤兵様

七四 藤宗右宛書状 (二一一六)

猶以石鉢などはや舟ニ而廻申候条、

此中者節々御状忝候、殊甚左衛門方迄御飛脚ニ則御状相届拜見申候、然者公
儀より大舟御改被成候由、御内証被仰聞畏存候、大なる船者只一二艘致所
持候、御奉行衆御触次第上可申候、少も不致由断候事、

一、墨蹟之義、入御念候由、致満足候、虚堂と蒙仰候、先日之書状ニ致失念さ
様ニ書申候哉、箱ニも書付進之候、石淋とやらん申祖師にて御坐候、祖師も
よき由申候、虚堂にては無御坐候条、可被成其御心得候、猶々御数寄出申候
由、御用之義可蒙仰候事、

一、石鉢自甚左衛門方貴様へ届申候様ニと申越候条、即届申候、こはこ炭も参
由候、慥可有御請取候、返々駿府より態被下忝候、次丹波之御普請も致出来、
端々普請人など罷帰躰ニ候、可御心安候、猶重而可申承候、恐惶、

九月晦日

藤宗右様

七五 西尾利氏宛書状 (二一一七)

(付達) (益須賀家改)
「蓬庵様御目見御下向御談」

態從蓬庵以使者被申達候間、如此御坐候、去ル十九日之御状昨夕到来拜見申候、
蓬庵為御目見被罷下儀、御鷹野已前ニ被致下着様ニ可然と蒙仰候、則其通申聞
候、併来月廿二三日頃ニも御鷹野被成御坐候者、其已前ニ被致下着様ニ日つま
り成かたく存候、若御鷹野ニ御坐被成御跡ニ被参候而ハ、いかゞ候はんや但御

鷹野之内ニも被致 御目見儀成可申候哉、其段そと上野様へ御談合候て、
(本多正純)

早々此者御返被成様などの儀共候、御報次第可被罷下候、委曲此者口上ニ申含
候、恐惶、

九晦日

(西尾利忠)
西藤兵様

七六 片桐且元宛書狀(二一一八)

態得御意候、隨而豊国月次之御会之儀ニ付而、長右衛門方迄被成御心付候由、別而忝存候、様子不存自是不得御意候キ、幸御事御坐候条、私も御人数ニ被召加可被下候、委曲長右衛門口上ニ可申上候、恐惶、

十月一日

(片桐且元)
片市様

七七 片桐且元・片桐貞隆宛書狀(二一九)

猶以先度鶴致進上候刻、以御取成御黒印頂戴忝存候、以上、

雖遲候鶴二居致進覽候、当年者此辺ニも稀ニ御坐候故、勝不申候へとも先進入仕候、委曲此者可得御意候、恐惶、

十月三日

(片桐且元)
片市様

(片桐貞隆)
片主様 へハ鶴一居

七八 大野治長他宛書狀(二二一〇)

良久不得御意御床敷令存候、隨而当国にて出来仕候鶴一居令進入候、御自愛可為本望候、恐惶、

十月三日

(大野治長)
大修様 三原石見様

真飛様 青助左様

(木村重忠)
木長門様

津左近様

(杉掃部助)
杉掃部様

(原)
佐飛弾様

七九 津田秀政宛書狀(二二二一)

其後者中絶不得御意御遠々布存候、其元并駿府・江戸表珍布御沙汰無御坐候哉、承度候、丹州御普請も致出来、下々罷歸候、可御心安候、最前ハ御子息為、御目見駿府御下向之由被仰聞候、御太儀共候、貴様少々御眼病氣之由無御心元候、毎朝此頃可為御口切と一入御床布存候、隨而如例年当国ニ而致出来候鶴二居令進入候、当年者爰元も大切付而、鷹いづれも惡御坐候、御慰ニ御覽候ハ、可為本望候、猶期後音候条令略候、恐惶、

十月三日

(津田秀政)
津小平次様

八〇 有馬豊氏宛書狀(二二三)

態致啓達候、隨而於当国出来仕候鶴二居令進入候、当秋者此辺も大切御坐候故勝不申候、猶期後日之時候、恐惶、

十月三日

(有馬豊氏)
有玄蕃様

八一 小笠原秀政宛書狀(二二三)

自蓬庵(蓬賀賀家政)以飛脚被得御意候条致啓上候、其辺御無事御坐候哉、并江戸・駿府表相替儀無御坐候哉、珍布御沙汰御坐候者承度存候、隨而蓬庵此頃駿府・江戸へ罷下可被致、御目見内存御坐候はや、頓にも可被致祇候候処、去秋時分者

(御川家康)
大御所様御上洛も可被成様ニ致取沙汰付而延引被申候、就中当月末ニ忍・川

越へ被成御鷹野由候、さ候者如何可有御坐与様子西藤兵迄最前以使者被相尋候、就其近々可被罷下由被申候、其節御在江戸ニ候者、何角可被得貴意候、恐惶、

十月四日

(小笠原秀政)
小兵部大輔様

八二 藤堂高虎宛書状 (二二二四)

(付箋)
「篠山御普請」

最前丹州へ得御意候ツる、駿府へ就御下向使者不相届、石八左衛門殿へ伝状申

罷帰候条、重而如此候御坐候、篠山御普請大方致出来、私手前普請人など四

五日已前ニ過半罷帰候、可御心安候、随而先書ニも如申入、蓬庵(松須賀次)此頃罷下可

致御目見覚悟御坐候、然処当月廿日時分被成御鷹野由候、さ候者如何御坐候ハ

ん哉、但御鷹野中にも御目見苦間布候哉、御報ニ被仰下候者、忝可存候、何

様頓而可被罷下候条、於御在府者万端御指南可被奉頼候、次ニ美馬藏人与申者

儀ニ付而、先日蓬庵以書状申入由候、使之者不相届、丹波八上より罷戻候条、

(藤堂高虎)
藤泉州様

八三 本多正信宛書状 (二二二五)

態致啓上候、随而杉柁板三十枚・大直桁百丁進入仕候、御作事之御用ニも御坐

候ハんかと存御志之驗計候、自然四国辺御用之義可被仰付候、恐惶、

(本多正信)
本佐渡守様

八四 織民少宛書状 (二二二六)

被寄思召遠路示被下忝存候、誠其已後良久不得御意、御床敷奉存候、智恩院為

御普請永々御在伏見之由御苦勞令察候、御普請致首尾御在所へ被成御帰候由玆

重存候、随而駿府御無事之由被仰聞大慶奉存候如仰来春 大御所様於御上洛被

成者、伏見ニ而可遂面上候条、相積儀可申承候、先可申候を伊勢のし二丁被懸

十月六日

織民少様

八五 岡田甚左衛門宛書状 (二二二七)

(付箋)
「御舟之事」

自佐渡殿・相模守殿之御状并板倉伊賀殿・清右衛門殿より之御添状両通昨

夕下着拜見申候、則返札只今兵左衛門ニ遣之候、板倉殿へ召連持参候て、口上

之趣相心得可被申渡候、清右衛門殿江戸よりの御両使へも同前候、手前ニ安宅

二艘所持候内一艘者朝鮮へ渡海申たる舟にて候、殊之外古及破損候間、中々御

用ニハ立間敷候、併為念にて候間、岩屋迄引せ奉行衆へ懸御目、御用次第たる

へく候、

一、今一艘之新造、是ハ如形之舟にて候、但矢倉無之候、苦間敷候哉、万一矢

倉無之舟者不立御用候者急度可申付候、さ候者、廿日廿日ニ者出来立間敷候、

其段様子承度候事、

(徳川家康)
岡田甚左衛門殿へ

先書ニも申遣候、大御所様御たか野へ御音信物急度したて可被置候、御道服

ニ尤候、本佐へはた着一つ・小袖一つ可被相調候、やかて人を可差上候、

八六 池田輝政宛書狀(二一二八)

(付箋)
「御舟之事」

態以飛札得御意候、随而五百石より上積申舟進上可仕旨、為 上意本多佐渡守(正勝)

殿・大久保相模殿より御触狀御坐候、私手前ニもちいさき安宅一艘御坐候、於

淡州被成御請取由候条、舟道具など申付、彼地へ廻可申候覚悟御座候、御手前
よりも御舟御進上被成候哉、様子承度存如此御坐候、今一艘古舟御座候へ共、
及破損御用ニ立間敷候、併引せ候て成とも御奉行衆へ可懸御目と存事御坐候、
委曲主殿助殿・勘解由殿迄申入候、恐惶

十月六日

(池田輝政)
三 左様

八七 主殿助・勘解由宛書狀(二一二九)

態以飛札得貴意候間令啓候、随而五百石より上積申候大舟進上可仕由、私式か

たへも佐渡殿・相模殿より御触狀候、三左様御手前なども其通御坐候(本多正勝)
(大久保忠勝)

哉、様子可為承如此御座候、拙子もちいさき安宅一艘令所持候、但矢倉無御座
候、只今より申付候へ、可為延引与迷惑仕候、櫓・楫・いかり已下舟道具者有
増申付候、ことくく鉄炮・玉薬など被相添御進上候方も可有御坐候哉、御次
而ニそと被得御意委御報ニ示被下候者可忝候、大舟領内相改候へとの御触ニ候得
共、此辺には廻船などにさ様なる大舟一艘も無御坐候、併穿鑿仕候事候、御手
前之様子委被仰聞候者可畏存候、猶追々可申上候、先急候間以飛札如此候、恐々、

十月六日

主殿助殿
勘解由殿

八八 大久保忠勝・本多正信宛書狀(二一三〇)

(付箋)
「御舟之事」

去月十六日之御狀昨日五日ニ到、在所到来致拝見候、随而五百石積より上之舟

進上可仕候由 上意之旨謹而畏奉存候、手前ニ大舟一艘致所持候、急度岩屋迄
相届九鬼長門守ニ相渡可申候、猶以今一艘四・五百石積申候舟御座候、是ハ殊
之外舟古損申候条、中々御用ニハ立間敷候得共、為念ニ御坐候条、是又引せ候

て成とも相届渡可申候、長門守被請取申間敷者不存候、委曲久永源兵衛殿・向

井将監殿へ申達候、恐々謹言、
(忠勝)

十月六日

大久保相模守殿
(忠勝)

本多佐渡守殿
(正勝)

八九 板倉勝重・久永重勝・向井忠勝・米津清右衛門宛書狀(二一三一)

去月廿九日之貴札并江戸よりの御狀両通、昨日到在所到来致拝見候、随而五百
石より上積申候舟進上可仕之旨畏奉存候、手前ニ大舟一艘致所持候、急度岩屋
へ相届九鬼長州へ相渡可申候、猶以今一艘四・五百石積申舟御座候、是ハ殊之
外舟相損申候条、中々御用ニハ立間敷候へとも、為念候条是又引せ候て成とも
相届渡可申候、長州被請取申間敷者不存候、委曲此者可得御意候、恐惶、
(守應)

十月六日

板倉伊賀守様
(勝重)

久永源兵衛様
(重勝)

向井将監様
(忠勝)

米津清右衛門様
(正勝)

御報

猶以私領内廻船などには大舟一艘も無御坐候、併不存油断相改可申候、

九〇 生駒正俊宛書狀 (二一三二)

御家督為御祝儀、態以使者得御意候、是式輕微之至候へとも、御太刀・馬代并道服十致進入候、表御祝詞迄候、恐惶、

十月十一日

生駒左近(正俊)太輔様

藤金右御使

九一 生駒一正宛書狀 (二一三三)

雖遅々候、態以使者得御意候、今度者左近太輔殿御家督之由尤目出度令存候、
熨斗二・御太刀一飾・御馬一疋并小袖三進献仕候、御祝義驗迄候、恐惶、

十月十一日

生駒讃岐守様(一正)

同人使

九二 板倉勝重・米津清右衛門書狀 (二一三四)

江戸より御年寄衆重而示被下御狀、昨夕下着拝見仕候、先書之御請にも如得御意候、私領分商船ニ五百石も積可申候舟一艘も御坐有間敷候、併不存由断相改申候、猶自是可申入候、恐惶

十月十一日

板倉伊賀守様(勝重)

米津清右衛門様(正勝)

九三 大久保忠隣・本多正信宛書狀 (二一三五)

(付書)
「御舟之事」

重而示被下先月晦日之貴札、昨日到在所到来拝見仕候、五百石積より上之舟進

上可仕之旨畏奉存候、手前(舟乙)一艘致所持候条、小道具等申付、急度岩屋へ相届、

九鬼長門守(守隆)ニ相渡可申候、私領内商船などには大舟一艘も御坐有間敷候、併堅相改可申候、委曲先書之御請ニ得御意候、恐々、

十月十一日

大久保相模守殿(忠隣)

本多佐渡守殿(正信)

九四 鵜殿氏長宛書狀 (二一三六)

尚々乏少至候へとも小袖共進之候、
御上洛之由承及候間令啓上候、遠路御苦勞共御座候、先度沼津より貴札忝候、

一、御所様御鷹野進物之義心得存候、頓而下可申候、
(徳川家康)

一、妹縁辺之義無油断被懸御心忝候、弥奉頼候、
(保原家政)

一、蓬庵も頓而為 御目見駿府・江戸可罷下由被申候間、其節御指南奉頼候、
(大久保忠隣)

一、大舟相改可致進上之旨、佐渡守殿・相模守殿より之御触ニ御坐候、私も
(舟乙)

一艘ちいさき安宅所持申、小道具等申付、急度可致進上候、今一艘古舟御坐候、及破損中々御用ニハ立間敷候へとも、為念ニ而御座候条、御奉行衆へ懸御目可申候、私領内商舟をも相改候へと御触ニ御坐候、私領分廻船など二も大なる舟一艘も無御坐候、併穿鑿仕候、猶万々遂面上重而可得御意候、恐惶、
十月十二日

鵜殿氏様
鵜兵庫様

九五 中村正勝宛書狀 (二一三七)

猶以遠路態蒙仰忝候、

去ル十日之備前より之御返札今日到来拝見申候、被入御念遠路示預、別而過分

至極候、先書ニも如申達、拙子も小安宅一艘所持候間、帆・幕已下申付、頓而
岩屋へ廻可申覺悟候、猶追々可申承候条、早々及御報候、恐惶、

十月十三日

(中村正徳)
中主助様参

九六 片桐且元宛書状(二一三八)

(付箋)
「御藏米之外、大坂へ廻事御法度」

去ル十日之御状、昨日到在所下着、拝見仕候、随而大坂へ御藏米之外、米入申
義就御法度、私領内可申付之由、謹而奉得其意候、委曲長右衛門可得御意候、
恐惶謹言、

十月十四日

(片桐且元)
片市正様

九七 松平正綱宛書状(二一三九)

態以使札得御意候、御所様御機嫌能被成御鷹野之由、目出度奉存候、雖輕微

御坐候、御服二進上仕候、御披露奉仰候、委曲西尾藤兵衛殿可得御意候、恐惶

謹言、

十月十五日

(正綱)
松平右衛門様参 御使伊右衛門

九八 本多正信宛書状(二一四〇)

態以使札得御意候、御所様御機嫌能被成御鷹野之由、目出度奉存候、雖輕微
之至御坐候、御服二進上候、右衛門殿へ申入候間、可然様御披露奉頼候、貴様
へも御小袖二之内はた着一つ致進入候、猶重而可得御意候、恐惶、

十月十五日

(本多正徳)
本佐州様 同人

九九 藤堂高虎宛書状(二一四一)

態得御意候、先以 大御所様御機嫌よく被成御鷹野之由、目出度奉存候、駿府・
江戸御前向相替儀も無御坐候哉、承度存候、来年 公儀御普請之様子いかゞ承
度存候、

一、丹州御普請も相済、徒ニ罷在義ニ御坐候間、私式も於江戸越年仕様ニ罷下
可然義ニも御座候はん哉、御指南偏奉頼候、指義無御坐候へとも、右之様子為
可得御意如此御座候、恐惶、

十月十五日

(藤堂高虎)
藤泉様 御使伊右衛門

一〇〇 中井正清宛書状(二一四二)

其已後不得御意候、先以 大御所様御機嫌よく被成御鷹野之由、乍恐目出度奉
存候、駿府・江戸御前向珍布御沙汰も無御座候哉、承度存候、貴様何時分可為
御上洛候哉、来年 公儀御普請之御沙汰も御坐候者、承度候、猶重而可得御意
候、恐惶、

十月十五日

(中井正清)
中和州様参 御使伊右衛門

一〇一 西尾利氏宛書状(二一四三)

態此者進之候、先以御所様御機嫌よく此頃被成御鷹野由目出度存候、輕微
御座候へとも御服二致進上候、右衛門殿へ申入候間、御相談候て御披露頼存候、
駿府・江戸相替御沙汰も無御座候哉、来年御普請相定様子も御坐候者承度候、
次上方各為越年江戸へ被罷下様ニ下々取沙汰申候、丹州之御普請も相済、徒ニ
罷在事候条、拙子式も自余ニも不相構越年ニ罷下可然候はん哉、委曲御報ニ可示
承候、恐惶、

十月十五日

(西尾利氏)
西藤兵様 御使伊右衛門

一〇二 堀尾吉晴宛書狀(二一四四)

猶以去頃へ就御筋氣、丹州御普請所へも無御見舞由、無御心元存候、
重而預貴札忝令拝見候、新介儀最前御報ニ如得御意候、爰元立退申様子、帰参
可仕儀ニあらず候、被入御念重畳被仰下儀候間、難去存候得共、無是非仕合御
坐候条、可被思召分候、恐惶、

十月十四日

(堀尾吉晴)
堀帯刀様

一〇三 後藤光次宛書狀(二一四五)

其已後絶以書狀も不得御意無沙汰、心外千万存候、先以 御所様御機嫌能被成
(徳川家康)
御鷹野之由、下々迄目出度奉存候、御前向珍布御沙汰御坐候者、承度存候、
雖指義無御座候、余無音之至候条、如此候、随而輕微御坐候得共、夜物一・ふ
とん一令進入候、御志之驗迄候、猶期来音候、恐惶、

十月十五日

(後藤光次)
後庄三様 御使伊右衛門

一〇四 西尾利氏宛書狀(二一四六)

追而申入候、後藤庄三郎殿へ余令無音候条、以書狀申入候、少致音信候間、御
(光次)
届候て可被下候、則此者ニ貴様之人を御添候て可被下候、頼存候、恐惶、
十月十五日

(西尾利氏)
西藤兵様 同人

一〇五 生駒一正宛書狀(二一四七)

昨日之御狀只今令到来令拝見候、自久永源兵衛殿・向井将監殿、私方へ被下御
(重勝) (忠勝)

狀并両三人へ之御狀儘ニ請取申候、自是加藤左馬助殿へ届候へとの御書中之間、
(喜明)
乍三通則持せ遣候、定而御報在所より可被申候、私御兩人へ之御返報貴様へ進
之候へと蒙仰候得とも、何とやらん無念之至候間、自是須本へ進候、此由被仰
遣可被下候、尚期後音之時候、恐惶、

十月十七日

(生駒一正)
生讃州様 御報

一〇六 加藤嘉明宛書狀(二一四八)

態如此御座候、自久永源兵衛殿・向井将監殿之御狀、生讃州より私方へ届被下
(重勝) (忠勝) (生駒一正)
候、自是貴様へ届候へと、自御兩人之書中ニ候間、山対州・富信州・貴様へ之
(山内康豊) (富田信忠)
御狀三通先々進之候、儘ニ御請取候て、其通御報ニ可示預候、恐惶、
(自筆力)
御内拝候

十月十七日

(加藤嘉明)
加左馬助様

一〇七 久永重勝・向井忠勝宛書狀(二一四九)

去十四日之御狀、今日自生駒讚岐守殿御届被下、令拝見候、山対州・富信州・
(一正) (山内康豊) (富田信忠)
加左馬殿へ之御狀三通、則左馬殿へ持せ遣候、御報者定而在所より可被申候、
(加藤嘉明)
私手前先度御触狀之御請者、頓進候キ、使御下向三道ニ而相連、伏見へ罷通、米
津清右衛門殿へ渡進申、罷帰候、其刻其へ致祇候、得御意由候、定而御両所様
へ之御報、自清右衛門殿御届可有之候、先書ニ不相替候へとも、又只今御請申
候、私領内商舟ニ者致穿鑿候へとも、大舟一艘も無御座候、手前ニ一艘御坐候、
小安宅・小道具等申付候間、急度岩屋へ廻可申候、少も不存油断候、使得御意

候ことく、今一艘古キ大舟御坐候、及破損御用ニハ立間敷候得とも、為念御座候間、引せ候て成とも、廻可懸御目候、委曲此者口上ニ申含候、恐惶、

十月十七日

御内拝候
(自筆カ)

久永源兵衛様

御使与右衛門

向井将監様まいる

一〇八 久永重勝・向井忠勝宛書状(二一五〇)

私手前五百石より上積申候舟於致所持者、有次第可致進上旨、謹而畏存候、大なる舟一艘御座候、只今小道具等申付候間、急度岩屋へ廻、九鬼長州へ相渡可申候、今一艘古舟御坐候、及破損中々御用ニハ立間敷候へとも、為念ニ而御坐候間、引せ候て成とも可懸御目候、私領内商船ニハ五百石程可申候大舟一艘も無御坐候、委曲此者可得御意候、恐惶、

十月十七日

御内拝候
(自筆カ)

久永源兵衛様
(重勝)

御使与右衛門

向井将監様
(忠勝)

一〇九 久永重勝・向井忠勝宛書状(二一五一)

致進上小安宅一艘者、只今小道具申付候間、急度岩屋へ廻可申候、私領内商舟致穿鑿候へとも、五百石程積可申舟、一艘も無御坐候、已上、

久永源兵衛殿
(重勝)

向井将監殿
(忠勝)

一一〇 久永重勝・向井忠勝宛書状(二一五二)

猶々、隣所之義候間、相応之御用等可被仰付候、

追而是式之儀ニ御座候得共、小袖一重致進入候、猶此より可得御意候、恐惶、

十月十七日

御内拝候
(自筆カ)

久永源兵衛様
(重勝)

向井将監様
(忠勝)

御使与右衛門

一一一 内藤忠清宛書状(二一五三)

態企使札得御意候、先以早々御下着之由、珍重存候、随而今度御普請ニ付、於駿府御機嫌惡、キ様など未御出頭無之由承及候、事実候哉、無御心元仕合候、定而急度御出仕ニ而、江戸可為御通と存事候、様子無御心元存まゝ致啓達候、恐惶

十月廿三日

内金左様
(内藤忠清)

一二二 石川重次宛書状(二一五七)

態企使札得御意候、早々駿府へ御下着之由珍重候、然者今度御普請之義ニ付、

(徳川家憲)

大御所様御機嫌惡、金左衛門殿・キ様など、未 御出頭無之由承、重々いかゝ

無御心元存候、定而早々被遂御出仕、江戸可為御通と存候、金左衛門殿へも申入候間、可預御心得候、返々右之御仕合千万無御心元存まゝ如此候、様子御報ニ示預候者可忝候、恐惶、

十月廿三日

御使清九郎

石八左様
(石川重次)

一二三 西尾利氏宛書状(二一五五)

猶以、来年御普請之御沙汰候者、承度候、

去十三日之御状昨夕到来、拝見申候、随而蓬(縁頭敷)庵為御目見被罷下義、近日ニ者

被成御鷹野付而、年内者無用之由、被仰聞候、得其意存候、来春早々可罷下由被申候、其元江戸表相替義無御座、両上様御機嫌よく御座候由目出度奉存候、

次内藤金左衛門殿・石川八左衛門殿、今度丹州御普請之義ニ付而、御機嫌悪、(忠勝)

未御目見無之由、千万無御心元候、則以書状申入候間、御届候て御返事次第此者御登せ奉頼候、先書ニも如得御意候、上方衆為越年江戸へ被罷下御沙汰者無御座候哉、我等式罷下可然候はん哉、委曲御報ニ可示預候、猶重而可得御意候、恐惶、

十月廿三日

同人

西藤兵様(西藤兵)

一一四 向井忠勝・久永重勝宛書状(二一五八)

猶以、先度加藤左馬殿へ被遣御状持せ遣、返事御坐候、信州・対州へも(山内廣忠)

御状、則自彼方持せ遣由被申越候、

先日者乍御返札示被下忝拝見申候、使口上ニ被仰聞趣、具承届候、則致進上舟并道具等注文を仕只今進之候、舟之義、天氣次第五三日中ニ急度廻可申候、今一艘之古舟可立御用舟にては無御座候得共、一紙ニ書乗候へと被仰聞候間、其通ニ仕候、及破損塩入候處、只今造作申付候条、少可為遅々候、右之二艘之外、私手前并領内商船ニも、三・四百石より上積可申候舟一艘も無御座候、其元御滞留中隣国之義御坐候条、御用等被仰聞候者可為本望候、委曲此者可得御意候、恐惶、

十月廿三日

御使与右衛門

向井将監様(忠勝)

久永源兵衛様(重勝)

一一五 九鬼守隆・小浜光隆宛書状(二一五七)

「御舟」(付箋)

猶々、是式御坐候へとも、味噌桶十・塩三十俵、令進入候、近国ニ罷在事候条、御滞留中御用等被仰聞候者可忝候、

態以使者得御意候、今度大舟就御改被成御請取、為御奉行、其地御着船候由遅承、早々不申入心外存候、随而從私手前進上仕舟並道具等致注文、向井将監殿・(忠勝)

久永源兵衛殿へ只今進候、只今小道具申付候間、急度廻可申候、岩屋ニ而御請取可被成由、御触ニ御座候つる、猶以其通にて可有御坐候哉、様子具被仰聞候者可忝候、委使口上ニ申含候、

十月廿三日

同人

九鬼長門守様(守應)

小浜久太殿(光應)まいる 御小袖一重

「慶長十五」(表紙)

案紙

八月二日

十月十七日迄

清書無之、

一一六 永井直勝他宛書状(三一)

御状致拝見候、依猿樂共ニ被下候配当物之儀、重而被 仰出迄相渡申間敷旨、畏奉得其意候、恐々謹言、

八月二日

永井右近大夫殿(直勝)

成瀬隼人正殿(正成)

安藤帶刀殿(重政)

本多上野介殿(正純)

一一七 本田正純宛書狀(三一二)

貴札忝致拝見候、如仰其以後者、御普請ニ取紛不得御意、非本意存候、先以其元御無事之由、珍重存候、当地御普請いづれも油断無之躰御座候、私式手前も随分不存油断申付候事御坐候、此頃過半致出来候、誠ニ事多可在御座ニ示被下過当至極存候、猶自是可得御意候間、省略仕候、恐惶、

八月二日

本多上野介様(正純)

一一八 浅野長政宛書狀(三一三)

御懇札忝致拝見候、自是ハ御普請ニ取紛、絶不得御意候處、節々之貴墨、過分至極存候、当地御普請、此頃過半出来仕事御坐候、猶期後音候条、不能細筆候、恐惶、

八月二日

浅野長政(淺野長政)
浅弾少様 貴報

一一九 真藏人他宛書狀(三一四)

遠路被懸御心、御使札忝候、当地御普請各々被出御精候、必是分候ハ、近々可致首尾と存候、拙子手前聊不存油断候、其元相替御沙汰も無御坐候哉、貴老御所勞之由、無御心元存候、不存候て以書狀も御見舞不申候、非本意存候、随而菓子一箱傘被懸御意候、過分至極候、何様罷登刻、心事可得御意候条、不具候、恐惶、

八月九日

真藏人様

諸白ニ・塩雲雀二百・菱喰ニ(長勝) 牧助右衛門殿

鯉三十連宛 佐久間河内殿(政孝)

村田権右衛門殿
滝川豊前殿(忠生)

一二〇 奥平忠政宛書狀(三一五)

御使札忝致拝見候、其已來從是社以書狀も可得御意之處、御普請ニ取紛無音、失本意存候、御所勞此頃被遂御快氣之由、珍重承存候、随而鮎之鮎二桶被懸御意賞翫仕候、何様期後音之時候、恐惶、

八十三日

奥平忠政(奥平忠政)
松摂津守様

一二一 片桐貞隆宛書狀(三一六)

遠路被懸御心御使札、殊諸白ニ樽被懸御意過当至極存候、当地御普請過半致出来候、拙子手前聊不存油断候、罷登尤心事可得御意候、随而

秀頼様御息災之由、誠以珍重奉存候、何様期後音之時候条、致省略候、恐惶、(重臣)

八月十四日

片桐貞隆(片桐貞隆)
片主様

一二二 松平家乗宛書狀(三一七)

從是社以使札成とも可得御意儀ニ候へとも、御普請ニ取紛無音仕候所、寄思召遠路御使者、殊諸白十、味噌樽十、鮎桶十、醬油桶十、美濃紙三十束送被下候、誠以被入思召御懇情之至、御札難申謝候、其已後者杳久相隔面上御床敷存候、当地御普請も此頃過半致首尾躰御坐候、私式手前随分無油断申付候条、可御心安候、委曲御使者へ申談候、恐惶、

八月十六日

松平和泉守様(家康)

一二三 大久保忠隣宛書狀(三一八)

(付箋)
「御内書御請」

被成下候御内書、謹而頂戴仕候、当地御普請聊不奉存油断候、委曲柳生又右衛門(宗矩)
可被致言上候、猶宜預御披露候、恐々謹言、

八月十七日

大久保相模守殿(忠勝)

一二四 榊原康勝宛書狀(三一九)

被寄思召遠路御使札、殊更御給三・単物ニ被懸御意候、誠以過当至極存候、当地御普請過半致出来候、拙子手前聊不存油断候、上方相替儀も無御坐候、其已
来者杳久不得御意無音之至候、猶期後音之時候条、致省略候、恐惶、

八月十七日

榊遠江守様(榊原康勝)

(後日ノ庄記ナラシ)
「帶を進候、十九日之御飛脚ニ被遣、岡田甚左衛門かたへ被遣」

一二五 竹腰正信宛書狀(三一〇)

猶以寄思召御尋問忝存候、

遠限御使札忝令拝見候、殊為御音信蠟燭三百挺送被下候、過当之至存候、先以

其表御無事にて 大御所様御機嫌よく被成御坐之由、目出度奉存候、当地御普

請此頃過半出来仕候、拙子式手前少も不存油断候、其已後以書狀も不得御意非
本意候、猶重而可申承候条、省略仕候、

八月十九日

竹腰小伝次(正徳) 御報

一二六 松平家乗宛書狀(三一二)

尚々、節々之御心付過当至極不淺存候、

御懇札忝拝見申候、先以悅慶御坐候、松茸一籠送被下候、御懇情一入賞翫仕候、
先日も御使者、殊色々被懸御意候、誠以御札難申謝候、何様自是可得御意候条、
早々覃御報候、恐惶、

八月廿日

松平和泉守様(家康)

一二七 岡嶋備中守宛書狀(三一三)

昨日者為御使御越、誠被為懸御心被仰下段、忝承存候、尤致伺候御札可申上儀
ニ御坐候へとも、手前御普請ニ取紛申候間、先貴殿迄如此御坐候、以御次而可
然様ニ御取成可忝候、恐惶、

八月廿二日

岡嶋備中様

一二八 大久保忠常宛書狀(三一三)

遠限預御使札候、忝拝見仕候、如仰其已後者取紛、以書狀も不得御意心外存候、
随而蠟燭三百挺被懸御意候、過分至極存候、当地御普請過半致首尾候、遠々之
御懇情御札難申謝候、猶期後音之時候、恐惶、

八月廿三日

大久保加賀守様(忠常)

一二九 細川忠興宛書狀(三一四)

今朝も以使者得御意候、 幽齋公 御煩不被遂御快氣御遠行之由、御力落可申上
様無御坐候、只今承候条、如此御座候、恐惶、

八月廿四日

羽柴越中守様(細川忠興)

○一二九と一二三〇の間に、「(忠臣) 甚左ニ持参候へと被仰蔭山庄右衛門大

(加藤) 所から竹光持参候て可罷有候、廿五日ニ被罷出木村少右衛門かたへ御状被遣」との覚書がある。

一三〇 加藤嘉明宛書状(三一五)

態得御意候、ふけの御丁場最前之根石所より三間程出可申旨、御奉行衆今朝被仰たる由ニ候、御手前者不存、拙子丁場三間程前にて御座候者、最前之ニ結句地悪可有御座候由申候、御下奉行いか、被申候哉、三間者最前之向之堀はたにて可有御坐候、第一水つき申候て堀申儀も難成候、貴様御下奉行者今朝右之様子可然由ニ申たると申候、私者ともハ、三間なと出候而ハ中々悪可在御坐由申候、以参可得御意候へとも、不叶用所御坐候条、此者進候、とかく丁場へ被成御出御覧候而可被成御談合候哉、最前之所にて仕直候が増かと私者共ハ申候、委曲御報ニ可被仰聞候、恐惶、

八月廿五日

(加藤嘉明)
加左馬様

一三一 重陽祝儀注文(三一六)

駿府分重陽

五ツ 御所様 銀子ニ而上

二ツ 右兵衛様 同前

二ツ 常陸様 同前

二ツ おつる様 同前

二ツ 本多上野介殿 (正純)

二ツ 安藤帯刀殿 (直次)

二ツ 成瀬隼人殿 (正成)

二ツ 松平右衛門殿 (正綱)

二ツ 後藤庄三郎殿 (光次)

二ツ 八屋九郎左衛門殿 (藤原)

二ツ 竹腰小伝次殿 (正徳)

二ツ 西尾藤兵衛殿 (利氏)

二ツ 牧助右衛門殿 (長勝)

江戸分

五ツ 將軍様 (徳川秀忠)

三ツ こせん様

二ツ 竹千世様 (徳川家光)

二ツ おくに

二ツ 本多佐渡守殿 (正徳)

二ツ 大久保相模守殿 (忠隣)

二ツ 土井大炊助殿 (利勝)

二ツ 大久保加賀守殿 (忠常)

二ツ 鶴殿兵庫殿 (氏奥)

二ツ 酒井雅楽殿 (忠世)

二ツ 青山図書殿 (忠成)

二ツ 藤宗右衛門殿

二ツ 石川八左衛門殿(政次)

二ツ 都筑弥左衛門殿(為政)

二ツ 安藤対馬殿(重信)

二ツ 榊原遠江守殿(康勝)

二ツ 井伊掃部殿(直孝)

二ツ 羽柴老岐守殿(廣川正利)

二ツ 是ハなこやニ而被遣 小笠原兵部殿(秀政)

二ツ 同 信濃守殿(忠勝)

慶長十五

一、將軍様へ 歳暮の御ふく被遣、 作大夫存(掃力、以下同)

是ハ大御所様へ重陽の御ふく也、
(諸川家康)

一、竹千世様へ歳暮御ふく被遣、 同人存

一、竹千世様へ来年九日歳暮迄の御ふく被遣、 同人扱
是ハ右兵衛様・ひたち様慶長十五之重陽の御ふく也、

一三二 西尾利氏宛書状(三一七)

重陽之御服、内々如被仰以銀子被申、御披露之義上野殿へ申入候条、被成御談
合可然様ニ頼入存候、様子者何様ニも貴様次第二候、御子様達へも右同前候、
五人衆如毎年銀子五枚宛進之候、又御年寄衆へ如右注文御届頼申候、随而当地
御普請過半致首尾候、拙子手前聊不存油断候、可御心安候、頓而隙明可申存候、
其辺相替御沙汰無御坐候哉、承度存候、何様重而可得御意候条、令省略候、恐

惶、

八月廿六日

西尾利氏
西藤兵様

一三三 松平家乘宛書状(三一八)

御懇札忝候、誠先日之御札旁從是早々可得御意候处、手前御普請ニ取紛、毎々
御報ニ迄罷成候段致迷惑候、随而御継木之美濃柿・曲物式之内数百三十送被下
候、爰元珍布御坐候而別而致賞翫候、何様期後音之時候、恐惶、

八月廿七日

松平家乘
松和泉守様

一三四 松平忠直宛諸大名進物注文(三一九)

越前少将様へ
(松平忠直)

御ふく三

小袖一重

毛利宗瑞(輝元)

同

板倉伊賀守殿(勝重)

同

片桐市正殿(且元)

同

同 主膳殿(貞勝)

同

米津清右衛門殿(正勝)

同

松平武藏守殿(池田利雄)

同

津田小平次殿(秀政)

同

渡辺筑後守殿(勝)

同 尾州にて被遣 古田（重然）織部殿

一三五 古田重然宛書狀（三一—二〇）

最前者御使忝候、江戸へ御下之由、御太儀迄ニ御坐候、尤以參御見舞可申候へとも、御普請ニ取紛候まゝ、非其儀無音迷惑仕候、当地御普請過半致首尾候、拙子式手前も聊不存由断候、可御心安候、随而為重陽之御祝義御小袖一重致進獻候、早々之躰（儀脱力）ニへとも如此御坐候、猶期後音之時候、恐惶、

八月廿八日

（古田重然）
古織部様

一三六 鍋島勝茂宛書狀（三一—二一）

御懇札忝候、如仰其已来者不申承御床敷存候、随而明朝平岩殿へ御出之由、拙子も致祇候之間、以面上心事可得御意候、恐惶、

八月廿八日

（鍋島勝茂）
鍋信州様 御報

一三七 鵜殿氏長宛書狀（三一—二二）

去月廿八日之御狀致拜見候、雲州被明御隙撰州有馬迄御越、於彼地被出御煩候、上洛之由努々不存自是使札も御見舞不申候、結句罷成御報候、道三成法印御菓ニ而可被遂御驗氣と存候、いかゞ無御心元存候、為御見舞則以使者得御意候、然者万病円之儀最前拝領仕候、其促令進覽候、可被成御服用候、随而当地御普請漸致首尾候、右之通候者、頓而隙明可申哉と存事候、拙子手前聊不存由断候、猶重而可得御意候、恐惶、

九月一日

（鵜殿氏長）
鵜兵庫様

一三八 遠山友政宛書狀（三一—二三）

尚々、御懇意之至、毎度忝候、

被寄思召節々御懇札、殊（梅力）掲 栗一折送被下忝存候、從是社以使札成共可申入候之處、御普請ニ取紛無音之至、所存之外候、当地御普請漸致出来候、御手前公儀之材木不被得御隙由、御太儀迄候、何様自是可得御意候条、早々覃御報候、恐惶、

九月一日

（友政）
遠山久兵様

一三九 米津正勝宛書狀（三一—二四）

尚々、古織部 殿此地御通候つる、不申承御残多存候、

被寄思召御狀忝令拜見候、如仰其已来者不申通無音之至候、当地御普請過半致首尾候、右之躰候者、頓而可為出来候、隙明次第罷登、相積儀とも心事可申承候、何様重而可得御意候条、早々覃御報候、恐惶、

九月三日

（正勝）
米津清右様

一四〇 小笠原秀政宛書狀（三一—二五）

為重陽之御祝儀以使者得御意候、并御小袖一重致進覽候、誠幾久可得貴意驗迄御坐候、随而当地御普請漸致首尾候、頓而可為出来と存候、拙子手前聊不存由断候、御心安可被思召候、先度者度々御使者色々御心付共忝仕合ニ御坐候、從是社節々可得御意候处、御普請ニ取紛非本意存候、委曲此者申含候条、不能巨細候、恐惶、

九月四日

（小笠原秀政）
小兵部太輔様

一四一 小笠原忠脩宛書狀（三一—二五）

為重陽之御祝儀、御小袖一重致進獻候、誠幾久可得御意驗迄御坐候、当地御普請漸致首尾候、猶此者可得御意候、恐惶、

九月四日

(小笠原忠倚)
小信濃守様

一四二 坂井成政宛書狀(三一二六)

尚々、蓬庵(遠須賀家次)より先日之御報到来候、態持せ可進候処、幸便候条、如此候、

御懇札忝候、自是社節々以使者成とも御見舞可申候処、御普請ニ取紛無音、每事罷成御報候、御眼、氣いか、無心元存候、当地御普請漸致出来候、右之躰候者、近々可令首尾候、絶不懸御目御残多存事候、随而栗二籠被懸御意候、過当之至候、猶重而可申入候条、不具候、恐惶、

九月四日

(坂井成政)
坂半左様

一四三 道三法印宛書狀(三一二七)

其已来者不得御意候、随而私家頼堀尾五右衛門相煩罷登候、乍御六ヶ敷一脈被成御覽被遣候者、於拙子可忝候、委曲此者可得御意候、恐惶、

九月五日

道三法印様

一四四 横山長知宛書狀(三一二八)

二三日者不懸御目御床敷存候処、御札忝拜見申候、御手前御普請何様被仰付候哉、拙子式手前墓不参致迷惑候、随而先日御前にて御普請之御沙汰候つる、御町場並ニ付而、御両所なとへ節々懸御目由申候つる、雲州何と被申候哉、御札と候へ者、結句迷惑令候、豆州へもよき様ニ可預御心得候、猶期貴面候、恐惶、

九月五日

(横山長知)
横山城様

一四五 浅野幸長宛書狀(三一二九)

態得御意候、流木之儀付而、先程使者を進候処、被為入御念被仰下、別而忝存候、為御札如此御坐候、何様在所より重而可得貴意候、恐惶、

九月五日

(浅野幸長)
浅紀伊守様

一四六 本多忠勝・本多忠政宛書狀(三一三〇)

為重陽之御祝儀、以使者得御意候、并御小袖一重致進献候、誠幾久可得御意驗迄御坐候、恐惶、

九月六日

(忠勝)
本多中務様

(本多忠政)
美濃守様

一四七 青山忠成宛書狀(三一三一)

其已来者以書札も不申通無音之至候、其元珍敷御沙汰も無御坐候哉、当地御普請も漸致首尾候、拙子手前も大かた出来仕候、近々帰国可仕候、其元罷下御目見之義、御法度之由ニ御坐候条、非其儀候、随而惣檢校為代生駒檢校被罷下候、御札被申上候者、御引廻奉頼候、拙子存知之仁にて候、如此御坐候、何様在所へ罷帰節、可得御意候、恐惶、

九月六日

(青山忠成)
青図書様

一四八 石川忠総宛書狀(三一三二)

態預御飛札、殊美濃柿二籠被懸御意忝存候、自是社以使者も可得御意候処、御普請ニ取紛無音非本意候、御普請も漸致首尾候条、頓而帰国可仕候条、其節必々以使者可得御意候、呉々毎々御懇情忝候、恐惶、

九月六日

(忠総)
石川主殿様 御報

一四九 奥平忠政宛書狀(三一三三)

従是可申上候処、遮而御使札忝致拜見候、如貴意先度者早々奉得御意、御残多

存候、駿府被成御下由、御太儀迄ニ御坐候、随而鶴之儀被仰下候、安御用御坐候、頓而帰国仕候之条、自在所可致進上候、猶重而可得御意候間、早々申上候、恐惶、

九月八日

(美平忠政)
松平津守様

一五〇 奥村長福・岡嶋備中守宛書状 (三一三四)

御状拝見申候、仍明後十日之朝御口切之御茶、可被下御意之由、忝奉存候、必々可致祇候候、可然様ニ御取成頼存候、恐惶謹言、

九月八日

(永徳)
奥村伊与様

岡嶋備中様

一五一 有馬豊氏宛書状 (三一三五)

遠路度々御使札忝存候、当地御普請漸致首尾候、拙子手前も出来仕候条、近々帰国可仕と存候、御普請ニ取紛、以書状も不得御意無音所存之外候、御所劳いかゝ無御心元存候、何様重而可得御意候、恐惶、

九月八日

(有馬豊氏)
有玄蕃様

一五二 佐久間政実・滝川忠征・村田権右衛門・牧長勝宛書状 (三一三六)

(付箋)
「御普請出来」

態申入候、私手前御石垣・御本丸・御二之丸・同向間・西丸土ふけ・御本丸大手・小丸之入堀、但此内ニて御本丸水たゞき分も仕候、并二之丸之堀、右何も昨日八日ニ出来仕候、土ふけ地形も大方致出来候、掃地已下之義者、重而出来次第、御切手可被下候、恐惶謹言、

九月九日

(政実)
佐久間河内守様

(忠征)
滝川豊前守様

村田権右衛門様

(長勝)
牧助右衛門様 人々御中

一五三 奥平忠政宛書状 (三一三七)

先度者遠路被成御越、私式迄御尋、誠以忝次第、乍去早々御帰城ニ付而、緩々と不奉得御意候、残多存候、何頃駿府被成御下向候哉、承度存候、当地御普請私式手前も昨日大方出来仕候、雖無差儀御坐候、為御礼如此御坐候、恐惶、

九月九日

(美平忠政)
松平津守様

一五四 本多正純・松平正綱・後藤光次宛書状 (三一三八)

急度得御意候、当地御普請私手前御本丸・二之丸御石垣并堀、昨日八日ニ出来仕候、則從御奉行衆之御状相添懸御目候、若御次而も御坐候ハ、御取成奉仰候、御普請人残置申候間、掃地以下出来仕候者、御奉行衆之御切手、重而可致進上候、委曲西尾藤兵衛殿へ申入候、

九月九日

(正純)
本多上野介様

(正綱)
松平右衛門様

(光次)
後藤庄三様

一五五 西尾利氏宛書状 (三一三九)

急度此者進候、御当城私手前御本丸・二之丸御石垣并堀、昨日八日ニ出来仕候、則御奉行衆より之御状相添進之候、上野介殿へ被懸御目可被下候、私儀近日在所へ帰候、御普請人残置候間、掃地已下悉相澄候者、重而御奉行衆之御切手

取、可致進上候、松平右門殿・後藤庄三郎殿へ申入候条、御両人へも御心得候て可給候、御前之御次而被仰談、御取成奉頼候、恐惶謹言、

九月九日

(西尾利兵衛)
西藤兵様

一五六 本多正信・土井利勝宛書状(三一四〇)

急度得御意候、当地御普請私手前御本丸・二之丸御石垣并堀、昨日八日ニ出来仕候、從御奉行衆之御状之写相添懸御目候、御直札者 上野 殿へ進候条、非其儀候、掃地已下ニハ御普請人殘置申候、以御次而御取成可忝候、恐惶、

九月九日

(正徳)
本多佐渡守様

(利勝)
土井大炊様

一五七 松平家乗宛書状(三一四一)

遠路御使札、殊更被人御念鹿毛之御馬被懸御意、別而可致秘藏忝存候、当地御普請拙子式手前大かた首尾仕候、自是社早々以使者可得御意处、御普請ニ取紛無音之段、毎事罷成御報候、何様御使者へ申述候条、不能巨細候、恐惶、

九月十二日

(家乗)
松平和泉守様

一五八 松平家乗宛書状(三一四二)

尚々、昨日者御秘藏之御馬被懸御意忝候、此中節々之御心付、別而過当至極存候、

私儀当地御普請隙明候て、明日早々罷登候、尤致祇候可得御意候处、遠路之義候条、乍略義以使者申達候、雖是式ニ御坐候、御太刀一節・御馬代金子老枚并御小袖五致進献候、誠ニ使札之驗迄ニ御坐候、自然四国辺御用之義可被仰付候、猶此者申含候、恐惶、

九月十三日

(家乗)
松平和泉様

一五九 遠山友政宛書状(三一四三)

私儀御普請当地隙明候て明日罷登候、此中者節々御心付共、誠以過分至極存候、早々以使者成とも可申承候处、御普請ニ取紛無音、失本意候、自然四国辺御用之義可被仰付候、隨而雖是式御坐候、御道服五・御太刀・馬代進入候、誠書中之驗迄御坐候、恐惶、

九月十三日

(友政)
遠山久兵様

一六〇 石川忠総宛書状(三一四四)

私儀当地御普請隙明申候条、明日罷登候、此中者種々御懇意之段、忝仕合共御坐候、早々以使者可得御意候处、御普請ニ取紛無音、非本意候、隨而是式御坐候へとも、御道服十・御太刀・馬代致進献候、誠罷登候驗迄御坐候、自然四国辺御用之儀可被仰付候、猶此者可得御意候、恐惶、

九月十三日

(忠総)
石川主殿様

一六一 加藤嘉明宛書状(三一四五)

自是可得御意存候处、預御状候、先刻佐河州・牧助右是へ御越候、紀伊守殿へ各罷越可被仰合之由候つる、紀州就御他行先以被罷帰候、河州・助右へも只今是へ可有御出之由申遣候条、貴様も是へ先可被来御出候哉、紀州へ可致御供候、必々奉待候、恐惶、

九月十四日

(加藤嘉明)
加左馬様 御報

一六二 中井正清宛書狀(三一四六)

是へ御着をも不存從是不得御意候處、早々御下向忝令拝見候、駿府へ就召御下向之由御太儀共ニ候、隨而信樂壺并諸白大樽ニ被送下候、御懇情之至忝令存候、頓而御普請所へ御出之由、心事預貴面可得御意候、猶自是可申述候条、早々可及御報候、恐惶、

九月十六日

(中井正清)
中大和守様

一六三 左馬助・阿波守宛書狀案(三一四七)

猶以御障^(障)にて御坐候者、兩人所只今にても可被成御出候哉、御報次第可得御意候、

一書令啓候、町場之儀付而懸御目得御意度候、御宿へ御帰被成候てハ御出合も御六ヶ敷可在御坐候之間、会所へ御坐候て可被下候、御兩人其へ參得御意度候、時分柄之儀ニ御坐候間、右様子早相究申度候、為其如此候、

九十七日 左馬助

阿波守

御奉行衆四人

一六四 織田信重宛書狀(三一四八)

被寄思召御懇札忝候、如仰先度者御尋過分至候、当地御普請折角申付躰御坐候、漸隙明申候条、近々帰国可仕候、鶴之義自国本可進候、相心得存候、隨而熨斗一折被懸御意候、御懇意忝候、猶追而可得御意候、恐惶、

九月廿二日

(信重)
織田民部様

一六五 本多忠政宛書狀(三一四九)

被入御念示預忝候、私儀早々可罷登候處、手前石垣少崩申付而築直申候、御談合旁障^(障)入申候て遅々仕候、今少致滯留頓而可罷登申之条、必々遂參上心事可得御意候、舟などの儀被懸御心被仰下候、畏々忝存候、今二三日者罷登間敷哉

と存候、猶預後音之時候、恐惶、

九月廿二日

(本多忠政)
本美濃守様

一六六 西尾利氏宛書狀(三一五〇)

(付箋)
「又石垣損申候、猶又御逗留」

(付箋)
「又御鷹御拝領」

態此者進候、先度御奉行衆切手持せ懸御目候刻者、種々御肝煎故早々被達 上聞忝仕合共御坐候、殊更御鷹被為拝領由、外聞と申無冥加奉存候、鷹師折節不

罷居、少居申者進之候、御後頼存候、^(安藤直次)安帶刀殿へも以書狀得御意候、御次而

も御坐候者、忝通御取成奉頼候通、帶刀殿へ可然様ニ可預御心得候、但いかゞ御坐候ハん哉、貴様御分別次第ニ書狀御届頼申候、拙子義去ル十四五日之時分可罷登覚悟ニ御坐候處、最前得御意候土ふけ・石垣殊外地惡御坐候ニ付而、石垣少狂申候、被成御直候御談合申付候而、于今罷在候事候、定而頓而可罷登候条、其刻可得御意候、其元珍敷御沙汰共御坐候者、可被仰聞候、猶此者口上ニ申含候、恐惶、

九月廿二日

(西尾利氏)
西藤兵様

一六七 安藤直次宛書狀(三一五一)

態得御意候、然者先度御奉行衆より御普請之切手^(西尾利氏)西藤兵迄進候處、種々御取成故御鷹拝領仕由、自藤兵被仰越候、誠以外聞と申、無冥加仕合御坐候、自然御次而も御坐候者、忝通御取成奉仰候、委曲西藤兵迄申達候、恐惶、

九月廿二日

(安藤直次)
安帶刀様

一六八 中井正清宛書狀(三一五二)

猶以被入御念、御狀過當至極候、
去ル廿日之御狀、今日致拝見申候、然者私式手前御普請之儀、御取成候付而、
忝被 仰出之由、過分至極御札不申得、私儀未是二罷在候、隨而地形惡くミ申
たる石垣、御縄張改申候、委様子急度從是可得御意候、左馬殿へも御狀之通具
可申渡候、委曲期後音候、恐惶、

九月廿三日

中井大和様
(正徳)

一六九 池田輝政宛書狀(三一五三)

被懸御心遠路被仰下忝奉存候、早々可為御帰城と珍重存候、隨而最前崩申候ふ
けの石垣又候哉損申候、御縄張為御談合、于今致逗留候、近々可罷登候条、自
在所可得御意候、誠御懇情之義、恐懼至極候、猶追而可申上候、恐惶、

九月廿四日

池田輝政
三左様

一七〇 大道寺紀伊守宛書狀(三一五四)

(付箋)
「御発途」

猶以是式候へとも、道服三令進入候、使札之驗迄候、
当地逗留中早々以使者可申述候処、御普請ニ取紛無音之至候、親にて候者申承
候間、拙子も以使者成とも申入候と申聞候得共、終何かと仕失本意候、雖遅々
候態企使札候、御普請隙明只今令帰国候条、重而罷越刻期面上可申入候、委曲
此者申含候、恐惶、

九月廿七日

大道寺紀伊守殿

一七一 本多忠政宛書狀(三一五五)

(付箋)
「御帰国」

被入御心遠路是迄御飛札忝令拝見候、私儀も一昨日在所へ致帰着候、如仰先度

者懸御目心事可得御意と存候処、龜山へ就御越罷通候、御殘多存候、今度名古
屋二罷在中者、別而御懇意色々御心付之段、更々不得申候、来年其辺罷通候て、
相積義共可得御意候、返々御懇情忝存候、恐惶、

十月五日

本美濃守様
(本多忠政)

一七二 浅野幸長宛書狀(三一五六)

態致啓上候、拙子儀六七日已前罷帰候、今度於名古屋者別而得御意忝存候、隨
而当年出来之鶴二居進覽申候、御慰ニ可被成御覽候、猶期後音之時候、恐惶、

十月十日

浅野幸長
浅紀伊守様

一七三 片桐且元宛書狀(三一五七)

態致啓上候、先度尾州より罷帰刻者少腫物氣と御坐候而、御目見も不仕迷惑
申候、於 御前御取成之由、殊更御服拝領忝奉存候、隨而於当国出来候鶴二居
致進入候、御慰ニ被成御覽候者可忝候、猶期後音之時候、恐惶、

十月十日

片桐且元
片市正様

一七四 西尾利氏宛書狀(三一五八)

(付箋)
「駿府焼失」

猶以少進物持せ、頓而使者可致進上候、委曲ハ其節可申承候、此時分之
義候条、何二而も材木致進上度存候、并可立御用木無御坐、令迷惑候、隨
分相改少にても舟にて廻シ、可致進上候、

急度令啓上候、去ル九日之夜其地火事出来仕、御城中致炎上之由驚存候、併

(徳川家康)

上様御無事之由、大慶奉存候、承否先如此御坐候、御年寄衆へ以書狀申入候、
御届頼存候、猶追而可得御意候、恐惶、

十月十五日

西尾利氏
西藤兵様

一七五 本多正純・成瀬正成・安藤直次宛書状(三一五九)

態得御意候、其地火事出来仕、御城中致炎上之由、驚奉存候、承否先貴様迄
如此御坐候、猶重而可申達候、恐惶、

十月十五日

(本多正純)
本上野介様

(成瀬正成)
成隼人様

(安藤直次)
安帯刀様

一七六 進物注文(三一六〇)

(徳川家康)
御所様へ 御夜の物二つ 内一つからおり

内一つとんす

御ふとん二つ いかにも結構二

御子様達へ 御道服二つ宛

五人衆へ 小袖一重宛

おせん・おまつへ 小袖一重宛

一七七 本多正信・大久保忠隣・土井利勝宛書状(三一六一)

態得御意候、駿府 御城中火事出来仕、御殿致炎上候由、驚奉存候、先貴様迄
如此御坐候、恐惶、

十月十五日

(本多正信)
本佐州様

(大久保忠隣)
大相州様

(土井利勝)
土大炊様

一七八 西尾利氏宛書状(三一六二)

(加藤嘉明) (山内一豊)
追而申入候、加左馬殿・松土佐殿ハ從尾州被罷登、于今在伏見候由候条、定
而其地ハ早々使者可被致進上候、拙子事ハ頓在所へ罷下候故、御両所よりハ遅
承候間、被成其心得可被下候、恐惶、

十月十五日

(西尾利氏)
西藤兵様

一七九 本多正純宛書状(三一六三)

(徳川家康)
態以使者得御意候、上様へ御夜物式・御ふとん式進上仕候、以御次而被遂

御披露、御取成奉頼存候、委曲西尾藤兵衛殿へ申入候、恐惶、

十月十七日

(本多正純)
本上野介様

一八〇 西尾利氏宛書状(三一六四)

(付書)
「御進物」

又申候、最前拝領仕候御鷹、無事ニ参着申候、忝候、安帯刀殿へ御心得奉
頼候、又申候、おあちやへ別而何にても進申度候、いかゞ可有御坐候哉、
可然義ニ候ハ、其元ニわたなど御坐候由申候まゝ、何程にても御さしつ
次第、被遂可被下候、御使者進可然候者、此者ニ被仰付、御調させ候て可
被下候、

一昨日も以使者得御意候、上様へ御夜物ニ御ふとんニ進上仕候、先以不取
合如此御坐候、自身罷下致 御目見度候へとも、御前難計御坐候条、非其儀
候、此由上州迄可預御心得候、手前在合之材木、少々近々舟にて進上仕候、

其節又可得御意候、御子様達へ御道服二つ宛御五人衆へ御小袖一重宛并おせん。

おまつへ御小袖一重宛進之候、(森屋善成)八九郎左衛門殿被仰談、口上奉頼候、其元相替

御沙汰共御坐候者、具可被仰越候、頼入存候、猶近々可得御意候、恐惶、

十月十七日

(西尾利忠)
西藤兵様

帶刀殿 右衛門殿 九郎左へ御狀被遣、

一八一 米津正勝宛書狀(三一六五)

貴札令拝見候、隨而駿府 御城中去九日之晩火事出来仕候由、驚奉存候、併

上様并御子様達何事も無御坐候由、珍重奉存候、則上野殿迄以使者得御

意候、努々不存候处、早々被仰知忝候、御札不得申候、猶追而可得御意候、恐惶、

十月十五日

(正勝)
米津清右様

一八二 池田輝政宛書狀(三一六六)

(付書)
「御内書御請」

從 (徳川家康) 大御所様之御内書謹而頂戴仕候、早々御届被下忝奉存候、自上野介殿之

御狀同前ニ令拝見候、即上州迄御請御使へ進之候、被遣候て可被下候、誠私帰

国仕已後、自是不得御意非本意奉存候、猶奉期後音之時候、恐惶、

(池田輝政)
三左様

一八三 池田輝政宛書狀(三一六七)

追而示預忝拝見仕候、然者駿府 御城中去九日火事出来候て、御台所・御局方

(徳川家康)

少々致炎上候由驚存候、先以上様・御子様達御無事之由、目出度奉存候、私

も昨日承条、内々可得御意と存候处、罷成御報候、猶自是可申上候、恐惶、

(池田輝政)
三左様

一八四 本多正純宛書狀(三一六八)

就今度名古屋御普請之儀被成下御内書、謹而頂戴仕候、自貴様之御狀同前ニ、

自三左衛門殿届被下令拝見候、御前以御次而、忝旨御取成奉仰候、恐々謹言、

(池田輝政)
十月十七日

(正純)
本多上野介殿

一八五 中村正勝宛書狀(三一六九)

御狀拝見申候、仍 御内書并自本多上野介殿之御狀、早々届被下候、即上州迄

之御報、御使へ進候、然者駿府 御城中火事参由、御台所・御局方焼申候由被

仰知忝存候、自三左様被入御念被仰下候、忝候通可預御心得候、拙子儀十日

已前ニ尾州より罷帰候、其後不申通、無音所存之外候、恐々謹言、

十月十七日

(中村正勝)
中主殿助様

(表紙)
「慶長十五

案紙

十月十五日
二月九日迄

見申候得とも
何も無之

一八六 中井正清宛書狀(四一一)

〔付箋〕
「材木御進上」

態得御意候、其地火事出来仕、御城中致炎上候由、驚奉存候、承否先貴様迄如此御坐候、随而何ニ而も材木を進上仕度存候へとも、此辺者檢道具大切ニ御坐候故、御用木ニ可成木無御坐候、桧板杉之桎板なと少々御坐候条、頓而廻可致進上候、若当国ニ御坐候材木御用之木も御坐候者、此者ニ可被仰越候、杉桁者御坐候へとも、御作事ニ入不申候由、内々承及候条、致進上間敷と存候、桁御用ニ御坐候者、早々可被仰下候、就中、去秋当地洪水付而、杉ノ丸木流出山中、川筋海端辺にも御坐候、長サ五間より上之木、末へ口指渡シ一尺式尺三尺御坐候木、数百本計も可有御坐候哉、若々か様之木御作事御用ニ御坐在間敷候哉、万一御用ニ御坐候とも、舟数入可申候間、私一分ニ致進上義、罷成間敷候、差当御用ニ御坐候者、自他国御舟被仰付、可被成御取候哉、幸流出申在之木にて御坐候間、致進上度候、併右之木、過半川筋中途ニ御坐候、川端迄出し申ニ手間入可申候、其儀者、私領内之義御坐候間、成次第随分可申付候、いづれもふし木古木にて御坐候、御用ニハ立申間敷候へとも、先貴様迄得御意候、いか様ニも御指南頼入候、内にて頭木長サ十間、末口指渡一尺五寸計御坐候木、上木にて御坐候、桧ハ一切無御坐候、いづれも杉にて御坐候、猶近々可得御意候、定而貴様も其地ニ可為御滞留と存候、材木之儀、委此者ニ可被仰下候、頼入候、恐惶、

十月十五日

(中井正清)
中大和様まいる

一八七 益田老岐守等宛書狀(四一二)

〔付箋〕
「塩舟」

板東郡幸多浜より上方へ差上塩舟問之義、如前々可被申付候、とかく塩屋勝手次第、可有其沙汰候、恐々、
慶長十五

十月十七日

益田老岐守とのへ
同左兵衛とのへ

一八八 佐飛州宛書狀(四一三)

御狀令拜見候、如仰其後者不能面上候、于今大仏ニ御詰候由、御苦勞令察候、拙子事自尾州罷歸時少々腫物氣御坐候て、秀頼様不致御目見義直様罷通付而不遂面上候、然者鶴之義蒙仰候、よくも無之候つれとも、先日一居進候、当年者鷹数出来無之付而、よき鷹無御坐候、手前四五つ居なつけさせ申候間、鶴ニ手際之よく候を可進候条、重而自是御左右可申候、其刻人を御下可有候、よき鷹ハ已来も在間敷候、手際のよきを責而進度候、当年鷹無之様子ハ浏底菱尖存知候事候、猶迫而可申候、恐惶、

十月十八日

佐飛州様 御報

一八九 本多忠政宛書狀(四一四)

態以飛札得御意候、然者中務殿御所勞此頃少指出申由承及候、いかゞ無御心元存候、寒天時分無御油断御養生專一存候、中務殿へも可申入候得共、御病中之儀候条非其義候、可預御心得候、何様期後音之時候、恐惶、

十月廿四日

(本多忠政)
本美濃守様 人々御中

一九〇 平岩親吉宛書狀(四一五)

態得御意候、私義頼在所へ無異儀罷着候、今度ハ其地逗留中無懈怠御心付共、誠以過分至極存候程者御礼も不得申候失本意候、自然此辺御用之義御坐候者可被仰付候、不可存疎意候、何様期後音之時候、恐惶、

十月廿四日

(親吉)
平岩主計様

中村対馬殿 金松修理殿 大道寺玄蕃殿
(兼松正吉)

深井丹波殿 原右衛門殿 大崎七郎右衛門殿

石黒勘右衛門殿 横田三郎兵衛殿 大炊殿

一九一 牧長勝等宛書狀(四一六)

態以飛札得御意候、其元御掃地迄何頃致首尾可為御帰宅候哉、寒天時分一入御苦勞奉察候、相替様子も無御坐候哉、承度存候、雖無差義御坐候、余御遠々數罷成候条如此候、猶期後音之時候、恐惶、

十月廿六日

牧助右様

滝豊前様

佐河内様

村権右様

一九二 織田信重宛書狀(四一七)

態以飛札得御意候、然者最前も申入候石場之義、被入御念被成御取置せ忝候、拙子式於其地来年御普請被仰付、必定之御沙汰者無御坐候得共、到于時行当申儀其上各御取置候由承付而得御意候处、種々御懇意之段、誠以過分至極候、弥無相違被仰付儀頼入存候、相替御沙汰共候者、可被仰聞候、猶重而可得御意候、恐惶、

十月廿六日

織民部様

一九三 織田信重宛書狀(四一八)

態以飛札得御意候、然者最前も申入候石場之義、被入御念御取置せ候由忝候、拙子式於其地来年御普請被仰付御沙汰者不承候へとも、至于時行当申儀其上各御取置之由承付而得御意候条、種々被入御精段、誠二過分至極候、弥無相違被仰付義頼入候、珍布御沙汰も候ハ、可被仰聞候、猶期御音之時候、恐惶、

十月廿六日

織民少様

一九四 道与宛書狀(四一九)

態令申候、随而長右衛門罷下了意手前銀子之義承届候、於当国被申付候材木之分悉出来、大かた上着之由二候、其上手堅筈共候て、右之銀子可被相渡之旨、書物被仕候、則写進候条可在披見候、如此仕合候处、今更遅々之様子被申候ても自外不参事候、たとひ從和州銀子被相渡さる儀候共、主被引替にても被相渡候ハて不叶事候条、貴老是非氣遣候て、急度甚左衛門方へ被相渡候様二頼申候、当国之材木出来候はねハ被申所もいかゝ候ハん哉、右手堅書物之筋目其上材木上着候上ハ、出入在間敷事候、了意へ此由被申届才覚頼入候、恐惶、

十月廿六日

道与老

一九五 本多忠政宛書狀(四二〇)

猶以当国にて申付候丸炭五か并蕨桶一進之候、猶重而可申候、態以使者得御意候、中務少輔殿御死去之由、御力落可申様も無御坐候、御愁傷之程奉察候、為御香典銀子十枚致進入候、御志迄候、恐惶、

霜月四日

本美濃守様

一九六 前右近宛書狀(四二一)

遠路御尋問忝候、其已来者不申承無音之至候、於尾州名古屋者、不懸御目候、御煩にて候由、是にて承無御心元存候つる、随而当地珍敷朝倉山椒五袋被懸御意過分至候、猶期後音之時候条、不能細候、恐々、

霜月九日

前右近様

一九七 青山忠成宛書狀(四一一二)

為御音信御使札殊更諸白二樽鮭一尺被懸御意候、賞翫過當之至存候、其辺珍敷御沙汰も無御坐候哉、承度存候、何様期後日之時候、

霜月九日

青助左様 まいる

一九八 生駒正俊宛書狀(四一一三)

其已後不得御意、疎遠之至失本意存候、隨而不寄思召事候、四宮勘左衛門と申仁親子、此已前數年被召置たる由ニ候、今程当国ニ穩陰罷居候、いか様之様子にて其元を罷退候をも不存候得共、如前々被召返候ハ、可畏存候、拙子者一向不存仁ニ候へとも、彼縁族是ニ罷在、一通申達くれ候へと懇望候之間、如此御坐候、御同心可忝候、恐惶、

霜月十六日

(生駒正俊)
生左近様

一九九 池田元信宛書狀(四一一四)

態得御意候、然者御身上不相続付而、今程御入寺之由無御心元存候、御用等候者可承仰候、先承否如此候、猶重而可申入候、恐惶、

霜月十八日

(池田元信)
池作州様 人々御中

二〇〇 渡辺勝宛書狀案(四一一五)

道越歸洛候条令啓上候、其已来久不申通候、其元相替御沙汰も無御坐候哉、承度存候、拙子事も緩々と致在国候、隨而当国にて申付候条、炭五荷令進入候、何様期後日之時候、恐惶、

霜月十八日

(渡辺勝)
渡筑州様

二〇一 藤八右宛書狀(四一一六)

遠路御飛札殊更諸白二樽并土鮭二被懸御意、別而賞翫欣然之至候、其元相替御沙汰も無御坐由珍重存候、何様期後日之時候、恐惶、

霜月十八日

藤八右様

二〇二 渡辺勝宛書狀(四一一七)

猶以最前申入候様子ニハ相替候事候条、今一往市正殿へ被仰入可被下候哉、何様ニも頼入候、

追而得御意候、いつそや以書狀市殿へ申入候、大坂疊屋清二郎と申者之義、今一往御託言申候てくれ候へと達而拙子迄申事候様子具道越へ申候条、被遂御分別今一度市殿へ御理候て可被遣候哉、但不謂義と思召候ハ、様子可蒙仰候、委曲御報ニ可承候、猶期後日候、恐惶、

霜十八

(渡辺勝)
渡筑州様

二〇三 木右衛門宛書狀(四一一八)

御歸国之節可為御取紛処、遠路預御使者誠以御懇情之至過當不少候、如仰於尾州者、御普請中節々得御意本望至極存候、隨而純子廿卷被懸御意忝令存候、御隔心かましき御音信ニ御坐候、何様自是可得御意候、先日者於京都可懸御目と存候処、早々罷下ニ付而不申承御殘多存候、委曲御使者ニ申達候、恐惶、

霜月廿一日

木右衛門様

二〇四 池田利隆宛書狀案(四一一九)

遠路御使札忝奉存候、殊賢付大樽三送被下候、御懇情別而恐懼至極存候、自是御礼以使者成共可得御意候処、何角無音仕候、猶期後音之時候条、早々及御報候、恐惶、

極月八日

(池田利隆)
松武藏守様

二〇五 本多正信・土井利勝・鵜殿氏長宛書狀(四一二〇)

追而得御意候、然者去秋拙子妹下原湯治之刻、種々被加御心由忝候、致相応満

足仕候、早々以使者御礼可申達之處、彼是取紛無音所存之外候、猶重而可得御意候、恐惶、

十二月十三日

(本多正信)
本佐州様

(土井利勝)
土大炊様

(堀原氏長)
鵜兵庫様

二〇六 奥平大膳正宛書狀(四一二一)

態得御意候、其後者久敷不申承候、去秋拙子妹御領内下原へ致湯治候處、別而御懇意忝存候、其後早々以使者成共、御礼可申達候處、何角取紛無音失本意候、何様重而可得御意候、恐惶、

十二月十三日

奥平大膳正様

二〇七 甚左方へ申遣事書(四一二二)

一小袖二すミ廿か和州へ
一了意手前之事
一杉之大木之事
一又右衛門手前之事

甚左方へ申遣

二〇八 若原右京亮宛書狀(四一二三)

寄思召遠路御使札忝拜見申候、如仰於尾州節々申承本望之至存候、其已後無音所存之外候、隨而賢付大樽二荷被懸御意候、御懇情之段難申謝候、委曲御使へ申達候、恐惶、

十二月廿九日

(若乙)
可原右京様 まいる

二〇九 池田由之宛書狀(四一二四)

柴山十兵へ殿下人之義付而、山崎内匠・岩田甚五左衛門方迄預御狀由、私ニ申聞候一儀、即申付可進候へとも、彼者根本当国之者にて御坐候、重々申分も御坐候由ニ候、重而十兵衛殿より慥成仁於被差越者、以相對隨其旨可申候、委曲自両人方可得御意候、恐惶、

十二月晦日

(池田由乙)
池羽州様

二一〇 松平正綱宛書狀(四一二五)

態得御意候、此頃御煩之由いかゞ無御心元存候、早々為御見舞可申達處、遠路故無音所存之外候、先以飛札申入候、猶追而可申承候、恐惶、

十二月廿八日

(松平正綱)
松右衛門様

二一一 西尾利氏・更闌老宛書狀(四一二六)

尚々来春被成御上洛様ニ、下々申成候事実候哉、承度存候、

(松平正綱)
態得御意候、松右衛門殿此頃御煩之由無御心元候、いかゞ御坐候哉、様子可被仰聞候、遠路故無音所存之外候、右衛門殿へも御心得所仰候、隨而御前始相替御沙汰も無御坐候哉、承度存候、何様来春早々可得御意候、恐惶、

十二月廿八日

(西尾利氏)
西藤兵様

更闌老

二一二 片桐且元宛書狀(四一二七)

猶以貴様へも鯉ニ令進獻候、御賞翫可忝候、其元珍布御沙汰候ハ、可被仰聞候、已上、

新春之御慶賀、尤不可有尽期候、隨而鯉三進上仕候、可然候ハ、御披露奉頼存候、何様罷登御慶可申上候条、其節期面上候、恐惶謹言、

正月五日

片桐市正殿
(皇元)

二二三 進物事書案(四—二九)

一、甚左衛門かたへ、九郎兵衛ニ銀子被遣候条、早々宗味かたへ、可被相渡候事、
一、長右衛門かたへ、といや并し、く、彦太郎へ手前銀子之事、急相調宗味かたへ相渡、うけとり取可被置事、

一、道与へ、為音信金子老枚・純子三被遣、
一、玄徳へ、炭十荷・とん子二まき、

二二四 織田長益宛書状(四—二九)

新春之御慶賀不可有尽期候、拙子ニも頼而罷登、以貴面可得御意候、其後者杳久以書状も不得御意非本意候、随而新敷御坐候条、鯉三致進献之候、誠書中驗迄御坐候、恐惶、

正月五日

(織田長益)
有楽様

二二五 奥平忠政宛書状(四—三〇)

新春之御慶先以珍重奉存候、其已来者以書状も不申上無音至候、随而御約束仕候鶴二居進上仕候、去冬殊外寒故、於路次損候而ハと、只今迄延引候、去年者当国鷹数出来無之候故、勝不申候へとも如此御坐候、当秋者随分撰候而、進上可申候、何様永日可得貴意候条、不能具候、恐惶、

正月六日

(奥平忠政)
松平摂津守様

二二六 西尾利氏宛書状(四—三一)

新春之御慶先以珍重存候、歳暮ニ進候使者昨夕罷帰、御報具令拝見候事、

一、上様御無事御坐候由、下々迄大慶ニ奉存候、当春
(徳川家康、徳川秀忠)
両御所様御上

洛之由必定、重而可被仰聞候、奉頼候事、

一、年頭之御祝儀御馬代金、被成御取替被仰調候由忝存候、致失念歳暮之使者ニ持上不申、只今進候、慥ニ可被成御請取候事、

一、各へ進候歳暮之小袖共、不念候つる由、扱々迷惑仕候、重陽ニ進候使者小袖共貴様へ預け置候由申聞候、定而悪敷候はんまゝ、歳暮ニ進候事ハ成間敷候条、自伏見申付可下之由申候処、一段よく其通申ニ付而、如此段御心中者不及申、外聞か様成迷惑無之仕合候、驚入存候、私も為無念沙汰之限りにて御坐候事、

一、当年重陽歳暮ニ進候小袖共、如御指図之面板物にてわた相添可進之候通得其意候、随分念を入可申付候、さ様ニ候へ者、路次ぬれ申様成義も可在之候、自然不念成義も御坐候へ者、いかゞ之条御心安間者、内證にて以銀子相調候様ニハ成間敷候哉、是又内々御分別候て成事ニ候ハ、か様ニも仕度候、いかゞ可在御坐候哉、さ候ハ、誰々ハ銀子と御注文可給候、随其可申候事、一、重陽歳暮ニ重而者、慥成使者をも可進候哉、御指図奉頼候、於さ様者自端午可得其意候事、

(正調)
一、松平右衛門殿御煩此頃御本復候由、珍重存候つる、重而御見舞申、可然候ハ、此者江戸へ被遣可被下候、書状相調遣申候、其元ニ御入候ハ、不及申、委曲期後音之時候、恐惶、

正月十四日

(西尾利氏)
西藤兵様

二二七 松平正綱宛書状(四—三三)

旧冬以飛札得御意候、于今不罷帰候、御煩此頃弥可被成御本復之由承、珍重存候、節々可得御意候处、遠路故無音、所存之外候、何様期後日之時候、恐惶、

正月十四日

(正綱)
松平右衛門様

二二八 牧長勝宛書状(四—三三)

新春之御慶珍重存候、旧冬御帰、御前之御仕合可然之由、於拙子式も大慶存候、然者当年御普請之様子、使口上ニ被仰下候、奉得其意候、弥御沙汰候ハ、可

被仰聞候、当春 兩御所様御上洛之由、さ候ハ、可為御供候哉、承度

(徳川家康・徳川秀忠)

存候、於さ様者、於上方心事可得御意候、委曲御報ニ可被示下候、恐惶、

正月十四日

牧助右様
(尾張)

二一九 後藤光次宛書状(四一三四)

猶四国辺御用之儀候者、可被仰下候、

新春之御慶珍重存候、当春

(徳川家康)

上様御上洛之由、必定ニ御坐候哉、承度存候、尤可為御供候条、以貴面心事

可得御意候、旧冬ハ私使ニ被入御念御懇志之段、具申届候、毎事忝仕合共御座候、中々御礼不得申候、珍敷御沙汰共候ハ、諸事可被仰聞候、奉頼候、雖差義無之候、如此御坐候、恐惶、

正月十四日

後庄三様
(後藤光次)

二二〇 城昌茂宛書状(四一三五)

当年ハ未申通候、去年者節々預御状忝候、当春

(徳川家康・徳川秀忠)

兩御所様御上洛之由、定而可為御供条、於上方心事可得御意候、雖無差

儀御坐候、余無音之条如此御坐候、恐惶、

正月十四日

城泉様
(昌茂)

二二一 上安次郎宛書状(四一三六)

尚々は式ニ御座候得共、道服ニ令進入候、書中之驗迄候、

其已来者久敷不得御意、御床敷存候、御前始珍敷御沙汰も無御坐候哉、

(徳川家康)

上様当春御上洛之由必定、承度候存候、於さ様者、可為御供候条、以貴面心

事可得御意候、雖無指義御坐候、余致無音候条、如此御坐候、恐惶、

正月十五日

上安次郎様

二二二 鵜殿氏長・土井利勝・藤宗右宛書状(四一三七)

其地蒲生飛騨殿屋敷火事出来之由承候、必定にて御坐候哉、火本拙子屋敷近所

候条無心元、此者遣申候間如此御坐候、

(徳川秀忠)

將軍様当春御上洛之由、事實御坐

候哉、承度存候、諸事珍敷御沙汰候者、可被仰聞候、奉頼存候、其已後者杳久

不得御意、御床敷存候、猶期後音之時候、恐惶、

正月十五日

鵜兵庫様
(鵜殿氏長)

土大炊様
(土井利勝)

藤宗右様

二二三 池田輝政宛書状(四一三八)

態以飛札申上候、然者江戸御屋敷、從蒲生飛騨殿火事致出来焼申候由、只今私屋敷留守居方より申越候、驚奉存候、為御見舞得貴意候、恐惶、

正月廿四日

三左様
(池田輝政)

二二四 渡権兵衛宛書状(四一三九)

如仰新春之御慶、重疊申納候、其辺珍布御沙汰も無御坐候哉、来月者 御所

様御上洛之由、弥必定御坐候哉、さ候者、可罷上候条、以貴面御心事、可申承

候、其已来者相隔御床敷存迄候、随而被入御念、諸白三荷被懸御意過当之至存

候、吳々も遠路示被下忝候、何様期後音之時候、恐惶、

二月七日

渡権兵様

二二五 青助左宛書狀(四一四〇)

如仰新春之御慶珍重候、遠路御使札、殊更諸白一荷干鮭一折被懸御意、過当至極存候、其元珍敷御沙汰も無御坐候哉、何様春中罷登、相積儀共可申述候条、不能巨細候、恐惶、

二月八日

青助左様 御報

二二六 本多正純宛書狀(四一四一)

(付箋)
「御上洛被蒙仰」

去二日・三日之御狀両通、自三左衛門殿届被下、今日九日ニ拝見仕候、

御讓位三月廿七日之御日取、御所様近々就被成 御上洛、私式も可罷登旨、

謹而奉得其意候、急度可致上着候、恐々謹言、

二月九日

(正統)
本多上野介殿

二二七 池田輝政宛書狀(四一四二)

昨日八日之貴札、今日午刻ニ到来、拝見仕候、随而從本多上野介殿、両通之御

状届被下、御書中同意ニ御坐候条、御報一紙ニ申被遣候て可被下候、御所様

近々就御上洛被成、私式も可罷登由被仰聞候、貴様者何時分可被成御出国候哉、御報ニ於被仰下者可忝候、御飛脚即案内之者申付土佐へ遣申候、御返事自是致進上候、恐惶、

二月九日

(池田輝政)
二二 左様

二二八 山内忠義宛書狀(四一三四)

(池田輝政)

自三左衛門殿、御飛脚被遣候条、案内者申付候、自上野殿、私式へも御触状候、貴様も近々可為御上洛候条、於伏見可得御意候、私式ハ廿日時分可罷上かと存候、猶期後音候、恐惶、

二月九日

(山内忠義)
松土州様

(表紙)
「慶長拾捨七 子 極月廿五日

於江戸

草案

翌年二月朔日迄」

○表紙と二二九との間に「一、脇坂淡州へ御狀被遣、廿五日」という覺書がある。

二二九 城昌茂宛書狀(五一二)

(付箋)
「前夕御参府」

被入御念御飛札忝存候、此中御鷹野為御供江戸御滞留之由、御苦勞共候、拙子儀も前夕是へ罷着候、少用御座候て、駿府にて不致 御目見、直様爰元へ罷通付而、以使者不申入候、来春者早々可罷登候条、心事期面上之時候、其後者遙久不申通無音、所存之外候、恐惶、

十二月廿四日

(昌茂)
城泉様 御報

○二二九と二三〇の間に、「一、安藤与十殿 倉橋内匠殿 朝倉藤十殿 御

出ニ付而即御礼状被遣、銘々ニ被遣、廿五日」という覚書がある。

二三〇 井伊直孝宛書状(五一二)

為御音信八木百俵・大豆百俵被懸御意、被入御念過當之至候、何様期面公之時候、恐惶謹言、

極月廿六日

(井伊直孝)
井掃部様 人々御中

〇二三〇と二三一の間に、「一、曾又左へ御状被遣、昨日御出之為御礼、廿

六月」という覚書がある。

二三一 大久保忠隣宛書状(五一三)

貴札忝存候、如仰昨日者御尋過分至極存候、尤早々以参上可得御意候处、未致御目見付而延引申候、登城仕候ハ、遂参上可得貴意候、恐惶、

極月廿六日

(大久保忠隣)
大相州様

二三二 本多正信・土井利勝宛書状(五一四)

(付箋)
「御参府御目見」

只今者以御取成 御前仕合能致 御目見、忝奉存候、尤以参上可得御意候得共、先如此御坐候、随而鶴是式ニ御坐候、御太刀・馬代銀子廿枚并御小袖五致進献候、何様遂参上可得貴意候、恐惶謹言、

十二月廿六日 御使 右近

(本多正信)
本作州様

(土井利勝)
土大炊様

二三三 井伊直孝宛書状(五一五)

(青山忠侯)
先程者青伯著守殿御同路ニ而御出之由忝候、今少遅罷帰早々御帰宅、御残多存候、伯州へ御参無之節、御心得頼入候、自是も御礼申入候、然者武藏殿へ可有御出之由火ともし時分可然存候、可致御供候、何様期貴面之時候、

十二月廿七日

(井伊直孝)
井掃部様

二三四 蜂須賀家政宛書状(五一六)

(付箋)
「蓬庵様へ」

態以飛札申上候、私儀去ル廿四日ニ至当地致参着候、先以相替御沙汰無御坐候事、

一、一昨日廿六日細内記殿・木下右衛門殿申談、令登城仕合能御目見仕候条、

御心安可被思召候事、

一、駿府当地ニ而來春御普請之御沙汰無御坐候、珍重存事候、猶追而可得貴意候、恐惶謹言、

十二月廿八日

蓬庵様

二三五 大久保忠隣宛書状(五一七)

今日者被成 御成、御機嫌宜御坐候由、珍重奉存候、御慰懃之貴札忝候、何様以参可得御意候、恐惶謹言、

十二月廿八日

(大久保忠隣)
大相模守様

二三六 森川氏信宛書状(五一八)

御慰懃之御状拝見申候、今程御所勞之由無御心元存候、何様緩々と以参御見舞可申候、尚期面上之時候、恐惶謹言、

十二月廿八日

森金右（兼川氏傳） 御報

二三七 牧野成里宛書狀（五—一九）

御懇書并鷹三之菱喰一送被下候、即可令賞翫候、過当之至候、御隙之時分、御立出待入存候、何事も期面上之時候、恐惶謹言、

極月廿八日

牧伊与様（牧野成里）

二三八 小笠原忠脩宛書狀（五—一〇）

遠路態御飛札忝致拜見候、如仰承義為越年当地祇候仕候、御手前御煩ニ付而、無御越不能貴面御残多存候、定而來春者早々可被成御坐候条、可申承候、其後者久不得御意無音之至候、猶期後音之時候、恐惶謹言、

十二月廿九日

小信濃守様（小笠原忠脩）

二三九 伊藤忠兵衛宛書狀（五—一一）

早々預御札、殊更江川兩樽并雁五送給候、過分之至候、爰元御越を不存、自是不申入候、所存之外候、尚期面上之時候、恐惶謹言、

十二月廿九日

伊藤忠兵衛殿 御報

二四〇 細川忠利宛書狀（五—一二）

為歲暮之御祝儀、御小袖老重内綾一被懸御意、誠幾久と忝存候、恐惶、

十二月廿九日

細内記様（細川忠利） 御報

二四一 大久保忠隣・酒井忠世・本多正信宛書狀（五—一三）

「●御城二而御食被下」
（付箋）

今晚於 御城御食可被下之旨、忝奉存候、恐惶謹言、
十二月廿九日

大久保相模守殿（忠隣）

酒井雅楽頭殿（忠世）

本多佐渡守殿（正信） 貴報

二四二 本多正勝宛書狀（五—一四）

先刻者預貴札候、即可覃御報候处、御城へ罷出只今拜見仕ニ付而、遅々迷惑仕候、早々以參可得御意候处、何かと所存之外候、却而御懇懃之御使札過当之至候、何様重而參、可得御意候、恐惶、

十二月廿九日

本多出羽守様（正勝）

二四三 曾我尚祐宛書狀（五—一五）

先刻者芳札忝候、即可覃御報候处、御城へ罷出只今令帰宅、遅々所存之外候、随而房州より到来候漬鮑一桶送給候、珍物別而過分候、御煩之無心元候、御快驗候ハ、御立出待入候、恐惶、

十二月廿九日

曾又左様（曾我尚祐） 御報

二四四 井伊直孝宛書狀（五—一六）

今朝者、松平丹後殿・渡辺山城殿へ可被召連候由、被仰付而、御中とへ參、御供可仕と存、中途迄參候处、御城二而御食可被下候旨、從御年寄衆被仰下付而、延引仕候、無首尾成様ニ御坐候へとも、右之仕合御坐候、何時ニ而も御隙次第被召連候ハ、可忝候、恐惶、

十二月廿九日

(井伊直孝)
井掃部様 人々御中

二四五 高木正綱宛書狀(五―一七)

当地御越之由、只今自藤宗右蒙仰付而、令承知候、拙子も二三日已前罷越候、何様以面上可得御意候、恐惶、

十二月廿九日

(高木正綱)
高九介様 人々御中

二四六 神尾守世宛書狀(五―一八)

先刻者預貴札候、令他行只今罷帰令拝見付而、御報遅々申候、御持病氣之由無御心元存候、就其明朝御茶被下儀、御延引旨得其意存候、何時にても可致祇候、恐惶、

十二月廿九日

(神尾守世)
神五兵様 御報

二四七 本多信勝宛書狀(五―一九)

昨日者御尋忝存候、尤早々以書狀成共御札可申入候處、何かと仕失本意存候、何様緩々と以參可申入候、恐惶、

十二月晦日

(信勝)
本多百介様 人々御中

二四八 山岡景長宛書狀(五―二〇)

年頭之御札之義、被仰知忝候、奉得其意候、何様以面上得御意候、恐惶、

十二月晦日

(山岡景長)
山五作様 御報

二四九 青山忠俊宛書狀(五―二一)

貴札忝候、隨而正月五日・九日・十日之内朝晩之間御茶可被下候由、過分存候、

(細川忠利)
細内記殿申談自是御報可得御意候、恐惶、

十二月晦日

(青山忠俊)
青伯耆様 御報

二五〇 本多忠朝宛書狀(五―二二)

先刻者貴札忝候、即可覃御報候處、令他行只今拝見仕候、隨而正月五日之晚於御書院御茶可被下候由、忝存候、可致祇候、何様期貴面之時候、恐惶、

十二月晦日

(本多忠朝)
本出雲守様 貴報

二五一 榊原康勝宛書狀(五―二三)

正月六日之晚於書院御茶可被下候由、忝存候、必々可致祇候、乍略義為御札如此御座候、恐惶、

十二月晦日

(榊原康勝)
榊遠江守様 人々御中

二五二 井上正就他宛書狀(五―二四)

雖未不得御意候、爰元祇候仕候条、以使札申入候、隨而是式二候へとも小袖令進入候、何様以參可申承候、恐惶、

十二月晦日

(正就)
井上半九様三

(忠志)
水野監物様三

久さい老二

鷺坂檢校様二

(重俊)
森川内膳様三

二五三 向井忠勝・久永重勝宛書狀(五―二五)

唯今者被寄思召御尋忝候、早々御帰御残多存候、何かと仕自是以使札も不申入所存之外候、何様以參可申承候、恐惶、

十二月晦日

(向井忠勝)
向將監様

(重勝)
久永源兵様 人々御中

二五四 坪内定仍宛書狀(五―二六)

被入御念遠路是迄御飛札過分存候、歳暮之小袖とも方々御届忝候、私義於当所仕合能御札申上候之条、可御心安候、隙明次第其元參致 御目見可罷通候、罷登候ハ、先様共へ人を可進候、委曲其節可申入候、恐惶、

正月二日

(坪内定仍)
坪喜太様

二五五 丹羽長重宛書狀(五―二七)

如仰新春之御慶珍重候、仍来十六日之朝御茶可被下候由忝候、必可致祇候候、恐惶、

正月三日

(丹羽長重)
丹五郎左様 貴報

二五六 本多忠朝宛書狀(五―二八)

貴札拝誦忝候、明後五日之晩、必々可致參上候、何様期貴面之時候、恐惶、

三日

(本多忠朝)
本雲州様

二五七 殿氏長宛書狀(五―二九)

御慰懃之貴札忝候、何様以參上心事可得其意候条、早々覃御報候、恐惶、

三日

(編殿氏長)
鵜兵庫様 御報

二五八 本多忠朝宛書狀(五―三〇)

明後五日之晩、可被召寄候由忝候、必可致參上候、尤以參御札可申達候へとも、御事多半、却而如何候条、乍略儀、捧使札候、恐惶、

三日

(本多忠朝)
本雲州様 人々御中

二五九 山内將監宛書狀(五―三一)

先刻者被成 御書候、即御請可申上候処、罷出延引仕候、然者来九日之朝、於御書院、御茶可被下旨、忝奉存候、可然様御取成所仰候、尚致祇候御札可申上候、恐々謹言、

正月三日

山内將監殿

二六〇 岡田利治宛書狀(五―三二)

来九日之朝御茶可被下候由、令兼約候、然者從越後少将様九日之朝御茶可被下候旨、被仰下候条、致祇候候、右之通候間、不自由候、重而可參候、近頃御残多候、何様懃御目、可申承候、恐々謹言、

三日

(利治)
岡田太郎右様

二六一 曾我尚祐宛書狀(五―三三)

先日已来不申承候、御所勞如何無御心元候、參上見廻可申候処、方々取紛無音所存之外候、何様緩々と以參可申達候、恐惶、

正月三日

(曾我尚祐)
曾又左様

二六二 鷺坂檢校他宛書狀(五―三四)

一、川悅作方へ御返事被遣、十日之晚可被成御出之由、
一、鷺坂檢校・安栖・専益へ御狀被遣只今御出之御礼也、

三日

鷺坂檢校

安栖老

専益老

二六三 大岡權右宛書狀(五―三五)

今朝者被召寄忝候、尤早々以參御礼可申上候得共、先貴殿迄申入候、可然様御心得頼入候、恐惶謹言、

正月四日

大岡權右さま

二六四 天野作左衛門・中川重清宛書狀(五―三六)

夜前者被寄思召御尋忝存候、尤早々以參可得御意候へとも、何かと仕遅々、所存之外候、併余無音之仕合候条、先以使札申入候、随而是式候へとも、御太刀・馬代并小袖一重令進入候、何様期面上之時候、恐惶、

正月四日

天野作左衛門様

中川將監様 (重清)
太刀・馬代不添、

十一日之朝

雅楽殿 (酒井忠生)

十二日之晚 (土井利勝)
大炊殿

十七日之朝

安藤對馬殿 (重信)

十八日之朝 (青山忠成)
図書殿

いづれも御礼狀被遣

七日之朝 嶋田次郎右衛門殿 御礼狀被遣、

二六五 兵部宛書狀(五―三七)

貴札忝存候、即御報可申上候処、大相州御茶被下候、參上只今罷帰致拝見候、
(大久保忠勝)

私義節々以參上可得御意之處、方々不得隙無音仕候、少御咳氣之由、努々不存、御見舞も不申上候、無御心元奉存候、随而新敷鯉一折拝受、恐懼之至候、何様期貴面之時候、恐惶謹言、

正月六日

兵部様 御報

二六六 戸田周防宛書狀(五―三八)

一昨日者御尋忝候、将棋二差懸、早々躰別而御残多候、御隙之時分、御立出待入存候、随而任到来、鯉一折進入候、尚期面上候、恐惶謹言、

正月六日

戸周防様 人々御中

二六七 大久保忠隣宛書狀(五―三九)

今朝者、御茶被下忝存候、尤以參御礼可申上候へとも、先如此御坐候、尚期貴面之時候、恐惶、

正月六日

(大久保忠勝)
大相州様

二六八 滝川正利宛書狀(五―四〇)

御懇札并御樽二・雁二被懸御意候、過分存候、御眼病いかゝ、無御心元候、節々以參御見舞可申候処、方々不得隙所存之外候、尚期面上時候、恐惶、

正七日

(滝川正利)
羽老州様 御報

二六九 専益宛書狀(五―四一)

先程者御尋忝候、松平武藏守殿、井伊掃部所へ可在御出候由、同道可仕旨令兼約付而、御心閑不申承御残多存候、此中節々御出過分至極存候、御隙之時分、重而御来儀待入申候、尚期後面之時候、恐惶謹言、
(池田利隆) (井伊直孝)

正月七日

専益様

二七〇 高木正綱宛書狀(五一四二)

最前者御出、緩々と御咄忝候、給酔無正躰仕合御坐候、無差儀御坐為御礼如此候、恐惶、

正月八日

(高木正綱)
高九介様

二七一 鳥居成次宛書狀(五一四三)

只今者御茶被下忝存候、尤以參上御礼可申候へとも、被下酔無正躰候条、先如此御坐候、猶期拝顔之時候、恐惶、

正月八日

(鳥居成次)
鳥土佐守様

二七二 上宗了宛書狀(五一四四)

御懇札過当至候、如仰其者不申通、無音所存之外候、拙子儀為越年江戸へ罷下、今程当地ニ罷在、是迄到來拝見申候、頓而隙明可令帰城候之条、自在所可申承候、隨而為御音信、諸白二樽・白炭五彼竈被懸御意候、御懇志不少候、猶期後音之時候、恐惶、

正月九日

上宗了□ 御報

○了の下数字分は欠損部分を示している。

二七三 山崎家盛宛書狀(五一四五)

一兩日者不能面上候、終御宿所へ御見廻も不申候、無音所存之外候、隨而折ふし任到來御樽ニ・両種令進献候、何様以參可得御意候、恐惶、

正月九日

(山崎家盛)
山左馬様 人々御中

二七四 酒井忠世宛書狀(五一四六)

(付書)
「又御茶可被下上意」

明十日之朝、御茶可被下 上意之由忝奉存、其節從早々登城可仕候、恐々謹言、

正月九日

(忠世)
酒井雅楽頭殿

二七五 酒井忠世宛書狀(五一四七)

明後十一日之朝、御茶可被下候旨忝存候、必々可致祇候候、御事多半、別而過当至極存候、恐惶、

正月九日

(酒井忠世)
酒雅楽様

二七六 青山忠俊宛書狀(五一四八)

明朝御茶可被下旨 上意之由、從酒井雅楽頭殿被仰下候、貴様へ被召寄義、被成御延引可被下候、何様以貴面、可得御意候、恐惶謹言、

正月九日

(青山忠俊)
青伯耆様

二七七 井伊直孝宛書狀(五一四九)

自是可得御意と存候処、示預忝候、昨日近石州申談、武藏殿へ申入候処、廿日之朝、可在御出之由ニ候キ、私儀不及仰下、早朝可致祇候候、猶期貴面之時候、恐惶謹言、

正月九日

(井伊直孝)
井掃部様 貴報

二七八 安藤重能宛書狀(五一五〇)

先刻者御尋、殊更御太刀・馬代忝存候、私義致他行、不能面上御殘多存候、早々

(井伊直孝)
井掃部様 人々御中

二四五 高木正綱宛書状(五一一七)

当地御越之由、只今自藤宗右蒙仰付而、令承知候、拙子も二三日已前罷越候、何様以面上可得御意候、恐惶、

十二月廿九日

(高木正綱)
高九介様 人々御中

二四六 神尾守世宛書状(五一一八)

先刻者預貴札候、令他行只今罷帰令拝見付而、御報遅々申候、御持病氣之由無御心元存候、就其明朝御茶被下儀、御延引旨得其意存候、何時にても可致祇候、恐惶、

十二月廿九日

(神尾守世)
神五兵様 御報

二四七 本多信勝宛書状(五一一九)

昨日者御尋忝存候、尤早々以書状成共御札可申入候処、何かと仕失本意存候、何様緩々之以參可申入候、恐惶、

十二月晦日

(信勝)
本多百介様 人々御中

二四八 山岡景長宛書状(五一二〇)

年頭之御札之義、被仰知忝候、奉得其意候、何様以面上得御意候、恐惶、

十二月晦日

(山岡景長)
山五作様 御報

二四九 青山忠俊宛書状(五一二一)

貴札忝候、隨而正月五日・九日・十日之内朝晩之間御茶可被下候由、過分存候、

(細川忠利)
細内記殿申談自是御報可得御意候、恐惶、

十二月晦日

(青山忠俊)
青伯耆様 御報

二五〇 本多忠朝宛書状(五一二二)

先刻者貴札忝候、即可罩御報候處、令他行只今拝見仕候、隨而正月五日之晚於御書院御茶可被下候由、忝存候、可致祇候、何様期貴面之時候、恐惶、

十二月晦日

(本多忠朝)
本出雲守様 貴報

二五一 榊原康勝宛書状(五一二三)

正月六日之晚於書院御茶可被下候由、忝存候、必々可致祇候、乍略義為御札如此御座候、恐惶、

十二月晦日

(榊原康勝)
榊遠江守様 人々御中

二五二 井上正就他宛書状(五一二四)

雖未不得御意候、爰元祇候仕候条、以使札申入候、隨而是式二候へとも小袖令進入候、何様以參可申承候、恐惶、

十二月晦日

(正就)
井上半九様三

(忠虎)
水野監物様三

久さい老二

鷺坂檢校様二

(重俊)
森川内膳様三

二五三 向井忠勝・久永重勝宛書狀(五一二五)

唯今者被寄思召御尋忝候、早々御帰御残多存候、何かと仕自是以使札も不申入所存之外候、何様以參可申承候、恐惶、

十二月晦日

(向井忠勝)
向將監様

(重勝)
久永源兵様 人々御中

二五四 坪内定仍宛書狀(五一二六)

被入御念遠路是迄御飛札過分存候、歳暮之小袖とも方々御届忝候、私義於当所仕合能御札申上候之条、可御心安候、隙明次第其元參致 御目見可罷通候、罷登候ハ、先様共へ人を可進候、委曲其節可申入候、恐惶、

正月二日

(坪内定仍)
坪喜太様

二五五 丹羽長重宛書狀(五一二七)

如仰新春之御慶珍重候、仍来十六日之朝御茶可被下候由忝候、必可致祇候候、恐惶、

正月三日

(丹羽長重)
丹五郎左様 貴報

二五六 本多忠朝宛書狀(五一二八)

貴札拝誦忝候、明後五日之晩、必々可致參上候、何様期貴面之時候、恐惶、

三日

(本多忠朝)
本雲州様

二五七 殿氏長宛書狀(五一二九)

御慰勲之貴札忝候、何様以參上心事可得其意候条、早々覃御報候、恐惶、

三日

(鶴殿氏巻)
鶴兵庫様 御報

二五八 本多忠朝宛書狀(五一三〇)

明後五日之晩、可被召寄候由忝候、必可致參上候、尤以參御札可申達候へとも、御事多半、却而如何候条、乍略儀、捧使札候、恐惶、

三日

(本多忠朝)
本雲州様 人々御中

二五九 山内將監宛書狀(五一三一)

先刻者被成 御書候、即御請可申上候处、罷出延引仕候、然者来九日之朝、於御書院、御茶可被下旨、忝奉存候、可然様御取成所仰候、尚致祇候御札可申上候、恐々謹言、

正月三日

山内將監殿

二六〇 岡田利治宛書狀(五一三二)

来九日之朝御茶可被下候由、令兼約候、然者從越後少将様九日之朝御茶可被下候旨、被仰下候条、致祇候候、右之通候間、不自由候、重而可參候、近頃御残多候、何様懸御目、可申承候、恐々謹言、

三日

(利治)
岡田太郎右様

二六一 曾我尚祐宛書狀(五一三三)

先日已来不申承候、御所劳如何無御心元候、參上見廻可申候处、方々取紛無音所存之外候、何様緩々と以參可申達候、恐惶、

正月三日

(曾我尚祐)
曾又左様

二六二 鷺坂檢校他宛書狀(五―三四)

一、川悅作方へ御返事被遣、十日之晚可被成御出之由、
一、鷺坂檢校・安栖・專益へ御狀被遣只今御出之御札也、

三日

鷺坂檢校

安栖老

專益老

二六三 大岡權右宛書狀(五―三五)

今朝者被召寄忝候、尤早々以參御札可申上候得共、先貴殿迄申入候、可然様御心得頼入候、恐惶謹言、

正月四日

大岡權右さま

二六四 天野作左衛門・中川重清宛書狀(五―三六)

夜前者被寄思召御尋忝存候、尤早々以參可得御意候へとも、何かと仕遅々、所存之外候、併余無音之仕合候条、先以使札申入候、随而是式候へとも、御太刀、馬代并小袖一重令進入候、何様期面上之時候、恐惶、

正月四日

天野作左衛門様

中川將監様 (重清)
太刀・馬代不添、

十一日之朝 (酒井忠忠) 雅樂殿
十二日之晚 (土井利勝) 大炊殿

十七日之朝 (重信) 安藤対馬殿
十八日之朝 (青山忠成) 図書殿

いつも御札狀被遣

七日之朝 嶋田次郎右衛門殿
御札狀被遣、

二六五 兵部宛書狀(五―三七)

貴札忝存候、即御報可申上候処、大相州御茶被下候、參上只今罷歸致拝見候、
(大久保忠勝)

私義節々以參上可得御意之處、方々不得隙無音仕候、少御咳氣之由、努々不存、御見舞も不申上候、無御心元奉存候、随而新敷鯉一折拝受、恐懼之至候、何様期貴面之時候、恐惶謹言、

正月六日

兵部様 御報

二六六 戸田周防宛書狀(五―三八)

一昨日者御尋忝候、将棋二差懸、早々躰別而御残多候、御隙之時分、御立出待入存候、随而任到来、鯉一折進入候、尚期面上候、恐惶謹言、

正月六日

戸周防様 人々御中

二六七 大久保忠隣宛書狀(五―三九)

今朝者、御茶被下忝存候、尤以參御札可申上候へとも、先如此御坐候、尚期貴面之時候、恐惶、

正月六日

(大久保忠勝)
大相州様

二六八 滝川正利宛書狀(五―四〇)

御懇札并御樽二・雁二被懸御意候、過分存候、御眼病いかゝ、無御心元候、節々以參御見舞可申候処、方々不得隙所存之外候、尚期面上時候、恐惶、

正月七日

(滝川正利)
羽老州様 御報

二六九 專益宛書狀(五―四一)

先程者御尋忝候、松平武藏守殿、井伊掃部所へ可在御出候由、同道可仕旨令兼約付而、御心閑不申承御残多存候、此中節々御出過分至極存候、御隙之時分、重而御来儀待入申候、尚期後面之時候、恐惶謹言、

正月七日

專益様

二七〇 高木正綱宛書狀(五一四二)

最前者御出、緩々と御咄忝候、給酔無正躰仕合御坐候、無差儀御坐為御礼如此候、恐惶、
(候)

正月八日

(高木正綱)
高九介様

二七一 鳥居成次宛書狀(五一四三)

只今者御茶被下忝存候、尤以参上御礼可申候へとも、被下酔無正躰候条、先如此御坐候、猶期拝顔之時候、恐惶、

正月八日

(鳥居成次)
鳥土佐守様

二七二 上宗了宛書狀(五一四四)

御懇札過当至候、如仰其者不申通、無音所存之外候、拙子儀為越年江戸へ罷下、今程当地二罷在、是迄到來拝見申候、頓而隙明可令帰城候之条、自在所可申承候、随而為御音信、諸白二樽・白炭五彼竈被懸御意候、御懇志不少候、猶期後音之時候、恐惶、

正月九日

上宗了 御報

○了の下数字分は欠損部分を示している。

二七三 山崎家盛宛書狀(五一四五)

一兩日者不能面上候、終御宿所へ御見廻も不申候、無音所存之外候、随而折ふし任到來御樽二・兩種令進献候、何様以参可得御意候、恐惶、

正月九日

(山崎家盛)
山左馬様 人々御中

二七四 酒井忠世宛書狀(五一四六)

(付箋)
「又御茶可被下上意」

明十日之朝、御茶可被下 上意之由忝奉存、其節從早々登城可仕候、恐々謹言、

正月九日

(忠世)
酒井雅楽頭殿

二七五 酒井忠世宛書狀(五一四七)

明後十一日之朝、御茶可被下候旨忝存候、必々可致祇候候、御事多半、別而過当至極存候、恐惶、

正月九日

(酒井忠世)
酒雅楽様

二七六 青山忠俊宛書狀(五一四八)

明朝御茶可被下旨 上意之由、從酒井雅楽頭殿被仰下候、貴様へ被召寄義、被成御延引可被下候、何様以貴面、可得御意候、恐惶謹言、
(忠世)

正月九日

(青山忠俊)
青伯耆様

二七七 井伊直孝宛書狀(五一四九)

自是可得御意と存候处、示預忝候、昨日近石州申談、武藏殿へ申入候处、廿日之朝、可在御出之由二候キ、私儀不及仰下、早朝可致祇候候、猶期貴面之時候、恐惶謹言、
(直孝)
(池田利雄)

正月九日

(井伊直孝)
井掃部様 貴報

二七八 安藤重能宛書狀(五一五〇)

先刻者御尋、殊更御太刀・馬代忝存候、私義致他行、不能面上御殘多存候、早々

以參可得御意候処、何かと仕、失本意候、何様以貴面可得御意候、恐惶、
正月九日

安藤彦四様
(重忠)

二七九 井上正就宛書状案(五―五二)

只今者御尋忝存候、私社早々以參可得御意候処、何かと仕、失本意候、何様以貴面可得御意候、恐惶、
正月九日

井上半九様
(正忠) 人々御中

二八〇 都筑為政宛書状(五―五二)

先刻者御尋之処、令他行不懸御目御殘多存候、此中も節々御出之由、方々不得隙、毎度不懸御目失本意候、何角以參可得御意候、恐惶謹言、
正月九日

都弥左様
(都筑為政) 人々御中

二八一 高木正綱宛書状(五―五三)

御状拝見忝候、殊更鹿毛之御馬引せ被下、別而可致秘藏候、被入御心段、誠に過分至極存候、何様以面上御礼可申入候条、早々覃御報候、恐々謹言、
正月九日

高九介様
(高木正綱) 御報

二八二 藤宗右衛門宛書状(五―五四)

前々者御出忝候、然者山口但馬殿へ以使者成とも御見舞申度候、いかゞ候はん哉、御指南頼入候、恐惶、
正月十日

藤宗右様

二八三 土井利勝宛書状(五―五五)

先刻者預貴札候、致他行即御報不申上候、明十二日之晩被召寄義忝候、必々参上仕、心事可得御意候、恐惶、
正月十一日

土井大炊様
(利勝) 貴報

二八四 山崎家盛宛書状(五―五六)

昨日者寄思召御尋忝候、今少可得御意候処、早々之仕合御殘多存候、何様以参積鬱可申承候、恐惶謹言、
正月十一日

山左馬様
(山崎家盛) 人々御中

二八五 牧長重宛書状(五―五七)

態以使者申入候、拙子義旧冬当地致祇候候、助右衛門殿別而申談候条、雖未得御意候如此候、随而是式二候へとも小袖二令進入候、何様緩々と参可申承候、恐惶、
正月十一日

牧又十様
(牧長重) まいる

〇二八五号文書と二八六号文書との間に、「一、村左馬殿へ、前々之御茶御礼被遣、」との補記あり。

二八六 嶋兵記宛書状(五―五八)

先刻も預御状候、致他出只今罷帰令拝見候、被入御念忝存候、如仰明朝青伯耆殿へ被召寄候、貴様も御出之由、可得御意と欣悦之至候、目出緩々と可参候、猶期面上之時候、恐惶、
正月十二日

嶋兵記様

二八七 道弥老宛書狀(五一五九)

先日者御尋忝候、令他出不懸御目心外候、重而御隙之節、御出待入候、仍任到來江川樽二・折一進入候、尚期後顔之時候、恐惶、

正月十一日

道弥老 まいる

二八八 山岡景長宛書狀(五一六〇)

尚々、大ニ酔候而、不及判形候、迷惑申候、

明朝御茶被下義忝候、早々以參可申候、尤為御礼可致祇候候へとも、今朝青伯州(青山忠盛)二而御酒被下、沈酔無正躰仕合候之条、如此御坐候、先刻御尋忝候、右之躰二而不能面拜迷惑仕候、尚期拜顔之時候、恐惶、

正月十三日

(山岡景長)
山五郎作様

二八九 藤宗右衛門宛書狀(五一六一)

尚々、対州(山内康慈)へも即以書狀御礼申入候、可然様ニ御心得候て可給候、但明日進可然候ハ、御返し可被成候、

従対馬殿貴様迄御両通之御狀令拜見候、明後十五日之朝被召寄之由忝存候、必々可致祇候候、可然様ニ被仰達可給候、委曲期後音之時候、恐々謹言、

正月十三日

(宗右衛門)
藤宗右様

二九〇 安藤重信宛書狀(五一六二)

明後十五日之朝可被召寄之旨、従藤宗右被仰聞候、被入御念段、別而忝存候、必々可致祇候候、猶従宗右可被得御意候条、不能細候、恐惶謹言、

正月十三日

安藤対馬守様 (重信) 人々御中

二九一 山岡景長宛書狀(五一六三)

今朝者御茶被下忝候、參御礼可申上候へとも、先如此候、猶期面拜候、恐々謹言、

正月十四日

(山岡景長)
山五郎作様

二九二 本多忠朝宛書狀(五一六四)

尚々、明晩者少隙入御座候条、可被成御出候、貴札忝致拜見候、如仰先日已来不得御意候、随而明十五日之晚可被召寄之由、畏悦至候、雖然少隙入御座候条、被分思召可被下候、尚期面拜之時候、恐惶、

正月十四日

(忠朝)
本多出雲様 貴報

二九三 遠山友政宛書狀(五一六五)

先日も預御狀候、參候而可得御意候處、御宿所不存付而無音心外存候、一昨日者於兵部殿早々得御意候、于今御滞留候哉、承度存候、若御やと二御坐候ハ、少御尋可參候、何様以參可申承候、恐惶、

正月十四日

(遠山友政)
遠久兵様

二九四 高木正綱宛書狀(五一六六)

尚々、緩々と不申承、心外存候、吳々御馬乘走、一段勝申候、忝候、態以飛札、得御意候、先度御帰之節、不存參御暇乞をも不申候、所存之外候、久二而懸御目候条、緩々と可申承と存候處、早々之躰御殘多存候、随而御秘藏之御馬、被懸御意候、み申程見事ニ御坐候、別而致秘藏候、被入御心段、過分不淺候、雖無差儀御坐候、如此候、猶期後音之時候、恐惶、

正月十五日

(高九介様)

二九五 安藤重信宛書狀(五―六七)

今朝者被召寄、種々忝仕合共御座候、尤以參御礼可申候へとも、先如此候、猶期貴面之時候、恐々謹言、

正月十五日

(安藤重信)
安藤 対馬様 人々御中

二九六 本多忠朝宛書狀(五―六八)

今晚可被召寄候由、被仰下候處、少隙入茂御坐候て、不致祇候、別而御殘多存候、何様以貴面可得御意候、恐惶、

正月十五日

(本多忠朝)
本出雲様 人々御中

二九七 安藤重長宛書狀(五―六九)

只今者寄思召御來儀、殊見事成御馬被懸御意、重疊忝存候、何様以參御礼可申候、先如此御坐候、恐惶、

正月十六日

(重長)
安藤勝藏様

二九八 安藤重信宛書狀(五―七〇)

只今者御子息様御光貴、殊見事成御馬被懸御意候、御懇意之段、過分至極存候、即以參御礼可申候へとも、先如此御座候、何様致祇候、可得御意候条不細候、恐惶謹言、

正月十六日

(重信)
安対馬守様

二九九 大久保忠隣宛書狀(五―七一)

尚々被入御念段、藤宗右具被仰聞候、忝存候、

(高九介様)
祇今者御秘藏之黒之御馬被懸御意候、誠以被入御心段忝存候、即以參御礼可

申候へとも、先如此御坐候、何様致祇候、心事可得御意候、恐惶、

正月十六日

(大久保忠隣)
大相模守様 人々御中

三〇〇 浅野長重宛書狀(五―七二)

尚々被入御念示被下忝候、以上、乍御報示預忝候、今晚可致祇候候處、虫氣御坐候二付而、御理申候条、被成御延引旨、過当至極存候、近頃慮外成仕合共候、何様以貴面可得御意候、恐惶、

正月十八日

(浅野長重)
浅采女様

三〇一 牧野成里宛書狀(五―七三)

来廿九日之晩御茶可被下由忝候、内記殿於御出者、申談可致祇候候、猶自是可申候、恐惶、

正月十八日

(牧野成里)
牧伊与様 御報

三〇二 鳥居忠政宛書狀(五―七四)

今夜致祇候候處、種々御馳走忝儀共候、大御酒被下醉無正躰仕合共候、先為御礼如此御坐候、何角明日以參可得御意候、恐惶、

正月十八日

(鳥居忠政)
鳥左京様

三〇三 牧長重宛書狀(五―七五)

一昨日者御隙も有間敷處、御尋忝存候、緩々と不申承御殘多存候、早々以參可申候處、何かと無音、所存之外候、猶期面上時候、恐々謹言、

正月十九日

牧又十様(重徳) 参

三〇四 榊原康勝宛書状(五―七六)

貴札忝候、然者今日御在所へ御帰之由御尤存候、此中節々参可得御意候处、何かと仕御残多存候、何様期後音之時候、恐惶、

正月廿一日

(榊原康勝)
榊遠江守様

三〇五 米津田政宛書状(五―七七)

貴札忝存候、早々以参可得御意候处、何かと仕所存之外候、却而御慇懃至過分存候、何様参可申承候、恐惶、

正月廿一日

(米津田政)
米勘兵衛様

三〇六 青山忠俊宛書状(五―七八)

御慇懃之貴札忝存候、播磨守殿御所勞無御心元存候、節々御見廻可申候处、却而御六ヶ敷御坐候ハんと存、非其儀候、何様期面上心事可申承候、恐惶、

正月廿三日

(青山忠俊)
青伯耆様 貴報

三〇七 牧野成里宛書状(五―七九)

如仰前宵者参候处、就御他行、不能面上、御残多候、却而御慇懃之至、令迷惑候、猶期面之時候、恐惶、

正月廿四日

(牧野成里)
牧伊与様

三〇八 土井利勝宛書状(五―八〇)

(本多正徳)
態柘植を上候、然者佐州様貴さま御隙次第私宅へ申請度存候、佐州様へ御内儀伺申候へ者、来月七日八日御用隙之由二御坐候、兩日之内貴さま御隙次第二仕度候、さ候ハ、相模守殿・雅楽殿・对馬殿・図書殿・五郎左衛門殿をも申入度候、乍恐貴様より右之御衆へ被仰入可被下候哉、奉頼存候、尚柘植(正勝)平左衛門可申上候、恐惶、

正月廿四日

(土井利勝)
土大炊様 人々御中

三〇九 森川重俊宛書状(五―八一)

昨晚者被寄思召御尋忝存候、今少可得御意候处、早々御帰宅御残多存候、何様以参上可申達候、恐惶謹言、

正月廿五日

(重俊)
森川内膳様 人々御中

三一〇 土井利勝宛書状(五―八三)

今朝預貴札候处、致他出、不單御報所存之外候、来月七日之朝可被成御坐由、忝存候、何様、以貴面、可得御意候、恐惶、

正月廿五日

(土井利勝)
土大炊様 貴報

三一一 有馬豊氏宛書状(五―八三)

先刻者預芳翰候、致他出、即不及御報候、如仰御遠々敷躰二候、此中以参可得御意候处、何かと仕、所存之外候、ふと以参積躰可申承候、寄思召示被下忝存候、何事も期面上之時候、恐惶、

正月廿五日

(有馬豊氏)
有玄蕃様

三一二 淺野幸長宛書狀（五一八四）

尚々罷下節從上方可得御意と存候処、手前取紛申儀ニ御坐候而、不能其儀、迷惑仕候、以上、

改年之御慶、万々目出度存候、然者、私儀、旧冬江戸へ罷越、于今祇候仕候、御前向其外相易御沙汰も無御坐候、御普請之様子も必定之義未承届候、先可申上を、御手前御所勞、いかゞ御坐候哉、無御心元存候、雖無差儀御坐候、余疎遠御坐候条、令啓上候、猶帰城仕節、可得貴意候、恐惶、

正月廿六日

（淺野忠元）
淺紀州様 人々御中

三二三 水野忠元宛書狀（五一八七）

先刻者、乍御報、貴札忝候、来月八日之朝、可被成御出之由、畏悦至候、無御失念、必々奉待存候、猶期面上之時候、恐惶、

正月廿五日

（水野忠元）
水監物様

三二四 青山成重他宛書狀（五一八八）

来月七日之朝申請度由、土井大炊殿迄得御意之處、可被成御光臨之旨、從大炊殿被仰聞候、忝存候、必々奉待候、尤早々參御礼可申上候へとも、先如此御坐候、恐惶、

正月廿五日

（青山成重）
青図書様

（安藤重信）
安封馬様 人々御中

三二五 本多忠純宛書狀（五一八七）

態以使者得意候、私儀旧冬当地罷越、于今祇候仕候、早々可遂參上之處、御在所二御坐候由承候付而無音、致迷惑候、其已来者、以書狀も不申上所存之外候、

隨而是式御坐候へとも、御太刀・御馬代并御小袖五令進獻候、猶期後音之時候、恐惶、

正月廿七日

（志趣）
本多大限様

三二六 藤宗右衛門宛書狀（五一八八）

前夕者遂閑談忝候、然者拙子小性共ニ御有種々被送遣候、御心被入候段過分至極候、尚期面上之時候、恐惶、

正月廿七日

藤宗右様

三二七 脇坂安信宛書狀（五一八九）

先刻者預芳札忝候、即御報可申候処、令他行非其儀、来ル晦日之朝可被召寄之旨、内々内記殿被仰聞候、内記殿於御出者可致參上之通申入候キ、寄思召御懇意不淺存候、何角以貴面可申入候、恐惶、

正月廿七日

（安信）
脇坂主水様 御報

三二八 淺野長重宛書狀（五一九〇）

明後晦日之晚御茶被下儀忝候、必々可致祇候候、尤以參御礼可申候へとも、先如此御坐候、猶期面談之時候、恐惶謹言、

正月廿八日

（淺野長重）
淺采女様 人々御中

三二九 牧野成里宛書狀（五一二〇〇）

（付箋）
「いけかみへ御出之事」

態令申候、然者明晩御茶被下義忝候、然者明日者いつれもいけかみへ御越之由承候条、貴様も是非御越可然候、御心安儀候条、聊御隔心在間敷御事候、兩人

隙次第自是申入、追々参御茶可被下候、必々明晩之義者御延引無可然存候、為其如此申入、(後見力)恐惶謹言、

正月廿八日

(牧野成忠)
牧伊与様 人々御中

三二〇 本多忠朝宛書狀(五—一〇二)

先刻者預御使者、殊更被入御念蠟燭五百挺被懸御意候、忝存候、致他行た、今罷帰、早々御札不申候、達所存之外候、明日御在所御帰之由不存、参御暇乞も不申御残多候、何角自是可得御意候条、不能細候、恐惶謹言、

正月晦日

(志朝)
本多出雲様 人々御中

三二一 土井利勝宛書狀(五—一〇二)

尚々、被入御念被仰下忝存候、
貴札忝致拜見候、今晚御左右無御坐候者登城仕間敷旨奉得其意候、為其手前御振舞申儀可致延引候通、是又畏存候、何様期貴面之時候、恐惶、

二月一日

(利勝)
土井大炊様

三二二 春元宛書狀(五—一〇三)

先刻者御尋之由令他行不能面上御残多候、然者来三日之晩貴老へ被召寄義、内記殿へ懸御目候へ者御延引候へと被仰談由二候つる、さ候ハ、私義も先被指延可被下候、重而内記殿被仰入候ハ、拙子も可参候、猶期面上時候、恐惶謹言、

二月一日

春元様

三二三 土井利勝宛書狀(五—一〇四)

御事半申被入御念御慰懃之貴札忝存候、明日之義ハ、(本多正徳)佐渡殿より被仰下次第可

致登城旨畏奉存候、節々御心付之段誠以忝仕合御坐候、何様以参可申上候、恐惶謹言、

二月一日

(利勝)
土井大炊様 貴報

三二四 本多忠純宛書狀(五—一〇五)

尚々使二も鷹数多被下由重疊忝存候、以上、
先度者以使者得御意候処、種々御懇意候由忝存候、此中早々可申入を何かと無音失本意候、然者御鷹之鷹廿被懸御意候、即賞翫過当之至候、何様重而可得御意候条不能細候、恐惶謹言、

二月二日

(本多忠純)
本大隅守様

三二五 榊原康勝宛書狀(五—一〇六)

急度得御意候、(池田輝政)姫路宰相殿就御遠行之由申来付而武藏殿今昼御帰国二候、中々は非を可申様も無御坐候、御力落御迷惑致察候、定而近々は可為御祇候候条、以面上可得御意候、恐惶謹言、

二月二日

(榊原康勝)
榊遠江守様 人々御中

三二六 池田利隆他宛書狀(五—一〇七)

急度以使者得御意候、然者宰相様御煩付、頃何とやらん無御心元様二承及候、是非を可申上様も無御坐候、頓而可罷上候条致祇候可申上候、恐惶、

二月朔日

(池田利隆)
松平武藏様
松平左衛門督様
松平宮内様

池出羽守様
(池田由之)

荒尾志广摩守様
(陸奥)

〔表紙〕
慶拾七

草案

三月五日至
六月九日

三二七 溝口五右衛門宛書狀(六一一)

(後野家書)
先度紀伊守殿為御見舞進候使者、罷歸申聞令承、前々因州御煩之由、努々不存、以使者も不申入非本意候、御駿氣之由、珍重候、猶以御本復候哉、承度候、紀伊守殿御所勞、是又次第被成御快氣候哉、具可被仰知候、猶期後音之時候、恐々、

三月五日

溝口五右衛門殿

三二八 片桐且元宛書狀(六一二)

(付箋)
●秀頼様へ
(書三)
中村右近御使

態以使者得御意候、隨而此頃秀頼様、少々被成御咳氣之由、乍恐無御心元奉存候処、早速御快氣之旨、目出度存候、遅候へとも、貴様迄中村右近進上候、以御次而、被達上聞候者、可忝候、恐惶、

三月五日

(片桐且元)
片市正様

三二九 片桐貞隆・大野治長宛書狀(六一三)

態致啓達候、仍此中秀頼様少被成御煩之由、乍恐無御心元奉存候、為御見舞、

市正殿迄以使者得御意候条、如此候、恐惶、
(片桐且元)

三月五日

(片桐貞隆)
片主膳様

(大野治長)
大修理様

三三〇 佐飛州等宛書狀(六一四)

(付箋)
●秀頼様御見廻

頃秀頼様少被成御咳氣之由承候条、為御見舞市正殿迄、中村右近と申者進候間、可然様可預御心得候、尤罷上、可致登城義二御坐候へとも、拙子儀如御存知差合申儀御坐候間、不任所存候、猶此使可申入候、恐惶謹言、

五日

佐飛州

森長門

渡権兵殿 此由大修へ御心得可給候、
(大野治長)

蟠八藏殿 同

津左近殿

稻半四郎殿

(小林家老)
小民部殿

真藏人殿

青助左衛門殿

三三一 池田利隆宛書狀(六一五)

御慰懃之御使札忝拝見仕候、先以三左様御氣色弥御本復之由、誠以目出度奉
(池田利隆)

存候、今度者祇候仕候処、種々忝儀共ニ御坐候つる、却而為御札示被下、余御隔心之至ニ候、猶重而致參上重疊御礼可申上候、恐惶

三月五日

(池田利應)
松武藏様

三三二 井伊直孝宛書狀(六一六)

尚々蓬庵煩之儀、弥快氣ニ御坐候条、御氣遣有間敷候、

蓬庵煩被申付而、遠路為御見舞示被下、忝令拝見候、如仰去月始ニ俄ニ被煩出、其節者以外ニ御坐候而、迷惑仕候処、早速被得驗氣、只今者すぎと本復之躰ニ御坐候、可御心安候、蓬庵へも遠限御尋別而忝由被申候、隨而其地就御普請、私式手前も千石夫申付進候、万端可然様奉頼候、下奉行に牧太郎右衛門と申者進置之候条、諸事被添御詞之由、可為恐懼候、猶自是可得御意候、恐惶、

三月十四日

(井伊直孝)
井掃部様

三三三 本須勘解由宛書狀(六一七)

形部内匠ニ示給兩通之御狀拝見申候、然者三左様御氣色弥御驗氣之由、目出

度存候、其已後猶以御本復ニ御坐候哉、様子可被仰聞候、武州へ可得貴意候

得とも、差儀無御坐候間、可然様可預御取成候、主殿助殿へハ申入候、是又可預御心得候、隨而江戸千石夫之御普請大さうに承及候、其よりハ御普請人いか程被遣候哉、自然重而御人数も參候ハ、委可被仰聞候、拙子式手前も大かた

五百石夫程ニ申候間、御たつね申事候、具承度候、山五郎作殿為御使其地へ御

越之由候、御普請之様子など御物語ニ候ハ、可被仰聞候、猶此者可申候、恐々謹言、

三月十四日

(本須勘解由)
本勘解由さま まいる

三三四 中村正勝・乾長次宛書狀(六一八)

私者兩人ニ示預兩通令拝見候、三左様御氣色弥御快驗之由、千万珍重存候、

其已後猶以御本復ニ御坐候哉、承度存、貴様迄如此候、武藏守殿へ可得貴意候

へとも、差義無之候間、無其儀候、可然様御取成頼入候、猶期後音候、恐惶、

三月十四日

(中村正勝)
中主殿様まいる

(乾長次)
乾平右さま

三三五 山岡景長宛書狀(六一九)

尚々爰元御用之儀御坐候ハ、可蒙仰候、

播州へ御使ニ御越之由にて、預御狀忝候、誠今度者三左衛門殿俄被成御煩候処、

早速御快氣にて目出度存候、然者江戸千石夫之御普請大さうに御坐候由、度々被仰聞、忝存候、いつれも承合、重而御普請人差下可申と存候、御逗留中追而

可申入候、頃蓬庵方へ御言伝之通、即申聞候、忝由申候、煩も此頃すぎと

本復仕候間、可御心安候、即以書狀被申候、猶自是可得御意候、恐惶、

三月十四日

(山岡景長)
山五郎作様

三三六 細川忠利宛書狀(六一〇)

蓬庵少煩申ニ付、遠嶋御使札忝拝見仕候、如仰、去月初頃俄煩付以外ニ

御坐候而、致迷惑候処、早々得驗氣申候間、可被思召御心安候、奇特成御尋別而忝存由、蓬庵も申候、岩兵衛殿可懸御目由申候へとも、達而御斟酌ニ付而、無其儀非本意存候、尚期後音候間、早々御報申上候、恐惶、

三月十四日

細内記様

三三七 安井喜助宛書狀(六一一)

池田羽州女共相果申候二付而、自紀伊守殿為御使御越忝存候、就其、自但馬(淺野忠勝)殿預御狀候、尤御報可申候へとも、か様之義二者用捨仕由二候間、貴殿迄如此候、可然様御心得頼入候、恐々謹言、
三月十七日

安井喜助殿

三三八 本須勘解由宛書狀(六一一)

被入御念示預本望之至存候、

一、兵庫殿其へ御越之由、御知せ忝候、一昨日承候条、即以飛札申入候キ、其元於御逗留者、追々可得御意候、
(龜殿兵衛)

一、鹽庵就御越幸之儀候間、御渡海も候様にと申入、可然之由、再三御心付畏入にも及不申候、御心付之通、懇二可申聞候、先可申遣を三左様御氣色弥存候、蓬庵も別而過分之由申候、然共今程すぎと致本復候間、典藥衆申入にも及不申候、御心付之通、懇二可申聞候、先可申遣を三左様御氣色弥御快驗之由、珍重存候、猶重而可申承候、恐惶、
三月廿二日

本 勘解由様

三三九 長善左・都筑為政宛書狀(六一一)

其後者不申通候、珍敷御沙汰も無御坐候哉、隨而千石夫之御普請大さうに御坐候由、承候条、重而御普請人少申付指下申候、弥其通二御坐候哉、何篇御指南頼入存候、相替様子も候ハ、可被仰聞候、委曲此者可得御意候、
三月晦日

長善左様

都弥左様

三四〇 片桐且元宛書狀(六一一四)

態令啓上候、此頃少々御煩之由、早々為御見舞、可得御意候処、遠路故不致存知無音、非本意候、いかゞ無御心元存事候、何様重而可申達候、恐惶、
卯月十四日

片桐且元様
片市様

三四一 宗介宛書狀(六一一五)

態令啓候、其已來者、以書狀も不申通候、隨而当春腫物御煩之由、五三日已前承候、努々不存無音之至失本意候、此頃弥可為御平愈と存候、雖遅々候、為御見舞如此候、其元珍布御沙汰も候ハ、可被仰聞候、猶重而可申入候、恐々、
卯月十四日

宗介様

三四二 土井利勝宛書狀(六一一六)

「材木御進上」
(付書)

尚々貴様へも大桁式百丁進入候、書中之驗迄候、

態得御意候、隨而 將軍様へ大直桁千丁進上仕度候、可然候ハ、御披露奉仰候、何様期後音之時候、恐惶、
卯月十六日

土井利勝様
土大炊様

三四三 都築為政宛書狀(六一一七)

尚々は式二候へとも、道服二令進献候、書中之驗迄候、其後者不申通候、其元御普請昼夜御苦勞致察候、諸事彦右衛門可得御意候条、御指図奉頼候、此辺御用之儀も御坐候者、可被仰聞候、猶重而可申承候、恐惶、
卯月十六日

(都弥左様)

三四四 本多正信・鵜殿氏長宛書状(六一一八)

態得御意候、随而是式ニ御座候得共、大直桁式百丁致進献之候、其地相替御沙汰も御坐候ハ、可被仰下候、何様期後音之時候、恐惶、

卯月十六日

(本多正信)
本佐州様

(鵜殿氏志)
鵜兵庫様 是ハ後々柘植平左衛門ニ言伝遣、

三四五 生右近宛書状(六一一九)

尚々二郎右衛門を御見舞ニ進度候へとも、主煩有之ニ付而無其儀候、今程御隙にても候ハん間、御遊山ながら爰元へ御越も候へかしと存候、以上、

遠路預御状忝候、如仰其已後者、久々不申通無音至極候、蓬庵(蓬庵實家改)煩之儀当春者心外にて致迷惑候処、此頃すきと本復仕候間可御心安候、彼是取紛以使者も

不申候段御心中令迷惑候、然者御手前越前へ御帰参之儀、成瀬隼人殿御肝煎之由珍重存候、いか様とも被応御異見尤存候、何様ニもゆるく被思召可然候、

尾州ニ御休息之由尤二候、暖氣ニ罷成候間、爰元へも御渡海候へかし、何角得御意度事迄候、委曲二郎右衛門可被申候、恐惶、

卯月廿五日

生右近様 御報

三四六 生二郎右衛門宛書状(六一二〇)

右近殿より御状拝見申候、御身上之義成隼人殿御肝煎之由、近頃成御事何様ニも被応御異見可然存候、今程 右近殿御隙にて候ハん間、爰元へもそと御越候へかし、申承度候、尾州ニ憂々と御逗留候ハんより者此辺可然存候、其段被意得可被申達候、何様ニもゆるくと思召候ハんはいかゝ二候、摂州入御用ニ候とも駿府などへ御下向之儀者達而御無用と存候、内々其方見舞ニ進度候へとも

被相煩面ニさへ不能候間、不及是非候、此由よく可被申候、大炊殿へも同前ニ申度候、次銀子之儀承候、露はかり手前ニ有合候間、其方より可被遣候、御用之儀可承由可被相意得候、謹言、

卯月廿五日

生二郎右衛門とのへ

三四七 池田利隆・池田由之宛書状(六一二一)

為端午之御祝儀、御帷子三之内単物一致進献候、誠幾久可奉得御意願迄御坐候、恐惶謹言、

(池田利隆)
松平武藏様

御使源右衛門

(池田由之)
池羽州様

三四八 鵜殿氏長他宛書状(六一二二)

未其元御滞留候哉、永々御苦勞共御坐候、三左衛門殿御煩弥御本復之由大慶存候、仍時分可被成御帰候哉、承度存候、東表珍敷御沙汰共候ハ、可被仰聞候、随而任到来鮎之鮎桶三致進入候、猶期来音之時候、恐惶、

五月一日

(鵜殿氏志)
鵜兵庫様

(牧野成忠)
牧伊与様 へハすし桶二

三四九 片桐且元宛書状(六一二三)

尚々貴様へも鮎桶二進入候、御前始珍布御沙汰候ハ、可被仰聞候、以上、
(豊臣)
態致啓上候、秀頼様御煩早々被成御本復誠以目出度奉存候、貴様迄以使札得御意候、弥御機嫌宜御坐候哉、乍恐承度存候、随而鮎之鮎桶五致進上候、可然様御披露頼存候、猶期後音之時候、恐惶、

五月四日

御使十左衛門

(片桐且元)
片市様

三五〇 片桐貞隆他宛書狀(六一二四)
其已來者不得御意無音、非本意候、仍

(重忠)
秀頼様御煩早々被成御本復、弥御機嫌宜御坐候由目出度奉存候、片市殿迄
以書狀得御意候、其元珍敷御沙汰共御坐候ハ、可被仰聞候、何様期後音之時候
条不能細候、恐惶謹言、

五月四日

(片桐貞隆)
片主膳様

同人

(大野治孝)
大修理様

蟠八蔵様 まいる

三五一 本多正純他宛書狀(六一二五)

(付箋)
「きりしたん」

去月十四日之御狀今日三日ニ到来、致拜見候、仍きりしたんニ罷成候衆就御改
易領内ニ不致居住様ニ可申付由

上意之旨謹而奉存其意候、私領分堅可申付候、恐々謹言、

五月三日

甚左衛門ニ被仰遣、飛脚遣申候、

(正純)
本多上野介殿

(正成)
成瀬隼人殿

(重忠)
安藤帶刀殿

三五二 主水・修理・右近・備後・壱岐宛書狀(六一二六)

(付箋)
「きりしたん」

今度きりしたんニ罷成者就御改易、駿府從御年寄衆如此候、御触狀ニ候条、領
分堅被相改尤候、自然名字替形罷越義も可有之候条、惣別無由緒牢人在々ニ不
罷在様ニ可被申付候、恐惶、

五月三日

主水 修理 右近 備後 壱岐

三五三 山田織部・樋口内蔵・林内膳・長江刑部・長谷川伊豆・山崎内匠宛書
狀(六一二七)

(付箋)
「きりしたん」

今度はてれんニ罷成衆就御改、駿府從御年寄衆如此申來候、右之書立之衆中、
自然名字・名形を替、出家・山伏・医師・商人様々ニ罷成在之義も可有之候、
所詮無由緒牢人面々知行所相改尤候条、不寄大分小身之地、右之通暢々給人ニ
連判をさせ、上可被申候、一大事ニ候条、可被得其意候、猶以自今已後面々知
行所之牢人居住無之様ニ、屹与可被申付候、恐惶、

五月四日

山田織部殿 樋口内蔵殿

林 内膳殿 長江刑部殿

長谷川伊豆殿 山崎内匠殿

三五四 宗心宛書狀(六一二八)

尚々国物候条、鮎のすしニ桶令進献之候、

先度者乍御報令拜見候、御腫物平愈之由、珍重存候処、此節又少再発之由、無
御心元候、随分御養生專要候、為御見舞如此候、恐惶、

五月四日

十左衛門ニ被遣、

宗心老

三五五 鵜殿氏長宛書狀(六一二九)

(池田輝政)

態以使者得御意候、三左衛門殿御煩弥被成御本復ニ付而、近々御帰之由、尤珍
重存候、東表珍布御沙汰共候ハ、從彼地可被仰下候、差儀無之候へとも、為
御暇乞如此御座候、随而是式ニ御坐候へとも、道服ニ致進献候、猶期後音之時
候、恐惶、

五月七日

宮村半四郎二被遣、

(續殿氏名)
鵜兵庫様

三五六 池田輝政宛書狀(六一三〇)

為端午之御祝儀、御帷子三之内単物一被懸御意候、誠幾久可得貴意と忝奉存候、
猶御使者へ申達候、恐惶、

五月七日

(池田輝政)
三二 左様

三五七 淺野氏次・上田宗了・溝因幡宛書狀(六一三一)

(淺野氏名)
態以使者申入候、紀伊守殿御煩弥御本復之由、珍重存候、各御満足致察候、紀
伊守殿へも以書狀可得御意候へとも、同前之儀候間、可然様頼入候、右近殿・
悅左殿へも可預御心得候、猶此者可申達候、恐々謹言、

五月七日

御使四郎左衛門

(氏次)
淺野左衛門佐様

上田宗了

溝因幡

三五八 松平重勝宛書狀(六一三二)

態以飛札得御意候、然者 少将様江戸之御屋敷火事参由、驚奉存候、遠限之義
二候へ者遅承、早々不申上事非本意存候、為御見舞貴様迄如此候、御次而之節
御取成所仰候、恐惶、

五月十八

(重勝)
松平大隅守様

三五九 池田由之宛書狀(六一三三)

橋田丹波方へ被下一昨十九日之御狀、今朝令拝見候、然者其御国百性遂電二付
而、若此辺へ罷越候ハ、搦捕可進之由、得其意存候、渡海之義二候条、此表

へ者罷越間敷候へとも、併無油断相改可申候、委曲丹波可得御意候、恐惶、

五月廿一日

(池田由之)
池田羽守様 人々御中

三六〇 池田利隆宛書狀(六一三四)

(池田輝政)
貴札忝令拝見候、仍三 左様御氣色弥御本復付而、被成御帰国之由、尤目出度
奉存候、誠御慰懃之御音間、御隔心之様迷惑仕候、何様自是可得御意候条、致
省略候、恐惶、

五月廿一日

(池田利隆)
松武藏守様 貴報

三六一 中主宛書狀(六一三五)

(池田輝政)
態以使札申入候、三 左様御氣色弥御本復付而、武藏殿御帰国之由、自備
前被仰下候、誠以目出度奉存候、何様為御悦重而可得御意候条、不能細候、恐
惶、

五月廿二日

御使儀左衛門

(中村正勝)
中主殿

三六二 本須勘解由宛書狀(六一三六)

(池田輝政)
態此者上候、三 左様御氣色弥御本復付而、武藏守殿も御帰国之由、自備前
被仰下候、誠以大慶不可過之候、就其為御悦自身御見舞など之衆も御入候哉、
又ハ使者にて御祝義被申上様子二候哉、委曲承度存、貴殿迄如此候、依御報可
得其意候、猶此者口上二申含候、恐惶、

五月廿二日

同人

(本須勘解由)
本勘解由様

三六三 柘植正俊宛書狀(六一三七)

(付箋)
「家来人質」

兵庫殿へ用所にて候条、如此候、仍拙子家来之者人質之儀、其地致進上可然

之由、兵庫殿今度上方二而御心付之儀二候、去年之春以其方佐渡殿・大炊

殿・兵庫殿迄得御意候、其節大炊殿・兵庫殿よりハ佐渡殿へ可被成御談合由之

御返事二候キ、自佐渡者家来之質物上儀者、よき時分其方迄可被成御左右候条、

それ次第差下候へ、彦右衛門義者当暮二も下可然由被仰付而、家中人質之儀者

于今令延引候、其已後主水・甚左衛門罷下候時も再往得御意候、其節兵庫殿へ

五月廿三日

(正俊)
柘植平左衛門とのへ

猶以去年之春本佐へ申入候、其返事写遣候、自此方も委曲者其方以口上得

御意付而、佐州よりの御報も如此候、右之様子者兵庫殿へハ不申入候、たゞ

今度御心付忝候、御報次第家中人質差下可申候、委曲其方口上二可得

三六四 鶴殿氏長宛書狀(六一三八)

(付箋)
「人質」

態致啓上候、道中無事二御下着候哉、然者於京都津田平左衛門殿へ御内意御心

質之儀、致進上可然之由、得其意存候、頓而差下可申候、具之段者柘植口上二

五月廿三日

(鶴殿氏長)
鶴殿兵様 人々御中

三六五 津田平左衛門宛書狀(六一三九)

(付箋)
「人質」

去ル十七日之御状、昨日到来、令拝見候、先以其元相替義無御座、江戸・駿府

より珍敷御沙汰無之由、得其意候、然者鶴殿兵庫殿上洛二付而、節々御参会之由、

就其対私御心付共候由、具甚左衛門せかれ罷下申聞候、深甚被懸御目故と畏存

候、御礼旁以書狀申入候、貴様よりも忝存通、被仰達可被下候、就中拙子家来

之者人質之義、進置可然之由、御内証之由、得其意存候、如蒙仰、諸国家中之

人質被召置由、粗承及候間、去年之春細山主水・稲田修理兩人せかれ可致進上

と存、用意申付一往佐渡殿へ得御意候処、家来之質物之義者、重而可有御左

右候之条、それ迄延引可仕由、就被仰聞、于今無其儀候、去年之夏私妹祝言仕

五月廿三

(津田平左衛門)
津田平左さま

三六六 岡田基左衛門宛書狀(六一四〇)

(付箋)
「人質」

左馬助前夕下着、津平左より鶴兵庫殿御内証被仰聞通具申聞候、随而拙子

(津田平左衛門)

(輪廊氏忠)

(本多忠政)

家来之者質物之儀、其方如存知、去年之春本佐州迄可進置由得御意候処、彦右衛門義者用意成次第二差下候へ、家来質物之義者よき時分柘植方迄御内証可有之間、それ迄可致延引旨就被仰其通二候、其已後主水・其方差下候、又候哉右

之一義佐州・大炊殿・兵庫殿へ申入候処、最前同前之様子二付而、猶以于今

(上井利勝)

令延引候、其節兵庫殿へハ以柘植申入たる由主水・其方申候キ、其段兵庫殿御

失念二候哉、併進シ可然儀と被仰事候条、即主水・修理せかれ可差下義二候へ

(輪廊)

とも、自佐渡殿之御内証無躰二罷成、其段も難計候之間、今度之御礼旁二兵庫殿へ以飛札申入候、其御報次第可差下覚悟候、今一往佐渡殿へも得御意儀二候

へとも、兵庫殿御心付二候条、佐州御内証者とも候へとハ申かたき事二候之

(マヤ)

間、其段も柘植二鶴兵へ談合申候へと申遣事候、さ様二候へハ上野殿などへ

(本多正徳)

平左より被仰進義者いか候はん哉、佐州へ不得御意、こなたかなたと候てハ最前の御内意違背之様二可罷成候哉、とかく兵庫殿よりの御報次第進義者安事候、平左より兵庫殿へハ御内意之通阿波守二申届候へ者、御懇情之至別而忝存

候、家来人質之義、右之仕合にて今迄延引仕候、此御報次第差下可申候由、申由

(折)

さつと被仰可然も候はん哉、此段よく平左と談合候て平左衛門殿よりの状をとり、早々此者江戸へ可差下候、不可在油断候、謹言、

五月廿三日

源太左衛門・鉄炮之者

二人被遣、

(岡田) 岡 甚左衛門殿

○三六六(六一四〇)と三六七(六一四一)の間に、「甚左早々下候へと被仰遣、宗味下代二伝状持せ被越候へと被仰遣、」という覚書がある。

三六七 生右近宛書状(六一四一)

遠路御飛札忝拜見申候、然者御身上之義、本濃州・成隼人殿以御肝煎事相済御帰参之由珍重存候、何様とも被任御兩人御神妙之御分別尤存候、委曲自是越府へ可申候条、早々御報如此御座候、恐惶、

五月廿六日

生右近様

三六八 生大炊宛書状(六一四二)

先度進候鶴無事二参着申候由令満足候、御礼と候而御状誠御隔心之様二候、随

而右近殿御身上相済、越州へ御帰参之由、於拙子致満足候、本濃州・成隼人殿

(本多忠政)

(成瀬正成)

御肝煎之由二候条、旁可然存候、何様二も御兩人次第御分別尤候由、御異見尤候、いか様自是可申入候、恐惶、

五月廿三日

生大炊様 参

三六九 岡田甚左衛門宛書状(六一四三)

(付箋) 「禁中へ金御進上」

左馬助罷下刻被申越候、毎年 禁中へ金老枚頓可申遣候処、失念せしめ候、宗

味方にて金にて成とも銀子にて成とも被致借用、天奏衆上り候ハ、勸修寺殿へ

(教書)

持参候て被上尤候、板倉殿にて上り候ハ、伊州へ持参可有候、被相渡候ハ、請

(勘書)

取とり可置候、早々可申付候処、令失念延引迷惑之通可被申候、遅々候とはいつかたより被仰越候哉、可承候、此状参着次第早々被相調持参候て被上尤候、飛脚急可被下候、不可在油断候、謹言、又申候、鞠急可給候、

五月廿八日

左馬助者二被遣

(岡田) 岡 甚左衛門殿

三七〇 池田輝政宛書狀（六一四四）

態致啓上候、然者今度御煩早速被成御本復、誠以目出度奉存候、尤致祇候御悅可申上候へとも、先如此御坐候、雖是式御坐候、御太刀一飾・御馬代銀子三十枚并御帷子十之内單物三・御着一折進上仕候、奉表御悅儀迄候、恐惶謹言、

六月朔日

（池田輝政）
三 左様

三七一 乾長次宛書狀（六一四五）

態以使者得御意候、然者三左様御煩早速被成御本復、誠以珍重此事御坐候、為御祝儀御前様へ銀子二十枚・紅花百斤・御着一折、宮内様へ御帷子十之内單物三・御着一折令進上候、可然様御披露頼申候、委曲此者申含候条、早々如此候、恐惶、

六月朔日

（其代）
乾平右さま

三七二 池田輝直（利隆）宛書狀（六一四六）

態以使札得御意候、仍三左様御煩被成御本復御帰城之由、千万目出度奉存候、尤遂参上御祝儀可申上候へとも、先如此御坐候、是式御坐候へとも御帷子十之内單物三・御着一折令進上候、誠表御祝儀迄御坐候、恐惶、

六月朔日

（池田利隆）
松武藏様

三七三 本須勘解由宛書狀（六一四七）

先度者以使札申入候处、乍御報具示預忝候、三左様御煩弥御本復之由、誠二以珍重此事候、為御祝儀以使者得御意候、少々進物仕候間、可然様御披露頼入候、こせんさま・宮内殿へも進物上申候、乾平右へ申入候之条、被仰談可然様

頼入候、委曲此者申含候、其元珍敷御沙汰候ハ、可被仰聞候、猶期後音候、恐惶、

六月朔日

（本須）
本 勘解由さま

三七四 池田由之・荒尾某・日置忠俊宛書狀（六一四八）

態令啓上候、三左様御煩早々被成御本復、武藏守殿御帰城之由目出度奉存候、為御祝儀以使者奉得御意候、可然様御心得頼入候、猶期後音之時候、恐惶、

六月朔日

（池田由之）
池羽州さま

（荒尾成利）
荒但馬様

（日置）
日置豊前様

三七五 浅野幸長宛書狀書狀（六一四九）

猶々御所勞早速御本復、大慶此事存候、御慇懃之預御使札忝拜見仕候、随而御煩弥御快氣之由誠目出度存候、爰元程近御坐候条、参可致御見舞处、無其儀背本意存候、何様自是可得御意候条、省略仕候、恐惶、

六月九日

（浅野幸長）
浅紀伊守様

三七六 浅野氏次宛書狀（六一五〇）

從紀伊守殿預御使札付而、御伝状忝拜見申候、如仰紀州御煩早速御本復にて近頃珍重存候、被入御念遮而預御使者忝通御意得頼入候、委曲期後音候、恐々、

六月九日

浅左衛門佐様 御報

(表紙)
慶長十八丑

案紙

十月八日至
極月九日

三七七 池田利隆・池田忠継宛書状(七一)

態以使者得御意候、然者姫路へ被成御移之由、誠以千秋万歳目出度奉存候、何様緩々と致祇候、御祝詞重疊可申上候、遅々条先如此御坐候、恐惶謹言、

十月八日

(池田利隆)
武藏守様

別紙

岡山へ 左衛門督様 まいる 人々御中 御使 作左衛門

三七八 池田由之・本須勘解由左衛門宛書状(七二)

(池田利隆)
武藏守様姫路へ被成御移之由目出度存、早々以參上御祝儀可申上候処、先不取敢以使者申上候、可然様御取成所仰候、何様以參重疊御祝儀可申上候、次二三日已前由良へ御見舞申候、御有付之躰候条、弥重存事候、猶此者申含候、恐惶謹言、

十月八日

(池田由之)
池羽州様

別紙 同人

(本須)
本 勘解由様

三七九 荒尾成利・荒尾隆重・津田将監宛書状(七三)

左衛門督様岡山へ被成御移之由、誠以目出度奉存候、何様緩々と致祇候重疊御

祝儀可申上候、遅々之条先如此御坐候、可然様二御取成所仰候、猶此者可得御意候、恐々謹言、

十月八日

(成利)
荒尾但馬様

御鷹一もと被遣

(荒尾隆重)
同志摩守様

同 別紙 同人

津田将監様 参

三八〇 乾長次宛書状(七四)

尚々先日者若輩之者御座敷へ被召出御盃被下、其上御道具拝領仕候、其節拙子奥二罷在不存、御礼不申上候キ、扨々忝仕合二候、併冥加無之、却而迷惑存候、

一昨日之為御礼、自是社可申上候処、早々示被下忝存候、併略儀之様二而致迷惑候、先日者種々御馳走とも過分此事候、殊更御脇指など致拝受深重忝候、猶可然様御取成奉頼候、貴殿御礼共不得申候、御城二而御酒二散々致沈酔、船中無正躰罷帰候、次権右衛門殿、四郎右衛門殿を始、以別紙可申達候へとも、貴所よき様被仰達可給候、返々早々清左御越過分存候、偏二御取成頼入候、恐々謹言、

十月六日

(表紙)
乾平右さま 御報

三八一 若右京・中隼人宛書状(七五)

其已後者、以書状も不申承無音申候、然者武州様・左衛門督様姫路・岡山へ被成御移之由、尤目出度奉存候、何様緩々と遂祇候、御祝儀可申上候条、期其節候、随而貴殿御事、如前姫路二御住宅候哉、又備前へ御越二候哉、無御心元候、雖無差儀候為御見舞令啓候、若備前などへ御引越候ハ、拙子式相応之御用可蒙仰候、不可存疎意候、御息大学殿へ以別紙可申候へとも、同前候之条、可預御心得候、恐惶、

十月八日

御使 儀左衛門

若右京さま
中隼人さま

三八二 池田忠雄宛書狀(七一一六)

態啓上仕候、仍先日者為御見舞致祇候候処、種々忝候、御馳走共御礼難申謝存候、殊御秘藏之御脇指など拝受仕、重疊過当之至存候、委曲乾平右衛門殿迄申達候条、不被得御意候、恐惶、

十月八日 御使 作左衛門

(池田忠雄)
宮内少輔様

三八三 乾長次宛書狀(七一一七)

尚々先日者貴殿御馳走共不得申候、御息新介殿へも此由申度候、以上

態以使者申上候、先日者為御見舞遂祇候候処、誠御馳走共不得申候、殊御道具など拝受申候、重疊忝存候、万端可然様ニ御取成頼申候、就中召連候若輩之者御座敷へ被召出、刺御脇指拝領仕段、冥加恐敷忝存候、是又御礼被仰上可給候、

權右殿・四郎右殿以書狀申候へとも、猶々可預御心得候、其外いつれへも未申通之条、無其儀候、一々御言伝頼入候、委曲此者申含候、恐々、

十月八日

(天野四郎右衛門)
乾平右さま 参 同人

三八四 天野四郎右衛門・土肥權右衛門宛書狀(七一一八)

態令申候、仍先度者参上候処、色々御馳走共過分至極存候、大御酒被下酔之故罷歸節者、然々御礼をさへ不申候つる哉、非本意存候、雖無差儀候、為御礼申上候、委曲平右衛門殿へ申入候へとも、猶以可預御取成候、其元御隣所ニ罷在候条、此辺御用之義も候ハ、無御隔心可蒙仰候、返々先日者いつれも様々御馳走共過分存候、具段口上ニ申含候、恐々、

十月八日

天野四郎右衛門殿 別紙 同人
土肥權右衛門殿へ 子息へ 御心得頼申候

三八五 石原市左衛門宛書狀(七一一九)

態以使者申上候、然者 御前様・左衛門督様岡山へ被成御移候由、目出度奉存候、何様緩々と以参上御祝儀可申上候、先如此御坐候、以御次而御局さま迄、可然様御取成所仰候、委曲此者申含候、恐々、

十月八日

石原市左衛門さま

同人

三八六 池田由之宛書狀書狀(七一二〇)

美作守殿御所勞此頃いかゞ無御心元存事候、随分被加御保養義、干要存候、御病中御六ヶ敷候ハんと作州へ者不申入候、可預御心得候、猶此者可得御意候、恐々謹言、

十月八日

作左衛門二渡

(池田由之)
池田羽守様 人々御中

三八七 山城宮内宛書狀(七一二一)

(龜須賀家)
猶以蓬庵へ御言伝之通申届候へ者、過分之由二候、

御狀忝令拜見候、如仰其已後者、互無音之段、心外存事候、随而 御所様去十七日ニ為御鷹野、江戸へ被移御座、被仰知忝存候、歳末二者定而いつれも可被致祇公候之条、其節以面上、積鬱可申承候、就中米津清右衛門殿へ、為御見舞御飛札二候、則案内之者申付御住所へ遣申候、定而可為御報候、若四国辺御用之儀候ハ、可承候、万端期向顔、早々覃御報候、恐惶、

十月十日

山城宮内様 御報

三八八 池田由之宛書狀(七一二二)

尚々先度者東より御引せ候とて、黒毛之御馬被懸御意候、弥御馬見事二而、致秘藏事候、以上

態令啓候、先日之御飛札ニ丹波方へ示被下候状、折節丹波致他行、不申聞、昨日令披見候、貴様明石ニ可在御居城之由、所柄先以珍重存候、弥御治定候哉、承度存候、就中拙子式為御見舞致祇候義、先日之御報ニも如申達、貴殿御指南次第と存事候、相替儀も候ハ、可蒙仰候、雖無差儀候、御住所相定申由、目出度存如此候、恐々謹言、

十月十一日

御飛脚

(池田由之)
池羽州様

三八九 生右近宛書状(七一三)

内々御屋敷存知從老岐守所人を進由二候之条、致啓達候、其元御無事二候哉、無御心元候、弥貴様御取付候哉、承度候、此方無別条、蓬庵も此頃息災ニ御坐候条、可御心安候、仍いそや益田左兵衛方迄葉茶壺之儀蒙仰候、拙子一二ツ所持候者、いづれも余大二候故、此壺もと壺にて茶已下不廻候へとも、頃可然存候条、先進之候、例年者茶一段よく御坐候キ、然とも当年者いかゝと無御心元候、若茶悪候歟、又ハ壺不入御氣候ハ、來春茶時分ニ上せ可給候、別のを調法候て可進候、委曲左兵衛方より可令申候間、早々如此候、四国辺御用之儀可蒙仰候、恐々、

十月十一日

生右近様 人々御中

三九〇 小忠右宛書状(七一四)

尚々爰元珍敷蠟燭百挺送給候、別而欣然之至候、此辺御用所候ハ、可被仰聞候、猶重而可申入候、以上、
寄思召遠限御飛札過分至極候、御手前御煩能御上之由珍重存候、不存自是不申入背本意候、永々御所勞節々以書中も不申候、無音之至候、東表相替御沙汰も無御坐、
(御川家康)
上様御機嫌宜御鷹野ニ被成御坐之由被仰聞、奉得其意候、上方衆いづれも越年ニ御下承合、可致祇候覚悟候、猶期後音令省略候、恐々謹言、

十月廿日

小忠右様 参

三九一 井伊直孝宛書状(七一五)

尚々当地之櫓柵二折・数千進覽申候、以上、
其已後者以飛札も御見舞不申候、無音心外存候、然者最前蒙仰候鉄炮之臺木先試ニ一本進候処、可然之由珍重存候、其後御注文之通数多申付出來候条、撰候而一通岡田甚左衛門ニ上せ進候間、是又能候哉、無御心元候、就中其元御無事二而御在番之由目出度候、万端御氣毒共察存候、此方も相替義無御坐、蓬庵(藩領家改)も息災ニ御坐候条、可御心安候、此辺御用之義可被仰越候、委曲期後音之時候、恐惶、

十月廿三日

(井伊直孝)
井掃部様 人々御中

加右衛門二渡

三九二 彈正大弼宛書状(七一六)

態致啓上候、先度者從(寄仁親王)八条宮様遠路成被下御使、誠以無冥加御坐仕合候、為御札貴殿迄如此御座候、御次而之節御取成所仰候、將亦櫓柵一折進上仕候、宜預御披露候、猶期後音之時候、恐々謹言、

十月廿三日

彈正大弼殿 人々御中

同人

三九三 野尻左衛門尉宛書状(七一七)

先度者為御使遠堀御渡海、誠御苦勞共候、仍而御馳走も不申候、心外存候、忝旨為御札大弼殿迄得御意候、猶以御取成奉仰候、猶期後音之時候、恐々謹言、

十月廿三日

野尻左衛門尉殿 人々御中

同人

三九四 渡瀬安左宛書状(七一八)

遠路御音札令拜見候、如仰其後者相隔書音無音、非本意候、貴殿御事備前へ御引越之由、乍御大儀珍重候、將又鶴之儀蒙仰候、当年者鷹數出來不申候、折節手前ニも無之、方々相尋、即一居御使へ渡申候、右之仕合ニ付而、御使二三日待せ申候、御自愛可本望候、次素麵一箱送給候、欣然之至候、猶期後音之時候、
(為脱力)

恐惶、

十月廿一日

渡瀬安左様 御報

三九五 尾崎報左衛門宛書狀(七一一九)

遠路示預、殊手燭三送給候、欣然之至候、尚期後音之時候、恐々、

十月廿三日

尾崎報左衛門殿

三九六 乾長次宛書狀(七一二〇)

其後者以使札も不申候、無音所存之外候、其元相替御沙汰も無御坐候哉、承度候、雖無指儀御坐候、為御見舞貴殿迄如此候、隨而密柑二箱致進上候、御披露所仰候、猶期後音之時候、恐惶、

十月廿五日

乾平右様 参 人々御中

三九七 久貝正俊宛書狀(七一二一)

急度以飛札令啓上候、然者貴様今程 御前不宜由、從柘植平左衛門所申登せ候、子細者不承届候へとも、先無御心元存如此候、尤拙子儀にて笑止千万存事候、委曲御報二可被示下候、恐惶、

十月晦日

久貝忠三様 人々御中

三九八 鵜殿氏長宛書狀(七一二二)

急度致啓達候、仍自柘植平左衛門所、去ル十三日之付にて飛札到来候、久貝

忠三郎殿・弓氣多源七殿

御前向不宜之由申登せ候、就中貴様之御手前も何とやらん無御心元様二承候、

事實二御座候哉、笑止千万成御事不及申候、先為御見舞如此二候、委曲御報二被仰下候ハ、可忝候、恐惶、

十月晦日

鵜殿氏長様 鵜兵庫様

三九九 土井利勝宛書狀(七一二三)

「御普請被仰付」

去ル十三日之貴札、從柘植平左衛門所相届、拜見忝存候、大御所様其地被成御坐 御機嫌宜御坐候由、乍恐珍重奉存候、就其来年三月より御普請被仰付之由被仰聞、奉得其意候、聊不可存油断候、弥相替御沙汰も御座候ハ、可被仰下候、隨而御手前少御煩氣之由無御心元存候、猶重而可得貴意候、恐惶、

十月晦日

土井利勝様 土太炊助様 人々御中

四〇〇 岡田利治宛書狀(七一二四)

尚々蓬庵へ御一伝之通申聞候、忝由申候、去ル九日・十二日両通之御狀、自柘植所相届、昨日到来令拜見候、如仰其後者不申承、御床敷存候、節々以書狀も不申通無音心外候、然者

大御所様其地被成御坐、御機嫌宜御坐候由、乍恐珍重奉存候、来年御普請被仰付旨被仰知忝候、得其意存候、随分不可存油断候、弥相替御沙汰候ハ、可被仰知候、将亦米津清右衛門殿当国御住居候、万端御逼塞之躰、御察之外と笑止千万存候、猶重而可得御意候、恐惶、

十月晦日

岡田利治様 岡太郎右様

四〇一 近藤秀用宛書狀(七一二五)

去ル十三日之御狀、自柘植所相届令拜見候、(後川家應) 大御所様其元被成御坐、御機

嫌宜御座候由珍重奉存候、然者来年御普請相定様子被仰知、得其意忝候、随分
不存油断候之間、可御心安候、次其元拙子屋敷、(井伊重孝) 掃部殿御留守何事も無之由
令満足候、諸事御心付之通承届候、誠以過分至極候、猶重而可申入候間不具候、
恐惶、

十月晦日

(正徳考忠)
近石州様

四〇二 藤宗右宛書狀(七一二六)

御懇書到来、拜見忝候、

(徳川家應)

一、大御所様其元被成御坐、御機嫌宜御座候之由、下々迄目出度存事候、就
其来年御普請被仰付旨、奉得其意候事、
一、最前佐竹殿へたねか嶋張之箇進候處、于今御在所ニ御坐候付而、不被成御
届由尤存候、右之箇於爰元令糺明候、つよみハ二重こみニ仕候、あたりハ
十間ニてためし申候、拙子持箇ニ相替儀無之候、随分念を入進申候つる、
但 於其元御ためし候時分、様子者不存候事、
一、其地玆敷御沙汰も無御坐候哉、承度存候、委曲御報ニ可蒙仰候、尚重而可
申入候、恐惶、

十月晦日

藤宗右様 人々御中

四〇三 石川重次宛書狀(七一二七)

去ル十三日之御狀到来、令拜見候、其元珍敷儀も無御坐候由、珍重存候、来年
御普請被仰付候由、随分不存油断候、弥相替様子も候ハ、可被仰聞候、將亦
如蒙仰、(正勝) 米津清右衛門殿当国御住居候、御迷惑之躰、笑止千万存候、猶追而可
得御意候、恐惶、

十月晦日

(石川重忠)
石八左様 参 人々御中

四〇四 伊東政世・永田善右衛門宛書狀(七一二八)

態令啓候、然者来年御普請就被仰付、被仰知御懇札昨日到来、令拜見候、尤奉
得其意、不可存油断候、弥相替様子も御坐候ハ、可被仰聞候、頼存候、猶追
而可得御意候、恐惶、

十月晦日

(政世)
伊東右馬丞様

永田善右衛門様 人々御中

別紙

四〇五 小笠原秀政宛書狀(七一二九)

(付箋)
「江戸御普請之事」

柘植方より之飛脚ニ御伝書忝致拜見候、

(徳川家應)

一、大御所様於江戸御機嫌宜御坐候由、目出度奉存候、
一、来年三月より江戸御石垣御普請被仰付旨、奉得其意存事、
一、大相州別而 御前可然之由、珍重存候、
(久保忠勝)

一、久貝忠三郎殿・弓氣多源七殿、(正俊) 谷六右舍弟被成御折檻之由、両人者御知
人にて無御坐候、忠三郎殿別而申談候、一入笑止ニ存候、則以書狀申達候

へ共、猶々可然様ニ被成御心得可被下候事、

(龜殿氏忠)

一、鶴兵庫殿御手前も可被成御折檻様子被仰下候、別而無御心元存事候、是又
以書狀申候へとも、猶々能様ニ被成御心得可被下事、

(付箋)
「米津清右衛門殿御預」

一、如仰被下候、米津清右衛門殿私ニ被成御預、去秋ヨリ是ニ御坐候、爰元之儀
ニ候得者、何之御心付申儀も無御坐候、御逼塞之躰、何共御痛敷儀共候事、
一、於其元拙子屋敷へ被成御見舞候由、千万忝存候、不及申上候得共、諸事柘

植方迄御指南被成、被為御心添可被下候事、

一、御言伝之通、(繪須家改)蓬庵二申聞せ候、忝由候事、

一、此辺無事にて何も息災二罷在候間、御心安可被思召候事、

一、上方相替御沙汰も無御坐候事、

一、豊前二も相替儀無御坐、無事候由申候、可御心安候事、

一、井掃部殿も無事にて御在番候、折々人を上せ申候事、返々兵庫殿御手前何共く笑止成義共、無御心元存事候、別而笑止二可被思召と致察候、先為

御見舞早々如此候、猶能様二被仰達、可被下候、委曲期後音之時候、恐惶、

十月晦日

(小笠原秀改)
兵部太輔様

四〇六 本多正純宛書状(七―三〇)

「私^(私)祖母河内少知之義」

猶以私領内端城割申儀も、無御失念、被得 上意可被下候、奉頼存候、已上、

態申上候、然者 (徳川家憲)大御所様御機嫌能被成御鷹野候由、乍恐目出度奉存候、御

前向相替御沙汰も無御坐候哉、承度存候、仍去春得御意候私祖母河内少知之儀、御前御次而次第被仰上候而、可被下候、其上いつれへ成とも、御指図次第、相

渡申度候、当年貢先以納めさせ、私手前ニ御坐候、過分ニ日才仕由ニ候条、若

百性なども沈淪仕候へは、いかゞニ御坐候之間、如此申上儀ニ御坐候、以御次而、被達 上聞可被下候、委曲此者可得御意候、恐惶、

十月晦日

(本多正純)
本上野介様 まいる 人々御中

四〇七 松平正綱宛書状(七―三一)

態致啓達候、然者 (徳川家憲)大御所様御機嫌能被成御鷹野候由、乍恐珍重奉存候、御

前向珍御沙汰も候ハ、可被仰下候、仍去春 (本多正純)上州へ得御意候私祖母河内少知

之義、以御次而、被達上聞候様ニ、上州へ御心得頼存候、彼地当年殊之外致日才

由候、若百性等沈淪仕候へは、いかゞニ候条、申上事候、当年貢者、拙子手前ニ納置申候、上野殿御指図次第、いつれへ成とも相渡可申候、猶期後音之時候、恐惶、

十月晦日

(松平正綱)
松右衛門様 まいる 人々御中

四〇八 米津正勝宛書状(七―三二)

如仰、昨日者可致祇候と存候処、日暮急罷帰候、不懸御目御残多存候、然者江戸へ之御状三、慥請取申候、明日人を差下申候条、相届可申候、随而目白三送被下候、即庭簞へ入見申候、忝存事候、猶期貴面之時候、恐惶、

十月廿九日

(米津正勝)
米清右様 まいる

四〇九 柘植正時宛書状(七―三三)

少右衛門罷越付而、去ル十三日之書中令披見候、

一、兵庫殿・久貝忠三郎殿へ、為御見舞、態此者遣申候、書中持参候て、

能々相心得可申候、扱々無御心元仕合候、
弓 源七殿、谷六右衛門殿ハ

知人にて無之候事、

一、大御所様其元ニ被成御坐候付而、おたつ進物上申由尤候、(本多正純)佐渡殿へ忝候

旨可申候、并松様よりも菓子など上申由尤候事、佐渡殿へ御礼申候事、

一、御鷹野之進物、頓而相調上可申候由、可然時分尤候事、

一、佐竹殿へ進候たねか嶋張鉄砲之儀、藤宗右よりも蒙仰候、此方にて随分念

を入、ためし進候、別ニ可仕様も無之通、宗右へも申入候、たねか嶋張右之より念を入候事ハ不相成候、得其意、宗右ニ可申候事、

一、来年御普請相定申候由、得其意候、就其小くり石無之由尤候、急度銀子小判ニ替、其元へ可遣候、其内随分立聞、一二百坪か三百坪にても相調尤候、次第ニ高直ニ成可申候条、急申度事候、当坐借ニ小判候ハ、先さしかへ候ても調度事候、利足など付候へハ、不入事候とても、遣可申候、其段者いか様ニも才覚專要ニ候事、

一、土台木之事、頼而舟を廻申候条、つませ可遣候、於其元もたやすき木於有之者、借銀にて可相調候事、

(井伊直孝)

一、成瀬豊後殿・掃部殿御知音ニ付而、御心付之由忝儀ニ候、終不申通候へとも、為御礼、以書中申入候、相届能々御礼可申候、罷下節、以面上、猶々可得御意候旨、相心得可申候、掃部殿へも右之旨、御礼可申入候事、

(付箋)
「御普請自身罷下事無用之由」

一、御普請ニ自身罷下儀ハ無用之由、被仰出旨、得其意候、乍去各聞合可申候、於其元も能々承届可申越候、不可有油断候、

一、牧十兵衛・小南六郎兵衛ニ差下候小判ニ而、石相届申由ニ候、然共遅ク相届申事候、随分口切無相違様ニ尤候、各向其上御普請御ふれニ付而、弥高直ニ成可申候条、不可有由断候、

一、兵糧之儀、得其意候、於大坂かわせニ可仕なと申者候ハ、才覚尤候、少もわりを入候てハ無用ニ候、づかへニ可仕と申者候ハ、早々可相調候、さ候ハ、千石ニ而も二千石にても、其内者いか程もかわせニ尤候事、

一、権左衛門儀遅参相待事候、

(付箋)
「河内御知行」

一、当春上野殿へ得御意候河内知行之義、寺田将監方迄申談由尤候、只今又上州へも、無御失念、被仰上可被下由申進候、佐渡殿へ書状進候へと申越候へとも、最前より上野殿可有御伺之由候ニ、佐州へ申入候へはいかニ候条、無其儀候、此書状上州へ致持参、以御次而、被仰上可被下候由、又者彼地当年致日損候、就其若百性^(延)等うせはしり申儀なと候へは、いかニ候条申上候、当年貢者納めさせ、阿波守手前ニ有之由可申上候、いつれへ成とも上州

御指図次第、相渡申度存旨可申候、然処ニ若々上州御事多候条、佐渡殿へ申候へと御指図も候ハ、右之通其方口上ニ而、佐渡殿へ可申候、書状を進候へは、上州御油断ニ付而、佐渡殿へ申入様ニ候へは、いかニ候事、如此申上ハ、遅候而も不苦事候、

(付箋)
「当国画図」

一、当国端城之義、当春上州へ申入候国之絵図、当春十左衛門致持参、於駿府少惡所在之由直し候て、上申たる由ニ候、上州ニ可有之候絵図、差越候へと申候故、只今も遣申候、是者右のと少相違有之由候、佐渡殿御尋候ハ、於駿府上野殿へ上申たる由可申候、けに上州其元御持参無之入候ハて、不叶義候ハ、是をなりとも佐渡殿へ可懸御目候哉、右如申候、是者少右のと相違たるへく候、端城之義、佐渡殿へも上州へも申入候、此書中令持参、能々可申上候、城之儀、遅候ても不苦事候、

一、普請人之義、年内可下之由心得申候、聞合、頼而下可申候、

一、河内知行之事、其方ニハ終様子不申聞候、存間布候、此知行之義、先年自

(徳川家康)

太閤様大昌院殿へ被遣候、大昌院被相果付而、上申候様子、具十左衛門存知之事候、其方へ申聞存知候ハ、上州御差図次第、佐州へ可申上候、無左候ハ、遅候ても不苦候間、佐州へ者申ましく候、恐々、

十月晦日

(正時)
柘植平左衛門殿

四一〇 本多正信宛書状(七一三四)

態得御意候、然者 ^(徳川家康) 大御所様其元被成御坐、御機嫌宜御坐候由、乍恐目出度奉

存候、就其私妹進物被成御披露、御取成候由、忝仕合共御坐候、御礼不得申上候、随而去春も得御意候私領内端城之義、上野介殿へも得御意候間、以御次而、

(本多正信)

被仰伺可被下候、奉頼存候、委曲柘植平左衛門可得貴意候、恐惶、

十月晦日

(本多正信)
本佐渡守様 人々御中

四一一 成瀬正成宛書状(七―三五)

尚々掃部殿無御等閑由ニ而、拙子式迄御懇情之至、御礼不得申候、

雖未申通候、致啓上候、然者来年其地御普請之儀ニ候付而、拙子留守居、柘植

平左衛門迄御心付之由申越候、被寄思召、忝儀共御礼不得申候、何様罷下節、

以面上可得御意候、井伊掃部殿御無事ニ而、伏見御在番之由ニ候、猶重而可得御意候間、致省略候、恐惶、

十月晦日

成瀬豊後守様

四一二 羽勘右宛書状(七―三六)

其後者不申通候、御床敷存候、大御所様其元被成御坐、御機嫌宜御坐候由、

目出度奉存候、就其、御手前之儀、相濟申候哉、無御心元存事候、御報ニ可示被下候、猶重而可得御意候、恐惶、

十月晦日

羽勘右さま まいる

四一三 坪内宗兵衛宛書状(七―三七)

前野久右衛門身上之儀ニ付而示預、御状則久右方より被相届拜見申候、如仰備前・播磨新参之衆、少々被放御扶持被致他国由ニ候、就其、久右事無御心元候

由尤候、即自拙子方武藏守殿へ、御理をも可申上由、蒙仰候へとも、武州へ者、

直々ニ雖申達儀ニ候、幸彼御家老ニ、池田出羽守殿拙子縁者故、別而申談候之

条、何とそ以肝煎久右儀、如前々被召置様ニ頼存由、羽州迄即申入御事候、定而如在者有間敷候、併可相調者不存候、委曲山田八左衛門可得御意候間、早々

及御報候、恐惶、

霜月一日

坪宗兵様 まいる

四一四 池田由之宛書状(七―三八)

態申達候、仍先日進上申使者ニ、乍御報具示被下忝候、先書ニも如申入、江戸

御普請之由、申来取紛申儀、可在御推量候、隨而御無心之儀ニ候、御家中罷居候前野左馬丞義、如前々被召置様ニ、御肝煎頼存候、但貴殿不及御才覚義ニ候

へ者、不及是非候、彼者義從親存知之者ニ候条、如此ニ候、御馳走にて被遣候ハ、於拙子可忝候、恐惶、

霜月朔日

(池田由之)
池田羽守様

四一五 滝川忠征宛書状(七―三九)

尚々三丞大坂にて弥仕合之由候間、於拙子満足申候、如前々勤和に懇志候条、是又頼入事候、

米清右衛門殿為御見舞御飛札拙子へも預御音問候、拜見過分至候、如仰清右衛

門殿御逼塞之弊、御迷惑さ笑止千万存候、後者不申通御床敷存候、江戸・駿府珍敷御沙汰も無御坐由、珍重存候、何様来春遂面上積鬱可申承候、恐々、

霜月朔日

(忠征)
滝川豊前様

四一六 生駒平兵衛宛書状(七―四〇)

山田源太左衛門所迄之御状、拝披申候、然者其御国不相替、但馬守殿へ被仰付

候由、誠に珍重不過之儀ニ候、御家中衆御満足不及申候、近々但州御上着之由候条、何様自是御祝詞可申達候、就中来年御普請之由蒙仰、令満足候、是へも

只今御触状到来候、内々御普請可有之由ニ候つれとも、當時行当申事ニ候、次先度者爰元へ御越候由ニ候、努々不存、不懸御目候事心外候、何とて御案内も

無之候つる哉、遺恨存事候、返々其元いづれも御悦察入候、上宗ヶ老・溝五右など御参会之節、可預御心得候、恐々謹言、

霜月三日

生駒平兵衛殿 御宿所

四一七 小笠原秀政宛書狀(七一四一)

急度以飛脚申上候、仍從江戸被下、去月十八日・廿日兩通之貴札今日到在所来着、拝見仕候、先以御手前不殘所之仕合共、
(徳川家康・徳川秀忠) 兩 御 所様別而御懇之 御

錠候由、其上石川玄蕃殿御身上御改易付而、松本被成御拝領、近々御入部之由、御本領と申、御外聞誠以目出度儀共候、御満足致察候、於此方、悦申義可被成御推量候、猶重而御祝詞可申上候、次来年江戸御普請之由、委細被仰下、得其意存候、用意等不存油断候之間、御心安可被思召候、御仕合之由、
(廣川忠延) 豊前へも可申達候、委曲自是可申上候、恐惶、
霜月三日

(小笠原秀政)
兵部太輔様 まいる

四一八 藤堂高虎宛書狀(七一四二)

(龜殿氏忠)
尚々鶴兵庫殿御仕合中々可申上様も無御坐候、別而笑止ニ可被思召と存候、拙子も同前ニ存儀候、以上、

江戸御下向ニ付而、中途より示被下、去月廿日之御狀今日到来拝見仕候、然者来春三月朔日より、江戸石垣御普請之由、被仰聞候、得御意存候、尤用意等不存油断候、誠御繁多之節、御心付御札不得申候、貴様頃御在国之处、就御用俄御祇候之由、御苦勞致察候、猶以珍御沙汰も御坐候ハ、可被仰下候、偏奉頼候、尚来春以貴面可得御意候、恐惶、
霜月三日

(藤堂氏忠)
藤泉州様

四一九 小笠原忠脩宛書狀(七一四三)

(小笠原秀政)
態致啓上候、然者石川玄蕃殿身上御改易付而、松本兵部太輔殿御拝領候由、自江戸被仰下候、誠以外聞実儀目出度存候、於此方悦申儀、其元御同前ニ候、近

々御入部候由候間、御祝詞自是可申上候、恐惶、
霜月三日

(小笠原忠脩)
小信州様

四二〇 大甘半左衛門等宛書狀(七一四四)

(小笠原秀政)
態以飛札得御意候条、令啓候、仍石川玄蕃殿身上御改易付而、松本兵部太輔殿へ、被成御拝領候由、自江戸被仰下候、御外聞実儀各御満足令察候、拙子式大慶存候事候、何様重而御祝儀可申上候、先承否、悦如此御坐候、恐々謹言、
霜月三日

大甘半左衛門殿
二木勘右衛門殿
小笠原主水佐殿

四二一 乾長次宛書狀(七一四五)

(竹邊)
〔角石〕

尚々宮内様へも此由被仰上可被下候、以上、

態甚五左衛門進候、此中者令無音候、然者先日之御報ニ来年江戸御普請候由、被仰知候、此方へも其通御触狀到来候、内々雖致其覚悟候、行当申候、就其当夏より於伊豆石切せ申候、彼地角石ニ可成石無之、令迷惑候、由良之御城御普請ニ其元隣所ニ被仰付由、承及候、角石三三申付度候、貴殿御心得ニ可成義ニ候ハ、普請人二三百遣、一ヶ月計申付、直様江戸へ廻申度候、御影ニ而可申付候へとも、遠路ニ而難成候、拙子領内ニ者、ちいさき石も無之候条、乍御無心、申入事候、さ候ハ、甚五左衛門ニ奉行老人相添可申付候、委曲御報待入申候、随而急度普請人遣可申候、何様ニも頼申候、恐々、
霜月四日

(長次)
乾平右衛門殿

四二二 池田由之宛書狀(七一四六)

先日進候飛札之御報昨夕到来、拝見申候、然者角石之義得御意候处、来年江戸

御普請、其御国へも被仰付由付而、(池田由之)武州様へ御伺之義御延引之由、尤之御事

ニ候、内々武州様・左衛門督様 公儀御普請不被成由承及付而申入候キ、扱々
いづれも御用意等御取紛致察候、貴様など此頃御居城御替候ニ、別而可為御行
当と存事候、拙子手前角石之義、何とそ調法可仕候間、可御心安候、若々
武州様御手前江戸御普請不被仰付候ハ、角石三十程被成御借様ニ御取成所仰
候、尚自是可申達候、恐々、

霜月五日

(池田由之)
池羽州様 人々御中

四二三 本須勘解由左衛門宛書状(七―四七)

先度進候飛札之御報前夕到来、拝見申候、然者角石之義申入候処、来年江戸御
普請、(池田由之)武州様へも被仰付由ニ而、被仰上儀御延引候由、尤存事候、内々備・
播者 公儀御普請可有御赦免候様ニ承及候付而申達候キ、拙子手前角石何とそ
可令調法候条、可御心安候、扱々各御用意等御行当令察候、若々武州様御普請
不被仰付儀も候ハ、角石三十程被成御借様ニ御取成所仰候、(池田由之)羽州へも此
由申入候之条、内々其御心得頼入候、猶自是可申達候、恐惶、

霜月五日

本勘解由様

四二四 酒井忠世・土井利勝・安藤重信宛書状(七―四八)

先月十二日之御触状、去ル二日ニ至在所到来、拝見仕候、仍從來年三月朔日江
戸石垣御普請被仰付之由、畏而奉得其意候、御普請場請取候者、正月中ニ其地
参着仕候様ニ差下可申通、是又奉得其意候、恐々謹言、

霜月六日

(忠世)
酒井雅楽頭殿

(利勝)
土井大炊助殿

(重信)
安藤対馬守殿

四二五 安藤正次宛書状(七―四九)

去月十三日之御状、二三日已前至在所到来、致拝見、(後脱力)如仰其後者相隔無音、
背本意候、仍其地石垣御普請来年三月朔日より可被仰付候旨、御心付候段、別
而
忝存候、随分不存油断用意仕鉢ニ候、土台木等之儀、是又得其意存候、万端御
助言所仰候、先以

(徳川家康)
大御所様其元被成御坐、御機嫌宜御坐候由、下々迄珍重奉存候、御前始珍御
沙汰も候ハ、其元拙子留守居所迄可被仰下候、頼入存候、呉々寄思召御心付
候段、御礼不得申候、猶重而可得御意候、恐惶、

霜月六日

(安藤正次)
安与十様 まいる 御報

四二六 都筑為政宛書状(七―五〇)

去月廿日之御状、自柘植所相届、令拝見候、先以兵部太輔殿御本領松本御拝領、
其上阿
(小笠原秀政)

(徳川家康、徳川秀忠)
上様 忝 御錠候由、誠私式迄大慶不可過之候、貴殿御満足察入存候、

定而御在所へ可有御越と存、自是直様企飛札候、将亦其元来年石垣御普請候由
被仰知候、從御年寄衆御触状到来、弥奉存其旨候、随分無油断用意等申付候、
可御心安候、御手前之義、最前之御眼病于今然々無御坐由、別而無御心元存事
候、先度も如申達候、拙子手前石於伊豆自当夏時分申付候、角石ニ可成石無之、
令迷惑候、何とそ可令調法候条、可御心安候、御普請之儀御心付共頼入存事候、
次鶴兵庫殿御手前之儀、笑止千万成儀共候、相替様子も候ハ、可被仰聞候、
(正俊)
久貝忠三郎殿義、是又無御心元候、何事も重而可申達候、恐惶、

霜月六日

都弥左様 御報

四二七 牧野成里宛書状(七—五一)

十月十九日御懇書、二三日已前到来、令拝見候、其後者遙久不申通御床敷存候、然者小兵部殿御仕合之由大慶ニ存事候、是にて満足申候、

一、宮内殿淡州へ御移候、珍重存候、

一、鵜兵庫殿御手前何共笑止千万存事候、相替様子も候ハ、可被仰聞候、

一、紀伊国之儀、不相替但馬守殿へ被仰付候由、御外聞と申事候、其元諸事珍敷御沙汰も候ハ、可被仰聞候、猶重而可申入候、恐惶、

霜月六日

牧与州様 まいる 御報

四二八 柘植正時宛書状(七—五二)

〔御普請之事、柘植へ被下〕

去月十八日之書中、去二日ニ到来候、

一、江戸御普請御触状到来、即御請申候、可相届候、

一、小判にて石相届申由尤候、弥寒中旁高直ニ可成候条、差急申儀專要候、

一、兵部殿はや信濃へ可在御越と、自是直様人を進候事、

一、小栗石之儀心得申候、近々小判ニ遣可申候条可相調候、其内当坐かりニ仕候ても可相調候、弥高直ニ成可申と存事候、

一、兵粮之儀、是又近々銀子遣可申候、其内立聞少成ともたやすき八木候ハ、可相調候、千石計も調法尤候、前書ニ如申候、大坂・伏見にて、かわせニ可仕者候ハ、是又才覚尤候、

一、拙子罷下儀余国聞合申候、其上佐渡殿・大炊殿御指図次第、可得其意候、無油断承合可申越候、是又無油断用意申事候、

一、ひらたの儀心得申候、

一、つなミ之儀、是よりも可遣候、於其元も可相調置候、

一、兵庫殿御仕合可申様も無之、頓人を進候、相心得可申候、相替儀候ハ、

可申越候、函書殿御手前無御心元候、是又様子聞申度候、猶追々可申候、

一、普請人当年二三百可遣候、来年正月下旬ニ、必々其元参着候様ニ悉可遣候、小屋場之儀、余国なミニとり置尤候、下屋敷にてハ、せはく成間敷候哉、諸事可得其意候、謹言、

霜月六日

柘植平左衛門とのへ

四二九 片桐且元宛書状(七—五三)

寄思召預芳札候、忝令拝見候、仍今度御息御同道にて江戸・駿府へ御下向之处、不始于今 御前御仕合無残所、殊更種々御拝領ニ而、早速御帰着之由、尤珍重

存候、未存遠路、自是不申達候つる、然者先度御役地植木之儀、自大野修理殿

就被申越、少々進上仕候キ、枯申候哉、無御心元奉存候、随而米清右衛門殿無

事ニ御坐候、此辺之儀ニ候条、御心付申儀も無之、弥御逼塞之躰、可有御推察候、先可申を、南都名酒大小三樽贈被下候、珍敷別而賞味不他事候、如何様自是

可得御意候条、早々覃御報候、

霜月六日

片市正様 御報

○四二九と四三〇との間に、「一、光徳・榮乗・道与・徳乗へ茗桶一ツ被遣、

榮乗かたへ箒之儀被仰遣」との覚書がある。

四三〇 鵜殿氏長宛書状(七—五四)

猶々拙子式迄笑止不過之事候、

態令啓達候、然者貴様 御前向弥不可然之由承及候、扱々笑止千万無御心元存

事、難尽筆紙存候、委曲平左衛門可得御意候条、不能多毫候、恐惶、

霜月七日 御自筆之跡 御使甚右衛門

(近藤正將)
鶴兵庫様 人々御中

四三一 久貝正俊宛書狀(七—五五)

猶々様子無御心元如此候、委細御報ニ可承候、

態令啓達候、仍貴様 御前向其已後相済被成御出仕候哉、承度存事候、於拙子

無御心元存儀難申尽候、為御見舞如此候、委曲柘植平左衛門可得御意候、恐惶、
(正時)

霜月七日 同人

(正徳)
久貝忠三様 人々御中

四三二 生大炊宛書狀(七—五六)

其後者不申通無音、所存之外候、其元相替儀も無之候哉、承度候、来年者江戸御普請之由御触ニ候条、用意等取紛申事ニ候、然者岩城殿へ萩原を進候、何かと候て、早々不進候つる、御心得頼存候、御用之儀候ハ、猶々可蒙仰候通、被仰達可被下候、最前岩城殿より銀子之儀蒙仰候、只今萩原ニ壹貫五百め進候、又不破又右衛門相煩不慮ニ相果候、何とも不便成仕合候、御心中可為同前候、恐惶、

霜月九日

生大炊様 まいる

四三三 本多正信宛書狀(七—五七)

猶以万端御繁多之節、使之者被留置せ、具被仰下段、過当至極不過之存候、雖無差儀御坐候、為御礼如此候、以上、
(正勝)

態得御意候、仍先度米津清右衛門殿儀ニ付而使者を進上仕候処、諸事御事多

半、重々被為入御念、委曲被仰下段、誠以忝儀共、御礼不得申候、御紙面之趣
(本多正徳)
存其旨候、即清右衛門殿へも右之通申達候、随而私妹進物被成御披露御取成之

旨、重畳忝儀、難尽筆紙存候、即御狀之趣蓬庵ニ申聞候、別而過当至極之由申候事ニ候、猶期後音時候、恐惶謹言、

霜月廿一日

(本多正徳)
本佐州様 人々御中

四三四 近藤秀用宛書狀(七—五八)

其後者不申通無音、所存之外候、其元珍御沙汰も無御坐候哉、仍先度私妹進物之儀被入御念由、自柘植所申越候、別而忝存事候、何角御指南頼入存候、来春御普請之儀ニ付而、諸事柘植ニ御心付所仰候、猶期後音候、恐惶、

霜月廿一日

(近藤秀用)
近石州様 まいる 人々御中

四三五 内藤忠清宛書狀(七—五九)

態致啓達候、然者此中御煩之由いかゞ無御心元存候、不存以書狀も不申通無音之至、所存之外候、寒天別而御養生不及申專要存候、来春其地石垣御普請之由、随分不存油断、用意等申付候事候、相替御沙汰も候ハ、可被仰知候、猶重而可得御意候、恐惶、

霜月廿一日

(内藤忠清)
内金左様 人々御中

四三六 本多正信宛書狀(七—六〇)

(河内御領地)

追而申上候、不被寄思召儀ニ御坐候、蓬庵母ニ從 太閤様河内にて少知被下置候、就其蓬庵母去々年相果申候、私去冬其地へ致祇候、罷上節於駿府上野介殿迄彼知之儀上申候間、以御次而被達 上聞、御指図次第いつれへ成とも相渡可申由申上候、御次而も無御坐候哉、未御指南無御坐候、右之趣上野殿へ得御意刻、御次而も無御坐、不被遂 上聞内者、当物成者私手前ニ納置可申

由申上付而、其分ニ御坐候、当年以之外日損仕、所柄致迷惑由ニ候之条、若百性等遂電仕候へ者、いかニ御坐候之間、上野殿へ被成御相談、以御次而被得上意候歟、無左候とも、於被成御指南者、いつれへ成とも相渡申度候、委曲柘植平左衛門口上ニ可申上候、恐惶、

霜月廿一日

本佐渡守様
（本多正信）
まいる

猶以右之趣、旧冬貴様へも可申上候処、彼少知之儀、先年從御所様以

西尾隠岐守殿・津田小平二殿、無相違蓬庵母ニ被下置候ニ付而、上野介殿

へ得御意候、以上、

四三七 柘植正時宛書狀（七一六一）

猶以十左衛門儀、佐渡守殿御事多半、御留置忝旨口上ニも可申上候、又妹進物御披露候て、御取成忝由書中ニも申上候、

〔河内御領地之事〕

十左衛門儀、一兩日已前罷歸、書中并口上之趣具令承知候、米清右衛門殿儀、被入御念蒙仰忝之旨、佐渡殿へ態以飛札申上候、早々可相届候、

一、先書ニも申遣候河内知行之儀、上野殿于今無御伺候哉、無御心元候、当

春も重々得御意候条、遅候ても不苦儀ニ候、雖然余延引いかニ候条、佐渡殿へ申入、可然儀ニ候ハ、と存、佐州へ此度以書狀申上候、致持参口上ニ可

申上候様子者、河内国日置村高千石蓬庵母ニ從太閤様被下置候、然

処蓬庵母去々年相果候条、去冬阿波守江戸へ祇候仕罷上節、於駿府上野殿迄彼知之儀以御次而被達、上聞、其上御指図次第いつれへ成とも相渡可申候由申上候、御次而も無御坐候哉、いまた御指図無御坐候、其後も節々上野殿迄

申上候キ、右之趣当春得御意候刻、御次而も無御坐、不被得、上意内者、当物成阿波守手前ニ納置可申由申上ニ付而、其分ニ御坐候、

右之通、上野殿へ佐渡守殿以御相談、被得、上意被下候様ニ可申候、惣別右之趣当春佐渡守殿へも可得御意儀ニ候へとも、彼知之儀先年從御所様西尾隠岐

殿・津田小平二殿を以、無相違蓬庵母ニ被下置候、公方様無御存知儀ニ付而、

於駿府伺申候、佐渡殿迄不得御意由可申候、か様ニ節々申候ハ、上野介殿いか思召候はんも不存候条、彼地当年日損ニ付而、所柄令迷惑由ニ候条、若百

姓等遂電仕候へ者いかニ候条、得御意候由可申候、とかく佐渡殿へ申、可然

と存候ハ、上野介殿へ参、河内少知之儀、右如申候、百姓等令迷惑ニ付而、

重畳申上候、佐州様へも被申上候条、被成御相談被下候様ニと、上州へも可申上候、万一はや上州被仰上相濟候歟、又者佐州へ申入、いかニ敷儀ニ候ハ、

此狀持参候事無用候、謹言、

霜月廿一日

柘植平左衛門とのへ

四三八 土井利勝宛書狀（七一六二）

其後者不得御意候、御手前御腫物弥致平愈候哉、無御心元存候、節々以書狀も不申達、所存之外候、随而其元、御前向珍敷御沙汰も御坐候ハ、可被仰下候、来年御普請聊不存油断、用意等申付候、雖無差儀御坐候、如此御坐候、恐惶、

霜月廿一日

土井利勝
土大炊様 人々御中

四三九 小笠原秀政宛書狀（七一六三）

今度之為御祝儀、以使者申上候、御本領御拝領、其上無殘処御仕合共之由、千々万々目出度奉存候、程近御坐候ハ、尤祇候仕可申上儀ニ御坐候へとも、遠限ニ御坐候之条、無其儀御坐候、御祝儀計ニ御小袖十・御太刀・御馬進上候、猶来春重畳御祝儀可申承候、恐惶、

霜月廿三日

(小笠原秀政)
兵部大輔様

四四〇 小笠原忠情宛書状(七―六四)

態以使者得御意候、然者今度御親父様於江戸御仕合殘所無御坐、殊更御本領被成御拝領、千秋万歳目出度存候、尤以參御祝詞可申上候へとも、遠路ニ付而無其儀候、雖是式御坐候、御太刀・御馬并御小袖十致進獻之候、猶來春可得御意候、恐惶、

霜月廿三日

(小笠原忠情)
小信濃守様 人々御中

四四一 犬飼半左衛門等宛書状(七―六五)

尚々御祝儀迄ニ各へ御太刀・馬代并小袖一重令進獻之候、今度於江戸御仕合無殘処御坐、殊更御本領御拝領、誠以千々万々目出度存候、尤以參上御祝儀申上度候へとも、遠堺故無其儀候、可然様御取成頼入候、猶此者申含候、恐々謹言、

霜月廿三日

犬飼半左衛門殿
二木勘右衛門殿
小笠原主水佐殿

四四二 伊東政世等宛書状(七―六六)

尚々先度者御心付之段忝存候、不始于今儀候条、御礼不得申候、其後者不申通候、然者來年御普請付而、於伊豆少々石申付度存、只今普請人遣申候、下奉行得御意儀候者、諸事御指図奉頼候、猶近々可得御意候、相替御沙汰も候ハ、可被仰聞候、恐惶、

霜月廿五日

(政世)
伊東右馬丞様
永田善左様
(正次)
安藤与十郎様

嶋田兵四郎様

(都筑為政)
都弥左様

天野金左衛門様 まいる

四四三 石市右宛書状(七―六七)

今度之為御祝儀、左衛門督様へ以使者申上候、御前様へ御夜物共進上仕候、可然様ニ御披露頼入存候、随而御慶迄ニ貴殿へ御太刀・馬代令進獻之候、委曲此者申含候、恐惶、

霜月廿五日

石市右様 まいる

四四四 青山忠成宛書状(七―六八)

態以飛札得御意候、然者貴様于今 御前御出仕無御坐候哉、無御心元存候、節々以書状成共御見舞可申候処、却而いかゝと非其儀候、承度存、如此御坐候、猶期後音之時候、恐惶謹言、

霜月廿五日

(青山忠成)
青図書様 人々御中

四四五 井伊直孝宛書状(七―六九)

其後者以信書も不得御意、無音之至候、相易儀も無御坐候哉、承度存候、随而來年江戸御普請之儀ニ付而、成瀬豊後殿柘植平左衛門方迄御懇之御心付候由申越候、私儀終得御意たる儀も無之候、貴様と別而御等閑無御坐由ニて、右之通ニ御坐候、忝存旨貴様迄申入候旨、被仰伝可被下候、頼存候、未申馴候へとも、私所よりも以書状申達候キ、來年江戸へ參候ハ、可得御意と致満足候、猶追而可得御意候、恐惶、

霜月晦日

(井伊直孝)
井掃部様 人々御中

四四六 森長門等宛書状（七―七〇）

早々以使者可申入候処、何かと遅々、失本意候、先以御前相済御出仕之由、千秋万歳珍重此事候、拙子儀も江戸御普請ニ付而、来春可罷上候条、以面上心事可申承候、其元相替御沙汰も候ハ、可蒙仰候、猶期後音之時候、恐惶、

極月九日

森長門老

行徳兵様 別紙也、

人名索引

* 数字は文書番号（本文では漢数字だが、便宜上ここでは算用数字とした）

（ア行）

- ・ 安栖： 262
- ・ 安井喜助： 337
- ・ 安対馬： ↓安藤重信を見よ。
- ・ 安帯刀： ↓安藤直次を見よ。
- ・ 安藤彦四： ↓安藤重能を見よ。
- ・ 安藤重信（安対馬・安藤対馬・安藤対馬守・対馬）： 131・264・290・295・298
- 308・314・424
- ・ 安藤重長（安藤勝蔵）： 297
- ・ 安藤重能（安藤彦四）： 278
- ・ 安藤正次（安藤与十・安藤与十郎・安与十）： 229と230の間の補記、425・442
- ・ 安藤勝蔵 ↓安藤重長を見よ。
- ・ 安藤対馬： ↓安藤重信を見よ。
- ・ 安藤対馬守： ↓安藤重信を見よ。
- ・ 安藤帯刀： ↓安藤直次を見よ。
- ・ 安藤直次（安帯刀・安藤帯刀）： 25・116・131・166・167・175・180・351
- ・ 安藤与十： ↓安藤正次を見よ。
- ・ 安藤与十郎： ↓安藤正次を見よ。
- ・ 安与十： ↓安藤正次を見よ。

・伊右衛門：97・99・100・101
 ・伊賀守：↓板倉勝重を見よ。
 ・伊東右馬丞：↓伊東政世を見よ。
 ・伊東政世（伊東右馬丞）：404・442
 ・伊藤忠兵衛：239
 ・猪熊：↓猪熊教利を見よ。
 ・猪熊教利（猪熊）：25・26
 ・老岐：352
 ・老岐守：↓益田老岐守を見よ。
 ・因州：↓諏訪頼水を見よ。
 ・蔭山庄右衛門：129
 ・右衛門：98・101・180
 ・右近：232・346・352・357・368
 ・右兵衛：131
 ・宇庵：42
 ・羽老州：↓滝川正利を見よ。
 ・羽勘右：412
 ・羽形〔刑〕部：↓滝川雄利を見よ。
 ・羽州：↓池田由之を見よ。
 ・羽柴老岐：↓滝川正利を見よ。
 ・羽柴越中守様：↓細川忠興を見よ。
 ・鶴殿氏長（鶴兵・鶴兵庫・兵庫）：19・20・22・45・46・47・48・49・65
 94・131・137・205・222・257・338・344・348・355・363・364・365・366・398・405

409・418・427・428・430
 ・鶴殿兵庫：↓鶴殿氏長を見よ。
 ・鶴兵：↓鶴殿氏長を見よ。
 ・鶴兵庫：↓鶴殿氏長を見よ。
 ・永井右近：↓永井直勝を見よ。
 ・永井右近大夫↓永井直勝を見よ。
 ・永井直勝（永井右近・永井右近大夫）：68・71・116
 ・永田善右衛門：404
 ・永田善左：442
 ・栄乗：429と430の間
 ・益田老岐守（老岐守）：187・389
 ・益田左兵衛：187・389
 ・益田大膳：↓益田豊正を見よ。
 ・益田豊正（益田大膳）：2・3・8・9・10
 ・越後少将：260
 ・越前少将：↓松平忠直を見よ。
 ・越府：367
 ・遠山久兵衛：↓遠山友政を見よ。
 ・遠山兵衛：↓遠山友久を見よ。
 ・遠山友久（遠山久兵・遠山兵）：138・159・293
 ・おあちや：180
 ・おくに：131
 ・おせん：176・180

・おつる：131
 ・おまつ：176・180
 ・横山城：↓横山長知を見よ。
 ・横山長知（横山城）：144
 ・横田三郎兵衛：↓横田倫松を見よ。
 ・横田倫松（横田三郎兵衛）：190
 ・奥村伊与：↓奥村永福を見よ。
 ・奥村永福（奥村伊与）：150
 ・奥平大膳正（家昌か）：206
 ・奥平忠政（松撰津守・松平撰津守）：120・149・153・215
 （力行）
 ・加右衛門：391
 ・加左馬↓加藤嘉明を見よ。
 ・加藤嘉明（加左馬・加藤左馬・加藤左馬助）：105・106・107・114・130・161・178
 ・加藤左馬↓加藤嘉明を見よ。
 ・加藤左馬助↓加藤嘉明を見よ。
 ・可原右京亮（若原か）：208
 ・鍋信州：↓鍋島勝茂を見よ。
 ・鍋島勝茂（鍋信州）：136
 ・勘解由：86・87
 ・勸修寺：↓勸修寺教豊を見よ。

・勸修寺教豊（勸修寺）：369
 ・岩城：432
 ・岩田甚五左衛門：209
 ・岩兵衛：336
 ・紀伊守：↓浅野幸長を見よ。
 ・姫路宰相：↓池田輝政を見よ。
 ・義直：↓徳川義直を見よ。
 ・儀左衛門：361・381
 ・九鬼守隆（九鬼長州・九鬼長門守）：88・89・93・108
 ・九鬼長州：↓九鬼守隆を見よ。
 ・九鬼長門守：九鬼守隆を見よ。
 ・九郎兵衛：213
 ・弓氣多源七：↓弓氣多昌吉を見よ。
 ・弓氣多昌吉（弓源七・弓氣多源七）：398・405・409
 ・弓源七↓弓氣多昌吉を見よ。
 ・久さい：252
 ・久永源兵衛：↓久永重勝を見よ。
 ・久永源兵衛：↓久永重勝を見よ。
 ・久永重勝（久永源兵衛・久永源兵衛）：88・89・105・106・107・108・109・110・114
 115・253
 ・宮村半四郎：355

・宮内：371・373・421・427
 ・宮内少輔：↓池田忠雄を見よ。
 ・久貝正俊（久貝忠三・久貝忠三郎）：397・398・405・409・426・431
 ・久貝忠三：↓久貝正俊を見よ。
 ・久貝忠三郎↓久貝正俊を見よ。
 ・虚堂：74
 ・脇中務：↓脇坂安治を見よ。
 ・脇坂安元（脇坂淡州・淡州）：28・30・228と229の間の補記
 ・脇坂安信（脇坂主水）：317
 ・脇坂安治（脇中務）：29
 ・脇坂主水：↓脇坂安信を見よ。
 ・脇坂淡州：↓脇坂安元を見よ。
 ・橋田丹波：359
 ・行徳兵：446
 ・玉対馬：↓玉虫繁茂を見よ。
 ・玉虫対馬守：↓玉虫繁茂を見よ。
 ・玉虫繁茂（玉対馬・玉虫対馬守）：5・34
 ・近石州：↓近藤秀用を見よ。
 ・近藤秀用（近石州）：277・401・434
 ・金松修理：↓兼松正吉を見よ。
 ・堀帯刀↓堀尾吉晴を見よ。
 ・堀尾吉晴（堀帯刀）：102
 ・堀尾五右衛門：143

・刑部内匠：333
 ・犬甘半左衛門：420
 ・犬飼半左衛門：441
 ・犬半左：47
 ・蝮八蔵：330・350
 ・玄徳：213
 ・彦右衛門：343・363・366
 ・彦太郎：213
 ・原右衛門：190
 ・兼松正吉（金松修理）：190
 ・乾長次（乾平右・乾平右衛門）：334・371・373・380・382・383・396・421
 ・乾平右：↓乾長次を見よ。
 ・乾平右衛門：↓乾長次を見よ。
 ・源右衛門：347
 ・源太左衛門：366
 ・権右：↓土肥権右衛門を見よ。
 ・権右衛門：土肥権右衛門を見よ。
 ・権左衛門：409
 ・こせん：131・373

・五郎左衛門：	308
・古田重然（古田織部）：	64・134・135・139
・古田織部：↓古田重然を見よ。	
・後庄三↓後藤光次を見よ。	
・後藤光次（後庄三・後藤庄三・後藤庄三郎）：	103・104・131・154・155・219
・後藤庄三：↓後藤光次を見よ。	
・後藤庄三郎↓後藤光次を見よ。	
・御局：	385
・御所様↓徳川家康を見よ。	
・御前：	385・398・406・407・425・429・430・431・438・443・444
・向将監：↓向井忠勝を見よ。	
・向井将監：↓向井忠勝を見よ。	
・向井忠勝（向将監・向井将監）：	88・89・105・106・107・108・109・110・114
115・253	
・光徳：↓本阿弥光徳を見よ。	
・更聞：	211
・岡太郎右：↓岡田利治を見よ。	
・岡田甚左衛門：	85・124・366・369・391
・岡田太郎右：↓岡田利治を見よ。	
・岡田利治（岡太郎右）：	260・400
・岡嶋備中：	127・150
・荒遠江守：↓荒尾成房を見よ。	

・荒遠州：↓荒尾成房を見よ。	
・荒志摩：↓荒尾隆重を見よ。	
・荒但馬：↓荒尾成利を見よ。	
・荒尾志摩守：↓荒尾隆重を見よ。	
・荒尾成房（荒遠江守・荒遠州）：	56・57
・荒尾成利（荒但馬・荒尾但馬）：	374・379
・荒尾但馬：↓荒尾成利を見よ。	
・荒尾隆重（荒志摩・荒尾志摩守）：	54・326・379
・高九介：↓高木正綱を見よ。	
・高木正綱（高九介）：	245・270・281・294
・溝因幡：↓溝口因幡守を見よ。	
・溝口因幡守（溝因幡）：	62・63・357
・溝口五右衛門：	327
・溝五右：	416
（サ行）	
・左衛門督：	377・379・381・385・422・443
・左近太輔：↓生駒正俊を見よ。	
・左馬：	168
・左馬助：	163・366・369
・左門：↓織田頼長を見よ。	
・佐久間河内：↓佐久間政実を見よ。	
・佐久間河内守：↓佐久間政実を見よ。	

・佐久間政実（佐久間河内・佐久間河内守・佐河州・佐河内）：119・152・161

191

・佐河州：佐久間政実を見よ。

・佐河内：佐久間政実を見よ。

・佐州：↓本多正信を見よ。

・佐竹：402・409

・佐渡：↓本多正信を見よ。

・佐飛州（佐飛驒）：36・37・67・78・188・330

・佐飛驒：↓佐飛州を見よ。

・宰相：↓池田輝政を見よ。

・細山主水：363・365

・細川忠興（羽柴越中守）：129

・細川忠利（細内記）：234・240・249・336

・細川藤孝（幽斎）：129

・細内記：↓細川忠利を見よ。

・榊遠江守：↓榊原康勝を見よ。

・榊原康勝（榊遠江守）：124・131・251・304・325

・作左衛門：377・382・386

・山崎家盛（山左馬）：273・284

・山城宮内：387

・山崎内匠：209・353

・山五作：↓山岡景長を見よ。

・山五郎左：↓山岡景長を見よ。

・山口重政（山口但馬）：282

・山口但馬：↓山口重政を見よ。

・山岡景長（山五作・山五郎左）：248・288・291・333・335

・山左馬：↓山崎家盛を見よ。

・山対州：↓山内康豊を見よ。

・山田源太左衛門：416

・山田織部：353

・山田八左衛門：413

・山内康豊（山対州）（慶長15年3月1日忠義に改名）：18・106・107・114・289

・山内将監：259

・山内忠義（松土佐・松土州）：178・228

・三原石見：78

・三左↓池田輝政を見よ。

・三左衛門：↓池田輝政を見よ。

・三四郎：42

・三丞：415

・四宮勘左衛門：198

・四郎右：↓天野四郎右衛門を見よ。

・四郎右衛門：↓天野四郎右衛門を見よ。

・四郎左衛門：357
 ・二郎右衛門：345
 ・寺田将監：409
 ・若右京：381
 ・主水：352・363・365・366
 ・主膳：↓片桐貞隆を見よ。
 ・主殿助：86・87・333
 ・酒雅楽：↓酒井忠世を見よ。
 ・酒井雅楽：↓酒井忠世を見よ。
 ・酒井雅楽頭：↓酒井忠世を見よ。
 ・酒井忠世（酒雅楽・酒井雅楽・酒井雅楽頭）：131・241・264・274・275・276・308
 424
 ・秀頼：↓豊臣秀頼を見よ。
 ・萩原：432
 ・修理：352
 ・鷺坂検校：252・262
 ・十左衛門：349・354・409・437
 ・祝丹波：3・9
 ・春元：322
 ・春清老：2・10・17

・助右衛門：↓牧長勝を見よ。
 ・小信州：↓小笠原忠脩を見よ。
 ・小信濃守：↓小笠原忠脩を見よ。
 ・小南六郎兵：409
 ・小兵部：↓小笠原秀政を見よ。
 ・小兵部太輔↓小笠原秀政を見よ。
 ・小民部：↓小林家孝を見よ。
 ・小笠原主水佐：420・441
 ・小笠原秀政（小兵部・小兵部太輔・小笠原秀政・小笠原兵部太輔・松本兵部太輔・兵部太輔）：19・22・45・46・47・49・81・131・140・405・417・419
 420・426・427・428・439
 ・小笠原忠脩（小信州・小信濃守・信濃守）：131・141・238・419・440
 ・小笠原兵部：↓小笠原秀政を見よ。
 ・小笠原兵部太輔：↓小笠原秀政を見よ。
 ・小林家孝（小民部）：3・9・330
 ・少右衛門：409
 ・少将：358
 ・松：409
 ・松右衛門：↓松平正綱を見よ。
 ・松井康重（松平周防守）：52
 ・松摂津守：↓奥平忠政を見よ。
 ・松大炊：11
 ・松土佐：↓山内忠義を見よ。
 ・松土州：↓山内忠義を見よ。
 ・松武藏守：↓池田利隆を見よ。

・松平右衛門：↓松平正綱を見よ。	
・松平家乗（松平和泉・松平和泉守）：	122・126・133・157・158
・松平宮内：	326
・松平左衛門督：	326
・松平周防守：↓松井康重を見よ。	
・松平重勝（松平大隈・松平大隈守）：	4・34・358
・松平重忠（松平丹後）：	244
・松平正綱（松右衛門・松平右衛門）：	69・71・97・131・154・155・210・211・216
217・407	
・松平摂津守：↓奥平忠政を見よ。	
・松平大隈：↓松平重勝を見よ。	
・松平大隈守：↓松平重勝を見よ。	
・松平丹後：↓松平重忠を見よ。	
・松平忠直（越前少将）：	134
・松平武蔵：↓池田利隆を見よ。	
・松平武蔵守：↓池田利隆を見よ。	
・松平和泉：↓松平家乗を見よ。	
・松平和泉守：↓松平家乗を見よ。	
・松本兵部太輔：↓小笠原秀政を見よ。	
・将军：徳川秀忠を見よ。	
・上安次郎：	221
・上州：↓本多正純を見よ。	
・上宗：	272・416

・上宗十老：	63
・上田宗了：	357
・上野：↓本多正純を見よ。	
・上野介：↓本多正純を見よ。	
・上様：↓徳川家康を見よ。	
・城昌茂（城泉）：	5・220・229
・城泉：↓城昌茂を見よ。	
・常真：↓織田信雄を見よ。	
・常陸：	131
・盛法印：	8
・豊屋清二郎：	202
・植田八蔵：	43
・織田信重（織田民部・織民少・織民部）：	84・164・192
・織田信雄（常真）：	27
・織田長益（有楽）：	28・31・214
・織田民部：↓織田信重を見よ。	
・織田頼長（津田左門・左門）：	28・31・43・44
・織民少：↓織田信重を見よ。	
・織民部：↓織田信重を見よ。	
・信州（富信州）：	114
・信濃守：↓小笠原忠脩を見よ。	
・津左近：↓津田親行を見よ。	
・津小平次：↓津田秀政を見よ。	
・津田左近：↓津田親行を見よ。	
・津田左門：↓織田頼長を見よ。	

・津田秀政：(津小平次・津田小平次)：79・134・436・437
 ・津田小平次：↓津田秀政を見よ。
 ・津田将監：379
 ・津田親行(津左近・津田左近)：43・78・330
 ・津田平左衛門：364・365・366
 ・神五兵：↓神尾守世を見よ。
 ・神尾守世(神五兵)：246
 ・真藏人：9・119・330
 ・真飛：78
 ・深井丹波：190
 ・新介：102・383
 ・森金右：↓森川氏信を見よ。
 ・森川氏信(森金右)：236
 ・森川重俊(森川内膳)：252・309
 ・森川内膳：↓森川重俊を見よ。
 ・森長門：3・9・330・446
 ・親父：↓中井正吉を見よ。
 ・甚右衛門：430
 ・甚五左衛門：421

・甚左：129・207・366と367の間の補記
 ・甚左衛門：74・194・213・351・363・365
 ・諏訪頼水(因州)：327
 ・水野監物：↓水野忠元を見よ。
 ・水野忠元(水野監物)：252・313
 ・杉原掃部助(杉掃部)：78
 ・杉掃部：↓杉原掃部助を見よ。
 ・井上正就(井上半九)：252・279
 ・井上半九↓井上正就を見よ。
 ・井伊掃部：↓井伊直孝を見よ。
 ・井伊直孝(井伊掃部・井掃部・掃部)：131・230・233・244・269・277・332・391
 401・405・409・411・445
 ・井伊直勝(井右近大夫)：21
 ・井右近大夫↓井伊直勝を見よ。
 ・井掃部：↓井伊直孝を見よ。
 ・生右近：345・367・389
 ・生駒一正(生駒讃岐守・生讃州)：91・105・106・107
 ・生駒検校：147
 ・生駒左近太輔：↓生駒正俊を見よ。
 ・生駒讃岐守：↓生駒一正を見よ。
 ・生駒正俊(左近太輔・生駒左近太輔)：90・91
 ・生駒長兵：27

・生駒平兵衛：416
 ・生讃州↓生駒一正を見よ。
 ・生二郎右衛門：346
 ・生大炊：368・432
 ・市正：↓片桐且元を見よ。
 ・西藤兵衛：西尾利氏を見よ。
 ・西藤兵衛：↓西尾利氏を見よ。
 ・西尾隠岐守：436・437
 ・西尾藤兵衛：↓西尾利氏を見よ。
 ・西尾利氏：(西藤兵衛・西藤兵衛・西尾藤兵衛)：32・71・72・73・75・81
 97・101・104・113・131・132・154・155・166・167・174・178・179・180・211・216
 ・成隼人：↓成瀬正成を見よ。
 ・成瀬正成(成隼人・成瀬隼人・成瀬隼人正)：25・116・131・175・345・346・351
 367・368
 ・成瀬隼人：↓成瀬正成を見よ。
 ・成瀬隼人正：↓成瀬正成を見よ。
 ・成瀬豊後(成瀬正成か)：409・411・445
 ・青山助左：3
 ・青山忠俊(青伯耆・青伯州)：233・249・276・286・288・306
 ・青山忠成(青山図書・青図書・図書)：131・147・264・308・314・428・444
 ・青山図書：↓青山忠成を見よ。
 ・青助左：9・78・197・225

・青助左衛門：330
 ・青図書：↓青山忠成を見よ。
 ・青伯耆：↓青山忠俊を見よ。
 ・青伯州：↓青山忠俊を見よ。
 ・柴山十兵衛：209
 ・清右衛門：↓米津正勝を見よ。
 ・清九郎：112
 ・清左：380
 ・石原市左衛門：385
 ・石黒勘右衛門：190
 ・石市右：443
 ・石川玄蕃：417・419・420
 ・石川主殿：↓石川忠総を見よ。
 ・石川重次(石川八左・石八左・石八左衛門)：1・7・35・60・66・82・112
 113・131・403
 ・石川忠総(石川主殿)：148・160
 ・石川八左：↓石川重次を見よ。
 ・石八左：↓石川重次を見よ。
 ・石八左衛門：↓石川重次を見よ。
 ・石淋：74
 ・川悦作：262

- ・川口久助殿子息：↓川口宗信を見よ。
- ・川口宗信（川口久助殿子息）：20
- ・専益：262・269
- ・浅紀州：↓浅野幸長を見よ。
- ・浅紀伊守：↓浅野幸長を見よ。
- ・浅采女：↓浅野長重を見よ。
- ・浅弾少：↓浅野長政を見よ。
- ・浅野紀伊守：浅野幸長を見よ。
- ・浅野幸長：（紀伊守・浅紀州・浅紀伊守・浅野紀伊守）：61・62・63・145・172
- 312・327・337・357・374・375・376
- ・浅野左衛門佐：↓浅野氏次を見よ。
- ・浅野氏次（浅野左衛門佐）：357・376
- ・浅野長重（浅采女）：300・318
- ・浅野長政（浅弾少）：118
- ・浅野長晟（但馬・但馬守）：337・416・427
- ・前右近：196
- ・前野久右衛門：413
- ・前野左馬丞：414
- ・曾我尚祐（曾又左）：230と231の間の補記・243・261
- ・曾又左：↓曾我尚祐を見よ。
- ・宗介：341

-
- ・宗味：2・10・42・213・366と367の間の補記・369
 - ・相模：↓大久保忠隣を見よ。
 - ・相模守：↓大久保忠隣を見よ。
 - ・倉橋政勝（倉橋内匠）：229と230の間の補記
 - ・倉橋内匠：↓倉橋政勝を見よ。
 - ・桑山清晴（桑山又四郎）：28
 - ・桑山又四郎：桑山清晴を見よ。
 - ・掃部：↓井伊直孝を見よ。
 - ・村越直吉（村越茂助）：25
 - ・村越茂助：↓村越直吉を見よ。
 - ・村権右：↓村田権右衛門を見よ。
 - ・村左馬：285と286の間
 - ・村田権右衛門（村権右）：119・152・191
 - （夕行）
 - ・太閤：↓豊臣秀吉を見よ。
 - ・太内玄蕃：51
 - ・太内玄蕃御親父豊州：51
 - ・対州：↓山内康豊を見よ。
 - ・対馬：↓安藤重信を見よ。
 - ・大学：381
 - ・大崎七郎右衛門：190
 - ・大久保加賀守：↓大久保忠常を見よ。
 - ・大久保石見守：↓大久保長安を見よ。
 - ・大久保相模：↓大久保忠隣を見よ。
 - ・大久保相模守：↓大久保忠隣を見よ。

・大久保忠常（大久保加賀守）：128・131
 ・大久保忠隣（相模・相模守・大久保相模・大久保相模守・大相州・大相模守）：
 85・86・87・88・93・94・123・131・177・231・235・241・265・267・299・308
 405
 ・大久保長安（大久保石見守）：25
 ・大御所：↓徳川家康を見よ。
 ・大岡権右：263
 ・大修：↓大野治長を見よ。
 ・大修理↓大野治長を見よ。
 ・大昌院：409
 ・大炊↓土井利勝を見よ。
 ・大炊：190
 ・大相州：↓大久保忠隣を見よ。
 ・大相模守：↓大久保忠隣を見よ。
 ・大道寺紀伊守：170
 ・大道寺玄蕃守：190
 ・大野修理：↓大野治長を見よ。
 ・大野治長（大修・大修理・大野修理）：24・78・329・330・350・429
 ・大和州：↓中井正清を見よ。
 ・柘植：308・364・366・400・401・405・426・428・434
 ・柘植正時：（柘植平左衛門・平左衛門）：45・46・49・308・344・363・397・398
 399・409・410・428・430・431・436・437・445
 ・柘植平左衛門：↓柘植正時を見よ。
 ・丹五郎左：↓丹羽長重を見よ。

・丹羽長重（丹五郎左）：255
 ・但馬：↓浅野長晟を見よ。
 ・但馬守：浅野長晟を見よ。
 ・淡州：↓脇坂安元を見よ。
 ・弾正：62・63
 ・弾正大弼：392
 ・池羽州：↓池田由之を見よ。
 ・池作州：↓池田元信を見よ。
 ・池出羽守：↓池田由之を見よ。
 ・池田輝政（姫路宰相・三左・三左衛門）：40・86・87・169・182・183・184・185
 223・226・227・228・325・326・331・333・334・335・338・348・355・356・360・361
 362・370・371・372・373・374
 ・池田元信（池作州）：199
 ・池田忠雄（宮内少輔）：382
 ・池田由之（羽州・池羽州・池出羽・池出羽守・池田羽州）：41・57・209・326
 337・347・359・374・378・386・388・413・414・422・423
 ・池田利隆（松武藏守・松平武藏・松平武藏守・武州・武藏・武藏守）：55・57
 134・204・269・277・325・326・331・333・334・347・360・361・362・372・374・377
 378・381・413・422・423
 ・智仁親王（八条宮）：392
 ・竹千代：↓徳川家光を見よ。
 ・竹腰小伝次↓竹腰正信を見よ。
 ・竹腰正信（竹腰小伝次）：125・131

・中主：↓中村正勝を見よ。
 ・中主助：↓中村正勝を見よ。
 ・中主殿助：↓中村正勝を見よ。
 ・中隼人：381
 ・中井正吉（親父・和州御親父）：13・14
 ・中井正清（大和州・中井大和・中和州・和州）：13・14・38・39・64・100
 162・168・186・194
 ・中井大和：↓中井正清を見よ。
 ・中川監物：↓中川重清を見よ。
 ・中川重清（中川監物）：264
 ・中村右近：328・330
 ・中村正勝（中主・中主助・中主殿助）：95・185・334・361
 ・中村対馬：190
 ・中務：↓本多忠勝を見よ。
 ・中務少輔：↓本多忠勝を見よ。
 ・中和州：↓中井正清を見よ。
 ・長右衛門：3・12・14・37・76・96・194・213
 ・長江刑部：353
 ・長谷川伊豆：353
 ・鳥居左京：↓鳥居忠政を見よ。
 ・鳥居成次（鳥土佐守）：271

・鳥居忠政（鳥居左京・鳥左京）：23・45・46・48・49・302
 ・鳥左京↓鳥居忠政を見よ。
 ・鳥土佐守：↓鳥居成次を見よ。
 ・朝倉宣正（朝倉藤十郎）：229と230の間の補記
 ・朝倉藤十：↓朝倉宣正を見よ。
 ・天野金左衛門：442
 ・天野作左衛門：264
 ・天野四郎右衛門（四郎右・四郎右衛門）：380・383・384
 ・戸周防：266
 ・図書：↓青山忠成を見よ。
 442
 ・都築為政（都築弥左衛門・都弥左）：36・37・49・67・131・280・339・343・426
 ・都築弥左衛門：↓都築為政を見よ。
 ・都弥左：↓都築為政を見よ。
 ・渡権兵：3・224・330
 ・渡瀬安左：394
 ・渡筑州：↓渡辺勝を見よ。
 ・渡辺山城：↓渡辺茂を見よ。
 ・渡辺勝（渡筑州・渡辺筑後守）：28・134・200・202
 ・渡辺筑後守：↓渡辺勝を見よ。
 ・渡辺茂（渡辺山城）：244

・土井利勝（大炊・土井大炊助・土井大炊・土大炊）：22・70・131・156・177	205・222・232・264・283・308・310・314・321・323・333・346・363・365・366・399	424・428・438	・土大炊：↓土井利勝を見よ。	・土井大炊助：↓土井利勝を見よ。	・土肥権右衛門（権右・権右衛門）：380・383・384	・稲田修理：363・365・366	・稲田半助：43	・稲半四郎：330	・嶋田次郎右衛門：264	・嶋田兵四郎：442	・嶋兵記（部力）：286	・藤金右：90	・藤水七：49	・藤泉：↓藤堂高虎を見よ。	・藤泉州：↓藤堂高虎を見よ。	・藤宗右：74・222・245・282・289・290・299・316・402・409	・藤宗右衛門：131	・藤堂高虎（藤泉・藤泉州）：6・59・60・82・99・418	・藤八右：201
--	---	-------------	----------------	------------------	------------------------------	-------------------	----------	-----------	--------------	------------	--------------	---------	---------	---------------	----------------	---	------------	---------------------------------	----------

・道越：2・10	・道三法印：143	・道三成法印：137	・道味：10・42	・道也：42	・道弥：42・287	・道与：2・14・39・194・213・429と430の間の補記	・徳寿（力）：16・17	・徳乘：429と430の間	・徳川家光（竹千代）：131	・徳川家康（御所様・上様・大御所・両御所）：24・28・32・33・59・60・72	81・84・85・94・97・98・99・101・103・112・125・131・132・174・176・179・180	402・181・405・182・406・183・407・216・409・218・410・219・412・220・417・221・425・224・426・226・436・227・387・390・399・400・401	・徳川義直（義直）：188	・徳川秀忠（将軍・両御所）：131・216・218・220・222・333・417・426	（十行）	・内記：301・317・322	・内金左：↓内藤忠清を見よ。	・内藤金左：↓内藤忠清を見よ。	・内藤忠清（内藤金左・内金左・金左衛門）：1・4・34・111・112・113・435
----------	-----------	------------	-----------	--------	------------	----------------------------------	--------------	---------------	----------------	--	--	---	---------------	---	------	-----------------	----------------	-----------------	---

・二木勘右衛門：420・441

・日置忠俊（日置豊前）：58・374

・日置豊前：↓日置忠俊を見よ。

（八行）

・八条宮：↓智仁親王を見よ。

・八屋九郎左衛門：↓蜂屋善成を見よ。

・半井驢庵（驢庵）：8・338

・板倉：板倉勝重を見よ。

・板倉伊賀：↓板倉勝重を見よ。

・板倉伊賀守：↓板倉勝重を見よ。

・板倉勝重（伊賀守・板倉・板倉伊賀・板倉伊賀守）：25・26・85・89・92・

134・369

・坂井久三郎：32

・坂井成政（坂半左・坂井半左衛門）：32・142

・坂井半左衛門：↓坂井成政を見よ。

・坂半左：↓坂井成政を見よ。

・樋口内蔵：352

・尾崎報左衛門：395

・美作守：386

・美濃守：↓本多忠政を見よ。

・美馬藏人：82

・備後：352

・不破又右衛門：432

・富信州：↓富田信高を見よ。

・富田信高（富信州）：106・107

・武州：333

・武蔵：↓池田利隆を見よ。

・武蔵守：↓池田利隆を見よ。

・平右衛門：384

・平岩：136

・平岩主計：↓平岩親吉を見よ。

・平岩親吉（平岩主計）：190

・平左：366

・平左衛門：↓柘植正時を見よ。

・平小兵：33

・兵庫：↓鶴殿氏直を見よ。

・兵庫：265・293・428

・兵部太輔：↓小笠原秀政を見よ。

・坪喜太：↓坪内定仍を見よ。

・坪内宗兵衛：413

・坪内定仍（坪喜太）：254

・米勘兵衛：↓米津田政を見よ。

・米津正勝（清右衛門・米津清右・米津清右衛門・米清右衛門）：85・92・134・

139・181・387・400・403・405・408・415・429・433・437

・米津清右：↓米津正勝を見よ。

・米津清右衛門：↓米津正勝を見よ。

・米津田政（米勘兵衛）：305

・米清右衛門：↓米津正勝を見よ。

・片主：↓片桐貞隆を見よ。

・片主膳：↓片桐貞隆を見よ。

・片市：↓片桐且元を見よ。

・片市正：↓片桐且元を見よ。

・片桐且元（市正・片市・片市正・片桐市正）：8・12・50・76・77・96・134

173・202・212・328・329・330・340・349・350・429

・片桐市正：↓片桐且元を見よ。

・片桐貞隆（主膳・片主・片主膳）：77・121・134・329・350

・蒲生飛騨：222・223

・蜂須賀家政（蓬庵）：20・27・32・45・59・73・75・81・82・94・113・142

332・335・336・338・345・387・391・400・405・436・437

・蜂須賀至鎮（阿波守）：包紙・163・366・409

・蜂屋善成（八屋九郎左衛門）：131・180

・豊臣秀吉（太閤）：409・436・437

・豊臣秀頼（秀頼）：121・188・328・329・330・349・350

・豊前：↓滝川忠征を見よ。

・蓬庵：↓蜂須賀家政を見よ。

・蓬庵母：436・437

・牧伊与：↓牧野成里を見よ。

・牧十兵：409

・牧助右：↓牧長勝を見よ。

・牧助右衛門↓牧長勝を見よ。

・牧太郎右衛門：332

・牧長重（牧又十）：285・303・307

・牧長勝（助右衛門・牧助右・牧助右衛門）：119・131・151・161・191・218

・牧又十：↓牧長重を見よ。

・牧野成里（牧伊与）：237・301・319・348

・牧与州：427

・本阿光徳：↓本阿弥光徳を見よ。

・本阿弥光徳（本阿光徳・光徳）：15・17・429と430の間の補記

・本雲州：↓本多忠朝を見よ。

・本勘解由：↓本須勘解由

・本佐州：↓本多正信を見よ。

・本作州：↓本多正信を見よ。

・本出雲：296

・本須勘解由（本勘解由）：333・338・362・373・378・423

・本多佐渡守：↓本多正信を見よ。

・本多出羽守：↓本多正勝を見よ。

・本多出雲：↓本多忠朝を見よ。

・本出雲守：↓本多忠朝を見よ。

・本多正純（上州・上野・上野介・本多上野・本多上野介）：25・71・72・75

116・117・131・154・155・156・175・179・180・181・182・184・185・226・227・351

366・406・407・410・436・437
 ・本多正勝（本多出羽守）：242
 ・本多正信（佐州・佐渡・本佐渡守・本佐州・本作州）：83
 93・94・98・131・156・177・205・232・241・308・323・344・363・365・366・409
 410・428・433・436・437
 ・本多上野：↓本多正純を見よ。
 ・本多上野介：↓本多正純を見よ。
 ・本多信勝（本多百介）：247
 ・本多大隈：↓本多忠純を見よ。
 ・本多中務：↓本多忠勝を見よ。
 ・本多忠純（本多大隈・本大隈）：315・324
 ・本多忠勝（中務・中務少輔・本多中務）：146・189・195
 ・本多忠政（本濃州・本美濃守・美濃守）：146・165・171・189・195・367・368
 ・本多忠朝（本雲州・本出雲・本出雲守・本多出雲）：250・256・258・292・296
 320
 ・本多百介：↓本多信勝を見よ。
 ・本大隈：↓本多忠純を見よ。
 ・本濃州：↓本多忠政を見よ。
 ・本美濃守：↓本多忠政を見よ。
 （マ行）
 ・妹：410
 ・又作：2・10・42
 ・毛利輝元（毛利宗瑞）：134
 ・毛利宗瑞：↓毛利輝元を見よ。
 ・木右衛門：↓木原口右衛門を見よ。

・木下右衛門：234
 ・木原口右衛門：129・203
 ・木村重成（木村長門）：78
 ・木村長門：↓木村重成を見よ。
 （ヤ行）
 ・谷六右：405
 ・谷六右衛門：409
 ・野尻左衛門尉：393
 ・有玄蕃：↓有馬豊氏を見よ。
 ・有馬豊氏（有玄蕃）：80・151・311
 ・有楽：↓織田長益を見よ。
 ・幽斎：↓細川藤孝を見よ。
 ・与右衛門：107・108・110・114
 （ラ行）
 ・柳生宗矩（柳生又右衛門）：123
 ・柳生又右衛門：↓柳生宗矩を見よ。
 ・両御所：↓徳川家康・徳川秀忠を見よ。
 ・林内膳：353
 ・鹽庵：↓半井鹽庵を見よ。
 ・滝川正利（羽柴老岐・羽老州）：131・268

・ 滝川忠征（豊前・滝川豊前・滝豊前）：53・119・152・191・415・417

・ 滝川豊前：↓滝川忠征を見よ。

・ 滝川雄利（羽形〔刑〕部）：48

・ 滝豊前：↓滝川忠征を見よ。

（ワ行）

・ 和州↓中井正清を見よ。

・ 和州御親父↓中井正吉を見よ。